
萌えもんファンタジー

アセロラ蕎麦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

萌えもんファンタジー

【Nコード】

N0202H

【作者名】

アセロラ蕎麦

【あらすじ】

これは人を象る生き物のいる世界のとある青年とその仲間達の戦いの幻想。

それは、まだ、人も萌えもんも、あまり変わり無かった頃の出来事。

また、それは、失われた輝かしき時代への追憶。

また、それは、遠い血塗られた時代への留別。

また、それは、過去に生きた者への讃歌。

また、それは、今に生きる者への忠告。

また、それは、未来に生きる者への指針。

【一読】注意書き【推奨】

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

この度は数ある小説の中からこの萌えもんファンタジーを読もうとしてくれて、誠にありがとうございます。

まず最初に、この小説を皆が楽しめる為に、色々と注意すべき事をここに書いておきます。必ず目を通して書いて下さい。

まず、この小説は人を選ぶ表現を非常に多く含んでおります。これから書き出す下記の要素の中で一つでも嫌だな〜と思う物があつたら、ブラウザの戻るをクリックする事を推奨します。

・擬人化表現

この小説を読もうとしている人で萌えもんを知らない人は居ないとは思いますが、一応、言っておきます。萌えもんはポケモンを萌えっ娘に擬人化したものです。よって、それを題材にこの小説を書いている訳ですから、擬人化表現はこの小説では絶対的要素です。たとえ、作者がどんなに変わろうとこれだけは絶対に変わりません。ですから、擬人化表現を嫌う方、あるいはポケモンの擬人化なんて許せない！なんて人はすぐに避難して下さい。

・パロディ

この小説では三国志ネタやFFネタ、東方ネタ、ニコ動ネタなど、様々なパロディが使われています。パロディ表現が苦手な方はやはりこの小説はオススメできません。また、使われているネタ元が嫌いですって人はそれに対しては目をつぶって下さい。貴方は嫌いで、私は好きなんです。

・比較的残酷な表現

最初の方はそうでもなかったのですが、最近、過激な描写が多くなって来たので付け足したものです。流血、破壊、爆発、放火。これらの行為に異常な恐怖心や嫌悪感を抱く方は戻られた方が良いでしょう。

・最強主人公

この小説の主人公は最強です。うざったらしいほど強いです。小憎たらしいほど頭も良いですし、嫌らしいほど美形です。仲間がピョンチの時は颯爽と現れ、圧倒的な力で敵を倒し、皆から称賛を浴びます。全てが出来過ぎた、作者の理想が投影された主人公です。小説を読む時はこの事を念頭に置いて読んで下さい。

・童貞的ラブラブ表現

上と同じ理屈です。

・厨二病的表現

作者は厨二病です。ですから、厨二病的な表現も使います。それが嫌いな人でも楽しめるとは思いますが、そんな表現ばかりな回もありますので、読むときは注意して下さい。

・ちよつとした百合表現

ガールズラブ警告を出す程では無い、ちよつとした百合表現を含んでいます。百合は全く許さないとの方は戻るクリックを激しく推奨します。

・オレ設定

この小説では言明されていないのを良い事に、勝手に、こういう事があるんだからこういう物が無ければダメだろうと勝手に考えられたオレ設定が含まれています。勝手に、変な設定付け加えんなんて思う方は戻られた方がよろしいかと。

・従来キャラもオレ設定の餌食
擬人化してなくても居るような方々もオレ設定によってその存在を歪まされています。

・萌えもんの名前は漢字

この小説の主な萌えもんはほとんどの場合、ニツクネームを持っていません。主人公は萌えもん自身の本名（これもオレ設定）を呼んでいます。萌えもんのニツクネームやトレーナーの名前はカタカナに限ると思っっている方は読むのを止めた方が得策でしょう。

・もはや萌えもんじゃない

最初はそうでもないが、話が進むにつれ、どんどん萌えもんっぽさがなくなります。主人公は萌えもんリーグを目指していません。萌えもん凶鑑を揃える気もありません。ただ本編以上に残忍で強大なロケット団と戦うのみです。

・ファンタジー？ 架空戦記？

最近、だんだんと架空戦記っぽくなりました。今はまだファンタジー部分を架空戦記部分が食い潰してはいないのですが、今後そうなる可能性は高いです。

とまあ、こんな感じですかね。これらの表現も別に気にならないという寛容な方は先へお進み下さい。では……、知謀と、武勇と！
MF《萌えもんファンタジー》の世界へレッツゴー！

第零話：幻想の始まり（二年前の日常）

かの幻想の二年前……。

その主人公は徒然を持って余っていた。

「平和だな……何事も起きないし、何も無い。まあ、老後を暮らすなら悪くないのかもしれないが……はあ………」

散々、自分の地元に毒を吐き、最後に溜息をついた。

ここはマサラタウン。

「マサラは真っ白、始まりの色」と言う謳い文句があるらしいが、本当にその通りなのだ。

無なのだ。紛う事無き無。

ここでは光と闇がぶつかっているのではなからうか……？

ここに非日常など無い。あるのは『無』のみだ。もしかしたらエクスデス先生がおられるのかもしれない……今度探してみよう。

って冗談を言ってみたりする。暇だ、実に暇である。

暇だ、実に暇である。

不意に『魔理沙は大変な物を盗んで来ました』が流れる。

「田舎だな！田舎だな！いないいない田舎だな！……何をやらすか！」

もはや時代の残物と化したラジカセを持って、笑っていた男がいた。

「あははははっ！ダメだ耐えきれねえ……もう一回聞かせてくれよ………」

彼は大木戸秀明。五年前に引越して来たのだが、初対面の私に向かって、いきなり、

「お前は俺様のライバルだ！」と言い放ち、それからというもの

「今日も勝負だ！」と何度も私に突っ掛かって来る。

最初は、口で言うほどの力は無いだろうと高をくくっていたのだが、手合わせしてみると意外と手強い。

いつの間にか、私は、奴に勝つにはどうするべきか？ということばかり考えるようになっていた。

私にはライバルがいなかった。必ずどんな分野であろうと他の子供の一つ上を行き、私の右に立つ者はいなかった。

手応えが無かった。何をするにしても。いつしか全てに於いて虚無的になり、寝ている時間が多くなった。

私は十一にして、ニートになってしまったのだ。親とも何度も喧嘩した。

私の心は砂漠と化していた。楽しみも無く、潤いも何も無い、ただ己の運命を呪うしか無かった。

そんな混沌たる螺旋から私を抜けさせてくれたのが彼だ。

久々に私は心の底から楽しむことが出来た。

私を畏怖する者共より、私と同等な力を以って挑んで来る秀明の方が私は好きだ。

口には到底出せぬが、私は彼にとても感謝している。

そして、私にライバルと新たな楽しみを与えてくれた天に感謝しよう。

「さて……秀明！今日も派手に遊ぶか！！」

また、会えるですね……。

今こそ、あの時の約束を果たす時ですっ！

待ってて下さいです……。

わたし、本気出せば、マッハ2ですからっ！マサラになんて、すぐ着いちゃうですっ！

わたし、進化しちゃったけど、分かってくねるですよね……。

第零話終

第一話：初めての萌えもんバトル（私の戦闘力は……ククク）

夢を見た。

私の他に六人がいて、楽しそうに談笑していた。

何を話しているかは分からなかった。

だが、楽しそうなのは十分に伝わって来る。

私は遠くからその場を見てた。すると、その六人の中の一人が、こっちにやって来る。

そして、

「光就さんもこちらに来て下さいっ！」と、私の手を引く。

彼女の白雪のような手に導かれて、私は彼らの輪に入る。

やはり何を言っているのかは分からなかったが、

私を歓迎していることだけは確かだった。

そして、意味も無く騒ぎ合う。私らしく無い夢だった。

だが、楽しかった。それは、私が夢から醒めた後でもその余韻が残っているほど。

私は、夢の余韻が醒め切らないまま、朝食を頂いていた。

すぐそこにある釣り堀で取った新鮮な魚を口に運ぶ。前はこれしか楽しみが無かった。

時代は移ろいでも、この美味さだけは残って欲しい。そう切に願う。

今日も海の恵に感謝し、家を出る。いつものように、どのようにして勝つかと頭の七割を使って考える。

残りの三割は今朝の夢のことを考えていた。

いつの間にか秀明の家の前にいた。

そんなに近い訳でもなく、大体五分はかかる。

とは言え、私は熟考を始めると、時の経過が百倍遅くなる。私の感覚では、まだ三秒しか経っていない。

家の戸を叩く、すると秀明ではなく、その姉が応対した。

「ごめんね。今、秀明いないのよ。お爺ちゃんに呼ばれてね」

秀明とは正反対の静かな人である。

「いないのであれば仕方が無い。では、彼が帰って来たらいつもの場所で浅井光就は待ち受けていると伝えてくれませんか？」

「お安い御用！つて、え？」

秀明姉は驚いたように私を見ている。

「もしかして……あなたがあの光就君？」

そんなことを聞いてきた。

「その通り。私が光就、浅井光就だ」

しかし……

「あの」とは何だろうか。まあ、私は彼女の弟の友人だから、少しは耳に挟んだことがあるのかもしれない。

「お爺ちゃんがね、あなたを呼んでたわ。今朝、お母さんから聞かなかった？」

むっ？どうだっただろうか。食べている時は考え事に夢中だったから、もしかしたら、右から左へと受け流してしまったのかもしれない。私の悪い癖だ、自戒せねば。

「まあ、とにかく研究所に今からでも行ってみます。大事な事を教えて下さり、誠かたじけない。では、さらば！」

武士言葉を使うのも私の癖だ。これは直らん。嘘だが。

「にしても、随分と偉い名が出たものだ。あのオーキド博士が私を呼んでいるとはな」

私は研究所に向かう途中で、そんなことを考えていた。

もう着いてしまった。

仕方ないので思考を止め、中に入る。

もっと機械的だと思っていたのだが、第一印象は、少し質素とい

うか、金属色が少ない気がした。

そんな研究所の奥には、秀明がいた。

「げえつ、光就！何でお前が来るんだよ」

「お主と同じだ。呼ばれたからここに来た」

私は辺りを見回す。忙しそうな人は沢山いるのだが、オーキド博士らしき人影はいなかった。

「爺さんは、今はいねえんだと。まったく、部下に働かせて自分だけのはのんびり散歩とはまったくいい身分だぜ。しかたねえ、光就探してこい！」

……は？

「聞こえ無かったか？爺さん探してこいよ」

ちよつと待て！

「何故私が探さねばならんだ。第一、私は博士の顔すら知らんだぞ」

「顔ならあれだよ」

秀明は自分の頭上を指差す。あの肖像画の初老の男性がオーキド博士か。

「じゃ、よろしく頼むぜ」

私は体よく追い出されてしまった。こうなったら探し出さなければ戻れまい。

私は心の中で呟いた。

「マジ解せぬ」と。

マサラは小さい町だ。少し歩いていたら見つかるだろうと高をくくっていたが、その余裕は間違っていた。

「居ないな……」

何処にも居なかったのだ。やれやれ、後調べていないのは、あの草むらか。

草むらからは野生の生物が飛び出して来るが、虎穴に入らずんば

虎兇を得ずだ。

草むらに入る。人の腰の高さ位まである。これでは何処から来るか分からんな。

そう思っていた時、突然、草むらが動いた。

「出て来い！私が相手だ！」

その声に呼応するように草むらから野生のポツポが飛び出して来た。

「ふっ……来たか」

ポツポは可愛い顔で精一杯の威嚇をする。だが、怖いと言うよりは、頑張れと応援したくなる顔だった。

「はう〜かあいよいよ〜！お持ち帰り〜！！！！！」

狂喜を孕んだ叫びだった。生命の危機だと言うのに。

「……………」

沈黙が痛い。

ポツポは体当たりを繰り返して来た。

「ふっ、甘いな……………」

懐から短刀を取り出す。

「避けてみよ！」

短刀を投げつけ、右に跳ぶ。

「くっ……っ！」

たいあたりを避けられた上に、短刀を足に当てられ、痛がるポツポ。

「さて、これでとどめだ」

赤と白の球体を取り出し、弱ったポツポに向かって投げる。

足を傷めたポツポにそれを避ける術はない。

球は二つに割れ、ポツポを吸い込む。その後、少しばかり動いていたが、やがて、静止した。

「……………終わりか……………」

そう呟き、完全に止まったボールの中央のボタンを押す。

閃光が走り、先程のポツポが光の中から現れる。

「……すまなかつたな。傷薬で良いか？」

傷薬を使つてやる。ポツポは驚いたようだ。

「痛い事をしてしまったへの詫びだ。受け取れ」

適当に取つてきた、モモンの実を渡す。子供なら、甘い物は嫌いじゃないだろう。

ポツポは何が起きたのか分からず、呆然としていたが、やがて、モモンを貰つたという事実を理解し、ほくほく顔で帰つて行った。

「凄いものじゃな……」

不意に、後ろから声がした。振り向くと、老健な男性が居た。

「君が浅井光就だな」

老人は、私の名を言った。

「わしが、オーキド博士じゃ。君を探していたのだ。さあ、わしの研究所に来てくれ」

そう言つと、その老人……オーキド博士は、私を強引に研究所まで引つ張つて行った。

まあ、オーキド博士は見付かったから結果的には良かったのだが……。

やはり、血は争えぬ物なのだと思つた。他人を巻き込む厄介な奴的な意味で。

第二話に続く

第一話：初めての萌えもんバトル（私の戦闘力は……ククク）（後書き）

次回作は六月五日投稿予定です。

第一話、七月十四日、改訂。

第二話：紅の翼（飛べない鳥はただの……ちょ、お前何すんだ、やめ……）（前

予定日を二日オーバーしてしまいました。すいません。こんな自己満小説に一人でも評価感想を書いて下さる人が居たら私も光就も嬉しいです。

第二話：紅の翼（飛べない鳥はただの……ちょ、お前何すんだ、やめ……）

「今日もこの辺りは、平和ですね……紅羽」

小柄なピジョットが言う。

彼女の長い黒髪が、風に靡き、それと共に、紅茶を啜る音が、彼女の気品を存分に引き立てる。

「おお……。姉貴の美女度が、普段の五倍くらいはね上がってるぜ。

……姉貴は俺の嫁！！」

そう言うのは、ピジョン。

燃え上がるような、紅の短髪。進化前にも拘わらず、姉よりも頭一つ分ある長身。そして、性格は、豪快で男勝り。外見的にも内面的にも、姉とは対照的なピジョンだ。

「うふふつ。何ですか？その面白い言葉」

ピジョットは含み笑いしながら聞く。

「そのまんまの意味だ。嫁にしたい程キレイだぜ！」

「テンション上がってきたー！！！！」

「！？今、わたし達以外の誰かの声が聞こえませんでしたっ！？」

「そうか？あたしは何も聞こえなかったぜ」

「そうですか……？空耳だったのかな……」

危ない危ない……。あまりに興奮して、つい声を出してしまった

……。

ふつ、なぜなら、百合は俺のジャスト……おや誰か来たみたいだ。

「まあ、いいや。あたしは野暮用があるから、ちょっくら行ってくるぜ！」

紅羽と呼ばれたピジョンは、この場から立ち去ろうとする。

「行ってらっしゃいですう」

手を振って、笑顔で彼女を見送るピジョット。

だが、次の瞬間、

「紅羽、また喧嘩ですか？」

声を低くして、たしなめる様に言い放った。

「うつつ……（…；）そ、そうだよっ！文句あるかよ！」

紅羽は、見透かされ、動揺し、虚勢を張る。

「大有りですっ！あなたにもしもの事があつたら、どうするんですかっ！」

「姉貴……これが、最後だから……。」

「黙りなさいっ！その言葉、百回以上聞いてるですよ」

「いや、本当に最後だから！」

「それは、七十回聞いたですっ」

「だー！っ！もう、いっ！探してた奴が現れたんだよ！こんなことしちやいらねえ！説教は後で聞くから、行つてくるぜ！」

紅羽は足早……いや、翼早に去つて行った。

「全く紅羽つてば……！でも、今回ばかりはしょうがないか」

（紅羽は、ずっと、わたしよりも強い人を探していた。見付かつて良かったね……）

ピジョットは、一人、心の中でこう思った。

（そして……羨ましいですよ。そして、逢いたい人に逢えたら、そのまま、行動に移れるんですから……）

哀しそうな瞳で、空を見る。

（神風美空……なんでこんなに翼が重いのですか？）

忘れられてたと、分かった時の悲しみが怖くて羽ばたけない、純白の疾風・神風美空の昼下がり。

「遅えよ爺さん！光就！」

研究所に着いてからの第一声がこれだ。

おのれ、私がポップと命懸けの死闘を繰り広げていた時、こいつだけは研究所であくびしていたのであるうな。天は不平等だ。

「さて、光就。君に頼みたい事があるのじゃが……体は大丈夫かな

？」

攻撃は喰らっていないし、むしろ、体の方ではなく、心の傷の方が深い位だ。

「そうかそうか……ならば、トキワシティのフレンドリイショップに、わしが注文したものが届いておるんじゃない。それを取ってきてくれい」

そんな事助手にやらせればいいだろうと思っていたら、見透かされてしまったのか、

「助手は皆、手が空いてないのじゃ。だからよろしく頼む！」
と言われてしまった。はてさて一体全体どう返事すべきか。

「『行つてやる！』と言つてくれれば、素敵な萌えもんをプレゼントするのじゃがなあ……」

むう……これは釣りだ。冷静に考える！光就！

そして、熟考の果てに私が出した結論は……。

「いいですともー！」

だった。まあ、どうせやることもないし、秀明も同じような事をやらされるなら、今日の遊び時間確保は絶望的だ。ならば、何もせずに無為に時間を費やすより、働く方が良いに決まっている。それに……萌えもんがこんな低コストで手に入るのだ。何と言つても話である。

「そうかそうか……ならば、あそこの三人から選んでくれ。君の最初の萌えもんじゃ。じっくり選ぶといい」

オーキド博士は、三つの球体が置いてある机を指差し、言った。

「……確か、ボールからは出せなかったな。出した時から、彼らの主となってしまうからだ」

ボールごしで彼らを見て、その真価を見定める方法など、私には無かったが、その分、迷いも無かった。

「左側の萌えもんを貰おう。確か、ヒトカゲだったな」
所要時間はたったの十秒。

オーキド博士も秀明もポカンとしていた。

「じゃ、じゃあ俺はこいつを選ばぜ！出て来いゼニガメ！」
秀明はゼニガメを手にした。

「見事な後だしジャンケンだ。では諸君、さらばだ……。」
私は研究所を後にしようとしたが、もちろん簡単には出来なかつた。

「待て！折角萌えもんもらったんだ。萌えもんバトルを！」

「だが断る！！」

間髪入れず、断る。

「な、何でだよ……バトルするのに理由があるかい？」

「ああ、要るさ。何かを得るために戦うのだ。それ以外の戦いなどに意味など無い。ただいたずらに味方を傷付けるだけよ。私もお前もこの戦いに勝ったところで何かを得られるとは思えないのだが」
私はそんな事を言った。

「あるさ！」

秀明は反論する。

「初の萌えもんバトル勝利という幸先のいいスタートだ」

秀明はそう主張した。

仲間になつたばかりの萌えもんなど、実力も分からず、運に左右される。だが……。

「出でよ、ヒトカゲ！」

それは実に魅力的な事象だ。ならばそれに賭ける価値はある。

「その勝負……乗った！」

私は今、自宅の倉庫を開けている。

むっ？勝負の行方か？私の勝ちに決まっておろう。辛うじての勝利だったかな。

じゃあ、今そこで何をしているのかだと？旅支度だ。今、私は自分の身を守るのに適当な防具を探しているのだ。

そして、見つけた。漆黒のマントだ。銃弾を弾き、装甲としては物凄く優秀。でもしっかりたなびく良品だ。

「別にそんなにあせって出す必要もねえだろうに……」

「ふっ、見つかると厄介なのでな……さあ、行くぞ」

マサラの陸路・1番道路へと向かう。

トキワシテイに行くには、この1番道路を通らねばならない。

とは言え、そんなに険しい道のりではない。

萌えもんさえ持つていれば抜けるのには苦労しない道……のはずだった。

「何でこうも人が居ねえんだろうな。やっぱ曇ってるからか？」

そう考えるのが一番妥当だ。曇りは人間の気持ちを何となくアンニュイにさせ、やる気というものをこっそり持っていく。

だが、何だこの得も言われぬ不吉な予感……？

もしか、道路に人影が存在しないのは、それを暗に示しているのではないだろうか？

「なっ、何だありゃあ!？」

私の予感は、すぐに現実の事象へと昇華した。

「ふふふ……貴様が浅井光就。なるほど、良い面構えだな」

紅の短髪が、不敵に笑う。

「貴様……何者だ!」

「あたしの名は、神風紅羽。貴様に戦いを申し付ける!」

ビツ!と、私を指差す、紅羽と名乗るピジョン。

「この戦いは、避けられそうにない……な」

刀の鯉口を切る。

「ちょ……お前、何自分で戦おうとしているんだよ!バトルなら俺様にまか……」

「すまんが少し……」

ボールを取り出し、戻し、

「消えててくれ……」

それを投げる。

遠く……遠くに飛んで行くボール。

「味方をわざわざ、消すとはなあ……あたしもなめられたもんだぜ

「!!」

翼を広げる紅羽。

「いまさら、後悔すんなよ？このむつつり!!」
勢い良く突進してくる。

それを躲し、抜刀する。

「相手の力量すら見抜けぬ愚者よ……我が一刀の錆となれい！」

体勢を立て直し、再び突進してくる、紅羽。

今度は、それに、真正面から当たっていく。

平凡で、平和なはずの1番道路に火花、散る。

第三話に続く

第二話・紅の翼（飛べない鳥はただの……ちょ、お前何すんだ、やめ……）（後

次の投稿予定日は、六月十四日前後です。今度は遅れないように
します。サーセンm（――）m

第三話・純白の疾風（急展開過ぎてワロタですう）（前書き）

急展開過ぎてワロタwww。

萌えもんファンタジーいきなり¥（^o^）／

第三話：純白の疾風（急展開過ぎてワロタですう）

カキンッ！

紅羽の突進を、真正面から受け止める。

（むう……相手の斥力が強い。まともにはぶつかるとするのは、下策だな……よし！）

刀と自分の身体を横に引く。

「っ！またかよー！！」

勢い余って体勢を崩す、紅羽。

「このやるう！さつきから、逃げてばかり！ちゃんと戦いやがれこの臆病者！」

「ククク……言われずとも、次はちゃんと戦ってやる」

刀に力を溜める。すると、刀身が紫色に輝く。

「消えて失くなれ……。サイコカッター！！」

紫色の刀から放たれる、三、四個の念力の刃。

「なんてこった！人間が萌えものの技を使うなんて……。にしても、ちっ、飛び道具かよー！！」

翼を反らせる紅羽。

「とりあえずはこれで……！！」

翼を飛ばたかせ、強風を起こして、サイコカッターを打ち消す。

だが、サイコカッターを当てる事が、私の目的ではない。

「隙あり、みねうち！！」

一気に近づき、首筋にみねうちを食らわす。

「グハ……ッ！おのれ！！」

紅羽は飛び上がったが、その途中で浮力を失った。

「はあはあ……畜生！」

紅羽は倒れ込んだ。

「……終わりか……」

刀を鞘に納め、立ち去ろうとした、その時。

「お待ち下さいっ！」

ピジヨットが現れた。

美しく長い黒髪と、それに反比例する小柄な身体を、純白のスリットスカート付きのローブで包んだピジヨット。

立ち居振る舞いに気品を感じさせるが、どこかずれてそんなピジヨットだった。

「……………」

彼女から何かを感じた。

(何だこの感じは……懐かしい……?)

彼女が発する雰囲気は妙に懐かしかった。

「すいませんでした。妹がとんだ失礼を……!?!」

突如、ピジヨットの表情が固まる。

「貴方は……。ハアツ！」

ピジヨットは、飛び上がって翼を広げると、それで打撃を繰り出す。

「お主も血の気が多いようだ。ならば、これでどうだ！」

サイコカッターを飛ばす。

「打撃だけが能じゃないですよ！かえんほうしゃっ！」
息を深く吸い込み、炎を吐く。

「な、何っ！ピジヨットが、かえんほうしゃだと!!」

ピジヨットの出したかえんほうしゃは、サイコカッターを打ち消し、光就に襲い掛かる。

(くっ、こうなれば……)

「集中!!」

サイコカッターの力を刀の先に集約させ、

「貫け!!」

炎の中に刀と共に突っ込む。炎は押され、掻き消されていく。

「くうっ！やはり……………」

ピジヨットは、これによって、何かを確信したようだ。

炎は、ついに掻き消された。

「なっ！？姉貴！」

いつの間にか起き上がった、紅羽が駆け寄る。

ピジョットは、妹に微笑みかけて、そして、私にも微笑みかけ、何かを言った。

「ウフフ、さすがですね、光就さん……」

！私は……この笑顔を知っている！

十年前の事だ。

「お〜い。その男の子〜」

私は七歳だった。

ポツポが話し掛けてくる。

「何だお前は、気安く話し掛けるな」

性格は……今とそう変わらなかった。だから、友達もあまり居なかった。

「そういうこと言わないんです。さあ、わたしといっしょにやろうです！」

「何をだ」

「ん〜と、ドクエ〜こですう。ゆうしゃ様が君で、お姫様がわたしですう」

「くだらん。一人でやれ」
すると、

「うわーん！いきなりいじめられたですう！！」

突然、泣き出した。

「わ、分かった。やるよ……だから、泣かんでくれ。頼む」
「やったですう！」

それが彼女との出会いだった。

それ以来、彼女は毎日の様に理由を作ってきては、私を連れ出し

た。

「新しい道を見つけたんですっ！でも、一人じゃ怖いからいっしょに行くですっ！」

「めずらしい木の実を見つけたですっ！一人よりも二人の方がおいしいですよ。いっしょに食べに行きましょうですっ！」

「変な洞窟を見つけたですう。いっしょに探検するですっ！」

始めこそ、またお前か。と思っていたが、彼女という内に、彼女と一緒に楽しんでる私が居たのだった。

「……もしかしたら、私がお姫様でお前が勇者様なのかもな」

「はう？何か言いました？」

「い、いや……何でもない」

ふっ、こんな気恥ずかしい台詞を二回も言えるものか。

彼女と、ずっと一緒に居たかった。だが、運命は、それを許さなかった。

「光就君……ごめんね。わたしは、ジョウトに行かないと行けないんです……」

彼女はそう告白した。

「何だと……。それはどうしても……か？」

「うん……ごめんね」

謝ってばかりの彼女。私は彼女の気を晴らす為に、言った。

「そうか……なら、約束せよ」

「えっ？」

「私は、いつか萌えもんトレーナーになり、その頂を目指す。私が萌えもんトレーナーになるまで、お前は力を付けておけ。私のメンバーに遅れを取らないようにな」

彼女の目が輝いた。

「分かりました！いつか、会える時があったら、その時は！」

「一人の萌えもんトレーナーとして」

「一人の萌えもん戦士として」

「「出会おう！！」」

こうして、彼女は飛び立っていった。
そして、そこに涙は無かった。

(そうか……お前は……！)

私は、刀の軌道を曲げた。なかなか曲がらなかったが、彼女の目の前で何とか真下に曲がってくれた。着地の衝撃で地面が割れる。

「思えば、何で最初から気付かなかったのだろうか。炎が遣える、野生の鳩型萌えもんなど、お主くらいなものにな。ふっ、やはり無為な時間ばかり過ごしていたせいで、認識能力が落ちていたようだ………。久しいな。美空！」

「お、思い出しました………？はうう、わたしは、あのまま殺されちゃうかと思いましたが。やっぱり、光さんは強いです！」

「やれやれ………。もし、私が、お主の事を土壇場で思い出さなければ、死んでいたぞ。すぐ、無謀な事をする癖は直っていないようだな」

「貴方だつて、かえんほうしゃの中に突っ込むなんて事をしたのですから、お互い様ですよ？」

「ふっ、違いない。フッフッフ………ハハハハハハッ！！」

「そうですよ！ウッフツ、アハハハハハハッ！！」

笑い合う二人。だが、話に付いて来れているのは、この二人だけ。「ど、どういうこと………何だ………？」

いつの間にか、戻って来たヒトカゲは、紅羽の気持ちさを代弁した。「ははは………説明もしないで、勝手にわたし達だけで盛り上がってたですね………」

「奴らに説明など必要ない。我らだけで我らの愛を語り合えば、それで良い」

「は、はううっ！？」

べたんと盛大に転ぶ。相変わらず、からかい甲斐のある奴だ。

「あ、あなた……………姉貴とどういう関係なんだよ……………?」
「相思相愛の恋仲だ」

「はうう!？」

美空は、せつかく、起き上がったのに、また、転んでしまった。

「そ、そうだったのか……………」

「ち、違うよっ!わたし達は、ただの幼なじみだよっ!」

美空は、顔を真っ赤にしてそう言った。いやあ……………かあいいな…

… お持ち帰りいっ

「ほ、ほらあ!そんなこと言うから、光就さんが光就さんじゃなくなつたじゃないですかっ!」

「私は……………何故、あなたにも興奮してたのだろうか……………」

「また変わってるっ!」

ふっ、変わってないな……………美空。

「そうだったのか。姉貴が話していた。人間の親友って、あいつのことだったのか……………」

紅羽は、納得した様に、首を振っていた。

「俺様は、何で光就が萌えもんの技を使えるのか聞きてえな。何でだ?」

ヒトカゲは、恐らく、読者諸君も知りたいであろう事を聞いた。

「ああ、その事か。人間である私が、萌えもんの技が遣えるのは、私の父親が萌えもん。即ち、私は萌えもんと人間のハーフなのだ」

「ええええええええツ!!」

美空以外全てが驚いた。

「私は、前から知ってましたですよ。エヘン!」

美空は、胸を張って言った。

「父親は、エルレイドと言う萌えもんらしいが、私が本当に小さい時に、死んでしまったらしい」

私は、そう言った。

「そうだったのか……………へっ、態度とか、呼び方とか変えた方がいいか？」

ヒトカゲは、冗談混じりで笑いながら言った。

「本気で言っているのか？」

「まさか！これからも呼び捨てだぜ。まあ、ニックネーム位は許してやってもいいがな」

そう。

「人間風情が、俺様にニツクネーム付けるなんて、百万年早えんだよ！」

と、自分が愛称で呼ばれる事を拒み続けていたのだ。

「ふっ…………、ヒトカゲ。お主は今から、龍宗と名乗るが良い」

光就は、名を授けた。

「たっ…………むね…………？」

「ああ、お主を見た時、私は、龍を見たのだ。リザードンになる事も考えた名でもある」

「そ、そうか……………へへっ！それなりにカツコイイじゃねえか！」

ヒトカゲ……………もとい。龍宗は、構え直し、

「俺様の名は、龍宗！！史上最強を目指す男だ！浅井光就！よろしくな！！」

そう言い、手を差し出した。

私は、その手を強く握り返し、

「うむ！我ら、共に龍となりて、世界を翔けん！！」

光就、十八歳の春。

第四話に続く。

第三話・純白の疾風（急展開過ぎてワロタですう）（後書き）

第四話は、六月二十日投稿予定です。頭がバーンな小説ですけど、最後まで見てくれたら嬉しいですよ。（by神風美空）

第四話・INNOCENT BLOOD（もうやだこの作者）（前書き）

これからも、萌えもんファンタジーは、痛い路線を走って逝きます。（小説崩壊的な意味で）ですので、どうか、応援よろしくお願ひします。

第四話：INNOCENT BLOOD（もうやだこの作者）

「光就さん……」

空から、見つめるわたし。

視線の先にあるのは、人間の男の子と遊んでる光就さん。

（良かった……わたし以外にも友達、作れてたんですね。わたしも、混ざりたいな。でも……）

怖かった。

（忘れられてたら、どうしよう。もう、八年です……忘れられてても、おかしくないです……）

バカですよ……。話し掛けなきゃ分からないのに。

しょんぼりと、飛んでいたその時、

「バリバリバリバリバリバリバリバリ！」

目が眩む様な閃光と共に、凄まじい轟音が鳴り響く……です。

「ぐあ！くっ、十匹なんて卑怯な……がくっ」

多数のコイルに囲まれている、紅い髪のパジヨン。

コイル達を操っているのは、鞭を持った怖そうな男の人。

「さあ、捕まえる！」

コイル達は、そのパジヨンをつままえようと近づくと、

「うおーっ！来るんじゃねえよ！！」

翼を振って、抵抗する、パジヨン。

「ちっ、もう一度一斉攻撃だ！」

（そんな！これ以上、電撃を食らったら……！）

そう思った次の瞬間、もう体が動いていた。

「止めて下さい！一人に十人掛かりで……卑怯ですっ！」

「……やれ」

コイル十人分の電撃が襲い掛かる！

「炎さん！わたし達を守ってですっ！ファイアーウォール！！」
巻き上がる炎が、壁となって、電撃を阻む。

「うう……こんな奴ら……あたし一人でも……」

「無理しちゃ駄目ですう。この壁が消えたら、一気に飛び出しますよっ！」

ファイアーウォールが消える。

「一斉放電！」

「うまくいけっ！」

消えかけの炎を蹴って、飛び上がる。

電撃は、わたしの足、スレスレを通って行った。

「逃がすな！追え！」

むう、追い掛けて来たですう。

「あなた、今飛べます？」

「す、少しなら……」

「じゃあ、ちよっと待ってて下さいです」

ピジョンを下ろすと、わたしは息を深く吸い込む。

(普通のかえんほうしゃじゃ、全部倒せないけど、これなら！)

翼に向かって、炎を吐く。翼は燃え尽きず、炎に包まれる。

「行きますよっ！」

炎の翼でコイル達を、順に叩いていく。鋼の体を持つ彼らには、効果は抜群だった。次々と落ちていき、遂に、誰も居なくなった。

「さらばですっ！」

翼の炎を消すと、ピジョンの所に飛び、

「わたしの隠れ家が近くにあるんですっ！そこに隠れるですよ」

彼女を掴み、ハイスピードで飛ぶ。

「何で……助けてくれたんだよ……」

「そんな水臭い事言わないんですっ！同じ種族なんですから……」

こうして、隠れ家に辿り着いたわたし達だったけど、彼女の怪我は予想以上に深かった。

一ヶ月以上、彼女の看病をしなければなりませんでした。

「うう……」

「何処か、痛むんですかっ!？」

彼女は、一日中痛がった。何でも、あの電撃と無理して飛んだせいで、あちこちの傷口が開いてしまったみたいそうなんです。

……わたしは責任を感じて、彼女を一生懸命、世話しました。

その甲斐あつてか、彼女は、また、自由に飛べるようになりました。

「おかげで助かったぜ……。どうもありがとな」

彼女……紅羽は、感謝の言葉を述べました。

そして、わたしは……。

「どういたしました。でも、もし嫌じゃないなら、わたしと一緒に暮らしてくれないかな？あなた、出会った時、凄く痩せてたよ」

「で、でもよ……。他人同士と一緒に暮らすつてのもな……」

「じゃあ、姉妹なら、良いじゃないですかっ！お姉ちゃんは、わたし。妹は紅羽ですっ！」

「なつ、勝手に決めんなよ！」

「そんな言葉は、自分で自分を養える様になってから言いなさいですっ！喧嘩に夢中でご飯を取らないなんて！」

こうして、わたし達は義姉妹になりました。

それから、一年半の月日が流れて、現在に至るのです。

「おう、光就！そっいやあ、俺らどこに行くんだっけな。忘れちまった」

その言葉で、私は、忘却の彼方に飛んでいたフラグを回収する。

「トキワのフレンドリイショップだ！しまった……すっかり忘れていたな」

私は、トキワシティに行きたかった。だが、彼女は、なかなか放してくれない。

「光就さん 光就さん」

サラサラの黒髪をなびかせてスリスリと近づいて来る美空。

「なあ、しつぷうじんらいつてどう書くんだ？」

「疾風迅雷……ではないか？」

「うひゃあ、ムズいな〜」

美空の妹紅羽は、何か手作業をしているから障害ではないのであるが、とにかく美空は、放してくれないのである。

まあ、我らは、邂逅した訳だ。積もる話もあるに決まっている。

その証拠に、彼女が私の腕を掴んで何か言おうとしていた場面がかなりあった。だが、会話に発展したのは余り無かった。

『言いたい事は沢山あるのに、言おうとすると、喉が詰まったり、渴いたりしてたですう』

と、当時を振り返る美空より。

私としても、その様子を見守っていたいが、前話では全く、本シナリオが進んでいない為、割愛。

「すまないが、用が無いなら、そろそろ放してくれないか？」

無関心を装い、そう言う。

「うう……っ」

美空は、唸りながら、腕を掴む力を強める。凄い罪悪感を抱く。

「ですよね……光就さん、忙しいんですよ……わがまま言ってるめんなさい……」

そう言うつと、腕から手を放し、ニコツと笑った。彼女の眼は少し潤んでいた。

「……今さら、歩くのが面倒になってきた。トキワまで送ってくれないか？いやなら構わないが」

嫌だなんて言うはずはないだろう。

「い、いい、いいでしゅともー！」

噛みながらも、思いがけない誘いを了承する美空。相変わらず、からかいやすく……かわいい奴だ。

「じゃ、じゃあ……紅羽は、龍宗さんを頼みますよっ！」

「おいおい、大丈夫か？光就の方が姉貴より大きいんだぜ？あたしに乗る方が良いんじゃないかねえか？」

確かにな。しかし、並んで見ると、やはり、この姉妹は、本当に正反対だな。

身長では、姉が、ピジョンにしては、小さめの155センチ。妹が、ピジョンにしては大きめの182センチ。

性格でも、姉は、物腰柔らかで上品な感じ。

妹は、竹を割ったように豪快な感じ。

彼女らの道は、一体、何処で交じり合ったのだろうか？いずれ、聞いてみたいものだ。

「しかし……本当に大丈夫か？姉貴、人間乗せた事なんて、初めて何だろ？」

「はいっ。初体験なのですっ！」

美空はそんな事を、さも当然の言葉の様に言い放った。

「姉貴！何て事を……ざわ……ざわ……」

「某麻雀漫画みたいな音出さないで下さいですっ！」

そこには反応するのだな、美空よ……。だが、確かに、私も心配だ。

私と話をしていたいからという拙い……いや、そんな事言っでは可哀相か。

仕方がない……。私の念力を足に集中させ、少し浮遊状態になるとするか。

……どうやら、そんな事を考えている間に、美空の準備が出来たようだ。

「光就さ〜ん！早く来て下さいですう」

我が身体よ、重力に抗え……。サイコフロート！

「ああ。行くとしよう」

私が、美空の背に乗ろうとした時、不意に、

「あっ！」

と美空が声を挙げた。

「念力とかは解除して下さいです。じゃないと振り落とすですよ」「真剣な眼差しでそう言う。その眼は鷹のそれに酷似していた。

「気付いていたのか……解除！」

少し浮いていた体は、地に降り立った。

「ふっ、やはり浮いていると、すっきりしないものがあるな」

私らしくない愚行に、皮肉を込めた独り言である。

あの頃は、どんな時でも美空を信じてきた。

そして、美空もどんな時でも、そんな私を信じていた。

力を持つと変わってしまうのだな。まったく、卑しいものだ。

「すまん。そしてありがとう、大事な事を思い出させてくれて」

そう言い、美空の背に乗った。

苦しそうな顔は、しなかった。

友人としての好きと異性としての好き。これらの違いが理解出来なかった幼き頃の自分。

時の濁流に流され、二度と戻る事の無い自分。

今だけは、そんな自分に戻っている様な錯覚を起こした。

所変わって、今、私は、マサラ上空に居る。

届け物を手に入れたからだ。

だが、それは、予想外に重いものであった。

紅羽は、

「姉貴がこんな持ったら、光就の旦那と一緒に落ちちまいそうだからあたしが持つぜ！」

と言い、嬉々として、荷物を受けとったのだが……

「あっ……あっ……」

「紅羽のHPが1なのですっ」

「楽しそうだな……妹が死にかけているというに……」

「だって、紅羽は、散々わたしの力を疑ってかかったのです。少しは良い薬なのですっ！」

そういうもの……なのか？私には兄弟が居ないから分からん。

「おお……花畑が見える……川が見える……」

夢見心地で紅羽が呟く。

「まずい、いよいよ本格的に落ちてきたな……」

「あ！あれではないのですか？」

美空が示す方向には、こんな田舎町の中で、一つだけ、目立つ、馬鹿でかい建物があった。

「間違いない。あれだ。よし、着陸してくれ」

「了解ですう」

美空は、研究所前に着陸した。

その後、紅羽が不時着した飛行機の様に着陸する。

「おえー。酔っちゃまった。トラウマになりそうだぜ」

と、龍宗が、荷物を持って、青ざめながら言った。

「美空、紅羽。世話になったな。お主達はこれからどうする？」

「わたし達は、帰りますです。仲間達が帰りを待っていると思いますし……」

「……そうか。ならば仕方がないな」

「また……会えますよね？」

「ああ。必ずまた会えるさ」

「ですよね……うん！光就さん変な事聞いてごめんなさいっ！……さ、さようならっ！」

美空は、顔を赤らめながら、ぐったりした紅羽を引きずりながら早足で帰っていった。

……途中で、ヒーツ！だの、ギャー！だの、ウボアー！だの、悲鳴が聞こえるのだが、大丈夫だろう。そういう事にしておこう。

「やれやれ、彼女等を持って成したかったのだが。まあ、母の萌えもん嫌いは治ってないからな。不快な思いをせずにするだから、それはそれで良かったのかもしれない」

そんな私の独り言に、過剰反応した者がいた。

「はあ？ちよつと待て。光就の母ちゃんは萌えもん嫌いなのか？おかしくねえか？じゃあ、何で萌えもんと結婚したんだよ」

彼らしくない、実に順当な問いだな。

「だからではないか？愛しさ余って憎さ百倍と言う奴だ。父は、本

秀明廃人化に、成功した私は、本題を聞いた。

「おお、実は、これをあげようと思ってるな」

オーキド博士は、手の平程度の大きさの、赤い何かを手渡した。

「それは、萌えもん凶鑑。出会った萌えもんのデータが、自動的に追加されていくという、ハイテクな凶鑑なのじゃ」

「それを埋める為に、旅に出る。そうおっしゃりたい訳ですな」

いちいち口上を聞くのは面倒だからな。

「話が早くて助かる。でどうなのじゃ？」

ふっ、返事は、決まっている。

（もう一息じゃ、パワーをメテオに！！）

「いいですとも！！」

1番道路の入口に、オーキド博士と、秀明の姉が送り出してくれた。母は……居なかった。相変わらずマイペースな方よ。息子の立ちの時にさえ、それを発揮する器の大きさは呆れを通り越して尊敬にさえ値する。

「光就君。身体に気を付けて、無茶しちや駄目よ」

「ふっ、それは、私に言うことではないのではないか？」

私は、引き際はわきまえているし、それに、一応Lv50だ。

ちなみに、目安として龍宗はLv08、美空はLv36、紅羽はLv30と言った所か。

ふっ、美空よ。自分は強くなったと思っているだろうが、とんでもない。上には上がいるのだ。

今、私は、龍宗をおぶって、1番道路を歩いている。

「おい……何故、私にこんな事をさせる？」

「お前、Lv50なんだろう？俺の六倍じゃねえかよ。それに、腹減って動けないしな」

くっ……！要するに、朝食を取りたいという事だ。はてさて、どうするべきか。

と考えていた時、

「旦那？光就の旦那じゃねえですか！おはようござえやす！」

紅羽よ。この前とはがらりと、態度を変えたものだな。まあ、これがLv20の差だ。

「顔色が優れねえようですが、どうしたんです？」

「むう、実はまだ朝餉を頂いてなくてな。私も龍宗も意気消沈だ」
だが、この後、思いもよらぬ答えが返って来る。

「へえー。じゃあ、旦那、朝飯一緒に食べようぜ。龍宗も、特別に許可してやるからさ」 何……だと？

「お前達……今起きたのか？」

「ああ、その通りだぜ。全く、恥ずかしいぜ」

と、言い、翼で顔を隠す紅羽。

男っばい娘が、たまに見せる女の子っばさと言うのは、形容し難い可愛さだ。殺傷能力高すぎだ。

「はうううう　お持ち帰り〜」

「えっ！？ちよ待……、うわぁっ！」

見せられないよー！！

「うう……っ、汚された……もうお嫁に行けねえよ……」

「汚されたって……抱き着かれただけじゃねえか」

空気読め……龍宗。

「な、何だと！おのれ、こうなったらお前でもいい！責任取れ！」
龍宗を押し倒す紅羽。

「ど、どう責任取れって言いやがるんだ！」

「ふふふ……、心配することはない。あたしがリードするから」

……私は知らない。見ていない。聞いていない。おピンクな雰囲気も、何処か官能的な音楽も。

「紅羽うう、ご飯出来ましたですよ〜。はう？」

この淫靡な空間に、ただ一人、異質な者が現れた。

「何やってるのですか？二人共」

純粋な瞳で、私に聞いてくる。こいつ……そういう知識ないみたいだな。

自分の子供に「どうすれば、赤ちゃんができるの？」と聞かれた親の心情が、今なら、分かる気がする。

「プ、プロレスごっこだ」

「……………」

虚ろな表情で、私を見つめる、美空。ありきたりだったか。

「……………にぱー」

ん、何だ？満面の笑みを浮かべている。

「そうですね……。プロレスごっこですか。楽しそうですね！」

ほっ……………と一息着いたのもつかの間、

「じゃあ、食事前の運動です。わたしもませて下さいですう」

と言つて、私を押し倒す美空。

「ふふっ！油断しましたね？」

「こ、こら、やめぬか！どついう事が分かっていいのか!？」

「知らない知らない知らない知らない」

「グ……………ズ……………」

＼(＾o＾)／

「ギヤアアアアアアアアアアム!!!」

こつして、我等は純潔を散らしたのであった。orz

「……………なーんちゃって」

全ては嘘だった。全てはこの少女？の妄想である。

「『少女？』ですって……………?」

……………この少女の名は浅井美羽^{みづ}。光就の母親である。その容姿には幼さが見え隠れしており、大きな子供がいるようにはとても見えな
いが……………、

「が……………?」

……美羽は高みから息子の旅立ちを見ていた。

「ごめんなさいね、光就。でも、どーもわたし、ああいう涙ながらの別れっていうのが好きじゃないっていうか、気恥ずかしいっていうか、とにかく、イヤなのよねー。まっ、わたしはあなたの選択をとがめたりしないし、否定もしないわ。だけどね……」

ここまで、美羽は優しい表情をしていたが、突然、うすら笑いを浮かべ、

「一人はつまらないわ、一人はさびしいわ、一人はいけない所に……うふふ……覚悟しておきなさい……帰ってきたら、きつーいオシオキよ」

そんなことを言うと、真下の光就へ投げキッスをした。

「……!？」

(何だ今の悪寒は……はっ！)

光就は、高台を見上げる。が、何も見つかる事は出来なかった。(やれやれ、母上も素直ではない。ちゃんと普通に見送ってくれれば良いのに、こんな所まで来て見送ってくれるとは……)

だが、彼は分かっていた。美羽がちゃんと見送ってくれていた事を。そして、いずれ、逃れようの無い折檻を受ける運命も。

「どうしたんですか？光就さん」

美空は様子のおかしい光就に問い掛ける。

「いや、さっきまでちよつと心残りがあつたのだが……それが今、晴らされて清々しい気持ちになつたのだ」

「ん〜？」

美空は光就が何を言っているのか分からず、首を傾げた。

「ふふふ……まあ良いではないか。さあ、早く行こうぞ。腹が減つて仕方が無い」

「ええ〜っ？ま、いつか。はい、行きましようですっ！」

美空は考えるのをやめた。そんなことを考えれるほど、頭のスペースに余裕があるのなら、光就に食べさせる朝食の献立を考える方

に回したいからだ。

(うーん、どれを作ったらいいかなあ？お味噌汁とご飯に……おかずは卵焼きは外せません。後もう一つ、何にしようかなあ……?)
真剣に、だが、楽しそうに彼女は悩んでいた。

第五話に続く

第四話・INNOCENT BLOOD（もうやだこの作者）（後書き）

あんまゲームばっかやってねえで、小説読もうな。そして、あたし達の・・・（カンペ出る）えっ！？あ・・・ぬ、ぬぬ、ぬれ、濡れ場をしっ、しっかり見るよ！（棒読み）きゃーっ！、恥ずかしい！（＼＼）（by神風紅羽）紅羽、大事な事を言い忘れてるぞ。第五話は、六月二十六日投稿予定だ・・・。（by浅井光就）

第五話：それぞれの戦い（何！？久々にまともだと！）

「ただの萌えもんに興味などない。真に才覚溢れる者ならば、誰でも私の戦友として歓迎するだろう……」

光就は高らかに言い放つ。

「……次は何処に行くべきなのです？」

美空は黒髪をなびかせ、あまりにも見事に、光就のパクリ発言をスルーした。

「……トキワシティの奥に、トキワの森という場所がある」

光就はスルー返しを行う。というか、もう面倒臭かったのだ。

「かの地を越えると、ニビシティにたどり着く。そこには、萌えもんジムがあり、私の萌えもんリーグへの出発点がある」

「なるほどなるほど……」

美空は何か、今の事を書き込んでいる。

「つてか、姉貴は、何で旦那の行き先を気にしてるんだよ？」

「何で？と言われても……私の旅路でもあるからです」

「はあっ！？」

この美空の発言に、疑問を持った者が二人居た。

「待て待て待て待て！俺様は認めないぞ！」

龍宗は、体格とは合わない態度でそう言った。

「ええっ！何故ですかっ！？」

「自分より遥かに強い主人公とヒロイン……俺様が空気になるのが、目に見えている！」

彼は、彼なりに自分の立場の危うさを心得ているようだ。

「ああ、それなら心配無い。お主がリザードンに成るまで、美空は戦いに出さない。約束しよう」

光就は、刀をかざし、高らかに宣言する。

「ならいいや」

龍宗は、あっさり身を引いた。

「あ、あたしも認めないぞ！」

紅羽は、動揺しながらも、彼女の紅の短髪が、逆立ちそうなくらい怒っていた。

「ごめんなさい……でも、約束ですから……」

美空は、もじもじと手を揉んでいる。

「約束だから？まるで、いやいや行くような口ぶりだな」

「い、いえ！そんなつもりは！」

慌てて、弁明しようとする。

「はっきりしろ姉貴！あたしを見捨てて、旦那と行くのか、旦那との昔の約束を破って、あたしとずっと一緒に暮らすのかを！」

「えっ？いや……その……」

「答える！姉貴！答える！神風美空……」

紅羽。遂に、本名呼びと言う、激熱シチュまで持って行ったか。

「は、はう……（何か、今日の紅羽、怖いですう）」

美空は、完全に紅羽の覇気に気圧されている。

「（このままでは、埒が明かな……）すまんが……」

「旦那には、関係ねえ話だ！口出しすんなっ！」

取り付く島も無いな……。

そして、紅羽の説教は、一時間程続いた。本来なら、もっと続くはずだった。

だが、中断せざるを得なくなってしまう状況になったのだ。

「ぐすん、酷いです……」

いや、酷いのはお前だろ！と、ツッコミたくなるが、それは、彼女の涙を生で見ていないからだ。

涙は女の武器だと言うなら、今の美空は、核兵器並だな。

「な、泣くなよ、そんなに泣かれたらあたしも……」

ああ……、私は自殺するべきなのだろうか。と考えてしまう程に、この姉妹の涙には、殺傷能力があった。

「……ニヤリッ」

……む？

「という冗談を言ってみた」

紅羽は、そう言った。妖しい微笑みをしながら、眼から零れそうな涙を堪えながら。

「（そうか……そういう事か……）ちょ……テラひどす！」

紅羽……お主は、姉思いの良き妹よな。

「行って来いよ、姉貴！」

お主とて、美空が居なくなるのは、寂しかろうに……。

「ええっ！？……でも、いいのですか？」

「へっ！姉貴が居なくなりゃあ、『喧嘩なんてしちや駄目なんですっ！』って小言を聞かなくて済むから、せいせいするぜ！」

「あっ……！」

彼女もやつと気が付いたようだな。

「紅羽……、あなた……本当にいいのですか？」

「しっけえな！あたしは、姉貴に後悔してほしくねえんだ。……きやー、恥ずかしい！」

翼で、顔を隠す紅羽。相変わらず、かぁいいよ〜

「紅羽……ありがとう……」

美空は、ペコリと頭を下げる。

「決まったか？」

私は無関心を装い、言う。

「はいですっ」

美空は、そう言うと、姿勢を正して言った。

「わたし、神風美空は、今後、浅井光就の傘下に入り、不屈の忠誠を誓いますっ！」

「その心意気やよし。我が下で、そなたの才……世界に、見せ付けるが良い！」

こうして、美空は、私の仲間となった。

だが後に、彼女と私達は、生き別れてしまうのだが、それはまた別の話である。

「おらおらおらおらおらおらおら……!!!」

木々の隧道を抜けたらそこは、血を血で洗う虐殺劇だったです。

「おらおらおら……どりゃあっ!!!」

龍宗さんには、好きに休んで、好きに戦って下さいと言っておいたのですが……。

でも、これはやりすぎですう。

「光就さんどうすれば……?」

わたしは、困惑気味でした。

時は、一時間遡る。

「じゃあな！いい旅してくるんだぜ」

紅羽に見送られ、わたし達は、トキワを後にしました。

「えっと……トキワの森でしたっけ?そこを抜けないといけないんですよね?」

わたしは、メモ帳をパラパラめくりながら、言った。

「その通りだ。だが、その前に覗きたい所があるお前達は、好きにしている」

そう言うのと、光就さんはトキワの森方面とは、違う方向に行ってしまうました。

(光就さん、遅いなあ……)

それから、だいたい三十分後の事でした。

「なあ、美空。先にトキワの森に行かねえか?」

龍宗さんが突然、そんな事を言い出したのです。

「ちよ……だめですよっ。光就さんを待っていないきゃ……」

「あんたなら知ってるんじゃないやねえか?光就がそんなことをして、ゆ

かになる玉じゃねえってことぐらいよ」

思えば、簡単な事です。光就さんは、確かに、あの頃から心配されるのが嫌いでした。

ましてや、もうあの時の様な子供ではないのですから……。

「そうですね。あなたの方が、一理あります。そうします」

光就さんが龍宗さんを連れていかなかったのはわたしに、彼の事を任せたからです。その期待に応えなきゃです……。

わたしは、いきなり自信を失いました。

目の前に広がる惨劇……。これを鎮める術が浮かばないんです……。

……。

「あ、あの……龍宗さん……って聞いてないんですか」

だが、突然、龍宗さんは戦いの手を止めた。

最初は、こちらの気持ちを通じたのかと思いましたが、すぐに違う事が分かりましたです。

「何だろう、あの黒服……？」

少し遠くに、この緑一色の空間には、似つかわしくない黒服の男がいました。

そして、龍宗さんの攻撃で倒れているキヤタピーを……捕獲した。

いえ別に、それだけなら、さして気に留める必要もないのです。

ただ服装の変わった方が、恩恵を受けただけですから。

わたしが異常だと思うのは、彼と同じ様な黒服の男女が、キヤタピーやビードル達を、次々と捕獲……いや回収していつてる事です。

「こちら一番隊。回収作業完了。我々は、アタッカー捜索に当たります」

アタッカー……攻撃者……はっ！

彼らが捕獲作業を容易にしている要因。それは……！

「龍宗さん逃げて下さいっ！」

でも、一足遅かったようです。

「てめえらなにやってやがる！人の修業に水さしてんじゃねえ！」

龍宗さんは、タン力を切ると、黒服の集団に切り込んだ。

「何だ奴は？ズバット、迎え撃て」

黒服がズバットを出した。

「甘いんだよ！」

龍宗さんはひのこを吐き出す。それは、敵のズバットを一撃で倒す程の威力なのでした。やはり、餅は餅屋さんですね。

この結果は、黒服達にとって、寝耳に水の出来事だったのかも知れません。しかし、同時に朗報でもあったのです。

「ズバットが……まさか、奴がアタッカーか！？」

「そのようです捕獲しましょう」

くっ、龍宗さんの事に気付かれてしまったですっ！

「龍宗さん！」

わたしは龍宗さんの所に飛び込む。

「！向こうから、ピジョットが突っ込んできます！」

「こいつは、俺に任せろ。行け、ユンゲラー！」

黒服に黒いグラサンを掛けた、まさに悪と言う感じの男の人が、ユンゲラーを出して来た。

「まずは、その飛行能力を奪う！れいとうビーム！」

蒼き光線が、わたしを貫かんとする……です。甘いですよ。息を深く吸い込み、

「美空フレ임喰らうですっ！」

わたしは、かえんほうしゃを放ちました。それは敵のれいとうビームを突破し、相手を怯ませた。

「今ですっ！」

わたしは地に足を付けて、少し跳び上がり、そして、一気に相手に突進する！これぞ……

「勇鳥・ブレイブバードですっ！えー！えー！えー！えー！えー！」

わたしの技は、敵のユンゲラーを倒しました。

「何っ！俺のユンゲラーが……こいつそれ程の実力なのか！」

超黒服の人が、倒れたユンゲラーを戻している間に、わたしは龍宗さんの所に辿り着いた。

「……美空！お見それ致しやした！」

龍宗さんは、お辞儀しました。なんか凄いでじゃびゆですう。

……って、こんなおふざけをしている場合ではないですね。

すでに、この場所は囲まれています。早く逃げなければならぬのです。

「龍宗さん。わたしの言う事、聞いて下さいですよ？」

「もちろん！美空には逆らえないですぜ」

よし……。

わたしは普段は隠している翼の羽を取っていく。

「眩惑の羽根……我が周囲で舞い踊るが良いっ！フェーザーダンスー！」

……あれれ？噛んでしまったみたいですよ……。

とは言え……成功した。ふわふわと無数の羽根が周囲に漂っている。

あの黒服達も戸惑っているみたいですね。じゃあ、もっと戸惑わせてあげますっ！

「眩惑の羽根……我らを包み、敵を惑わせ！」

無数の羽根がまるで衣のようにわたし達を包みこむ。

すると、黒服達がキョロキョロしだした。そう。わたし達の姿が消えたのですっ。

そして、この間にあの技の準備を……。翼に力をためます。

……今ですっ！

遙か高くに飛び上がり、翼を大きく反らせる。

「わたし達、ピジョットが本気を出すと、大木をしならせる程の強風を起こせるのですが、もっと本気を出すと、こんな事が出来るんですっ！」

わたしは反らした翼を、小さく羽ばたいた。

すると、気流が変わった。

そして、息を深く吸い込み、

「怒りの炎よ!!」

最大パワーでかえんほうしゃを吐いた。

吐かれた炎はなんとわたしを包んだのです。

しかし、これこそが、わたしの狙いですっ!わたしの炎に包まれた身体は、全身武器なのですっ!

わたしだって……あの頃から成長したんですっ!

「フェニックススラッシュユ!!」

炎に包まれた身体が目にも留まらぬ速さで突進を繰り返す。

逃げ惑う黒服達。燃える木々。……ちよつとやり過ぎたかな。

まあ、そんな事今更言ってもしょうがないです。さてと……。

「龍宗さん、飛ぶですよっ!」

龍宗さんを掴んで、トキワの森の出口まで一気に突破する。

「……たあっ!」

フェニックススラッシュユを解除した。すると、今まで荒れ狂っていた炎は、消え、燃えたはずの木々も元通りになったところか、前よりも大きくなっていった。

「炎は化える力なんです……」

トキワの森を出たわたしはそんな事を呟いた。

「ここだな……トキワジム」

カントー最強のジム、トキワジム。そして、正体不明のカントー最強のジムリーダーがいるトキワジム。今は、扉に閉館と書かれた紙が大きく貼ってある。

だが、私は、それには見向きもせず、トキワジムの門を開く。

「隠し立てしても無駄だ。私には分かるのだ。そなたの強者の気がある!サイコキネシス!」

サイコキネシスで、放たれたいわなだれを弾く。

「ば、馬鹿な!」

いわなだれを放ったのはサイドンだった。まさか防がれるとは思

つてなかったらしく、動揺している。

「くっ……サイドン！うろたえるな！もう一度いわなだれだ！」

「二度を許すと思ったか？つじぎり！！」

素早い動きで私はサイドンの急所に斬りかかる。

「ぐああああ……！」

サイドンは倒れる。

「なっ……！馬鹿な……ボスの萌えもんが……！」

ボス？……ああ、そうか。

「ジムリーダー代理……カントー最強ジムもこれでは形無しであるな」

萌えもんジムでは、時々、各ジムリーダーは、休暇を取っている間に、ジムの仕事をする、ジムリーダー代理を決める事が出来る。

ジムリーダー代理とは、ジムリーダー自身が、自分と同等以上の試合が出来ると確信したトレーナーにのみ、ジムバッジとジムリーダーの誇りを渡すのだ。

だから、ジムリーダー代理とは言え、負けたらジムバッジは渡さなければならぬ。無論、カントー最強のトキワジムもその例外ではない。だが……。

「ジムリーダーに勝たねば意味が無い。この戦いは保留にさせてもらおう」

と、私は勝てる見込みのある戦いを見送った。

「ぐっ……！貴様！！」

しかし、それは彼にとつて屈辱だったようだ。

「サイドンもろくに使えない奴からバッジを貰っても嬉しくないんでな」

それを捨て台詞に、私はジムを去った。

……だが、もしこの時ちゃんと戦っていたら、あの悲劇は起きなかつたのではないだろうか？いや、とんでもない御都合主義だな。忘れる。

第六話前編に続く

第五話・それぞれの戦い（何！？久々にまともだと！）（後書き）

第六話は、七月四日投稿予定です。次話は今まで目立たなかったあいつと新キャラが大活躍するぞ！！

第五話 THE AFTER (前書き)

第五話で語り損ねた部分です。第五話に追加しても良かったんですが、ちょっと長くなってしまっているので断念しました。

第五話 THE AFTER

「ぐっ……おのれ!!」

トキワジムの中央でorzしている男がいた。

「この俺が、何も出来ずに敗れるとは……!!」

「はははは、見事な負けっぷりだったな。エルバス」

誰も居ないはずの観客席。そこに黒服の中年の男がいた。

今まで出て来た黒服の中でも、一番黒服が似合っているし、その荒んだ眼、年の割に軽い身のこなし。彼の姿が彼自身を雄弁に語っている。

「ボ、ボス! な、何でこんな所に……」

「散歩していたら、トキワジムの挑戦者を見たんでなあ。暇だし、寄ってみた」

「あ……ああ……!!」

「そして、ここで見たのは、君が無様に負けてしまう上に、情けも掛けられる場面だったよ」

「あ、あれは萌えもんバトルじゃない! トレーナーが勝手に戦っただけだ!!」

「だったら、君が私の萌えもんを使っても、一人も倒せぬ奴だと言う事になるな」

「あ……! それは!」

「……疲れただろう。ナナシマ辺りでゆっくり養生しているがいい……」

「なっ!?! お考え直しを!!」

「私の命令が聞けないのか!?!」

ボスと呼ばれた男は、鬼の形相でエルバスと呼ばれた男に、身もすくむような睨みを効かせた。

「ひっ、わ、分かりましたボス! さ、早速旅仕度をしてきます」

「ああ、後……ロケット五幹部の証明書も預かる。あそこで威張ら

れては困るからな」

「ぐっ……分りました」

黒い手帳が渡される。

「ふん、ではしつかりと『養生』しろ。では、さらばだ」

こう捨て台詞を残すと、ボスと呼ばれた男は去っていった。

「ぐっ……おのれ！おのれおのれおのれ！！」

エルバスと呼ばれた男は地面を何度も叩き、悔しがる。

「……おのれ、浅井光就、許すまじ……！！」

エルバスの光就に対する怨嗟の炎は激しく燃え上がる。

「よくも、この俺に恥をかかせてくれたな！！復讐してやる！！いつか、必ず！！」

今日は不思議な事ばかり起きるな。突然、森が燃えたと思うと、突然、消えたり……。それに、ちよくちよく黒服を見かける。何なんだ奴らは？

……森の出口が見えてきた。

「ふむ……」

私は辺りを見回す。

「美空達は来ていないのか？」

トキワの森が異常事態なので、さすがに心配だ……って、べ、別に彼女が居なくなっただからって私は構わないんだがな！

「光就さん！無事でしたか！？」

不意に声を掛けられた。

「お前達……無事だったのか」

「質問に質問で返さないで下さいです！」

杞憂に終わったか。まあ、当然か。何故なら、奴は……。

「美空が居る限り、私は死なないさ。死んでしまっただけは、お主への愛が貰えないだろう？」

「はっ！？」

すぐに赤面し、すぐに怒るし、すぐに泣く。からかいやすく、強く、かわいい、私の……。

「光就さん？」

「またも、不意を突かれる。やれやれ、今日は調子が狂う事ばかりだな。美空に八つ当たりだな。」

「あつ、痛いですよ！何するんですかっ！」

「ふふふ、悔しかったら私にもデコピンするんだな。出来ればの話だが」

「わたし怒りましたですよ！凄く怒りましたですよっ！」

「おお、怖い怖い。逃げるが勝ちだなこりゃ」

「ああ！待つですよっ！」

「じゃれ合う二人。だが、

「あっ！」

美空が体勢を崩す。私は彼女を受け止めたが、勢いは止まらなかった。

彼女の唇が、私の唇に被さる。

「ん……っ！」

美空は最初、小さく声を挙げたが、やがて、何も言わなくなる。

おそらく、美空もこの不思議な感覚に捕われたのだろう。放したくない。ずっとこうしていたいという感覚に。

「そうか……これが、俗に言う『きす』なるものか。」

変な感覚だな。美空の整った綺麗な顔がこんなに近くにある。

（美空……）

（光就さん……）

「こうなったら、行ける所まで行ってみるか？でも、この先、よく分からないのだ。」

「それに……。」

「ゴゴゴゴゴゴゴゴ……」

この状況を、快く思わない者が居るようだしな。

「てめえら……！顔、近付けて何やってやがる！しかも、俺様のことを無視しやがって。許さねえ……許さねえぞ光就！」

「ウボアーーーーーッ……！」

何故私だけが飛ばされるのだ？私は心の中で呟いた。

「マジ解せぬ」と。

第六話に続く

第五話 THE AFTER (後書き)

第六話は七月四日です。お楽しみあれ。

第六話前編：A V E N G I N G B A T T L E ! ! (やっと俺様のターンだぜ！)

今話は前編後編に分けます。前編は、龍宗のターンだけど、後編は
新キャラのターンです。龍宗涙目 W W W

第六話前編：A V E N G I N G B A T T L E！！（やっと俺様のターンだぜー

「痛ててっ……！ぐっ！こんな所で負けるわけいかねえんだ！」

俺はひのこを放つ。だが、それは奴にもみ消される……！

「何度やっても無駄だ。岩に炎は効かない。お前は勝てないんだ」
んなこと、とつくにわかってらあ。だがな、

「それでも俺様は、勝たなきゃいけねえんだよ！」
奴に向かつて突進し、目の前が真っ白になった。

数時間後のニビシティのホテル一室での光就と美空の会話。

「美空よ。龍宗の事、頼まれてくれるか？」

「え、わたしが？駄目ですよ。わたしは光就さんみたいに教えるのが上手じゃないですう」

「私は炎遣いではない。炎遣いの心は炎遣いでないと分からない。そう言う意味でも、私よりもお主の方が適任だと思うが？」

「でも……わたし、どうやって教えればいいのか分からないです」

「『あの言葉』覚えてるか？」

「『あの言葉』ですか？もちろんですっ、わたしの座右の銘なんですよ？忘れる訳ないですっ！」

「ならば、充分だ。後は、自由にやればいい」

「本当にそれでいいんですか？」

「いいですともー！」

「分かりました！やってみます」

「ありがたい。では行ってくる」

「何処に行くんですか？」

「トキワの森だ。あれがお主の技である事は分かったが、黒服の事がどうしても解せぬのだ。また、奴らに心当たりが無い訳でもないのだ」

「黒服達にですか？」

「ああ」

「でも、一人で大丈夫ですか？」

「私を誰だと思っている」

「そうですね。じゃあ、気をつけて行ってらっしゃいなのですう
……」

光就が退室した。

「ここは……？ぐっ……！痛ててっ！！」

「駄目ですよ龍宗さん。安静にしてないと隣に誰かがいた。」

「……！お前は誰だ!??」

「もしかして龍宗さん、記憶喪失ですか？ジョーイさんが言っていました。頭部に衝撃を受けていて、一部の記憶の欠落があるかもしれないませんか？」

きおくそうしつ……？たしかに、頭がぐるぐるするが……。

「にしても、わたしの事はすぐに忘れてしまったんですね。悲しいです……ぐすっ」

そう言つて、涙目になる彼女。俺が泣かしたのか？まあ、悪い奴じゃねえみてえだが……。

「まあ、いいですとも！わたしは神風美空ですっ！わたし達のリーダーは覚えてますよね？」

？『神風美空？』『わたし達のリーダー？』なにか引つかかりやがるんだが、それを引き出すことができねえ！まどろっこしいな！

「うっ……っ、まさか、光就さんまで忘れたのですか？」

『光就さん……？』『光就……浅井光就……！そうか！』

引つかかっていたものがやっとなれやがった！

「思い出したぜ……浅井光就、だろ。あんたは神風美空。あんたの妹は神風紅羽だ」

「よく出来ましたですっ！パチパチい……。じゃあ、次は今の状況

です。あなたが見た光景、覚えてるですか？」

忘れるわけねえ。

「ニビジムのジムリーダー、タケシに挑んで負けた所だな。悔しかったぜ……」

俺の炎が全くきかなかったな。

「どうやら、今必要な記憶は全て思い出したみたいですね。では、行きましょう」

「どこにだ？」

「決まっています。修行するんですよ。わたしが、かつて炎を覚えた場所です」

美空が炎を覚えた場所？という事は……！

「俺も、あの火の鳥になるやつが使えるようになるのか!？」

この前のあの炎は、自分の炎よりもずっと熱く、強かった。俺もあれが使えるようになったかったが、

「フェニックススラッシュの事を言っているんですか？正直言って無理です」

きっぱり言われた。

「あれは炎が使えるればいいと言う問題ではありませんし……、やはり、あなたは、勘違いしてる。……うん、そうですね」

美空は何か、自分で納得したように、うなずいている。何だったんだ？

「まあ、とりあえず、修行場所に行きましょう。わたしの背に乗って下さいです」

まあ、考えてもしかたがない。とりあえず美空の背に乗る。

「では、しっかり掴まって下さいですよ？」

美空は翼を羽ばたかせて、空を飛んだ。

これが後に、俺様の原点になる修行の幕開けだったんだ。

トキワの森は、普段と全く変わっていなかった。
所々、深くなった気もするが、そんなのは、この森にとっては、
微々たるものなのだろう。

昨日の事は、メディアで大々的に取り上げられた。何せ、世界が
平和過ぎる為、こういう事件は、マスコミの大好物なのだ。

彼等が言うには、死人も怪我人も居ないらしい。

まあ、美空のやる事だ。いたずらに人は傷付けないだろう。

(やはり、無駄足だったか)

そう思い、森を去ろうとした時に、一人の男が視界に入った。

(……何だ奴は？何か引つ掛かる……！)

「サイコカッター!!」

奴の繰り出したゴローニヤのロックブラストを打ち消す。

「出会い頭に攻撃とは、なかなか気性の荒い御仁だ……名を名乗
れ!!」

「私はサカキ。しがない萌えもんトレーナーだ」

「なるほど……。私に挑戦したいと言う訳か。面白い!!」

刀を握り返す。

「集中!サイコカッター!!」

普段は分散するサイコカッターの力を、一つに集約する。……こ
の一撃に耐えられないなら、この戦いは一瞬だな。

「貫けえ!!」

刀を振り下ろす。槍の様な形態をとるサイコカッターがゴローニ
ヤに向けて放たれる。

「むううううう!!」

ゴローニヤはその技を耐えていたが、耐え切れず、吹っ飛ばされ
た。

(仕留めたか?いや、さすがに、そんなに柔ではないか)
むくつと起き上がる、奴のゴローニヤ。

「良く鍛えられているな。とは言え、半分以上は持って行ったが」
すると、サカキと名乗った男はゴローニヤを戻してしまった。

「む？どういうつもりだ……」

「もう充分、君の力は見れた」

そう言うと彼は、黒い手帳を取り出し、

「浅井光就……君を我がロケット団ブラックリストに登録する」

そうか……そういう事か。

「フフフツ、ハハハハツ……あなたはそういった冗談が好きなよ
うだ……」

ふっ……。

「いいですとも！その挑戦、受けて立とう！」

「ふん、いいのか？大事な物を失うかもしれないぞ」

「そんな挑発を無視出来る程、私は人が出来てないので……サカキ、あんたの方こそ、良いのか？」

「ふっ、私もお前と同じだ」

「そうか……」

沈黙が二人を包む。だが、

「では、さらばだ。浅井光就。また、会いたいものだな」

「私は二度と会いたくない」

「ふっ、そうか……」

サカキは森を去って行った。

「やれやれ……変な奴等に目を付けられたものだ」

呆れ顔で、一人呟く。

「まあ、何も無いよりは、ましかもしれないな」

そんな事を言っていたあの時の自分は、何て愚かで傲慢だったの
だろうか。

私の断罪は此处から始まったのだ。

「さて、もういいかな」
俺達は修行場所に移動中だったんだが、その途中、

美空は、いきなり飛ぶのをやめた。

「歩いて行きましょう」

「何でだ？そのまま飛べばいいのによ」

「最初から楽しんでどうするんですかっ！そんなの認めませんっ。わたしは認めないよーっ！」

俺達は徒歩で修行場所に向かう事になった。

だが、その道の険しいこと険しいこと。

「はあはあ……なあ、少し休まないか？」

「何言ってるんですか！一日でも早く強くなりたいたいんじゃないんですか！？」

「い、いや、そうだけどさあ」

「なら、早く行きましょう」

「ああっ、待つてくれえ……」

私は、トキワシテイをのんびり散歩していた。……何もやる事が無いのだ。

……私の星は、徒然と不幸によほど縁があるようだ。

だが、その暇を打ち消してくれる者が現れた。

「ありゃあ、光就の旦那じゃねえですか。まだ、こんな所に居たんですか？姉貴は？」

「龍宗の修行に付き合っておる。私は暇を持って余しているな」

「ん？それって……姉貴が龍宗に教えているってこと？」

紅羽が意外な事を聞いてきた。

「ああ、その通りだが、何か問題でもあるのか？」

「いや、あいつ、大丈夫かなあ？と思ひまして」

紅羽は言った。

「大丈夫とは？」

私は聞き返した。

「ああ、旦那は知りませんでしたっけ。姉貴は、かわいい顔して、実はすごいスパルタなんですよ。あたしも昔、すごくしごかれまし

た」

「スパルタな美空？……想像出来かねるな。何せ、「ですう」が口癖で、ポワポワで天然で、おおよそ、厳しさとは正反対のイメージしか浮かばない。」

「まあ、姉貴もああ見えて、熱血入ってますからねえ」

「そういえば、熱血状態の美空をからかって酷い目（第三、第四話参照）に遭った事が……。」

「まあ、何にせよ、龍宗の事は彼女に任せている。今更、私が口出しする訳にもいかんだろう」

「紅羽はジト目で私を見つめる。」

「ジーーーーーッ」

「何だ、その目は」

「旦那が最初じゃねえんですか？姉貴の熱血」

「私は昔からこうだったぞ。私ではなく、フェニックススラッシュの人の方の影響ではないか？」

「それに、厳密に言うと、美空がかえんほうしゃを覚えたのは、遊びの過程に於いてだ。彼女がどう思っているかは知らないが、おそらくそうだったはず。十年前の話だから、鵜呑みには出来ないが。」

「ふっ、今思えば、とんでもなく危険な火遊びだったな」

「はあ？」

「いや、こちらの話だ。気にしてくれるな」

「いつか話せる時があったら、話そう。何せ今話は一応、龍宗のタインなのだから。」

「やっと着いたぜ……」

「険しき道を越え、俺様はここに来たぞー！！！！」

「まだ始まったばかりですよ？何か、いきなりラストっぽいですよっ！？」

「まあ、ハズレじゃないかもな。俺の体力は、すでにラストだぜ。」

「ばかやるー！パシンー！」

いきなり叩かれた。なんだってんだ……。

「いきなり弱音を吐くな！それでも男かーっ！」

何だ？この下手すぎるスポ魂漫画の朗読みたいな口調は？

「話聞けー！パシン！」

うつ……。口調は変なのに、叩く痛さは普通に、鬼コーチ並で泣きそうなんだが……。

「うーん、駄目かあ。やつぱり、今はこんなのは流行らないのかなあ。とりあえず、叩いてごめんなさいですう。なでなで……」

さつき、鉄拳制裁を喰らわせたその翼で、今度は、俺の頭を撫でる。俺、遊ばれてるのか？

「気のせいですよ。早く修行しましょうです」

美空はなぜか、俺の心の声に答えた。そして、俺は、

(あの人には、隠し事は出来ないな……)

と思った。

「で、なにをすりゃいいんだ？」

岩岩岩の修行場所でももない場所だった。

「えっと……じゃあ、わたしは逃げ回りますから、龍宗さんは、わたしを捕まえて下さいです」

はあ？それって……。

「鬼ごっこ……だよな？」

「そうですね、何か？」

「何か？って、俺達は遊びに来たんじゃねえんだぞ！」

すると、美空は、うふふと笑い出した。

「甘いですね……。鬼ごっこは遊びじゃ、ありません」

美空は、そう言うといきなり、顔色を変えた。いつもの天然キアラの顔から、一人の萌えもん……戦士としての顔へ。

「追い掛ける側は、必死で追い掛けます。何故なら、獲物を捕まえて、それを食べなければ、死んでしまうから。また、逃げる側も、必死で逃げます。何故なら、追跡者に捕まったら、食べられて、死んでしまうから」

美空は、そんなことを淡々と口にしゃがった。普段、天然なせい
か、正直、すごく怖かった。

「要するに、鬼ごっこは遊びじゃありません。生きるために、先人
達がやってきた、営みです」

なるほど……。確かに、そういわれると、鬼ごっこは遊びじゃな
いような……。

「まあ、やってみれば分かる事ですう」

美空はそう言うと、高く飛び上がった。

「ルールは無しです。技でも何でも、使える物は何を使っても構い
ませんですう」

「よし！わかったぜ！」

「じゃあ、よいい、ドン！」

美空が翼を上げたその時に、

「ひのこ！」

俺はひのこを放った。だが、

「タイミングはとても良いんですけど、威力と狙いが駄目ですね」

美空はそう言うと、俺のひのこを翼でかき消し、さらに……、

「炎はこう使うものですっ！」

と言うと、俺の頭上目掛けて、かえんほうしゃを放った。

「へっ、どこねらってやがる！」

だが、突然辺りが暗くなった。

「なんだ……って!？」

岩が、俺に向かって落ちてきやがるじゃねえか！

「おりゃあー!!」

間一髪でかわしたぜ……。にしても。

「美空！あんたは、この俺を殺す気か！」

「はい。その通りですう」

屈託のない笑顔でそんなこと言いやがった！

「でも、大丈夫ですよ！死にそうになったら助けますから。……た
ぶん」

最後の言葉は聞かなかった事にしよう……なっ？

「ほらほら！ボサツとしての暇は無いですよ！」

美空は、再び、飛び上がる。

「へたな攻撃は、命取りだ。当てられる時に当てなけりやな」

俺は岩に隠れて様子を見る。

美空は気付いてないのか、少し飛び回った後、地面に着陸した。

「空中戦じゃあ、美空には敵わねえ。だから、着陸した所を狙って

……たたく！！」

勢いよく美空に向かって飛び出したが、

「そんな事に気付かないわたしと思いましたが？」

そう言われて、よけられ、転んで、かえんほうしやをくらった。

「熱いつ！」

「下手な攻撃すると、かえんほうしやで反撃するですよ」

くっ……、このままじゃまずいぜ……。今の俺の持ち技に、美空

にダメージを与える技なんてねえぞ……。

ひのこ、なきごえ、ひっかく。ぐっ、しょぼいにもほどがある。

こうなったら、新技にかけるしかねえ！漫画でもあるだろ？主人公

公が追いつめられると、新技が出て、それで切りぬけるっていう、

お決まりのやつだよ！

「いくぜ……！おりやあああああ……！！」

「自棄になりましたか？ならば、頭を冷まさせてあげますっ！」

美空もつつこんでくる。今だ！出る、新技！

まあ、なんて言っただけで出るほど、本当は現実、甘くねえんだよな。

でもよ、偶然つてもものも、現実にはあるんだな。

「どおおおりやああああ……！！」

美空にはかわされた。だがな。

「かえんほう……っつてわ……！！」

突然、美空に向かって岩が落ちてきたんだ。もちろん、よけられただけだな。

「むむ……！メタルクローなんていつの間に……っつてわ……！！」

そつだ。岩をかわした時に、あんたには一瞬のすきができてたんだよ。狙ってやったわけじゃねえから、たまたまなんだけどよ。

「とらえたぜ!!」

美空の翼をつかむ。すると、

「はうう……油断したです。負けましたですう……でも、楽しかったから、いいですとも!!」

はあ？

「いや、龍宗さん凄いよ！初日で、わたしに勝ってしまうんですから。じゃあ、準備運動はおしまいです。一位は龍宗さん！パチパチい……」

はあ？準備運動って……？

「いやですねえ。あんなのが修行なわけないじゃないですか！修行はこれからですよ」

そしてこれから、美空による地獄修行が始まるのだった……。

後編に続く

第六話前編：A V E N G I N G B A T T L E！！（やっと俺様のターンだぜ！

後編は七月五日投稿だ！ついに俺様のターンが来たぜ・・・！速効魔法、バーサーカーソウル発動！ドローモンスターカード！まだまだいくぜ！ドローモンスターカード！って終わり！？（by紅蓮龍宗）

第六話後編：DRAGON FOAR！（ターンエンドカワイソス）（前書き）

新キャラの名は（みかぜせな）と読みます。にしても、名前のボ
キャラブリーが貧しすぎる・・・orz。今話は、龍宗の修行終了
から新キャラ登場まで。第七話は激動の回！乞う御期待！！

第六話後編：DRAGON FOAR！（ターンエンドカワイソス）

あれから一週間がたった。

「おりゃあああー！」

岩に向かつて、あの技をくりだす。もし、今日失敗したら……あの地獄が、またやって来やがる！

もう思い出したくもない、一生のトラウマ。

タイヤ十個引きは、あまりの重さに、こちらが引かれそうになった。

体重と同じ重さの重りを付けての二倍うさぎとびもつらかった。

腕にすごく重い腕輪を付けた、腹筋もやばかった。腕がもげるかと思った。

美空を上に乗せての腕立て伏せは死んでしまいたいと思った。あの人、つけもの石背負って乗るんだぜ？ばかみたいな重さだよ。

これ以降は、記憶が封印した。あの時はもはや、感情もなかったんじゃないか？苦痛をのぞいて。

この世の地獄七番巡りを体験したぜ。もう、一回で充分だ……帰してくれ……。

岩が音をたてて三つに割れる。やった……やっと地獄からぬけられるぜ……っ！

「……わー！ちゃんとマスター出来ましたね！良く出来ました！パチパチい〜」

ああ、この言葉づかいを聞くと、やっと帰って来たんだ……って実感するぜ……。

鬼教官モードの美空は美空じゃねえみたいだったぜ。キャラ崩壊の可能性があるから、描写は出来ねえがな。ブルブル。

「よし！では行きますか！」

「ん？どこにだ？」

「決まってるじゃないですか。ジムですよ。ジム。ニビジムにリベ

ンジですっ！それとも、まだ修行したりないんですか？」

美空の顔が劇画タッチになる。鬼教官モード……！！

「いえいえ、滅相もない！さあ、行きましょう」

すると、美空の顔が戻る。

「よし！ニビシテイへ出発進行ですう」

美空の背に乗って、空を飛ぶ。よっしゃあ！さっきまで気付かなかったが、いよいよだぜ！

「頼も……！ですう」

ニビジムの扉を勢いよく開ける美空。

「今日こそ、お前のグレーバツジいただくぜ！」

俺も後からこう言っただけ。

「遅いぞ。美空、龍宗」

そこには、妙に懐かしい顔があった。

「な、何であんたがここにいるんだ！光就！」

「お前達を待っていたに決まっているだろう。さあ、挑戦者だ。タケシ、相手してくれ」

ニビジムの奥から、一人の男が現れる。

「また、君か。少しは出来るようになったかい？」

彼こそが、このニビジムジムリーダー。タケシ。

「では、私は見ているとするか。美空、頼んだ」

「何だと!？」

「何か問題ありか？」

「トレーナーが居なくなっただけでは、萌えもんバトルが出来ないじゃないか！」

「トレーナーが指揮者になるとは限らない……とは言え、公式戦だしな。仕方ない。居るだけ居るべきか」

トレーナーの場所に行く光就。

「龍宗よ。私は一応、此処に居るが、指示など、一切出さないぞ。お前の技と判断を信じろ」

「む？それではトレーナーの存在価値が無くなると？traineeの原形を調べてみる」

「だよ。まあ、俺としては、育てるのも美空に任せただから、結局は、同じだと思っただがな。」

「では、行くぞ！」

最初は、イシツブテか。あの技は奴にとっておきてえ。じゃあ、こいつでさっさと、おねんねしてもらおうか。

「ひのこ！」

「また炎か……。イシツブテ、防御しろ！」

それを待ってたぜ！ガードしている時は、動きが遅くなる。もちろん、まともな攻撃は、防がれるが。

「ようするに、硬い盾には、より硬い矛をもって当たられて奴だ！メタルクローー！！」

イシツブテの体を硬くさせた爪できりさく。

「なっ、イシツブテ！」

イシツブテは一撃で倒れた。

「だがよ、それが目的じゃねえんだよな。」

爪が硬くなつたのを感じる。メタルクローの攻撃力を少しの間、上げる効果のおかげだ。

「さあ、準備はできたぜ。来い！」

「行け！イワーク！」

「出やがったな！今こそ……、復讐するは、我にあり！」

「炎よ！」

腕に向かって、炎を吐く。俺の腕は炎に包まれるが、熱くはねえぞ。

「何かする気だ。急いで離れろ」

「させねえぜ！」

「くっ、振り切れないか！なら、いわおとしだ！」

もう、遅え！俺の腕の炎がさらに熱く燃え上がる。

「来やがれ！ドラゴンクローー！」

すると、炎が消え、その中から俺の今の体にしちや、巨大な腕が現れたんだ。

「こんなのはもう、石ころと同じだぜ！」
いわおとしの岩を弾き返す。

すると、美空が出てきて、

「今ですっ！『あの言葉』を！」

へへっ、わかってますよ！

「覚えときな！」

イワークを打ち上げ、自分も上にとぶ。

「炎は破壊する力じゃねえ！！！」

腕を振り下ろす。

「化える力だつてことをな！！！」

腕をとばして、落ちてくるイワークを受け止めさせる。

「な、何故とどめを刺さない！」

「もう、十分だろ。勝ち負けは、決まったぜ」

「甘い！いわおと……」

「やめろ！俺達の負けだ。どうやら、君を見くびっていたようだ」

タケシが、俺に握手を求めた。

「え？ああ……」

手が熱くなつてないか確認してから、握手した。

「私ともしてくれるか……？」

イワークも手を差し出す。

「もちろんだぜ！」

へへへ……なんか、いいな。こういうのよ。

「あっ！いいないいな！わたしも握手〜！」

「私はこういうのはどうも苦手だ……」

美空が誰かれ構わず握手して、光就が後ろを向く。本当に素直じゃない奴だな。

「さあ、受けとつてくれ萌えもんリーグ公認のグレーバッジを！」

「グレーバッジ、ゲツ……」

「用は済んだ。帰るぞ。後、パクるな」
くっ……本当に素直じゃねえな……（怒）

Rレポート

百年に一度、りゅうのいかりを遣う事が出来る、コイキングが、お月見山付近の湖に生まれる事がある。

それこそが、後にギャラドスになった時、七海を統べる、海竜王となるコイキング。詳しくは、下記の海竜王伝説参照。

海竜王を我らがものにすれば、海を支配したも同然。何としても手に入れるべきだ。

そのプロセスとして、各湖に居

~~~~~

レポートは此処から先、破られていた。

ニビジムを突破した。もうこの町に用はないのだが……。

「そんな淋しい事言わないで、観光でもしましょうですう。ほらほら、あの化石博物館なんて面白そうですっ！」

美空が一人で、凄くはしゃいでいるのだ。まあ、彼女らしいと言え、彼女らしいのだが……。

「龍宗よ。お主はどうだ？」

「いや、俺も楽しもうなんて気分じゃねえな。ねむてえ……」  
半分寝てるな。

「ボールに入っているか？」

「おお、ありがてえ……」

普段、ボールに入りたがらない龍宗が入ると言っただから、相当疲れたらしいな。

「休める時に休んでおけ……」

龍宗をボールに戻す。くっ、美空もボールに戻したいものだ。

そうして、彼女に振り回される事二時間。真上にあつた日輪は、西に傾いていた。

「美空よ。楽しいのは分かるが、そろそろ昼にしないか？さすがに腹が空いた」

「あれ、もうそんな時間ですか？あつ、本当だ」  
空を見て言った。

「じゃあ、あそこに丁度良い原っぱがありますから、そこでお弁当食べましょうですう」

「化石博物館の裏庭か。自由に使って良いらしいから、まあまあ、良策か」

「えへへ……褒められた」  
何故か、赤面する美空。

「では、買ってくるとするか」

「何言ってるんですか。作ってありますよ、お弁当」  
「弁当だとー！ーっ！ー！！」

龍宗が突然、ボールから飛び出した。

「何なのだ、お主は……」

「みんなでお弁当、楽しいですう！」

まあ、美空が楽しそうだから、良いか。

「た、食べ物……？……食べ物……！！」  
っ！？

「何者だ！」

異様な気配を感じ、そこに短刀を投げる。

「はっ！」

躲されたか……。なかなかの遣い手と見た。

「こちらに向かって来る！美空、準備せよ」

「はい！」

……来た！

「今ぞ！」

「人の食事中に襲うなんて、無粋もいい所ですっ！かせおこし！」

敵は吹き飛ばされた。だが、再び起き上がり、突進する。

「こいつ……コイキングか！」

赤い服に、彼等のトレードマークの王冠。間違いなくコイキングだ。

「コイキングの身にして、私の短刀を躲したとは面白い。なれば、この技を遣おう。サイコカッター！」

本気のサイコカッターではないぞ。足を止められるだけで良いと思っただが、

「はあああああっ！！！」

サイコカッターを押し切った。くっ、甘かったか！

「この！コイキングのくせに生意気な奴だぜ！メタルクロー！」

龍宗の得意技が繰り出される。が、それをそのコイキングは受け流し、

「はあっ！」

龍宗を蹴り飛ばした。

コイキングは遂に、弁当にまでたどり着いた。

「はあはあ……」

すると、コイキングは肩で息をしながら、ちょこんと座り込み、

「いただきます……」

と、呟き、黙々と弁当を食べ出した。

「あーっ！俺の弁当が！このやろっ！」

龍宗が腕を振り上げ、抗議しようとするのを、私は抑えた。

「あっ！光就！何しやる！」

「あれほどまでの、飯に対する執念。よほど、腹が減っていたと見える。見逃してやれ」

「ぐっ……むっ……」

龍宗は納得した様な、納得してない様な態度を示した。

「……ふう。ごちそうさまでした……」

コイキングは、三人分の弁当を平らげ、呟いた。

そして、きよるきよると辺りを見回し、我等を視界に定めると、そこに向かって歩く。

「な、何だよ……」

龍宗が身構える。

「……ごめんなさい。勝手にお弁当食べて」

コイキングが頭を下げる。

「へっ、許せるわけねえだろ！」

「お前の許しは乞うてはいない」

「何だとー！ーっ！！？」

「少し黙れ、龍宗。……何故、かの蛮行に及んだ？」

一応、理由は聞いておく。

「いえ……、恥ずかしながら、ご飯に一週間程、事欠いてまして……。余りの空腹に、倒れそうになってしまいそうな時に、あなた方が、お弁当を広げたので、魔がさしてしまい……。本当に、ごめんなさい……」

そついう事か……。

「……お主、名を何と申す」

「……はい。私は、海風瀬奈と申します」

「海風瀬奈よ。火事場で普段の礼を守っていても、炎に巻かれて死ぬだけだ。お主の行為は褒められた事ではないが、仕方のない事。

無論、かの蛮行に及んだ事に対しては、償わねばならないが」

「えー！お腹空いてたんだから、仕方ないよ。償いなんて、させる必要無いよ！わたしだつて同じ立場だったら、やってたよ！」

美空の言う事も一理ある。私自身、そういった状況下に於いて、同じ事をしないと断言する事は出来ない。だが……。

「だからこそ……、断罪せねばならぬのだ。仕方のない事だからと、己を正当化しないようにな。だから……」

一呼吸置き、言う。

「お前は、故郷に帰れ」

瀬奈は、驚いていた。

「な、何故その事を……?」

「コイキングという、存在の運命に抗っているのだろうか?だが、それは誤りだ。時を待つのだ。龍は天高く昇る前は、沼の底で時期を待っているものよ」

「……分かりました。……いろいろありがとうございました。……さようなら……」

瀬奈は、頭を下げると、背を向け、走って行った。

「さて、我等も行くとしよう」

「はいっ」

「くっ!また空気だったぜ」

海風瀬奈。彼女とは、もう会えないはずだった。

だが、私の運命は、彼女をもう一度、私と巡り逢わせる。

そして、その時、三人目が覚醒する……。

第七話に続く

第六話後編：DRAGON FOAR！（ターンエンドカワイソス）（後書き）

第七話は七月十一日投稿予定。新キャラ、海風瀬奈が大暴れするぞ！コイキングの癖に、なんであんなに強いんだ！何て言わないでね。

第七話：既成事実（日輪沈みし時、悲劇は起こる）（前書き）

推敲に推敲を重ねました。第七話は色々な意味で読者の皆さんに衝撃を与えるはず。そして、第八話は何が起こるんでしょうね。

## 第七話：既成事実（日輪沈みし時、悲劇は起る）

### ブラックリスト

浅井光就

危険人物ランクS

ロケット五幹部の一人、エルバスを完膚無きまで叩きのめし、サカキ様とも互角の戦いを見せた。

萌えもんと人間のハーフで、萌えもんの技を遣う事さえ出来る。

トレーナーとしての采配については、未知数だが、育成技術や捕獲技術（あくまで訓練らしく、捕まえた萌えもんは逃がしている）を見る限り、相当なものと思われる。

ちなみに、エルバスやサカキ様と戦った時は萌えもんは連れておらず、生身で戦っていた。

対抗策は、未だ、確立しておらず、現時点としては、極力交戦を避けたい所である。

トシユミ  
神風美空

危険人物ランクA

X月XX日のトキワの森の虫萌えもん回収ミッションに於いて、突如、出現し、ロケット五幹部の一人、ゲントウのユンゲラーを倒し、森を燃やしながら飛び去って行った。

なお、それから少しすると、何事も無かったかのように、森の炎が消え、静けさが戻った。火傷を負った団員も、元通りになった。

この現象については、科学部を挙げて、随時説明中であるが、未説明のままである。

~~~~~

以上が、この月に新しくブラックリスト登録される、危険人物ラ

ランクA以上の者達である。

今回は、二人目のSランクが出て、彼の仲間もAAと強力な者である。彼らが、これから先、我等ロケット団の障害になる事は、火を見るより明らかなのである。

まずは絶えず、彼等の監視、観察を怠らぬ事が、今出来る最大限の対抗策だ。

以上、ロケット五幹部・グレイ監修のブラックリストである。

「機能美こそ、至高の美学なのだ……！」
私の持論だ。

「と言ったつてよ。全身真っ黒って何だよ。あんた漫画の悪役のボスかよ？そうじゃなきゃ、主人公に味方する謎の男か？どっちにする、主人公の服じゃねえだろ！」

「この服が着れぬのなら、私は主人公の座を降りる……！」
私の覚悟は強いぞ。

「うっ……わかった……。着ていいぜ……。くそお。萌えもん二次創作小説史の中でも前代未聞だぜ……！」

何の話をしているかと？ククク……。良い質問だ。

第二話で、私はマントを家から持ち出したのだが、今までの服ではそれが映えないのだ。

私が、今着ているのは、読者諸君にとっては想像に難くない、普通の萌えっ娘もんすたぁ主人公の服だ。

この服に、漆黒は似合わない。だから、折角の良品がバッグの中に押し込まれてしまうのだ。

それに、後々戦っていく中で、外見的な衝撃を与えられる服装が欲しかった。これは私の願いを忠実に叶えた。

「わたしは良いと思いますです 光就さんは、黒が似合ってます」

「どこの不良だよ！どこのロックシンガーだよ！思い直せ！思い直せよ……なあ？」

龍宗よ……残念だが……。

「我が人生に一片の悔い無し！」

上下合わせて五万だ。高いだろう？とは言え、マサラに居た時なんぞは、金など全く使っていないからな。金だけは有るんだ。

漆黒のジャケットと漆黒のズボン。今の私に、エレキギターでも持たせれば完全にロックシンガーだ。

しかし、私はマントを羽織る。更に、持ち出したゴム手袋（無論、漆黒）を付け、完全に肌を見えなくする。知っているか？素肌が見えないだけで、重厚さは倍増する。

「とってもカッコイイですよ、光就さん」

美空が眼を輝かせて言った。

「ふっ、何と言われようと、着て行くつもりだったがな」

「なあ、暑苦しくねえか？それ」

確かに。多少、暑苦しくはあるが、これを着る為のリスクと思えば、軽すぎるな！

「ククク……案ずるな」

「光就さんは、漫画の主人公よりも、敵役に憧れるタイプなんですよっ！」

どうやら、美空の懐古スイッチが入ってしまったようだ。この様子では、龍宗は最低でも二時間は放されないな。カワイソス。

仕方ない。助け舟を出してやるとしよう。

「美空よ。お主も着替えてみてはどうだ」

その白のローブ、古くなっているからな。

「えっっ！わたしは、この服、気に入ってますですう。あつ、でも……」

美空は、自分の額に手をやり、鉢金を外して見せた。

「この鉢金……古くなって、ボロボロになってしまったんです。長年使ってましたけど、そろそろ買い替え時です……。あ、後、マン

ト、わたしも欲しいな……」

(なるほど……)

思案に駆られる事、二分。

「美空、それはどれだ？」

美空が欲しいというマントの場所を聞く。

「え？ここにありますが……」

「そうか。よし、少し待っている」

そのマントを手に取り、カウンターに持っていく。

「み、光就さん！わ、わたしにそんな事する必要は……」

「うるさい。大人しく貸しを作らせる」

「はう……光就さん……」

「えへへ……。どうですか？わたし、変じゃないですか？」

空中でたなびく、純白のマントは、私のマント美学に、よく当てはまった。

……美空に、マントなど似合わないと思っていたが、その認識は改めねばならないようだな。

「意外と邪魔になりませんよ。光就さんとお揃いなのですよ。嬉しいですよ」

「楽しそうだな。そんなにも、私とお揃いが嬉しいのか。」

「はうう〜」

美空、完全に有頂天だな。

そんな美空を見ていて、私もつい気が抜けていたのかもしれない。

「覚悟……！」

赤い影が目前に現れ、鳩尾に衝撃が走る。

(ぐっ！馬鹿な……！)

「な、何事ですかっ!？」

「ちっ、間に合わなかったか！」

龍宗がいち早く構えていた。

しかし、何だったのだ、奴の拳は！あれに気付き、躲したと思っ

たら、急所に入って来た。始めからそこに避けると分かっていたかのようにだ。

「水舞踊・急所突き……、私の最強技……。これであなたは動けない」

目の前の少女は、あどけなさが残りながらも凜とした声で、静かにそう言った。

「私を……甘く見てもらっては困る！」

居合抜きをする。

彼女は、それを華麗に躲すと、私を挑発した。

「どうした……掛かってきなさいっ！」

……何だ？私はこの声を聞いた事が……。

……いや、違うな。

昨日聞いたばかりではないか。奴は……海風瀬奈だ。

「止めだ……。顔見知りには剣は振るえん。海風瀬奈よ」

だが、瀬奈は表情を更に険しくする。

「ふん！お前等は自分が何をしたのか分かっているのか！私の仲間を返しなさい！ロケット団！！」

瀬奈は、高らかに声を挙げ、私を指差した。

「ロケット団……？ああ、そういう事か」

服装を見る。なるほど、確かに黒服だ。

「海風瀬奈よ。ロケット団〓黒服の命題は成り立つが、黒服〓ロケット団の命題は成り立たんぞ」

「な、何を訳の分からぬ事を！」

「浅井光就の名は一夜にして忘れたか！海風瀬奈！」

この一喝で、やっと理解したようだな。

「えっ……。はっ！よく見るとあなたは……し、失礼致しました！」

瀬奈は頭を下げる。

「お主らしくない、慌てた様子だったな。何が起きた」

「……実は……」

瀬奈は自分の身の回りで起こった事について、語りだした。

なお、この事件は、とある研究をかなり進めたようでその筋の者達の間では、割と有名。

お月見山の裏側にある静かな湖が、私……海風瀬奈の故郷。

小さい湖だが、夜になると月の光が水面に当たって、とても綺麗で神秘的なんだ……。

私はその光景が好きだった。

おっと……今は、そんな事、関係なかった。

私はあの後、真っ直ぐ故郷に戻った。

夕闇を切り、向かったそこにあっただのは、誰も居ない湖だった。

「何なんだこれは……!？」

湖は、最後見た時と変わらず、静寂を保っていた。

「あははは……。やれやれ、皆冗談が過ぎるぞ。何処に隠れているんだ？んんっ？」

と、わざと大声で言う。

そうであって欲しかった。だけど、胸の奥の禍禍しい霞むやは晴れなかった。

「ははは……。ここか？」

「……………」

「それとも、ここか？」

「……………」

沈黙が痛かった。

「うふふふ……あははははははは………」

笑っしか無かった。馬鹿みたいだ……突き付けられた真実を、頑なに拒んで、調子の良い幻想に逃げ込もうとした、愚かな自分を見つけたから。

「皆……みんな……っ！」

眼から水が零れてきた。どうなっているんだ、私は……。

「ぐすつ……みんな……ぐすつ……何で……ぐすつ……こんな事に……ぐすつ……」

私は、泣き続けた。月が私の上で、嘲笑っていた。

「……私の所為……なのか？……私が……勝手に……湖を……飛び出したから……みんなは……」

長老が言っていた。君は、湖を出てはいけないと。ある時が来るまで、出てはいけないと。

でも、私は出てしまった。広い世界に憧れて……。甘い菓子に引き寄せられた蟻の様に……。

私はとんだ愚か者だ。

（何があった……？乱獲者だろうか？）

この湖の中で、まともに戦えるのなんて、私以外には居ない。いや、自慢じゃなくて、そうとしか言いようがない。

（だとしたら、皆、捕まってしまったのだろう。くっ、早く助けないと……）

（……どうやって……？）

（！何で、そんな事を言うんだ！私は……皆を助けないといけないんだ！！……はっ！）

自分で自分の頬を叩く。

（感情のままに動いても、ろくな結果にならない……。それに、まだそうと決まった訳ではない。ただ、何処かに逃げ込んでいるだけなのかも……）

（逃げ込んでいる……？ここから逃げなければいけないような事が、ここで起こったのか？）

（！やっぱり……皆は……）

また頬を叩く。

（どうかしている……。自分の妄想を暴走させる事で、目の前で起きている現象を検証しようとするなんて……）

私を見つめる月は、どんな眼差しをしているのだろうか。愚かな

私を、憐れんでいるのだろうか。

(もう……疲れた……)

私は、寝るのに適当な場所を見つけると、すぐさま横になった。

(朝になったら……皆戻って来るかも……)

超希望的観測だが、妄想を暴走させて、愚行に及ぶよりはずっと増した。

……私を慰める者は居ない。

朝が来た。

起きた私を迎えるは、お月見山の静寂。

(やっぱり……駄目か)

当然だ。あんな希望が通る程、現実には甘くない。……でも、涙が出て来る……。

あまりの哀しみに、朝食なんて口に入らない。

(とにかく……出来ることをやろう)

私は、この事についての情報収集をことにした。

だが、もともとあの湖は、お月見山の中でも辺境。なかなか情報が集まらなかった。

途方に暮れ、もう一回、湖に戻って来ると、

(何者かの気配がする……!)

湖のコイキングの生き残りか、それとも、犯人の一味か、とにかく誰かの気配がした。

(そこか!?)

茂みに飛び込み、潜んでいた者の背中を取り、一気に倒す。

「いやあっ！痛い！放して！」

私の下に居たのは、コイキングだった。

「はっ！仲間だったか……済まない。痛かったか？」

彼女は私から解放されると、一目散に逃げだそうとした。だが、させまいと、私は腕を掴む。

「安心しろ……私は味方だ。私もコイキングなのだ。さっきは、誰

が敵か味方かも分からない状況だったから、君に危害を加えてしまった。だが、私は敵じゃない！信じてくれ！」

必死に叫ぶと、その思いが通じたのか、彼女はじたばたするのをやめてくれた。

「ほんと？本当にわたしの事捕まえない？」

「ああ。私をってみろ」

「あつ！あなたもコイキングなんだ……良かった」

彼女は、へなへなとそこに座り込んだ。……背格好を見るに、彼女は、まだ七、八歳位だろう。可哀相に……私でさえ苦しかったあの夜を、幼い身で耐え忍んでいたのか。……彼女の眼は赤かった。

「すまないが、ここでなにがあつたんだ？君にとっては辛い事もしれんが、教えてくれ」

「……わたし怖い……」

少女は震え出した。

「くっ、お願いだ！君が話してくれないと、皆を……」

（……そうだ！）

「なあ、話してくれたら、お姉ちゃんが、君のお父さんやお母さんを助けてきてあげるから。だからお願いだ！教えてくれ！ここで何があつた！」

涙目の彼女は顔を上げた。

「ほんと？」

「ああ。約束する！」

「じゃあ……言うね」

彼女は、一呼吸置いて喋り出した。

一生懸命に話してくれた。

（要するに……皆、胸にRのマークが付いた黒服に連れ去られたという事が……）

胸にRのマーク……？何処かで聞いた事が……はっ！

ロケット団……萌えもんを使って悪事をする謎の秘密結社！

そうか……この事件にはロケット団が関わってたのか……。

(それさえ分かれば、充分！)

「ありがとう。きつと助け出してみせるから……」

私は、走りだした。

今度の走りは、自信を持った走りだった。

「……大体分かった」

私は、瀬奈の回想を聞き、一つ心に決めた事がある。

「ふっ……やはり先手必勝と言う訳だな」

「……？どういう事だ？」

瀬奈は首を傾げる。

「お主の戦い、我らも、共に参ろう。味方は多い方が良い」

瀬奈は驚いたようだった。

「なっ……！？確かに、味方は多い方が良いが……良いのか？要らぬ害を被るかもしれないぞ」

ふっ、もう遅い。

サカキ「既成事実、作っちゃうんだからっ！」

光就「ちょwwwwおまwwww」

私は、もうロケット団から逃げる事は出来ない。行くも地獄、退くも地獄なれば、もはや恐れる事など無い。

「問題はお前達だ。どうする？」

美空と龍宗に尋ねる。

「クツクツクツ……嫌だと言う訳無いだろう……ですう」

美空は、何故か私の口真似をして答えた。

「へっ！巨悪に立ち向かうのは、英雄の役目だぜ！」

龍宗は、恐れどころか、腕を鳴らしているようだ。

「そうか……ふっ、聞くのも、野暮だったな」

私は瀬奈と向かい合う。

「浅井光就とその配下は、お主に味方しよう。光就軍団が強さ、刮

目せよ……!!」

「……ありがとう……」

楽しそうだな。

「だが……敵陣の場所は分かるのか?」

瀬奈は質問した。

「分かっている訳無かるう。これから探すのだ」

当然だろう。

「ふっ、火の無い所に煙は立たんものよ……しかも、その火はわざわざ黒くなってくれているのだから、見つける事は容易よ」

「なるほど、黒服を見つけて、尾行するという訳ですね」

私が遠回しに言う事を、美空が的を射た言葉で解説する。

「うむ、尾行は美空に任せる」

「はい」

美空は飛び去った。

「さて、我らは待つているとするか。だが、その前にはつきりさせたい事がある」

瀬奈に近寄る。

「お主、攻撃技使えないな」

瀬奈が唇を噛む。凶星みたいだな。

「あなたの言う通りだ……。さっきの水舞踊・急所突きも、敵の動きを止める程度の威力しかないんだ……」

確かに、あれの威力は不意打ちなせいもあって、最初は痛く感じたが、体は意外と痛まなかった。

「後は、水舞踊・一蹴。これも、相手を吹き飛ばす程度の威力しかない……これらが、強いて上げられる攻撃技だ」

「いや、充分だ。メインアタッカーにはなれんが、支援役としては申し分ない」

……決まったな。

「龍宗!お主は美空と共に潜入せよ。炎の師弟コンビでな」

「よっしゃあ!任しとけ!」

「瀬奈は私と共に来てもらおう。援護を頼むぞ」

「……分かった」

「よし、決まったな。後は、美空が戻って来るのを待っただけだ」
「始まりが訪れる……」。

純白の疾風が吹く。

「光さん 突き止めましたよ！ニビ科学博物館に、彼らのアジトがありました。研究員の一部が、ロケット団の様です。ふん縛りま
すか？」

「誰が敵で、誰が味方か、把握しているのか？」

「そこが問題だ。」

「もちろんですよ」

美空に紙を渡された。そこには写真が添えてあった。

「なるほど、これがロケット団の一味か……」

懐にそつと仕舞う。

「顔が割れてるなら、下手に手出しする必要は無い。あくまで、コ
イキング救出が我らの急務。変な正義感に踊らされずに、その任務
を遂行せよ！」

「イエッサー！」

「ちっ、分かったよ！」

「当然……」

土気は上がった。後は……采配を振るうのみ！

「決戦の火蓋は、切って落とされた……行くぞ！」

四人は飛び出した。

日輪はまだ、沈んでいない。

「どつという事だ！」

装置のメーターは、一つの反応も示さなかった。

「こんなはずは……」
焦りが男に走る。

「おやおや……おかしいですね……」

白衣の男が、皮肉っぽく呟く。

「もしかして、捕らえ漏らしましたか？」

「馬鹿な……！そんなはずは無い！ちゃんと全員捕らえた！そ、装置が異常なのだ」

「じゃあ、そういう事にしておきましょう。しかし……」

白衣の男は……ロケット五幹部の一人、グレイは、冷酷な眼差しで男を見つめ、

「再検査しても結果が出なかった場合、この事をボスに報告しますよ。左遷直前の任務の出来がこれなら、ナナシマに長く居られそうですね。羨ましい限りです。エルバス殿」

エルバスは、更に顔を険しくする。

「ぐっ、何を！虚勢を張っても無駄だ！」

エルバスはそう喚くと、乱暴に扉を開け、立ち去った。

（ふっ……機嫌取りだけで出世した輩はこれだから困りますね。ま

あ、もう、帰ってこれないと思えますがね）

グレイは心の中で、そう呟き、装置に目を落とす。

（メーターに若干の反応が……海竜王と親しく触れ合った者が居るようです）

「検査をし直しましょう。興味深い結果が出る確証を得ました」
実験室が慌ただしくなった。

「サイコカッター！」

行く手を阻む木を、切り裂く。

「さあ、行くぞ瀬奈！」

「（今更だが、何で萌えもんの技を……？）はっ！」

扉を開ける。美空と龍宗が手筈通り、白の研究員を連れ出しているはずだ。今居るのは、ロケット団に肩入れしている輩のみだ。

「ちょ……ここは、関係者以外立入り……」

「武士の情けだ。みねうち！」

「少し眠ってて……！水舞踊・急所突き！」

丁度二人しか居なかつたから、これで邪魔者は消えた。

私は、壁を叩く。

そうしていく内に、音が変わった。

「ここか……」

その壁を押すと、壁がぐるっと回り、階段が現れた。

「そういう仕掛けか……行くぞ潜入開始だ」

階段をゆっくり降りて行く。

「瀬奈。その服はどうだ？動きづらくはないか？」

「安心して……さつき見た通りだ……」

瀬奈は今、黒服を着ている。馴れない服装で歩きづらそうだったから、一応、聞いてみた。

「人の心配ばかりしている場合なのか……？」

「それもそうだな……」

私は頷く。

そうこうしている内に、基地に着いた。

「良いか？堂々としていれば、以外と気付かれん。団員に会っても胸を張っていれば、大丈夫だ」

「ふっ……何回それを言えば気が済むんだ……。私がロケット団の下っ端風情に慄くと思っっているの……？」

「ふっ、それもそうだな。だが、一応忠告しておく」

「やれやれ、瀬奈とは、こんな会話ばかりだな……」

「（心配してくれて……）ありがとう……」

ん、何だ？小声で聞こえんな。

「何か言ったか？」

「い、いや。何でもない」

「本当か？言いたい事があるなら言ってくれ」

「ほ、本当に何でもないんだっ！しつこいぞ！」

何か顔が赤いな……。

「顔が赤いが大丈夫か？」

「なっ！う、嘘だっ！」

「ひぐらしネタはやめろ」

「わ、私は狙っていないぞ！」

面白い奴よな……。

「まあいい。さっさとコイキング達を助けるぞ」

私は、瀬奈に背を向け、歩き出したその時だ。

コイキングが走って来た。

だが、その刹那、銃声が響く。コイキングは倒れ、動かなくなっ
た。

そして、黒服が現れる。

「ふん。手間取らせやがってこの雑魚が！」

瀬奈が体を震わせる。コイキングにとって、雑魚と言つ言葉は、
最も許されざる罵詈雑言なのだ。

私は血気に逸る瀬奈を右手で制す。

（！？何故止める！）

（今、騒ぎを起こすのはまずい。耐えるのだ！）

「じゃあ、俺は行くぞ。お前達もぼーっとしてないで働けよ」

黒服は去って行った。

黒服の姿が完全に見えなくなった時……、

「光就っ！」

瀬奈が怒鳴る。

「な、何だ……。って本名を呼ぶな。私は一応、ブラックリスト入
りしているんだぞ……。」

「うるさいっ！何で、私がお前なぞの指図に従わねばならない！光
就……お前には失望した！」

瀬奈は……何を怒っているのだ……？

「もっお前なんぞ知らん！」

赤面して、走り去る瀬奈。

(ま、待て……敵陣で勝手な行動を取るんじゃない……)

だが、遅かった。瀬奈の姿は、消えてしまった。

(ちっ……！あいつは感情の起伏が激しいから、こうなっては手遅れか……)

辺りを見回す。どうやら、この騒ぎを聞き付けた奴は居ないようだな。

(とにかく……早く瀬奈を追いかけ、合流しなければ、潜入がばれる……)

「何が『ばれる』だって？ ユンゲラー、サイコキネシス！」

突然、視界に黒いグラサンの黒服とユンゲラーが現れ、私を攻撃した。

「ぐあっ！！おのれ……私を舐めるな！ はあ……っ！ サイコキネシス……！」

こちらも念力で対抗する。

「はっ……！」

そして、相手の念力を押し返す。

「ほう……。人間と萌えもんのハーフと言うのは伊達ではないのだな」

超黒服の男は、紳士的にお辞儀をする。

「くくく……俺は、ロケット五幹部の一人、ゲントウ。強者と全力で闘う事を、現世の娯楽としている男だ！」 「我が名は、浅井光就！ 貴様等が捕らえたコイキングを解放せんと動く者だ！」

抜刀する。どうやら戦いは避けられそうに無いな。

「ふはははっ！ その意気だ！ 俺を愉しませろ！ ユンゲラー、サイコキネシス……！」

「サイコキネシス……！」

またも念力をぶつけ合う。

「何度やっても同じ事よ！ はっ……！」

そして、押し返す。私は戦闘を優位に進めていた。

(とは言え、あまりこの状況が続くのは好ましくない……体の負担

が大き過ぎるからな……)

だが、そう思考を巡らせた時、гентウが信じられない事を言った。

「そうか……体の負担が大きくなる前に、速攻で決めたいか」

私の思っていた事を、見抜いたかのように、呟いた。

「!? 貴様は、人の心を読めるのか……?」

「ふっ、こんな汚れた世界では、不快な能力だ」

「何となく、分かる気がするな。人の心の中なんて、綺麗な物じゃないからな」

「そういう事だ。だが、便利な時もある……」

「今この瞬間か。確かに便利そうだな。だが、つまらなくないか? 相手の心中が手に取るように分かってはな」

「いや……、自分の手が、全て見破られていると分かった時の、それでも、必死に抵抗する姿が好きなのだ」

「ふっ……悪趣味だな」

「ふはははは……違いはない」

「だったら……」。

「だったら、私がやるのが読めても、何も出来ないような技を使えばいい……!」

サイコネシスを放ち、刀を構えながら走る。

「この俺が、そんな技を素直に受けると思ったか! ユンゲラー、れいとうビーム!!」

蒼き光線が私を貫かんとする。

「ふん、そんなもの当たるか!」

れいとうビームを躲す。

「行くぞ! つじぎり!!」

刀を素早く振るう。

「ユンゲラー! ひかりのかべを張るのだ!!」

ひかりのかべだと! くっ!

サイコネシスはひかりのかべに防がれた。後続のつじぎりはサ

イコネシスを避ける必要が無くなったユンゲラーに躲された。

「仕方が無い。この技を使うか」

私の秘術を披露するか。

「その必要は無い。俺の負けだ。……試合はな!!」

гентノウが指を鳴らす。次々と出て来るロケット団員達……!

「ふっ、全ては計算通りと言う訳か……謀られた!」

「本当は使いたく無かったがな。だが、これ以上は、俺の命に係わる。恨んでくれるな。俺は、まだまだ死ねないんだ」

それは……、

「私も……同じだ!!」

銃声が、基地に響く。

日輪が……沈んだ。

第八話に続く

第七話：既成事実（日輪沈みし時、悲劇は起こる）（後書き）

第八話は七月十九日に投稿予定です。第八話はどうなるのか。・・・
一つだけ言える事は、作者は萌えもんファンタジーを一桁や、十何
話程度で終わらす気は無いと言ってます。

第八話前編：海風瀬奈、雄々しき竜の如く（見てくれなくなったら、寂しくないか

アルセウス「裁きの時は来た！ドゥラー……！！」
作者「……」

返事が無い。ただのしかばねのようだ。

ええ、そうですとも。遅れた理由なんて言う必要も無い。想像通り
ですよ。

でも、9は残念。特にヒロイン。

アルセウスの方は、久々のポケモン映画って事で、結構泣けた。H
GSSの予告やってた時は、身震いが止まらなかった。やべえ、早
く秋来ねえかなあ……。

はい。僕の事なんてどうでも良いですね。わかります。

第八話も前編後編に分けました。

第八話は、今後の重要な伏線になる部分が多いですからね。

гентウとグレイの関係とか、瀬奈の覚醒とか、光就の思惑とか、

美空のパンチry

微妙にスランプ気味でしたが、何とか復活しました！これからも応
援よろしくお願いします！

第八話前編：海風瀬奈、雄々しき竜の如く（見てくれなくたって、寂しくないか

「くっ！思った以上に警備が嚴重ね……」

壁に張り付き、様子を見ている瀬奈。

「ここは諦めた方が良さそうね」

忍び走りで移動する瀬奈。

「くっ、ここもダメか……！」

「ああっ！ここも!？」

「そんな……ここもだと!!」

何で、こんなにも警備が嚴重なのかしら……と考えていると、

「あら?」

警備中のロケット団員が、話をしている。

「なあ、知ってるか?何でも、こんなに警備が嚴重なのは、今ここに、あの海竜王って奴がいるからなんだとよ」

海竜王……?何だそれは。

「ああ、例の特別なコイキングだっけ。りゅうのいかりが使えるらしいな」

コイキング!?!ということは、皆は、海竜王と思われたっていうこと……?

コイキング……海竜王……海竜王伝説……?昔、お祖母さんに聞いた事があったけど、忘れてしまったわ……。

でも、そんなのただの昔話。ごくまれにりゅうのいかりを覚えるコイキングの存在を、乱暴に解釈してるに過ぎないわ。だけど。

「はあ……そいつを捕まえられたら、出世出来んのかなあ。俺らはここで警備だぜ?やってらんねえな。こっちに来ねえかな。海竜王」

ロケット団は……そんな下らない事の為に、皆を……。

ふっ、下らない話だったけど、聞いておいて良かった。お陰で、突破口が見えたわ。

「なら、その願い。この海風瀬奈が叶えてやる!」

出世が掛かっているとなれば、仲間と呼ばれない。何としてでも二人で捕まえようとするわ。すると、そこに隙が出来る。コイキング何かに負ける訳無いと思ってるんでしようが、甘いのよ！

「なっ！コイキング!？」

「本当に来てくれるとは……捕まえるぞ！」

「水舞踊！」

踊るような足取りで敵の攻撃を躲し、

「急所突き!!！」

肘打ちが決まる。

「次はお前だ。せいっ!!！」

背負い投げを繰り出し、倒れた団員の鳩尾に、拳を突き出す。

「ふっ、修業が足りないな」

ゴソゴソと倒した団員を漁る。って、そ、そういうのが趣味なんじゃないぞ！

IDカードの入手に成功する。

「これで何とかなるな……。よし!!！」

団員達を適当に隠し、意気揚々と進む、瀬奈であった。

ふっ、私とした事が、麻醉銃を食らって捕まるとはな……。まあ、捕虜は捕虜らしく大人しくしているか……。

むっ、何だ?……出してやると言うのか。

……生憎、私は無料では起きない質でな。貴様に捕われた時こそ、しまったと思っただが、今思えば、これが一番手っ取り早い方法だったのだ。

貴様等も既に、私の情報を引き出してしまったのだろうか?だから

こそ、等価交換だ。

『随分強気だな。自分が置かれている状況が分かっているのか？』
だと？

ククク……。あれと私は同じだ。今すぐにも、呼ぶ事も出来る
が……。

だろうな。私としても、より確実に情報を得たい。だから互いに、
それを呼ぶ事態は避けたいというわけだ。

ククク……。交渉成立だ。

では、私は時間が満ちるまで微睡みの時を歩もう……。

……

「早く早くですう！急がないと光就さんが……早くう……！」

「おちつけ、美空！あいつが、そんな簡単に負ける訳ねえだろ！俺
らは、俺らの仕事に専念しろ。じゃねえと、『貴様らは与えられた
仕事も出来んのか……』って言われちまうぜ」

龍宗さんは光就さんの口真似をして言った。

「うふふ……。あまり似てないですね」

わたしは微笑を浮かべ、言う。

「ちっ、そういふこと言っくんじゃねえよ……」

「……強いですね」

「なに？」

「龍宗さんは強いです。わたしの事を落ち着かせてくれるなんて」

「へ、変なこと、言ってんじゃねえ!!」

「エへへ……。さて、役者も揃ったようですし、アジトに招待されましようかですう」

警察隊が行軍してくる。

「貴方が電話をくれた方ですか？ジュンサーです!」

警官服に身を包んだ、凛々しい女性が、敬礼する。

「はいっ！神風美空と申します。一応、ピジョットですう」

「トレーナーは？それとも、無所属？」

「いえ、リーダーは、先に行っちゃいました」

「えっ、一人で？」

「一応、仲間は付いてますけど……。不安ですね」

瀬奈の力は、まだまだ咲かない力。手前味噌だけど、わたしや光就さんには及ばない。

「あまり時間は無いです。一気に突入です」

「おー！ー！ー!!」

「ちょ、勝手に指揮するなあ!」

「エヘッ」

初めての突入に肩に力が入っていたジュンサーさんも、いつもの茶目っ気を取り戻したみたい。

他の警官隊の人達も、少し気分が楽になったみたいです。

「おほん!さあ、行くわよ!」

気を取り直し、科学博物館に突入する。

そこに待ち受けていたのは、

「お前ら!さつきはよくもやってくれたな」

「我らの萌えもんで仕返ししてくれる!」

復活した研究員の熱烈な歓迎でした。

「じゃまだ!メタルクロー!!」

「もう一回お休みなさいっ!つばさでうつです」

でも、わたしと龍宗さんの炎の師弟コンビの前に立てるものではなかったですう。

「ぐっつ！またしても……」

「ああ、我が大計は、i……」

「パクるなですう！！」

「おちつけよ……」

「はあはあ……。何でわたしはこんなにも……（ry）」

「ちょっと興奮し過ぎました。ちよっぴり自重しますね」

と、のんきな事を言いながら、ドアに手を掛けると。

「あれれ？開かないですよ？」

ガチャガチャと、小うるさく、虚しい音しか出ません。

「くくく……こんな事も有ろうかと、鍵を掛けておいたのだ」

「鍵はあちら側ですから、ここには無いですよ」

「ザコ敵の最期の抵抗ってやつですか？あれは嫌ですよね。」

「へっ、ムダなことを……ドラゴンクローー！！」

巨大化した腕で、いとも簡単にドアを吹っ飛ばす龍宗さん。

「良く出来ましたです。でも、あまり無茶しちや駄目ですよ。」

ドラゴンクローは、あなたの身で何回も遣えるものではないですか

らっつ

化える炎の力……技として遣うには、あまりに大きすぎる力。ジ

ョウトに居た時、その強さと偉大さを見せ付けられた。

「わかつてるぜ」

龍宗さんは頷いてくれた。

「ならいいです」

わたしは入口の前に立つ。

「今度こそ、行きますよ！神風美空、吹き荒れる疾風の如く！」

階段を、一気に駆け降りる。

だが、その途中、

「あ、あれ？」

足を踏み外した。

「わっ！わわわわわっ！！」

必死に羽ばたいて、何とか転倒を避けようとしたが、

「あ……きゃーっ!!」

見事に転んでしまいました。でも、もっと高い所から落ちてたらと思うと、まだましなのかも。

でも……。

「おお……」

「し、白……」

「(、；、；、)」

落下先に居た、三人のロケット団員(男)。

「え……？(ロープのせいで、眼が、眼が……)」

逆さまの状態で、壁に張り付いているわたし。逆さまということ、重力が本来、かかるはずのない場所にかかるわけで、わたしの服は、そういった状況を想定して作られたものではないわけで。

「な、何ですか？……!!」

わたしのロープの奥が、まる見えだった。

「い、いやあ！見ないで！」

顔を真っ赤にして、下着を隠そうとするけど、この体勢では、根本的な解決にならない。

そればかりか、半端に見えてしまうせいで、

「これはエロい！」

「大丈夫、痛くないから……ハアハア……」

「(、)、(、)」

さらに、彼らの……んーと、劣情？を煽ってしまったようだ。

「嫌あ、こ、来ないで……!!」

よく分からないけど、何となく一世一代の危険を感じた、わたしの精一杯の抵抗だった。

と言うか、体勢を戻せば、何の問題も無かったのですが、その時のわたしには、到底、思考がそんな所まで行き着く余裕は無かったです。

「こ、来ないで下さいですっ!!」

邪悪な欲望を持って、近寄って来る者達。純白の疾風に、それを

止める術は無くて。

「い、いやあ!!」

あつ、カンペ。んーと、『果て無き辱めにその身を焦がされ、毒された身体は甘い蜜の虜となり、恥辱と快楽をその身に刻まれる。純白は汚された……』何だろこれ。A L E P O の新しい曲の歌詞？光就さんなら意味、知ってるかなあ？

光就さんに聞いたら、

「もし、そんな事が本当にあつたら、そう呑気に語ってられまいって、言われました。」

そんな事って何ですか？と聞いたら、

「そんな事を教えられる程、私とお主は親密ではないぞ……」

と、言われました。何か、怒らせちゃったみたい。

まあ、要するに何事も無かつたんですよ。

「俺様を無視すんな!!メタルクロー!!」

「我が人生に悔い無し!!」

「後少しの所で……ガクッ」

「煩惱解放!!」

三人を倒し、こちらを向く龍宗さん。

「助かりましたですう。この状態じゃあ、大した反撃も出来ないですからね」

「い、いや、そうか。美空、わかったからそれ、しまってくれ。はずかしい……」

あ……。

「み、見ないで下さいですっ!!」

壁を蹴って、ずるずると地を這って、立ち上がる。

「あれ？よく考えたら、最初からこうすれば良かったですねえ。わたしとしましたことが……」

「はは……（苦笑）」

うわーん！龍宗さんなんか、笑われたよ〜！

「おちつけや……」

「えへん！さあ、行きますよ！」

「……おう！」

炎の師弟コンビが走る。

だが、

「嬢ちゃん、悪いが、ここから先は、通す訳にはいかん！」

黒服に、黒いグラサンの……超黒服の人が邪魔をしてきた。

「あなたはトキワの森の……！何で……って言う必要は無いですよ。龍宗さん！」

「おう！」

ドラゴンクローを出す龍宗さんと、翼を広げるわたし。

「わたし達の邪魔をするんですから、大火傷くらいは覚悟して下さいねっ！」

「……時は満ちた！」

光就は睡眠カプセルを破壊し、飛び出す。

向かうは、第三倉庫。

ロケット団ニビ地下基地・司令室に、二人の男が居る。

「おかしな事になりましたね」

グレイが不敵に笑う。

「にしては、楽しそうだな」

гентウは、含み笑いをして、言う。

「心に鍵は掛けてあるはずなんですがね。やはり、貴方に隠し事は出来ませんか」

「フフフ……。隠そうとしてさえないのに、何を言うか」

二人してニヤリと笑う。

「ところで……、エルバス殿はまだここに居るんですか？あれも一応、五幹部ですからね。計画の障害に成り兼ねません」

「いや。ナナシマは遠いからと、早々に船に乗せた。しかし、哀れなものだな。才無き者が権力にすぎり、そして、墜ちていく姿は」「愚か者には、お似合いの最期ですよ。それより、早く避難勧告をしますよ。いくらなんでも、死人を出すわけにはいきませんから」「む……。あの浅井光就の配下が、いたずらに人の命を奪うような輩ではないと思うが」

「念のためですよ。血気に逸っているとストッパーが効かなくなりますからね」

そう言うと、全区域に放送出来るマイクに、

「緊急事態発生。緊急事態発生。強力な実験体が逃げ出しました。基地中に催眠ガスを散布しますので、荷物を持って速やかに避難して下さい……。繰り返しします……」

五回、上記の内容を繰り返したグレイ。

「几帳面だな」

「下級団員は我らの陰謀など知らずに、巻き込まれる訳ですから。せめて命くらいは、確実に助けてあげなければなりません」

そう言うと、次は、キーボードを操作し、全監視カメラの映像を出す。

「гентウ殿。警察隊の足止めをしてきて下さい。まだ、基地内の警備プログラムの起動が出来ません……」

「分かった」

гентウが走る。

「さて……。ここからが正念場ですねえ」

グレイの眼鏡の奥の瞳が光る。

「まあ、我が能力、ゴッドハックと相棒、セリアに引き出せぬ情報はありません。先代のサイバー担当幹部が掛けたロックなど、私達の敵ではない！」

「マスター、出番ですね！」

転送口にモニターボールが置かれる。

「ええ、頼みます。さあ、行きますよ！」

「はいっ！」

神速としか言いようがない程の速さでキーボードを打つグレイ。畏だらけの電子空間を最高速で飛ぶポリゴン2のセリア。

「ロック装置発見！デリートします。シグナルビーム！！」

腕から放たれた三色の光線が、鍵型のプログラムを破壊する。

「デリート完了！他のロック装置もあるようですが、それらもデリートしますか？」

「いえ、ログアウトして下さい。現実世界の方で何かが来ます！それから私を守りなさい！」

「了解しました。マスター！」

セリアが現実世界に戻るのと、その何かが来るのは、ほぼ同時だった。

茶髪の赤い影がディスプレイに写る。

「そこまでだ！」

凜とした声が、広い司令室に響く。

海風瀬奈、降臨。

二時間前……。

「よし、開くな」

IDカードを通して、次々と、開かなかった扉を解放していく。

だが、目的の部屋が見つからない。

「皆は何処に……？」

コイキング達が、捕われている部屋。それが全く見つからない。

「くっ、しまった……。奴らを絞って、場所を聞き出すべきだったな。失敗した」

拳を握り、悔しがる。

「くっ、覆水盆に帰らず。こうなれば、ドアを片っ端から開けてく

までだ!」

ウィーン……。

「くっ、ここもダメか……!」

バタン……。

ウィーン……。

「ああっ!ここも!?」

バタン……。

ウィーン……。

「そんな……ここもだど!」

バタン……。

「って、デジャブー……ッ!!擬音が付いてるだけで、一ページ目のやつと同じじゃないっ!」

はあはあ……こんな大ボケの為に、体力と時間を大幅にロスしてしまったわ……。

れ、冷静にならないと……。深呼吸深呼吸!スーハースーハー……よし!

忍び走り、私は再び駆ける。

一時間半前……。

私が開けたドアの数は五十を越えた。しかし、見つからない。

「おのれ……」

このままでは、いずれ、侵入がばれてしまう……。

そう思っていたその時、

「おい!」

声を掛けられた。

「ビクッ!(い、いや、堂々としていれねばならない……はず)何でしよう?」

「お前が、海竜王か」

「!?!なっ、何故お前がそれを知っている!」

「どうやら、そうみたいだな」

(ぐっ、しまった……。だが、こうなったら……)
「だったら……どうだと言うのだ！」

(こいつを絞って、皆の居場所を聞き出す!!)

私は、身構える。

「安心しろ。俺は味方だ」

「ふん、どの面下げて言っているのやら」

「フフフ……仲間の居場所、知りたくないのか？」

「何っ!？」

予想外だった。が、

「見え見えの罠だな。何でお前らが自分の不利益になる事をするのだ！」

「フフフ……確かに。だが、彼らを解放する事は少なくとも、俺にとっては利益になるのだ。しかし、ロケット団の一員である以上、表立って裏切り行為ともとれる行動をする訳にはいかない。だから今、お前を助けようとしているのだ」

なるほど……。確かに、筋は通っている。だが……。

「お前達だけが、得するなんて、不快だな……私達は取られたものが返されるだけなのにな」

そこが……不快。

「フフフ……。嫌なら蹴っても良いのだぞ。その後どうなるかは俺の知った事ではないがな」

だが、奴は私の正体を知っている。そして、私がこの交渉を蹴りでもすれば、すぐにでも仲間を呼ぶだろう。そうなれば、皆を助けられず、私も捕まるという最悪の状況に陥る。

……結局、面白くなくても、この条件を飲むしかない。もし、それが罠だったとしても、皆を逃がす事は出来る。私の罪なのだから、私だけが罰せられれば良い。

「……分かった。だが、一つだけ条件を加えさせる」

「ほう。どんな条件だ？」

「私以外のコイキングに手を出さない事」

「ふっ、良いだろう。海竜王の貴様が居れば他のコイキングなど、不要だからな」

(く……っ！)

コイキングに対する、侮辱の言葉に感情的になりそうな自分を必死に抑える。

「では、コイキング達の居場所を教えよう」

皆の居場所を聞き、私は走り出す。沸き上がる『怒り』を胸に。

「緊急事態発生。緊急事態発生……」

一時間前……。

「ここか……」

ドアには緑のランプ。開いているようだ。

「どんな罠があるにしろ、私は、皆を助けねばならない……たどえ、私に何があるうとも」

私は覚悟して、中に入る。

「ククク……遅いぞ。瀬奈」

そこには、見慣れた男が居た。

「み、光就！お前、何故ここが分かった？」

「地道な調査の成果だ。お前は、そうじゃないようだな」

結局、お前が正しかったと言う事か……。ちゃんと奴に従っていれば、あんな悔しい思いをする必要も無かったのだろうな。

「光就、すまなかった……」

「気にするな」

それだけ言うと、光就はキーボードを操作する。

ドアが開く。

皆が、続々と出て来る。

皆、口々に「瀬奈ありがとう」と言っていたが、私は何もしてい

ない……。ただ、時間を無駄にしてただけ。

「失敗は誰にでもある。それを、改められる程度の器量があるだけでも、大したものだ」

「……………」
「さうこうしている内に、全員の脱出が完了する。」

「……………」
「いつまで、落ち込んでるのだ。ククク……………やはり、この嘘はちょっときつかったか？」

何？

「光就……………？お前、今何て言った？」

「ククク……………『地道な調査でここを突き止めた』なんて、嘘だと言ったのだ」

「なんだとっ！何故、そんな嘘をついた！」

「ククク……………。それはな……………サイコカッター……！」

念力の刃が、私の真横を通り抜ける。

「私が、お前を捕らえる為の罠だからよ！さあ、怒れ……………私に怒りをぶつけるが良い！」

そうか……………。全ては仕組まれてたのか。

「浅井光就い！貴様だけは……………貴様だけは許さん……！」
「今まで抑えられていた怒りが、頂点に達する。」

「でやあ……！」

私の渾身のパンチ。

だが、糸も簡単に躲かれる。

「感情にかまけた刃で、この私を斬る事は出来んぞ」
「黙れ……！」

再び、パンチを繰り返す。

だが、躲された。そして、

「少し、頭を冷やすのだな。サイコキネシス……！」

「ぐあああああ……！」

光就のサイコキネシスを食らってしまふ。

「ククク……苦しめ！」

「このまま……では……。」

「さらばだ……」

壁にたたき付けられる。

「ぐう……！」

ぐったりとしてしまう。四肢に力が入らない。

「所詮はコイキングか……」

黙れ……。

「海竜王海竜王と持て離されていたくせにな」

黙れ……！

「ただの……雑魚か」

「黙れエエエエエエ！！」

私の怒りも……限界だ！

「怒りの感情を以って、闘志を再燃させたか……。だが、これで終わりだ。つじぎり！！」

そこだ！

「水舞踊・一蹴！！」

光就の技の隙を突き、吹き飛ばす。

「雑魚なりの抵抗か。甘い！」

壁を蹴り、こちらに向かって来る光就。

「雑魚と言うなど言っているだろう！！許さんぞ光就！！」

私は、右足を前に出し、両手を左に回し、手で、球型の空間を作る。所謂、カメハメ波のポーズ。

私はその状態で、怒りの力を、その手の空間に集中させる。

私が海竜王などと言われた原因である、あの技を遣う時だ！

初めて遣う技だったから……何て事は無かった。

「我が怒りをその身に刻め！りゅうのいかり！！」

私の腕から、放射状に炎が飛び出す。

「ふっ、やっと覚醒したか」

その炎に燃やされる、光就。

「終わりだ。瀬奈、よくやった」

不意に後ろから、声をかけられる。

「き、貴様は！」

「ふっ……。そう身構えなくても良い。暴言を吐いて、すまなかつた」

いきなり、謝られた。

「ま、まあ、反省してるなら、私は構わないぞ。うん」

りゅうのいかりを出した後だからか、怒りの感情があんまり出て来ない。

「ふっ、ありがたい事だ……。さて、行くぞ」

「何処にだ？」

「司令室だ」

「なるほど……」

「行くぞ」

「ああ！」

そして、今……。

後編に続く

第八話前編：海風瀬奈、雄々しき竜の如く（見てくれなくたって、寂しくないか

後編は七月中に投稿予定だが、あまり期待しないで待っててね。

自分で設けた期限を自分で破るとは、腐り切った根性ね！ちよっと叩き直してくるわ！

って、べ、べ、別にあいつがどうなるうと知った事じゃないわよ！でも、あいつが書かなきゃ私達が消えちゃうじゃないっ！だからなんだから、勘違いしないでよね！（by海風瀬奈）

第八話後編・目的の為に（解き明かされる謎）（前書き）

終わった……。終わったぞー！シリアス話が終わったーっ！！
ああ、ツンデレが欲しくて瀬奈を出したけど、空気にツンデレ出
来なかった。でも、もう気にする事は無い！これからは存分にツン
デレさせられるぞーっ！！

そうだ。これでやっと本来のギャルg……。ちょ、お前何すんだ
やめ……。

さて、これからは加速出来ると思う。慣れないオリシナの進行が終
わったから。

加速と言えば……。ヤンヤンマが加速を持っている事を最近知っ
たよ。

第八話後編：目的の為に（解き明かされる謎）

「そこまでだ！」

凜とした声が、司令室に響く。

「やれやれ、まだ私は招待していませんがね……」

白衣の男は、こちらを見ずに皮肉る。

「パーティーにサプライズは付き物でしょう？」

私も、負けずに皮肉る。

「まあ、少しサプライズ過ぎたようね。ふっ、あなた以外に、人は居ないなんてね」

「ここにいるぞ！」

突如煌めく赤い閃光。そして、それと共に放たれる三色の光線。

「マスターには……指一本触れさせない……！」

ポリゴン2が飛び出す。

「甘い攻撃ね……。りゅうのいかり!!」

私が覚えたばかりの海竜王の証……。その技を遣う。

それは、シグナルビームを軽く飲み込むと、ポリゴン2に襲い掛かる。

「くっ、流石は海竜王……。取り合えずは、この技を躲してやり過

ごし……はっ！」

何かに気が付いた様に見開くと、なんと、自分から、りゅうのいかりに当たりに行った。

「な、何っ！」

「きゃあああああああ!!」

「せ、セリア！」

ここで初めて、白衣の男がうるたえる。

「だ、大丈夫です。マスターは、早く作業にお戻り下さい……私は絶対に負けませんから！」

よろよろと立ち上がるセリアと呼ばれたポリゴン2。

「……解りました。しかし、危なくなったら、逃げなさい！こんな場所で死ぬなど許しません！」

そう言うと、白衣の男は作業に戻る。心なしか、焦っているように見える。

「くっ、お待たせましたね！ふふふ、確かに、海竜王のりゅうのいかりは、ただのそれとは、違いますね……。ですが！」

セリアは、両手を前に出し、それらを向かい合わせ、そこに電撃を集める。

「撃たせなければ、何の問題も無いのです！でんじほう！」

集められた電撃は、巨大な球体を形成し、それが、私に向かって放たれる。

でんじほうは、その外見から、とてつもない威力を秘めている事が、十二分に悟れる。しかし、その弾速はかなり遅い。

「ええ。確かに、でんじほうを単体で当てる事は至難の業です。しかし……！」

いつの間にか、後ろに回っていたセリア。

「こうすればどうですか？シグナルビーム！」

次の瞬間、セリアの手から、シグナルビームが無数に放たれる。

そう、シグナルビームの弾幕。

（くっ、私を張り付ける気か！）

シグナルビームの弾幕は、この場に居る分には、何とか躲せる。

だが、一歩でも動けば、確実に当たる。そして、何よりの憂いは……

…

（あんなのを食らってしまえば、戦闘不能は必至だ……！）

でんじほうだった。黄色に輝く巨大な球体は、近づいて来る度、その存在感と威圧感を増す。

（くっ、私はどうすれば良い？りゅうのいかりをもう一回放つか……

…？いや、駄目だ！そんな隙を作ったら、シグナルビームの弾幕に貫かれるだけだ！しかし、このままでは、でんじほうに当たる……。

くっ、まさに前門の虎、後門の狼だな……こうなったら！）

私は、足に力を入れる。

(まずは、こんな危ない場所から離れねば……)
セリアに向かって、飛び出す。だが……！

「……貴女は、絶対そう来ると思ってました。パチン！」
彼女が指を鳴らすと、今まで暴れまくっていた無数のシグナルビームが消えた……。

「マジックコートって、こういう風にも使えるんですよ。貴女が、必死になって躲していたシグナルビームの弾幕は、本当は、なんの変哲も無い、普通の光の反射だったんですよ」

「何……だと……！？」

「もつと言つと、貴女がでんじほうと誤っていたあれも、本当は、ただの光です。あの光を反射し、偽のシグナルビーム弾幕を作り出してたんです。おかしいと思いませんか？Lv40程度で、でんじほうは覚えられません。マジックコートは、マスターに改造してもらいましたけど」

「ふっ、ははは……あははは、何だ、そういう事か……私はすっかり騙されていたと言っ訳か」

何が前門の虎、後門の狼だ。私は、勘違いして、獅子の懐に入ってしまったようね……。

「なかなか、お強かったですけど、やはり、レベルと経験の差が出ましたね……」

そう言つと、セリアは私に抱き着く。

「さようなら、海風瀬奈……。ほうでん……！」

「ぐあああああああつ……！」

密着した手から、足から、肩から、高圧電流が流れる。

「ぐっ、くっ……」

私は、意識を失った。

「お疲れ様です、セリア。とどめは刺さなくて良いですよ。こちらが交渉に違反してしまいます」

グレイは、キーボードを操作し終える。ディスプレイに映るは、自爆までのカウントダウン。

セリアを戻し、脱出用のエレベーターに向かうグレイ。

「さあ、お手並み拝見と参りましょう。光就殿」

「わたし達の邪魔をするんですから、大火傷くらいは覚悟して下さいねっ！」

隠している翼を開く。

「はははっ！威勢の良い事だが、トキワの森の時みたいにはいかんぞ……。行け、ユンゲラー、バリアード!!」

（やっぱりこの人は、エスパー遣いですね……。フェザーダンスは使えないかな……。いや、）

翼を開く。

（攻撃は確実に決めたい……）

思案に駆られるわたしを見て、不気味に微笑む超黒服の人。

（……。決めました!!）

「龍宗さん！メタルクローです。ドラゴンは、まだ使わなくて良いですよ。敵の反撃が激しいと思いますけど、耐え抜いて下さい！」

「よっしゃあ！任せとけ！」

龍宗さんがメタルクローで立ち向かう。

「バリアード、リフレクター！ユンゲラー、サイケこうせん！」

物理攻撃を防ぐバリアを張り、その後ろから、幻覚の光線を発射する。

「ぐおっ！……へっ、地獄七番巡りを体験した俺様にとっちゃ、苦しくとも何ともねえな！」

（なんとか耐えてくれてるけど、あまり時間は裂けない……。炎を纏っている時間は無い。ブレイブボードで行きますか！）

近くの壁を蹴り、その反対側の壁に向かう。

(まだ、わたしには気づいてないはず。ここで！)

「フェザーダンス!!」

羽根を、敵に向かって飛ばす。少しだが、敵の注意が逸れ、リフレクターとサイケこうせんが消える。

「今ですっ!!」

翼に力を溜める。

「ドラゴンクロー!!」

「ブレイブバード!!」

エスパーは物理攻撃に弱い。わたし達は、勝利を確信した。ただ、

「ふっ、Wサイコネシス!!」

「えっ!?!」

バリアードのサイコネシスがわたしに、ユンゲラーのサイコネシスが龍宗さんに当たる。

「うわあああああっ!!!!」

吹き飛ばされる龍宗さん。

「ああっ!!」

バリアードを蹴って、サイコネシスを突破し、龍宗さんを受け止める。

「だ、大丈夫ですかっ!?!」

「す、すまねえ……もう、俺はうごけねえ……任せろって言うたくせに、ざまあねえや」

「ごめんなさい……わたしの戦略が悪かったわ……」

「違うな」

超黒服の人が口を開く。

「何がですかっ」

「お前の戦略は、そのヒトカゲを囿にし、俺達の注意を充分に引き付け、そして、フェザーダンスの羽根が俺達を攪乱している間に、それぞれの強力な攻撃を当てる……というものだろう」

「……最初から見破られてたんですか。わたしが甘かったみたいで

すね」

やっぱり光就さんみたいに上手くいかないものだね……。

「フフフ……。悪い戦略ではなかったと思うがな。相手が悪かったのだよ」

「自慢ですか」

不快な口振り。

「ああ、正直言つと、君が何を考えている事も手に取る様に分かるぞ」

「えっ！？う、嘘ですっ！」

（そんな訳ないですよ……。テレパシーを使つてるとでも言つてんですかっ！）

「ほう、正解だ。君が今思った事がね」

「！？何で……。でも、もしそうなら、大変そうですね」

「何だと？」

「たくさんの人の心の中に秘められた悪い感情を毎日見ているんでしょう？それって大変な事だと思います。見たくないものを見せられてる訳ですから……」

人が人である以上、清らかな心のみまではいられない、その人が大きくなるにつれて。

「フフフ……。同じだな」

「えっ？」

「浅井光就と聞いた事が同じだと言つ事だ」

光就さんと……。一緒……。エヘッ。

「だがな、こんな不快な能力にも便利な時がある。それはどんな時かな？」

「今この時でしょうか？でも、相手の行動が全部読めて、思考も全部読めて……。そんなチートな戦いが面白いんですか？」

わたしは喧嘩は嫌いですけど、鬼ごっこしてる時なんか、みんなが何処に隠れてるかなんて一発で分かつたら、つまらないですよ。

推理小説を一ページ見るだけで、展開が分かっちゃつたら、つまら

ないですよ。いやあ！ネタバレしないでえ、わたしの頭〜！！

「……………何かたくましい妄想を心の中で掻き立てているようだ、フフ……………似ているな。良い夫婦だ」

「はうう！？」

ボタンと転んでしまう。

「ふ、ふふふ、夫婦！？フープの間違いじゃなくてえ！？」

「良いフープとは何ぞ？フフフ、似た者同士良い夫婦ではないか。結婚式には俺も呼べよ」

「けっ、けっけ結婚式い！？あのヒラヒラの白いドレスを着てケーキ入刀とか誓いの……………とかしちゃうあれですかあ！？」

はうう……………はうう……………。

「フフフ……………まあ、嘘だな」

嘘……………？

「何がですかっ！？」

「結婚は、生者の営みだ。お前達には出来ない」

生者の営み……………！

「わたし達が、その前に死ぬと言うのですかっ！」

「ああ。今、この場でな。周りを見ってみろ」

「周り？……………！」

わたしの周りには、たくさんのリフレクターが張られていた。

「御苦労、バリヤード」

わたしが話し込んでいる間に、わたしの周りをリフレクターで囲むように張っていた訳ですね。

「別れの時だ……………サイケこうせん！！」

時間差で放たれる計六本のサイケこうせん。リフレクターによって跳ね返り、六本同時に多方向から襲い掛かる。

翼を広げ、飛ぼうとするが、

「駄目！間に合わ……………」

六本分の爆発音が鳴り響く。

「フフフ……」

ゲントウが笑う。

「おそらく、もう準備は出来ているだろう。ソーナンス、戻れ！」
今まで警察隊を食い止めていたソーナンスを戻すゲントウ。

「ふん。もうここには用は無い。にしても、彼も酔狂な奴だな」

「美空達を死なない程度に痛め付けてくれ」

それが光就の願いだった。

「ほう、何故だ。自分の萌えもんを傷付けてくれなんて、穏やかじゃないな」

「あいつらは、ロケット団を舐めて掛かっている。奢りは油断を招き、油断は死を招く」

「なるほど……。良いだろう。だから、お前は……」

「善処しよう」

向こうから爆発音が聞こえる。

「ふっ、あっちも終わったようだな。ユンゲラー！」

「はっ！テレポート！！」

ゲントウは、自分の萌えもん共々、何処かに消えていった。

「さて……。ここだな」

私の前に立ち塞がる、厚い鉄の扉。

「確か、ここに……」

ダイヤルを見つける。

「これが。95244645……これで良いな。よし、開け！」
静かに開く、鉄の扉。その中から現れたのは……。

「侵入者発見！侵入者発見！」

「DELETE！DELETE！」

大量のポリゴン……。いや、それを象ったロボットだった。

「随分と熱烈な歓迎だな……。応え甲斐がある！」

精神刀・残月を抜き払う。

その頭の中には、ゲントウとの交渉の時の回想があった。

「ほう、そんな物があるのか」

睡眠カプセルの中はそう居心地が悪いわけではなかった。

「ああ、それを取ってきて欲しいのだ。お前にしか、出来ん事だ」

「ふっ、光栄だ……。しかし、この基地を売ってでも、あんな物が欲しいのか？」

「お互いの為にも、無用な詮索はするべきでないと思うが？」

確かにな。

「馬鹿を言ったな。忘れてくれ。私もお前も、自分の目的さえ果たせれば良い」

「そうだな。ならば、我らの目的達成の為、一つ教えてやる」
ゲントウが姿勢を整える。

「あそこには、自分のテリトリーを侵した者を、数で以って排除しようとする奴らが居る。彼等を統率する者はおらず、全個体が、ただ侵入者を排除する為に動くように作られている」

「ほう、厄介だな。司令塔が居ないという事は、それを倒せば良いという単純な問題にならないからな」

すつと目を閉じる。

「まあいいさ。私には関係ない」

「お前らしい言葉よ」

「バシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユ!!」

一斉に放たれる光線の発射音が私を現在に引き戻す。

「シグナルビームとは……。エスパー・あくの私は四倍。仕方が無い。面倒だが、一つ一つ捌いていくしかないか」

残月の刀身が、紫に光る。

「サイコカッター!!」

シグナルビームに襲い掛かり、相殺する。

その間に、私は奴らの懐に入り込み、

「つじぎり!!」

素早い動きで斬り捨てる。

そうしていると、

「バシユバシユバシユバシユバシユバシユ!!」

シグナルビームが飛び交い、

「サイコカッター!!」

それらを相殺し、

「つじぎり!!」

量産ポリゴン達を斬り捨てる。

それらの繰り返し。だが、そうなると不利なのは……。

「くっ、PPPが……」

何百という量産ポリゴンと、一つしか体のない私では、私の方が遙かに不利。

「これでもう最後か……つじぎり!!」

ロケット団の秘密倉庫に続くこの回廊を、まだ半分も行っていない。なのに、私は優れた攻撃技のPPPを切らしてしまう。

「くっ、あとは集団戦に不向きなサイコキネシスサイコカッターとみが変わるか……」

私は追い詰められたのかもしれない。

(まあ、仕方あるまい。少々不安だが、左手を使うか)

シグナルビームを相殺し、左手にサイコパワーを集中させる。

「サイコキネシス!!」

強力な念力波を放つ。だが、私は特攻派ではない。だから、これで奴らを一撃で倒す事は、なかなか難しい。

そして……。

「ぐあっ!ば、馬鹿な……!!」

多少の焦りがあったのか、シグナルビームを何本か相殺出来なか

ったようだ。威力は薄れているとは言え、むしタイプのシグナルビームは私にとつては致命傷だ。

「おのれ……。しかも混乱とは運の悪い事よな……」

目の前がグルグルと回り、奴らをつまぐ捉える事が出来ない。

「バシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユ！！」

シグナルビームの弾幕が放たれる。

「くっ、サイコカッター！！」

だが、なんとかして放ったサイコカッターはシグナルビームへは向かわなかった。

「し、しまった……」

発射元を破壊したとしても、既に放たれた物には関係しない。

「うおおおおおおお！！」

残月を楯にするが、もはや、意味は無い。シグナルビームがぶつかり合い、爆発する。

「ぐあああああっ！！」

四倍の攻撃をまともに食らう。

「私と……した事が……」

みがわりを使えば良かった。無理に相殺しようとしたからこうなった。認識が甘かったな……。

「バシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユ！！」

再び、シグナルビームの弾幕が張られる。

「くっ、次食らえばやられる！だが……」

混乱はまだ解けない。みがわりを使うにも、その為の体力が残っていない。

「万事……休すか……」

残月を下ろす。ふっ、参ったな……。こんな所で死ぬ事になるとは……。

（母上……お許し下さい。私はあなたとの約束を破らなくてはなりません。いつか、父上と共に帰るといふ約束を……）

すっと目を閉じる。すると、

「諦めるのか？らしくないな」

不意に、凜とした声が聞こえ、赤い影が現れる。

「シグナルビーム……か。りゅうのいかり!!」

彼女の腕より放たれる炎は、シグナルビームを燃やし尽くす。

「無事だったか……瀬奈！」

「一瞬、死の淵を彷徨ったがな。それに、死に損なったのは、お前も同じだろうが」

「ククク……それもそうだな」

「へっ、なら追加だ。死に損ないは四人いるぜ！」

炎が走り、後ろにいた量産ポリゴン達を吹き飛ばす。

「龍宗も生きていたか……」

そこには相棒がいた。

「ふっ、相変わらずお粗末な攻撃だな」

「うわあ、ひどっ！それが命の恩人に対する態度なのかよ！」

「救援は感謝するが、お主は命の恩人ではないだろう」

「ふふふ、私より先に来ていたらなれてたな」

「くっ、また空気かよ……」

そんな事を言い合っている時、そよ風が吹いた。そして、次の瞬間、白い羽が舞った。それらは量産ポリゴン達の目を眩まし、

「かえんほうしゃ!!」

橙の炎がそれらを焼き尽くす。

「光就さん！大丈夫ですか？」

居るだけでその場の空気が澄んでいくような、癒しのオーラに包まれた少女。そして、その姿には似つかわしくない強さ。間違いない。

「美空！生きていたか！」

「わたしなんかより自分の心配をして下さいですっ！まあ、無事で良かったです……」

「ふっ……」

一同、ほんわかした空気が流れる。だが……、

「バシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユ！」

量産ポリゴン達のシグナルビームの発射音がそれを振り払った。

「光就。もうお前が立ち止まる必要は無い。りゅうのいかり！」

紺色の炎がシグナルビームを焼き尽くし、

「へっ、死ぬ覚悟はできてっか？ドラゴンクロー！」

紅蓮の炎の爪が活路を開き、

「わたし達の道を阻む人達は灰燼かいじんに帰して下さいっ！かえんほうし

や！！！」

橙色の炎が私の花道を作る。

(三つの炎……。まさに中二病だな。まあ、嫌いじゃないがな)

残月を握り直し、走る。

「さあ、参りましょう！」

いつの間にか戻ってきた美空。

「ああ、頼むぞ」

彼女の背に乗る。

「ブレイブバード！！！」

ひこうタイプ最強技の高速突進を移動手段として使う。

「……止まれ美空！」

「はいっ！」

回廊は抜けたようだ。目の前に鉄の扉が広がる。

「ここが秘密倉庫か……」

「中に何が入ってるんだろ」

美空が扉を開けようとす。

「美空！不用意にこういう場所の物に触るな！」

「はっつ！ごめんなさい……」

「まったく……。一つ貰うぞ」

美空の羽を抜く。

「ひゃん！何するんですかあ！わたし、人から羽を抜かれた事なんて初めてですよ！」

「すまんすまん。だが、こいつで確かめたい事があるのだ」

そう言い、泣き顔の美空を適当にあしらうと、羽を飛ばす。

羽はフワフワと宙を舞い、扉の取っ手に向かう。そして、そこにたどり着いた瞬間！

「やはりな」

白い羽は黒焦げになった。取っ手に高圧電流が流れていたのだ。

「もし、さつき私が止めていなかったら、お主は感電死だな。だから言っただろう？不注意に触れるなと」

「はうう……恐ろしげですね」

ぶるぶると身を震わす美空。

「だが、これなら問題あるまい。サイコネシス！！」

念力を使い、扉を開ける。

「おお！さすがですう」

美空が歡喜する。

（やれやれ、長かったな……。だが、これで終わりだ）

秘密倉庫の中にあったのは、一つのファイルとフロッピーディスクだった。

「あれれ？ロケット団の秘密倉庫だから、金銀財宝がザックザクだと思っただのに……」

と美空は残念がったが、彼らが組織を裏切つてまで手に入れようとしている姿を見ると、金銀財宝なんぞよりも、よほど彼らにとつて価値のある品物なのだろう。

「ふっ、用は済んだ。爆発に巻き込まれる前に、ここを出るぞ」

「はいっ！」

そして、ニビシティに直下型地震が起きたのは、その三十分後の事だった。

「これが、あの秘密倉庫にあった物か……御苦労。浅井光就」

見つけたファイルとフロッピーディスクをゲントウに渡す。ここ

は、ニビ科学博物館の裏庭。

「お約束でしたね。貴方のお父上の事をお話しましょう」
グレイが口を開く。

そう私が彼らと交わした交渉。それは、ロケット団の秘密倉庫にある物を取って来る代わりに、父上の事を教えるというもの。

「まず、貴方のお父上は生きています。取り敢えず、それは間違いございません」

「その根拠は？」

「でたらめを言われては敵わん。」

「私は、何度も貴方のお父上にお会いしています。ニビに来る前日も、お会いしましたよ」

何だと……。

「父上はロケット団なのか!？」

「平たく言えばそうなりますね。もちろん何らかの事情があると思いますが」

グレイは咳ばらいする。

「単刀直入に申しませう。貴方のお父上、浅井光秀はロケット五幹部の一人です」

「何!？父上がロケット五幹部だと……!」

「この際です。ロケット五幹部の説明をしておきましょう。ロケット五幹部とは、ロケット団の中でも、知勇共に秀で、そして、優れた特殊能力を持つ者達が選ばれます。まあ、例外もいますが……貴方には関係ない事でしたね。五幹部の地位はかなり高く、その称号を得た我らは、サカキ様の次くらいの権威を振るえます。まあ、それほど超能力者は重宝されているということですよ」

グレイは長々と喋り続けた。

「話が逸れましたね……。ですが、今までの流れから、貴方なら私が言いたい事が何となく解るのでは？」

確かに。認めたくはないが。

「父上は戻って来ないと言いたいのか？確かに、そんなに高い地位

に居て、さらに十年以上前の事なら、昔の家族など、もう気にして
いないと言う訳か。その可能性は高い。たがな、約束してしまった
んだ。父上と共に帰るとな。だから、すんなり、はいそうですねかと
引き下がる訳にはいかん。この精神刀・残月で目を覚まさせるまで
だ」

私は残月を翳し、高らかに宣言する。

「フフフ……、お前らしい言葉だな」

「とにかく、私達に出来る事はここまでです。後は貴方がどうする
かですね」

「そうだな。ふつ、お前たちには世話になったな。今の内に感謝し
ておこう。また敵に戻ったら出来ないからな」

手を合わせ、お辞儀をする。

「お役に立てて、光栄です」

「なかなか面白い時間だったぞ」

そう言い残し、彼らは去って行った。結局彼らの目的は分からず
じま이었다な……。

「まあ、良いか。ロケット団と戦い続けていれば、いずれ分かる時
が来るだろう」

そう思い、私は4番道路に向かう。しばらくこの町には戻れない
な。マスコミの取材がうるさそうだから。

暖かなそよ風が舞う。今日も平和だな……。

漆黒を纏う男は、静かに歩む。

「ん？ちよつと待て！終わるのはまだ早い！」

「どうしました？」

「どうしました？ではない。お前達は私の場面の時、私を助けてく
れたが、その前の部分でやられていたよな。どうなっているのだ」

「ああ、その事ですか。えーつとよく覚えてないんですが、誰かが

回復の薬を使ってくれたんです。そして、光就さんがあそこに居る事も教えてもらったんです」

「……誰だ？ゲントウかグレイがやったのか？まあいい。とにかく全員無事で良かった。で、お前達はロケット団の事をどう思う？」

「わたしは、何度やられても関係ありません。光就さんと一緒に居たいだけです」

「そうか」

何となく安心した。

「龍宗さんは最強を目指すのに敗北はつきものと言っていましたし、瀬奈さんも負けは慣れている気にしてないと言っていましたよ？」

ふっ、結局、全員懲りてない訳か……。

「そんな柔な人達じゃありませんよ。みんな、光就さんの付き人なのでから」

美空はそう言うと、私の手を取る。

「さあ、立ち止まる時間が惜しいですよ。行きましょう！」

白雪の様な手に導かれ、私達は4番道路を駆ける。

「えへへ……、風が気持ちいいですよ」

彼女の嬉しそうな顔に、こちらまで顔が緩んでくる。

……これからも戦いは熾烈を極めるだろう。だが、今は訪れた平和の時を楽しもう。

「ずっと居てくれるか？美空」

「いやですね、急に改まって。当たり前じゃないですかっ！」

うふふと笑う美空。

「ふっ、確かに」

私も微笑する。

こうして、ニビを舞台にした戦いは終幕を迎えた……。

第九話に続く

第八話後編：目的の為に（解き明かされる謎）（後書き）

第九話は八月十日投稿予定。

やっどギヤ・・・ゴホン。ほんわか空気に戻れるから、出来なかつた事が出来る！やったーっ！！

第九話：ですういんぐ（調和も混沌も私には関係ない！）（前書き）

タイトルの通り、今回はかなりカオスです。

飛ばしても意味は通りますので、嫌な予感がした方は、戻る推奨。

カオスに耐えられる自信がある方は、どうぞお進み下さい。

第九話：ですういんぐ（調和も混沌も私には関係ない！）

我らは、お月見山の湖。そう、瀬奈の故郷に向かっている。

「こつちだ。まだまだ歩くぞ」

瀬奈の導きにより、迷わずには行けるのだが、

「なかなか険しい道のりなんですね……」

「ぐっ、いい修業じゃねえか！」

山を登り、洞窟に潜り、崖を越え、森を抜ける。

野生の萌えもんも襲ってくる。

「本来なら、戦う必要など無いがこれも修業だし、なにより平坦な道ではつまらんだろう？」

瀬奈はふふつと笑い、襲い掛かるズバット達を捌きながら言う。

「それもそうだな」

だが、残月は抜かない。私が戦う舞台じゃないからな。

「龍宗、私からの手土産だ」

「わっ！大変な時に限ってよこしてくんじゃねえ！」

「美空、これが私の挨拶だ！」

「てか光就さん、わざとやってますよね！」

サイコキネシスで敵を張り付けにして、苦戦気味の方に放る。

「何遊んでいる。早くしろ」

張り付けにしている量を消化出来ていない。

「ちっ、わかったよ。ドラゴン……」

「最強技など使つな。この程度の敵なら、メタルクローで十分だ。もっと集中しろ」

「ちようおんぱをくら……あうゝ頭がぐるぐるしますよお」

「みねうち！これで良いだろ」

「ひどいですう〜！」

こんな事をやっている間にズバット達は増えていく。

「ちっ、不甲斐ない奴らだ。結局私が戦う羽目になるのか！」

残月を抜き払う。

「十分の一サイコカッター！」

威力を弱めたサイコカッターを放つ。倒してしまっただけは、意味が無い。

「つばさでうつ！」

「メタルクロー！」

私が弱らせ、やっと殲滅を完了する。

「遅い！龍宗はともかく、美空、お前まであの体たらくは何だ！普段使っている技に、どれ程偏りがあるかよく分かるな！」

「うつ……」

美空はうなだれる。

「龍宗、お前は基礎が出来ていないぞ！今まではドラゴンクローの威力でごまかせたが、次は通用せんぞ！ひっかくをマスターしておけ。話はそれからだ」

「ぐっ！わ、わかった……」

龍宗もまた、地に手を付ける。

「き、厳しいものだな……」

「海竜王様。恐れ多いですが、貴方の動きにも問題がありますよ」

「み、光就。その海竜王様というのは止めてくれ。何か……恥ずかしい……」

瀬奈が顔を赤くして俯く。

「……敵の攻撃を受け流し、相手を攻撃するというのは、集団戦ではやめた方がよい。同時多発の攻撃を全部受け流すなんて、名人でもそう出来る事じゃない」

「なるほど、解った。後……ずっとその言葉遣いで頼む。さっきの言葉遣いでは、私達の間には壁ができたようで嫌なんだ」

平然と、そんな事を言ったが、後になって言った事の意味が分かっただけらしい。

「あっ！か、勘違いするな！わ、私は単に、一緒に戦った友として、身分的な物の為によそよそしくなって欲しくないだけだ！」

顔の紅潮が尋常ではない。クーツン少女がデレた瞬間ですね分かります。

「な、何ニヤニヤしているのだ！おのれ……この海風瀬奈を愚弄しておつて！りゅうのいかり！！」

腕から、紺色の炎を放つ。それを私は躲す。

「おやおや、これは何とも熱烈な愛情表現だな」

「だ、黙れ！私をたぶらかそうと二度と思えぬ様にしてやる！」

更に顔を赤らめ、腕に力を溜める瀬奈。なるほど、釘宮理恵が人気が分かった気がする。ツンデレかわいいよツンデレ……。

「逃げた方が良さそうだな……。ククク、果たしてお前は追いつけるかな？」

「待て！逃がさんぞ！」

そうやって、瀬奈と戯れている様子を見ている美空達。

「仲……良いですね、あの二人」

「ああ、やっぱり似た者同士だからかねえ」

「似た者……同士……」

「ああ、冷めていて……ひい！」

「そうですか似た者同士ですか。うふふふ……」

「目が笑ってねえよ！怖いよ！」

「わたしは、光就さんと会ってからというもの、一度も他の男に、目移りした事無いのに、（本当はそんな出会いが無かったただけですけど）貴方という人は……」

「み、美空？」

「うふふふ……。光就さんは、私だけを見てくれるんですよ。他の人と、鬼ごっこするなんて、光就さんじゃないですね。光就さんのイメージ汚さんと画策する、偽物なんですよ〜 ブレイブバード DEATHう……！！」

「光就〜！！そつちの世界から戻れ！美空がヤンデレたぞ！」

「むっ……？」

狂気を孕んだ表情で突っ込んで来る美空。

「うおつ！何をするのだ、冗談が過ぎるぞ！」

美空はクスクスと笑い、

「うふふふ……わたしはいつでも本気です。光就さんの姿でわたし達を騙そうとする偽物さんを成敗するんですよ」

「何だと!？」

瀬奈が驚嘆の声を挙げる。そうだ、この変な空気に突っ込み！

「私は、騙されてたのか！」

洗脳されるな——！

「た、龍宗！お主は私の事を、助けてくれるな！事実上、私の最初の相棒だからな！」

「……あんた、前に言ったよな。『生き物は死骸の山に立ちながら生きていく』ってよ。それは、自分が生きる為には他者を蹴落とさなきゃいけないってことだろ？」

そんな事言ったかな……。

「美空や水タイプの瀬奈が相手じゃあ、俺に勝ち目はねえ。だが、あんたならばまだ倒せる。刀さえ抜かせなければなあ！俺様が生きる為には、あんたには死骸の山の一部分になってもらうぜ！せめて葬式は出してやるから、大人しく死んでくれ！」

ドラゴンクローを出す龍宗。

「ククク……フハハハハ……！謀反か！本能寺の変か！……この光就に抗うなど無価値！全員残らず残月の錆にしてくれるわ！」

と粹がつてみたが、時勢の流れはどうしようも無かった。

「人の栄華など、一炊の夢……ならば、せめて幸せな夢を見せて欲しかった……」

この言葉を最後に、霸王・浅井光就は事切れた。

そして、その後、神風美空、紅蓮龍宗、海風瀬奈の三人は、戦国に覇を唱え、長きに渡った乱世は終焉を迎えた……。

瀬奈「しかし、これで本当に良かったのだろうか……、浅井光就は確かに、混沌を招く存在だった。だが、百年……いや、千年に一度出てくるか出てこないかの大人物でもあった。私達は、とんでもな

い罪を犯してしまつたのかもな」

龍宗「へっ、上等だ！なら、俺達がこの天下を、あいつが作るうとした天下よりも良くして、未来の奴らに俺達の事を認めさせりゃあいいんだよ」

美空「今、わたし達がしなければならぬ事、それは光就さんから奪い取つたこの天下をもつともつと豊かにする事ですっ！それが、わたし達の償いなんです……」

三人は夕焼けを見つめていた。沈まぬ日は無い。自分達もいずれは光就と同じ運命を辿る。だからその前に天下を良くする。そうでなければ……、

美空「光就さんに顔向け、出来ませんからねっ！」

そうして、彼女達は、泰平二百五十年の礎を築くのだつた……。

「何故……こんな事に……なつてしまつたのだらうか……？」

B A D E N D (光就主観的に)

「グギユグバア……！」

時が……戻つた……？ここは何処だ？

「着いたぞ。ここが私の故郷。朧月湖だ」
ろうげつ

「ほら、着きましたよ。いい加減起きて下さいよ」

美空の声が響く。その声で、私は意識を現実に戻す。

「でも、あんな所にさいみんじゅつ継承ズバットがいるなんて、油断大敵ですね」

頷きながら語る美空。ふっ、なんだそういう事か。妙にリアルな夢だったから、現実と思つてしまつたではないか。まあ、それもそつだな。ヤンデレ美空も、あの力オスな展開も、最後のディアルガ

様の咆哮も全部夢オチだったのですね分かります。

「DEATHう〜」

……………夢の反動は予想以上に大きそうだ。

「瀬奈、聞きたいことが……………ろうげつつて何だ？」

龍宗が質問する。よし！ 奴には珍しい、空気を読んでいる質問だな。これでこの変な雰囲気晴れるだろう！

「朧月とは、ほのかに霞んだ月の事だ。一般的には、おぼろづきと言うな」

瀬奈の返答は、実能的を射た物ではあったが、彼の頭に合わせた言葉を選んでいないのが残念だ。

難しい顔で、何とか瀬奈の言葉を理解しようとしている龍宗に、
「要するに、ぼんやりとしている月の事ですよ」

美空が分かりやすい言葉で説明し直す。そうすると、龍宗も合点がいった様だ。

「なるほど、そういう事か！」
ぼんと掌を叩く。

「普段は、霧に覆われているのだが、一年に一度霧が晴れる期間があつてな。その時に、私が湖を出ていくのが重なってしまったようだな」

なるほど、だから朧月なのか。しかし……………、

「瀬奈、お主は近い内にそうなると知っていたのだろうか？ なのに、何故、この湖を出て行ったのだ」

……………」

俯き、沈黙を守る瀬奈。

「言いたくない事情があるなら、言わなくても構わない。単に余計な興味を持っただけだからな」

「いや、そう言うわけではないのだが……………」
また口をつぐむ。

「これを聞いて、変な奴だと思わないでくれ……………天の声が聞こえたんだ。『今、行け』と」

「天の声……か。確かに常識を逸脱している」

これが言えなかつた理由か。

「恥ずかしいが、こうとしか表現出来ん。……変な事を言ってますまない。やっぱり、忘れてくれ」

むっ、何だろう？喋り方に少し違和感を覚えたな。……何か隠しているのか？

「さ、さあ、私の家に案内してやる。ついて来てくれ」

思案顔の私に、焦りを感じたのか慌てて先導する。

(やはり、何か隠し事をしているな)

私はそう確信した。

だが、彼女からそれを引き出すのは至難の業だろう。

たった三日程度しか付き合っていない我らでさえ、瀬奈が、かなりのいじっぱりであることが容易に判断出来る。

しかも、激情家だ。安易にそういう場所に触れると思わぬしっぺ返しを食らうかもしれない。

……結局、彼女が自分から打ち明けるのを待つしかないようだ。

そう自分の思案にけりを付けると、瀬奈の家が目の前にあった。

ふっ、また悪い癖が出てしまったようだ。

「ここが私の家だ。ん、どうされた、美空殿？」

「い、いえ、意外とさっぱりしてるな……って思ったんです」

確かに。海竜王と言っただからもう少し豪華なものを想像していたのだが、まあ、彼女の気概には合ってる感じがする。

「あまり家には帰らないんでな。家具も質素だ、だが、客をもてなす事ぐらいは出来るはず。さあ、遠慮せずに入ってくれ」

美空は家に入るなり、

「ありやりや、ほんとに何も無いや。わたし達の隠れ家よりも酷いかも……」

などと言い放った。

「美空、それが家に上げてもらった者の言う事なのか？」

私は説教する。

「あつ！ついうっかり……、ごめんなさい」
謝る美空に瀬奈は、

「い、いや、何も無いのは本当の事だし、別に気にしませんよ」
と何故か敬語で話す。

「……何で敬語なんです？光就さんには普通なのに」
美空が柳眉を逆立てて、問い掛ける。

「いや、何でと言われても……、何となく、あなたに敬語を使いたくなるんですよ」

瀬奈は、頭を掻いて言う。

「だから、その何となくってなんですかあ！？」

「美空、やめておけ。お前の気品が原因なのだ。気品も度が過ぎると人を平伏させる力になるぞ。気品も分からん馬鹿なら別だが」
そう言い、龍宗を見る。

「な、なんで俺を見るんだよ！俺だって気品くらい分かるさ！」

「お前は、美空の事を呼び捨ててるだろう」

ここで私は一呼吸置き、次の言葉を強調する。

「いいか、龍宗。美空を呼び捨てて良いのは私だけだ！」

「はうう！？」

美空の顔が一気に赤く染まる。

「そ、そそそれってどういう意味でしゅか！？はう……」

「どういう意味って、そのままの意味に決まっているではないか、美空。お主を呼び捨てれるのは、私だけという意味だ。美空」

「は……はうう……」

ポーツと顔を赤らめ、向こうの世界に意識が飛んでいる。ふっ、相変わらず可愛い奴め。さて、とどめといくか。

「だが、美空。お前が、私を呼び捨てる事は許さん」

「？」

「『あなた』と呼べ」

ふっ……。

「は……う……」

赤い顔のまま、パタリと倒れる美空。その表情は今生に満足したかの様だった。

……また力オスになったな。

「で、結局どうなったのだ」

自分の呼ばれ方に美空がケチをつけたせいでこうなった為、かなり譲らせた。

「俺は、師匠って呼ぶ事になったぜ！」

「私は美空殿……と」

「し、師匠とか殿なんて恥ずかしいですよ。うう、普通に美空で良いのに……」

「お前の事を呼び捨てて良いのは私だけだ。忘れるな」

「それ本気だったのかよ……」

とまあ、こんな感じで議論も終了し、腹も減ったことだし、夕食を皆で食べた。

確かに、皆で食べた夕食は美味かったし、楽しかった。だが、私は心の底から楽しめてなかった。それは、瀬奈も美空ももしかしたら、龍宗も同じだろう。

あの事が引っ掛かっていた。

瀬奈よ。いつまで、我らとの間に壁を作っている気だ。

第十話に続く

第九話：ですういんぐ（調和も混沌も私には関係ない！）（後書き）

お疲れ様でした。第十話は二十四日に投稿……出来ると良いなあ。
あと、次はこんなにカオスじゃないですよ。

第十話：赤と青のメヌエット（二度目の覚醒）（前書き）

まず最初に、私は読者の皆様に謝らなければなりません。

第八話後編で龍宗を進化させちゃいましたけど、あれ無しです。今話で進化します。

言い訳としては、やっぱり、御三家の進化ですし、あんなにあっさりとしちゃいけないという事と、瀬奈に与えるインパクトという意味でも、ここで派手に進化させる事にしました。ごめんなさい。

第十話：赤と青のメヌエット（二度目の覚醒）

これは、瀬奈がポリゴン2のセリアに倒されてから、秘密倉庫で光就と合流するまでの間にあった出来事の回想である。

「ここは、ニビ地下基地司令室。そこに瀬奈はうずくまっていた。うう……」

目を覚ます瀬奈。

「……意外と傷付いてないな。体が痺れてるから、動けんが」
体が痺れて動けない瀬奈を見、

「あはははっ、随分と哀れな格好じゃないですか。海竜王様」
高らかに笑っている少女がそこにいた。

ゆつたりとした青いドレスで、白薔薇の様に白い肌を包み、サファイアの碧眼を持った少女。普通ならば、美人の部類に入るのだろうが、彼女はいやらしい笑みを浮かべていて、それを台なしにしている。

「何者だ！貴様もロケット団の仲間か！」
体の痺れが切れ、叫びながら、立ち上がる瀬奈。
「私をあんな無粋な輩と一緒にしないで下さいます？」

彼女の言葉は柔らかかったが、口調から、かなり怒っている事が分かる。

「ふふふ……まあ、良いわ。自己紹介がまだでしたね」
少女は構え直し、演説するかの様に言った。

「私は、玲奈^{れいな}。キングドラの玲奈。真の海竜王となる者ですわ」
「ふっ、名前まで似せるんだな。最後に『奈』を付けるなんてな」
瀬奈は、負けじと妖しい笑みで言い放った。
すると、玲奈は眉をピクリとさせた。

「あ、あらあら、偽物なんて、言ってくれるじゃありませんの」
明らかに慌てている。

「ふ、ふん！海竜王ならば、口ではなく、力で証明して欲しいものですわ！」

何処から取り出したのか、自分の身長程の杖を握り、戦闘体勢の玲奈。

「結局は、力づくか……。 (大分回復したな) ふ、後悔するなよ！りゅうのいかり！！」

紺色の炎が放たれる。

「単純な攻撃ね……。避けるのは簡単だけど、力の差を見せ付けてあげた方が良さそうね……。ハイドロポンプ！！」

杖の先端の宝玉から、大量の水が発射される。

それらよりりゅうのいかりの炎をたやすく飲み込み、瀬奈に襲い掛かった。

「そ、そんな馬鹿な……。うわあああああ！！」

激しい水流に吹き飛ばされ、壁に勢い良くたたき付けられる。

「ふふつ……。海竜王様も所詮は、口だけなのですな。さあ、渡しなさい。あなたにそのような玩具は必要無いわ」

と、近寄って手を伸ばす玲奈。

「何の……。話だ……。！」

そう瀬奈が言つと、玲奈が明らかに不快感をあらわにする。

「あらあら、とぼける気ですか？でも、私はよろしくてよ。貴女が精神が壊れるのが先か、貴女が逆鱗のペンダントの事を喋るのが先かを賭けるゲームが出来ますからね」

笑顔で恐ろしい事を言った。

だが、それ以前に気になる単語が瀬奈にはあった。

「逆鱗のペンダントとは何だ？」

瀬奈にとっては聞き覚えの無い単語だった。名前からして、ただの装飾品ペンダントという訳ではなさそうだが。

「そんな事、私よりも貴女の方が知って……。え？」

玲奈の目は点になっていた。

「まさか……。貴女、本当に知りませんの！？」

「ああ、そんな物は知らない」
即座に返答する瀬奈。

「嘘……、激流の宝玉よ！真実を示せ！」
杖の宝玉に祈りを込める玲奈。

「くっ、玉が濁らない……どうやら本当のようね」

玲奈は投げ捨てる様に言つと、杖で瀬奈の鳩尾を突いた。

「くっっ！」
吹き飛ばされる。

「ハイドロポンプ！！」

そして、間断無く撃ち込まれるハイドロポンプ。

「うわああああああ！！」
再び壁にたたき付けられる。

起き上がるうとする瀬奈に杖を冷酷に突き付ける玲奈。

「呆れたわ……、貴女みたいな人が海竜王を名乗るなんて」
ふう、と溜息を付くと、

「海竜王の恥ね。死になさい」
杖に、水が集まり始める。

(至近距離であんなのを喰らったら……くっ！)

瀬奈は仰向けに転がる。体勢を崩された状態で出来る回避方法など、この程度で高が知れてるが、それでも抵抗したかった。

「悪あがきはおやめなさい！これ以上恥を重ねないで！」
背中を足で押さえられる。

「まあ、哀れな死に顔を見る必要が無くなって、助かったわ……死になさい！」

ハイドロポンプを放とうと杖を構える玲奈。
転瞬、彼女に空のボトルが投げつけられる。

「痛っ……誰！？」
謎の影は玲奈が怯んだ隙に気絶していた瀬奈を助け出す。

「よかったよかった。君って酷いね。瀕死の人に更に攻撃なんて」
「ふっ、私に説教？何者ですの貴方は？」

玲奈が杖を構え直し、言う。

「僕かい？回復屋さんだよ。瀕死の萌えもんにかいふくのくすりを使ってあげる仕事さ」

謎の男は不敵に笑う。

「ふざけているのですか？私に戯れ言を放つなんて……命知らずもいいところですよ！」

ハイドロポンプを放つ玲奈。

謎の男は慌てずイトケの実をくわえると、なんと素手でそれを受け止めた。

「そ、そんな馬鹿な……、イトケの半減作用があるとはいえ、私のハイドロポンプを素手で……」

「ふふつ、少し傷付いたけどイトケはまだあるし、何より僕は回復屋さんだから、薬は無尽蔵だよ。でも、君はどうかな？」

謎の男はピーピーマックスを飲みながら言った。

「私がかこまでしてやられるなんて……本当に何者ですよ！？」

「僕はただの回復屋さんだよ。瀕死の人にとどめを刺すような残酷な人は許せないけど」

謎の男は眼の光を強くする。それは玲奈の戦意を槍の様に貫く。

「まだ戦い足りないと言うなら、彼女の代わりに僕が相手になっても良いよ？君にとって楽な戦いにはならないと思うけどね」

この言葉が決め手になった。

「う……、し、仕方無いですわ！あ、貴方の顔に免じて、き、今日の所は帰ってあげますわ！ご、御機嫌ようですわ！」

足早に玲奈は去って行った。

「やれやれ……待たせたね」

謎の男は瀨奈にかいふくのくすりを使う。

「ん……、私、生きている？」

瀨奈は、ちゃんと動かせる体を見て、そんな事を言った。

「ふふつ、僕のかいふくのくすりは特別製だからね。戦闘不能級の

傷でも関係ないよ。そんな大袈裟なものじゃなかったけどね」

謎の男は自慢する。

「ありがとう……感謝する」

「まあ、回復屋さんだし、それが仕事だよ。所で、君は彼女に酷く痛め付けられていたね。どうしてだい？言いたくないなら良いけどね。興味持っただけだから」

瀬奈は黙りこくった。

「ああ、そうだ。君の仲間、助けに行かなくて良いのかい？ピンチなりかけなんだよ、彼」

「何！光就は何処に居る！？」

瀬奈は謎の男を問い詰める。

「第三倉庫の先の秘密倉庫……、分かった。あなたには礼を言いつばなしだな。ありがとう。いつか借りを返そう」

瀬奈は走って行った。秘密倉庫に続く回廊へと……。

そして、現在に至る。

食事が終わり、各々好きな事をしている。

美空は湯呑みを持ってゆったりしている。

龍宗は夜のお月見山に修業しにいつている。

瀬奈は外で湖のほとりで月を見上げている。

そして、私は机に肘を付き、物思いに耽っている。

「はふ〜〜落ち着きますう〜〜」

……美空の能天気な声に思考を切断させられた。

「さすが天然水ですう〜。水道水とは訳が違うのですう〜」

とても幸せそうな顔で緑茶を味わう美空。そんな彼女に少し意地悪したくなって……おっといかにいかに！前回はこんな空気から力オスになっていったのだ。今話は力オス回ではない！

「どうしました？」

「な、なんでもない」

危ないものだ……。

しばらく沈黙が続き、

「あの……光就さん」

と、唐突に美空がそれを破る。

「どうした」

「瀬奈さん、元氣無いですよね。今もお月様見て黄昏れてますし、心配です」

美空は湯呑みを置く。中身は既に空だった。

その時、私は閃いた。

「……美空。頼まれて欲しいのだが、良いか？」

「いいですとも！何をすれば良いんです？」

「こいつを瀬奈に渡してくれないか？」

そう言つて、美空に小さい箱を手渡す。

「渡すタイミングはお主に任せるが、これは大切な物だということだけ教えよう」

「はいっ！分かりました」

美空は外へ出ていく。月明かりが照らしていた。

「頼んだぞ……」

やはり、悩みというのは同姓の方が話しやすいだろうし、瀬奈は私に対しては意固地になる。

よつて、必然的に美空以外で、彼女の悩みを聞いてやれる奴はいない。

「だが、私には私なりにやれる事がある」

立ち上がり、夜の帳に消える。

「私も……とんだお節介者になったものだな」

「月よ……答えてくれ。私はどうすれば強くなれるのだ？どうすれ

ば海竜王になれるのだ?」

瀬奈さんはお月様に手を伸ばして言っていました。

「答えましょう」

わたしは言いました。

「なっ!なんだ……美空殿か」

「……もついいや」

わたしは諦めました。

「そんなことより、瀬奈さんは水臭いですね!」

「み、水臭い?湖には入ってないのだが……」

「そういう意味じゃないですよ!悩みがあるならどうして話してくれないんですかっ!」

「あっ……!!」

やっと気づいたようです。

「な、悩みなんて無いさ!」

だけど、瀬奈さんとはばけた。

「嘘ですっ!月を一人でずっと見てるなんて……悩みがあるに決まっています!」

「っ……!あなたに何が出来ると言っただ!」

瀬奈さんは開き直った。

「えっ?あっ、いや、その……」

これには返答に困りました。

「美空殿、困らせる事を言ってますまない。だが、これは私が越えなければいけない壁なんだ。あなた達には……関係ない」

「違います!!」

気がついたら、わたしは声を張り上げていた。

「何でそうやって一人で抱え込むんですかっ!わたし達、仲間じゃないんですか?やっぱり、瀬奈さんはわたし達のこと、仲間と認めてないんですね……」

「すまない……もう私の事は放つといってくれ」

そういうと、瀬奈さんは自分の部屋に閉じこもってしまっ。

「どうしよう……」

わたしはただただ途方に暮れるしかなかった。

「ここに居るのか？」

私は人を訪ねた。だが、生憎留守のようだ。

「やれやれ、何処へ行ってしまったのやら」

夜のお月見山は暗かったし、敵も凶暴だった。でも、だからこそ修業のしがいがあるってもんだ！

襲いかかってくるズバツトやイシツブテを切りさき、焼き払い、どンドン倒していく。

「よっしゃあ！これで百人斬り達成だぜ！」

ひっかく、ひのこ、そして、メタルクロー。これらのPPを全て使い切った。

「あゝあ、また腹減っちゃまった。師匠になんか作ってもらおうか」
ほくほく顔で帰ろうとした途中のことだった。

「んん？」

誰かの気配を感じた。しかも、一人じゃない、何人かいる。

「なんだってんだ？」

真っ暗なせいでよく見えない。
その時だった。

「た、助けてくれ〜！」

助けを求める声が聞こえた。

「おっと！助けを呼ぶ声、それは俺様を呼ぶ声だ！でも、どこから聞こえてきたんだ？」

尻尾の火を頼りに、声がした方向へ歩いていった。すると、そこ

には、見覚えのある黒服と一人のコイキングがいた。

「そろそろ教えてくれよ……月の石は何処にあるんだ？」

「し、知らん！」

「やれやれ、まだ自分が置かれている状況が分からないようだな！ズバット、ちょうおんぱ！」

「ギャアアアアア！」

そして、コイキングがロケット団の拷問にあっていた。

「待ちやがれ！罪も無い一般人を虐げる奴あ、この俺様が許さねえぜ！覚悟しやがれ、悪党共！！」

たんかを切る。決まったぜ！

「なんだあのヒトカゲは？目障りだ。始末しろ、ズバット」

「了解！」

敵のズバットが向かってくる。今までたくさんのズバットを相手にしてきた俺には、軽い相手だ。

「技を使う必要もねえ！この拳だけで十分だぜ！」

体をひねりを効かせ、向かってきたズバットに右手を突き出す。

その衝撃をまともに食らい、ズバットは元の場所へ吹き飛ばされる。もちろん、一撃で気絶だ。

「な、なんだと！」

ロケット団は慌てはじめた。へへっ、ちよろいもんだぜ！

だけだよ。そう簡単にいくはずがねえ。

「くっ！本当はこいつを出したくなかったがな……出てこい、アーボック！」

そいつはハイパーボールに入っていた。もう知ってると思うが、俺達はボールに入られても勝手に出たり入ったりできる。それを中から打ち破ればな。

良いボールほど、その強度が高い。ようするに、あいつは一番良いボールじゃねえと中にくれないうってわけだ。

「……八八八八ッ！長い長い呪縛だった。だが、やっと自由の身だ！」

アーボックはそう言うと、なぜかロケット団の方を向いた。

「ひっ！な、何でしょう？」

「よくも、今まで俺様をこけにしてくれたな。これはお返しだ！」

奴はロケット団の足元に踏み込むと、くるっと一回転した。

「ぎゃああああああ！！」

奴の回し蹴りで吹き飛ばされたロケット団。彼の行方は、誰も知らない。

「はっ！弱いくせに俺様を操ろうなんて百年早いんだよ！さて」

アーボックは俺の方を向く。

「何だよ……」

「随分と立派なたんかを切ってたじゃねえか。だがな……」

台詞を言い終わるか終わらないかの瞬間、奴の体は俺の目の前にあつた。は、速い……！！

「俺様は、弱いくせに正義漢ぶる奴が一番嫌いなんだよ！！」

鳩尾に拳が飛ぶ。

「ぐう……！！」

俺が怯んだ隙を見て、

「死ね！へドロこっげき！！」

どくタイプの上位技が繰り出される。

「くっ、こいつを食らうわけにはいかねえ！」

本能でそれを察知して、何とかかわす。

「ちっ、外したか！」

アーボックは悔しがる。

「今度は俺のターンだ！食らえ！ドラゴンクロー！！」

腕を炎で包み、巨大化させる。

「何！ドラゴンクローだと！」

腕を振り回す。しかし、それはむなしく空を切った。

「はっ！最初は驚いたが、鈍臭い攻撃だ。折角の上位技も形無しだな！」

回し蹴りを浴びせられ、壁に叩きつけられる。

「ち……畜生っ!!」

「これで終わりだ……へドロこうげき!!」

「ま、待ってくれ!」

声を張り上げた奴がいた。俺が助けたコイキングのものだった。

「お前達の言うことを聞く!月の石の在りかを教える!だからもうその辺してやってくれ!頼む!」

そのコイキングは土下座をあんな奴に向かってしている。くそ!俺のせいなのか!

「はっ!笑わせんなよ爺さん。月の石なんてもんを欲しがってたのはあいつだけだ。この俺様を物で釣ろうなんて意地汚ねえ野郎だ。そんな事、二度とできねえようにしてやる!」

そう言い、コイキングに飛び掛かるうとしたアーボックの足を、思い切り引っ張った。

「……貴様あ!!」

俺の手を簡単に振り払うと、奴は俺を蹴り上げた。

「そんなに死にたいなら今、楽にしてやる!へドロこうげき!!」

猛毒のへドロが大量に吐き出される。もうだめだと思った時、炎が俺を包んだ。ドラゴンクローを出す時の炎。化える炎。師匠の炎が。

「ぐっ、なんだ!」

アーボックは炎に目がくらんでいた。その時、

「な、なんだ……この感覚は、体が変わっていく……!」
進化が始まった。

「力がみなぎってくる……これなら!」

炎が消えていくその瞬間、

「ドラゴンクロー!!」

最強技を放つ。目がくらんでいたアーボックにそれをかわす術はなく、この強烈な二撃を甘んじて受けた。しかも、ヒトカゲのではない。

「ぐおおおお、バカな……!こんな時に進化だと!!」

アーボックは一度倒れかけた。だが……、

「ぐおおおお……はあはあ……何とか耐えた……ぞ」
くっ、だめなのか……。

「おのれ！貴様だけは許さん！俺様の最強技で骨の髄まで溶けて無くなれ！ダストシユート！」

「もうだめだ！」と死を覚悟した時、また、見覚えのある黒服が現れた。今度のは、前の黒服とは戦闘力も波動も違う。そいつが俺を突き飛ばした。

「光就！危ねえ！！」

だが、その声むなく、ダストシユートに飲み込まれる光就。

「何だあいつは？いきなり現れてやられちまった」

アーボックがそう言った時、

「誰がだ？」

アーボックの首筋に刃を当て、ささやく光就が現れた。

「龍宗、よくやった。まさかお前が美空ランクの敵をここまで追い詰めるとは、思ってもいなかったぞ」

光就は普段よりも柔らかな口調でこう言った。

「へ……へへっ！当然だ！」

「まあ、私が来なければ死んでいたがな」

ちえっ！相変わらず、素直じゃねえ奴だ！

「さて、仲間が世話になったな、アーボック。礼はきっちりさせて頂こう……！」

奴も、光就の力量がどれほどか分かったらしく、

「ひっ、ひいい！ご遠慮します……！！」

と、逃げ出したが、もう遅い。

「これが私の挨拶だ……。サイコカッター……！」

「ギヤアアアアア……！」

念力の刃による爆発で、奴は星となった。

「さすがだ！やっぱ光就には敵わねえな！」

「ふっ……」

「さあ！瀬奈の所に行こうぜ！」

光就は俺が助けたコイキングをちらつと見ると、

「時は満ちた。いいですとも！」

と答えた。

「よし！待ってるよ瀬奈！」

「うん、うん」

我らが戻ると、唸っている美空を見る事が出来た。

「何をしているのだ、美空」

「あっ！光就さん……わたし、どうしたらいいんでしょうか？瀬奈さん、閉じこもっちゃったんですよ」

美空がわたたと言った。

「ふっ、龍宗。お前の出番だな」

私の背中に隠れていた龍宗が現れる。

「あっ、龍宗さん進化したんですねっ！すごいすごい！お赤飯炊かなきゃ！」

「へへっ！そりゃ楽しみだ！じゃあ、その前に行つてくるぜ！」

そう言い、龍宗は瀬奈の部屋の方に行った。私は、成功に確信を持って、彼を見送った。

「美空よ。奴はな、最初から知っていたのだ。瀬奈が何に悩んでいたのかをな」

「えっ？そうだったんだ……、むう、龍宗さんは意地悪ですよっ！知ってたなら、教えてくれれば良かったのに」

美空はそう言い、頬を膨らました。

「ふっ、私も最初はそう思った。だが、理由を聞いて納得した」

向こうから、二つの赤い影が歩いてくる。説得に成功したようだ。当然の結果だ。

「『ライバルとして励ますのが瀬奈のプライドを一番傷つけねえか

らだ』との事だ。私は感服した。お前もだろう？」

「はい。確かにそれじゃあ、わたし達には無理ですよ」

そして、瀬奈は私の所に走り寄り、頭を下げた。

「光就！お前を……主と呼ばせてくれ！」

そう言いながら。

「良いのか？海竜王たる者が、人間如きの傘下に入ってしまった」

「構わない。奴を……玲奈を負かさなければ、私は海竜王を名乗れない」

「……分かった」

私は腰のモンスターボールを瀬奈に投げた。赤い閃光が彼女を包み、飲み込んだ。

ボールは、暫しカタカタ鳴ったが、やがて、中央の赤ランプが消えた。保護完了の合図だ。

「出て来い、瀬奈！」

彼女のボールから赤い閃光が飛び出し、その中から瀬奈が降り立つ。

「再び、名乗りを上げよう」

（よし！今なら……いや、もう要りませんね）

そつと箱を戻す美空。

その箱の中身はふしぎなあめ。

「私は海風瀬奈……ギャラドスの瀬奈だ！」

第十一話に続く。

第十話：赤と青のメヌエット（二度目の覚醒）（後書き）

第十一話は三十一日投稿予定だ。

私はギャラドスになり、お月見山を抜ける。

次回はハナダシテイが舞台。難関と言われるハナダジムに挑戦する
のか？それとも……？

第十一話、乞御期待！！

つて、べ、別に見てくれなくても寂しくないからな！！（by海風
瀬奈）

第十話 THE AFTER (前書き)

あえてTHE AFTER使います。瀬奈の強い決心を感じてくだ
さい。

第十話 THE AFTER

かつて……私はこの狭い空間から出たがった。

そして、一週間前にここを抜け出し、その三日後に光就に出会った。

光就は、三日間の空腹に耐え切れず、彼らの弁当を盗み食いするという蛮行に及んだ私を許した。

そして、ニビ地下基地の戦いでは、私を的確に導き、りゅうのいかりを覚えさせてくれた。

この光就への恩は、一回ピンチを救ったくらいでは返し切れん。私もまた、光就の道に同伴し、助けたい。

光就は拒まなかった。
嬉しかった。

もはや、あの時の様な悔いは無い。光就の為ならば、この身を賭せる。その価値がある。

光就……主！この瀬奈が身命、あなたに捧げよう……！
だからあなたは……、

「どうした？瀬奈」
突然の不意打ち。

「なっ！ななな何だ光就か」
「何を思っていたのだ？やはり、いざ故郷を出るとなると物悲しいか？」

「い、いや、違う。これからの事についてだ」

「そうか」

主はこれだけを言い、私に背を向けた。
「瀬奈よ。お前もまた、重き運命を背負ってしまったようだな」
重き運命……海竜王の事か？

「確かに。だが、それが私の血に流れる誇りだ」
「そうか。野暮な事を聞いたな」

そう言うと主は、私の方を向いた。

「では行こう。重き運命を負った者同士……な」

「……ああ！」

お月見山を背に、私は走る。再びここに戻る時、それは海竜王の面目を取り戻した時。そして、主を……頂点に上り詰めさせた時だ！

第十一話に続く

第十話 THE AFTER (後書き)

次話は八月三十一日に投稿……出来そうにないなあ。

第十一話：新たなるフラグ（伏線しかありません）（前書き）

久しぶりの投稿なので、かなり劣化してるかもしれませんが、書いてる内に勘が戻ってくると思いたい。

リニューアル版では投稿時の前書きや後書きが改行できるようになったんですね。地味に感動します。これで次話投稿した後に新規小説作成で執筆した前書きと後書きを置換するという二度手間が省けたよ。

PV15000 ユニーク3000

久々にアクセス解析に入ったらこの数値に後もう少しで到達するくらいだった。みWなWぎWつWてWきWたW

第十一話：新たなるフラグ（伏線しかありません）

「ここがハナダシティ……か」

お月見山を越え、4番道路を抜け、この町にたどり着いた。

「光就さん。ここには萌えもんジムがありますよ。どうします?」

美空はメモをめくり、言った。

「それも良いが、その前に回収しなければならぬフラグがあるのだよ……」

町を北上する。すると、橋が見えてきた。

「ここに……な」

橋の前に立ち尽くす男。

「久しぶりだな」

「ああ。七話振りだな」

「お前、トキワで俺を無視しただろう」

「ふっ、そんな事もあったな」

「ただでさえ出る回数が少ないつてのに……」

「七回だったな。今回が三つ目だな」

「相変わらず、冷めた野郎だな！やる事は分かってんな!？」

「ああ。分かっている。だが」

「何だ?」

「バトルの描写は出来ない。なぜならこの小説は……」

龍宗と瀬奈に合図する。彼らが一斉に飛び出す。

「Lv40以下のNPCはまともに喋れん仕様なのだ!」

「ドラゴンクロー!」

「りゅうのいかり!!」

圧倒的だった。

「くっ、何でだ!最初の頃はお前に対抗出来る唯一の男という設定だったのに!」

「人としての能力はな。美空が本格的に登場した第三話以降、貴様

の存在価値は消え失せた」

「な、何だと……!?!」

「ではさらばだ……。美空!」

「レ・ミゼラブルですね……。かぜおこし!」

突風に吹かれ、秀明は彼方へと飛び去った。……恨むなよ。諦めるなよ。お前が強くなってくれば、作者も何の迷いも無く、バトルシーンを入れてくれる……。はずだ。

「さあ、邪魔者は消え失せた。行くのでしょうか」

だが、邪魔者はいっただけでは無かった。

「ここはゴールデンボールブリッジ!!五連勝したら素敵な景品を贈呈!!」

その橋の上には、五人のトレーナーがいた。

だが、負ける要素など何処にも無い。

「メタルクロー!」「りゅうのいかり!」

あっという間に五連勝だ。ニビ地下基地の戦いが良い経験になったようだな。

ん?ロケット団?ああ、いたような気もする。

ですが、ここままで戦闘要員の二人が疲弊しきってしまった為、ボールに入ることになりました。

故に、この岬の家の件では、二人は喋れなくなりました。全国の瀬奈たんファンには凶報ですが、御了承の程を。

以上、時報でした。

とまあ、そんなこんなで岬の家に到着した。だが、私はここが何なのか知らなかった。

「……なあ美空、ここは誰の家なのだ?お前が行くと言ったからついてきたが」

結構、立地条件の悪い家だ。

「あれ?言いませんでしたっけ?ここは萌えもんマニアのマサキさ

んのお宅ですよ」

「萌えもんマニア？ふっ、やっぱりこういう辺鄙な場所へんびに居るのは、まともな奴ではないのだな」

すると、美空はたしなめるように、

「そんな事言っちゃ駄目ですよ。萌えもんボックスは、その人が管理してるのですよ。きっと凄い人なんですよっ」

と言って家に入ろうとした。

「凄い変態の間違いではないのか美空」

「何でそういう事ばかり言うんですかっ、否定ばかりじゃ何も生まれないんですよ！」

そう言つと美空は玄関のドアを開けた。すると、

「あれ……？」

と言つてドアを閉め、目をゴシゴシ擦る。

「きつとさつきは光就さんが変態変態言つから刷り込まれてしまつたんです。次は大丈夫ですっ」

そして、再びドアを開ける。

「あれ〜？おかしいなあ」

ドアを閉める。

「……うん、分かりました。次、ドアの先にあるものを全て真実と受け止めます！」

美空はそう独り言を呟くと、三度ドアを開ける。そして、私に向き直り、

「ごめんなさい。やっぱり光就さんが正しかったですっ」

謝った。

「そうだろうそうだろう。で、何を見たのだ？」

私は半開きのドアを開け、家に押し入った。そして、理解した。

「すぐく……変態です……」

「変態言つなああああああ！！」

そこには、ピッピのコスプレをした男がいた。

「いくらなんでも、男でピッピは無い。誰もがドン引きだ」

「好きでこの格好してるんじゃないわ！」

「何だと、ピツピに失礼だろう。変態の上に無礼者なんて最悪ではないか」

「だから変態じゃないわ！」

「はいはい。まあ、安心せよ。私が良い病院を紹介してやる」

「病院なんて要らんわ！この機械をいじれりゃ万事解決や！」

その男が指差した先には、大きな謎の機械があった。

（そうか……精神科行かなくても変態を治せる機械があるのか。便利な世の中だな……）

「なんか勘違いされてるような気がするんやが、まあ、ええわ。わいが機械入るからあんたはそのパソコンを操作してくれや」

「ふむ、分かった」

席に着く。

「はう……ボタンがたくさんで難しそうです……」

美空が横で目を回していた。

「お前の知力なら扱いこなせそうだがな。ふつ、これで良からう」

親切設計なお陰でエンターキー押すだけだしな、？でも出来る。

おや、なんか辺りが涼しくなってきたな……。

「わわっ、光就さん……！」

美空が機械を見て驚いていた。

見てみると、その機械は怪しげな起動音をあげ、煙を出しながらうごめいていた。

「だ、大丈夫なのでしょうが……壊れてないですよね？」

「大丈夫だろう……多分」

「いやあああああああ……！」

悲鳴をあげ、頭を抱える美空。やれやれ……。

そうしている内に、機械のドアが開いた。

「いやあ、助かったわ。一生あのままやと思うたけど、何事も諦めるもんやないな」

出てきたのは、普通の人間の男だった。何だ、変態では無かった

のか。

「そや、お礼にあんたに良いもんやるわ。机の引き出しに船のチケットがあるから、持っていきや」

まあ良いか。言われるがまま、引き出しを見る。そこには封筒がおもむろに入れてあった。開けてみると、

「えっ！？そ、それは……サントアンヌ号のチケットじゃないですかっ！」

美空が驚嘆の声をあげた。

「サントアンヌ号？何だそれは」

「知らないんですか？世界的に有名な豪華客船ですっ！前から一度乗ってみたかったですよ」

美空は目をキラキラさせてうっとりしている。

「豪華客船か……。やれやれ、どうも私向きのイベントではないよ。うな気がするな」

私は少し迷惑に思いながら、チケットをもう一回見た。すると、その考えが変わった。

「フッフ……仕方がないな、付き合ってやろう。そのサントアンヌ号とやらにな」

そこでは、パーティーが行われるらしい。萌えもんトレーナーの為のパーティーと言え、それ以上の説明は要らないだろう。

「ま、そういうこっちゃ！世界レベルの戦いやから、優勝は出来んでも、ええ経験になるで」

マサキはそう言ったが、大会に出る以上、優勝せねば、意味が無い。

「サントアンヌ号はいつ、どこで着くんか？」

「ふふっ、サントアンヌ号はな、カントーの港町、クチバシテイに一ヶ月後に寄航予定や。あんま時間無いで」

ふっ、一ヶ月後……か。

「それだけあれば充分だ。ふっ、あなたには礼を言わねばならないな」

「なぐに、礼を言うのはこっちの方や。それに、わいは外出るの苦手やしな」

「そーなのかー」

引きこもり発言をルーミアガードで華麗にスルーし、

「世話になったな。さらばだ！」

足早にその場を去る。目的のブーツを手に入れた以上、もうこの場所には無い。

許されよ。それがゲームの掟なのだ。……これは小説だが。

重い空気がこの場を支配していた。

「ニビ地下基地で派手な花火大会があつたようだな」

ロケット団団長のサカキが戦場では比類無き権力を持つ特殊部隊五幹部の二人、ゲントウとグレイを責めていた。

「不覚の極みで御座います……」

「計算を誤りすぎました。今後は気をつけます」

二人は必死に謝罪する。何を思っつかは彼らにしか分からない。

「まあ、あそこはもともとお月見山の月の石発掘拠点。鉱脈が尽きてしまった今、あれはただの金食い虫。我らには必要の無い場所ではあつた」

サカキは二人を睨む。

「しかし、だからといって決して壊されて良い場所ではない。かつて月の石の研究に使っていた優れた施設。あれは爆風に飲み込むにはあまりに惜しすぎた」

「研究所の備品は全てこのゲントウが運び出しましたが」

「備品の問題ではない。……まあ良い。過ぎてしまった事は仕方が無い。しかし、浅井光就め……」

サカキは怒りの矛先を光就に向ける。

「我らに煮え湯を飲ませるとは、やりおる……」

そう言い、机の受話器を取り、

「トウカを呼べ！」

と、まくし立てる。

「トウカ？」

「新しく五幹部に入った方です。今度は優秀であれば良いのですがね……」

十分程して、二十前半と思われる女が入室した。

(ずいぶん若いですね……)

とグレイは思ったが、かく言う自分の歳も二十代である事に気付いた。

「トウカ、お前に特殊部隊五幹部としての最初の任務を与える。二
ビ地下基地爆破事件の首謀者、浅井光就を捜索し、討伐せよ！」

「はっ！」

トウカと呼ばれたその女は、威勢良く返事し、サカキに一礼して退室した。

「新入りに浅井光就の討伐はあまりに酷では？」

гентウが意見する。

「だからこそ良いのだ。彼女は油断無く奴と戦うだろう」

確かに。光就軍団の強さは、リーダーである光就の強さなのだ。

もちろん、美空も龍宗も瀬奈も優れた萌えもん戦士ではあるが、

光就の力はそんな彼女達より遥かに高い水準に達しているのだ。

しかし、盛者必衰という言葉が示す通り、力を持つ者はその代償を支払わねばならない。

それは浅井光就と言えど例外では無かったが、それはまた別の話である。

サカキは静かに笑っていた。

第十一話：新たなるフラグ（伏線しかありません）（後書き）

え？終わり早くないかって？

ほ、ほら、なるう様がりニユーアルされましたし、MFもリニユーアル……嘘です。

まあ、でも情景がスラスラ出てた時は毎週八千字も余裕だったんですが、今はちょっときついかな……。

第十二話は十月十二日投稿予定です。

守る気無いだろと言われても、これだけがナマケロな作者を縛る唯一の言の葉ですから……。

……外伝ですか？執筆中です。ごめんなさい。

第十二話：Arrogant rain（もはや萌えもんじゃない）（前書き）

携帯が壊れたりと色々ありましたが、遅ればせながら、次話投稿です。

第二章は基本バトルばかりです。そして、第一章でフラグをばら蒔きまくったのにも関わらず、また、ばら蒔きます。ああ、未来の自分、ごめんよ。

第十二話：Arrogant rain（もはや萌えもんじゃない）

また……だ。

「私は真の海竜王となる者。名は玲奈と申しますわ」

ロケット団ニビ地下基地での奴と戦った……いや、あれはもはや戦いとは言えないだろう。

「かわすのは簡単だけど、力の差を見せ付けてあげるのもいいかもね」

次元が違っていた。私の攻撃はことごとく防がれ、弾かれ、消滅した。

「フッフ、今度はこっちの番よ。ハイドロポンプ!!」

激しい水流が何回も何回も私を襲う。奴の高ら笑いのBGMと共に。

「ウッフフ……アハハハハハハハッ!!」

そしてその内、私の中の壊れてはいけないものが壊れ……、

気付けば、窓から朝の光が私の顔に注がれていた。

「また……奴の夢か」

あの時から私は安眠を手にした事が無い。寝汗に濡れた体を洗うためにシャワーを浴びる。

「我ながら女々しいとは思う……まあ、私は女だが」

今日も震えが止まらない、たかが悪夢のために。

「奴の強さは主と互角……いや、それ以上かもしれないな」

我が主君、浅井光就。人の身にして並の萌えもんでは全く齒が立たない程の実力者……。まあ、何を考えているのか分からないのが玉に瑕きずだが。

「まあ、美空殿もいるし、決して奴に劣っているという事はないだろうな」

神風美空。主の次に強い能力を持っていて、間違いなくこの光就

軍団のエース。しかも、主と違い人当りも良いし、親切だし、何より……美人だ。才色兼備とは、まさに彼女の事を指すんだろうな。まあ、あの「ですう〜」の語尾で全部台無しだが。

は？お前は何も分かっているかないかと？……私が知った事ではないな。

「さて、そろそろ……冗談だよ。修業仲間の事を忘れる訳ないだろう？」

私の修業仲間、紅蓮龍宗。典型的な正義漢でどんな苦難も恐れない。暴走する事も多いがその性格から、おそらく、良い待遇に恵まれるであろう人物だった。

だが、不幸にも彼には超上級者な主君がついてしまった。更に、美空殿というもう一人の上級者もいる。彼は自分より遙かに強い主人公とヒロインに囲まれてしまったのだ。

そして、その状況に陥った者の称号を与えられた、「空気」という名の称号を。人々はそれを称えるが如く、「龍宗はいらない子」と口々に叫んだという……。

安心しろ。例え、世界の人々がお前の事を忘れようと、私だけは覚えておいてやる。ライバルだからな。

「……はっ！人物紹介に夢中でさっきまでの伏線が台無しになってしまったぞ……。まあ、良いか」

しかし、誰か紹介し忘れてるような……、あっ、そうだ。

「私は海風瀬奈。海竜王という、大それた身分があるが、その中身が伴ってなかったがために、辛酸を舐め……、その雪辱を果たさんと光就を主君とし、日々修業に励んでいる者だ……こんなんで良いかな？」

てか、なんで私は風呂場で人物紹介などしているんだろうな。ハハハ……笑ってしまう。

「そうだな。私は立ち止まらなさと決めたのだ。悪夢程度にナーバスにされる必要などない。明るく我が道を進んでいけばいい」

蛇口を閉める。さっきまで嫌になるくらい重かった体が軽い。

「さあ、今日も修業だ！」

一方その頃、光就と美空はクチバシティにいた。乗船手続きをするためだ。

ちなみに、今日は船のチケットが景品となる大会。すなわち、サントアンヌ号大会の予選が行われている。ちょうど良いので観戦しに行くことにした。

「ほえー、結構ハイレベルな戦いですね……大会なんて今日見たのが初めてですけど」

美空が驚嘆の声を上げる。

「ああ。予選がこれくらいでは、本戦では今のあいっらじゃ手も足も出ないだろうな」

だからといって出場メンバーを変える気は無いが、と付け加えておいた。

「わたしを除いた二人ですね。お弁当作って応援してますよ」

「それももちろんだが、お前を外したのはそれだけではない」

例え、この一ヶ月で必死に修業しても、おそらくあの二人は到底美空には敵うまい。だが、それでもなお彼女を使わないのには、理由がある。

最初に気が付いたのはニビ化学博物館だ。そう、美空達と弁当を食った時の事だ。

あの時、私は異様な気配を感じた。最初は瀬奈のものかと思ったが、違った。その気配は彼女が弁当を食い散らかしていた時も我らを見続けていたのだ。

その時だけではない。地下基地やお月見山を進んでいる時も同様の気配を感じた。一体、その気配の持ち主は何が目的なのだろう。

ロケット団の隠密？違うな。もしそうなら、基地に入った瞬間私を襲うだろう。

とにかく、用心に越したことは無い。特に、見えない敵の場合はな。

「周囲に妖しい行動をとる者を見かけたら教えてくれないか？」

「うん？別に構いませんけど、なんでそんなこと……」

まあ、疑問を持って当然だ。

「お前は感じないのか？気配を」

「気配……？」

やはり気づいてないのか。無理もないだろう。あの気配の持ち主はそうとう隠密術に長けているようだ。私でさえ、気のせいに思えるほど。しかし、だからこそその気配が頭の片隅に焼き付くのだ。

いつもは私が警戒しているから問題無いが、大会時では、私も采配を振るう事に集中しなければならぬ。

「詳細はいつか話す。お前にしか頼めない事なのだ、黙って頷いてくれ……！」

「何か事情があるみたいですね。分かりました。ならば、何も言いませんよ。でも……あまり無理はして欲しくありませんよ」

美空は少し暗い表情を見せたものの、快く承諾してくれた。

「ありがたい。では美空、帰るとしよう。この大会を見ていたら、良い戦略が浮かんだ」

「はいっ！」

だが、その道中での事だった。

（またあの気配を感じる……）

まるで草木のようにひっそりとしているが、確かにそこにある存在感。

（せめて正体だけでも……）

奴の正体を暴きたい。だが、それは敵意からくるものだけでなく、

敬意、興味など様々な感情からくるものであった。

「美空！先に行つててくれ。私は奴に会つてくる」

「えっ？ちよ……光就さん！！」

と美空が言い終わるか言い終わらないかという時には、私は既にその気配の持ち主の元へ飛び出していた。

今日も昨日にも増してゴールデンボールブリッジには人がたくさんいた。無論、私たちにとってはとても都合の良い話だ。

「龍！行くぞ！まあ、今日も私の勝ち^{たう}は決まつてるようなものだがな」

龍と言うのは、龍宗の名前を省略したものだ。龍宗では、少々長いんでな。

「へっ、余裕こいてられんのも、今のうちだぜ。今日の俺様の快進撃に度肝抜かすんじゃないやねえぞ！」

私の挑発に軽く応じる龍。

「ふっ、同じ様な台詞を聞いたのは、今日で何回目かな……？」

勝負というのは、橋の上で五連勝して向こう岸までどちらが先に着けるかというものだ。いつも私が勝っている……とは言え、あまり余裕のある勝利ではない。少しでも間違いがあればいくらでもひっくり返るものである。

「たいあたり！」「ひっかく！」

この勝負には、一つの制限があり、基本技以外を使ってはいけななのだ。逆を言えば、それ以外は何をしてもいい。

「くっ、またか！たいあたり！」

すぐ隣に、私と同様に五連勝を果たした龍が迫る。彼に向かって攻撃を繰り出す。

それを彼はひらりと躲した。

「へっ、いつもは変に対抗心を燃やすから負けるんだよな。ひっか

く！」

「くっ！」

たいあたりの不発に体勢を崩している私に反撃する。

「甘い！食らえ、たいあたり！」

私の攻撃が決まる。龍は吹っ飛ばされた。だが……！

「甘いのはお前の方だよ！じゃあな」

私が龍を飛ばした方向は北側。すなわちゴール。そう、彼はわざと私のたいあたりを受けたのだ。

「し、しまった……熱くなり過ぎたか！」

懸命に走るが、根本的な距離の違いには抗えなかった。

「よっしゃあ！これでお前の連勝記録は4でストップだ！危ない危ない」

「くっ、龍の罰ゲームを楽しみに今まで頑張っていたのに……海風瀬奈、一生の不覚っ！」

「そうは問屋がおろさねえって奴だ。さあ、次は俺様が瀬奈を追い詰める番だぜ！大人しく師匠の手にかかりやがれよ！」

ここで言っている罰ゲームというのは、美空殿の目の前で、主の悪口を言うことだ。そんな事をしたらどうなるか……？想像に難いことではないだろう。

「にしても、ホントに危なかったぜ……よかった。死ななくて」

美空殿は主の事に関しては冗談が通じないから……本当に語弊無く殺されるだろうな。

「ふう……、朝の修業はこれくらいで良いだろう。ホテルに戻って主と美空殿を待とう」

「おう！」

一方その頃、美空さんと言うと……、

「待って下さい、光就さんっ！わたしも行きます！」

と、翼を広げ、光就を追い掛けようとしたが、

「あれれ？体が浮かないぞ……、まさか、なまった……？」

長く飛んでいなかった事が原因なのか、羽ばたいても浮力が生じない。

「ええっ！？そ、そんなぁ……………」

そうやって羽ばたきを繰り返す美空さんは気づいていなかった。マントが翼を邪魔している事に。

「……………」
「……………」

美空さんが初歩的なミスに戸惑い、混乱している時、光就は何者かと対峙していた。まさに、一触即発。

「我らを付け回していたのは、貴様……………ではないな。ここにもう一人いただろう？どこに隠した！」

「それが、人にもものを尋ねる態度でして？」

怒りをあらわに、だが、あくまでも物腰柔らかく光就に問う。

「安心しろ。言葉遣いは分かっているつもりだ。ただ、貴様に使う必要は無いと判断しただけだ」

「ふ、ふふん、言ってくれますわね、貴方……………」

いよいよ不快感を募らせてきた彼女に、光就は更なる追い討ちをかける。

「もう一度だけ、今度は丁寧に言ってやろう。ここにもう一人誰かいただろう？そいつはどこに行ったのだ？」

「やろう？フフフフフ……………、誰だか知りませんが、躡のなっていない犬ですわね」

光就と対峙している女性は、自分の杖を彼に向ける。

「そんな悪い犬は、私が躡直してあげますわ！ハイドロポンプ！」
強力な水流が光就に向けて放たれる。

「断る。サイコネシス！」

だが、彼は慌てずにそれを相殺する。

「あらあら……、なかなかお出来になるのね。ウフフフフ。久しぶりに楽しめそうだわ」

「……青いドレス、豪華な宝玉付きの杖、そして、そのいやらしい笑み。そうか、貴様が瀬奈が言ってた玲奈とやらか」

光就は気を引き締めた。もしそうならば、彼女は相当な強敵だからだ。

「瀬奈……？ああ、あの子ね。フフフ、元気にしてる？」

「ああ。貴様には礼を言わねばなるまい。お前のお陰で彼女は私の軍門に降った」

「どういたしまして。そつかあ、彼女、プライドをズタズタにされて、自棄になって人間なんかのしもべになったのね」

「すまないな。貴様も同じ運命に遭わせる事になってしまったな」

「あらあら……なら、ちゃんと自己紹介しておかなければなりませんね」

ドレスのスカートの端を引っ張り、お辞儀をする。

「私の名は、東条院玲奈……真の海竜王となる者よ」

「我が名は浅井光就。これまでに我が刃に倒れた強者は多い……逃げらるなら今のうちだぞ」

光就は精神刀・残月を構えた。彼の体は小刻みに震えていた。

「あらあら、そろそろ夏だというのに……、極度の寒がり？それとも、怖いの？」

相変わらぬいやらしい笑みを浮かべながら光就を挑発したが、彼はケロツと、

「ふっ、これは武者震いよ。そんな事も分らんのか？それに……こんな格好で寒さなど感じると思うか？」

「それもそうね」

またウフフと笑う。もつとも、彼女の目は光就の隙を伺っているのだが。

「……………」

「……………」

膠着状態が続いた。だが、光就のとある一言によって、事態は急速に動きだす。

「（敵とはいえ、こんな事を女性に言うのは最低な行為だとは思いますが、仕方が無い……）お前、よく見ると……老けているな」
時が止まった。

「今……なんて……？」

「（また言わすのか……）いや、老けているなど。私の率直な感想だ。気にしてくれるな」

「……フフフフフ、そう、なりふり構わない訳ね？そう……」

顔を伏せる。だが、次の瞬間、光就を凄まじい眼力で睨みつけ、

「よろしい、ならば戦争よ！」

後方に跳ぶ。杖を構え、光就を睨み続ける。

（少し怒らせすぎたか……？）

と後悔する光就だったが、

（まあ、あのまま動けないよりはずっと増しだろう）

と、前向きに解釈し、残月を構え直す。

浅井光就VS東条院玲奈。世紀の戦いの火蓋が、今、切って落と

された……！

第十二話：Arrogant rain（もはや萌えもんじゃない）（後書き）

次話投稿は十一月二十二日……一応言いました。

何で光就と玲奈を戦わすんだって？だって……どっちが強いかは
つきりさせておいた方が良いでしょう？まあ、はつきりさせないん
だけどね。

第十三話：亀裂（白と黒の訣別）（前書き）

やあ（・・・）

うん、今話も急展開なんだ。フラグも沢山ばらまいたよ。

ああ、そうそう。今回から後書きに次回予告的なものを入れる事に
したよ。

第十三話：亀裂（白と黒の訣別）

「ハイドロポンプ！」

「サイコキネシス！」

玲奈の技を打ち消し、間合いを詰めようとするが、私が近づいている時、既に奴は発射地点から離れていた。

「ヒットアンドアウェイ戦法か。特殊型の最も理想的な戦法だな」
やれやれと溜め息をつく。

「何故、みずタイプ最強クラスの技を何の反動も無いかの様に撃てるのだ？その杖……いや、その珠のお陰か」

玲奈は静かにフフと笑った。

「ええ、お察しの通り。この激流の宝玉は無駄な力を出しにくい。だから、私の場合はハイドロポンプもみずでっぽう感覚で撃てるのですわ。まあ、あくまで『出しにくい』ですから、強力な技の場合は普通に反動が来ますけどね」

なるほどな……すなわち、奴にとってハイドロポンプなど序の口に過ぎんと言うことか。ククク、随分と余裕そうだな。

「お分かりになりました？私の基本技さえ相殺に苦労している貴方は、私とは次元が違うのですわ。でも今なら、謝れば許してあげてもよろしくってよ？土・下・座してね」

「ふっ、確かに……次元が違い過ぎるな」

私は残月を鞘に納め、片膝を屈した。

「そうそう、最初からちゃーんとそうすれば良かったのよ？今日はちょっと機嫌が悪いからそれだけじゃ満足出来ないわ」

玲奈は私を屈服させられたと思っているのだろう。のこのこと近付いて来る。

「そうだ、次元が違いすぎるのだよ……今まで戦ってきた奴らと。

こんな戦格を使わなければならぬのだから」

膝を屈した状態から一気に玲奈の懐に飛び込み、通過する。

「フフフツ、逃げたってムダ……いい、痛……！」

玲奈は腹部を抑え、うずくまった。

「くっ、貴方……私に何をなさいましたの！」

言葉遣いが変わってない。……あまり大きな傷には成り得なかったか。

「貴様が自分の能力を晒したからな。私も晒さなければ不公平だろう？ 今のは居合つじぎり。速さのみを追求した技だから近距離でないとは当たらないのだが、運よく貴様が近付いてくれたから助かった」
むろん、奴も警戒はしていただろう。だが、このつじぎりは斬られた事さえ気付かせない程、速いのだ。自分で言う事ではないが。

「フ……フフフフフ、まあ、簡単にひれ伏されても面白くないわよねえ。……よろしくつてよ。少し本気を出させて頂きますわ！」

玲奈は立ち上がり、杖を天高く掲げた。そして、

「空よ、雨雲を作り出せ。風よ、雨雲を運べ。我が戦場に天の恵みを与えた給え……」

呪文を唱えた。すると、今まで明るかった空が、一瞬にして厚い雲に覆われた。

「あまごいか。まずいな……」

キングドラの特性、すいすい。雨が降っている時、普段の倍の行動力を発揮できる……厄介だ。

「こちらもパワーアップの準備をしておくか」

だが、それを邪魔する気はさらさら無い。私も……本気で戦えるのは久しぶりなのだ。

「降りしきれ、豪雨よ！」

やがて、空からバケツをひっくり返した様な雨が降り出した。

「さあ、ショータイムの始まりですわ！ ハイドロポンプ！」

「サイコキネシス！ つじぎり！」

大雨で強化されたハイドロポンプはサイコキネシス単体では相殺できない。つじぎりを併用する。

「ほう、これが厨ポケと呼ばれる所以か^{ゆえん}」

このままではこちらが手詰まりになってしまつ……、やはりあれを使うしかないな。

「サイコキネシス！」

念力を出す。だが、それを放出するのではなく、腕に溜めておく。

「サイコキネシス！」

更に念力を出し続ける。私の腕には、サイコキネシス二つ分の力が溜められている。

「ふうん、何かする気ね？残念だけど私は貴方みたいに甘くないから邪魔しちゃうわよ。ハイドロポンプ！」

再び、天候によって強化された水流が襲つて来る。

「ちつ、二つでは不完全だが仕方がない。サイコキネシス！」

溜めていた力を一気に放出する。その念力はレーザー状に収束し、ハイドロポンプを飲み込み、そのままの勢いで玲奈に襲い掛かる。

「フツ、すいすいの速さがあればこんな攻撃……ハッ！」

だが、素早い動きで躲される。やはり飛び道具は使えない……。サイコキネシスの威力を溜める事でより強力な技を繰り出せる訳ね。確かに素晴らしい能力だけどね……」

次の瞬間、玲奈は私の背後を取った。は、速い……！

「動かさなきゃ何の問題も無いわ。ハイドロポンプ！」

体を捻り、回避するが、

「ハイドロポンプ！」

「ちつ……！」

再び水流が襲い掛かる。バックステップで躲すが、

「まだよ、ハイドロポンプ！」

「おのれ！」

躲す度、躲す度に玲奈はハイドロポンプを連射してくる。

「アハハハハハッ！滑稽な踊りでしょよ、浅井光就！」

「ふん、こんな無駄遣いして……損するのは貴様だぞ」

「あらあら……、踊り過ぎで判断力が鈍られました？仕方ありませんね。」

玲奈は例のいやらしい笑みを浮かべながら、私に誇らしげな様子で説明をし始めた。

「……むろん、ハイドロポンプを撃つ手は緩めずに。」

「私のもう一つの能力。それは雨が降っている時なら技は際限無く撃てる事よ。激流の宝玉の溢れる力が豪雨によって引き出されてね」なるほど……やれやれ……。

「あらあら、絶望しちゃったかしら？それもそうよね。私はハイドロポンプを百発も千発も撃てるけど、果たして貴方はそんなに躲せるかしら？」

「ふっ、何を言い出すかと思ったら……」

「下らない。実に下らない。」

「東条院玲奈……貴様は親に買って貰った玩具を自慢げに話す子供と同じだな」

「貴様が言う『私の能力』とは、貴様自身の能力ではなく、あくまでその激流の宝玉とやらの能力ではないか。それをあたかも自分の能力であるかの様に広言するとは、恥知らずな奴だな」

「な、何ですって!？」

「攻撃の手が止まった。」

「貴様は甘い。やれやれ、もう少し楽しめると思ったが、残念だ」腕を振り上げる。ハイドロポンプを躲している間に少しずつ溜めていたサイコネシスの威力が最高潮に達する。

「私と貴様の違い。それは道具に頼ったか頼ってないか、己の強さに酔いしれたか酔いしれてないかの違いだ。些細な違いかもしれないが、これが明確な違いだ。何が言いたいのか、分かるな？」

「貴様の負けは決定的だと言う事だ！エクスペディション!!」

拳を地面に叩きつける。溜められていたサイコネシスは拡散し、周囲を大爆発に巻き込む。だが、玲奈はその範囲外に逃げていた。

「ふん、逃げ足だけは速いな……サイコネシス！」

追い込まれた奴は何をするか分からん。PPは少ないが、溜めておいた方が得策だろうな。

「なによ……なによなによなによなによ！私こそ最も美しく、最も強い存在！この世界の誰もが私を崇め、屈するのだわ！要らないわ……貴方は私の世界には要らない存在よ！消え失せなさい！！」
「哀れだな……自分のプライドが作り出した妄想にこんな状況でもすがりつくか。そんな妄想、私が二度と修復出来ぬ様、粉々にしてくれる！」

「激流の宝玉に全ての力を充填！20%……40%……60%……」
「サイコキネシス！サイコキネシス！……残月よ。我が力を今こそ解き放て！」

三回蓄えられたサイコキネシスを残月に注ぎ込む。

「80%……100%……！120%！！充填完了！さあ、私に逆らう愚か者よ。海竜王の力を味わうが良い！波動ハイドロポンプ！」

巨大な、今までとは比類のない強力な水流が襲い掛かってくる。

「行け、サイコブレード！！」

サイコキネシス三つ分の力が溜められた残月をその水流に投げ付ける。サイコブレードは回転しながら、水流の中を斬り進んで行く。

「そんな……私の最強技が……」

そして、玲奈にその凶刃を振り下ろす。

「キヤアアアアアア！！」

直撃。その身体は遠くへ遠くへ飛ばされる。

「やり過ぎたか……？死なれては困るぞ」

急いで駆け寄る。一応死んではないようだ。半死半生どころの騒ぎでは無いが。

「すっかり虫の息だな……。これでは我々を尾行していた奴の事が聞き出せぬではないか」

薬を使おうと思ったが、いききずぐすりしか無い事に気がつく。

それでは元気になりすぎて逃げられてしまう。

「参ったな……」

雨が止んだ。

「光就さ〜ん!」

「この暢気な声は……美空か! 丁度良い」

息を切らせて走ってくる美空。

「走るのには苦手だろうに、御苦労だったな」

「は、はい……あの雨の中じゃ、さすがに飛べないですよ(本当はマントが引っ掛かっているのに気付かなくて飛べなかつたんですけど)」

汗を拭きながら美空が答えた。

「……美空、頼まれて欲しい事があるのだが」

一瞬躊躇してしまった。あんな惨状を彼女に見せたくなかつたのだ。……自分がやってしまった事だ、責任は私にある。

「?」

彼女は何も知らない。私がした事を目の当たりにした時、この無垢な表情はどう変貌を遂げるだろう。

「彼女を回復してくれ。ただし、動けない程度にな」

「了解です〜……!」

美空の顔色が変わる。先ほどまでの間の抜けた表情の面影は何処からも見受けられない。

「ひ、ひどい……光就さん、誰がこんな事したんですか……?」

恐らく、さっきまでの爆発音、衝撃音は美空の耳に届いているはずだ。彼女だって馬鹿じゃない。ついさっきまでこの場が戦場であつて、そこには重傷を負つて、倒れている者と大した傷を負っていない者が居た。この惨劇の犯人など明確だ。その証拠に、彼女の表情は懇願を浮かべていた。

「……すまない」

「……そうですか」

美空の表情は混沌として、沢山の感情が入れ混じっていたが、一

っただけハッキリと分かる感情があった。……恐れ。

（美空に恐れられるくらいなら、何回もひっぱたかれた方がずっと増しだった……）

「……化える炎よ。彼の者に癒しを与えよ……」

玲奈が炎に包まれる。

「……その程度で良い。あまり回復すると逃げられる」

「……はい」

炎が消えた。

「う、うーん……っ！痛……！」

意識は回復しても満身創痍である。動く事は出来まい。

「だ、大丈夫ですかっ！」

駆け寄ろうとする美空を制し、私は玲奈に詰め寄る。

「貴様に聞きたい事がある。ここで私以外、誰に会った？」

「み、光就さんっ！」

「美空、黙っている！私の他に誰に出会った！答えろ！さもなければ斬る……！」

「は、話すから！話すから近寄らないで！こ、怖い……」

怯えた表情を浮かべ、杖を振る事で境界を作ろうとしている彼女の姿は、とても痛々しかった。

「……というわけよ」

「なるほどな」

「……」

恐らく、美空の頭には玲奈の話は殆ど入っていないだろう。それどころではないという事か。

「もう……帰っていいわよね？」

「……好きにしろ」

「あっ、待って下さい。回復がまだ済んで……」

「結構ですわ」

美空の好意を払いのけ、足早に立ち去った。さすがはドラゴン。

回復力が高いな。

「……………帰るぞ、美空」

「嫌です。一人で帰って下さい」

「淡々と、だが、ハッキリと拒絶された。」

「今の光就さんは信用できないです。あれは虐待です。バトルの範囲を越えてます。あんなに怯えて……………可哀相に」

美空は、目に涙を浮かべながら言った。

「光就さんは強くて、カッコ良くて、誇り高い……………。わたしの自慢のマスターで、幼なじみ。……………わたしが好きな光就さんはそんな光就さんなんです。今の光就さんはロケット団と同じです。ロケット団の光就さんは、わたしの背中には乗せられません。ご了承ください」

美空は怒っているわけでも、恐れているわけでもなかった。ただ悲しんでいた。

「なんでですか……………？なんで！？光就さんはなんで変わってしまったんですか？」

「十年も経てば……………、人は変わってしまうさ」

「……………！そんな言の葉、光就さんからは聞きたくなかったです」

美空は涙を流して言った。

「美空……………お前、泣いてるのか？ならば、水分の無駄遣いだ。私はお前の理想の『光就さん』にはなれない。嫌いになるなら、さっさと嫌いになった方が良く。お互いの為にもな」

「光就さん……………なんでそんな事を言うんですか？わたしの事、本当は嫌いだったんですか！？」

「想像に任せる」

「信じられない……………光就さん！あなた、ひどいです」

美空は大粒の涙を流しながら、飛び去っていった。

「……………帰るとしよう」

私はハナダシティに向かった。

「やれやれ、やはりあの時に追い掛けるべきではなかったな。こん

な事になるとは……」

今更ながら後悔する。

「だが、私は私のした事は正しいと思っている。後悔はしているが反省はしない」

私の行動の意図を話す必要なんてない。もし、話してしまったら意味が無くなってしまふ。そうなるくらいなら、嫌われても構わないと思っていたが……。

「やはり辛いものだな。特に美空に嫌われるのは……」

第十四話に続く

第十三話：亀裂（白と黒の訣別）（後書き）

龍宗「光就と師匠の絆に突然できてしまった深い傷！主人公とヒロインの不和！ああ、どうなってしまおうMF！どうなってしまおうんだ
く〜！！」

瀬奈「うざい！」

龍宗「げふっ」

瀬奈「次回は、そんな二人の仲をどうにかしようと思込が努力するぞ」

龍宗「おう！師匠の泣き顔は見たくないからな！」

瀬奈「べ、別に美空殿の為では無いぞ！勘違いしないでくれ！」

龍宗「次話投稿は十一月二十九日だぜ！」

瀬奈「あ、主の為でも無いからな！」

龍宗「まだ言ってるのかよ……」

第十四話：DEBATE！！（ですうは計算高いらしい）（前書き）

第二章はバトル中心……と言ったはずですが、バトルと言っても、体と体をぶつけ合い、傷付け合うだけがバトルではありません。

うん、僕ごういうの好きなんだ。ようやく、タグのタクティカルが理解できるんじゃないかな。

えっ？これはもはや萌えもんじゃないって？……それは私の業界では褒め言葉です。

第十四話：DEBATE!!（ですうは計算高いらしい）

「やべえ……遅刻だ遅刻！こりゃあ、また瀬奈にどやされるなあ……」

（だけど、さっきは急ぎすぎて人とぶつかっちまったから注意して走らないとな……）

俺は走っていた。なぜかって？寝過ぎたからさ！

「偉そうに言うな！龍〜！！」

いきなり瀬奈の蹴りがとんできた。

「うおっ、危ねっ！」

「また遅刻かあ！時間厳守と何度言えば分かる！」

「いや、だけどよ……」

「言い訳無用！全く……今日は相談したい事があるのに」
ん？相談……？

「なんだそりゃ？」

「修業が終わってからだ！」

「何だよ、気になるじゃねえか。今は言えないのか？」

「はあ……お前の場合、修業の前にあんな事を言ってしまったら、修業どころでは無いと暴走しかねないからな。少し我慢してろ」

瀬奈はそう言うと、早速構えを取った。有無は言わせねえってか。

「じゃあねえな。さっさと終わらすか！」

こちらも構える。

「いくぜー！ひのこー！」

ひのこで瀬奈の動きを封じていく。

「メタルクローー！！」

そこから一気に近づいて、強力な一撃を叩き込む！

「ふっ、甘いぞ龍。そんなのは容易に想像できた」

「例え予想できても、対処できなきゃ意味ねえんだぜ？」

鋼の様なこの爪は、硬い岩も切り裂く。防ぐのは難しい。

「やはり、お前は覚えていないのか。ふっ、私は元々、受け流しの達人なのだ！」

瀬奈は紙一重で俺のメタルクローをかわすと、そのままその腕をつかみ、俺の体ごと投げ飛ばした。

「ぐおお！バ、バカな……」

「畳み掛ける！りゅうのいかり！！」

「させるか！りゅうのいかり！！」

互いにぶつかり合う紺色の炎。

「へえ……お前もりゅうのいかりを使えるのか」

りゅうのいかりはどんな実力差があっても対等な威力を持つ技。

とうぜん相殺。そして、その間に俺は体勢を整える。

「にしても、受け流しなんて忘れた頃に使いやがって！おかげでやなこと思い出したぜ」

こいつと初めて出会った時、たかがコイキングとなめてかかったら、見事に完敗。あの日ほど悔しかった日は無いね。……………。

「そんな余裕をかましている場合か？私の受け流しで近距離技は全て無力化。遠距離技は威力不足。よって、お前は防戦一方。少なくとも勝つことは出来ないんだぞ」

「それはどうかな？受け流しといっても全くダメージをくらわないってわけじゃねえ。強力な技だったら、さすがのお前も受け流しきれないんじゃないか？」

息を深く吸い込む。

「なら……試してみるか？」

「ドラゴンクロー！！」

俺の最強技。こいつを受け流せるなら受け流してみろってんだ！

「水舞踊・因果応報！」

突進してくる瀬奈。そして、回転する。

「？」

意味がわからなかった。ただグルグル回っているだけだ。

「でやあー！ー！ー！」

回転はさらに速くなっていく。瀬奈は目を回さないのか？

「まあ、油断は禁物だ。くらえ！ドラゴンクロー！！」

「ふっ、かかったな。行け！」

瀬奈が回転を止めたと思ったら、突然衝撃が走った。

「な、なんだ！？」

わけもわからずに吹っ飛ばされ、しかし、なんとか立て直す。

「うーむ、やはりまだ不完全だな。こんな威力ではないのだが」

瀬奈は腕を組んで、考えていた。

「な、なんだよ、どういうことか説明してくれ」

「うむ……。水舞踊・因果応報は相手の技の威力をそのまま相手に返す技だ。回転で相手の技の力を盗み、私の周りに旋回させ、最後に回転を止める事で、その力を一気に相手にぶつけるのだが……。私の場合、どうも回転中に力が逃げてしまつらしい。やれやれ、これではこのオーバークションの意味が無い」

確かに、最初はビックリしたけど、あまり痛くない。

「でもよ、ドラゴンクローを受け流せるだけでもすごくねえか？」

「受け流せてなどいない。あれは受けたただけだ。相手に力を返せて、初めて受け流しなんだ」

「そうか……。難しいもんなんだな」

「ごだわり……。ってやつか。」

その後も何回か打ち合った。やっぱり瀬奈は強い。相性云々言っ
てしまえばそれまでなんだが、それを無しにしても、瀬奈は一筋縄
ではないかない相手だ。それに、だから、あいつとの組み手は楽しい
んだ。

そして、あつという間に日は沈み、帰る時間だ。

「もう夕方かよ……。早いもんだなあ」

「夏が近づいてきて、日は長くなっているのにな」

名残惜しい気持ちを抑えて帰り道を歩く。あまり遅いと師匠が心

配するからな。

「……なあ、龍」

瀬奈が口を開く。

「なんだ？」

「……朝、私がおかを言いかけたらどう？」

朝……？ああ、あの相談がしたいってやつか！

「そうだったな。で、どんな相談なんだ？」

すると、瀬奈は黙りこくってしまった。

「なんだよ、黙ってちゃ俺には伝わらないぜ」

「……龍は……昨日から……正確には昨日の夜から、主と美空殿の

様子がおかしい事に気付かなかったのか？」

「師匠と光就？うーん……、特に変わりなかったような気がするが。

光就は相変わらずむすつとしてたし、師匠だつてずっとニコニコし

てたぜ」

それに、あのお二方はなんだかんだ言つてこそニコソと愛の芽を育んでらつしやるからな。様子が少しくらいおかしくつても、なんら問題はない気がするが。

「はあ……お前は短絡的だな。一人の言動しか見てないからそうなるんだ。思い出してみる。昨日の夜以降、美空殿が主に話し掛けた事はあつたか？」

「さあ、どうだったか……？確かに、俺が思い出せる限りでは、昨日の夜、師匠は光就と話していないな。おとといはベツタリだったけどな」

「な、おかしいだろう？主が無口なのは、いつもの事だし、美空殿はいつも笑っている人だ。だけど、私が知っている限り、美空殿が主にアプローチしない日は無かつた。昨日を除いてな」

なるほどな。だが……、

「なあ、結局、瀬奈は何が言いたいんだ？いきなりそんなこと言い出してよ」

師匠が光就に話しかけないなんて、そう重大なこととは思えねえ

な。師匠だって、一人でいたい時だってあるだろうに。まっ、それもそれで問題だな。

「いや、あの二人、喧嘩したのかなと思ってな。まあ、喧嘩する程仲が良いと言うし、大した事ではないのかもな。ハハハ……」

あの二人がケンカだと！？ということとは……！

「瀬奈！なんでこんなこともつと早く言わなかったんだよ……！」

「いや、修業より優先度が高いものとは思えなかったんで……」

「ばかやろう！今は大会前の大事な時期だろ！それなのに……パーティー内がバラバラじゃあ、今回の大会勝てるわけねえだろうが……！」

「はっ！そ、そうか！しまった……私の判断ミスだ。くっ……」

悔しがる瀬奈。

「とにかく、今は悩むより行動だ！」

「ああ！で、何をすべきだ？」

あ、し、しまった、考えてなかったぜ……。

「すまねえ……」

「そうか……」

黙りこんでしまった俺達。

「……よし、ここは取りあえず、本人達の話聞きに行こうじゃないか。もしかしたら、ただの勘違いだという可能性もあるからな」

「おっ！それだ！」

なるほど、さすが瀬奈だ。頭いい！

「決まりだな。行くぞ」

こうして、俺達は進んでた道を再び進みだした。

一ヶ月の滞在となると、それ相応の拠点が必要である。

光就がその重要拠点と定めたのは、なんと、ハナダジムだった。

その経緯を説明すると、長くなるのだが、簡単に言えば、ジムト

レーナー契約をジムリーダーと結んだからである。採用条件はペーパーテスト。むろん、簡単なものでは無かったが、光就にとってはこの程度は朝飯前のようなものだ。

だが、ジムトレーナー契約は意外と簡単に結べるものである。ジムにとつては維持費を超えない範囲ならトレーナーはいくら居ても困らないし、トレーナーにとつてもジムで働く事で長期滞在の心配は無いし、良い修業にもなる。実際、龍宗と瀬奈は三週間程はここで修業していた。

さらに、ジムトレーナーとして働いている間はいつも一緒にいる萌えもんではなく、ジム指定の萌えもんと戦う事になるので、知識も増えていき、良いことづくめである。

そんな理由で光就達はハナダジムに住み込みで働いている。

さて、龍宗達はハナダジム寮の自室に帰ったわけだが、そこには誰も居なかった。

「おや、まだ帰ってきてないのかな？仕方ない。待っているか」
待つこと十分。美空さんが帰ってきた。

「あれ？今日は二人とも早いですね。何かあつたんですか？」
相変わらずとぼけるのは上手い……と瀬奈は思った。

（だが、最初に主に当たるよりは増した。……美空殿も相当な強敵だな）

そう、瀬奈は美空さんに戦いを挑もうとしているのだ。もっとも、この場での戦いとは、武器を持たぬ戦い、すなわち『論戦』の事であるが。

（おそらく、美空殿も、主も、普通に聞いてもまともに答えてはくれまい。ならば、ちゃんと説明してくれるように二人を説得するまでだ！）

「美空殿、私ら二人、貴方にお話がございます。聞いてくれますか」
「どうしたんですか？そんなに改まって……」

「お話、聞いてくれますか？」

美空さんの問い掛けを無視し、論戦の開始を促す……いや、もう既に論戦は始まっている。

「……はい。どんな話ですか？」

（さて、何処から切り崩していこうかな……？美空殿の場合、発言に注意しないと、論戦自体をはぐらかされてしまい、続行不可となってしまうかもしれない。気をつけなければ……）

「……美空殿、昨日の一件についてです」

（やはり単刀直入にいこう。逃げ場の無い論で追い詰める！）

「何故、美空殿は昨夜は主と一緒にいなかったのですか？いつもなら、花の様に寄り添っているのに」

「えっ！いや……わ、わたしにも一人になりたい時はありますよ！」

（やっぱりそう返してきたか……）

「ということは、美空殿がそんな事を言い出す心境の変化をもたらしたものが……という事ですか？」

「ふえっ！ま、まあ、昨日は少し、センチになってましたよ……」

（美空殿は墓穴を掘りまくってるな）

「なるほど、では、何故センチになっていたのか、理由を話していただけませんか？」

「え〜っ！それは無理ですよ」

「頼みます！是非話して下さい！」

だが、この時、瀬奈はもう美空さんの術中である事に気づいていなかった。

「……分かりました。いや、大した事じゃないんですけど、感動的な本を読んじやったんですよ。だから少しその余韻が残っちゃって……という訳ですっ！えへへ……全然大した事ないですよね」

（はあ！？）

「ちょ……、私が聞いているのはそんな事では無く……」

「瀬奈さんがどんな答えを期待してたにしろ、これが昨日、わたしがセンチになった理由です。それ以上でも以下でもありませんよ。それに、是非話して下さいって言ったのはあなたですよ。さ！この話

はおしまいです！早くお夕飯を食べに行こうですよ！」

(くっ！上手くはぐらかされてしまった……)

瀬奈は後悔した。優勢と思って、油断していたら見事に美空さんの罠にハマった事を。

「あーあ、『論戦は任せる！』とタンカ切った結果がこれかよ。一分も経たずに論破されやがって」

「ろ、論破はされていない！強制終了させられただけだ！！」

「でも同じ敗北だろ？師匠相手にこれじゃあ、光就には勝てるわけねえな」

「くっ、痛いところを……しかし、それが真理なんだよなあ。この美空殿との論戦も主との論戦の行方を占うものだったんだ」

「その結果は大凶か。はっ、こうなったら諦めるか？」

「そんな気も無いくせに何を言うか。何事もやってみなければ分からないだろう？」

「へっ、ちげえねえや」

ということ、瀬奈は美空さんに負けたその論理で光就に挑むという、極めて無謀な企みを果たさんとするのだった。

夕飯を済ませた瀬奈達は、悲壮な決意を秘めた面持ちで、光就に接触した。

「主！話したい事があるのだが……」

幸い、美空さんは席を外していた。しかし、あまり時間はない。だが、そんな心配はそもそも必要ないのかもしれない。

「美空との喧嘩の事だろう？」

光就はお見通しだった。もっとも、口にしていないだけで、美空さんもお見通しだったのだろうが、それを言うか言わないかでは雲泥の差である。光就は美空さんの逆に行く、徹底論戦の構えである。「よく……知ってるな」

「当たり前だ、お前達の論戦は私の耳に届いているぞ。にしても、さすが美空だ。相変わらず狸というか、ずる賢い手を使って論戦を終わらせたな」

「あれ……？主は美空殿の事を嫌ってないのか？」

「ああ、あれは私が一方的に嫌われたんだよ。やれやれ、ああ感情的になられてしまつては少々厄介だ。美空はヤンデレだから」

「……ヤンデレとはちよつと違うと思うんだが」

「それもそうだな」

論戦とは程遠い、和やかな会話である。

そんな状況下で論戦の口火を切つたのは瀬奈だった。

「ならば、主……いや、光就！私の話を聞いてもらうぞ！」

瀬奈があえて光就の事を呼び捨てたのは、それは『今の私は、主の配下ではない。論敵だ！』という事を示すためである。それは相手に迫る効果と自分を追い詰める効果がある。瀬奈は追い詰められれば追い詰められるほど力を発揮できるらしい。まあ、早い話がDMなのである。

だが、そんな必要は無かつた。そもそも、論戦にどんでん返しなど無い。完璧な理論に下手な鉄砲は当たらないのだ。

「瀬奈……残念だが、私は美空みたいに甘くはない。完全論破してやる」

虚勢ではない事は表情を見れば分かる。それは、瀬奈が何を言うのか、そして、それにどんな反論をすれば良いのかという事を、全て考えきつたという表情であつた。

「まずだな……何故この事を黙っていたんだ？光就と美空殿の仲たがい……。今は、大会を近くに控える大事な時期なんだ。私達にとつても、とても重要な事だ。それに私達……いや、集団は全員が揃つてこそだ。バラバラな状態で大きな成果がでるはずがない。光就も大会に出るからには、優勝したいだろ。だから、今のこの状況は解消すべきだ。違つか、光就！」

光就は終始黙つて、瀬奈の言葉を聞いていたが、やがて、ふつと

笑った。

「ふっ、まさかそれで終わりではないだろうな？その程度の論で私に挑もうなど、愚の骨頂！そんなに論破されたいのか？ならば、望み通りにしてやる」

そういうと、光就はゴホンと咳をする。

「まず、何故黙っていたかだが、その状況がお前達に話す事で改善するとは思えなかったからだ。実際そうだろ。お前達はその事を知り、動いても、彼女は一向に機嫌を直さないではないか。人と人の関係の問題は、部外者が気安く立ち入るべき領域ではないのだ」

「それは……しかし、動いたのは今日の夕方。そんな早く人間関係の修復ができるものか」

「ほう、ではお前達は自分で言った『大事な時期』に、修業を全部放棄して我らの仲を修復するための活動をするのか？それでは本末転倒ではないか」

(くっ、反論できない……！)

瀬奈の論が、一つ崩された。

「次に、バラバラの状態では、大きな成果は残せないという事だがこれには私も少し賛成するところがある。しかし、お前は勘違いしている事があるようだ。それが理論の食い違いを生んだのだな。では、その勘違いとは何なのか。それは、美空が大会に出ると思っ

ている事……だな？」

「なっ！そ、そうなのか……。美空殿は大会に出ないのか。喧嘩したからか？」

「いや、それはちげえよ。元々そういう約束だからよ」

光就の代わりに龍宗が答える。

「ああ。普通にやっていたら、彼のメンツが立たないからな、自重したのだ」

「なるほど、確かにこれ以上空気になってはどうしようも無いからな」

「む、むっ……」

「ふつ、では、論戦に戻るぞ。……以上の事から、お前の論は崩れる。なぜなら、その前提は美空が大会に出るという誤った情報。故に、お前に反論の余地は無い！」

「くつ……！だが、そんな事、統率者が言っただけのものか……？」
「勝手に話題をすり替えるな！今話している事には関係無いだろう？」

「むう……」

死に際の一策も見事に外れ、瀬奈の論理はほぼ崩壊している。そんな中、光就は追い討ちをかける。

「一つ、私から話したい事がある。……自分らが何とかしてあげようなんて思うなんて傲慢だ。それを意図的にやったにしろ、偶然だったにしろ、そして、その結果がどうだったにしろ、やってもらった人のプライドは傷付けられる。お前達がやった事は私のプライドを傷付けるには充分だった」

（そうだったのか……）

瀬奈はがっくりと肩を落とす。

「瀬奈、自分で善かれと思ってやった事が、相手に必ずしもそのまま伝わるとは限らない。私はお前の行動に悪意が無い事を分かっている。だが、それでも腹が立ったから、つい張り合ってしまった。許されよ」

と、そこまで言うと、光就の表情はいつもの尊大なものではなく自省の色に変化した。

「そして、私が昨日した事も瀬奈に対する無礼だと美空に言われた。……すまなかつたな」

むろん、美空さんが直接そんな事を言ったわけではない。彼の解釈がそうだったというだけだ。それが真実なのかどうかは、彼女にしか分からない。

「出会いは唐突であったが、途中で思ってしまったのだ。『瀬奈から奴を遠ざけてやる』と。思い上がりも良いところだ」

「主……」

瀬奈は呼び方を戻した。……論戦は終了のようである。

「すまない、私が不甲斐ないばかりに主にそんな心労をかけるとは……」

「瀬奈、自分を責めるな。……お前達のおかげで私は吹っ切れたのだ。むしろ、礼を言わねばならん」

「そうか……ありがとう」

「ふっ、お前が言っただけでどうするのだ」

そう言うと、光就は立ち上がった。そして、真剣な眼差しで瀬奈を見つめた。

「……瀬奈、龍宗。私の事を信じてくれ。確かに、私は人の和と言うものには欠ける。だが、それから逃げ続けていたのでは、いつまで経っても私は変われぬ。お前達や美空に頼ってばかりでは、いつまで経っても引きこもりのままだ。……美空の事は私に任せてくれ。お前達は、自分が出来る範囲の事で応援して欲しい。頼んだぞ……」

光就はここまで言うのと俯いた。が、やがて、ははつと笑い、
「別に期待はしてないがな」

と言い残し、夜風が舞う外へと出ていった。

さて、残された二人はというと、

「結局……この論戦は勝ちか？それとも負けか？」

「論破されたから負けなんだが、説得はできたから勝ちとも言えるんだよなあ……」

悩んでいた。

「まあ、何はともあれ、光就は、師匠とうまくやってみるって言ってくれたし、結果オーライじゃねえか」

「ああ、そうだな。私達は私達のできる事で主を援護するんだ。よし！というわけで寝るぞ、龍」

「はあ？なんでそうなるんだよ」

「私達にできる事……それは次の大会で優勝する事だ。そのためには修業だ。そして、寝ることだって修業の内だ。さあ、寝るぞ！」

瀬奈は早々に布団に入った。

「やれやれ、こんなに気合い入れて寝る奴は初めて見たぜ……」

龍宗は少々呆れ気味だったが、素直にそれに従った。

（見ていてくれ、主……！）

瀬奈は強い想いを胸に抱いた。それは闇を切り裂く光となり、その夜以降、もう玲奈の悪夢を見ることは無かったという。

第十五話に続く

第十四話：DEBATE!!（ですうは計算高いらしい）（後書き）

龍宗「走り始めた俺達を、阻める者など、どこにもいない!」

瀬奈「その通りだ!と言いたい所だが、次回はちよつと視点が変わるらしい。しかも、全く新しい視点だとか。だから、私達の出番はあんまり無いみたいだ……」

龍宗「全く新しい視点……?まさか、新キャラか!」

瀬奈「さあな。次話投稿は十二月十二日だ」

龍宗「ん?随分日が空くんだな」

瀬奈「ああ、なんせ、第十六話の舞台はサントアンヌ号だからな。ゆっくり構想を練りたいだろうな。……だらけなければ良いが」

龍宗「まあ、その時は死ぬ気で書かせるだけだぜ」

第十五話：蠢動（交差する思惑）（前書き）

第二章、年内決着出来るかな？

今話もしリアスだよ。しかも、名前の分からない新キャラが続々登場。果たして彼らは敵か味方が……。

第十五話：蠢動（交差する思惑）

「……………」
この空間は音というものが初めから無いかのような静寂に包まれていた。唯一、書物をめくる音だけがその錯覚を打ち消した。

「……………そういえば……………」
不意に独り言を呟く。

（今日は『彼』が来る日でしたね。お茶はありますかね……………）

書物を置いて、台所に行った。案の定、容器内の茶葉は二人分のお茶を出せる量ではなかった。

（参りましたね……………、買い出しに行かなければなりません）

いくら静かな所で厭人的な生活を送ろうとしても、萌えもんとして生まれた以上、それらの社会と付き合っていかなければ生きていけない。

（仕方ありません。腰は重いですが、街に行かなければ……………）

「レポート！」

ハナダシティへ瞬間移動する。半年振りの外出である。

（さて……………この際、足りないと思われる物は全て買い足しておきましよう）

と考え、ハナダシティの日用品店へ向かう。フレンドリイショップの事ではない。あれはトレーナー専用の店である。

（半年前に比べてトレーナーが多いですね）

久しぶりに訪れた故郷からはそんな印象を受けた。

（……………世の中は常に動いている。しかし、私はこの半年間で何か変わった事があったでしょうか……………？いや、相変わらず、日が昇れば書物を読み耽り、日が沈んだら眠り、また日が昇れば書物を読み耽る……………ずっとこの繰り返しです）

歩きながらそんなことを考えていた。

（私はこのままで良いんでしょうか……………。できれば、この知謀を振

るってみたい。しかし、それに値する主君が見つからないのが現状。……もつとも、隠遁しているから見つからないわけですがね……！
？)

不意に衝撃が走り、思考を中断させられる。

「うおっ！す、すまねえ！」

どうやら、さっきの衝撃はこのリザードの青年がぶつかった時のものらしい。

「いえ……考え事をしておりまして、私も不注意でした。すいません。……お急ぎのご様子でしたが、話し込んでいてよろしいのです？」
「いやあ、ほんとにすまなかつた！ああ、急いでるんだ。じゃあな！」

彼は颯爽と去っていった。

(なかなかの好青年ですね……。口は悪かったです)

もう二度と会うことはないのだろうが、私にはなぜか彼に惹かれるものがあつた。

知将、邂逅。

買い物を終えて庵に帰ってきた時には、もう『彼』は上がっていた。

「ああ、お待たせしてしまいましたね。今すぐお茶を入れます、いつも通りのでよろしいですね？」

「うん、よろしく頼むよ」

やかんに水を入れ、

「ねんりき！」

分子を活性化させ、一瞬で沸騰させる。

「入りましたよ。どうぞ」

「相変わらず早いなあ。さすがは天下の知将だねえ」

「天下の知将……ですか」

お茶を飲みながら、さつき考えていた事を思い出す。

(野生のままでは高が知れていますね……。しかし、だからと言って下手な君主に仕える気は毛頭ありませんね)

「そんな大それたものではないですよ」

「ふーん、でも、君を仲間にしようとしたところまで来る人達はたくさん居るんじゃないか？」

「居ませんよ。ここに来た……。いや、来れたのは貴方くらいです」

チリンチリン……。と客が来た事を知らせる鈴が鳴る。やれやれ、またですか。

「今日は来客の多い日ですね」

チリンチリン……。チリンチリン……。チリンチリン……。

「今回は数で攻めてきましたか。しかし、意味の無い事です。まあ、来れたらお茶くらいはもてなしてあげますか」

再びやかんを沸騰させる。

「案の定、ロケット団だねえ」

「本当にしつこい輩です。普通は三回位で諦めてくれるのですが、彼らはもう十二回。よほど人が居ないのですかね？」

そして無礼。まかり間違っても彼らに仕えたくは無いです。

「まあ、どんな輩でも私の庵は等しくもてなします。……。最上級の畏でね！」

憂慮する必要など無い。何故なら、私の庵は地の利を最大限に活かした無敵要塞。だが、それは奢りでもなければ、必然でもない。

単なる偶然だ。今までに攻めた者が私の要塞を落とせないだけ。その証拠に『彼』はこの部屋に居る。

「さて、そろそろ聞かせてはくれませんか？貴方だって暇な身分ではないでしょう。私に何か大事な話があるのでは？」

「うん、そうだね。……。浅井光就という男を知っているかい？」

果たせるかな、私の予想通りだった。

「さて、知りませんね。……。貴方はその者の事を私が仕えるに相応

しいと見た訳ですな」

「そういう事だ」

なるほど……『彼』の眼鏡にかなつのなら決して凡人ではないでしょうね。

「どんな方です？」

「そうだね……。良く言えば才気煥発。悪く言えば唯我独尊。傲慢無礼。極悪非道かな」

これはこれは、また随分な言い草ですな。

「駄目……かな？」

「まあ、百聞は一見に如かずと言いますし、会うだけ会ってみるとしますか」

ふふ……、面白い事になってきました。

「そうかい。意外とそういう所の柔軟性はあるんだねえ」

「人の善悪など他人が決める事ですから。私の知略に理解と敬意を示してくれ、私が仕えるに相応しい才覚があれば充分ですな」

曲がった思想だと人は言うかも知れませんが、他人が流した自分に都合の良い情報に流されて人を選ぶ方がナンセンスなのですよ。

私は愚かな道は辿りません。

「まあ、君はそういう男だしな。光就とは気が合うかもね」

？ああ、私は牡ですよ。残念ながら。

「ふふ、なるほど。会うのが楽しみになってきましたよ。で、何処に行けば会えますか？」

「うーん……、クチバに寄港するサントアンヌ号。明日そこで開かれるパーティーで会えるんじゃないかな」

ほう、サントアンヌ号……。

「確か、そこでは萌えもんバトル大会が行われるとか……、彼も出場するのですか？」

「多分ね」

「なるほど……分かりました。情報提供、ありがとうございます」
友人の役に立てて、僕も嬉しいよ。じゃ、僕はそろそろ帰らせて

頂くよ」

『彼』は帰っていった。

(浅井光就……か。まあ、まずは船に乗る方法を考えなければなりませんね)

思考する。そして、結論を出す。

(フェアでないですが、これが確実でしょうね。では、早速行動に移しましょう……)

知将、動く。

いよいよこの日が来た。

「おおっ！これがサントアンヌ号か！でけえなあ！！」

「うふふ、本当に大きいですね。ずっと空から見ていたから、わたしもこんなに大きいとは思わなかったですう」

こいつら……。

「えーい、少しは緊張感持たないか！私たちには大会が控えているのだぞ！」

「わたしは大会出ないから関係ないですう」

「んなこと言ったらって、もう俺達はやるだけなんだから、変に緊張する方が逆効果だと思っただがな」

むっ……。

「しかし、だからと言って気を抜きすぎるのはもつとまずいぞ！そもそも……」

「お前は気を抜いておけ」

不意に肩を叩かれる。

「今回は龍宗の方が正論だな。大事の前に気負うのは当然の事であるが、気負い過ぎては動けなくなるのが落ち、今からそんな事でどうするのだ。少し龍宗達と一緒に船内を散策してこい。良い気分転換になるだろう」

確かに、少し緊張しすぎてたようだ。

「ああ、そうだな」

「ふっ……だが、龍宗は気を抜きすぎだな。大会で腑抜けにならぬよう、気をつけよ」

「へいへい」

「……さあみんな、行こうですう！憧れの豪華客船に乗り込みますよおー！」

美空殿が私たちを先導してサントアンヌ号に乗船する。それから少し遅れて主がついてくる。やはりまだ気まづいのだろうか。

「主、もしかしてまだ……」

「……すまん。私の話を聞いてくれんのだ、彼女は」

その状況を想像するのは容易だった。美空殿はこの前みたいに、気まづい話題を上手く流してしまふ。自分に非があると思っている主は強く出る事ができず、流されるままなのだろう。

「やれやれ、ずっとこのまま仲違いしたままなのか……？私と美空は」

「……！」

それは主の弱みだった。普段はそんなものがあるのか疑問に思う程なのに。やはり主も人の子なのだ……。

「そ、そんなことはない！主が本気で仲直りしたいと思っているなら、いつかきつとその気持ちは美空殿に伝わる。諦めてはダメだ！」

ここまで思い詰めていたのかと、私は驚いた。そして、だんだんと美空殿に対して怒りが込み上げてきた。

（美空殿……なぜあなたはちゃんと話を聞いてあげないんだ！あなたの主に対する想いとはあの程度で壊れるものなのか！ならそんなのは偽物だ！もし私があなたの立場だったら絶対話を聞く！主のやった事が例えどんなに納得のいかない事でも……だ！そんな度胸も無い癖に、十年溜め込んだ想いなんて便利な言葉で主を縛りやがって！悪女め……この悪女め！悪女め）

「瀬奈、聞いてくれたおかげで少し楽になった。ありがとう」
主の声で我に返る。

「あ……あ、ああ、どういたしまして」

「さあ、行ってこい。どうせこんな機会にしか乗れんだ。今のうちに目に焼き付けておくのだな」

「な、ならその言葉に甘えさせてもらおうかな。主は……行かないよな」

「ああ、戦略を練りたいんでな」

「そんな的口実に過ぎない……くそっ！」

「じゃ、じゃあ、先に行かせてもらおうぞ」

辛い、主と顔を合わせるのが。本当にイライラしてくる。美空殿に対しても、何もできない自分に対しても。

私がこう思ってしまうのは、やはりまだ気持ちの整理がつかないからだろう。全く以って女々しい……私は女だが。

瀬奈は船に入って行った。

「……………」

（恐らく、これ以降彼女は美空の事を快く思わない）

「…………ククク、計画通り……。おお、そうだ」

光就は無線機を取り出そうとした。だが、その時見てしまった。黒装束と黒マントの男を。

「やれやれ、やっと来たか」

早々に船に乗り込む。

（ふふふ……さあ、どう出る！？浅井光就！貴方の徳、見せてもらおうじゃない！）

光就だったそれは静かに笑っていた。

「ここがクチバ港……そして、あれがサントアンヌ号……ですか」

流石は豪華客船。人の出入りが激しい。

「私のやろうとしている方法はあまり褒められたものではありません。もう少し人が少なくなつてからにしますか。やれやれ、時間を削るといふ事は、それだけ接触の機会を失つといふ事です。いっその事テレポート……いや、それは下策ですね。まあ、焦りは愚者の業。大人しく機を待つとしましょう」

知将、傍観。

第十六話に続く

第十五話：蠢動（交差する思惑）（後書き）

龍宗「さあ、いよいよ始まるぜ！サントアンヌ号大会！ウォーッ
！燃えてきたぜ！！」

瀬奈「今回はサントアンヌ号大会がメイン。そして、様々な思惑を
秘め、この豪華客船に現れる者達もそれぞれの目的の為、動き出す
！」

龍宗「次話投稿は十二月十九日！」

瀬奈「第十六話は久しぶりに前後二つに分かれるぞ！」

龍宗「では、第二章完結編：サントアンヌ号の戦い」

瀬奈「乞う御期待！」

第十六話前編：サントアンヌ号大会第一回戦の衝撃（ここにいるぞ！！）（前書）

いよいよ開催！サントアンヌ号大会。しかし、光就達の前に立ちはだかるのはなんと、今大会優勝最有力候補！

光就には優勝以外に狙うものがあるらしいが、さて、彼はそれを手にする事が出来るのか。

第二章完結編、サントアンヌ号の戦い。いよいよ始動！

第十六話前編：サントアンヌ号大会第一回戦の衝撃（ここにいますー！）

潮風が吹いている。とても気持ちいい。

「んー！最高ですっ！」

ここはサントアンヌ号の甲板。イベント会場の甲板とは反対側なので、ちょうど人も少ない。

「さすがは豪華客船ですね、光就さん！……あ」
「ただ、そこに思い人の姿は無かった。」

「……………」

どうしてこうなってしまったんだろう。

「……………」

この風、この海、この空。世界一のこの船から見えるキレイな景色を世界一大好きな人と一緒に見たかった。

「光就さん……………」

ずっと乗船を夢見ていたサントアンヌ号。でも……………、
「あなたが居なきゃ……………ぜんぜん楽しくないですよ……………」

わたしの夢の中ではこの景色を光就さんと一緒にずっと見ているから。一人で見たってつまらない。最初はそうでもなかったけど。

「……………」

感情が眼から溢れ出しそうになる。……………こんな事しても光就さんは振り向いてくれない。彼にとってはただの液体に過ぎないのだから。それに、こんな事で仲直りしても根本的な解決にはならない。それはわたしが望む事じゃない。

「でもわたしには分からない」

何である時、わたしは光就さんに怒ったんだろう？冷静に考えてみると、正当防衛と取れなくもない。でも……………、あの尋問の仕方を見ってしまうと擁護的な意見にしか取れない。

わたしは光就さんの従者として、彼の事を時に、シビアナ目で客観的に見なければならぬ。甘やかしちゃ……………ダメ。

でも、言い方はあったかも。あそこまで喧嘩腰になる必要はなかった。あのままわたしに刀を振り上げて襲ってきたわけではないのですから。これはわたしのミス、わたし自身が責めを受けるに値するものです。

でも、だとするとわたしらしくない。普段のわたしなら……と言っておきながら、実のところあまり自信は無いのですが、ちゃんと事情は聞いたはず。少なくとも、一方的にまくし立てるような真似はしないはず。そんなことをしても事態が好転しないことを理解してるもの。

「何でだろう……」

だからこそ、わたしは分からないのです。何がわたしを怒らせたのか。

「……………」

自分の気持ちなのに、自分で抑えられないなんて怖い。だからわたしはあの時から光就さんとはなるべく話さないようにしている。また何を口走るか分からないから。

「光就さん……」

光就さんに拒絶されたら、わたしはどうすれば良いんですか？あなたが居なきゃ……。

「わたしの一生は……どうなるの？」

だからイヤ。わたしは嫌われたくない。だから、光就さんに触れない。触れなければ、不快な思いをさせない。話し掛けなければ、疎ましく思われない。忘れてくれさえすれば……嫌われる事は無いのだから。わたしはただ、光就さんを見ていただけ。その視線を不快に思ってもらいたくないだけ。それ以上を望むのはわたしにはおこがましい。でも……、

「もし望みが叶うなら、光就さんとずっと一緒にいさせて下さい……」

光就さん……。

大会は十時に開会式を迎え、その三十分後に第一回戦が始まる。幸か不幸か、我らの戦いはその第一回戦である。まあ、情報は多量に収集してある。戦略もほぼ完成。後は実際に動いてみるだけだ。そしてリハーサルの結果、まあまあ動きを確認できた。しかし、本番は大勢の観衆の目前でやる事になる。龍宗は大舞台で力を発揮するような奴だ。おそらく大丈夫だろうが、瀬奈は違う。彼女は大会前だというのに、あんなに緊張していた。感情の起伏が激しいと言うか、深刻に考えすぎなのだろう。

まあ別に、この大会で優勝しようがしまいが、私にはある一つの目的を果たせば他はどうでもいい。

私の目的。それは注目を集める事だ。

これより激しさを増してくるロケット団との戦い。我ら四人だけでは、だんだんと追い詰められてしまっただろう。だからといって、無名のトレーナーのままでは、沢山の味方を集められない。

私の評判が高まるのは、クチバだけでも良い。引いてはこの船だけでも良い。人のロコミは偉大だ。ポケモンは小学生のロコミによって、あれ程の大人気を博したとか……ロコミというものはそれほど力を持っているのだ。

そして、その中の一人だけでも私がロケット団と戦っている事を知っている、あるいは知れば、我が大計は成ったも同然。各地の反ロケット団の芽が団結し、私を中心に巨大な木となる。

もちろん、優勝するに越したことは無い。練れる戦略はほぼ練ったはず。これで負けるなら私の知略もまだまだという事よ。

「十時二十分か……よし」

空き部屋を後にし、甲板へ向かう。

「さて、まずは第一の策、焦心の計……！」

我が戦略が動き出す。これより私の一挙手一投足くらいは全て戦略通りにいかなければならない。戦略を立てるのは難しいが、それ

を実行に移すのはその百倍難しい。とにかく、第一の策でコケる訳にはいかない。

「ふっ、大勢いるな」

甲板は人で溢れていた。

「さて、これからどうなるか見物だな」

意地の悪い笑みを浮かべる浅井光就であった。

「ざわ……ざわ……」

観衆から疑念と動揺のざわめきが聞こえてくる。

今は十時三十五分。本来ならとくに始まっている第一回戦。なのに始まらない。始まるわけがないのだ。

私たちの主……光就が来ていないから。

「イライライライラ……」

龍は怒りを露にしている。まあ、当然と言えば当然だ。そして、怒っているのは彼だけではない。

「……………」

対戦相手もこちらを非難の眼差しで睨んでいる。

「瀬奈！光就を船に乗った後に見たか？」

「い、いや、見ていない」

「ちっ、なんだってこんな大事な時に……。寝てんじゃねえだろうな？」

ま、まさか……。主に限ってそんな無責任な事をするものか。

「イライライライラ……」

苛立ちは観客にまで蔓延し、サントアンヌ号はブーイングの嵐に襲われる。

「……………っ！」

私までイライラしてくる。その場の怒りというのは、余程強い感情なのだろうか？やがて私は緊張感すら忘れるのだった。

焦らすように時が流れる。

「……ふっ」

唐突に対戦相手が口を開く。

「どうやら、君らのご主人様は逃げてしまったみたいだね」

「何だと……？」

主を侮辱する言葉。

「それはどういう意味だ」

「どういう意味って、そのままの意味だよ。優勝候補の僕に恐れをなして大会を放棄したって意味だよ」

「そんな事を……主がするはずがない!!」

「そんなの分からないよ？ハッハッハッ、真の強者は戦わずして勝利するものだよ。ハッハッハッ！」

「くっ……!!」

不快な高笑い。だが、私たちにはそれを打ち消せない。

「だからさ、いい加減棄権すれば？」

何……！

「どんなに待ったつてもうご主人様は来ないんだから、いつまでも時間使つてないで、さっさとこの舞台から降りろ。もう八分だよ？君らなんかの為にこんなに長い時間使わしちゃって……、それなのにあと二分も無駄な時間を過ごす気かい？」

説明してなかったな。試合は十分くらいなら待つてくれるのだが、それ以上を過ぎると不戦敗になってしまう。

彼は、これ以上待たされるのが堪えられないようだが、それは私たちだって同じである。だが、私は信じている。光就は逃げないと。「断る！まだ時間は経っていない」

「おいおい、ふざけるなよ。それにもし万が一戻ってきたにせよ、どうせ負けるんだから今の内に降参しとけば怪我せずに済むんじゃない？戻って来なかったら戻って来なかったで、満座で恥をかくだけだし、これ以上、恥の上塗りをしようするんだよ」

「何だと！ふざけるなは貴様の方だ！」

私は吼えた。そして、相手を挑発しにかかる。

「残念だが、貴様では主には勝てん。だから私たちがギリギリまで待つ。主が到着されれば、貴様などは一分も持たぬわ！」

「な、なな何を言う！」

私の挑発はうまくいったらしい。次に、何を言おうかと考えていたら、突然龍が口を開いた。

「へっ！だが、もしお前が今ここで『俺を倒せる者はおるか！』と三回言えたら、俺たちは速やかにこの場から立ち去ってやる。まあ、言えるわけねえよなあ？」

ん？このセリフ、どっかで聞いたような気がするな……。

「……ハッハッハッ！何を言うかと思っただら……いいよ。僕は優勝最有力候補だからね。いくらでも言っただけあげるよ！」

あつ、思い出した。……死亡フラグじゃないか。

「僕を倒せる者はいるか！」

「ここにいるぞ！」

「なにっ！」

観客たちは声が無処からしたのかキョロキョロと探し回っている。そして、私も落ち着かない様子でその声の主を探す。

すると突然、上空から黒い影が飛来してきた。それはちょうどステージの中央に着地する。

「ククク……浅井光就、遅ればせながら馳せ参じたり！」

どうやら、船の煙突部分から甲板に飛び降りたらしい。

「遅い！みんな迷惑してるぞ！」

「ふっ、これも戦略の内。良くやった龍宗！うまく空気を誘導してくれたな」

は？

「なっ！？こ、これはどういう事だ……？」

「言い訳など、後でいくらでもしてやる。今は目の前の敵に集中せよ！もつとも、既に優勝は我の下にあり！こやつなどは私の目には

羽虫にしか見えぬわ!!」

主は対戦相手を指差して言った。

遅れてきた癖に偉そうに……と主の横柄な態度に混乱を覚えたのは私だけではなく、観客や対戦相手もそうだったようだ。

「な、なんなんだあいつは！この格式の高いサントアン又船上大会で遅れてきた癖にあの態度は！しかも、僕を侮辱して！！許せないぞ……」

「奴の対戦相手は優勝最有力候補だぞ！なのに、羽虫と言い切りやがった!!」

「あんなの虚勢だ！よく見てみる、バッジは一個しかないじゃないか。あれはああやって敵の氣勢を削ごうとする奸策だ！」

「いや……たとえ形だけだとしても、勝算が無ければあそこまで傲慢な態度は取れない。ということ……」

「そういえば、彼はマサキさんの紹介でこの大会に出場したとか……まさか、マサキさんが実力を認めたトレーナーなのか!？」

「これは大変な事に……報道本部に電話を繋げる！もっと人員を現場によこすんだ!!」

「ざわ……ざわ……」

再びざわめきが聞こえてくる。

「（ふっ、作戦は成功の様だな……）さあ、行くぞ！遅れた分を取り戻すのだ！そっちも早く準備しろ。いつまで震えているんだ」

再び、主の挑発が炸裂する。さすが主だ。私の挑発より効果は抜群だ！

「ぐっ、ぐぬぬぬぬ……」

「早く準備しやがれ！舞台から降りる準備をよ!!」

ああなれば、龍程度の知力でも挑発は成功する。まあ、奴も相当挑発してくれたから、これでおあいこだ。

「ぐぬぬぬぬぬ……貴様らあああ!!もう許さん！ブーバー！エレブー！格の違いを見せてやれ!!」

彼は今までずっと無視され続けた自分の従者に号令をかける。

「やっと出番だ！マスターの事を羽虫と言いおつて！許せぬ……」

「だが、何より許せぬのは……」

「俺達をずっと無視し続けた事だ！！」

沸き起こる激情を武器に、彼らは私たちに襲い掛かった。

「ブーバー、リザードにメガトンパンチだ！エレブー、ギャラドスにかみなりパンチ！！」

「龍宗はメタルクローで敵の攻撃を打ち負かせ。瀬奈はかみなりパンチを受け流し、反撃の機を待つのだ」

「了解！！」

サントアンヌ号大会第一回戦。これは優勝最有力候補による無名トレーナーの殲滅戦になるはずだった。

しかし、今のこの状況は誰がどう見ても、その『優勝最有力候補』が単なる『無名のトレーナー』によって手玉に取られ、怒り狂っているのしか見えない。浅井光就……我が主ながら、恐ろしい男だ。

焦心の計は成功に終わった。敵を怒らせる事に成功し、さらに観客の注目を集める事も出来た。

だが、この一戦にて勝利を納められねば、この計略の意味が無い。そして、この戦いには複数の問題点がある。まずは、相手の力量だ。トレーナー自身は気位が高いだけの凡愚だが、腐っても優勝最有力候補。彼の萌えもんはどれだけの力を秘めているのか、分かりかねる。

さらに、この大会のルール、ダブルバトルというものに私自身が馴れておらぬのも問題だ。私は基本一対一の戦いでしか采配を振るっていない。実際、龍宗や瀬奈は修業の過程上、ダブルバトルを何回も行っているが、私はそれを行っていない。

まあ、前者はともかく、後者は戦っている内に学ばばいい事だ。この戦いは負けられないが、ロケット団と戦っているわけではない

から、命の危険は無い。そうとくれば、自然と采配も軽くなるものよ。

「ブーバー、リザードにメガトンパンチだ！エレブー、ギャラドスにかみなりパンチ！！」

「龍宗はメタルクローで敵の攻撃を打ち負かせ。瀬奈はかみなりパンチを受け流し、反撃の機を待つのだ」

「了解！！」

龍宗はメタルクローを発動した鋼の爪で、敵のメガトンパンチを受け止めた。

「な……何だとッ！？」

「敵は戸惑っておるぞ！きりさくで攻勢に出るのだ！」

「おう！行くぜ……きりさく！！」

ひっかくの上位技であるきりさく。単純に威力が上がっただけではなく、攻撃範囲の広さで、敵の弱点に当てやすいという優れた性能を持つ。切り込み隊長の龍宗にはピッタリだ。

「おらおらおらおらああああ！！」

（圧倒的攻勢で敵のブーバーを押さえ込んでいる。ここは大丈夫だな。さて、次は……）

かみなりパンチを受け流し続けている瀬奈である。

「瀬奈、蹴りで敵を吹き飛ばせ！間合いを取るのだ！」

「了解！でやあ！！」

かみなりパンチの隙について敵の鳩尾に蹴りを繰り返す。堪らずエレブーは二歩三歩後退りする。その内に瀬奈はバックステップで距離を離す。

「今ぞ、りゅうのいかり！」

「私の怒りを味わうが良い！！」

紺色の炎を放つ瀬奈。焼かれる敵。

「攻勢を緩めるな！一気に間合いを詰め、近距離戦に持ち込め！」

「甘い！エレブー、10まんボルト！！」

「ハハツ、俺の電撃を食らいな！」

水・飛行の瀬奈にとって電気技は四倍の威力。致命傷である。だが、光就は次の瞬間、信じられない指示を出す。

「瀬奈、突っ切れ！」

狂気の沙汰。ギャラドスにとっては、かすつても危ない強力な電撃を正面から打ち破れと言うのだ。

これには観客もポカンとしてしまった。そして、聞こえるのは対戦相手の嘲笑。

「アハハハハツ！お前馬鹿か？水・飛行のギャラドスが10まんボルトなんて耐えられる訳無いなんて常識じゃないか！ふふん、所詮は口だけか。エレブー、最大出力でやってやれ！」

「ヘツヘツヘツ、覚悟しな！」

10まんボルトの出力が上がり、30まんボルトくらいになっても、瀬奈と光就の余裕のある表情は変わらない。

「信じているぞ主。海風瀬奈、いざ参る！」

瀬奈は掛け声を挙げ、天敵たる電撃の中に突撃する。

誰もが瀬奈の瀕死を疑わなかっただろう。しかし、その期待を弾き返す様に、彼女は何も無い広野を走るが如く、電撃内を駆け抜けた。

「なっ、なっ、何だと!？」

「気を抜いてる暇は無いぞ！でやあああああ!!！」

瀬奈の連撃は電撃を突っ切られるとは思っていなかったエレブーに全撃当たった。

「機は熟した……！瀬奈！龍宗の方向にエレブーを吹き飛ばせ！龍宗は瀬奈がいる方向にブーバーを吹き飛ばせ！」

戦っている四人の位置関係はちょうど一本の直線で結ばれる。その状況で互いの方に向かって吹き飛ばすということは、

「ギャツ！」「グヘツ！」

吹き飛ばされた対象が互いにぶつかり合う……密集するということだ。

「とどめだ！ 瀬奈、龍宗、一斉に放てい！ りゅうのいかり！！」
「これが私たちの怒りだ！！」

「俺様たちを怒らせたこと、あの世で後悔しやがれ！！」
両端から放たれる紺色の炎。それを攻撃を受け続け、へ口へ口な状態の両者に避ける術は無く、それらがぶつかり合い、それによって起きた爆発に巻き込まれた。ダメージ量に換算すれば80のダメージである。前々から食らっていたダメージもあり、当然瀕死は免れるはずがなく、彼らは地に伏した。

「……エ、エレブー、ブーバー戦闘不能！ よって勝者、浅井光就！」
判定員もまさかの大金星に噛んでしまう。

「そ、そんな馬鹿な……この僕が負け……」

「おお………」

観客も二つのりゅうのいかりが激突し、大爆発を起こすという技の壮大な美しさと、信じられない勝負の結果に、茫然としている。

……ただ一人を除いて。

「凄いですよう！！ 瀬奈さん！！」

美空さんである。瀬奈に抱き着こうとしたと思っただら、いきなり、

「きゃあああああ！！ 痺れりゅううう！！」

と叫び、パタンと倒れた。

「な！ 美空殿、どうされた！？」

慌てて瀬奈が介抱しようとしたが、

「待て、瀬奈！ お前は触るな！」

と、光就に制止されてしまう。

「お前は帯電しているのだ。触ったらますます悪化する。ここは私に任せよ」

そう言い切ると、美空さんの上半身を持ち上げ、活を入れた。

「う、うーん……あ、あれ？ 何で倒れてたんですたっけ……？」

一瞬の事でよく覚えてない美空さん。やがて、光就が介抱してくれた事に気づくと、

「あっ！……あ、ありがとう……です」

「ふん、瀬奈ではまた痺れさせてしまうから代わりにやっただけだべ、別に、お前の事が心配で助けたわけでは無いぞ。勘違いするでない！」

と、何故かツンデレ反応を見せる光就。

「ああそつだ。瀬奈、帯電を解きたいなら海に入ってこい。電気が付いた水が流れるはずだ」

「……………？ああ、分かった」

帯電の意味が分からないが、言われた通り海に飛び込む瀬奈。

瀬奈がエレブーの10まんボルトを食らっても平気だった理由は、帯電した水を纏っていたからだ。では、いつ帯電したのかというと、それはかみなりパンチを受け流していた時だ。本来なら、完全に避けてしまいたい電気技を受け流させていたのはこの為だ。拳から漏れだした微量の電気を瀬奈の水のバリアは吸収し、電撃突入時には、それらが周りの電気を反発し、吸収した。よって、瀬奈は無傷で済んだのだ。なお、水のバリアは彼女に接していない。

しかし、本来はエレブーの特性、せいでんきで痺れるのを防ぐ為のものだったのだが、結果オーライである。

「ふう……………さて、舞台を降りましょう」

光就は舞台から降りた。この頃になると、ようやく人々は目覚め始め、ざわめき出した。

「こ、この結果は……………」

「いきなりの大番狂わせだ！今年は面白くなりそうぞ！！」

「ノーマークのトレーナーだったが、優勝最有力候補だった彼を、まるで赤子のようにあしらい、そして勝利。何という奴だ……………」

「浅井光就、ただ者では……………無い！」

「これは想定外だ！至急報道本部に電話を繋げろ！現場に人員を……………いや、もう全員出てこい！！」

「ざわ……………ざわ……………」

光就の目標が達された瞬間である。

そして、同時にこれは後に漆黒の皇帝と呼ばれる伝説の萌えもん

トレーナーの名声を知れ渡った瞬間でもある。

中編に続く。

第十六話前編：サントアンヌ号大会第一回戦の衝撃（ここにいるぞ！！）

（後書

龍宗「ハツハツハツ！俺たちの力、見知ったか！！」

瀬奈「浮かれるな龍！まだ一回戦だぞ。浮かれるのは優勝してからだ！」

龍宗「お、おう、そうだな。瀬奈の言う通りだ」

瀬奈「それに今回は新キャラの動きが無かったしな。嵐の前の静けさ……って奴か？」

龍宗「新キャラ？んなの居たっけ？」

瀬奈「……まあいい、次話投稿は一月二日だ。一週間も投稿を遅らせた馬鹿は私たちのWリゆうのいかりで星にしてやったぞ」

龍宗「期限は守らなきゃな」

瀬奈「ああ、その通りだ。ところで龍に相談があるのだが」

龍宗「お、何だ？また師匠のことか？」

瀬奈「いや違う。……なあ、私って、初登場時からかなり男らしくなっていないか？」

龍宗「さあ……俺にはよく分からないなあ。まあ、そこが萌えるって奴もいるだろ」

瀬奈「むう……そうか」

第十六話中編：陰謀渦巻く豪華客船（三十六計逃げるに如かずです）（前書き）

やあ（、・・・、）

中編だよ。相変わらずグダグダだよ。でも急展開なんだ。

光就と美空さんの復縁のプロセス……いろいろ考えてたのですが、
これが一番しつくりきたんで。

第十六話中編：陰謀渦巻く豪華客船（三十六計逃げるに如かずです）

日は高く登り、西に傾き出しました。

（大会も観衆が入りきり、いよいよ盛り上がりを見せるでしょう。そして、それに反して警備員のモチベーションは下がりに下がるでしょうね。フッフ……今こそ好機です！）

私は満を持して船の前に行く。ちょうど一人しか警備員はいなかった。

「はあ……ズルイなあ。あの人警備の仕事、俺に押し付けて大会見に行っちゃうなんて……ああ、船にはチケットが無きゃ入れないよほら、帰った帰った」

「おやおや、ご機嫌ななめですね。まあ、チケットはあるのですがね。船のチケットでは無いのですよ」

「はあ？何言ってるんだ？」

「しかし、これは紛れも無く船のチケットです。これを渡す事により、貴方は私を船に乗せざるを得ない。私の計算に誤りがなければ……」

そして、訝しんでいる船員にそのチケットを見せる。

「船のチケットの代わりに、これで私を船に乗せてくれませんか？」

そう、私の策は、贈賄。彼の情報はすでに収集済み、アイドル好きなのは私にはお見通しです。

さあ、船に入れてもらいましょうか……。この今日、ヤマブキ開催の鴨音ミクコンサートのS席チケットで！

「うっ！こ、これは……夢にまで見た……」

「ええ、しかもS席です。間近で見られますよ」

「うっ！し、しかし、船の警備が……」

「おやおや、良いのですか？今日公演なのですよ？今すぐ行かないと始まってしまいますよ」

今日公演というのがミソです。きっと彼はコンサートが今日行わ

れると知ってながら、そして、その日にサントアンヌ号がヤマブキに近いクチバ港に停まるという偶然に見舞われたにもかかわらず、チケットを手に入れる事ができなかった。

手に入れられなかったものは仕方ないから今日は大会観戦を楽しもうとしていたのに、船の警備に白羽の矢を立てられ、拳銃の果てには相方の同僚か上司に警備を押し付けられる始末。

そんな時に来たのは、あんなにも行きたかったコンサートのチケットを差し出す私だ。その条件は警備員としてはやってはいけない事だが、それに見合うほどのものがこれなのである。

「むむむ……」

「どうしました？要らないのですか？」

「いや、要る！し、しかしだな、どこの馬の骨とも分からん奴を船に入れる訳には……」

煮え切らない方ですね……。少し焦らせますか。

「ふむ、そうですね。では交渉は決裂という事で……」

「ま、待ってください！」

動揺は大きいようですね。では、トドメと参りましょう。

「私はアイドルには興味ありません。船に乗せてくれないのであれば、私にとってこれはただの紙屑ですね。捨ててしましましょう」

そうわざとらしく言って、ちょうど私の方向からの追い風が吹いた時にチケットを放す。自分の憧れのチケットが紙屑として捨てられる……。彼は理性も平常心もかなぐり捨て、チケットにかじりついた。……計算通りです。

「……お前、入るなよ。絶対入るなよ！……俺が見ている間は」

チケットを手にしたまま、後ずさりで見ながら棧橋を渡っていたが、やがて振り返って走って行った。

「やれやれ……まあ一応、代役は立てておきますね。みがわり！」
彼の分身を作り出す。

「さて、参りましょうか」

ようやく船内に入る事ができた。だが、問題はここからだ。

（出来れば、二人きりでのコンタクトを計りたいものです。しかし、トレーナーはその従者たる萌えもんと共に行動するもの。それは難しいですかね……）

しかし、その機会は意外な方向からやって来る。私はそれに運命を感じざるを得なかった。

知将、乗船。

ドタドタと廊下を走る音がする。

「トウカ様！ 一大事です！ み、光就が勝ってしてしまいました！」

黒ずくめの戦闘服に、胸にRのマークの男が慌てて彼の上司に報告する。

「へえ、まあ驚く事も無いかもね。あいつはサカキ様に実力を認められてるしね。まあ、その捕縛を命じられている私も同様に認められてるんだけどね」

その上司とは、ピンク色の短髪に独自に改造を加えたロケット団の制服を着ている女性である。美少女というよりは、美女に近い。美空さんや瀬奈とはまた違った魅力を持っているのだが、少女からいまいち大人の女に成り切れてないという感じがある。

「んー、もしかしたらもしかしちゃうかもしれないわね……ねえ、大会主催者の部屋ってどこ分かる？」

「大会主催者ですか？ おそらくあそこではないかと……」

ロケット団の男はサントアンヌ号の船首を指差した。

「うーん……まあ、後で何となく聞いてみるわ」

そんな事を言っていると、いきなり無線が鳴った。

「はい、もしもし、特殊部隊五幹部のトウカですよ」

「トウカか、私だ。お前が受けているSランク危険人物の捕縛任務だが……私も同行させてもらう事になったぞ。この任務、お前だけでは達成に不十分とボスは判断された。よって、急遽派遣される事

になった。昼過ぎぐらいにはそちらに着けるはずだ。それまでに絶対に逃がすなよ。後、戦つてもならん。無駄に警戒されては困るからな。分かったな？」

「……はい、わかりました。救援ありがとうございます。首を長くして待つてますわ」

「ふん……」

ガチャツと無線が切れる。トウカは無線機を外すと不機嫌そうに無線機を投げ出した。

「ちっ、あのジジイ！何がボスが判断されただ！自分が進言したクセに！ああ、腹が立つわ。あんなジジイにはグレン島の資料漁りがお似合いよ！」

どうやら彼女とさっきの無線の相手はあまり仲が良くないようだ。

「……おっ、そうだイイ事思い付いたわ」

突然手をポンと叩くと投げ出した無線機を拾う。

「……あつ、筆頭！お久しぶりです。いや、今日はちょっとお願いがありました……クチバ上空に検問を配置してくれませんか？いや、グレンから救援が来るんですけど、その中に敵が混ざり込んでるといふ報告が入りまして……おお、そうですか。ありがとうございます。さすが筆頭、頼りになります！今度は直接会えると良いですね。では、またの機会に」

無線機を切る彼女は、満面の笑みを浮かべていた。

「よっしゃ！クチバ上空の警備を強化してやったわ！」

「えっ、そんな事をしては、あのお方の着陣が遅れてしまいますが……」

部下の団員が慌てる。

「はあ？何言つてんの？あんなジジイいなくてもワタシの策であるのは楽々捕まえられるわよ。実際、離間の計はことごとく成功したわ」

離間の計……敵同士の猜疑心を煽って、仲を裂き、内部崩壊を誘発する計略。

「あいつ、人を率いる者としての魅力が無さ過ぎるのよねえ。にもかかわらず人柄が良くないから側近に愛想尽かされちゃうのよ。そこを突けば仲を悪くするのは簡単だったわ」

と彼女は語る。

「フフフ……でも、それももう必要なくなっちゃったわ。もっと手っ取り早い方法があるんですもの」

それは直接手を下してしまう事だ。もちろん無策では無い。

「どうやらこれの出番のようね」

と言って、彼女は筒状のものを取り出す。

「超強力な即効性睡眠薬をたっぷり仕込んだ吹き矢よ。これに撃たれたらどんな奴もすぐに夢の中よ」

「なるほど！これをあの憎き光就めに撃つ訳ですな！」

「はあ？あんた馬鹿？あいつはねえ……実験体用の麻酔銃食らって一時間後にはピンピンしてるような奴なのよ？そんなのにこんな効く訳無いじゃない！それに、本人にやるより効果的な方法があるのよ」

と言うとトウカはニヤリと笑う。

「それは奴の恋人、神風美空を捕らえる事よ。そして、それをダシにして光就に投降するように脅すのよ。奴を捕らえるなんてワタシの能力とこの吹き矢さえあれば造作も無いことよ」

そう言うと、トウカは立ち上がり、

「かわいそうな娘ね……。恋人の為に去ろうとした所を捕まってしまい、気高い彼がワタシに自分の為に屈するのを見る。自分の存在が彼に迷惑を掛けている事を知り、自害する。素直ではなかったけど、誰よりも彼女のことを愛していた彼はその後を追うのよ。ああ！なんとという悲劇！」

まるで芝居の様に高らかに、大袈裟に語る。

「フフフ……素晴らしいわ……。演技なんかじゃない本当の涙は、嗚咽は、激情は、実に素晴らしいわ！アーハッハッハッハッハッハッハッ！

堰を切ったように大笑いする。

「ハツハツハツ……、さあ、『二人を裂く桃色の罫』非情なる鋭刃』の第二幕、開演よ！」

トウカには自分の計略を芝居調の名前にするのが好きらしい。そして、自らが作り出す『悲劇』の為に、ありとあらゆる手段を用いて『悲劇』の登場人物達を手玉に取り、傷つけていく。

そんな彼女に、人の道徳も倫理も通用しない。する訳が無い。彼女は自分作の『悲劇』で自分が楽しめたかという事だけが正義なのだから。

続く準々決勝、準決勝も難無く勝ち進んだ光就達は夢の優勝まで後一步と迫っていた。

「にしても……よくここまで来れたもんだ。ホントのこと言うと、どっかで潰されちゃうんじゃないかって思ってたんだがな」

龍宗はそんな事を口にした。

「それはおそらく、我らの対策を怠っていたからだな。一生懸命対策していた奴が負けてしまつて戦略が崩れてしまつたからだろう」

光就はこう分析する。

「愚かな話だ。そもそも戦略家たる者、起こり得る全ての事象に対して大まかな対応策を模索する事が肝要なのだ。たとえ、それが無駄になったとしてもそれはそれで喜ばしい事だ。計算通りだからな。それを徒労と思うなら、戦略家なんて辞めてしまえ。そんな輩はどうせ遅かれ早かれ没落するのだからな。良いか、戦略家には五つの美德というものがあつてだな……」

延々と口弁を垂れる光就に嫌気がさしてきた二人。だが、それと同時に彼にもこんな一面があるんだな……としみじみ思いもした。今の光就の表情はとても爽やかだった。……口からは毒が吐かれて

いるが。

（光就もこんな顔をするなんて、初めて知ったぜ。やっぱりあいつも人の子か）

（こんなに心地良さそうに話してくれるならいくらでも聞いてあげても良いかもな）

と二人は思つた為、逃げ出さなかつた。

でも、こんな温かい時間の終わりを告げる鐘がなる。

「決勝戦まで後五分に迫つてまいりました。さあー、我らが浅井光就はこの決勝でも派手な登場をするのか！？皆さん期待して待つてましよう！」

「やれやれもう時間か。てか、たかが三勝した程度で持ち上げられ過ぎだ。瀬奈、大丈夫だな？」

「あつ、あああああ、ああ大丈夫だ。あ、安心しろ。わ、私ほどになれば緊張などせぬ」

「あが七つ、わとつが一つずついらぬ。あと、『私ほどに』ではなく、『私ほどにも』だな」

「うぐつ……！か、からかうな！」

瀬奈のあがり性はどうかやら一過性のもらしく、事が始まる頃には無くなってしまうらしい。だから、光就は安心して瀬奈をからかえるのだ。

「さて、一つ言い忘れた事があつた。今度の敵は私達への対策をしているぞ」

「へえー、先見の明がある奴もいたんだな」

「いや、彼の場合本当はそういう訳では無いのかもしれん。まあ、こんな大舞台で彼と戦う事に、少なからず因縁を感じるな」

その決勝戦の相手とは他ならぬ大木戸秀明の事である。

彼はどこで嗅ぎ付けたのか、この大会に光就が出る事を知り、先のゴールデンボールブリッジでの雪辱を果たすべく、涙ぐましい努力を重ね、現在に至つたらしい。「私は秀明のそんな所を評価し、尊敬している」と光就に言わしめた不屈の精神を以つて。

「瀬奈、龍宗、一度勝つた相手と思つて油断するなよ。おそらくこ

の戦い、決勝に相応しい激戦となるだろう」

「元より油断などしない。そんな相手に礼を欠くような事は人の上に立つ者として、行つてはならぬ事だ」

「なんせ、光就ほどの男のライバルを八年も続けてきた奴だろ？油断なんてしてるヒマはねえ！」

と二人は言い切った。

「ふっ、聞く方が愚かであつたか。よし、では最後くらいは正々堂々正面から立ち向かうとしよう。……行くぞ！」

「オー……ッ！！」

三人の心が一つになつた瞬間である。

（ふっ、全てはこの光就の計算通りだ。奴と決勝で当たる事になつたのも、私が有名になつたのも。後は……最後の一手を打つのみ！秀明、勝たせてもらうぞ……！）

ここで一つ説明をしておきたい。大木戸秀明の事である。

記憶力の良い読者の方は覚えていかもしれないが、何せ作者たる私も彼の事を忘れてしまつていたので、ここで彼の人となりをもとめてみよう。

大木戸秀明

カントー・マサラタウンの人。

祖父はかの有名なオーキド博士で、本人もまた非凡なる才人である。

しかし、神童と称された秀明も十歳の時に出会つた浅井光就にその矜持をくじかれる。それ以降、光就は彼にとって好敵手であり、大きな壁となつた。

これらの事象を経て、いよいよ十八歳となり、世界に羽ばたく時が来た。しかし、そのデビュー戦はあまりに悲惨なものだつた。光就に相棒のゼニガメの行動を読まれ、絶妙な守りと攻めで翻弄され、

結果敗戦する。

また、リベンジ戦であるゴールデンボールブリッジの戦いではもっと悲惨な結果であった。瞬殺である。

これらの戦いから光就という壁の高さを痛感し、血を吐くような修業が始まった。より速く、より鋭く、より堅くなるように。

その効果が如実に現れたのが、サントアンヌ号大会クチバ予選である。予選のルールはバトルロワイヤル。参加者百人に対し、勝者はたったの一人という苛烈な状況下において、半数近くの敵を倒したのだ。劇的な結果だった。

しかし、光就にとっては劇的でも何でもない。必然……計算通りだった。

光就は彼が次々と敵を撃退していく様を見て、予選の勝者を確信し、戦闘の最中であつたにもかかわらず、ハナダへの帰路に着いた。近い未来に自分に立ち向かう好敵手の姿を見ながら。

光就が大人しく帰らなかつた真の理由……それは、熱い未来に血気が逸ってしまったが故の暴走だろう。かの浅井光就も老獪な戦略家である前に若輩な戦士なのだ。

光就は初期能力差という断崖絶壁をよじ登ってきた好敵手に敬意を表し、決戦の舞台に上がる。

秀明もまた、大金星をあげた好敵手を目前に、意気衝天、決戦の舞台に上がるのであつた。

「光就、ハナダ以来だな」

圧倒的な重圧と緊張感が存在するこの舞台上で最初に口を開いたのは意外にも秀明だった。

「はて……ハナダではお会いしなかつた様な気がしますな。そこでは一分とかからず果てた虫けらにしか会えませんでしたなあ」

光就お得意の挑発である。しかし、それを秀明は漫然と受け流し、言い返す。

「そんな挑発には乗らないぞ。光就、最後くらいは正々堂々戦つたらどうだ？それとも、そんな事をしなければ勝てないのか？その虫

けらに」

「ほう……まさか挑発が返されるとは……少しは知恵が回るようになつたのだな」

光就は予想を超えるライバルの成長に内心驚きながらも、すぐに頭を切り替える。今の秀明に小細工は無用と悟つたのだ。

「分かつた。お前の望み通り、この光就の実力、その身に深く刻み込んでやろう！」

人差し指と中指を立てたものを天に掲げ、振り下ろす。瀬奈と龍宗に対する戦闘開始の下知である。

「いざ参る！」「へっ、行くぜ！」

そして秀明も戦闘開始の指令を出す。

「光就、いつまでも上だと思つなよ。……行くぞ！」

「じゃあ、勝負と行きますかね」「いざ！」

ここで絶妙に戦闘開始のゴングが鳴る。戦いの火蓋は切つて落とされた。

わたしの存在は希薄になっていく。でもそれでいい。光就さんに忘れ去られるより、嫌われる方が何倍も……辛いから。

わたしにとってこれが最良の選択。……なのはどうしてだろう。

止まらない。目から水が止まらない。大粒の涙が止まらないんです……。

「光就さん……」

遠くであなたを見ているだけで良かった。遠くであなたを想つてるだけで良かった。遠くであなたの名声を聞いているだけで良かった。

でもこの三ヶ月、わたしはあなたと共に歩き、共に戦い、……キスマで……しちやいました。わたしは幸せでした。だから、これを壊したくない。光就さんを困らせたくない。光就さんを怒らせたく

ない。

「光就さん……ごめんなさい……」

わがままでごめんなさい。結局、最後まで光就さんに迷惑かけてしまいましたね……。ごめんなさい……。

「光就さん……さようなら……そして、ありがとうございます……」

このマント……ずっと大事にします。光就さんが買ってくれたものだから。こんなわたしの為にありがとう……です。

「光就さん……お大事に……！」

翼を広げ、飛び立つ。目の前にあるのはあまりに清々すぎる青空。まるで無理してるかのような。

「っ……！」

こんな所で躓いている場合じゃない。早く離れなきゃ、わたしみたいな疫病神は光就さんみたいな輝いている人にはいちゃいけないんですっ！

わたしが加速しようとした時、

「……ふざけるな！」

いきなり声がした。……この声を聞き間違える訳が無い。……光

就さんだ！

「何が疫病神はいちゃいけないだ。自分だけいい子ぶるなよ美空！」

えっ！？わたしの心が見透かされてる！？

「今のお前ならエスパーでなくても心を読めるわ！美空、私の話を聞いてくれ。……私を見捨ててくれるな」

「！光就……さん……」

見捨てないでくれ。光就さんを悲しませてしまうなんて……わたしはまた迷惑をかけてしまった。

「光就さん……ごめんなさい……今すぐ行きますっ！」

「美空……早くここまで来い」

光就さん……嬉しい。わたしなんかを必要としてくれるなんて。

わたしは愚か者です。やっぱり……光就さんと一緒に居られるのが一番ですっ！

「美空……貴女馬鹿ね」

「えっ!？」

と気づいた時にはもう睡魔に襲われ、意識を失っていた。

「ウフフフ……やったわ。浅井光就の弱点をとうとう捕まえたわ。案外簡単に捕まっちゃったのがちよつと興ざめだけど、ま、いいでしょう」

光就は顔のマスクを剥がす。その中から現れたのは、トウカの顔だった。

「フフフ……ワタシは変幻自在。男でも女でも子供でも年寄りでもどんな姿にでもなれるわ。そう、ワタシはメタモンガール。変装を極めし者」

トウカの超能力。それは人であればどんな姿にも変装できるといふもの。

彼女の得手とするものは他者のモノマネである。それも形だけではない。モノマネする者の言葉遣い、口調、声質はもちろん、癖、雰囲気、果ては考え方まで真似するのだ。

むろん、彼女はれっきとした人間である。それにもし萌えもんだつたとしてもモノマネする者の内部まで真似る事は出来ない。

そんな彼女の能力を支えるのは、並外れた観察力と記憶力である。それは観察する人の一挙手一投足を驚くべき早さでその人の癖として把握し、その全てを記憶してしまふ程である。

そして、いざ真似る時に、覚えた癖をどう組み合わせればうまく騙せるか、これを瞬時にかつ確実に決める判断力である。モノマネをしている時、彼女の頭は際限無く活性化し、その時の彼女の頭脳には光就でさえ勝てないかもしれない。

「フフフ……グレイもгентウさんもあんなの何に苦戦してたのか分からないわ。配下の心も掌握出来ないなんて、トレーナーとして論外すぎるのよ」

とトウカは不敵に笑っていた。

そして、その様を見ていた者が一人。

「これは大変な事になりましたね……。やれやれ人質なんて如何にも姑息な口ケツト団の手口ですね」

（私が助けますか……。？いや、失敗してしまつたら彼女の身が危険に晒されてしまいますね。ここは仲間を増やし、その上で助けるのが上策。人質ならば変事が無い限りは身の安全は守られるでしょう）

チキンと言うな。彼の實力はトウカには遠く及ばない、良い判断である。しかも、船内ではレポートが使えない。壁がアンチレポート効果のある素材で出来ているからだ。流石、豪華客船。

（やれやれ、こんな形で浅井光就との接触を計る事になるとは……。）と憂慮しながら彼は甲板に向けて走る。そろそろ決勝戦も中盤ではないだろうか。

（大きな船です。私が着く頃には決勝戦も終わるでしょう）

知将、疾走。

後編に続く

第十六話中編：陰謀渦巻く豪華客船（三十六計逃げるに如かずです）（後書き）

龍宗「くう！ちようど最高に盛り上がる所で止めやがったな！作者め！」

瀬奈「仕方あるまいよ。次話投稿は一月九日……そして、読者の皆様、明けましておめでとございます」

龍宗「今年もよろしくな！」

??「やれやれ……呑気にして良いんですか？お仲間がさらわれたと言っのに……」

瀬奈「誰だお前は!？」

??「ハナダの隠士……って私の正体は後編でちゃんと明かしますから我慢してて下さい！」

龍宗「仕方ねえな……てか仲間がどうしたって？」

??「後書きでネタバレするものですか！さらばです！」

第十六話後編：激戦、サントアンヌ号大会決勝！（フラグ回収？なにそれおい

やあ（、・、・、）

タイトル通り、今回はフラグ回収せずに大会を終わらす事に専念するよ。

果たして、光就は優勝して栄光を掴むのか、それとも敗北の辛酸を舐めるのか……。彼らの運命はその采配に託された……。！

（敵はカメールとラッタ……こちらがやや不利だな）

光就は冷静に状況を分析する。

（四人の実力差は多分、ほぼ同じ。ならば闘志の上下で勝負が決まる……）

龍宗と瀬奈を見る。どちらも闘志満々たる顔付きだ。

だが、それは相手にとっても同じ。心構えに関してもその優劣は付けられない。

（となれば、この勝負は私と秀明の采配が決めることになるだろう）

「ククク、この戦い……私の勝ちだな」

光就の思わず漏れた勝利への確信。

「何……？」

「用兵の術数で、お前が私に勝てる訳が無かるう！確かにこの一ヶ月でお前の萌えもんは強くなった。だが、どんなに強い萌えもんも愚かな指揮者が采配を振るってはその力の一分も引き出せぬわ！……

…お前の戦術はちゃんと自分の配下を活かしているのか？」

「なっ……！」

これは痛い所を突かれた。光就と秀明の差を開いたものは知略だったからだ。

光就は一見効率悪いようにも見えても、まず足を止めて考える。

それによって得た戦術の数々を駆使して秀明を追い上げ、勝利を収める。そして、その為に必要な知力の修練に余念が無かった。結果としてそういう態度の違いが今日までの差を生んでいたのだろう。

「お前は私に勝てない。我が知謀の前に果てる運命なのだ！」

「……相変わらずだな。頭の良いお前にとつちや、自分の萌えもんも単なる駒にしか見えてないんじゃないか？」

突然、呟くように秀明が言う。

「さっきから聞いてれば、戦術だの計略だの……いいか光就、俺は

あんたのそういう所が昔つから嫌いだった。勝負つてのは頭の働きの決めるもんじゃねえ。心だ。人も萌えもんも理屈だけじゃ生きていけねえだろ？ましてやこれは人と萌えもんが力を合わせて初めて勝てる萌えもんバトルなんだからよ」

秀明は高らかに言う。だが、光就も負けじと言い張る。

「ふつ、萌えもんバトルに一番大切な事……それは戦略だ。まさか我がライバルが心だのなんだの言う奴だったとは……私は残念だ。そんな綺麗事、戦いには一切通用せぬ。そんな分別もつかないとは、何と憐れな男なのだ大木戸秀明よ」

光就が相手の口喧嘩では勝った経験が無い秀明は、最後に偶然思いついた言葉を投げかけた。

「光就、単純に頭の戦いをしたいんだつたら将棋でもしてりやいだろうが。あんたの萌えもん達がかわいそうだぜ」

「な、何だと！」

それは意外にも光就の急所に当たったようだ。彼の脳裏には、あの時の美空さんの表情が浮かぶ。だが、手を勢いよく横に下ろす事でそれを振り払う。

「黙れ……！自分本意の考えで私のみならず、瀬奈や龍宗や美空までも愚弄するか！許さんぞ……秀明、我が鬼謀の前に再び堕ちるがいい。今度は二度と登ってこれぬよう、地獄の底までたたき落とすてやる……！」

語勢は荒いものの、頭は常に冷静である。

（これは秀明の挑発だ。だが、ここは敵の策を利用して自分の策にしようとするのがいい。あえて奴の挑発に乗ってみるか……）

光就はそう結論付けた。

「瀬奈はカメラールに当たれ！龍宗はラッタに当たれ！攻撃ではこちらの方が一枚上手……なんとか打ち勝てるはずだ」

「了解！」「分かったぜ！」

「まあ、順当だな。ラッタ！ひつさつまえばでリザードを迎撃！メルはからにこもるで耐え抜くんぞ！」

メルと言うのはカメールのニックネームらしい。なんともまあそのまんまである。

「いきなりですか？……からにこもる！」カメールは堅い殻に閉じこもる。それは、鉄壁の要塞の如き防御力を誇るが、瀬奈にそんなのは関係ない。

「フツ、守りを固めても無駄だ！りゅうのいか……」

「瀬奈！左に跳べ！」

りゅうのいかりを溜めている最中であつたが、光就の指示通りに左方向に跳ぶ瀬奈。そしてその刹那、弾丸の様に飛び出したカメールが彼女の目前を通過する。

「やはりな……今のはからにこもるではなくロケットずつきだな？守りに入つたと見せ掛け、油断した所を討つというわけか。下らん猿知恵だ」

「やっぱり見破られましたか……マスターの浅知恵じゃ光就を欺くなんて百万年早いようですねえ」

カメールが自分の主に向かって毒を吐く。むろんそれは主をけなしているのではなく、激励しているのである。秀明はツンデレ萌えのDMなのだ。

だが、これ以降カメール対瀬奈の戦場は硬直する。からにこもるを行つたまま、カメールはちつとも動かなくなつたのだ。

ロケットずつきの構えなのだとしたら、りゅうのいかりは使えない。だが、かと言つて直接攻撃はもつと危険だし、成功したとしても効果が薄い。更に、ああいう移動型の技は受け流しする利点がない。

（瀬奈はオールラウンダーと思つていただと思つていただが、意外な所で手詰まつたものだな……）

今、瀬奈は形だけの受け流し体勢をとっているが、前述の通り、受け流しによつてこの膠着戦線は解けない。

だがしかし、これを前向きに捉えようと、カメールも同様に動けないのだ。ロケットずつきの様な溜め技を構えている間はそれ以外の

技は当然出せない。

（カメールの技はおそらく、ロケットずつき、みずでつぼう、かみつく、からにこもるの四つ。公式戦では登録した四つの技以外の技指示及び使用は反則。だからさつき『からにこもる』を指示した以上、その四つの中にかからにこもるが入っているのは確実。かみつくなら瀬奈は受け流せる。みずでつぼうは瀬奈には効かない。まあ、それ以前にそれらの技を使う為にはロケットずつきの構えを解かなければならない。そんな隙を彼女が見逃すはずがない。りゅうのいかりから連撃につながれば、いくら防御の堅いカメールも一気に倒せる。むろん、相手もそれを分かっているからこそ、瀬奈に手だしできない。ふつ、物は言いようだな……私はこの戦線を制した。当分ここは大丈夫だ。ならば目を向けるべきは……）

龍宗対ラッタの戦線。多少龍宗が押している様に見えるが、押したら押し返すの繰り返しでやはりこちらも膠着している。しかし、この膠着は采配を一振りするだけで解けるものだ。

（ひつさつまえばの威力は侮れぬ……瀬奈と違って龍宗は守りが下手で、意外と脆い所がある。一発食らうだけでも辛い。だが……！）
「龍宗、メタルクローを解け」

龍宗はひつさつまえばに相性のいいメタルクローで打ち合っていたが、いきなりそれを解く。

「好機……！食らえ……！」

それに付け入り、一気に勝負を決めようとするラッタ。

「待てラッタ！」

だが、一度勇み足を踏んでしまったラッタに秀明の制止は逆効果。
「今だ！決めてしまえ！」

龍宗の格好の餌食にしてしまう。

「じゃあな……きりさく……！」

第一回戦においてブーバーを圧倒したきりさくよりもメタルクローを経て爪の堅さが増し、より殺傷能力が高まっているきりさくである。これによってラッタは倒れてしまう。

「なっ……！ラッタ！！」

（この勝負……もらった！）

「龍宗！瀨奈！カメールにりゅうのいかりを斉射せよ！！」

勝利を確信し、光就は最後の采配を振るった。だが、次の瞬間…

…！

「させない……！！」

倒れたはずのラッタが龍宗を羽交い締めにしたのだ。

「ぐっ！う、動かねえ……！！」

「龍宗、何をしている！瀨死寸前の力など高が知っている！振り払え！」

思わぬ場所からの奇襲に光就が珍しくうろたえてしまう。

「なっ！龍！！」

りゅうのいかりを溜めていた瀨奈もまた、狼狽してしまう。

「は、早く……攻撃を……！！」

「ラ、ラッタ……！メル！みずでっぼうだ！ラッタごとリザードを撃ち抜け！！」

「……分かりました！みずでっぼうー！！」

ラッタの捨て身の作戦に涙しつつ、秀明は彼女が作ってくれたチャンスを無駄にしないよう、起死回生の一手を打つ。

「うおおおおおっ！！」

龍宗は守りもろくにできずに、ラッタもろとも効果抜群の技を喰らってしまう。その時のラッタは、ドラゴンボールでラディッツを道連れにピッコロの魔貫光殺砲に貫かれた悟空。

「ち、ちくしょう……」

「ラッタ、リザード戦闘不能！」

両者戦闘不能。しかし、それらの気絶が味方に与える影響が違いくすぎる。一人は英雄的敗退だから。

（おのれ秀明め……まともな策では私に勝てないとみてあんな奇策を使うとは……！！）

（ラッタ……お前の奮闘、決して無駄にはしない！！）

「メル！敵が慌てている今がチャンス！ロケットずつきだ！」

「了解しました。ロケットずつき！！」

「……！瀬奈！退避せよ！」

だが遅かった。光就が指示を出した時には既に瀬奈は宙を舞っていた。

「ぐうつ……！！」

「むむむ、遅かったか！」

（なんとという事だ……！私にも計算外の事があるというのか？我が采配に狂いがあったというのか！？）

必死にさつきまでの記憶を手繰り寄せる。

（龍宗はラッタを撃破した。これは間違いない！なぜなら、あの一撃は急所に入ったもの。普通のきりさくでもそうなれば一たまりも無いはず。それがメタルクローで強化されているなら尚更だ。にもかかわらず奴はそれに耐え、捨て身の作戦を強行した。一体何が奴をそれに導いた……？）

光就はラッタを見る。清々しい顔で倒れている彼女の体に何か破れた物が付いている。光就はこれに見覚えがある。

（きあいのタスキ……！では、あの抵抗は……がむしゃらか！）

がむしゃらは自分の残り体力の分、相手の残り体力にダメージを与える。タスキで耐えたラッタは極限までに減った体力を以って起死回生の技を放っていたのだ。

（龍宗が瀕死のラッタを振り払えなかったのは、自分自身も瀕死だったからか……！何故こんな当たり前の事に気付けなかったのだ……）

今の光就にさつきまでの覇気は無い。彼の弱点は意外にも単純なものだった。自分にとって予想外の事象が起こる事である。言ってしまうえば、自分の書いたマニュアル通りに事が運べば最強。しかし、一度そこに書いてない事が起きれば大混乱に陥り、全ての思考機能が麻痺する。

（何と言う愚！私が今あの事に気付けるのは、事前に私が予想でき

たということ。奴は進化させずに、技の修練に重きをおいたのだ。確かにラッタはがむしやらをLv44にならなければ覚えられない。だが、進化前のコラッタならたったLv34でそれを覚えられるのだ！！こんな簡単な事に何故気付けなかった？私は何故気付けなかったんだ！？」

光就の思考はどんどん袋小路に入り込み、困まれ、一縷の希望も失った。

（私は……どうすれば良い？私は……）

「いつまで昔の失敗を引きずってるつもりだ！」
昏迷の光就を叱咤するのは秀明だった。

「あなたの鬼謀が俺を地獄に落とすんじゃないなかったのか？それが一回失敗くらいでよくよしゃがって！失望したぜ」

光就は終止俯いていたが、やがて箍たがが外れたように大笑いする

「……ふっ、ふはははははははははっ！！秀明！お前なぞに説教されるとはな。おかげでバッチリ目が覚めてしまった。ふっ、後悔するぞ。私を目覚めさせてしまった事を……な」

「後悔なんかするかよ。本気の光就を倒せなきゃ意味がねえんだよ」
更に、フツ、と瀬奈が光就に笑いかける。

「優勝を逃す気はさらさら無いんだろう？主、私は大丈夫だ。あの程度の攻撃、私は散々食らってきた。それに、主の配下となった時私は約束したはずだ。主を頂点に上り詰めさせると……な」

「そんな約束したか？」

（はっ！あれは心の声だったか……！）

「あれ？やっぱり言って無かったような気がしなくもない……」
曖昧な言葉で以ってこのやり取りをごまかしてしまう瀬奈。

「ふっ、瀬奈。心の用意は良いな！」

「ああ！！」

「しっかりやれよ、光就！瀬奈！」

戦闘不能状態から復活した龍宗が応援席に回って声援を送っている。

「し、しまった！メル、止まれ！」

秀明はカメールを制止するが、

「止まりませんよ。奴が何をしてこようと私が押し切って見せます
！」

直接対決はもはや避けられない事態である事をカメールは理解していた。

「主に仇なす者、我が力で全て押し流す！アクアテール！」

アクアテールは尻尾を波を起こすような勢いで振り回す強力な物理技。

「お熱い方ですねえ……まあ、私にも負ける気は無いんですがね！
アクアテールとロケットずつきが激突する。」

「瀬奈！闘志を奮い起こせ！海竜王の誇り、見せてみる！」

「ああ！海風瀬奈、天に昇る竜の勢いで敵を穿つ！」

「メル！お前ならきつと勝てる。俺は信じているぞ！」

「あんなに期待して……。全く、マスターの馬鹿さ加減には本当に
うんざりしますね。でも、もし勝ったら喜んでくれるんでしょうね
……。な、なんでもありませんよ！」

互いのトレーナーが鼓舞し合い、それを受けて瀬奈とカメールは
力を増していく。

「はああーーーーっ！！！」

「でええーーーーいつ！！！」

やがて、力をぶつけ合っていた二人が離れる。打ち負けたカメ
ールが吹き飛ばされたのだ。

「今ぞ！」

「りゅうのいかり！！！」

すかさず、瀬奈がりゅうのいかりを放つ。紺色の炎に包まれるカ
メール。

「メ、メル！！！」

飛ばされたカメールを受け止める秀明。彼女はぐったりと気絶し
ていた。

(決まったな……)

今度こそ本当に勝利を確信した光就。

「カメール、戦闘不能！よって勝者、浅井光就！」

「や、やった……のか?!」

「ウオー……ッ！やったぜやったぜ！俺達が優勝だ!」

しばらく茫然としている瀬奈と、歓喜のままに舞台に飛び上がる龍宗。

(情けない所を見せてしまったものの、何とか優勝できたな。……ふっ、計算通りとは言え、やはり優勝とは嬉しいものだな……む？何か、物足りない……?)

だが、この時光就は気付いてしまった。

(美空がいない……。こんな時、まず最初に飛び出して来ると思ってたんだが……)

「龍宗、美空はどうした？」

「師匠？ありや、そーいや居ないな」

その時、光就の心中に嫌な風が吹いた。それはベツタリと彼の思考に貼り付き、離れなくなった。

(まさか……いや、そんなはずが……)

光就が憂慮していると、何処からか声が聞こえた。

「浅井光就……なるほど、貴方が音に聞く浅井光就ですか」

声が聞こえた先には萌えもののユンゲラーが立っていた。

「何者だ？何故私を知っている……?」

「私の名は竹中昌明。ハナダの町外れで隠遁生活を営んでいる者です。貴方の事は友人から聞きましたね。どんな人物かと伺った次第でございますが……」

「が？」

「その途中、とんでもない事件に巻き込まれてしまいましたね。……

…私ならば、おそらく貴方の問いに答えられるでしょう」

「何……! (美空が何処にいるか) 知っていると言うのか!」

光就は昌明に肉迫する。瀬奈、龍宗もそれに続く。

「貴方のお仲間はついさつき、ロケット団の手の者によってかどわかされ、今は彼らの手の内です」

「な、なんだとっ！お前、その話はほんとだろうな！！」

「大会優勝者の前で嘘を付ける度胸があつたら私は今頃あなた方のお仲間を助けているか、敗れて海の藻屑になつているか……どちらにせよ貴方達の目の前にはいませんよ」

「おお、それもそうだな」

「昌明といったな。美空は無事なのか？」

「はい、おそらくは……吹き矢に撃たれた位の傷しか無いかと」

「そうか……なら安心だ。昌明よ、こうして教えてくれた事、感謝する」

光就は頭を下げた。

「……？責めないのですか？私は貴方のお仲間を助けられたにもかかわらず、そこから逃げ出したのですよ」

「お前は逃げ出してなどいない。現に、お前は我々にこの事を知らせてくれたではないか。見て見ぬ振りをするという最も安全な選択肢があつたのに。……お前達もそう思うだろう？」

光就が二人に問い掛ける。

「ああ。彼が知らせてくれなければ私たちは美空殿が大変な目に逢つてるとも知らずに浮かれていたかもしれない……彼を責めるなどお門違いだ」

「お、おう！光就の言う通りだ！（あぶねえあぶねえ、光就の言葉が遅かったらつかかかってたぜ……）」

二人とも同意する。

「お、おい、光就、どうしたんだよ」

秀明が話し掛けてくる。いきなりの状況変化を飲み込めずにいるようだ。

「秀明……ここは頼んだ。私は他でやるべき事がある！」

光就は秀明に何か袋を押し付けると、

「昌明！奴らは何処にいる！分かるか？」

「あの口ぶりから、奴らの真の目的は貴方の投降を促す事……船内からは出てないかと」

「そうか。とりあえず、部屋に戻り、脅迫状の様なものが無いか探してみよう」

と会話した後、走り去ってしまった。美空さんの窮地を救う為に。

一方、光就に押し付けられた袋を開けてみる秀明。するとそこにはすごいきずぐすとピーピーマックスが二つずつ入っていた。

「回復薬……？とりあえずメルとラッタに使ってやるか……」

「薬だけじゃないです。おそらく、面倒も入ってると思いますよ。」

……はあ、まったくマスターはホントお人よしですねえ。あそこで励まさなかったら、今頃私たちが優勝してましたのに」

カメールが小馬鹿にしたように言う。

「なんとでも言え。俺は後悔してねえ。あいつと本気で戦えたからそれで充分だ」

「ラッチちゃんも捨て身でチャンスを作ってくれたのに……この甲斐性無し！」

更に責める。

「ははは……そうだよな、だらしねえよな。ラッタには後でお詫びとお礼を兼ねてチーズケーキでも食べてもらおうか」

「えっ！ケーキ！？私はチョコレートケーキが……ご、ごほん！ス、スイーツなんかには釣られませんかよ！」

「そうか。メルはいらぬのか。残念だなあ明日は頑張ったみんなへのご褒美に美味しいケーキをごちそうしようと思ったのにな……
母の乗ったシヨートケーキ、こだわり卵のとろけるプリン。お姫様が我慢するから食べられるのになあ」

「と、とろけるプリン……ゴクリ……」

思わず生唾を飲み込む。

「しかも食べ放題ときたものだ。それなのにメルがいらないうなら仕方ない。俺達がみんな食べちゃうぜ！」

「わ、分かりました分かりましたよ。今回の件は不問にしてあげますよ。だから……私にも食べさせてくださいよお」

涙目で秀明にすがりつくカメール。そこにさっきまでの強気な姿勢は無い。

「うんうん。素直が1番だな。だけど……それはあれを何とかしてからだな」

「そうですなえ……」

前方の空からやって来る影を見ながら秀明とカメールは言った。

「彼も厄介なものを残していききましたねえ」

「それだけ俺が信頼されてるって事だろ」

「調子に乗らないでください。マスター」

「ははは……」

秀明とその仲間達もまた、ロケット団との戦いに身を置くことになつた瞬間である。

第十七話に続く

第十六話後編：激戦、サントアンヌ号大会決勝！（フラグ回収？なにそれおい！

龍宗「師匠をさらうなんてロケット団めいい度胸だ！俺様の正義の爪で全員、きりさいてやらあ！！」

瀬奈「美空殿……私が間違っていました！私はもう迷いません！美空殿、あなたが好きだ！あなたに萌えている！」

龍宗「ちょwww本気かそれ」

瀬奈「本気だ。最初は主が好きだと思っていたんだが、最近、美空殿程では無いと思いだしてな。美空殿のスリットスカートハアハア」

龍宗「おいおい、いくらなんでも発言がブレすぎたる第十五話じゃ悪女呼ばわりしてたクセに」

瀬奈「その時の私は緊張で頭がどうかしていたのだ。よく考えたら

……主はあんな事言わぬ！」

龍宗「何を言ったか知らねえが、まあ瀬奈と師匠の仲が悪くならなくてよかったぜ」

瀬奈「次話投稿は一月十六日。美空殿に襲い掛かる魔手は全て私が受け流す……！」

第十七話：美空救出戦（ですういんぐ？いいえデスウィングです）（前書き）

二週間以上も遅れてしまいました。申し訳ございませぬ……。

土下座をするのは訓練された謝罪人。ジャンピング土下座をするのは良く訓練された謝罪人。

第十七話：美空救出戦（ですういんぐ？いいえデスウィングです）

「……………うーん」

眠りから醒める。

「えっ！？な、何ですかこれ！」

そして、自分の身に起こっている異常事態に気付いてしまった。

わたしは体中を縄でぐるぐる巻きにされていた。

「何でこんな事になってるんですか？何も覚えてないですよ……………」

頭がぼーっとしてて、何も思い出せない。思い出せるのは船の甲板から飛び立とうとした時まで。一体それ以後、わたしの身に何が起こったのだろう。

とりあえず、今分かっているのは、わたしの身に危険が及んでいるということ。おそらく、ここは敵中。わたし達に何らかの悪意を持つ者がわたしをここに軟禁した。では、それは誰なんだろう。そして、何の目的でわたしを捕らえたのだろう？

わたし達に悪意を持つ者……………ロケット団かな？でも、何の為に？捕らえられてもこうやって生きていくということは、わたしに利用価値があるから？とすると、わたしは人質としてここに閉じ込められているというわけですね。

「フッフ……………あははははははははは！…！」

思わず笑ってしまふ。だって、今のわたしを捕らえた所でどうにもならない。わたしはもうただのピジョットなのだから。

「でも、もしそうだったら、わたしは一生、日の目を見ることはないんですね……………」

思えばバカな話だ。十年同じ人の事を思い続けるなんて。もちろん、環境のせいなのもある。わたしはずっとおししようさまと俗世間を離れて修業していた。男の知り合いなど居る訳が無い。

「はあ……………」

溜め息をつく。こうやって今となってから昔の事を思い出すと、

昔のわたしは随分夢見がちだったんだなあと分かる。

「でも……」

こうなったのには、今のわたしにも責任がある。わたしは光就さんの目の前にいたにもかかわらず、目を合わす事すら出来なかったいや、しなかった。わたしは紅羽の看病という大義名分を掲げながら光就さんから逃げ回っていたのだ……二年間も！

「そんなわたしが見捨てられるなんて当然。光就さんみたいな強い人の下には、自然と強い人が集まる。だから、わたしの様な情弱は無用なんですよ……」

木々を効率よく育てる為に、育ち損ねた木を間伐する。これは理にかなった行為。可哀相と思うかもしれないが、それをしなければ育つものも育たなくなってしまう。

よく考えて見れば、瀬奈さんや龍宗さんは日増しに強くなっていくのに、わたしはいつまで経ってもLv36のまま変わっていない。実はあの二人と一緒に修業していた時、わたしも密かに自分の修業をしていたのだ。しかし、成果は上がらず、ただただ時間だけが過ぎていった。

「龍宗さんはわたしの事を師匠と呼ぶけど、もう師匠だと胸張れないです……」

今はまだ、わたしの方が優勢。でも、あの二人は絶対、今日明日でもわたしを追い抜いてしまう。そうなっても龍宗さんや瀬奈さんはわたしの事を慕ってくれるでしょうか？

足手まといなわたしを口では励ましながらも、心の何処かでは嫌悪を育てていて……。あの二人にまで嫌われたらわたしはどうすれば良い？

「そう考えたら、光就さんの提案はわたしの為のものなのかも……」
だが、それがどんな意味を持ってたとしてももはや、意味が無い。こうして敵に捕まってしまったのだから。

「……………」

いっその事……舌を噛み切って自害しようか？そうすれば、彼ら

に迷惑を掛けないで済む。

自分の舌に齒を思い切り突き立てようとした。だが、出来なかった。突然、一喝されたからだ。

「ヒロインの自殺なんて無粋な結末、私が許すと思つて？」

「!？」

わたしは彼女を一目見た瞬間、自分の毛という毛全てが逆立つほどの嫌悪を感じた。おそらく、わたしと彼女の魂の根本が、致命的なほど相性が悪いのだろう。

「あなたがわたしをこんな所に……！離してくださいです！」

「離せつて言われて離す馬鹿がいるもんか。それに本当なら、貴女は私に感謝しなきゃならないのに、つれないわねえ」

「黙るです！何でわたしがさらわれた事に感謝しなきゃならないんですか！」

そう問いただと、言いづらそうに彼女は口を開く。

「だつて……貴女、彼氏とうまくやつてないみたいなんだもん。こつやつて私達みたいな悪者に連れ去られて、危うく慰み者にされそうな所に彼登場！私達を華麗に倒し、貴女を助け出して、貴女はお姫様だつこされながら帰るのよ。ね、素敵でしょう？」

「それは素敵ですね」

「でしょっ！私達は彼の引立て役なのよ。ああ、なんて辛い仕事なんだらう」

「頑張つてです。あははははははっ！」

笑う。

「頑張るわよ。あははははははははっ！」

向こうも笑う。

「あはははははははは、嘘だッ！……！！！」

わたしはその空気を払うべく、一喝する。

「何でそんな嘘付くんですか？あなたは光就さんを降らせようとしてるだけでしょう！？舐めるなですっ！わたしの頭はそんな事も分からない程お花畑じゃないですっ！」

「はあ……なあんだ。お花畑じゃないんだ」

今までの彼女の何か素顔が見えない、まるで舞台上の俳優の様な雰囲気は消えた。その瞬間、再びわたしの全身の毛が逆立つ。今度のは嫌悪感から来るものではない。……目の前の派手なロケット団制服の女性は何やら棒を取り出し、それを振り上げ、下ろした。すると次の瞬間、

「きゃあああああああ！！！」

わたしの身体に数万ボルトもの電流が流されていく。全身を引き裂かれる様な痛みが走り、頭が真っ白になりかけた。

「うっ……！！」

「あら、意外とタフなのね。この電磁鞭に打たれて気絶しないなんて」

感心した様に言う。

「ま、一発で倒れられちゃうより、堪えてくれる方が面白いんだけどね」

「こ、こんな事して、損するのはあなただけですよ！」

「そうね。だけど……」

鞭のしなる音が聞こえる。

「そもそも、私は貴女みたいなあんまり好きじゃないのよね。ええ、大嫌いよ。貴女、自分を嫌ってる人なんて居ないと思ってるでしょうっ？」

一瞬の痛みの後、電撃が身体を駆け巡る。

「きゃあああああああ！！……はあはあ……ど、どっとう……意味ですか……？」

「あらあら、とぼけるつもり？……そうやって無知を装い、無力を見せ付け、無邪気な態度で男だけじゃなく女さえも魅了する……それが貴女のやり方よ」

「そんなつもりで……！！」

再び鞭がしなる。

「っ……！！……！！……！！」

もはや悲鳴も出ない。わたしはここで死んでしまうの？
だけど、そんなわたしに構わず、彼女は鞭を打ち続ける。

「ふん、自覚が無いなら無いで、それも気に食わないわね。自分に惚れる人が居るのは当たり前だと思ってるわけだからね」

「……………」

「何よその目は。違うっての？ 違うないでしょうが！ なら、例をあげようか？ 龍宗と瀬奈……………だっけ？ あの二人がこんな船のある意味金持ち共の馴れ合いの大会に何で出場したと思う？ 貴女の為よ。今や、彼らの心は光就の物じゃない。貴女の物なのよ。ああ、恐ろしいわね」

「違う……………そんなんじゃない……………」

そう言おうとすると、いきなり、暗い部屋に光が入ってきた。

「浅井光就、まっすぐこちらに向かっています！」

「あら、そう……………すぐ行くわ」

トウカは少し不快そうな表情を浮かべながらも、その報告のままわたしを連れて行くこととする。

「さあ、行きましょう。神風美空」

助かった……………と思うべきか、光就さんにこの傷を見せたくないと思つべきか迷つたが、どう思ったにせよ、わたしの運命は変わらない。なら、少しでも前向きに思っていた方が良い。

(助かった……………)

ポカンと空いた心に、この声だけが木霊した。いつまでも。

光就達は大会会場から疾走、彼らの部屋に辿り着く。

案の定、そこには脅迫状が突き付けられていた。その内容は以下の通りである。

拝啓、浅井光就殿。

貴方の仲間、神風美空は私の手元。返して欲しくば、私の下にお越しなさいませ。

私達は船尾の甲板で待つております。
なるべく早くお越し下さい。私の部下達に焼き鳥を振る舞う前に。

昌明、龍宗、瀬奈は後ろから覗き込んで脅迫状を読んだ。

「なんて慇懃無礼な書状なんだ！」

「ちくしょー！俺達をバカにしゃがつて！さっさと行くぜ光就！早くしねえと師匠が食べられちまう！」

龍宗と瀬奈が怒りに燃える中、昌明は数秒思索し、言った。

「光就殿、これが置かれてから時間はさほど経っていないとは思いますが、奴らをあまり待たせるのは得策ではありません。早々に向かうべきでしょう」

「ふむ、道理だ」

「じゃあ、俺がついて……」

「ただし、光就殿お一人で行ってください。私達はここで待機しております」

「はあ？」「何故だ!？」

昌明の発言に二人とも噛み付く。

「理由は脅迫状内になんの要求も書かれていないからです。一人で来いとか、身代金とか、彼女をさらった理由さえもこの脅迫状には書かれていないのです」

「だからどうした？四人で行っても良いって事だろう？」

「それはまずい」

光就が割り込む。

「四人で行くなど下策中の下策。まず、昌明は奴らに存在を知られていない。わざわざあんな所で公表する必要は無い。更に、お前達二人はそうやってすぐ頭に血が登るから駄目だ。とりあえず落ち着け。……相手は美空に目を付ける時点でかなりの知力を持っている。今のお前達ではそいつの挑発に易々と乗ってしまうだろう。それで

は敵の思つ壺よ」

「そして、何よりも相手の意図が見えないのが一番厄介です」

「なるほどな」

「待て主！それでも私だけ連れていくというのは」

「駄目に決まってるだろう。その焦りがある内はな」

「ここは光就殿に任せた方がよろしいかと」

「……わかった」

なんとか二人とも折れてくれたようだ。

光就にとって意外だったのは、普段冷静な瀬奈がこの時だけ、怒りの感情をあらわにした事である。

（龍宗の反応は予想通りだったが、瀬奈はこの程度で怒る奴では無かったはずだがな。まさか……いや、そんな訳無いか）

「では、行ってくる。留守を頼んだぞ」

光就は愚かな想像を打ち消し、甲板へ歩を進めた。

（甲板に到着……。さて、奴らはそこか）

光就はサントアンヌ号船尾甲板に着いた。そこには二十人程のロケット団員がひしめいていた。

「ロケット団、我こそは浅井光就。神風美空の返還交渉をしに来た」

「ざわ……ざわ……」

ロケット団員達は光就が一人で来た事に、驚きを隠せないようだ。

「初めまして、浅井光就。私はトウカ。ロケット団特殊部隊五幹部の一人よ。にしても、貴方……一人で来たの？脅迫状には一人で来いなんて書かなかつたのに」

「空気を読んだだけだ。脅迫に応じるのは一人というのが道理だろう。さあ、何が欲しいんだ？私の首か？」

光就は自分の首筋に残月をあてがう。むろん、斬る気は微塵も無いのだが。

「貴方の首が欲しいんじゃないよ。貴方が欲しいのよ。ねえ……私達の仲間にならない？そうすれば貴方の父親にだってすぐに会える

し……貴方の旅の目的は父をたずねて三千里でしょ？」

ピンクの髪に派手なロケット団制服の女……トウカが誘う。

「確かに……私にとつてやり方などはどうでも良い。大事なものは結末。会えるか会えないかだ。……父上も裏の人間ならば、日の光を浴びる道には居ないか……」

光就は刀を納める。

「そういう事よ」

「ダ、ダメですよっ！」

手を縛られ、簀巻きになっている美空さんがピョンピョンと跳ねながら抗議する。

「光就さん！わたし、謝りますよ。ロケット団と同じだなんて言ったこと！だから、ホントにロケット団にならないで下さいですっ！」

「人質は口出ししないでくれるかしら？」

「少し黙っている……」

「うう……」

トウカはともかく、光就にまで非難された美空さんはしゅんとうなだれてしまった。その間に、美空さんはがっかりとロケット団員二人に抑え込まれた。

「……私が仲間になるということは、五幹部から六幹部になるわけだな」

今までの流れを無視して言い出す光就。

「んー、まあ、自然とそうなるでしょうね」

「ならばよし！」

光就は肯定を示した。それは取りも直さずトウカの仲間になるという事だ。

「そ、そんな……光就さん……」

「さすが、賢明な判断よ……」

とトウカは口だけではそう言ったものの、内心はあまり穏やかでは無かった。自分のストーリーの中では、泣く泣く主従を誓うはずだったのだ。

(ちっ、とんだ期待ハズレだったわ。ああ、だらしがないだらしがない。一合も剣戟を交える事無く降るとかありえないわ)

「じゃあ、早速サカキをここに読んできてもらおうか。トウカ」

「サカキ『様』よ！ボスでも良いけど……全く、無礼な人ね。貴方がサカキ様の所に行くのよ。なんで君主が一家臣の為にわざわざ出向かなきゃいけないのよ」

「家臣が君主の為に出向くのは当然だろう？早くサカキを呼べ」

「はあ？」

光就の突飛な発言に誰もが首を傾げる。

「まさか……光就さん、仲間になるってというのはロケット団が光就さんに降るって意味ですか？」

「御名答だ美空！やれやれ、こんな簡単な事にも気付けんとは……」
全員の思考がフリーズした。有り得ない。常軌を逸している。カントー地方の裏社会のほぼ全土を支配しているロケット団が、たった一人の青二才を主として崇めるといふのだ。

「ふっ……ふふふははははははははははっ！！なかなか面白いジョークじゃない。浅井光就」

「光就『様』だろう？臣下の礼も知らないのか貴様は」

「光就さん……ククク……狂気の沙汰ほど面白い……。ですか」
今回ばかりはさすがの美空さんも呆れ果ててしまった。

「ざわ……ざわ……」

(天下のロケット団に降れ？あいつ正気じゃない……でも、その自信、慢心……どこから湧いて来るの？)

よく考えれば分かる。こんなのはブラフに過ぎないということ。だが、様々な事実がその単純かつ明確な思考に至る道を塞いでしまふ。

(この発言の裏に一体何が……？)

知者の思考が愚者のそれに劣る時、それは自分の知に溺れた時である。すなわち、考えすぎだ。

確かに、光就のあの発言には裏がある。だが、それはロケット団

という大組織を根本から覆すような遠大なものでは無い。

「（サイコキネシス……！よし、三つ溜まったな）美空！こっちを向け！」

「ほえ？」

間拔けた声を上げながらも光就の方を向く美空さん。そして、彼女の目に飛び込んできたものは紫色に光る光就の左腕だった。

「はっ！！ま、まさか奴の目的は！？」

「もう遅い！サイコキネシス！！」

美空さんと美空さんを抑えていた二人のロケット団員ごと念力で引き寄せる。

「うおおおおおお！！何だこの力は！？」

「ひいひいひいひい！！俺はまだ死にたくねえよ！！」

光就はサイコキネシスを解く。

「今助けるぞ、美空！！」

「させてなるものか！撃て！撃てえ！」

トウカは銃撃命令を出すか、余りに突然の出来事で、うまく準備ができない。

「光就さん！！」

身動きが取れないので勢いそのまま飛び込んで来る美空さんを受け止める光就。

「うっ……うっ……怖かったですよお……」

「頑張ったな。お前はよく頑張った。もう大丈夫だ、安心しろ」

刀で美空さんの束縛を解く光就。

（生傷がある……。相当に痛め付けられた様だな……。許せん！！）
怒りに燃え上がる光就。だが、今は逃げるのが先決だと考え、その炎を押さえ込む。

そして、その頃になってやっと銃撃の準備が終わる。

「遅い！ちっ、早く撃ちなさい！早く！」

トウカの号令が掛かり、一斉に銃弾が放たれる。

「鉄砲とは物騒ですね……。リフレクター！」

だが、それは突然現れたバリアに防がれる。

「お二方、今です！」

「そこをどきやがれ！龍宗様のお通りだ！」

「私は海風瀬奈……海竜王、海風瀬奈だ！」

昌明の采配に龍宗、瀬奈が動く。

「りゅうのいかり！！」

二つの紺色の炎がトウ力達に襲い掛かる。

「ちっ！アクアテール！！」

トウ力は瞬間的に瀬奈の真似をし、りゅうのいかりを弾き返した。

「なっ！？奴も主と同じ様に萌えもんの血が流れているのか！？」

と瀬奈が問う。するとトウ力は見下した様にこう言い放った。

「馬鹿言うんじゃないわよ。何が悲しくて萌えもんみたいな下等生物の血を体に宿さなきゃいけないのよ」

「な、何だと！！てめえ、今の言葉、もう一回言ってみやがれ！！」

龍宗が激怒する。

「何回でも言っただけよ。萌えもんは下等生物。そして、そんな下等生物の血を半分も流しちゃってる光就もまた、下等生物。そんなのに様付けなんて出来るわけじゃない！あーあ、最初からこう思っときゃ良かったんだよなあ。失敗したわ……！？」

トウ力の身体が勢いよく吹っ飛ばされる。

「は、速い……」

「な、何が起こったんだよ……」

「！これが……彼女の実力ですか……！」

「美空……！」

トウ力を吹き飛ばしたのは美空さんの裏拳だった。

「トウ力……！わたしなら別に、いくら鞭で叩かれようが、いくら罵倒されようが、下等生物呼ばわりされようが構わない。だけど……」

……光就さんを、光就さんを馬鹿にする事だけは絶対に許さない！覚悟しなさい。貴方はわたしを本気で怒らせた。無事で帰れるとは思わない事ね！」

美空さんはマントを外し、光就に手渡す。

「ごめんなさい。少し暴れますから、傷付いちゃイヤですからちょっと持って下さい」

「あ、ああ……」

光就も今の美空さん……美空の気迫に気圧されている。

（ですういんぐからデスウイングへ……どうやら完全にキレてしまったみたいだな……ちっ、震えが止まらない……）

美空さんが普段、とても温厚な性格なのはもう周知の事実。怒る事なんて滅多に無いし、怒ったとしても、涙目でポカポカ叩いてくるくらいだ。

だが、そういう大人しい人ほど、本気で怒らせると怖いものだ。

「では……行きますよ……」

美空はそう言い終わるか言い終わらないかの間に、トウカに接近した。

「てやあ……」

「そう何度も同じ手は食わないわよ……」

トウカが跳び上がる。

「舐めるんじゃないわよ……！この電磁鞭で貴女の恐怖を再び蘇らせてあげるわ！」

鞭を取り出し、美空に向けて打つ。

「甘い……」

だが、それは美空に軽々と受け止められたばかりか、

「飛べ！」

空に打ち上げられた。

空は美空の独壇場。トウカのはあくまで物真似であって、変身ではない。だから、実際に飛ぶ事は出来ない。勝負はもう決した。

「かぜおこし！」

トウカは美空の起こす風に流される。

「くっ……」

「報いを受ける……つばさでうつ……」

追い風に乘った、疾風迅雷の一撃。

「これが……純白の疾風と呼ばれる所以か……！」

「ちょ、調子に乗るな……！」

そう叫び、トウカは手を天に突き出す。

「落ちよ、天の怒り……！かみなり……！」

空に暗雲が立ち込め、凄まじい轟音と光と共に、巨大な雷が突進してくる。

「な……！避ける、師匠……！」

「かみなりを空中で躲すのは至難の業！調子に乗るからこんな目に遭うのよ……！」

やがて、巨大な電流の帯は美空に直撃する。

「み、美空殿……！」

「アーハッハッハッ！ざまあないわね……！」

と高笑いするトウカ。

だが、次の瞬間、トウカの背後に鋭い殺気を持つ気配が現れる。

「貴女が消せるものなんて、わたしの残像が関の山よ……！」

風は未だ、美空の追い風だったのだ。

「さようならよ、トウカ……！」

背後から組み付き、再び上昇する。

そして、空中でターン、頭から一気に下降する。

「ひひひひひひひひひひ……！」

「行け……！」

絶叫するトウカを海にたたき付ける。ドボンという音と共に水柱が立ち上がる。

「おおおおおおおお……！」

「美空殿…………ポッ……」

「なるほど……凄まじい……」

美空が戻ってくる。

「光就さ……んっ……！」

美空さんは光就に突進する。それを何とか彼は受け止める。

「光就さん！わたし、勝ったです！勝ったですよ！」

「ああ！よくやった……美空」

光就は称賛の声を浴びせる。しかし、その表情は硬い。

「光就さん……？もしかして、戻ってきて欲しくなかったですか……？」

「……！もうそんな事言うな！美空！我らは一人として欠けてはならぬ。出て行かなければならぬ者、要らない者などいない！！」

「光就さん……」

「うおおおおおっ！！光就いい！！俺は、俺は感動したぞー！！」

龍宗は大泣きして叫ぶ。

「ちっ……」

瀬奈は龍宗の空気の読まなさに舌打ちしながら、彼の足を踏み付ける。

「痛っ！な、何すんだよ瀬奈！」

「何すんだじゃない！少し空気を読め！（小声で）」

「……光就殿、こんな所で時間を潰している暇はありません。ロケツト団の援軍が来ますよ」

昌明が言う。

「分かった。皆、迎え撃つぞ！」

「……仕方ないですね。劣勢を覆すが謀士の勤め……私も出ます」

美空さんは何事か飲み込めずにいた。

「光就さん？どういう事ですか？」

すると、光就はふつと笑い、

友を助けにいくのだ

と言った。

「み、光就さん……カッコイイ……ですう」

美空さんは顔を紅くして悶絶している。

「ああ、美空殿！」

倒れ込む美空さんを受け止める瀬奈。

「……………」

美空さんの情けなさに閉口しながらも、やはり、この空気が一番
だなと感じた光就だった。

第十八話に続く

第十七話：美空救出戦（ですういんぐ？いいえデスウィングです）（後書き）

美空「神風美空、復活ですう！！」

龍宗「よっ、待ってました！」

瀬奈「美空殿、私の美空殿おおお！！」

美空「？瀬奈さんは、わたしの居ない数時間の間にどうされたのですか？」

龍宗「近付いちやダメだ師匠！今の瀬奈は師匠には危険過ぎる！」

瀬奈「美空殿！美空殿！美空殿！美空殿おおううわあああああ

ああああああああああああん！！！！

あああああ：ああ：あつあつー！！あああああ！！！！美空殿

美空殿美空殿おううわああああ！！！！

ああクンカクンカ！クンカクンカ！スーハースーハースーハース

ーハースーハースーハースーハースーハースーハースーハース

んはあつ！純白の疾風・神風美空さんの純白の翼をクンカクンカし

たいお！クンカクンカ！あああ！！

間違えた！モフモフしたいお！モフモフ！モフモフ！カリカリモフ

モフ！フサフサモフモフ：きゅんきゅんきゅい！！

第八話前編の美空たんかわいかつたよう！！ああああ：あああ：

あつあああああ！！ふあああああんつ！！

主と仲直りできて良かったね美空たん！あああああ！かわいい

！美空たん！かわいい！あつあああああ！

第二章も完結されて嬉し：いやあああああ！！！！にやああああ

ああああん！！ぎゃあああああああ！！

ぐあああああああ！！！！美空殿は私の嫁じゃない！！！！

あ：美空殿の身も心もよく考えたら：

美空殿は光就の嫁？にやあああああああああ

あん！！うあああああああああ！！！！

そんなあああああ！！いやあああああああ！！はああああああん！！神風紅羽ああああ！！

この！ちきしょー！やめてやる！！光就軍団なんかやめ……て……え！？見……てる？ですういんぐの美空殿が私を見るぞ？

ですういんぐの美空殿が私を見るぞ！美空殿が私を見るぞ！デスウイングの美空様が私を見るぞ！！

ですういんぐの美空殿が私に話しかけてるぞ！！よかった……世の中まだまだ捨てたモンじゃないんだねっ！

いやっほおおおおお！！私には美空殿がいる！！やったよ龍！！ひとりでできるもん！！！！

あ、ですういんぐの美空殿おおおおお！！いやああああああああ！！！！

うつつうつつ！！私の想いよ美空殿へ届け！！純白の疾風の神風美空へ届け！！

美空「なんか……凄く面倒臭い事になってますね」
龍宗「ホントだよ……」。次話投稿は今週中に。作者は今週、休みだからだから遅れを取り戻してもらおうぜ」

第十八話前編：捨て奸（決死の撤退）（前書き）

今話のタイトルは「すてがまり」と読みます。知ってる人は知っているとありますが、知らないなら後でググってみて下さい。

第十八話前編：捨て奸（決死の撤退）

それは光就が美空さんを救出しにいった後の事だった。

ここはさつきまでサントアンヌ号大会が行われていた船首甲板である。

「……………来た！」

次々と投げ込まれる紅白の球体。そして、赤い閃光がほとばしり、中から萌えもんが現れる。

「……………？あまりここらでは見ない種ですね」

その萌えもんはタツベイ。ホウエン地方の源流種である。皆、Rのマークが付いた制服を着用している。

「どこの萌えもんだろうが関係ねえ！ロケット団の肩を持つ奴らは退治するのみだ！みんな、行くぞ！！」

秀明はカメールのメル、ラッタ、ピジョン、ユンゲラーといった自分の手持ち全員を導入した総力戦を展開しようとしたが、その前に大会に出場した二人の体調を聞く。

「メル、ラッタ、一応聞いとくけど、体は大丈夫だよな？」

「大丈夫……………マスター……………あの薬は……………よく効く」

ラッタはこう答えたが、

「大丈夫じゃありませんよ。何で私達がこんな面倒な事を……………」

メルは膨れっ面で抗議している。

「何だよ今更、親友が俺を頼ったんだ。それを嫌だと断れるわけないだろ？」

「光就ねえ……………あの人、マスターがそう言うって分かっていてこんな無茶な頼みを押し付けたんでしょね。あーあ、私達は見事にあの人の楯にされたってわけだ」

メルはなおも、頬を膨らませる。

だが、その間にも放たれたタツベイ達は船の破壊活動を開始していた。

「マスター……メル……仲間割れしてる場合じゃない……早く何とかしないと……大変」

ラッタが無表情ながらも焦りを見せる。

だが、メルはそれを無視し、秀明を諫める為に口を開く。

「良く聞いて下さい、マスター。彼らは私達を標的としているわけではありません。光就を狙っているのです。光就を狙って、この船を壊そうとしているのです。光就なんかの為にこの船を沈めようとしているのです！……私達の敵はロケット団ではありません。己が利益の為に、人を戦火に巻き込む事も厭わぬ奸賊・浅井光就こそ我らが討つべき真の敵です！！」

メルは力説した。

「な、何て事を……」

「マスター、決断して下さい」

「な、何をだよ……？」

メルの気迫に秀明は押されっぱなしだ。

「ロケット団と戦い、私達五人、光就共々玉砕し、この船にいる人達を戦火に巻き込むか、それとも、かの奸賊と引き換えにロケット団に去ってもらって人々を助けるかどうか決断して下さい」

「……！み、光就を敵に引き渡せって言うのか！？」

「その通りです」

「ふ、ふざけるなっ！！」

今まで少し押され気味だった秀明は語勢を強めて言った。

「俺と光就は親友だ！ 兎頸の友だ！ そんなあいつを……！」

「親友？ 兎頸の友？ ははっ、笑わせないで下さいよ。そんなのマスターが勝手にそう思い込んでるだけじゃないんですか？ あいつは私達……いや、自分以外の全てを駒としか見ていないような傲慢で冷酷な男。そんな男の為にマスターや私達が命を張る必要なんか無いんですよ」

「……………」

「黙ってるって事は、少なからず心当たりがあるんですね？ そうで

すよね？ほら、私達がこんな所に居させられてるのが何よりの証拠です。きつと、奴はもう逃げ出す準備を始めてますよ。さあ、時間が惜しいですよ。奴に逃げられる前に早く捕まえに行きましょう」

メルは秀明の腕を掴み、先導する。

「……るさい」

「何やってるんですか、早く行き……」

「うるさい！一体、何の証拠があつてそんな酷い事が言えるんだ！」

ついにキレた秀明。

「何ですか、マスターの癖に私に逆らうんですか？何の証拠があつてって言いますけど、よく考えれば分かる事だと思えますよ。……マスター。私が間違つた事を言つた事つてあります？」

「っ……！」

秀明は何も言えない。メルは冷静沈着で頭脳明晰な秀明の軍師的存在なのである。短絡的で、少し考えの足りない秀明にとつて、そんなメルの発言は非常に信頼に置ける物なのだ。

「マスター、貴方の命は貴方だけの物じゃないんです。ここにいる私達四人やボックスの中で待機してる娘達も含めた、みんなの命が戦によつて弄ばれる事になるんです。それがどんなに大変な事かは、マスターでも分かりますよね？……光就は自分の才覚に奢り、蛮行の限りを尽くした。今、その償いを果たす時なのです。ヒトカゲや彼の萌えもん達には可哀相だけど……それが運命だから仕方ない。マスターは光就の轍を踏んではいけません。さあ、今こそ高らかに号令するので。敵は本能寺にあり！浅井光就を捕らえよ！」

「……分かつたよ。確かに、光就のやつた事は褒められた事じゃない。基地を爆破なんて……やり過ぎだ」

もちろん、ニビ地下基地の爆破は本当はロケット団特殊部隊五幹部の一人、グレイがやつた事だが、当事者で無い秀明達はその事を知る由も無い。そもそも、侵入したのが光就であるという事自体、

限られた人間しか知らないのだから。

「……敵は本能寺にあり！」

メルは腕を組む。その表情は形容し難い。

「今こそ……タツベイ達を討ち、船を守るんだ！」

秀明がそう言うのと、メルは慌てた。

「なっ……！この私の諫言を無視する気ですか！？」

「黙れよメル。お前が言ったのは諫言じゃない。奸言だ」

秀明はびしゃりと言いつつ切った。

「諫言じゃなくて奸言？ははっ、誰がうまい事言えと……」

メルは痛々しく笑う。

すると、秀明はさつきより語勢を弱め、

「だけど、メルの言ってる事も正しい。俺の無謀な行動でみんなが危険な目に遭うのは耐えられない。だからさ……こいつを渡してお
く」

と言って、自分のトレーナーカードと四つのモンスターボールをメルに手渡す。

「！マスター……！」

「後はよろしく頼んだぜ。メル、みんなも、達者で暮らせよ！」

トレーナーカードを渡すという事は、トレーナーIDを託すという事だ。秀明は犠牲になるのは自分一人だけで良いから、ボックスにいる萌えもん達を逃がして、自分達も逃げるとメルに言ったのだ。

「マ、マスター……！」

「じゃあな、メル。ほんの数ヶ月の縁だったけど、最期に良い女と巡り会えたもんだ」

秀明はメルに笑いかけ、そう言った。

「さーてと、行くぜ！大木戸秀明、一世一代の大仕事だ！うおおお
おおおおっ！！」

「マ、マスターの馬鹿アアアアツ！！」

メルの止まってくれるかもという打算を含んだ必死な叫びも、秀明には届かない。

秀明は特攻する。もはや彼を止めれる物は無い。秀明は華麗に、盛大に、甲板と口づけした。

「えっ!?!」

「……………」

秀明が転んだのはラッタが彼の進行方向に足を出したからである。

「イタタタ……何すんだよラッタ!折角の感動シーンが!」

「だって……マスター……勘違いしてる」

ラッタは今にも眠ってしまいそうな半目をしながら言った。

「メルは……自分まで短気に走ったら収拾が付かなくなるって……」

だから……マスターに反対する様な事を言った……そうだよねメル

……………」

ラッタは無口だが、その分、人の気持ちを讀む事が得意なのだ。

「……………」

メルは何も言わず、コクリと頷く。いや、言わないのではない。

言えないのである。

「グスツ……マスターあ……………」

「!メ、メル……!」

「メルは意地っ張り……だけど……意地っ張りも大概にしないと大

切な人を失ってしまう……メルはそれを学んだのです……。マスタ

ーは熱血……だけど……私が止めなかつたら……マスター死んでた

……マスター死んだら……メルが悲しむ……熱血なだけじゃ大切な

人を幸せにできない……マスターはそれを学びましたよね……?」

ラッタは秀明に問い掛ける。半分閉じられていても、その眼光は

充分に鋭く、優しかった。

「ラッタ……すまない。俺が間違ってたようだ」

秀明は頭を下げる。

「メル……もう泣かなくていいよ……マスター……分かってくれた」

「べ、別に泣いてなんか……………」

と、泣き腫らした目をしながら言う。

「メル、目から水が出てるぞ」

「ち、違う！こ、これは涙じゃなくて……そう！みずでっぼうです！目からみずでっぼうをだす練習をしてたんですよ！全く、失礼しちゃいますね。これだから馬鹿マスターは……」

「へへ……そこまで憎まれ口叩けるならもう大丈夫そうだな。よし！奴らを倒すぞ！……もちろん、みんなでな」

メルからもう二つのモンスターボールを貰い、開く。すると、中からピジョンとユンゲラーが飛び出す。

「うう……泣かせるねえ……」

「これはいいツンデレだあ！」

秀明のピジョンは義理人情溢れるオスの中のオス。ユンゲラーはちよっとお電波なロリっ娘である。

「みんな、話はさっきの通りだ。すまない！俺に協力してくれ！」

「俺は主人の男気に惚れたぜ！いいぜ、地獄までついてやる！」

「えゝ？ワタシは楽しければ何でも良いよ」

二人とも快く了承してくれた。

「ピジョン……ユンゲラー……ありがたい！」

秀明は涙を流したくなったが我慢した。こんな事をしている場合ではないからだ。

「よし……行くぞ、みんな！」

「おーーーーーっ！！！」

五人、一丸となる。

先手を切ったのは、意外にもメルだった。

「仕方ないですね……こうなったら、とことん付き合っただげるわ！ロケットずつき！」

大会で瀬奈を苦しめた技をタツベイが密集する場所に向けて使う。

「メル……楽しそう……私も続く……すてみタツクル……！」

ラッタは別のタツベイの集団に当たりに行く。

「おっ！やるねえ。じゃあ、俺は……でんこうせっか！」

ピジョンはメルやラッタの突進で吹っ飛ばされるタツベイ達に素

早くトドメを刺す。

「じゃ、ワタシは援護と……黒板をガラス片で引っ掻いて、いやなおと！キイイイイイイ！！」

何処から出したのか小さな黒板とガラス片であのいやなおとを出す。

「くっそー！調子に乗りやがって！俺達、ホウエン隼人の力を都会人共に見せてやる！」

タツベイ達は一齐に各々の標的に向け、バラバラにずつきを開始する。

「力攻めなんて愚計の極みね。マスターにはちゃんと妙計が浮かんでますよね？」

「もちろんだ。ユンゲラー！全体化パワートリックだ！」

「りょうか！いい パワートリック！」

ユンゲラーはスプーンを振り上げた。すると、しばらく周りが不可思議な空間に覆われた。

「何だ何だ！？」

「何だよ……何も起きないじゃないか」

「あんなのこけおどしだ！やっちまえやっちまえ！」

タツベイ達はそう言つと、ずつきを再開する。その内の一人のずつきがメルに命中する。

「……………」

しかし、メルは何事もなかったかのようにそれを振り払い、至近距離でみずでつぼづを食らわした。

同じくラツタも、ピジョンも、ユンゲラーも彼らのずつきを物ともしなかった。

「そ、そんな……俺達のずつきが通用しないなんて……………」

タツベイは絶望感を抱いた。

「はっはっはっ！正義は必ず勝つのだ！さあさあ、一気に勝負を決めてしまおうぜ！」

「ひっ……………ひひひひひひっ！！！」

タツベイ達は戦意を失い、潰走しだした。

「よっしゃあ！俺達の勝ち……」

「たわけ者共が……！」

秀明が勝鬨かちどきを上げようとした時、空から大気が震える様な大喝が響く。

「な、何事ですか……？」

メルは秀明の下に戻る。皆も続いて戻って来る。

「己らは攻撃力を下げられている事もわからんのか！ミロカロス！この状況に埒を明けよ……」

「はっ！くろいきり！」

突然海から出て来たミロカロスと言う萌えもんが、くろいきりを放つ。いやなおとからパワートリックへ繋げる事によって攻撃力を下げる方法はもう使えなくなってしまった。

「よくやった……」

くろいきりが晴れると、そこには大きなドラゴンの萌えもんに乗った初老の男が威風堂々と屹立していた。

「……！」

真の強者は戦わずして敵を圧すると言うが、今まさに秀明達はそれを身を以て体験している。

（何だこれは……！動く事が出来ない！あの男の覇気が余りにも強すぎて……！）

（これが強いという事……なのですね）

誰もがその老人の威圧感に圧倒され、まともに動けない。

「……小僧共」

心臓の鼓動がどんどんと激しくなる。

「何でしょう？」

メルが答える。

「なるほど。確かに、貴様ら一人とタツベイ一人なら貴様らに分があるだろう。しかし、戦いは一人でするものではない」

その老人はそんな事を言い、命令する。

「タツベイよ！整列せい！」

「はっ……ははっ！！」

タツベイは横五列、縦四列で整列した。

「……？一体何が……」

「よし、では全員でずつきだ！息を合わせ、彼奴らを討てい！」

「ずつきー！」

なんと、整列したタツベイ達はスクラムを組み、一斉に突進してくる。

「な、何だと！？」

秀明達は慌てて回避しようとするが、攻撃範囲が広すぎる。

「うっ……うわあああああっ！！」

秀明達はこのずつきをもろに受け、一瞬で瀕死状態になってしまった。

「くっ……！こんなに多くの萌えもんを指揮するとは……」

メルは必死に勝算を探す。秀明の軍師である自分が諦めたら終わりだから。

秀明達の負け……それはすなわち、メルが言った最悪のシナリオが実行されるという事だ。それは断じて避けなければならない。

「もう一押しだ。ずつきー！」

再び、スクラムを組んでずつきをしてくる。

「くっ、再び喰らえば私達は……！よし！」

メルはタツベイ達の前に仁王立ちした。

「なっ……メルー！！」

「はあ……どうせこうなるんだから、逃げとけって言ったんですよ。だけどマスターはそれを無視した。これは貴方の償いです。私を失って、悲しみに暮れて下さいよ」

メルはあくまでも冷静に言った。

「そんな……俺にはまだメルが必要なんだ！俺は馬鹿だから……お前が居なきゃダメなんだよ！！」

そして、思った。

(そうか、さっきのメルはこんな気持ちだったのか)と。

「ふん、主を守る為に自ら楯になるか、良い度胸だ。タツベイ達よ、せめてもの手向けだ。本気で当たれい！」

「まもるー!!」

まもるはメルの鉄壁の守りの真骨頂。相手の攻撃を完全に無効化する。

「今だ！アクアテール!!」

そして、自分中心に密集しているタツベイ達をアクアテールで弾き飛ばす。

「なっ!？ど、どういう事だ……？てか、アクアテール使えたのかよ……」

「はぁ……ホント、マスターは馬鹿ですね。私が本気で死ぬ気だとも思ってたんですか？残念でしたね。マスターなんかの為にこの私が命を懸ける訳無いじゃないですか。後、アクアテールは瀬奈から学びました」

食らった事で、体が覚えたのだろう。

「は……ははは、そうだよな。暴走した俺を止める役割のメルが暴走するわけないよな」

「本当ですよ。全く……だけど……」

メルはあの老人を見る。彼は再び、たくさんのモンスターボールを投げ、タツベイを繰り出した。

「小賢しい……。タツベイよ。今度こそ止めを刺せ！」

再び、タツベイの一斉攻撃が始まる。

「さすがの私も、もう防げませんね……」

メルは白旗を上げた。まもるはまさに絶対防御だが、その分、体の負担が大きい。そして、辛うじて残った体力もアクアテールを繰り出す時に全部使ってしまった。

万策尽きたメルは、せめて、秀明だけは助けようとほとんど無い体力を総動員して最後の技を使う。

「アクアリンググ……!!」

秀明の身体が癒しの効果を持つ水の輪に包まれる。

「さあ、逃げて下さい。マスターさえ生きていれば再起を図れます」
メルはもはや立ち上がる事も出来ない。

「ば……バカヤロウ!! みんなで逃げるんだよ!!」

四人をモンスターボールに戻す秀明。

「マスターの馬鹿。誰かが囷にならなきゃ逃げられないのに」
メルは毒を吐いた。が、その語勢に覇気は感じられない。

「誰かが……犠牲に……? なら……」

ラッタはそういうと、勝手に飛び出した。

「なっ……ラッタ!!」

「私……囷になる……マスター……逃げて」

「ま、待てラッタ! これは大会じゃないんだぞ! 死ぬんだぞ! それを分かって……」

「マスター! 早く逃げるのです! ラッチちゃんが作ったこのチャンスを逸する気ですか!」

「俺達は五人いるから俺達なんだよ! 一人でも欠けたら駄目なんだよ!」

それを聞くと、ラッタは、

「マスター……失礼……!」

「ぐあっ!!」

秀明にたいあたりを食らわした。秀明は海に落ちる。

「さようなら……マスター……」

「ラ、ラッタ……!」

秀明はこの時、初めてラッタの笑顔を見た。その笑顔は、己を達観し、慈悲と優しさに溢れた天使の笑顔だった。

後編に続く

第十八話前編：捨て奸（決死の撤退）（後書き）

作者です。今回は光就達が出てない為、久々に後書きは私が担当します。

今回ののは厳密に言うと、捨て奸にはならないんですよ。捨て奸というのは、追撃を受けてる時に、味方が少しずつ出て敵を撃ったり、斬り掛かったりする戦法なんですよ。ラッタがやったのは殿軍です。まあ、どちらにしても死に行くようなものです。

萌えもんファンタジーは基本、名前付きのキャラに関しては不殺主義をとってるので、ラッタは殺しませんけど……名前だけ出て、本人が出て来ない可能性は高いですね。

次話投稿は二月十三日。なるべく早い投稿を目指します。

第十八話後編：報復（反撃の狼煙）（前書き）

遂に今話で第二章完結！いやあ、よくここまで続けられたもんだ。
むろん、まだまだMFは続くから、引き続き、応援よろしくお願
いします。

第十八話後編：報復（反撃の狼煙）

「遅かったか……」

光就が船首甲板に来た時には、ラッタは散々に痛め付けられていた。

「三下共め！これ以上我が友を傷つけるな！サイコキネシス……！」

光就はタツベイ達を蹴散らす。

「ねんりき……！」

昌明はその隙にラッタを助け出す。

「……………」

ラッタは既に気を失っていた。

「こうなってしまうと、わたしの力じゃ、気休め程度にしかならないと思いますけど……化える炎よ、彼の者に癒しを与えよ……」

美空さんはラッタの傷を回復する作業に入る。

「……貴様か！私は浅井光就。我が友を傷付けた罪、その白髪首で贖ってもらおうぞ……！」

「なるほど、貴様が浅井光就か……ふん、ロケット団特殊部隊五幹部副筆頭であるこのテンゼン、貴様が如き若造に一本取られるほど、老いてはおらぬわ……！」

テンゼンは名乗りを上げる。

「貴様らも我が集団戦法の前に果てるが良いわ！タツベイ、ずつきを構えよ……！」

タツベイ達が整列する。今度は横六列、縦五列の強力版だ。

「行けい……！」

「うおおおおおおおつ……！」

掛け声と共にタツベイ達が突進してくる。

「ふっ、相手が集団で来るならば、こちらも集団で対抗すれば良いだけよ。昌明……！」

「いいでしょう……リフレクター……！」

昌明はバリアを張る。

「愚かな……そんな薄板打ち破れい!!」

しかし、タツベイ達の突進の勢いの前には昌明のリフレクターは砂の城より脆かった。

「無駄無駄あ!んな細腕で俺達を止める事は出来ねえ!」

「さて、それはどうでしょうか……」

ニヤリと昌明はほくそ笑む。

「な、なに!?体が動かないぞ……?」

「ふふふ、貴方方が今壊したりフレクターには、かなしばりの効果が付いておりました、バリアの破片が身体に付着する事により、一時的にですが、神経麻痺を引き起こします。私の計算通りです。さあ、龍宗殿、瀬奈殿、彼らが動けない内に倒してしまつのです!」

「了解!私たちの力、ロケット団に見せ付けてやる!」

瀬奈は跳び上がる。

「狙いは集団の密集部……奴らの核を打ち抜く!りゅうのいかり!」

瀬奈の紺色の炎はタツベイ達の中央で炸裂し、燃え盛る。

「おっしゃあ!次は俺様の番だな!切り込むぜえ!!」

瀬奈が攻撃している間に列の脇に移動していた龍宗は力を溜める。

「大会じゃ出番が無かったが、まさか、こんな時に使えるとは思ひもしなかったぜ……ドラゴンクロー!!」

自らの腕を炎で包み込み、そのまま振り回しながら、タツベイ達の列を突破する。

頭上からのりゅうのいかりに算を乱したタツベイ達は龍宗の格好の餌食。ちぎっては投げ、ちぎっては投げの大活躍である。

「美空は回復作業を続けていてくれ。奴らは私が蹴散らす……!!」

光就はそう言つと、左手を前に出し、

「消え去れ!サイコキネシス!!」

瀬奈と龍宗の襲撃でボロボロなタツベイ達に追い打ちのサイコキネシスを放つ。

「敵部隊、壊滅！さすがですな皆さん」

昌明は称賛の声を上げる。

「ほう、やりおるわ。確かにボスが警戒される程の実力はある。だが、それでもわしには勝てん！ハクリュー達よ、出でい！」

テンゼンが号令を掛けると海からハクリューが飛び出してきた。

しかも、さっきのタツベイ程ではないが、多人数である。

「ふっ……、雑魚を何匹出しても同じよ。龍宗、瀬奈、昌明、私と共に迎撃せよ！」

「了解！」

しかし、光就達がハクリューに向かって走ろうとした時、突然の爆音が響く。

「何！？」

光就は音がした所を向く。そこは元々甲板の一部だった場所である。しかし、今はただの残骸と化していた。

「あの小娘め、大筒を使うとは……むしろ巻き添えにする気か！大筒というのは、大砲の古称である。」

（大砲だと？ちっ、また厄介な物を……幸いに思っべきは、この事があのテンゼンと言う奴の指図では無い事だな）

光就はそう思いながら海を見た。そこには一隻の戦艦があった。

（誰が指揮してるかは知らんが、まず、味方では無いだろうな）

（かと言ってテンゼンの味方でも無さそうだな。もしそうなら味方がいると分かっている場所に大砲を発砲する訳が無い）

（……ロケット団にも、何か複雑な事情があるようだな。ふっ、まあ内輪揉めは大歓迎だ。ガンガンやっていろ）

（しかし、相手に大砲をいのように撃たれると、困るな。ここは船だ。しかも、この船は戦艦じゃない、豪華客船だ。多少は頑丈な造りだが、当然、戦闘用には作られていない。大砲の弾などがまともに当たってしまえば一発で沈んでしまう……）

「ふん、興が削がれたわ。浅井光就よ、この勝負、次回に預けさせてもらっぞー！」

と言うと、テンゼンは全軍撤退の下知を出す。

（全軍撤退……？この圧倒的優勢でか？確かにあの戦艦は奴の味方では無いだろうが、それでも同じロケット団である以上、敵ではあるまい。ふむ、分からん奴らだ）

（しかし、ありがたいはありがたい。これで我らはあの戦艦の攻略に専念できる）

光就はしばらく思案を巡らす。

しかし、大砲の爆音に思考を邪魔される。

（ちっ……！のんびりしてはサントアンヌ号が沈んでしまうわ。

ここは逃げるべきか……）

「皆、一旦退くぞ。ここについては巻き添えを食らう」

「それは駄目です」

昌明が否定する。

「光就殿、それは万策尽きた際の最後の選択肢です。考えてみて下さい。かの大砲は私達を狙っている。だからこそ、この船を標的に砲撃しているのです。今、港は急いでサントアンヌ号から避難してきた人でごった返しています。そこに砲撃の対象である私達まで行ってしまったら、彼らも砲撃の餌食になってしまいます。何とかして、かの戦艦をここにいる私達だけで無力化しましょう」

昌明はこの様に言った。

「ふむ、道理だな。やれやれ、こんな事も分からないとは、私もまだまだだな」

光就は自嘲気味に言うつと、再び思案を巡らせる。

「……瀬奈、美空、敵の目を盗み、戦艦を奇襲せよ。制圧しろとは言わない。大砲を使えなくする程度で構わん」

光就は歩き以外の移動方法を持つ信頼する仲間二人に起死回生の策を授ける。

「奇襲ですか。ふむ、それしか無いでしょうね」

昌明は頷く。

「では、私達は奇襲を悟られないよう、囿役に徹するとしましよう。」

後、お二人のみがわりも立てておかなければなりません。私の力では一人分を作るのが精一杯です……。皆さんの中でみがわりをさせる方は居ますか？」

「みがわりか……。私も協力しようぞ」

昌明の問い掛けに光就が応じる。

やがて、二人のみがわりが作り出された。

そして、満を持って光就達は策を実行に移す。

「美空、瀬奈、言うまでも無いが、これは奇襲。敵に見付かつてはそれまでだ。くれぐれも敵の目には注意しろ。さあ、行け！既に勝ち誇っている奴らに泡を吹かせてやれ！」

「はいっ！」

「了解した！」

美空さんと瀬奈は敬礼をすると、戦艦に背を向けて海に飛び込む。瀬奈はそのまま泳いで戦艦へ、美空さんは大きく迂回しながら低空飛行で戦艦へ向かう手筈になっている。

なお、美空さんが回復していた秀明のラッタは彼女の必死の治療のおかげでほんの少しだが、快方に向かっていた。

（とは言え、しばらく戦う事は出来まい。すまん、秀明よ……。私の認識が甘かった。私がつと早く来ていれば、こんな事にはならなかったはずだ）

いつか、この事に対して報いを受けなければならない日が来るだろう。と、光就は悲嘆した。

（いつまでも悲しんでいる場合ではない……。この戦いに勝たなければ、更に多くの悲しみが生まれる事になる。それは絶対避けなければならぬ）

光就は切に願う。この戦いの勝利を。悲しみの連鎖の断絶を。

突如、クチバ近海に現れた戦艦の指揮者はやはりトウカだった。

彼女はこの前、美空さんに海へ落とされたが、事前に手配してあったこの戦艦に助けられたのだ。

「でも、まさか本当にこれが必要になるとはね。はあ……あんな奴私の舌先三寸で口説き落とせると思っただけどなあ」

トウカはため息をつく。

「ま、こうなつた以上は仕方ないわ。とことん痛め付けて二度と逆らえないようにしてやるだけよ！さあ、容赦は無用よ、砲撃始めっ
！」

トウカの号令の下、けたたましい爆発音が鳴り響き、砲弾が炸裂する。

「おーほっほっほっ！良い気味ね。浅井光就は私の戦艦の華麗な砲撃でパニック状態。ジジイは尻尾巻いて逃げ出しちゃった。おーほっほっほっ！笑いが止まらないわ」

トウカは愉悦感を覚えている。

だが、その時、

「トウカ様、テンゼン様より無線が繋がっております。いかが致しましょう？」

その楽しみに水を差されてしまった。トウカは腹立たし気に、

「出ないわけには行かないでしょ？いいから早く無線器をよこしなさい！」

とまくし立てた。

「もしもし、トウカです」

「トウカよ……貴様、功を焦つたな」

「あらあら、何の事ですか？そちら側が勝手に撤退しただけですよね。私は援護射撃のつもりで発砲したのですが」

「ふん、まあいい。こうなれば、貴様の泥船が沈みいく所を拝んでやるのみよ」

「泥船？この堂々たる戦艦に向かつて？いやですねえ、眼科に行かれてはどうですか？」

「ふん……その驕り高ぶりは己を滅ぼすぞ」

「あらあら、それは脅しですか？」

「警告だよトウカ。同じ五幹部としてな」

「そうですか、ありがたく受け取っておきますわ。では、どこかの敗残の将と違って、私は忙しいのでそろそろ無線を切らせて頂きますね」

「ふん、精々無駄な足掻きをするんだな」

「フッフ、そうさせて頂きますわ。では、さようなら！」

ブツツと無線を切る。そして次の瞬間、トウカは箍が外れた様な高笑いをした。

「おーほっほっほっ！ねえ聞いた？ジジイのあの負け惜しみ！何が驕り高ぶりは己を滅ぼすよ！この戦艦をたった五人でどうやって沈めるっていうのよ？無理よ無理。海からの襲撃にも魚雷で対抗出来るし、空からも対空機銃があるから問題無し。そう、これこそまさに不沈艦！沈むこと無き船なのよ」

トウカは自分の勝利を疑っていなかった。だが、それが甘かった。敵は凡人ではない。あの光就なのだから。そういう意味では油断していたのだろう。

戦場ではその油断が命取りなのだ。

（ロケット団戦艦の奇襲……おそらく、成功は容易ではあるまい。

しかし、これを成し遂げなければ私たちに明日は無い。主は自分の未来を私と美空殿に託したのだ。弱音を吐いている場合では無い！）

瀬奈は水中で決心を固める。

（さて、奇襲の手順の確認だ。まず、私は一気に戦艦を目指す。しかし、攻撃はしない。何故なら、二人で攻撃しなければこんな大きな砲台を壊す事など出来ないからだ。だが、もたもたしてたらサントアンヌ号は沈んでしまう。そこでどちらかが先に戦艦に着いたら、着いた方は放たれた砲弾に向けて、技を放ち、勢いを弱める。そう

すれば砲弾は船に辿り着く前に海に落ちる事になる。そして、もう一方が戦艦に着いたら二人で砲台を破壊する。これが奇襲の手順だな)

瀬奈はまっすぐ戦艦を目指すが、美空さんは敵に見付からないように、かなり遠回りして戦艦を目指すことになるので、実質、瀬奈が敵の妨害工作をする事になるだろう。

(さて、そろそろ着く頃かな……ん?)

瀬奈の耳に何かの発射音が響く。

(何だ……?!)

瀬奈は転瞬、体を捻る。彼女の脇を凄まじい早さで魚雷が通り過ぎて行った。

(さすが……というべきか。やはり、水中から攻めて来ても良いような装備があるな……上等だ!)

瀬奈は五感を研ぎ澄まし、

(今だ!りゅうのいかり!)

魚雷が来ると感じた方向にりゅうのいかりを放つ。魚雷は爆発する。すると近くを走る魚雷も誘爆する。

(これで少しは進める……)

しかし、これは力の浪費が激しい。

(もうかれこれ何回りりゅうのいかりを使ったのかわからない。だが、自分の技だ。残り何回使えるのか位は分かる。後四回使えば良い方だな)

敵戦艦の砲台数は四台。すなわち、もうりゅうのいかりは使えないのだ。

(こうなったら、全て躲していくしかない。……南無三!)

瀬奈は五感を研ぎ澄ませながら、泳ぐ。相手の弾切れを待ってる時間は無い。こうしている間に、光就達は船や町に辿り着きそうな砲弾を迎撃しているのだ。しかし、彼らも人の子、来る弾来る弾を無限に迎撃し続ける事は出来ない。

(私が早く着かなければ、主を、龍を、昌明殿をむざむざ死なせて

しまう事になる！私はこの奇襲を成功させなければならぬ！海竜王の誇りに賭けて……！)

瀬奈に熱い感情が宿る。この魚雷弾幕を抜け、皆を守り切るという、熱く、誇り高い感情だ。

(行くぞ！！)

右側から魚雷が向かって来れば左に避け、左から来れば右に避け、両側から来れば中央突破。両側と真ん中から来たら、浮かび上がり、両側と真ん中、更にも上から来るなら、沈みながら躲す。両側真ん中上下と来ても、隙間を見定め、突破する。

(体が軽い……不思議な感じだ……)

今の自分なら何処から魚雷が来ても躲せると瀬奈は思った。それ程までに体が軽い。いや、それだけでは無い。目の前の魚雷はもちろぬ、遠くの魚雷の位置も分かっている。もうのど。

こうして、弾幕を抜けていくうちに、瀬奈は壁の様な物を遠くに感じた。

(今だ、アクアテール！！)

瀬奈のアクアテールが起こす波は魚雷を飲み込み、魚雷はその発射口ごと大爆発を起こした。

(よし！私はこの死地を乗り越えたぞ！後は美空殿の到着を待ちつつ、敵を妨害すれば良いだけだ！)

瀬奈は戦艦を見上げる。そこに写るのは、一つの白い影。

(なんだ、妨害する必要無いじゃないか。ふっ、さすが美空殿だ……)

瀬奈は思い人の影に安心を覚えたのだった。

(……トウカ、しつこい人です。どうやら、わたしはとんでもなく執念深い人に付け狙われたみたいですね)

美空さんはそんな事を思っていた。

(いや、例えどんな人に狙われようと、わたしには関係ない。わたしはもう迷わない。光就さんと、そして、みんなとずっと一緒に居

るんです！わたしたちは決して一人と欠けてはいけない。この騒動は、そんな当たり前な事を気づけなかったわたしが引き起こしたも同じ。だから、わたし自身が蹴りをつけなければならぬのですっ！)

美空さんは今、ロケット団戦艦の遙か上空に居る。彼女は遠回りなどしなかった。瀬奈が水中から真つ直ぐ向かうなら、自分は空中から真つ直ぐ向かえば良いと思っただからだ。

(でも、何で光就さんはこんな簡単な方法を取らなかったんだろう？)

と思いつながら、美空さんは急降下する。そして、その問いの答えを知るのである。

(なるほど、対空機銃ですか……でも、そんなの意味ないのです。かえんほうしゃー！)

美空さんは炎を放つ。

「かぜおこしー！」

更に、吐いた炎へ風を起こす。煽られた炎は一つの巨大な火の玉となって、機銃に燃え移る。機銃はその役目を一回も果たす事なく壊れてしまった。

(これでもう機銃は役に立たないのです。さてと、瀬奈さんはどこかな？)

美空さんはキョロキョロと海面を見渡す。

(あつ、いた)

「瀬奈さーん！お待たせしましたー！神風美空、到着です！」

「美空殿、さすがに早いですな」

瀬奈は安堵の表情を浮かべる。

「さて、奇襲も大詰めですよ。大砲を壊しに行くのです！瀬奈さん、しっかりつかまって下さいです！」

美空さんは瀬奈を背に乗せると、一つ目の砲台に向かう。

「さあ、瀬奈さん、用意は良いですか？」

砲台に到着した美空さんが言う。

「ええ……。我らの怒り、この炎に込めて」

「悪逆の徒、悉く灰燼に帰さんですつ！」

「青龍火炎砲！！」

りゆうのいかりとかえんほうしゃが合わさり、巨大な炎の龍となつて、敵戦艦の大砲の中に入っていく。本来、着地してから爆発する砲弾は大砲の中で爆発する事になる。

しかし、この炎の龍の怒りは大砲一つを爆破した程度では到底収まるものではなかったようだ。炎は他の大砲を誘爆させ、更には船内にまで燃え広がり、いつしかこの戦艦は炎に包まれてしまったのである。

「あららら、ちよつとやり過ぎちゃったみたいですね……」

「ふん、ロケット団め、良い気味だ！」

「まあ、目的は果たせたですし、帰るとしましょう！」

「ええ、そうですね」

沈みゆくロケット団戦艦を背に、二人は仲間達の下に帰る。自分達の勝利を知らせる為に。自分達の無事を証明する為に。

「な、何でよ……。？何でよ！？何で……。何でこの私がこつも何回も敗れる？信じない……。そう！これは夢よ！悪い夢なのよ……。ははははははは……。」

トウカ、再びの敗北、しかも今度は圧倒的優勢の上での敗北だ。

自尊心の高い彼女はあまりのショックに錯乱状態に陥っている。

「ト、トウカ様！早く逃げなければ戦艦の爆発に巻き込まれます！」

「何言ってるのよ、サントアンヌ号はもう沈没寸前よ。撃って撃つて、撃ちまくれ！あはははははははははは！！」

「駄目だ、こつなつたら強引にでも連れ出すしかない！」

トウカを二人がかりで連れ出す、彼女の側近達。

「さあ、勝ちどきを上げなさい！私を崇めなさい！」

「はい、えいえいおー、さ、行きますよ」

彼らの統率が良かったおかげで、何とか船の乗組員は全員、避難できた。

「はははははははは……はっ！ここは？」

ここにきてようやく、トウカは自我を取り戻した。

「……避難ボートの上です」

「はあ？何ですよ？戦艦は？戦艦はどうなったのよ！？」

トウカは記憶が少し飛んでいるようだ。

「言いにくい事ですが……沈没しました。神風美空と海風瀬奈の奇襲によって……」

「沈……没？そんな馬鹿な！」

「そんな馬鹿なも何も、私達が今こうやって小さなボートを漕いで味方がいる場所まで敗走しているのが何よりの証拠です。お察し下さい。辛いのはトウカ様だけではありません」

ボートを漕いでいるトウカの部下達は皆、まさかの敗北を味わってしまい、意気消沈している。

「……くっ……！」

「トウカ様？」

「みんな、すまない事をしたわ……今回の敗北は私の油断が招いた事よ。ジジイの言う通りだったわね……ごめんなさい！」

いつもは高飛車なトウカがこつも素直にしおらしく謝ったのは、おそらくさつきまでの愚かしい自分を顧みただからだろう。そういう事ができるのもまた、大器の証なのだ。

「……御安心下さい。その今の気持ちを忘れなければ、いずれ再起を図れますよ」

「そう……嘘でも嬉しいわ」

後に、この時のトウカ隊の隊員が、敗残兵であったにもかかわらず、一人の逃亡者も出なかったのは、このしおらしいトウカに萌えたからだと言われているが、その真相は彼らのみぞ知る……。

「……トウカがしくじったか」

ロケット団ボス、サカキが電話に向かって重々しく言う。

「クチバ近海に救出部隊を出しておけ。後は全軍待機しておけ」

と言うと、サカキは受話器を置く。

「……テンゼン、戻ったか」

「はっ、ただいま」

扉を開け、入って来るテンゼン。

「どうだ？ 奴と戦ってみた感想は？」

「得体の知れない者でございます。奴は……浅井光就は……、単なる若造かと思つたら、トウカをその軍略で以て敗り……私自慢のドラゴン部隊にも恐れを示しませんでした。確かに、ボスが危惧するに値する男です」

「それだけか？」

サカキはテンゼンの感想に多少の失望を抱きながら言った。

「それだけ、と言いますと？」

「奴はそんな下らない存在ではない。そう、言うなれば私と同等の存在、すなわち霸王だ」

「まさか……いくらなんでも買い被り過ぎでは……」

「ふん……」

サカキはそれつきり黙り込んでしまった。果たして、その胸中に去来する思いは何か。

分かる事はただ一つ。あのトウカの大敗もサカキにとっては必然の出来事だった事である。

「おお、そうです。ボス、頼まれていた書類です。例の屋敷を風漬しに探した所、出て来たものです」

「ほっ……」

サカキはその書類を受け取る。

「ククク……御苦労。これでやっとMCPの謎を説き明かせる……」
突如としてクチバシテイを騒がした戦いは終結した。
しかし、早くも新たななる戦いの火種は放たれたようである。

第十九話に続く

第十八話後編：報復（反撃の狼煙）（後書き）

龍宗「遂に終わったぜ、第二章！」

光就「そうだな……。第三章も引き続きよろしく頼むぞ」

龍宗「おっ、遂に光就も後書きデビューだな！」

光就「だが、そのお陰で今日は私と龍宗しかおらぬようになったわ。第二章の最後なのに暑苦しいな」

龍宗「はあ、どうせ次、THE AFTERだろ？これは最終話じゃねえよ」

光就「ふむ、分かってるではないか」

龍宗「でも、瀬奈と師匠を二人きりにするのか……。大丈夫か？」

光就「大丈夫とは？」

龍宗「いや、何でもねえよ」

光就「？まあ良い。THE AFTERは明日にでも投稿されるだろう」

龍宗「にしても……。今話は師匠や瀬奈の活躍ばっかで俺達の事は前半に触れたくらいだ！あの二人が活躍してる裏で、俺達は何十何百と砲弾を捌いてたんだぜ！」

光就「それを言うな。彼女らの奇襲がこの戦いの肝だったのだから。それにここに来れなかった奴もいるのだ。贅沢を言うものではない」
龍宗「そうだな……」

第十八話 THE AFTER

「……………」
重々しい空気が場を支配していた。

ここはあの戦いの後、ラッタが運ばれた萌えもんセンターである。今ここには光就と秀明。そして彼らの仲間が一拳に集合している。

「…………どの面下げてここまでやって来たんですか、光就公？」

この空気の中、メルが最初に口を開く。彼女は嫌う人間に関してとはとことん皮肉を言うので、公付けで人の名前を呼ぶのは、彼女にとって最上級の嫌悪を表している。

「…………すまない。此度の戦いで彼女を傷つけてしまったのは、私の失策の所為だ。全てはこの光就の責任だ」

光就は頭を下げて言う。

「で？そんな事言つて、私達に何を求めてるんですか？まさか、そんなんで私達の許しを得ようとしているんですか？頭を下げて謝罪の言葉を口にする事くらい、馬鹿にだって、いくらでも出来るんですよ。本当にすまないと思ってるなら、誠意を見せて下さい。誠意を」

メルは冷酷に言い放つ。そして、秀明はその様を黙って見ている。「誠意？」

「はい。そうですね例えば…………光就公があんな無茶な戦いを止める事を誓ってくれるとか」

「何だと？」

光就は怒りをあらわにする。

「何ですか光就公。そんな怖い顔して良い立場だと思ってるんですか？当然じゃないですか。ラッタは私達の大事な仲間なんですよ。あの戦いは彼女を傷つけた。じゃあ、何故あの戦いは起きた？貴方の所為です。貴方のニビでの蛮行がロケット団を敵に回した。違いますか」

「違うですっ！」

メルの発言に美空さんが即座に反駁する。

「あの戦いはわたしが起こしたようなものです。光就さんは戦いが起きないように頑張ったのです。だから、光就さんに非はないのです！責任はわたしのみが背負うべきですっ！」

「へえ……まあ、実際戦いが起きてそれも終わってしまった以上、その争いを忌避する努力が本当にされたかどうかを証明する事は出来ない云々の水掛け論を言い張ったって仕方ありませんからそういう事にしておきましょう。で、貴女はどうやってその罪を贖うというのです？」

「へっ？」

「ふ？」

「ほ？」

「馬鹿な事やってないで下さいよ。どう責任を取るつもりかと聞いてるので」

美空さんはそれつきり黙ってしまった。

「考えてなかったんですか。ただ庇うだけなんて三文芝居もいいところですね。はあ、そろそろ貴女方も目覚めたらどうですか？浅井光就は自分以外を駒としか見ていないような男……そんな男に命懸けるなんて馬鹿馬鹿しいとは思えません？」

「思えんな！」

メルの罵声に瀬奈が噛み付く。

「主の表面しか知らぬ癖に……知ったような言を吐くな！！」

「やれやれ、お熱い方ですね……じゃあ、逆に聞きますけど貴女は光就公の何を知ってるんですか？私はですね……浅井光就という男を貴女より前から知っていましたよ。一ヶ月早くとかそんな次元じゃありませんよ。何年も前から知っていましたよ。貴女は騙されているんですよ。光就公の心底にあるのは深い欲望と野心の間ですよ」

メルは平然と言い放つ。

「何を根拠にそんな事……！」

「根拠？本来なら避けたいはずのロケット団との闘争に自らぶつかっているのが何よりの証拠ですよ」

「ぐっ……」

瀬奈は言い返せない。

「今や、貴方の活躍は町中、いや、カントー中に知れ渡っています。……良い名声稼ぎになりましたね。そして、その犠牲にラッタはなつた訳ですね！いやはや、自分の萌えもんでなく、人の萌えもんを犠牲にする所が実に光就公らしい！はははははは！」

「……………」

光就は反論しない。

「……………どうせ、ここに美談作りに来たんでしょ？帰って。私達はそんな奸策に乗ったりはしない！帰って下さい！帰れ！！」
メルはついに斜な態度を取る事もやめ、叫んだ。

「……………皆、帰るぞ」

「えっ!？」

「あ、主！このまま言われたままで引き下がるつもりですか!？」

「光就！あなたならあれくらい反論できるだろ！」

美空さん、瀬奈、龍宗の三人が引き止めようとするが、

「……………」

光就は黙ったまま萌えもんセンターを出てしまった。こうなってしまうとは三人も彼を追わざるを得ない。

次々と退出していく中、背を向けながら、龍宗はメルに対してこう言った。

「……………あんたが光就の事が嫌いだとは知ってたが、あれは言い過ぎだぜ」

「ヒトカゲ。私達は同じ釜の飯を食べた仲。私が言ってる事は分かりますよね？」

「ああ、確かに光就は冷たい奴だ。俺らも時々、あいつが何を考えてんのか分かんねえことがあんだ。けどよ、あいつは少なくともゼニガメが思ってるほど悪い奴じゃねえよ」

メルは何も言い返さなかった。

「もし、光就があんたが言った様な奴だったとしても、俺には関係ねえよ。あいつは俺に『龍宗』という名前をくれたんだ。小さい頃の記憶が無くて、本当の名前もわからない俺でも、堂々と名乗れる名前をくれたんだよ。俺があいつについていく理由はそれだけだ。頭の良いお前にとつちや、馬鹿みたいな話かもしれねえが、仕方ねえだろ。俺は馬鹿だからよ」

「……馬鹿じゃないの」

「じゃあ、ゼニガメ……メル、俺はもう行くぜ。じゃあな」

「さようなら、私の同郷の友……龍宗さん」

「へっ、嫌われちまったか……」

「いや……さっきまでは龍宗様だった。私の中では好感度急上昇ですよ」

「そうかよ……はははははっ！」

龍宗はそう言つと笑いながら退出した。

「……メル」

秀明は龍宗が去ってから口を開いた。

「マスター……」

「ありがたかった。でもよ……」

秀明はメルが何故あんなに酷い事を言うのか分かっていて。自分の為だという事を。

「結局……俺が一番悪いんだよな。ラッタをあんな風にしちまったのは」

「マスター、それを言うなら、私にも責任がありますよ。私が余計な事を言った所為で……」

メルはあの時「誰かが困らなければ逃げられない」と、軽はずみな発言をした事をずっと悔いていた。

「メルがそう言わなくなつて、あいつは敵中に飛び込んだよ。悪いのは一時の勝ちに油断した俺だよ」

秀明は言った。

「ところでメル、本当に光就の事をああ思ってるのかよ？」

秀明もまた昔からメルを知っている為、彼女が光就を嫌っている事も知っていたが、あそこまで嫌っているとは思ってなかつたのだ。「残念ながら、私からはマスターが期待する発言は出ませんよ。光就公の事は昔からいけ好きませんでしたから。ただ……」

「ただ？」

「少し……ほんの少しですが、悪く見すぎてたかもしれませんね」
メルは光就を少し見直していた。

「なら良いんだ。はあ……次会つたら謝んなきゃな。にしても、なんでメルは光就の事が嫌いなんだろうな。同族嫌悪か？」

「失敬な……マスターは私の事を彼と同じだと言つのですか」

「ああ、同じツンデレじゃん」

「……陛下、今までお世話になりました」

「陛下！？マスターから陛下！？どんだけ好感度下がったんだよ！しかも出奔しようとしてるし！」

「さらばです。陛下……次は光就公の所にも行きますかね」

「えっ！？あんなに嫌つてた光就の所に行くの！？どんだけ嫌われたんだよ俺？行くな！行くなメル……ッ……ッ……」

秀明は涙目だ。

「……いやですねえ。冗談に決まつてるじゃないですかマスター」

「ですよー」

「……ずっと一緒にいてあげますから、安心して下さいよ……」

メルはそう言うと、顔を赤らめ、
「か、勘違いしないで下さいよ！マスターがあまりにも情けない顔で叫ぶものだから、仕方なく一緒にいてあげるだけですからね！」
とまくし立てた。

「はい、デレ成分、ごちそうさまでした」

秀明は真つ赤なメルをいつまでもからかっていた。

夜、光就はクチバの港の隠された場所で美空さんを呼び出していた。例のトラックのある場所である。

「光就さん、なんですか」

美空さんは夜では全く役に立たない鳥目を補う為、眼鏡をかけている。

「美空よ、私の事をどう思う」

光就の突拍子も無い質問に戸惑いながらも美空さんは、

「え？わたしは……光就さんは立派だと思いますよ」

と、答えた。

「そうか……」

と、光就は言う。そして、空を見上げる。満天の星空だった。

「光就さん、一つ質問していいですか？」

「好きにせよ」

「……光就さんは何でロケット団と戦おうと思ったんですか？」

光就は腕を組み、眼を閉じた。

「やっぱり答えられないですか？」

「……お前がこの事を他言しないと誓えるなら言っても良い」

「分かったです。誓います」

すると、光就は港の棧橋を歩きはじめた。美空さんもそれに続く。

「理由は二つある。一つは父上に会う為だ。私の父はロケット団五幹部の筆頭なのだ」

「えっ！？そうだったんですか！？」

「ああ、そして、ロケット団と戦い続けていればいずれ会えるだろうと思っただのだ」

「……光就さんは光就さんのお父さんに会ったらどうするつもりですか？」

光就は歩を止める。美空さんはそれに気付かず歩き続けたが、やがて気付いき、ダッシュで戻った。

「もし、会えたならマサラに連れ戻す。そして、また一緒に暮らすのだ。むろん、お前達も望むならそこで暮らしても良いのだぞ」

「えっ！？光就さんと一緒にですかっ！は、はう……」

美空さんは顔を赤くする。

「そして、もう一つ理由があるのだが……」

光就は再び歩きだす。美空さんもそれについていく。

「その理由というのは……知りたい事があるのだ。それを奴らは知っている」

「知りたい事……ですか？」

「ああ、美空はMCPなるものを知っているか？」

「えむしーぴー？知らないです。何かの略称ですか？」

「分からない。MCPという単語が一体何を意味しているのか私にも分からない。だが、感じるのだ。この単語の謎を解き明かす事が私の使命だと」

光就達は棧橋の先にたどり着いた。もう進めない。

「なるほど……で、そのえむしーぴーとロケット団にどんな関係があるんですか？」

「ニビ地下基地の倉庫、覚えているか？」

「ああ、あのポリゴンがたくさんいた所ですね。覚えてるですよ」

あの時はがっかりしたなーと美空さんは懐古していた。

「あそこにあったフロツピーディスクとフォルダ……あそこにはMCPの事が書かれていたのだ。あの時はMCPの事など意識もしていなかったから、勿体ない事をした」

「えっ？要するに……ロケット団はそのえむしーぴーの情報を隠しているという事なのですか？」

「そういう事だ。そしてその情報は五幹部でさえ不可侵の領域にある。どうだ、ワクワクしてこないか？」

「そうですね！でも……知ってどうするんですか？」

美空さんは素朴な疑問をぶつける。

「そうだな……もし、MCPが凄い兵器だったならそれで世界征服でもするか！」

「ぶっ！何を言い出すかと思ったら……世界征服ですか！」

美空さんは大笑いする。

「ぶっ、まあ、それは冗談として実際知った所でどうにかなるものでもない。私の目的はあくまで父上を連れ戻す事よ」

「そうですねか……うん！わたしは協力しますよ。光就さんと一緒に暮らす未来……素敵ですもの」

「そう言ってくれるか、ありがたい。美空、お主は私の最高の相棒よ！」

「そ、そうですねか……？えへへ……」

「だから、もう私から逃げようとするなよ。お前が居なくなっっては面白くない。からかう相手がいなくてな」

「うう、そういう意味ですか……戦闘要員としてじゃなくて……」

「ぶっ、むろんそっちも期待しているさ」

「そう……ですか」

何故か悲しそうにする美空さん。

「お前が思っている事は分かってる。おそらくそれはお前自身が乗り越えなければならぬ壁よ。だが、焦る必要は無い。お前ならきつと乗り越えられる。私も応援している。その壁を乗り越え、私の領域に達してみろ」

「は……はいっ！光就さんっ！」

「ぶっ……その意気よ」

光就はようやく美空さんとの亀裂を消す事が出来たのだ。

（だが、今度は秀明との間に亀裂ができてしまったな。まあ、今は美空と仲直り出来た事を祝うとしよう）

光就は町に戻ろうとした。すると、美空さんが彼のマントを引っ張る。

「何だ？」

「あ、あの、手、繋いで帰りたい……です」

「ふむ、お望みとあらば」

光就は差し出された手を握る。

「はう……………」

美空さんの顔は限界まで赤くなっている。

（やれやれ、すぐにでもぶっ倒れそうな勢いだな。こちらまで恥ずかしくなってくるわ。まあ、悪い気はしないがな）

二人は潮風が吹く棧橋を戻っていく、手を繋ぎながら。

第十九話に続く

第十八話 THE AFTER (後書き)

美空「第二章完結ですう！パチパチい」

瀬奈「第三章のタイトルは『将星集結』らしいですよ」

美空「なんか仲間がたくさん増えそうな章なのですっ！」

瀬奈「美空殿、それは言わない約束……」

美空「そーですかー」

瀬奈「まあ、可愛いから良いです。次話投稿は二月二十一日だ」

美空「光就さんはハナダに戻り、やり残した事をやると言ってますよ」

瀬奈「はいはい、そこまで！。では以下フリートークタイム！」

美空「フリートークと言われても何を喋ったら……あつ、そうだ！

この前の青龍火炎砲、成功してよかったですね！いやー、こういう時何て言うんですっけ……ああそうそう、ほぼイキかけました！」

瀬奈「み、美空殿……合体技……イキかける……な、なんてエロいんだ美空殿おおお！」

美空「な、何ですか！？今の話のどこにエロ要素が？（注：美空さんはイクという言葉がどういう意味なのか知りません）」

瀬奈「うううう……美空殿！私の青龍火炎砲を見て下さい！これをどう思いますか！」

美空「すごく……もなにもあなたにそんなものは無いですよ！」

瀬奈「くっ……いや、違う！有る無いの問題ではないのだ！愛があればどうにでもなる。さあ、美空殿！私の股間にかえんほうしゃを……」

美空「もう嫌ですう！瀬奈さんの変態！」

瀬奈「失敬な！私は変態ではない。変態という名の淑女だ！来ないならこちらから行くぞ、美空殿おおおお……」

美空「くっ、神風美空、乙女の貞操の危機なのですっ！ブレイブバード……」

瀬奈「なんの！真の紳士淑女は美空殿のブレイブバードを避ける事なく、風圧でまる見えな太ももを凝視するべし！そして、必殺の一撃に快感を覚えよ！」

美空「見るなですう！」

瀬奈「おお！快なり！！」

第十九話：美空さん、情報を集めんとするの事（ですうとツンデレと時々淑女）

やあ（、・・・）

故あって、今日からアセロラ蕎麦と名乗らせていただきます。

まあ、理由は……作者がMFを捨てる危険性が無くなったからですかね。

第十九話：美空さん、情報を集めんとするの事（ですうとツンデレと時々淑女）

（ふむ……）

光就はハナダジム寮の自室で物思いに耽っている。むろん、考えている事はこれからの戦略である。

かのサントアンヌ号強襲事件から一日。当事者である光就達は早々にクチバから立ち去った。

その理由としてロケット団の報復を恐れたからもあるが、光就曰く、仮面のヒーロー効果を狙ったものらしい。

当時、サントアンヌ号に居たのは、光就達だけだ。だが、ロケット団が大砲を持ち出した事は船外の人間でも分かった事なのだ。当然、人々はもうサントアンヌ号は沈んだ物だと思っただろう。

しかし、いざ蓋を開けて見れば、ボロボロではあるものの、ちゃんと海に浮かんでいたサントアンヌ号が居たのだ。

そしてもう一つ、事件の当事者でなくても分かる事があった。船に残っていたのが光就と秀明であった事である。

二人共、この前の戦いで優勝、準優勝し、一躍時の人となった。当然、顔も覚えられている。

現実、既にクチバでは光就達は英雄扱いされている。後は放っておけば尾ひれの付いた、英雄・浅井光就が人々の中に出て来るだろう。

（それまではあまり表に出ない方が得策だろう。下手な事をしてその勢いに水を差すのは良くない）

と、光就は感じ、この寮からもそろそろ出ようと思っている。

（しかし、ここでやるべき事が終わった訳ではない）
光就にはハナダでやり残した事がいくつかあるのだ。故に、この地を離れられない。

（まあいい。ハナダの事に関しては動きさえすれば何とかなる。問題はこれからの戦いだ）

光就はこの前の戦いを思い出す。

（先の戦い……我らは一応勝利を収める事が出来たが、実際は我らが勝ったのではなく、奴らが負けただけだ）

光就にとつてあの戦いは敗北に限りなく近い勝利だと感じていた。（ロケット団特殊部隊五幹部副筆頭、テンゼン……。奴は相当な実力者だ。今まで私が戦った者の中でも桁違いの覇気を放っていた。今後ロケット団と戦い続けていれば、再び奴と相見える時もあるだろう。その時まで、我らは奴に勝てるような実力を付けておかなければならない）

光就は自分を含めて、修業をする必要性を感じた。

（更に、新たな仲間も増やさなければならぬ。今後、戦いは更に厳しくなる。四人だけではどうにもならない。しかし、だからといって、ただの萌えもんでは意味が無い。真に才覚溢れる者でなければ、この戦いの前線に立つことなど出来ない）

光就は優秀な萌えもんを渴望していた。しかもただ優秀なだけでは駄目なのだ。鳳趨、虎賁、臥竜、鬼才、神童、麒麟児。これらの言で称賛するに相応しい才覚を持つ者でなければ、この戦いでは役に立たない。

（しかし、何処にそんな才人がいる？……時間はあまり残されていない。迅速に見つけなければ）

光就はこう思い、自室を後にした。

（まあ、まずは知っている者から登用を始めるとするか）

光就の脳裏に写るのは、例の事件で知り合った一人の萌えもん。

この地で隠遁生活を過ごしているという才人、竹中昌明。

「光就さん！わたしたちのこれからの行動、決まっただんですね！」

「ああ……」

光就は三人をハナダの町外れの広場に呼び出した。

「主、クチバでは大変な騒ぎになっているようだ……事件後すぐにハナダに帰ったのは正解だったな」

「そうだな……しかし、我らはもはや有名人。ハナダにもあまり長居は出来ないぞ」

「なるほどな。で、次は何処に行く気だ？ヤマブキか？」

「ハナダから9番10番道路、イワヤマトンネル、シオンタウンを経てタمامシシティへ向かう。これからはなるべく人目を避けて行動すべきだ」

光就は自分の計画を話した。すると、

「何で人目を避ける必要があるんだ？」

早速質問が飛ぶ。

「それは、我らがもう世間から無名のトレーナーとその萌えもんだと見られていないからだ。私の言う人目というのは、必ずしも善意を持ったものとは限らない。……我らの事をロケット団も本格的に警戒し出している。奴らの事だ。どんな汚い手で私やお前達を排除しようとするか分かったものではない」

自分達は既にロケット団と二回の戦いを経験している。そして、その戦いの二回ともロケット団の敗北に終わっている。奴らが組織の威信を賭けて、そろそろ勝負に出る頃だと光就は考えた。

「いくら我らだけが強くても、所詮はただの厄介者。障害にはなり得ない。奴らにとっては我らを消すなど容易い事なのだ」

「……………」

三人ともこの厳しい現実を痛感した。基地を爆破しようが、戦艦を沈めようが、それは単なる局地戦の勝利に過ぎず、ロケット団という巨大な組織全体から見れば、蚊に刺された程の損害もない。

「じゃあ、どうすればいいんですか？光就さんには何か考えがあるんですか？」

「ああ、もちろんだ」

美空さんの問い掛けに光就は応じる。

「簡単な事よ。仲間を増やせばいいのだ。我ら四人だけではすぐに

潰されてしまいかもしれないが、仲間を増やせば乗り切れる」

「うん、道理だな。主はどんな仲間が欲しいんだ？」

「ただの萌えもんに興味は無い。真に才覚溢れる者なら誰でも我が戦友として歓迎する」

「なるほど、で、主にはその見当が付いてるのか？」

瀬奈は頷きながら、核心に迫る。

「付いてる事は付いてるが……私の場合は皆知ってる奴だ。そう、あの事件で我らと共に戦ってくれた竹中昌明の事だ」

「なるほどな。昌明殿はいい戦力になってくれそうだ」

「昌明か……いいと思うぜ」

「うーん、わたしは昌明さんって人をよく知りませんが、光就さんがそんなに推すならわたしに異存は無いです」

三人とも反対意見は無いようだ。

「ふむ、そうか……では、皆に昌明の事を話してやるか。少し長くなるがな」

光就はあれから昌明の事を調べてみた。厭人的な生活を送っているとはいえ、地元ではかなりの有名人のようでその調査自体は簡単だった。

しかし、それを聞き出すのは決して容易な事ではなかった。町の人は何故か昌明の事を話したがらなかった。

まあ、光就が巧みな話術で上手く引き出した為、あまり意味は無かったのであるが。

その光就が聞き出した話によると、昌明の父親はかつて、この八ナダシティを襲った謎の萌えもんを封印した人らしい。すなわち、町の英雄である。

その息子たる昌明にも町民達は信頼を寄せており、強制する程では無いものの、あまり町から出て行って欲しくないようだ。

だから、町民達はよそ者に対しては進んで昌明の事を話したがらないのだ。

それに、もし、よそ者が昌明の事を知って登用に来たとしても、

彼はそれを悉くはね付けてしまう為、町民達の笑い話の種にしかならなかった。

そして、いつしか何人も来るトレーナーの相手に疲れてしまった昌明は、自分の庵を山寨に改造し出した。

無論、有象無象の輩に昌明を連れてかれたくないと思っている町民達も、嬉々としてその作業を手伝った。

こうした経緯から今の状況がある。

「なるほど……うーん、わたし達にはそんな凄い人を迎えられる程の才覚を持ち合わせてるですか……？」

「ふっ……美空、心配する必要は無い。面識が無いならまだしも、彼と我らには縁があるではないか。彼も自分の盟主たりえる者を探しているようだ。我らも優秀な人材を求めている……利害は一致するではないか」

光就は必ず昌明を仲間に出来ると踏んでいる。いや……、

「それに昌明の登用は、我らの未来を賭けた最も大事な任務だ。何があろうと成功させなければならぬ」

登用できなければ自分達の命運は尽きるとまで光就は思っていた。

「……主はどうしてそこまで昌明殿にこだわっている？」

瀬奈は問い掛けた。それに光就は重々しく答えた。

「それはな……彼がお前達に持つていない物を持つてるからだ。深謀遠慮……我らのこれから見通す目を彼は持つているのだ」

光就は秀明とカメールのメルを見ていて、ふと思っただのだ。私には常に側にいて献策してくれる『軍師』が居ない、と。

「別にお前達が優秀でないと云ってる訳ではない。そこを勘違いするなよ。ただ、己の得意とするものが違うだけなのだ。……我らには参謀が必要なのだ。我らの道をその知略で照らしてくれる『軍師』が必要なのだ」

光就はそう言った。

「……分かったです。光就さんがそこまでその昌明さんという人を欲しているならば、わたし達はその意に応えるのみです！必ずや、

昌明さんをわたし達の仲間に取り入れてみせますですっ！」

美空さんは拳を握り、目に炎を宿した様に眼光を輝かせて言った。
「美空、その気持ちはありがたいが、お前にはハナダ、クチバ周辺で情報収集に当たってもらおう。情報は常に新しい物を仕入れるべきだ」

「はいっ！」

美空さんは力強く頷いた。

「うむ！瀬奈、お前も同行せよ。皆、これからは絶対一人行動は避ける。背中に眼が付いてるが如く警戒せよ。一瞬たりとも油断するな。良いな？」

「了解！」

こうして、光就と龍宗の昌明登用組と美空さんと瀬奈の情報収集組で四人は散り散りになった。

情報収集ですか……でも、具体的にどんな情報を集めるべきでしょうか？

「瀬奈さん、どんな情報を集めるべきだと思いますか？」

「美空殿のスリーサイズ……おっと、つい本音が出てしまった……ふむ、優秀な萌えもんとロケット団の最新の動向。これらについての情報を集めるのが常道だと私は思います」

瀬奈さんはわたしのスリーサイズなんか知ってどうする気なんでしょう？まあ、そんな事はどうでもいいのです！確かに、この二つの情報を集めるのが一番良いと思うんですけど……。

光就さんはどんな情報を集めるといふ具体的な指示を出していない。光就さんの事です。きっと何か深い考えがあつて、あえてわたしに何も言わなかったのです。とすると、光就さんが期待する働きは、それ以外に何かあるはずですよ。もちろん、さっきの二つも含めてです。

「瀬奈さん、光就さんが欲しい情報はきつとそれだけじゃないと思うです。他に何か思い浮かびませんか？光就さんが知りたい事」

「はて……そういうのは美空殿の方がご存知のはずでは？」

「うーん……わたしはつい最近まで光就さんと話し出来ませんでしたから、よく分からないのです。最近の話なら瀬奈さんの方が知っていると……」

あの喧嘩の所為で光就さんと仲違いしてサントアンヌ号で助けられるまで、ほとんど口を利いていないから、あの時期の光就さんの事が分からないのです。

「ふむ……駄目だ、心当たりがない。美空殿のお役に立てず、申し訳ありません」

瀬奈さんが謝る。

「いや、別にいいんですよ！じゃあ、瀬奈さんが言った二つの情報を集めながら二人で考えましようよ！」

と、わたしは瀬奈さんに言ったけど、実を言うと心当たりが無い訳でもないのです。でも、この事は他言無用と光就さんに言われているから、瀬奈さんには言わなかったのです。そう、MCPの事です。

光就さんが旅の目的としてしている物の一つ、謎の単語MCP。

まあ、こんな一日限りの情報収集ですんなり情報が見つかるなら、光就さんも苦労しないんですけど、一日一日の積み重ねがいつかその謎を解き明かす鍵になるのです！

「分かりました。では行きましようか、美空殿。まずは近場から、ハナダの萌えもんセンターで話を聞きに行きますか」

「分かったのです。さあ、そうと決まったら早く行こうです！早くしないとクチバまで行けませんよ！」

そして、わたし達はハナダの萌えもんセンターに着いた。お馴染みの赤い屋根の看護施設です。だけど、ここにいるのは負傷したり疲れたりした人だけではないのです。

ある人は、パソコンを操作して手持ちの萌えもんを整理する為に、またある人は、自分の盟主を見つける為に。またある人は、トレー

ナー仲間と交流する為に。またある人は、単にジョーイさん目当てに。とにかく目的は人それぞれだけど、毎日たくさん人が集まる場所なのです。

すなわち、ここは最も情報収集に適した場所なのです！

「おお、相変わらず人がたくさん居るな」

瀬奈さんが初めてここに来た時は、瀬奈さんにとっては初めての萌えもんセンターだったから、余りの人の多さに圧倒されてたです。あの時の瀬奈さんは初々しいと言うか何と言うか……可愛かったですっ！

「美空殿？何をぼーっとしているのですか。どんな時でも油断するなと主が言っていたのを忘れましたか？」

「は、はい。そうですね、迂闊でした」

「全く……次油断したら食べてしまいますよ（性的な意味で）」

「えっ……！ギャラドスはピジョットも食べれるんですか！？いや、そうじゃなくて、萌えもん同士共食いなんてダメなのです！仲良くしましょうですっ！」

「美空殿……そうですね。実際の行為に意味など無い。心を通わせる事が一番大事だということですね！」

「瀬奈さんが言ってる事はよく分らないですけど、多分そういう事です！」

「美空殿おおおおっ！！」

……どうしよう？瀬奈さんが壊れちゃいました。こっぴつ時は……叩くと治るのです！

「瀬奈さん、ぬるとばを繋げて言っして下さいですう」

「美空殿の頼みとあらば！ぬるば！」

「ガッ！」

「おお！快なり！！」

瀬奈さんは倒れた。

「……はっ！私は何をしていたんだ？あっ、美空殿、ここは何処ですっ！」

「ハナダの萌えもんセンターです」

「いつの間に着いたんだ？何も思い出せん」

今の瀬奈さんはまるでさっきの瀬奈さんとは別人の様に、真面目で冷静ないつもの瀬奈さんに戻っていた。

光就さんが言うには、さっきまでの瀬奈さんは『淑女瀬奈』という別人格らしい。でも、わたしにはその説明の意味が分からないので、その場面をそのままコピペですう。

「『淑女瀬奈』は変態だ。危険人物だ。どれくらい危険かと言うと、こだわりスカーフを持たせたコイキングくらい危険だ」

「超高速ではねるだけだと思いますけど、光就さんが危険だと言うなら、危険なんでしょうね」

「うむ。で、私の調べによると、どうやら『淑女瀬奈』は何らかの原因で瀬奈の人格を自分のそれに乗っ取ってしまっようだ。そして、訳の分からぬ事を言い出したり、いきなり大声で叫んだりするのだ」
「要するに……その『淑女瀬奈』いつもの瀬奈さんは別の人格つてことですか？」

「そうだ。『淑女瀬奈』いつもの我らが知っている瀬奈は違う。

……分裂症みたいなものだと思う」

「なるほど……」

「そして、瀬奈に『淑女瀬奈』の人格が現れてしまった場合はまず、奴に『ぬるぽ』と言わせ、そこで透かさず『ガッ』と言いなから思いつ切り叩く。ただし、『ぬるぽ』と言わす時に、自分がそれを言っつては駄目だということだ。後、叩く時は必ず相手が『ぬるぽ』と言っつてからだ。そして、必ず『ガッ』と言っつこと。分かったな」

「はいっ！でも、何でそんな事をしなければならぬんですか？」

「そういうものだからだ」

とまあ、こういう事なのです。

「むむむ……まあいい。美空殿、時間が惜しい。早速話を聞いて回

りましよう」

「はい！」

「あらかた聞き終えましたかな……。美空殿、そちらは？」

「私も今聞き終えた所ですよ。どうでした？有用な情報は得られた
ですか？」

「いえ……。恥ずかしながら」

「そうですね……。いや、気にする必要は無いですよ！私も大し
た情報は得られませんでしたし……」

「うーん、情報収集というのはなかなか難しいのです……」。

「やはり、もう少し人が多い所でやらないと駄目なのでしょうか……」

「……少し予定より早いです、クチバに行ってみますか？」

「うーん、そうしようです」

わたし達は少し、腑に落ちない気持ちを抱きながらも、クチバに
向かう事にしたのです。

さて……。我らは早速昌明の庵に向かうとしよう。と、思ったが、
その場所が分からないな。

「龍宗、お前は昌明の庵が何処にあるか知っているか？」

「そんなの俺が知ってるわけ……。あっ！そういえば確か……」

龍宗はゴソゴソとポケットを漁る。そして、何かの紙切れを取り
出した。

「それは？」

「昌明が別れる時にくれたんだよ。『貴方方とはまた会いたい。い
つでも来て下さい、歓迎します』ってな。きつとあいつの家が何処
にあるか書いてあるんだよ」

「……何故、戦略会議の時に出さなかった？と、言っても遅いか。

まあ、そんな事だろうと思って瀬奈を美空に同行させたのだからな」

美空も瀬奈も几帳面な性格だ。そういった大事な物は必ず渡すはず。しかし、戦略会議になっても出さないとすると、昌明が誰にも住所を教えてくれなかったか、龍宗が教えてもらっていて、それを忘れてしまっているの二択しかない。故に、龍宗を残したのだ。

「龍宗よ。そういった大事な物はちゃんと渡して欲しいものだ」「すまねえ、今度からは気をつけるぜ」

まあいい。結果として昌明の住所が知れたのだから、問題無い。さて、彼の庵は……あそこか。

25番道路の山肌にその庵はあった。

「一見するとただの庵……しかし、彼の知略の粋を集め、町民ぐるみで作った罠の数々。決して侮れんな」

思案する私を尻目に、龍宗は山道を進んでいく。

「龍宗、勝手な行動をしてくれるなよ」

「光就、罠だろうが何だろうが、進まなきゃしょうがねえだろ？それに、俺は考えるのは苦手なんだ！」

やれやれ、言い出したら聞かぬか。……まあいい。実際に罠が作動する様子を見れば、その隙を窺うのも楽だろう。

「行くぜ……おらおらおらおらあ！！」

龍宗は山道を走る。その瞬間、一本の矢が彼に向かって突進する。

「これが罠？笑わせるぜ……おりゃあ！」
腕を薙ぎ払い、矢を弾く。

「この程度の罠で俺様の猛進撃は止められないぜ！」

しかし、その刹那、更に多くの矢が同時に再び突進してくる。

「今度は腕じゃ厳しいかもな……とりゃ！」

尻尾を振り回し、矢を四方八方に弾き返す。

「……………」

私はその様子をまじまじと見ていた。が、突然龍宗の危機を感じ、左手を突き出し、

「サイコキネシス！」

彼を念力で引きずり込む。

「おわっ！な、何しやがる！」

「龍宗よ、あれを見るがいい」

私はさっきまで龍宗が居た所に向かって指を差す。

「な、なんてこった……！」

それを見た龍宗は驚愕の声を上げる。それもそのはず、そこには無数の矢がその目標がいなくなってしまうたにもかかわらず、未だ猛進を続けていたのだから。

「いくらお前でも、無限に続く矢の嵐は弾き切れまい。ふっ……あつという間に針ネズミの出来上がりだな」

龍宗は青い顔をして、私の話を聞いていた。

「しかし、参ったな。あれでは俺に入れん。まあ、あれはサイコキネシスで何とか出来るかもしれないが、他にも第二、第三の罠があるのは明らか。……どうやら他の方法を考えるしかないようだ」

強行突破は不可能。ではどうすればよいと言うのか。……これは昌明の挑戦だ。客人に自分の庵に入れる程の知略があるか試しているのだ。

「むむむ……」

参ったな……いい考えが思い付かん。

「そういえば……」

龍宗が不意に口を開く。

「ハナダシテイの住人達だって、昌明に用があることだってあるよな？そういう時はどうしてんだらうな」

「はっ……！そうか……！」

この龍宗の素朴な疑問が私の脳に電撃を走らせた。

そして、その発想に従い、私は山肌を伝い、叩き、耳を澄ましなから歩いていく。

「な、何だよ、何がわかったんだ？」

「静かにしろ。…………！」

山肌を叩いていく内に、ある部分だけ明らかに音が違う所を見つけた。

「ここだな……おそらく、この扉はこう開くのだろう!」

私はその部分に向かって念力を放ち、上に向かって力を入れる。すると、ガラガラという音と共に、山肌に穴が空いた。

「おお! こういっしかけだったのか!」

「なるほどな。こういうタイプの扉にすることで完全なカモフラージュを遂げる事が出来る訳だな。おそらく、町民達が出入りする際は何か棒の様な物を差し込んで、下に空洞を作ってから引き上げるのだろう」

私は一通りの推測を終え、洞窟に入っていく。

「お、おい、大丈夫か? ここも罠だらけなんじゃないか?」

「それはあるまい。ここはおそらく、町民達の通路。罠を仕掛ける必要などあるまい。ああ、その扉は閉めておけ。開けっ放しにしておいては、彼に迷惑を掛けてしまっぞ」

「おお、そうだな」

どうやら、扉の内側には取っ手があるらしく、龍宗は楽に扉を閉める事が出来た。

「では、行くとしよう。我らが戦友の下へ」

我らは洞窟の中を進んでいった。

「相変わらず賑やかなのですっ!」

それがわたしのクチバに着いた時の感想だった。

「賑やかじゃないいけないと思います。昨日の今日ですからね」

瀬奈さんはそう言った。そういえば、瀬奈さん、戦略会議の時にクチバが大騒ぎだって言ってたっけ。

「さて、じゃあ、萌えもんセンターに行こうですう!」

「えっ! 人目を避けて行動した方がいいと主も言っていたはずですが……」

わたしの発言に異を唱える瀬奈さん。うふふ、瀬奈さんが反対す

る理由は分かっているですよ。

「情報収集は人が多い所でやるのが常道と言ったのは瀬奈さんなんですよ？言い出しっぺが辞退なんて許さないですよ。」

「うう……人に注目されるなんて、は、恥ずかしい……。」

瀬奈さんが赤面する。……まずい、すごくかわいいのですう。なるほど、光就さんが瀬奈さんをからかう気持ちが少しだけ分かった気がするです。

「仕方ないのです。それにどっちにしる注目されるのですから」

「むむむ……。」

「何がむむむですかっ。早く行きますよ！」

「くっ、……そ、そうだな。こうなれば覚悟を決めるしかない。カメラでも何でも来るがよい！」

誇らしげに瀬奈さんは言う。

「ぱちぱちい、その意気ですう。」

「ふっ、避けられない事態に対してうだうだ言うなど、私も女々しいものだな……私は女だが」

と、瀬奈さんは意気込んだけど、その虚勢は萌えもんセンターに入った途端、一気に崩れた。

「み、皆が私たちを見ている……み、皆が、わ、私を見ている……見られている……は、恥ずかしい……。」

すごい上がり様なのです。うーん、これでよく人前で戦えたものです。いや、戦っていたからこそ、あの時はこんなに緊張しないうすんだのかな？

「う、うう……美空殿……恥ずかしくて変になりそうです。早く出ましようよ……。」

「何を言ってるんですか。まだ誰からも話を聞いてないのに、出る訳無いのですよ。」

「うう……美空殿がSだったとは予想外でした……。」

Sって何だろう？まあ、いいのです。

「さ、情報収集開始ですう。その人に話を聞きに行くのですう。」

「うう……」

「行くのですう！」

「はいい……」

普段強気な瀬奈さんがこうも素直なのは、何と言うか……かわいいのですっ！

「ちょっと良いですか？ ロケット団の動向についての情報、あるいは優秀な野生萌えもんの噂を知っていたら、わたし達に教えて欲しいのですっ」

「ロケット団と優秀な野生萌えもんについての情報ねえ…… すまん。知らねえや」

「そうですか……」

まあ、いきなり情報は得られませんよね。さ、次行こうです……ん？

わたしがさつき話し掛けた人は何かを差し出している。これは……メモ用紙？

「サイン下さい！お二人のサインを是非！」

ああ、そういう事ですか。確かに、ここらじゃわたし達は有名人ですからね。サインくらい求められて当然なのですか。

「あ、いや、私は遠慮……」

「あなたに拒否権は無いです。書くのです」

「いや、しかし……」

「書け」

「はい……」

わたしはいつもメモ用に使っているペンで『神風美空』と彼の紙に書く。そして、その下に顔を赤らめながら、瀬奈さんも自分の名前を書く。

「おお！ありがとうございます」

「どういたしまして」

すると、次から次へとサインをねだる人達が集まる。……これはチャンスなのですっ。

わたしはサインを書く毎に情報の引き出しを試みた。だが、有用な情報は集まらない。

そんな中、とある情報がもたらされる。

「うーん、そういう事は僕達に聞くより、デイグダの穴のデイグダ達に聞いた方が早いと思います。彼らはくせ者ですが、情報通ですからね」

「デイグダの穴？それって何処にあるんですか？」

「ここ、クチバシティと11番道路の間にありますよ」

「なるほど……分かりました。ありがとうございます！」

「いえ、どういたしまして。お二人に会えただけで嬉しいです。美空さんも瀬奈さんもキレイですね」

「な、ななな何を言うか！み、美空殿が美人なのは分かるが、わ、私もかあ！？」

「はい」

「あ、ああああ、うう、あ、余り恥ずかしくなる様な事言うな！ばかっ！」

瀬奈さんはいよいよ顔を真っ赤にして抗議する。キレイと言った男の人はニヤニヤ。なるほど……これが『ツンデレ萌え』というものなのですね！

まあ、そんなこんなで、萌えもんセンターでのちょっとしたサインの後、わたし達はデイグダの穴に向かった。そこは、トンネルの様になっていて、クチバからニビシティの近くまで繋がってるらしいのです。

ニビシティか……そういえば、紅羽はどうしているでしょうか。寂しい思いしてないと良いですけど……。

「美空殿、いかがされました？」

瀬奈さんの声で、わたしは我に帰った。

「いえ……ちよつと義妹の事を思っただけです」

「妹……ですか。美空殿の妹なら、きつとその人も賢く綺麗な方なんでしょうね」

「『妹』じゃないですよ。『義妹』です。わたしと紅羽は義によつて誓い合つた義姉妹なのです！それと、綺麗はともかくとして、賢いというのには、ちょっと疑問符を付けざるをえないのです。喧嘩が大好きな困つた義妹なのですよ」

紅い羽に紅い髪。わたしの義妹、神風紅羽の鮮明な映像が脳裏に写る。

……たとえ、血の繋がりが皆無であつても、二年間、義姉妹として寄り添い合つて生きてきたのです。その絆の強さは光就さんやおししようさまとのそれに匹敵する程です。

「……そうだ！」

わたしはとつさに思い付いた。

「光就さんに紅羽を紹介するのです！彼女も優秀な方です！」

「なるほど……私は紅羽という萌えもんの事は存じ上げませんが、美空殿の妹……おつと、義妹なら、きつと素晴らしい人なんですよね」

「はい！紅羽は喧嘩っ早いのが玉に瑕ですけど、心根は優しい人なんですよ。わたしが稽古を付けた時もあつたですから、それなりに強いはずですよ。紅羽はわたしが育てた！」

それに、紅羽にはわたしが持つていない、すごい特技があるのですつ。きつと、光就さんの力になれるはずですよ！

「決めたですよ！昌明さんが仲間になつたら、次はここを通過して、紅羽を仲間にしに行くのですつ」

わたしはそう心に決めた。

「美空殿、その前に情報収集ですよ。ディグダ達を見つけてましょう」

「ふふふ……萌えもんセンターではあんなに上がつていたあなたに言われたくないのです。明日やるべき事は明日やれば良いのです。

今日やるべき事は今日やれば良いのです。それくらいの分別くらいは付いてますよ。さあ、瀬奈さん、行こうですよ」

わたし達はトンネルの中をずんずんと進んでいった。

第二十話に続く

第十九話：美空さん、情報を集めんとするの事(ですうとツンデレと時々淑女)

美空「MF第三章、そして、アセロラ蕎麦と改名した作者さん。どちらも変わらぬ応援、よろしくお願いしますですっ！」

瀬奈「べ、別に応援してくれなくなつて寂しくないからなっ！」

美空「ニヤニヤ……次話投稿は三月十四日なのですよ」

美空「あつ、ところで瀬奈さん、瀬奈たんファンクラブの会員が百人を超えましたよ。いやあ、すごいですう。ツンデレは強しなのですう」

瀬奈「な、何だ、その瀬奈たんファンクラブというかがわしい名前のクラブは！わ、私はそんな会があるなんて聞いてないぞ！」

美空「当たり前ですよ。光さんが密かに立てたんですから。瀬奈たんファンクラブの会費およびグッズ販売金は全てわたし達の軍事情になるのですっ！」

瀬奈「グッズ！？会費はまだ分かるとしてグッズも販売してるの！？早いな、さすが主だな。で、余り聞きたくなくないんだが、例えば、どんなグッズがあるんだ？」

美空「どんな物があるかって？興味津々ですね、瀬奈さん。そんなに知りたいなら教えるです。えーっと、マウスパッドに、抱きまくらカバーに……」

瀬奈「ふざけるなあ！エロい物ばかりじゃないか！」

美空「どこがエロなんですか？ムニムニ」

瀬奈「いやあ！マウスパッドを揉まないでくれ！いや、美空殿が良いなら良いんですけど……私は何か複雑な気持ちになってきます。自分が犯されているのを自分で見て……」

美空「言ってる意味が分からないのですよ」

瀬奈「いや、何と云うか……悪意がひしひしと伝わって来ますよ。私をどうしようと言つものやら……」

美空「瀬奈さん、わたしは素晴らしい事だと思いますよ。どんな理

由であれ、人に愛されるのは良い事です。あなたにはそういった、ある意味でのカリスマ性があるのかもしれないね」

瀬奈「そ、そうですか？美空殿がそこまで言うなら、きっと、素晴らしい事なんでしょうね」

美空「そうですよ！じゃあ、これからはどんな活動も許してくれますね？」

瀬奈「ええ、もちろん」

美空「おお、さすが瀬奈さんなのです。よく言ってくれました！」

瀬奈「瀬奈たんファンクラブの会員を増やすため、私自身も努力しましょう！」

美空「おお！ふふふ……その言葉、忘れないですよ……計画通りなのです……」

続く！……のか？

第二十話：光就、罫を看破するの事（無限ループって怖くない？）（前書き）

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

話展開、間違えた。もっと良いのあったよ……ああ、詰めが甘いな。

第二十話：光就、罫を看破するの事（無限ループって怖くね？）

地下道を進んでいくうちに、我らはドアを見つけた。

「おっ、ここだな」

「罫は無いと思うが、慎重に開けるべきだな」

勢いよく開けようとする龍宗を制し、私はドアの安全を確認し、静かに引き上げる。

「む？」

ドアの先にあったもの、それは更なる洞窟であった。

「やれやれ……長期行軍になりそうだな」

更に進んでいく内に、またもやドアにぶつかる。

開くと、そこにはまた更に洞窟が広がっていた。

「むむむ……」

我らは進み続け、ドアというドアを開け続けた。しかし、その先にあるものは、無骨な岩壁と深淵の暗闇のみ。

「一体何がどうなってやがるんだ!？」

龍宗が混乱するのも無理は無い。もうかれこれ二時間以上は歩いている。にもかかわらず、一向にこの洞窟の終わりが見えない。…これはおかしい。我々は体を鍛えているから、一日中歩かされてもそうへこたれるものではないが、町民達はどうかだろうか？それとも、町民達にしか知らされていない、別のルートがあるというのだろうか？いや、もしかしたらこの洞窟自体が罫なのかもしれない。とすれば……、

「誘い込まれた……」

「ん？」

「我らは誘い込まれたのかもしれない……この無限地獄に」

「なっ……!」

龍宗は驚愕する。

「じゃ、じゃあどうすりゃいいんだよ……」

「分かん。とりあえず戻るべきだ。進み続けては更に泥沼にはまる」

我らは方向転換し、戻る事にした。そして、突き当たりのドアを開けると光が差し込んだ。そう、その先には……、

「ここは……俺達がいた場所じゃねえか！」

初夏の日差しがさんさんと降り注ぐ、24番道路。

「フツ……フフフ……フハハハハハハツ！滑稽！実に滑稽！何が無限地獄だ、我らはこの洞窟で同じ所をグルグルと回され続けたのだ。そうか、昌明はこういう罠を仕掛けたのか」

「無限ループだったか！くそ！やつぱりこれも罠だったのか！」

「いや、違うな。罠は罠だが、あの洞窟は間違いなく庵への道。おそらく、あれは妖術だな」

「妖術だと？光就にはなんとかする方法を思い付いてるんのか？」

「残念ながら、今のところは思い付かん。まあ、焦る事は無い。昼飯でも食いに行こう。それから考えても遅くないだろう」

「呑気だな……」

「戦いの際はピリピリしていたのだ。少くらしい気を抜いても、罰は当たるまい」

しかし、昌明め……まさか妖術まで心得ているとはな……ますます気に入ったわ。何としても彼を我らに引き込まねばな！

「ふいい、食った食った」

「腹も膨らんだ。再び洞窟へ行くぞ」

「おっ！何か思い付いたのか？」

「一二、試したい事があったな……行くぞ」

我らは再び、引き上げ式のドアを開け、洞窟に入る。

「さて……龍宗よ、そこら辺の石を片っ端から集めてこい。どんな石でもいい。たくさんだ。この袋が一杯になるまでな」

「おう、分かったぜ」

と、私がさつき持ってきた革袋を手渡す。

「さて……サイコキネシス！」

辺り一面に念力をかける。石という石が浮き上がり、私の意のままとなる。

「さあ、入ってもらうぞ、この中にな」

次々と石が袋の中に入っていく。それを見た龍宗が一言。

「あんたがやった方が早いんじゃないかねえか？」

「……そうだな……」

「ふむ……こんなものか」

石で満たされた三つの革袋を作ったところで、私は念力を止めた。

「さてと、次はこつちだな」

私は再び念力を集める。こんどは袋の石に働き掛ける。

「……せいっ！」

念力を石に詰め込む。すると、石一つ一つが光を放ちだした。

「す、すげえ……こんなこともできたのか」

「かなり疲れる作業だがな……せいっ！」

そうして、私は三つの袋全てに念力を掛け終わり、重度の疲労感を味わった。

「むう……少し無理しすぎたようだな。龍宗よ、これらの袋を持ち、石を落しながら洞窟を歩いて行ってくれ。私はここで休ませてもらう」

「おう！分かったぜ」

龍宗は袋を引きずりながら、洞窟の暗闇に消えていった。

「ふう……」

やれやれ、石一つ一つに念力を詰め込むのは大変な作業だが、この程度で疲労を伴うとは……鈍っているのは私の方かもしれないな。

まあ、元々私は念力の扱いはあまり得意ではない。基本、念力は刀を強くしたりする為に使っているからな。間接攻撃としての念力

は所詮は牽制用に過ぎないのだ。

だが、これから先、そんな事は言ってられまい。戦法を限定することは、己の手足を自らもぐようなものなのだ。

「ならば、貴方の手足を繋げてあげましょうか。光就殿」

不意に声を掛けられた。この声は……！

「昌明か……お主、ずっと我らの事を見ていたな？」

「お気を悪くしないで下さい。にしても、こここの存在に気付くとは……、まあ良いでしょう。さ、こちらへ……庵に案内しましょう。

無論、龍宗殿も一緒に」

昌明は私を手引きした。しかし、私はそれを撥ね付ける。

「案内する必要は無い。私が見つける」

「そうですね……。まあ、私は暇な身ですから、貴方が満足するまでお付き合いさせて頂きましょう」

昌明は思った通りだ、という笑みを浮かべる。

「しかし、ただ彼を待つてるのも退屈でしょう。話でもしませんか？ 貴方が知りたい事について。例えば、念力の扱い方とか……」

「……私の思考を読んでいたか」

「フッフ、聞こえてしまったものは仕方ありますまい。しかし、見事な発想です。私も念力にそんな使い方があったのかと感心してしまいました。決して不得意とは言えないと思います……まあ、実際に出示してもらった方が早いですかね。お願いします、光就殿」

「ふむ、良いだろう」

私は適当に歩を進め、岩壁に対峙する。

「昌明、本気でやってしまっても構わないのだろう？」

「ええ。むしろ、本気でやってくれなければ貴方の真価を量れません」

「良からう……サイコキネシス！」

念力を目の前の岩壁に放った……のではなく、それを腕に溜める。

「や……？」

「サイコキネシス！」

二回目の念力もまた、腕に溜める。

「サイコキネシス！」

かくして、三回分のサイコキネシスを腕に溜め、それを一気に放つ。

「ギガサイコキネシス！！」

その威力は単純に通常のものの三倍ではない。三乗である。

私の腕の中で吸収に吸収にを重ねた超強力な念力流は激しく唸り、発光しながら岩壁を発泡スチロールの如く、粉碎していく。

「吹っ飛べ！」

腕を握り、念力を爆発させる。その結果、岩壁一面に大穴が空いてしまった。

「……………」

昌明は無言。一体、何を考えているやら。自分の家の地下に穴を開けさせた事でも悔いているのだろうか。

「……………やり過ぎたか？」

「いえ……………これくらいならば修復出来るでしょう。やれやれ、未熟で良かった。もし、こんな馬力で念力の扱い方が上手かったら、今頃落盤事故ですよ。剣呑剣呑」

「ということは……………やはりどこか良くない所があるのだな」

未熟という表現をしたからな。

「ええ……………貴方の場合、威力は問題無いのですが、それを無駄遣いしてしまっているのが欠点ですね。……………もしかして、貴方の念力は我流ですか？」

「ああ、というかむしろ、師を仰ぐ機会が無かった。私は一応、人間なんぞな」

人の社会において、念力など好き勝手に使ってはとんでもない事が起きる。だから、せめてもの修業の為に、剣の道に進んだのだ。結果、念力剣も我流であるものの、完全に我流という訳ではない。

「無駄遣い……………か。すなわち、それは威力が逃げてしまっていると捉らえて良いのだな？」

「はい。見た目的には凄く見えますが、実際は普通に三回サイコキネシスを放った方が威力が良くなってしまうようですね。それではまずい。幸い、それ以外の改善点はございません。我流でよくそこまで完成しましたね」

「ふっ……自分の技の欠点も分からんようでは、大した事無い。昌明、指導を頼む」

私は手を合わせる。

「なるほど。自尊心は高いですが、それに流されない冷静さも持ち合わせているようですね……」

昌明は目を光らせた。

「良いでしょう。私なぞの拙技で良ければ、いつでも御指南致しますようぞ」

昌明は頭を下げ、快諾する。

「ふむ、引き受けてくれた事、感謝する」

こちらも頭を下げ、感謝の意を示す。

「フッフ……」

「ははは……」

「はははははははははは！！」

二人とも頭を下げた事がおかしくなってしまう、笑い出してしまった。

「どうということなの……」

何故か、ここに戻ってきた龍宗は光就と昌明が笑い合ってる事に、混乱を隠せなかった。

「なるほど、そういう事か。光就らしいな」

「ふっ……まあ、お前が戻ってきた事で、この妖術を破る手だてが九割方分かった。後は実行するのみよ」

私の推測が当たったようだった。あのループは分かれ道の突き当たりにあたかも壁があるが如く作られていたのだ。

「ほら、見てみる」

私は壁に手を当てる。そして、それは空を掴んだ。

「なるほど……！そういう事だったのか」

「で、おそらく昌明の庵に行くには、こうすれば良いのだろう」

私はそう言うと、壁の中に飛び込んだ。

「壁が引き上げ式のドアになる……例えその発想が出来ても、次はその発想がこの無限ループを作り出す」

私は壁から出て、今度はそれを引き上げる。

「その証拠に……ほら、見てみる。あれは我らのだろうか？」

私が指を差したのは、光る石の列。さっき私が念力を注入したものである。

「さて、それでは行くぞ。私について来い」

私は再び壁の中に入る。二人も後から入っていく。

すると、その左手には階段があった。そう、これこそが昌明の庵への道である。

「……見事、としか言いようがありません。素晴らしいですな。この洞窟を見つけた者は少なからず居ましたが、正体まで見破った者は町民を除いては貴方が二人目です」

「光就が二人目？もう一人誰かいたのか？」

「ええ、私の親友です」

世の中、上には上がいると言うが、まさにその通りだな。この発想に辿り着けるのは私と昌明しかいないと、密かに自負していたのだがな。

「さあ、ここからは私が案内してもよろしいでしょうか？これ以上畏は多分ありませんから」

「ああ、よろしく頼む」

私はニヤツと笑いながら答えた。

「いやあ、終わった終わった。一時はどうなる事かと思ったが、ま、結果オーライって事で……ギャツ！」

龍宗の頭に金たらいが落ちてきた。

「な……なんでこんな所に畏が……無いって言ってたじゃねえか……」

「多分と言っただろう？という事はまだ罠が健在の可能性があると
いう事だ」

「最後のブービートラップほど、精神的に来るものはありませんか
らね。『彼』は外の全てのトラップに引っ掛からなかったにもか
わらず、これだけには引っ掛かったのですよ」

少し懐かしそうに昌明は言った。

「なるほどな……まあ、正直言えば私も危なかった。突然落ちてき
たら、対応に困る。とは言え、むざむざ引っ掛かったりはしないな
」
「くっそー、二人とも性格悪いぜ」

「フフフ……すみません。私のちよつとした遊び心です。あれらの
仕掛けを知られてしまったら、二度と罠に掛かってくれませんか
ね。たまに、ここに罠を仕掛ける事があるのですよ。まあ、どんな
時でも気を抜いてはいけないという事です」

昌明は少しいたずらっぽく微笑を浮かべながら言った。

「まあ、そういう事だな。気を抜いたお前が悪い」

「そうなのですよ、いつも気を抜いちゃダメだってわたしは何回
も言っただですよ」

「その通りだ美空………え？」

あまりの衝撃に『え？』が古くなった。私の背後には純白の疾風
がいたのだ。

「情報収集終わりましたから、来ましたですう。あっ、あの方が昌
明さんですね。初めまして、わたしはピジョットの神風美空ですう」
「……いつから来た？」

「えーっと、今が二時二十分だから……大体三十分くらいですな」
美空はケロツと答える。

「ば、馬鹿な……、私が半年賭けて考えたこの罠の数々をたった三
十分で破るなんて……」

昌明、屈服、屈服せざるを得ない。

「私が……私が六時間も賭けて、解き、この発想に辿り着けるのは

私だけだと自負したものをこいつはものの三十分で……はっ！そうか、光る石を辿ったのだな！」

「光る石って何ですか？」

美空はガラス玉みたいに澄んだ瞳で言う。

「そうだったな……あの石の光はもう消したのだったな」

そういえば、美空は昔から観察力が並外れていたな。

「みんなどうしたんですか？早く行くこうですう。わたし達、御飯食べないんですよ」

「む？そういえば……瀬奈はどうしたのだ？」

「えっ、そこにいるはず……あれ、居ないです。何処かではぐれちゃったみたいですよ。探してきますね」

美空は飛んでいった。

その後ろ姿を見ながら思った。

（素直に美空を連れていけば良かった……）と。

第二十一話に続く

第二十話：光就、罫を看破するの事（無限ループって怖くね？）（後書き）

美空「次回はいよいよ昌明さんが仲間になるですよー」

光就「うむ、次話投稿は三月二十一日だ。奴にとっては寝さえしなければそれは日曜日のままなのだ」

美空「早寝早起が一番なのですよ。夜更かしは良くないのです
う」

光就「鳥は早起きだからな。ところで美空、例の件はどうなった？」

美空「あつ、はい。バッチリですよ」

光就「ふつ、そうか良くやった」

美空「これで軍事費もがっぽり稼げますし、わたし達が自由に出来るお金も増えるです！」

光就「ふつ、そんな事まで考えているとは、美空、お主も相当な悪
よのお」

美空「いえいえ、光就さんほどでは………ですう」

「フッフッフ……ハハハハハハ………」

まだ続く予定

第二十一話：光就、賢臣を得る（相変わらずのグダグダ論戦）（前書き）

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

週一うpっていうのも難しいものです。

チラ裏（また誰か感想書いてくれないかな）

第二十一話：光就、賢臣を得る（相変わらずのグダグダ論戦）

「お茶が入りましたよ皆さん」

昌明は我ら四人にお茶を振る舞う。

「……………」

龍宗はカップを丹念に調べている。

「そんなに警戒しなくても、お客様に畏は仕掛けませんよ」

「いや、信用できねえな。気を抜いたらどんな目にあうか、分かりやしない！」

「安心して下さい。警戒している人に仕掛けたって面白くありませんから」

「!？」

フフフ……と、意味ありげに笑う昌明。

「ふっ……さて、そろそろ本題に入らせてもらおうか、竹中昌明よ」
「ええ、構いませんよ」

昌明は自分の席に座り、目を少し逸らし、言った。周囲の空気に緊迫感が漂う。

「……………我らと共に来てみないか？決して悪いようにはしない。我らにはお主の知謀が必要なのだ」

昌明は目を閉じ、

「……………私は大して才がある訳でもなく、力が強い訳でもありません。ましてや、何か特別な能力を有してる訳でもありません。私の唯一自慢できる事と言ったら、昔、友に教えてもらった妖術に過ぎません。しかも、それさえ目眩まし程度にしか使えない上に、貴方方の様な非凡な人達にとっては何の障害にもなりません。そんな私を召し抱えた所で、貴方は損するだけ。どうぞお考え直し下さい」

オドオドとこう言った。……………なるほど、こうやって彼はずっと断り続けていたのだな。確かにこれは疲れるな。

……………しかし、私はそのような言動で惑わされたりはしない。何故

なら、こんな事を言い、そんな仕草が出来るのは真に才覚を持っている者だからだ。

自分の才覚をただ単純に、おおっぴらに自慢するのはただの愚者。自分の才覚をひたすら隠すのは少し賢いだけの凡人。賢者は自分の才覚を隠しながらも密かにそれを発信するもの……いや、正確に言えば、隠しきれないのだ。しかし、凡人には、折角発信された才覚を受信する事が出来ない。賢者は賢者にしか量れないのだ。

昌明に初めて会った者は、うだつが上がらなそうな男だとまず感じ、話や態度からすっかり拍子抜けしてしまう。

噂というものは尾びれが付きやすいという事は周知の事実なので、こいつは親の七光で凄いとされているに過ぎないんだな、と思われてしまうのだろう。凡人にはな。

「昌明よ……そんなワンクッションを置いた態度では我らは量れないぞ。舐めてもらっては困る。我らは皆、お前の正体を知っている。今更、凡愚の真似事など全く以って意味を成さない」

仮面を外せ、竹中昌明。お前の真の姿を見せ付けろ。

「ははは……やはり見抜かれましたか。参りましたね……」

昌明はポリポリと頭を掻いた。そして、次の瞬間、彼の眼光が今までのそれとは比べものにならない程、鋭いものに打って変わった。「光就殿、貴方はそこら辺にいるトレーナー連中とは全く異質の存在……全ての萌えもんジムを制覇するとか、萌えもんリーグの頂点に立つとか、そんな望みを毛ほども持たないばかりか、それらを抱く者達に対して、なんて小さな野望なんだ……と憐憫の念さえ抱いてる。倨傲、尊大、思い上がり。貴方はその実、究極的には仲間なんて要らないと思っていなさる。必要を迫られているから一緒にいるだけで、本来なら、馴れ合いは御免蒙りたいと」

「ふっ……」

なるほど、よく分かってらっしゃる。メルといい、昌明といい、頭の良い者にとっては私の本当の性格を見抜くのはそう難しい訳でも無いみたいだな。

「まあ、私は貴方がどんな性格かなんてどうでもいいのです。私が求めているのは私の知謀と身命を預けるに値する主。もし、貴方が私の望みを叶えるに相応しい才覚を持っているならば、私は貴方の下命を受ける身分に就きましょう」

昌明は信義とか、昔の誼みなどに惑わされず、客観的に、数値的に物事を見れる。そんな彼が私の器を量ろうとするのは当然だな。

今までは私が彼の器を量っていた。今度はこちらが量られる番と
言うわけか。

「なるほど……すなわち、お主は自分の才を認め、受け入れる度量があるならば、どんな人間でも良いと言うわけだな。分かった。ならば、私の才覚を示してやる」

「勇ましいお言葉ですが、果たしてそれがいつまで続きますか、見物ですな」

昌明はそう言うと、立ち上がり、奥の間に姿を消した。

「何をさせる気なんでしようか……」

美空が心配そうな声をあげる。

「さあな、まあ、そんな事を考える必要はあるまい。答えはすぐ出てくるのだからな」

やがて、昌明が戻ってきた。彼の手には大きな宝箱が乗っかって
いた。

「何、簡単な事です。この箱を開けてくれさえすれば良いのです。ちなみに、これは、今は亡き父が私に遺してくれた物です。この箱の封印を解けた者が私の盟主になり得ると、父は予言していました。果たして、光就殿は父が予言していた私の盟主なのでしょうか？さあ、箱を手にとって下さい。それを開けられれば私は貴方を主として認めます。開けられなければ、縁が無かったと言うことで……」

昌明はそう言い、箱を差し出す。

「ふん……」

私はその箱を受け取り、じっとそれを見た。

「どうだ主、開けられそうか？」

瀬奈が心配そうに声を掛けてくる。

「一見するとただの箱ですけど、やはり何らかの仕掛けがあるのでしょうか？」

美空が思案顔で言う。

「考えてたって仕方がねえ、思いつきり開けてみる、光就！」

龍宗は相変わらず無茶な事を言う。

やれやれ、皆分かってないな……こんな箱に意味など無いのだ。

「下らん……こんなもの、開けるまでもない」

「おや、ギブアップですか。では、仕方ありません。今回は縁が無かったと言うことで……」

「違うな。箱を開けたか、開けられなかったかなんて、お前が求めているものではない。そもそも、いくら自分の信頼する父親のだからと言って、リアリストであるお前が予言などという、まじない染みた物を信じるはずが無いのだ。だから、こんな怪しげな箱を開ける事など無意味だと言ったのだ」

昌明はその言葉を聞くと、ふっと笑った。

「なるほど、理屈は通じるみたいですね。確かに、単なる遺言だから……では、私の主義に反してしまいますね。では、これならどうでしょう。この箱には私を強くする秘密が入っている。しかし、この箱は私とその秘密を濫用しないように、父が自分の血を引く者には封印が解けないようにした。その上でさっきの条件を付け足したらどうです？私はこの中の秘密が欲しい。ね、現実的な欲求じゃないですか？」

昌明はそう言った。

「どこがだ。お前はその秘密がその箱に入れられた瞬間を見たのか？違っただろう？リアリストは都合の良い解釈はしないものだ。お前がそこに自分を強くする秘密が入ってるなんて、父親がそうと言っただけだろう？父親が嘘を付いた可能性だってあるじゃないか。父が私を騙すはずが無い？それこそ、非現実的だ。世に絶対の絶対は無い」

私はそう言い切り、そして気付いた。昌明が何を以って私の才覚を量ろうとしているのかを。論戦である。彼は自分の得意分野でかつ、相手もそれが得意であると見抜き、そうする事を決めたのだ。すなわち、今回の論戦、私が言い負かされて泣く泣く箱を開けてしまえば負け。昌明が箱を開けさせるのを諦めたら私の勝ちだ。

「なるほど……なかなかどうして貴方は理屈っぽい方ようです。ならば、これならどうです。さっきまでの条件に、私はその秘密が何なのかを知っていて、かつ、それが箱に入れられたのを確認し、更にそこに現在も入っている事も確認している。さあ、これならどうです？」

昌明は三度、論を投げかける。

「ふっ……どうやって今も確認したんだ？まさか、開けて確認した訳でもあるまい。ならば、絶対そうだとも言い切れんだろう？それに自分を強くする秘密が何だか知ってるのでは、いちいち私が開ける必要も無いではないか」

「いえ、あの頃はそれを理解できなかっただけの事です。今ならば理解できます」

「じゃあ、それが今あるという事実の根拠は？」

「透視です。私は透視の心得も多少ありましてね。この箱は開けられないだけで中を透視する事は出来るのです」

「なるほど……」

私はそれっきり、口をつぐんでしまった。

(えっ、まさか……)

三人は私の論が尽きたと思ったのだろう。冷や汗をかきながら私の顔を見つめている。

「ククク……フハハハハハハハッ！！」

その様子を見て、私は笑った。高らかに。

「光就さん？」

「フフフ……昌明、墓穴を掘ったな」

遂に、私はこの論戦の幕を引く手だてを見付けた。

「この箱を透視など出来はしない。いや、本当の事を言うのなら、意味が無い。なぜなら、この箱には何も入っていないからだ」

私はそう言い放った。すると、昌明は呆れ顔で、

「何を言い出すかと思っただら……やれやれ、この中にはちゃんと本が入ってますよ間違いありません」

こう言った。その瞬間、私の脳裏に電流が走った。

(この勝負、もらった……！)

そう思い、私は箱を掴んだ。

「なるほど、本か。この中には本が入っているのだな。という事は……箱を振れば、音が出るよな？」

辺りが静まり返り、私はこの時初めて、昌明の顔に影ができるのを見た。疑念が確信に変わった瞬間である。

私は箱を思い切り振った。そして、その中身が動いたような音は……皆無！念のため何回も振るが、それらしき音は一切聞こえてこない。

「ふっ……これはどういう事だ、昌明？中身が入っているなら箱を振った時、必ず音が出るはず。なのに、何故音が出ない？」

私は鋭い指摘を突き付けた。すると、昌明は、

「フッフ……まさか、そんな方向から来るとは……思いも寄りませんでしたよ、光就殿。負けです。私の負けです」

そう笑いながら言い、手を挙げた。

「なるほど、なかなか頭も切れるみたいですね。そして、あの時に見せた度量、胆力……申し分無し。良いでしょう。非才の身ながら、この昌明、貴方の配下となりましょうぞ」

昌明は頭を下げ、言った。そして、次の瞬間、美空達は歓声をあげた。

「やったー！ですう！わたし達に新しい仲間が出来たですよ！」

美空は嬉しさの余り、部屋中をびよんぴよんと跳び回っている。

「あんまり暴れないで下さい。丈夫な方じゃありませんから」

と、昌明は苦笑いしながら美空に言った。

「昌明殿、いや、軍師殿の方が良いかな？これで正式な仲間ですねでは、改めて……私は海風瀬奈。これから、よろしくお願い致します。軍師殿」

瀬奈は昌明にすつと手を差し出し、言った。

「貴女のような勇将に握手を求められるとは……こちらこそよろしくお願い致します。海竜王、海風瀬奈殿」

昌明も手を差し出し、握手をした。

「へへっ、軍師様とは心強えな。俺様は龍宗だ。世界最強を目指す男だ！よろしくな！」

その様子を見ていた龍宗もまた、勢いよく手を差し出す。

「貴方の様な豪傑と共に戦える事、光栄に思います。龍宗殿。こちらこそ、よろしくお願い致します」

昌明はその手を握る。

「わたしは神風美空ですう。昌明さん、サントアンヌ号の時はお世話になりました。ありがとうございます。そして、これからもよろしくですっ！」

美空はニコニコと手を差し出す。

「貴女のような才媛に出会えた事、誇りに思います。美空殿。こちらこそよろしくお願い致します」

昌明は恐縮しながらその手を握った。

「ふっ……浅井光就だ。今日、この日この場所で素晴らしき知遇を得た。これからはその類い稀なる知略を以って、我らを支えてくれ」

私もそれに倣い、手を差し出した。

「ええ、貴方の様な英雄の下で働ける事、この昌明、策謀家冥利に尽きます。私如きでよろしければ、この知謀、貴方に捧げましょう」

昌明も今までやったように、手を握った。

「さて、自己紹介も終わった事ですし……皆さん、私に付いて来て下さい」

昌明は立ち上がると、家の奥へ私達を連れていこうとしているよ

うだ。

「何だ、どこに行く気だ」

「封印していた私の力を解き放ちに行くのです。ほら、ここです」
しばらく進むと開けた場所に出た。そこには、小さな祭壇らしき物が設置されていた。

「これは父が生前に設置した物です。力という概念的な物を実物化し、保存する。私には未だ、その理論を完全に理解出来ていませんが、今まではかなり重宝しました。やはり、気というのは隠し切れませんからね」

そう言つと、昌明は祭壇の真ん中にしゃがみ込み、祈り始めた。すると突然、祭壇が光りはじめた。

「うおっ！な、何が起きるんだ!？」

祭壇の光はどんどん輝きを増していき、そして、我らを包み込んだ。

「目が！目があああ！！」

龍宗が絶叫している。

そして、まばゆい光の中から、昌明が現れる。フリーデンへと進化を遂げた昌明が。

「ふう……やはり、こちらの方が落ち着きますね。頭の回転も断然速くなりますし」

と、昌明は頭を掻きながら言った。

「光浴びただけで進化しちゃったですつ。凄い光ですね！化える炎とどつちが凄いだろっ？」

「おお！さつきとはえらい違いだな。昌明の気が急激に強くなりやがった！」

「なるほど、力を抑えることによって、今まで進化後と進化前を住み分けていたのか！すごいな」

美空達が次々と祝福の声をあげる。

「さて、後は服装ですね。確か、あっちにあったはず……」

昌明は走って行ってしまった。

「昌明、我らは萌えもんセンターで待つておるぞ。準備万端整った
ら来てくれ。焦る必要は無い。ゆっくり準備してくれ」
こう言い残し、我らは庵を後にした。

(ふむ、これですね)

私は箆笥から父のお下がりの文官服を見つけ、身につけた。

(おっと、これも忘れてはいけませんね)

そして、お気に入りの扇子を腰に刺し、これで準備は終わりだと思
ったが、何か忘れていたような気がしてならない。

(……？まだ、何か忘れていたような気がしますね……あ、そうか)
私は忘れた物に見当が付き、しばらく入っていない父の書齋に足
を踏み入れた。やはり、埃っぽかったが、仕方がない。

(おそらく、ここら辺に……あった)

古びた茶封筒を取り出し、慎重に肩掛けバッグに入れる。

(よし……では、行きますか)

私は意を決し、最後に父に挨拶した。

「父上、たとえ自分の主義に反してはいいようが、私は貴方の予言を信
じておりました。そして、その予言は見事、的中しました。今日こ
の日に私は素晴らしき君主に出会えました。そして、彼の下で働く
つもりです。そして、父上が叶えられなかった悲願を叶えに行きま
す。その為、少しの間家を空けますが、御容赦下され。その代わり、
帰りましたら書齋を掃除させて頂きますから」

そこまで言うと、私は書齋を後にした。

そして、庵を見渡した。父が生きていた時と比べたら、かなりゴ
チャゴチャ（主に地下が）したが、やはり、我らにとっては此処こ
そがユートピアなんですなと思った。

(さて、感傷に浸るのも済んだ事ですし、行くとしますか)

私がこれから、果てしない戦乱に身を投じていく事になるとは、

この頃はまだ、考えもしなかった。

第二十二話に続く

第二十一話：光就、賢臣を得る（相変わらずのグダグダ論戦）（後書き）

美空「やっと昌明さんが仲間になりましたね」

瀬奈「そうですね。次回は二手に分かれて何かするようです。今度は主と美空殿が一緒のようですね」

美空「久しぶりの最強コンビ復活！な第二十二話は四月四日ですよ。作者さんも少しは週一うp頑張ってくださいです」

瀬奈「本当だな。だからといってこっちに力使いまくって勉強しないのも問題だけだね。受験生の癖に」

美空「ま、そんな事は置いといて、今日は奮発しましたよ。すき焼きなのです」

瀬奈「なんと！最近、随分と私達の食卓は豪勢になりましたね」

美空「そうですねよ。軍事費は増えるし、新しい仲間も増えるし、最近、良いことばかり起きるのです」

瀬奈「本当ですね。ハハハハハッ！」

美空「そうですね。ウフフフフ……」

第二十二話：美空さん、放火の波動に目覚めるの事（マツチ一本、火事の元です

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

ちよっとネタバレになるかもしれませんが、不快感を催されるといけないので、ここで言うっておきます。

量産型ポリゴン 萌えもののポリゴンです。量産型ポリゴンは人型ではなく機械です。いや、人型でも機械でも、残骸って表現が残酷な事には変わり無いんだけどね。

上記の様に、今回からちよっと表現が過激になる可能性が非常に高いですので、今回から、残酷な描写ありにしておきます。

昌明登用の次の日。光就達は今度は八ナダジム寮の自室にて会議を行っていた。

「集まったな。む、龍宗の姿が見当たらずが……」

「やれやれ、何処に遊びに行ったのやら……構わない。主、会議を続行してください」

瀬奈はそう言う。

「そうか。では、今日の戦略会議を始める。まずは……美空、昨日の成果を報告せよ」

「はい。昨日は重要度の高い情報を得る事が出来たです」

「ほう、どんな内容だ」

「そういえば、あの時、情報収集が終わったと言ってたな。あんな時間で終わらせたという事は、かなり重要な情報を手に入れたのだな。と、光就は期待した。

「まず、ロケット団の動向についてです。デイグダ達から聞いたんですが、彼らは最近、その動きが消極的になってきているみたいです。今まで、ロケット団は様々な町に対して征伐軍を出していましたけど、それらも全て引き上げさせてしまったみたいです。……光就さん、どう思いますか？」

美空さんはロケット団の消極的な態度が何を意味しているのか、尋ねた。

「ふっ……近々、大合戦が起きるだろうな。……そうか、だから地方に兵が裂かれたのか。やれやれ、これですますヤマブキには行けなくなっ たな……」

光就は苦虫を噛み潰したような顔をしながら言った。

「大合戦……？何処ですか？それと、何でそんなのでヤマブキに行けなくなってしまうんですか？」

「戦いの舞台はヤマブキだ。そして……その戦い、おそらく、ロケ

ツト団が勝つだろう。どうひいき目に見ても……だ」

光就はそう結論付けた。

「な、何故ですか？何故そう思うんです？ヤマブキはカントーの首都ですよ。当然、最高の防備が成されている……そんな簡単に落ちるはずが無いですよ」

「違いますね」

美空の言葉に、新参の昌明が反論する。

「実は今、地方全体に兵が移動しているのです。ロケット団の進撃が緩やかになった隙を縫って、全体の防備を固めようとしているみたいですが……どうやら、それは下策に終わりそうですね。今のヤマブキシティは、例えるならば、頭を無用心に伸ばしているゼニガメに同じ。この状態では、下手すると、たった一日で首都陥落もあり得るかもしれませんね」

そして、この昌明の予想は的中する。この会議の数日後、ロケット団はヤマブキシティを強襲。ロケット団は地下から都内部に侵入し、守備部隊、拠点を混乱させ、外からは圧倒的物量を以っての猛撃。更には、空中からも容赦ない攻撃を浴びせ、その結果、半日程で都市の大半を制圧した。そして、一日経つ頃には、都市のほぼ全域にRの旗がはためいていた。

敗因は言うまでもなく地方に中央の兵力を回してしまったが為の戦闘員不足。そして、美空さんが言ったような首都だから落ちる訳が無いという言わば、油断であった。

「まあ、我らは我らが出来る事をやるだけだ。さて、次は？」

光就は続きを促す。

「はい。次はですねえ、これもデイグダ達から聞いた話ですけど、最近、11番道路に凄い化け物が現れるらしいです」

「凄い化け物とな？どう凄いのだ」

「どう凄いと言われても、実物を見た訳ではないですし……よく分からないです」

「何故見てこなかったんだ？」

「その化け物は夜に出てくるんですよ。わたしも見てみようとはしたんですけど、光就さんの許可も無く、夜まで出ずっぱりなのはどうかと思ったので、引き返してきたのです。ごめんなさいです」

「なるほど……次は？」

「わたしから報告できるものは以上です」

「そうか、了解した」

そう言っつて、光就は頷き、思案を始めようとしたが、

「よろしいですか、私からも一つ報告がございます」

「昌明か……構わん、言ってくれ」

昌明が何か報告があると言っつので、それを中断する。

「前に言っつたような気もしますが、私の友人に妖術を扱っつ者がおりましてね……殿は優秀な人材を渴望してると聞きました。彼ならば殿の眼鏡にかなうと思いましたが……どうでしょう。手配致しまししょうか？」

昌明は光就の事をこれからは殿と呼ぶようだ。

「ふむ、お主が認めるなら私に異存は無い。よきに計らえ」

「はっ……」

「よし、では皆、これより我らがすべき事について、忌憚きたん無き意見を述べよ」

光就は報告を終わらせ、次に、自分達のこれからを話し合っつことにした。

「主、私も意見を申し上げてもよろしいのですか？」

最初に手を挙げたのは、瀬奈だった。

「むろんだ。その為の軍議なのだからな。述べてみよ」

「はっ、では……主は何故、ヤマブキを助けようとしなさいのですか？」

「ほっ、それはどういっつ意味だ？」

「主はヤマブキが近々、襲われる事を分かっつていながら、それを助けようとしなさいのですか……？いや、助けるまでいかなくても、この事を知らせれば、防備が固められて、首都陥落といっつ、最悪の事

態は防げるのではないでしょうか」

瀨奈はそう言った。なるほど、理には適っている。しかし、光就は、

「それは出来ない」

その意見を一蹴した。

「何故です！？主はヤマブキを見捨てる気ですか！」

瀨奈は高揚気味に言う。

「残念だが、こうせざるを得ない。我ら如き下々の人間がどうこう言った所でその通りになるわけ無いし、我らだけでヤマブキを守り切るなど、到底無理な話……命を捨てに行くだけだ。言っただろう？我らは我らがするべき事をするべきだと」

瀨奈とは対照的に冷めた態度の光就。

「私たちがするべき事とは何ですか……！」

「タマムシにて反ロケット団の同志を集めてレジスタンス活動を行っている『白刃隊』なる組織に入る事だ。そうすれば、我らの力も十二分に引き出せるだろう」

「その為に……ヤマブキを見捨てると……」

「ああ。こちらの方が余程、理に適ったやり方だ」

光就の心は揺れない。

「くっ……何か、他のやり方は無いのか！？ぐ、軍師殿！軍師殿は他のやり方を思い付いておられますよね！？」

瀨奈は昌明の方に向かって、叫ぶ。

「残念ですが……私もこれが私達が出来得る最善の手だと思えます。いくら私達が強くても……私達だけでロケット団には立ち向かえないのです」

「み、美空殿は、どう思われます……！」

「わたしも光就さんに賛成です。瀨奈さん、気持ちは分かるですけど、短気を起こして、命を失っては意味が無いですよ。瀨奈さんにはまだ、やり残した事があるじゃないですか。思い止まって下さいです。ほら、命あつての物種と言うじゃないですか。今は、耐える

べき時なのですっ」

美空さんは瀬奈を説得しようとする。

「し、しかし……！」

「瀬奈さん、青い炎は赤い炎より熱いのですよ。見た目は赤い炎の方が熱そうですね。だから、瀬奈さん、青い炎を持って下さい。いつもの瀬奈さんはそうじゃないですか。わたしの好きな瀬奈さんはそんな瀬奈さんですよっ！」

「な、ななななっ!? (す、好き? 好きって……好き?)」

「分かりましたか瀬奈さん？」

「え、あ、はい、わ、分かりました…… (美空殿……ぼっ)」

「ならばよし! ですっ」

と、美空さんはフラグを乱立しながらも、瀬奈を説得する事に成功した。

「ふむ……他に意見は無いようだな。では、皆に今日の任務を与えよう。今日は……」

「あっ、ま、待って下さいですっ!」

突然、美空さんが大声をあげる。

「どうした？」

「ごめんなさいっ! まだ報告する事があつたです!」

「ほう……何だ」

「それはですね……光就さんは紅羽の事を覚えてますよね？」

「ああ、お前の義妹だったな。彼女がどうかしたのか」

「紅羽も……わたし達の仲間に入れたらどうでしょう? 紅羽はわたしが生きてました! 決して役立たずにはならないと思うのですが……」

「神風紅羽か……一番道路……マサラ……ニビ……分かった。ただし、私も同行させる。まだ、私も彼女の真の実力を見ている訳ではないからな」

斯くして、この後、光就達は二手に別れることになった。

光就と美空さんはデイグダの穴を通り、紅羽を登用しに行く。

昌明と瀬奈、龍宗は昌明の友人を訪ねに行く等のハナダやクチバ

でやるべき事をする。

「昌明よ、後は頼んだ。我らはしばらくこちらには帰ってこれぬからな。私の権利を預けておく」

光就は昌明にトレーナーカードを渡す。これは則ち、自分の全権を昌明に預けるといふ事である。

「……？トレーナーカードを私に渡すのですか？これでは、殿はその間、萌えもんセンターさえ利用できませんよ」

「構わない。あの辺は我らの庭の様なもの。回復出来る場所に困りはしない。それに、本来なら私がするべき事を、お主に丸投げしてしまったのだから、この程度は当然の事だ」

「そうですか。では、遠慮なく……殿、気を付けて行ってらっしゃいませ」

昌明はトレーナーカードを受け取り、光就達を送る言葉を掛ける。

「ああ、お主達も気を付けろよ。では、行くぞ、美空」

「はいですっ！」

光就と美空さんはデイグダの穴へと向かった。

デイグダの穴を抜けた先には、懐かしい風景が広がっていた。

「何ででしょうか？まだここを去ってから一ヶ月くらいしか経ってないのに、とても懐かしく感じるですよ」

美空がそんな事を言う。しかし、そう感じるのも無理はない。たった一ヶ月とはいえ、色々な事があった。精神的にはかなり老け込んだかもある。

「さて……お主としては真っ直ぐ自分の家に向かいたいだろうが、それは諦めてもらう。ちょっと気になる事があってな……」

私は一本だけ細い木を見つけ、斬り、道を開けた。その先には二ビシテイがある。

「言っと思ったです。うん、わたしに異論は無いですよ。わたしもあの事は気になってたですし」

「そうか……」

私が気になる事。それは例のロケット団地下基地爆破事件の事だ。

何故グレイとгентウは基地まで破壊したのだろうか。何故そこまでしてあのファイルを手に入れたがったのか。

これらの謎を解き明かす事によって、私の目標に近づけると私は考えた。だから、この町に来たのだ。

「着いたですよ」

美空がその声をあげた時には、既に目の前には白い壁のニビ科学博物館があった。もちろん裏口である。

「では入るとしよう」

扉を開ける。するとそこには二人の職員がいた。

「こちら、ここは裏口だよ。入るなら正門から……」

「ちよつと訳ありでな……これで勘弁してくれないか」

私は言い終わるのを待たず、金を突き出す。

「ほら、その方も。ここを少し貸してくれるだけで良いのだ。長居はしない」

ちよつと今はお昼時。客は皆無である。その時を狙ったのだ。

「……何が目的なんだ？」

職員の一人が訝しんだ。

「一ヶ月くらい前ロケット団基地爆破事件があったらどう？我らはあれの関係者でな……確かめておきたい事があるのだ。安心してくれ、そなたらに迷惑は掛けない」

二人の職員は少しの間顔を見合わせていたが、やはり目の前の金を蹴る事は出来ず、結局、私の言いなりになった。

「五分だぞ。それ以上はいくら金を積んでも譲らないからな」

と言い、職員の二人は博物館を出ていった。

「ふつ、五分も要らないさ。一分……いや、三十秒もあれば充分だ。なあ、美空」

「はい！確かここなのですっ！」

美空は博物館の壁を押す。すると、壁が回転し、階段が現れる。

「やっぱりボロボロですね」

階段はところどころ崩れていたり、亀裂が走っていたりした。

「うむ……気をつける」

私は美空にそう忠告すると、まず一つ、確かめたい事を確かめた。
「アンチテレポートバリアは消えてるな。よし……」

アンチテレポートバリアとは、テレポートなどによる侵入を防ぐ為の障壁の事である。私がわざわざ職員を追い出してまで普通に入ろうとしたのは、これがまだ起動しているのかしていないのか分からなかったからだ。

もし、これが張られている状態でテレポートによる侵入を強行したら……バラバラになるとい噂だ。

「ならば、わざわざ危険な階段を使う必要もあるまい。テレポート！」

私は美空の手を掴み、階段の一番下まで一気に瞬間移動した。
「……………」

美空はだらし無く口を開けて、ぽかーんとしている。

「どうした。何をそんなに驚いているのだ」

「あっ……い、いえ、光さんもテレポート使えたんですね。（いきなり手、にぎられたですう……ドキドキ……）」

そわそわもじもじと答える美空。

「ああ、昌明ほど遠くには行けぬが……そうだな、行けて半径十メートルだろう。まあ、戦闘用の技だからこれくらいでも充分役に立つ」

実践ではほとんど使っていないのも事実だがな。

「さて……美空」

「は、はいっ！」

「少々時間が掛かるかもしれないが、宝探しを決行する。敵は居ないと思うが、油断は禁物。やはり一緒に行動した方が良さだろう。そして……お前にはこれを渡しておこう。今後、有効に活用してくれ。そう言い、美空にマツチ箱を手渡す。

「……………？これをどうしろと言っんですか？」

「お前は本気を出せば風の向きを変えたり出来るのだろうか？しかし、

翼を激しく動かしながら、炎は吐けまい。だから、そういう時はこれを使え。これらが有効に働くのは室内などの狭い場所や草原などの燃えやすい物が多量にある場所だ。ただし、やり過ぎると収拾が付かなくなるから、考えて使えよ。……ふっ、炎使いにとっては釈迦に説法だったか。ちなみに、そのマツチは油が塗ってある。すごい勢いで燃え上がるからな。その点だけは注意してくれ。切れてしまった場合は私に言ってくれ。新しいのを渡してやる」

「わ、わたしの為にそんなに……ありがとうです!」

美空は頭を下げる。

「ふっ……これからの活躍、期待している」

「はいっ!任せて下さいですっ!」

キラキラと目を輝かしながら力強く答える美空。やはり、彼女はこうでなければな。

「ところで……光就さんはここで何をするつもりなんですか?」

美空は素朴な疑問をぶつける。

「ふむ、もう美空に隠し立てする必要など無いか。例の件についてだ」

「あつ……!そ、そうですか……」

美空は身震いしている。

「ああ。だから、ここで見聞きした事は他言無用だ。誰に対しても私に対してもだ」

「え?ああ、そういう意味ですか……分かりました。決して他言しないです」

「よし、では行くぞ」

「はい!」

我らは元ロケット団基地の廃墟を奥へ奥へ進んで行く。そして、秘密倉庫へ続くあの長廊下へ着いた。

「うひゃあ……酷いですねえ」

そこにはかつて我らを苦しめた量産型ポリゴンの機械的な角張っ

た形の残骸が四方八方に散らばっていた。

「やれやれ、トラウマが……ここはあまり長く居たい空間ではないな」

「そうですね……じゃあ、ブレイブバードで一気に駆け抜けるです！」

「ああ、頼む」

美空の背に乗り、廊下を飛び越える。

「とっつ！廊下は抜けたですよ」

「ふむ、御苦労。次は、私が何とかする番だな。サイコネシス！倉庫の重々しい扉を念力で開き、我らは中に入る。

「やっぱり何もありませんね……」

美空の言う通り、倉庫内は何も無かった。

「確かに何も無いな。だが、よく探してみようではないか。折角、こんな所まで来たのだから、何らかの収入は得たい」

私は壁を叩きながらよく調べる。しかし、返ってくる音はどこを叩いても同じ。何かスイッチの様なものがカモフラージュされてる訳でも無いようだ。

「おかしいな……私の見込み違いだったか？いや、そんなはずは無い。もう少し粘ってみよう」

「光就さん、代わりましようか？」

「ああ」

今度は美空と入れ代わりに床を調べる。タイル張りではないが、こういうのがかえって怪しい。床を叩くが、やはり、どこも音は同じだ。

「参ったな……」

仕方ない。一旦引き返して、別の手を考えるとするか。

「美空、戻るぞ。レポートが使えるのだ。また、いつでも来れる」「はい。分かったです」

私は飛んで壁の上部を調べている美空に言う。

倉庫を出て、長廊下を歩く。

「……ん？」

何か違和感を感じた。この廊下はかなり暗いので、その違和感……さっきまでであった残骸が一瞬の内に消え去っている事に言われるまで気付かなかった。

「光就さん！危ないですっ！」

「何っ!？」

美空の裂帛の声を聞き、とっさに横へ転がる。すると、さっきまで私が居た場所に巨大な虹色の光線が炸裂した。トラウマ再来……。か。やれやれ、どうやらこいつらはどうしても私を削除しなければ成仏出来ないようだ。む？機械に成仏なんて概念があるのか？興味深いな。

「DELEEEEEEEEEETE!!!」

一基くらい、辛うじて生きていた個体が居たようだ。そして、そいつが全ての残骸と合体したのか。その結果がこの巨大ポリゴンか。下らん、単なるスクラップの集合体ではないか。

「み、光就さん！何ですか、この巨大化量産型ポリゴンは！」

美空が駆け付ける。ふん、このでかぶつ、あのマッチの良い練習台になるかもしれないな。

「美空！風を起こせ！そして、さっき渡したマッチを投げつける。

私はそれまでこいつを引き付けているからな」

「はいっ！かぜおこし！」

さて……。

「この前は不覚を取ったが、今度は容赦せぬ。再び、スクラップにしてくれる。サイコキネシス！」

念力を放つ。しかし、奴には大したダメージを与えられず、反撃に巨大シグナルビームを放たれる。が、しかし、

「ふっ、あの時とは状況が違うのだ……テレポート！」

この前は使えなかったテレポートも、今は使える。もう奴の攻撃は怖くも何とも無い。

「サイコカッター！」

ちくちくと嫌らしく攻撃を当てていき、反撃はテレポートで回避する。こうやって、私に注意を向けさせ、貼付けにする。

「頃合いですね……マッチの出番です」

美空はポリゴンが背中を向けているのを見、翼を羽ばたかせながら、マッチに点火する。点火されたマッチは風もあつてか、勢いよく燃え上がり、三センチもの火柱を作った。

「まさに、マッチ一本、火事の元ですね……それ、燃え尽きよ！」

美空は巨大ポリゴンに向かってマッチを投げる。火はポリゴンの背後に燃え移り、風の強さに比例して、どんどんその激しさを増していく。まさか、あのマッチがこんなに美空と相性が良いとは思わなかった。

「よし、一気に畳み掛ける！」

私はサイコネシスを放つ。

「ふっ……昌明に念力を操るコツを教えてもらったのでな。いつもより少々痛いぞ」

お陰で、いつものような拡散型のサイコネシスではなく、一つのターゲットに力が集中するサイコネシスを放つ事ができるようになった。

「ギギギ……DELETE……TE」

「貴様が削除されるが良い。美空！」

「はいっ！ブレイブバード！！」

美空は羽ばたきを止め、炎が燃え盛る部分に向かって突進を繰り返す。

「たとえ、鉄であろうと、わたしの炎の前には無力ですっ！」

美空の体がこの巨大ポリゴンを貫通する。奴の装甲は炎によって役立たずになっていたのだ。

「ククク……とどめだ。サイコカッター！」

さっきのような注意を引くためのサイコカッターではない。私の本気のサイコカッターだ。それは巨大ポリゴンを真っ二つに切り裂き、大爆発を起こした。

「借りは返したぞ」

私は刀を納め、言った。

「ふう……一時はどうなる事かと思っただですよ」

「ふっ、だが、そのマッチの凄さが分かっただろう？」

「そうですね。このマッチなら、雨でも燃え続けてそうです」

美空は大層、あのマッチを気に入ったみたいだな……。

「うふふふ……物を燃やすのってこんなに楽しい事だったんですね

……うふふふ……」

恍惚の笑みを浮かべる美空。……どうやら私はとんでもない放火魔を目覚めさせてしまったようだ……。

第二十三話に続く

昌明「読者の皆様、こんにちは。改めまして……私は竹中昌明。光就軍団の軍師をこの度、務めさせて頂く事に相成りました。これから、よろしくお願い致します」

瀬奈「私からも、よろしくお願い致します。そして、今回は私たちが後書き担当だ。よって、今回は私たちのターンだ！」

昌明「アセロラ蕎麦殿がこの前言った、話展開を間違えたというのは、一話毎に語る視点を変えなかつた事です。やはり、段落毎に視点を変えるより、話毎に視点を変える方が読みやすいし、分かりやすいですからね」

瀬奈「まあ、そういう事だ。次話投稿は四月十一日……期待しないで待つてあげてくれ。にしても、龍宗め、とうとう現れなかつたな」

昌明「まあ、何らかの事情があるのかと。では、私は帳簿を纏めなければなりませんので、ここで退出させて頂きます」

瀬奈「おお、そうですか。軍師殿、いつもお疲れ様です」

昌明「かなり財政が逼迫ひっぱくしてますね……今までの収入源であった、特別収入の値がどんどん減っているのに対し、支出のみが爆発的に増えている……。しかし、この特別収入とはどこからの収入なのでしょうか……？ふうむ、気になりますね」

第二十三話：龍宗、死凶星を討ち取るの事（空前の邪気眼ブーム到来？）（前書

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

もう桜も散る頃。でもやっぱり、朝は寒いね。

第二十三話：龍宗、死凶星を討ち取るの事（空前の邪気眼ブーム到来？）

（さて……）

殿と美空殿を見送った私は次に何をすべきかを整理する。

殿が私に委ねた事柄は実に多い。ここ、ハナダから旅立つ準備や更なる人材登用。そして、ジムバッジの取得さえ私に委ねました。だから、殿は自分のトレーナーカードを譲渡したのです。トレーナーカードを自分の萌えもん譲渡することは一応、認められてはいない為、この殿の行動は奇抜としか言いようが無いでしょう。

そして何より、まだ仲間になって日の浅い私に、自分の全権を委ねるなど……私を信頼しきっているのか……それとも、私を試しているのか、どちらにせよ、常人に出来得る事ではありません。浅井光就……一体、彼は何者なのでしょう？

……今はそんな事を考えている場合ではありませんね。とりあえず、今は行動を優先した方が良さそうです。メンツもまだ、揃っていない事ですしね……。

「瀬奈殿、龍宗殿を捜しに行きましょう。先ず、会議の内容を彼に教えなければなりません」

「そうですね、軍師殿。全く……あいつはどこで道草食ってるんだ」私達は寮を出て、北上する。すると、こっちに向かって走ってくるリザードを見ました。龍宗殿ですね。

「龍！今までどこ行ってたんだ！会議はとっくに終わったぞ！」

「ああっ！くそ、間に合わなかったか……」

ガクンとうなだれる龍宗殿、彼をよく見ると、所々に生傷が見受けられる。一体、彼の身に何が起こったのでしょうか？

「龍宗殿、随分と傷だらけですが、何かあったのですかな？」

私がそう聞くと、龍宗殿はうなだれていた身体を勢いよく起こし、「おおっ！よくぞ聞いてくれました！そうだよ、俺だって、遅れた

くて遅れた訳じゃねえ。深い深い事情があんだよ」

こう言った。対する瀬奈殿は疑惑の目を龍宗殿に向ける。

「深い深い事情ねえ……私と離れていた数十分の間にそんな物が生じる隙があったかどうか、怪しいものだな」

「ほ、ホントだよ、ほら、こつち来てくれ。現場を見せてやっから」
龍宗殿は手招きする。現場とは何の現場でしょうか。

「大した事なかったら、蹴り一発は覚悟しておくんだな」

「安心しろ、そんな事ねえから」

そして、辿り着いたのが一軒の民家。

「ここがどうかしたのか。どこからどう見てもただの家ではないか」

「ここからならな。でも、こつちから見たら……どうかな？」

民家の横に回り込む。すると、この民家の裏側に穴が空いているのを見る事が出来ました。

「や……これはどうした事でしょう。確かに尋常事ではありませんね」

「そうだろ？で、なんでこんな穴が空いてるかって言うと……」

そして、龍宗殿は私達にその経緯を説明しました。その話を分かりやすく纏めると、以下の様になります。

龍宗殿が寮に向かおうとした時、何か爆発したような凄まじい音を聞き、その音がした方向を振り返ってみると、吹き上がる硝煙の中から怪しげな黒服の集団が現れた。

龍宗殿はその黒服を泥棒をした口ケツト団と見なし、フェンスを飛び越え、大格闘を演じた。数の暴力に苦戦しながらも何とか勝利し、盗まれた物を取り返したようです。

そして、家の人に感謝されたそうです。

「で？」

「でって……それだけだよ。ああ、そういう事が。お礼にこれをもたらったんだ」

龍宗殿は円盤型の何かを取り出した。

「あなをほるのワザマシンだぜ。これで俺たちの戦力アップ……」

「貰ってんなー！」

瀬奈殿は回し蹴りを放ち、それにより、龍宗殿は向こうへ吹っ飛ばされる。

「貴様ぁ！無料で働いたならまだしも、謝礼を貰うとは！貴様には遠慮という物が無いのか！返してこい！」

「まあまあ瀬奈殿、別に悪い事をして得たものでは無いのですから。それに、御礼として頂いた物を返すのは先方の礼に失するかと……」

「まあ、軍師殿がそう言われるなら私に反論はありません。では、このワザマシンは私が預からせて頂きます」

「あぁっ！俺のワザマシンが……」

「やっぱり使おうと思ってたな！お前の魂胆などお見通しだ！」

「くっそー、こうなったら……」。

諦める

殺してでも奪い取る

……覚悟しやがれ、瀬奈ぁぁぁ！ドラゴンクロー！」

「愚かな……アクアテルー！」

「ウボアー……ッ！」

きゅっしょにあたって！こうかはばつぐんのようだ！ですか。やれやれ、仲の良い事ですね。

「ついカツとなってやった。反省はしていない」

「アクアテルー！」

「ゴメンナサイハンセイシテマス、ゴメンナサイハンセイシテマス」

……とは言え、龍宗殿の目に光りが無くなっていますね……そろそろ止めますか。

「瀬奈殿、その辺にしてあげて下さい。これから彼を馬車馬の如く働かせるのですから、廃人にされてはかありません」

「おお、それもそうですね。じゃあ、今回はこの辺にしておくか」

「では行きましょうか」

「よし、行くぞー！いつまで寝てるんだ龍」

「うう……俺は今、ロケット団以上の悪人に捕われてる気分だぜ……」

…このドS共め……」

しかし、彼らには本当に馬車馬の如く働いてもらわなければなりませんね。しばらく帰ってこないと殿はおっしゃってましたが、おそらく、一週間もしない内に帰ってくるでしょう。

そして、それとは対照的に私達の仕事は、現状、一週間で終わらせるのも困難。それを数日間で終わらせるとは……。やはり、殿は私達をお試しになられてますね。ふふふ……ならば、私の秘策でその期待に応えさせて頂きましょう。

そして、着きたるはハナダジム。水萌えもんのエキスパートにして、私達の大家さん。カスミ殿が仕切っている萌えもんジムですな。「さて……ここで瀬奈殿に二つばかりお願いがあります。聞いてくれますか？」

私の秘策は瀬奈殿、そして龍宗殿御両人の協力が不可欠。何としても説得しなければ。

「まず、一つ目のお願いです。瀬奈殿、貴女はクチバの萌えもんセンターに行ってくれませんか？私はハナダジムを制覇してからレポートでそちらに向かいます。その時まで、そこで待機して貰いたいのです」

すると、瀬奈殿は少し迷い、そして言った。

「レポートを使うなら、私が現地に行く必要は無いような……」

「ははは……私のレポートは二人用なのですよ。しかし、かと言って龍宗殿は単独行動させられません。これは冷静な貴女だからこそ頼める事。どうか聞き分けて頂きたく存じます」

「そこまで言われては仕方ありません。慎んでお受け致します。しかし、よろしいのですか。ハナダジムは水萌えもんの専門ジム。龍には少々、分が悪いのでは？」

瀬奈殿はそんな事を聞いてくる。むろん、それについても考えてあります。

「そんな事ありませんよ。龍宗殿は昔、相性の悪いニビジムで勝利

したというではありませんか」

「それは岩萌えもんと相性の良いメタルクローと火力のあるドラゴンクローがあつたからだ。カスミ殿にそんな力任せの戦略が効くとは思えません……」

ふふ、その言葉が聞きたかつたのですよ。

「そこで、二つ目のお願いです。貴女が預かっているあなをほるのワザマシン……彼に使用してあげて下さい」

「な、何だつて！使わしてくれるだつて！？やったぜええ！」

「ちょ……ちよつとお待ち下さい。主が居ない時に拾得物を勝手に使うなど、泥棒では無いですか！いくらなんでもそれは肯定しかねますな」

やはり、瀬奈殿は忠誠心が高い。しかし、義理を重んじる者は総じて思考が硬化する。それは別に悪い事ではないのですが、殿が求めている物に遠ざかつていく態度です。

「……私は殿からトレーナーカードを預かっているのです。それ即ち、浅井光就というトレーナーの全権を私が握っているという事です。殿もそれを承知で、私にこれを預けられました。故に、その私がよいと言っているのだから、それは悪い事でもなんでもありません。それに、龍宗殿以外、誰一人してあなをほるを使えませんしね。あなをほるのワザマシンなど大して珍しくもない。今使わずしていつ使うというのでしょうか。」

「むむむ……確かに一理あります。ならば、一つだけ条件を出させて下さい」

「条件ですか……如何なる条件です？」

「あなをほるを使ってどんな事をするのか教えてくれませんか」

「そんな事ですか……良いでしょう。私の戦略、お教え致しますよ」

私は胸中の策を瀬奈殿に激白する。

「なるほど、そんな手がありましたか！」

「ええ。これで水の苦手な龍宗殿も互角以上の戦いが出来るはずで

す

「軍師殿の話はよく分かりました。ならば、私から言う事は何もありません。是非使って下され！」

「御理解頂き、ありがとうございます」

そして、私はワザマシンを受け取る。

「では軍師殿、クチバでまた」

「お気をつけて。いつてらっしゃいませ」

瀬奈殿はさつき言われたように、クチバへと向かった。

「さて……私達も私達の仕事を片付けてしましましょう。龍宗殿」

「任せときな。こいつがあれば百人力さ」

「ふふ……期待してますよ」

そして、私達はハナダジムの扉を開き、乗り込む。

ハナダジムの内部はさながら巨大プールのようなだった。まあ、実際そうなのだが。ジム戦では水面に申し訳程度の浮きを設置し、足場にしてもらう。また、プールサイドも陸地として利用可能である。しかし、相手が水中に入ってしまうとプールサイドからの攻撃は届かないので、実質、不安定な浮きの足場を頼りに陸上型の萌えもんは戦わざるを得ない。かと言って、飛行型萌えもんも足場に不由しなだけで状況は変わらず、水棲型萌えもんは相手の独壇場で戦わなければならない。

故に、ここハナダジムは力押しで突破出来る程、甘くはない。

それに加え、こちらの手持ちは水と相性の悪い炎。圧倒的劣勢……

……しかし、勝ち目はあります。

私のこの秘策が当たれば、一気に勝利に近付ける。

「龍宗殿、例の策、理解頂けましたね？」

「おう！でも、こんなうまくいくのか？」

「私の計算が正しければ、十中八九上手くいきます。何、上手いかなくても次の手があります。龍宗殿は気軽に戦って下さい」

「分かった。信じてるぜ軍師様！」

信じてるぜ軍師様……ですか。やれやれ、ここまで期待されては

仕方ありませんね。皆様の軍師として、采配を振るう事に死力を尽くさせて頂きましょう！

このジムのジムリーダーカスミ殿がバトルフィールドに現れる。

「さて、今日最初の挑戦者は……あら、昌明じゃないの。って事はやっぱりあんたはこの町を去るのね。寂しくなるわ」

「ええ、今まで色々世話して下さいなのに、それを無下にしています………すみません」

「謝る事はないわ。ワタシ達は皆、あんたやあんたの父親に貸しがあるんだから」

「そう言つて下さるとは………とてもありがたい事です。では、この戦い、惜別の一戦としましょう！」

私は扇を抜き、カスミ殿に突き付ける。

「いいわ、竹中昌明。どちらが負けても恨みつこ無しよ！Come on my steady!!」

カスミ殿はボールを投げようとす。まずい、勘違いしていますね。

「お待ち下さい！別に私が戦う訳ではありませんよ。私は代理です」

「あら、そういえば、あんたのトレーナーが居ないわね」

「私は私の主人である、浅井光就の代理として貴女に挑戦しに来ました。故に、戦うのは私ではなく、ここにいる龍宗殿です」

龍宗殿は出づらそうにバトルフィールドに登場した。

「盛り上がった所になんか………すまん」

「………ま、いいわ」

なんとか許して貰えましたか。

「カスミ殿、こちらの手持ちは一人だけですので、一対一の戦いにして頂きたい」

「分かったわ。でも、本当にいいの？このバトルフィールドは炎萌えもんには苦よ？それでなくても炎は水に弱いのに」

カスミ殿は私に忠告する。………もうそんな忠告はいい加減聞き飽

きましたよ。

「安心して下さい。龍宗殿は相性が悪くともそう簡単にやられてしまうような方ではありません」

「そう……なら手加減しないわよ！Come on my steady！」

カスミ殿は改めてボールを投げる。赤い閃光の中から現れるは、紫ローブでツインテールの少女。スターミー。

「ふっふっふっ……あらゆる水萌えもんが活性化すること、ハナダジムのプールで死凶星デススターの呼び声高き、我らスターミーに炎萌えもん如きが挑もうとは、愚の骨頂！そのか弱き炎、我が直々に滅殺してくれるわ！」

スターミーはそんな事を言った。ふーむ、痛い子ですね。

「スタちゃんはバトルフィールドに立つと性格が変わっちゃうのよ……」

「マスター、早く我に指示を。我の中の破壊の化身が奴を消せと唸り声を上げているぞ」

「はいはい。スタちゃん、なみのり！」

「ふははははは！もう終わりのようだな。行くぞ……最果ての海の神よ、我に力を与えたまえ。言葉は津波、津波は龍。全てを押し流す神の水龍よ、今その顎で彼の愚者を喰らい尽くせ！ドラグリーンオプポセイドン……！」

と長い詠唱を終え、ただのなみのりを仕掛けてくる。

「な、なんだありゃ……勝てる気がしねえ」

龍宗殿は茫然としている。

「落ち着いて下さい。あれは前置きが長いだけのなみのり。貴方ならば簡単に相殺できます。まずは、あれを限界まで引き付けるのです」

「お、おう！」

波はどんどん距離を詰めてくる……頃合いですね。

「今です！龍宗殿、波の中心部を攻撃して下さい！」

「了解した！りゅうのいかり！！」

紺色の炎が渦を巻いて波に襲い掛かる。

「ふははははは！そんな炎で我が技を破れるものか……な、何！？」

スターミーが乗っていた波は突如弾けた。りゅうのいかりの爆発がなみのりの波を相殺したのだ。

「へえー、やるわね。さすがに炎萌えもんの癖に自分から水上戦を挑んできただけはあるわ。よし、スタちゃん、サイコキネシスよ！あいつを水中に引きずり込んでいなさい！」

「御意！冥界の王よ、我に力を与えたまえ……」

面倒な……一気に叩いてしまいますか。

「龍宗殿、今が攻撃のチャンスです！」

「え、い、いいのか？こういうのって、詠唱中に攻撃すんのは反則なんじゃ……」

「知りませんよ。隙を作る方が悪いのです」

「……そうだな。よし、行かせスターミー！きりさく！！」

足場を蹴り、詠唱中のスターミーに肉薄する龍宗殿。その爪はサントアンヌ号大会で、あらゆる強者を切り伏せた。

「……彼の患者を冥府に捧ぐ贅とせん！ジャツジメントオブハデス……って何い！」

スターミーは今まさに技を出そうとした所に、きりさくを食らった。プールに水柱が立つ。

「よし、しとめたか？」

龍宗殿は足場に戻り、勝利を確信した。

「貴様ら……許さん……」

しかし、スターミーは復活し、水面から何かに取り付かれた様な目でこちらを睨む。

「っは……し、静まれ……我が腕よ……怒りを静めろ！！」

そして、慌てたように自分の内にいる何かを押さえ付けるように苦しみました。

「おのれ、偽物め……まだ、我を押さえ付けろか……」
再び、喉の奥から出る様な声をあげる。やれやれ、本当に面倒です。

「や、やめろ。今、お前が暴れたらジムが崩壊する！」
「知った事か！今すぐ我を解放しろ！偽物めが！」

スターミーは声を変えながら、一人芝居を繰り返す。そして突然、水面に倒れ込んだと思いきや、次の瞬間、飛び上がった。

「ククク……我こそ、真の死凶星^{デススター}。弱き者よ、不完全な我を倒し、猛者気取りか。ククク……臍で茶を沸かすとはまさにこの事。ふん、貴様らなど我が一分の力で充分よ！ジャツジメントオブハデス！」
さつき詠唱していたサイコキネシスを龍宗殿に放つスターミー。
そして、そのまま水の中に放り投げる。

「よし、スタちゃん！10まんボルト！」

「ククク……天空に住まう神々よ、我に力を与えたまえ。言葉は稲妻、稲妻は槍。光り輝く神の迅雷の穂よ、今天より落ち彼の愚者を断罪せよ！ライトニングオブゼウス！」

相変わらず前置きの長い技ですが、今度はまずいですね。水中にいる以上、この雷撃を逃れる術はありません。ですが……、
「……頃合いですね」

天の時は来ました。水中の龍宗殿に合図を送る。

（分かったぜ！あなをほる！！）

プールの床を粉碎し、穴を空けていく。ちょうどその時、スターミーの10まんボルトが水面に到達する。電撃はあつという間にプール全体に伝わり、龍宗殿を苦しめる。尻尾の命の炎が小さくなっていく。

（ぐう……！！こ、こんな所で負けてたまるかよ！気合いだー！）

しかし、気合いを入れ直し、命の炎の勢いを取り戻す。

「……奴め、あそこで何をしている……？」

スターミーはいつまでも浮かび上がって来ない龍宗殿を不思議に

思い出した。ふふ、残念ながら、もう手遅れです。

全ては私の計算通り。スターミーがこんなにも厨二病だったのは予想外でしたが、それ以外は問題ありません。さあ、龍宗殿、見せてあげて下さい。貴方の実力を！

「もう一回やる必要があると思うだ……ライトニングオブゼウス！」

「その必要はねえぜ！きりさく！」

いつの間にかスターミーの後ろにいた龍宗殿が鋭い爪の一撃を浴びせる。水面に吹っ飛ばされるスターミー。そして、彼女は異常な気が付く。

「むむむ……ん？」

プールに飛ばされた。それは間違いない。しかし、だとするとそこに無くてはならない物が存在しないのである。そう、即ち水である。

「貴女が探しているのは……水ですか？ならば、もうここにはありませんよ。プールに穴を空けさせて頂きました。水はそこから逃げて出し、今、ここは陸地と化しました。もう貴女の独壇場ではありませんよ」

「ま、そういうことだ。覚悟はできたか？中二病！」
すると、スターミーは不敵に笑い出す。

「ククク……下らぬ小細工よ。そこまで言うなら見せてやろう我が本気をな。清き湖に住まいし……」

「もう詠唱は聞きあきた！これで決めてやらあ！ドラゴンクロー！」

「……ハイドロポンプ！！」

スターミーは詠唱を最後まで言わせてもらえず、拗ねた少女の表情でハイドロポンプを放つ。

「無駄だぜ！おらあ！」

しかし、そのハイドロポンプは軽く弾き返される。

「ば、馬鹿な……やはり詠唱が済んでなかったから……」

「単なるLVと努力値の差だ！」

「なん……だと……？」

龍宗殿のドラゴンクローがスターミーを切り裂く。今度こそ勝負ありましたね。

「ぐっ……そうか、お前が我を滅ぼす者……だったのか……ガクッ」

「スターミー戦闘不能！よって勝者、竹中昌明！」

審判が私達の勝利を告げる。と言っか、居たんですね。

「アハハ、負けちゃった」

スターミーが言った。

「……お前、キャラ変わり過ぎだろ」

「だってさだつてさ、サントアン又号事件のあの黒い人ってあんな感じだったじゃない。だから、その真似をしたら強くなれるかなあって思ったけど、やっぱ自然体じゃなきゃダメだよー。うん、これからは自分らしく戦う事にするよ」

「お、おう。がんばれよ」

結局、彼女のキャラは最後まで読み切れませんでしたね……さすが、別名、なぞの萌えもん。

「おめでとう。まさか、プールに穴空けて水を抜くなんて……」
カスミ殿が私を祝福する。

「なに、もうちょっと綺麗なやり方もあったのではないかと反省している所です」

「そう。じゃあ、これ。ポケモンリーグ公認のブルーバッジよ」

カスミ殿は水滴の形をした水色のバッジを渡してくれた。なるほど、これがブルーバッジですか。

「あと、これもね」

次に渡してくれたのは一枚の紙だった。そこには請求書と書かれていた。

「……？これは一体……」

「読んで字の如く請求書よ。勝手にプールに穴空けてくれちゃって……その修理費よ」

しゅ、修理費……？一体いくらですか……っ！0が……七つ！？
「こ、こんなに！わ、私達は何千万なんて払えませんか！」

「馬鹿言っちゃいけないわ。あんた達が壊したんだから、あんた達が払うのが道義ってもんでしょ？」

「た、確かにそうですが……しかし、せめて十分の一くらいにして頂けませんか……？」

すると、カスミ殿はアハハと笑った。

「ゴメンゴメン。冗談よ。あんなのを直すのに数千万も使わないわよ。あんなのジムリーダーにとっては日常茶飯事なんだから、挑戦者にいちいち弁償してくれなんて言わないわよ」

「……はは、ですよね」

助かった……。

「ま、一つだけ条件があるけど」

「ほう、なんですか」

「お彼岸には必ず、お父さんの墓参りしてあげるのよ！」

「はい。肝に銘じておきます」

「さあ、軍師様、次行こうぜ！」

いつの間にか穴の空いたプールから戻ってきた龍宗殿が私の肩を叩き、言う。

「そうですね。では、カスミ殿。行ってきます」

「ええ、行ってらっしゃい」

「では、瀬奈殿が待っているであろうクチバの萌えもんセンターに向かいますよ。……テレポート！」

私達はクチバへ瞬間移動する。

そして、その間、ハナダへ別れを告げた。カスミ殿との惜別の一戦を終えた私は、もう旅人です。ハナダの家を人々を惜しんだりはしません。

第二十四話に続く

第二十三話：龍宗、死凶星を討ち取るの事（空前の邪気眼ブーム到来？）

（後書

地球はグルグル回ってる。火星もグルグル回ってる。土星も水星も木星も皆、グルグル回ってる。太陽も一緒にグルグル回った。ただど回れないんだ。皆燃やし尽くしてしまうから。自分のやりたいう事やって皆を燃やすのか、自分だけが我慢して皆が楽しそうに回っているのをただ見ているのか。どっちが正しいかなんて火を見るより明らかなのに、太陽は前者を選んだ。時が止まった。

（神風美空）

光就「……なんだこの詩は」

美空「えへへ、どうです？」

光就「……………」

（光就、無言で詩が書かれた紙を破る）

美空「ああっ！何するんですかつ！」

光就「こんなの、自慢せん方が良いぞ。後で苦しむ事になるからな」

美空「むう……………」

光就「全く、何で最近、突然、邪気眼に目覚めたり、詩を書き出す奴が続出するんだ。春だからか？」

美空「みんな、光就さんの真似してるんですよ。」

光就「何？私は邪気眼に目覚めたりも、詩を書いたりもしてないぞ」

美空「うーん、何て言えば良いんですかね。……お前が思う程、お前はまともじゃないぞですっ！」

光就「……！そ、そうか、私は傍から見ればああいう感じなのか……もうやだ、鬱だ死のう……………」

美空「光就さんが壊れちゃったです。ま、すぐに直りますよね。春ですから。という訳で次回予告ですう。次回はわたし達のターンですよ〜」

光就「我らは紅羽と再会する」

美空「しかし、そこで機関からの追っ手が現れる！果たしてわたし達は紅羽を守りながらカノッサ機関の魔の手から逃れる事が出来るのか！」

光就「おい。いつまで厨二病ごっこやってるんだ！嘘を予告するな！」

美空「えへへ……意外と楽しいのです」

光就「全く……次話投稿は四月十八日だ」

美空「それに……これやってる時は苦しい事を考えずに済みますから」

光就「美空……お前……」

美空「安心して下さいですっ。わたしの取っておきの秘策があります。そうすれば貧乏生活なんておさらばなんです！」

光就「そうか。ならば、やってみせよ。世話をかける」

美空「わたしに任せるですっ！」

第二十四話・浅井美羽（最終鬼畜母上）（前書き）

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

うん、なんとつつか、ね、二週間遅れてごめんなさい。

第二十四話：浅井美羽（最終鬼畜母上）

「たっだいま〜ですう〜!!」

トキワ〜マサラ間の、1番道路にある美空達の隠れ家。そこに我らは帰ってきた。

「あ、姉貴!? な、何で……? み、光就の旦那も一緒……」

突然の帰還に、紅羽も驚きを隠せないようだ。

「えへへ……会いたくなつたからなのです。でも、元気そうで良かったのです。紅羽」

「お、おう。あたしはいつでも元気だぜ!」

元気よく言葉が返って来る。どうやら、ここらあまり変わった事は無いようだ。

「にしても姉貴、しばらく見ない間に垢抜けたってか、少し大人っぽくなつたんじゃないかね? ははっ、やっぱり、恋する乙女は違うぜ!」

「なっ……く、紅羽っ! 何を言うんですか! お、怒るですよ!」
顔を真っ赤にして怒り出す美空。

「あんなに恥ずかしがつて……相変わらず、姉貴はいじりやすいぜ!」
そんな様子を見て、紅羽はからからと笑った。

「紅羽〜! あなたはわたしを怒らせたです! お置きですよ〜!」
美空は紅羽に張り付き、彼女の全身をくすぐった。

「あははははは、やめて〜息できないぜ! あははははははははははっ!」
紅羽は美空の指遣いに成す術も無く、笑い転げている。やれやれ、本当に仲の良い姉妹だな。今の様子を見て、誰がこの姉妹が実は血が繋がっていない事を悟れるだろうか。

……家族か。

「えへへ〜、こちよこちよこちよ〜、ん? 光就さん、どうしたんですか?」

美空は私の顔を見て、問い掛けた。

「いや、なに……お前達は相変わらず仲が良いなと思ったただけだ」

私はこう答えた。そしてその時、ある事を思い付いた。

「……美空、今日は久方振りに姉妹水入らずで過ごしたらどうだ？」
「えっ？でも……それじゃ、光さんは帰る所無くなっちゃうじゃないですか。光さんは半ば家出みたいな感じで旅に出ちゃったんですよね？だから、マサラには帰れないんじゃない……」

美空め、知らなくてもいい事をよく知ってるものだ。

「何を言っているんだ。私はちゃんと許しを得て旅をしているぞ。確かに、私はあの時、黙って家を出たが、許可を貰っていない訳では無い」

とは言え、実際、私は母上に旅に出ることを言葉で表現した訳ではないが、恐らく、承知済みだろう。

母上は奔放なお方だから、私が何をしようと思事でない限りは、特に何か言われたりはしない。だが、やはり私自身の人生の節目に関する事の決定に、口出しもさせてくれなかった事を、もしかしたら、憤慨されてるかもしれない。

「安心せよ。少なくとも家に入れてくれないなんて事はあるまい」

「そうですね？なら良いんですけど……」

「ああ。全治二ヶ月の怪我を負うことはあるかもしれないが」

「え？」

「では、行ってくる。明日、五体満足で会える事を願っていてくれ」

「え？ええっ!？」

驚きの声をあげる美空を尻目に、私はマサラタウンへと向かった。

マサラである。手付かずの自然が織り成す、そよ風と草花のオーケストラは耳に心地よく、浮世の疲れという疲れを洗い流してしまふが如く、清々しい。

光就は昔、ここを単なる田舎だと思っていたが、やはりマサラは素晴らしい。それも外に出たから気づいた事だ。

光就はマサラの自然を久々に堪能し、母親に会いに行こうとした。光就は自分の家の前に立つ。が、そのドアを開けようとしないうりに入りにくい訳では無いのだが。

「……まさか、旅に出られてはいないだろうな」

何度でも言うが、光就の母はかなり奔放な方である。

その奔放さに光就は苦労したようだ。彼はそれを振り返る。

（そういえば、昔、まだ七歳の私を家に残し、旅に出た事があったな。あの時は地獄だった。きつと、『うう……光就、頑張ってるわね……うるうる』と私が悪戦苦闘している所を見て、感動していた事だろう。何処かのレストランで高級料理を食べながら。）

よく考えてみると、私の幼少時代は美空と遊んだ記憶以外はほとんど、母上に振り回された記憶だな。

上記のように、家に置き去りにされたり、山に登らされた上、『用事あるから一人で帰ってね』と山頂に置き去りにされたり、ジャングルの奥地まで連れてこられたあげく以下略）

だが、これはある意味、獅子が自分の子を谷底に突き落とすような物だったのだろう。

それに、光就の母は奔放な方ではあるが、人が嫌だという事はやらない方だ。恐らく、小さい頃の光就がいい加減にしろと言えば、すぐにでもその態度を改善するだろう。

それに、今の彼の強さはそんな母上に振り回された事によって培われた物でもある。

（私にとって母上は世界中のあらゆる存在の中でも、私が畏敬する最初で最後の存在だ）

あらゆる権力や圧力に屈さぬ反骨精神を持つ光就。しかし、そんな彼でも敬意を抱いている者はいるのである。

（……よし）

光就は覚悟を決め、家の扉を開ける。

「……母上、ただいま帰りました」

家の中はしんと静まり返っている。どうやら予感的中してしま

ったようだ。

「やれやれ、困ったお方だ。仕方が無い。出直すでしょう……!?」
家を去ろうと背を向けた時、邪悪な気配が光就にそろりと忍び寄った。

「テレポート!」

背後を取られては戦えない。光就はテレポートで移動し、その気配の持ち主に対峙する。

「ほほう……さすが、と言うべきか。浅井光就よ」

「何者だ貴様。我らの家で何をしていた!」
すると、それはクククと笑い、

「お前の母親を預からせて頂いた。返して欲しくばヤマブキのシルフカンパニーまで来るのだな」

と、言った。

「……………」

「なんだ、その目は。疑っているのか?ならこれを聞くが良い」

奴はボイスレコーダーを取り出し、光就の母が彼に助けを求める声（棒読み）を再生した。

「……………下手な芝居ですな」

光就は跳び上がり、彼女に肉迫する。

「な、何を……!」

「遊んでないで少しは私の話を聞いて下さいよ、母上」

仮面を外すと、中から出てきたのは光就にとってはもっとも見馴れた女性の顔。浅井美羽^{みづ}の顔である。

「ぷー、少しくらい乗ってくれたっていいじゃない!わたしはあなたをそんな子に育てた覚えは無いわよ!」

「御冗談を。私は小さい頃から母上のペースに乗ると命を落としかねないと教え込まれてますから。もし、乗ってしまったら『今から二人でロケット団をやっつけに行くわよ!』という展開に成るでしょうな」

「あら、それいいわね。採用」

美羽は笑顔で書類にはんこを押すように、手を叩いた。

「私は行きませんよ。それに、我々の仕事を取らないで頂きたい」
「なにより、老人に出番は無いつて言うの？光就ったら、しばらく見ない内に随分と薄情になったのね。母上は悲しいわ」

美羽はハンカチを取り出し、泣き真似をする。

「老人つて……その顔で言いますか」

（母上ははどんな事をしてそうなっているかは知らないが、若々しい。よく、外見は内面をよく表すと言う。すなわち、母上が子供のように好き勝手やってる間は若いままという事か）

「あら？それはどういう意味かしら？わたしが子供っぽいって事かしら？光就い？」

母上はニコニコ笑いながら、問い掛ける。これは赤信号。光就の本能が警鐘を鳴らす。

「お、落ち着き下され。誰もそんな事は申しておりませんぞ」

「うふふふ、声無き声はそう言ってるのよ、光就い……！」

美羽は笑いながら光就を睨みつけた。

「母上、目が笑っておりますぞ！……三十六計逃げるに如かず、御免！」

光就は生存本能のままに、駆け出す。

「遅いわよ、光就」

しかし、敵は一枚上手であった。すぐに光就の前に立ち塞がる。

「ちっ、テレポート！」

仕方なく、テレポートで距離を取る。

「はあっ！」

美羽は手を合わし、容易にテレポートを破る。しかし、これこそが彼の狙い。

「ははは、掛かりましたな、母上」

初めから逃げる気などさらさら無かったのだ。光就はテレポートで美羽の背後を取っており、羽交い締めにしていた。

「なある、光就が単なる逃げの一手を打つわけ無いとは思ってたけ

ど、こんな事を瞬時に考えつくとはね。子は親の知らぬ間に成長するものなのね……感動したわ」

美羽は余裕をかましている。

「呑気に感動している隙など与えませんが。サイコキネシス！」

光就は念力を放つ。しかし、美羽の表情に苦悶は見られない。

「まあ、頭は良くなっても、わたし越えは当分先のような」

そして、美羽は羽交い締めを解き、光就の足を払い、鳩尾に掌底を放つ。だが、彼にその手順を知覚する事は許されなかった。全て一瞬の出来事。気付いた時には、光就は家の壁に叩き付けられていた。

「無念……さすがですな母上」

「ふふん、でしょ？でも、あなたも一ヶ月前に比べたら大分強くなってるわね。やっぱり、旅に出たのは正解だったのかも。でも、わたしは寂しかったから、さっきの一撃はそのお返しよ。……お帰りなさい。光就」

美羽は険していた表情を和らげ、今度は光就到慈母の表情を見せた。

「ええ、ただいま帰りました。母上」

「光就、ところでなんで帰ってきたの？萌えもんも連れていないみたいだけど……」

「私の萌えもんは現在、単独行動を取らせております。私がここに来た理由。それは母上にお聞きしたい事があるからでございます」

光就は目に鋭い輝きを煌めかせ、言った。

「わたしに聞きたい事？いいわよ。何でも聞きなさい」

「ならばまず……母上はMCPなる物をご存知でしょうか？」

光就が旅の目的の一つとしている、MCPという謎の単語の解明。その情報を美羽に求めた。

「MCP……もしかしたらあれの事かしら」

「！ご存知ですか！」

「え、ええ……ちょっと待っててね。持ってくるから」
さすが母上だ。と、光就は敬嘆した。

しばらくすると、美羽は一つの茶封筒を持ってきた。

「はい。その資料に書いてあったような気がしたわ。わたしがそのMCPとやらについて知っている事はそれだけよ。でも、MCPねえ……気になる響きね」

美羽は考え込む。その目には好奇心が渦巻いていた。

「ふふふ、母上も興味を持たれましたか？」

光就の慧眼が鋭く美羽を貫く。

「ふーん、その目はわたしに何かやらせようと企んでる目ね。ま、どうせ暇だし、何よりかわいい息子の頼みだもん。断れないわ」

美羽もまた、お返しとばかりに、鋭い目付きを光就に向ける。

「理由はどうあれ、引き受けて下さるなら、些末な事。有り難き幸せに御座います」

光就は頭を下げる。無論、その炯炯とした眼光は衰えを見せてはいない。

「光就。やっぱり、あなたを旅に出して正解だったわ。今の表情、素晴らしい。わたしが育て上げた、無敵の戦神・浅井光就よ、その虎の如き眼光で凡人共を震え上がらせなさい。わたしが伝授した剣術、軍略を振るい、悪漢共の屍山血河を築き上げなさい。その武勇と知略で愚者共に恐怖と死を振り撒け。そして……マイダーリン、光秀を必ず連れ戻してきなさいっ！」

「……御意！」

そしてこの後、浅井母子による、綿密な打ち合わせが行われた。それは夜にまで及び、その日、光就は久々に自宅の床に就いたのだった。

早朝、光就と美羽は家の前で別れの言葉を交わしていた。

「では、母上。御達者で」

「うん。光就も、体には気をつけるのよ」

美羽は光就を見送る。

「ふう……昨日は久しぶりにあんなに難しい言葉を言いまくったから舌と頭が疲れちゃったわ。お料理も自分で作ったのは久しぶりだし。まだ、お日さまあんなに高いけど寝ちゃえ寝ちゃえ」

美羽は大きな欠伸をしながら、自分の広げっぱなしの布団に入ろうとした。

「……あ、そうだ。先に『おかたづけ』しなきゃ」

美羽はそう言つと、『おかたづけ』をする為に細剣を取り、家の裏口に回った。

「あら？」

しかし、そこには誰も居なかった。

「……ふーん」

美羽は首を傾げながら家の中に戻ろうとした。

(……しめた！くらすえ、しびれごな！)

潜んでいたロケット団の刺客が美羽にしびれごなを振り撒く。

「……はあっ！」

転瞬、美羽は細剣を後ろに振るう。その剣筋は突風となり、刺客を引きずり出し、しびれごなを吹き飛ばし、それを術者自身に浴びせた。

「くっ……」

刺客は萌えもんのナゾノクサだった。

「あらあら、曲者がどんなふてぶてしい顔をしてるのかと思って来てみたら、年端も行かない女の子だったなんて……わたしも舐められたものね」

しかし次の瞬間、美羽の背に衝撃が走る。

「我々は常に全力で獲物を狩る。舐めていたのは浅井美羽。貴様の方だ」

美羽に斬り掛かったのは、かまきり萌えもんのストライク。両手

の鎌や剣などで戦う、強敵だ。

「なるほど、彼女はおとりだったって訳ね。小賢しい真似を……」

「それが我々ロケット団暗殺部隊のやり方。この鎌には毒が塗られている。だが、安心されよ死に至る毒ではない。ふん、あと一分もしない内に貴様は意識を失う。我々を侮った事、後悔するが良い」

「……ふーん。あなたたちの命は数秒と持たないけどね」

「何……!?!」

ストライクが動こうとした瞬間、その体から鮮血が迸り、一瞬にして絶命した。

「いくらなんでも気付くの遅すぎよ。あなたが長々と口弁垂れてる間に斬ってたのに」

美羽は細剣を振りながら言った。その刀身は抜いた時と変わらぬ光沢を有している。

「にしても、あなたもかわいそうね。こんな小さいのに……」

美羽はナゾノクサに対峙する。彼女は怯え、後退りする。

「ひっ、ひい！お、お前、人間じゃない！」

「人間よ、わたしは。ただ……」

細剣を構え、踏み込み、斬る。しかし、刀身には燻し銀の光沢しか残っていない。

「ちよつと強くて、ちよつとした秘密を持っている。すっごくキュートでビューティフルな人間よ」

「ち、ちがう！お前は萌えもんだ！しかも、ただの萌えもんじゃない。伝説に乗ってしまふような、埒外の強さの……」

「……これだから萌えもんは嫌いなものよ。知らなければ良いものを」
細剣を納める。ナゾノクサもまた、倒れる。

「消える」

再び細剣を抜き、思い切り振り下ろす。刺客達の遺体は跡形も無く、消えてしまった。剣筋で吹っ飛ばしてしまったのだ。『おかたづけ』は完了だ。

「ふあーあ、あら、あのストライクの言った通りね。すっごく眠くな

つてきたわ。寝るときは布団で寝るって決めてるんだから、布団に入るまで我慢しててね、わたしのまぶた」
美羽は目を擦りながら、自分の布団へと戻って行った。

第二十五話に続く

第二十四話：浅井美羽（最終鬼畜母上）（後書き）

瀬奈「な、なんというか……この母親にしてその息子ありか」

昌明「今話はフラグ回ですね。殿は何を頼んだのでしょうか？」

龍宗「にしても、あんなに腰の低い光就は初めて見たぜ。敬語を使うなんてな」

瀬奈「まあ、色々とあるみたいだな。さて、次回は……」

龍宗「二十五話は再び俺たちのターンだ！」

昌明「クチバジム戦。そして、噂の魔物との戦いを予定しております」

瀬奈「まあ、そんな所だ。次話投稿は五月三日になれば良いな。…

…ん？美空殿、何故このような所に？」

美空「ふふふふ……それはですね……」

小劇場、次回いよいよ最終回！

第二十五話前編：昌明、妖に遭うの事（砂塵舞う港町）（前書き）

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

予定日が月曜日なのは今週だけだから安心してくだじえ！（まあ、
実質、週月曜日投稿なんだけどね）

第二十五話前編：昌明、妖に遭うの事（砂塵舞う港町）

カントー一の港町クチバシテイ……到着しましたね。

「よし、さつさと瀬奈を迎えに行こうぜ！」

「ええ……」

私達はクチバの萌えもんセンターに入る。するとそこでは、カチコチになりながら、ねだられたサインを書き続けている瀬奈殿が居ました。

「ああ……うう……（チラチラ）」

「（ワクワク）」

「ほ、ほら！出来たぞ！べ、別にお前の為に書いた訳じゃ無いんだからなっ！」

「（ニヤニヤ）ありがとうございます！」

どうやら着いてからずっとこのやり取りを続けていたようですね。しかも、並んでるのは男だけではないようですね……、超時空ツンデレラの誕生ですか。

「やれやれ、どうやら私達はお邪魔なようですな。少し席を外しますか……」

私が萌えもんセンターを後にしようとした時、

「ん？あ、あれは！昌明さんだ！」

「え？昌明だつて！何処だ！何処にいる」

群衆に見付かってしまった。

「あ、あの、皆さん。私はサインなどした事ありませんので、貴方方を満足させられるようなサインは書けませんよ。それでもよろしいのですな？」

皆、頷く。

「そうですね。では、遠慮無く……」

差し出された色紙にサインを書く。

「あ、ありがとうございます……」

「いえ……私などのサインで喜んで頂けたなら、幸いです」
私がサインを書いてあげた人はお礼を言って立ち去る。なるほど、瀬奈殿が恥ずかしがりながらもサインを書き続ける理由が分かりました。確かに、これは癖になりますね。

しかし、どうやら面白くない人が一人居るようです。

「くっ……何故だ！何故俺にサインをねだる人が居ないんだー
ーッ！」

龍宗殿でした。確かに、彼はサントアンヌ号大会の優勝者の一人ですし、私よりもねだられる理由はあるような。

「龍、残念だったな」

ようやく解放された瀬奈殿が落胆しきっている龍宗殿の肩を叩き、言った。

「思えば、大会の時も襲撃の時もお前はあまり目立たない位置に居たよな。目立った所と言えば……ラッタにやられた場面かな」

「あ……うわああああああ！そくだよな、カッコ悪いよな、あんな場面でやられちまうなんて……そんな俺のサインなんてほしがるはずねえよな……」

龍宗殿はひざまずき、嘆いた。おそらく、魔貫光殺砲を喰らったあのトラウマの場面を思い出したのでしょう。

「龍……ん？」

瀬奈殿は何と声をかけようか迷っていました。しかしその時、何か見付けたようです。

「ふふふ……龍、お前はお前が思っている程カッコ悪いわけじゃ無いよんだぞ」

「え……」

龍宗殿は顔を上げる。すると、そこには色紙を龍宗殿に差し出す少年がいた。

「な、なんだお前、も、もしかして、俺のサインがほしいのか？」

「コクリ」

少年は力強く頷く。

「お、おおおおお！！坊主！お前良い奴だ！良い奴だよ……ほんによよ……」

龍宗殿は嬉しさの余り、号泣しながらその少年へのサインを書いた。

「……ほら、出来たぜ！」

「うわぁ、ありがとう！龍宗さん！」

「ふふふ……、ぼく、サイン貰えて良かったな」

「うん！」

少年は満面の笑みで頷いた。

「色紙は……一つしか持ってないのか？」

「うん……だから、最後の一つは龍宗さんのサインを書いてほしいかったんだ」

「っ……！うう……お前ほんつと、良い奴だなあ……」

龍宗殿はついに、人目もはばからず、おいおいと泣き出しました。

「そうか……よし！ぼく、その色紙、ちょっとお姉さんに貸して貰えるかな？」

「え……、うん。いいよ」

少年は瀬奈殿に色紙を渡す。一体、何をするつもりなのでしょう？

「海風瀬奈……っ。軍師殿！次、書いて下され！」

なるほど、そういう事ですか。

「分かりました。……これでよろしいでしょうか？」

「ああ！……オホン、ぼく……おっと、これは」

瀬奈殿は何かを言おうとしたが、それを止めて、龍宗殿に色紙を手渡した。

「ん？ああ、そういうことか」

龍宗殿は瀬奈殿の行動の意図を理解し、少年に私達三人分のサインが書かれた色紙を手渡した。

「ほらよ、俺たちのサインだ」

「うわぁ……僕のためにこんなに……ありがとう！みなさん！」

「おう！坊主、それにはな、俺たちの想いが詰まってる。もし、坊

主が辛い時や悲しい時があったらこのサインを見る。そいつはいつでもお前に立ち上がる元気を分けてくれるぜ！」

「……うん！」

少年はペコリと頭を下げ、萌えもんセンターを後にした。

「喜んで貰えてよかったな。龍」

「そうだな……」

「本当ですね。私達のサインであんなに喜んでくれて……何だか、私達の方が嬉しくなってますね」

「ははっ！ちげえねえや」

そんなこんなで萌えもんセンター内でのプチサイン会は終始、和やかなムードで行われました。

この後、龍宗殿のサインを欲しがる人が殺到し、彼は嬉しい悲鳴を上げながらサインを書いた。

「ふう……やれやれ、やっと終わったぜ」

龍宗殿も解放され、ようやく、一息つく私達。

「ふふ……、休むのはまだ早いですよ。これからクチバジムに挑戦しに行かなければならないのですから」

「あっ！そうか……でも、だったら尚更休んだ方が良いでしょうか。クチバジムも俺が出るんだろ」

「いいえ……今回は、瀬奈殿に出てもらいます」

「まあ、そういう事だ。私はそんなに疲れてないんでな。戦いに支障は無い」

「お、おい。でもよ、瀬奈は電気とは相性最悪じゃねえか。威力4倍だぜ、4倍」

「安心して下さい……ハナダジムの時と同じように、秘策がありますから」

「Unbelievable!!なんてこった、このマチス様の電

撃がまるで通用しないなんて……」

「ふっ、これが海竜王の実力だ！」

瀬奈殿はクチバジムリーダー、マチス率いる電気萌えもん軍団の苛烈な電気技を悉く受け流し、撃破した。

その秘密は彼女の体が帯電していたからです。かつて、エレブーと対峙した時に殿が伝授した奇策に更なる改良を加えたそれは、電気をまるつきり受け付けなかったのです。

「はははっ、さすがチャンプだ。じゃあ、こいつを渡さなきゃな。

ほら、これがオレンジバツジだ。Congratulation!
Champ-Sena!」

「ああ！ありがとうございます！」

こうして、私達はクチバジムを制覇しました。

クチバジムを後にした時には、もう既に日が暮れていました。

今から戻るには遅すぎるという事で、マチス殿が気を利かせてくれ、今日一日だけ、クチバジム寮の空室を使わせて頂くことになりました。

そして今、私達はその部屋で明日の打ち合わせをしています。

「ハナダ、クチバのジムを制し、いよいよここでやるべき事の終わりが見えて参りました。これで何とか、殿に面目が立ちそうです。

お二方、新参の私に対してそこまでの御協力、感謝致します」

本当に。もしかしたら、最初はあまり私の事を信用してくれないのではと憂慮していたのですが、思うだけで済んで本当に良かった。「いや、私たちの力だけではありません。軍師殿の綿密な計画のお陰で一日で二つのジムを回る事が出来たのです。私たちこそ、貴方に感謝しなければなりません」

瀬奈殿はそんな事を言った。意外と彼女は謙虚な方なんですな。「ほんとだよな。光就はいつも腹に一物ためてるような指示かし

ねえから、動く方は自由っちゃ自由なんだが、何すればいいか、分からなくなる時があるんだよなあ。その点、昌明はまだ純粹な方だな

「ははは……、褒め言葉として受け取っておきましょう」

龍宗殿はそんな事を言った。私は苦笑しながら返事した。

「では、明日の事を話しましょうか。明日はこの前話した、友のもとに行きます。彼ならば、殿のお役に立てると確信しています」

「なるほど……で、軍師殿の御友人はどこにいらっしゃるのです？」

「ふむ……ここ三年、まともに会ってませんからね。もし、住所が変わっていないなら、この先の11番道路にいるはずです」 彼からの最後の連絡は二年前、手紙として届きました。そこには彼の息子自慢が延々と書き出されていました。

「この子は天才だ！大きくなったら偉大な萌えもんになるぞ！」とか「内の子は凄いぞ！俺が教えた妖術をどんどん吸収してくんだ。」

百年に……いや、千年に一度の天才だな。まさに神童！鳶から生まれ鷹つて奴さ！」などと、親バカ丸だしの文でした。当時、これを受け取った私は彼らしいと思いつながら穏やかな気分になった物ですが、最近になって、甚だ疑問に思った事があつたのです。

「何故、続きが来ないのでしょうか？」

一ヶ月前ですかね、そう、ちょうど殿達がハナダにやって来たという頃ですね。（無論、当時の私はそんな事、知りもしませんでした）それがそれくらいに急に疑問に思ったのです。

奇怪。誠に奇怪。何故今更？しかし、私は出無精なので、生命維持の必要性に迫られなければ滅多に外には出ません。そんな事をしている間に、殿を紹介されたりして忙しくなってしまったので、その事を考える余裕が無くなってしまいました。

それにしても、考えれば考えるほど謎は深まるばかり。どうして、手紙を受け取った時……いや、正確にはその二、三ヶ月後の私はその事を疑問に思わなかったのでしょうか。

「ふーむ、まあ、行ってみれば分かる事。明日、早速足を運んでみ

ましょう」

「はい、それが一番でしょう」

そうして、私達は結論を出し、床に就こうとした。しかし、その時、

「大変です、皆さん！寝てる場合じゃありません手伝って下さい！バタンと勢いよくドアが開き、クチバジムトレーナーの一人が叫びました。

「何です？尋常事ではない様子ですが」

「ま、街の近くに、また、化け物が現れたんです！と、とにかく来て下さい！今、ジムリーダーが戦っています！」

かなり慌てた口調でこう言い放った。どうやら、事態は一刻を争うようです。

「承知致しました。微力ながら、私達も加勢しましょう。いいですね、お二方？」

私は瀬奈殿と龍宗殿にその許可を求める。

「私は構いませんが、龍は……」

瀬奈殿はベッドに大の字になって寝ている龍宗殿を見る。

「今の龍は何があっても起きはしない。奴は置いていく。それでもよろしいですか」

「……分かりました。では、ジムリーダーの所に行きましょう。私について来て下さい」

私達は寮を出て、夜の街を駆け抜け、港の棧橋を横切り、ディグダの穴の前に到着する。

そこでは、マチス殿が選りすぐりの電気萌えもん達を率いて、巨大な化け物と戦っていました。

「Shit！俺達の攻撃が全く効かねえ！」

「苦戦しているようですね。加勢に参りました」

「おお、来てくれたか。ほら、奴が最近この街に度々やって来るmonsterだ」

私はその化け物を見上げる。それは美空殿の報告を聞いていた時に想像していた物を遙かに凌駕する巨大な物だった。そして、様々な獣を掛け合わせたようなその容姿は実に形容し難く、正体不明の恐怖を感じさせる。

「なんだあれは……虎？いや、獅子？しかしなんて大きな敵なんだ……」

瀬奈殿はその化け物を見て茫然と立ち尽くしている。

「……ふふふ、心配は要りませんよ。私に考えがあります。マチス殿、瀬奈殿、私が準備を終えるまで、かの怪物を張り付けにして下され！」

咄嗟に策を思い付き、指示を出し、自分は後退する。

「了解！アクアテール！」

瀬奈殿は水を纏わせた腕を尻尾の様に思い切り振り回す。それは化け物の爪に当たった。するとそれは砂の城のように砕け散った。

「！？これは一体……？」

「油断するなよChamp！こいつは体が砂でできている。打撃を受けても自己再生しやがるんだ！」

マチス殿の言葉通り、砕け散った腕はすぐに再構成され、そのまま瀬奈殿に襲い掛かる。

「なんと厄介な……ならこれでどうだ！」

瀬奈殿は回転しながら、風を取り入れ、渦を作り、化け物に向かってそれを投げ付けた。

「砂で出来ている体だというなら、その体ごと散らせば良い！もののけよ、成仏しろ！たつまき！」

そして、その狙い通り、化け物は瀬奈殿のたつまきによって吹き飛ばされた。しかし……！

「なっ……！！」

空中で体中、バラバラになったにも関わらず、それは何の問題も無く再生し、瀬奈殿に向かって急降下してくる。

「Champ！こつちだ！」

その時、マチス殿が瀬奈殿を手招きしました。なぜなら……。
「皆さん、よく耐えてくれました……テレポート！」

策の準備を終えた私がテレポートの陣を張っていたからです。私の下に転送される、瀬奈殿とマチス殿とその萌えもん達。

「妖よ。その爪牙で私の仲間を傷付けんとするならば、私に情け容赦などありません。さあ、懸かってきなさい！」

私は化け物を挑発する。すると、それは不気味な唸り声を挙げ、攻撃目標を私に変え、襲い掛かってきた。……計算通りです。

「瀬奈殿！私の指差す方向にりゅうのいかりを！」
「了解！」

今回の策に必要な物、それはたった一つの火種と炎。しかし、それは相手にとって致命的なダメージを与える。粉塵爆発によって！火柱が立ち、砂から砂へ次々と引火し、爆発する。砂が削られていき、私はその時、その中から砂とは違う何かを見出しました。

「さあ、妖よ。その正体、暴かせて頂きましょう……！」
それをこの化け物の正体と見なした私は、念力でそれを引き抜こうとしました。しかし、

（させん……！）
「！？何ですか、この強い念力は……！あつ、ま、待ちなさい！」
何者かの強い念力干渉の所為でそれに逃げられてしまいました。

（今の念力は一体……あの化け物が放ったものでしょうか……？）
しかし、惜しいことをしました。奴を取り逃してしまつとは……。
「すみません、皆さん。妖の正体を暴く事が出来ませんでした。折角、お手伝い頂いたのに……申し訳ありません」

「い、いやいや、奴を倒しただけでも、充分だつて！」
マチス殿はそう言ってくれました。

「有り難う御座います……。しかし、正体を暴くまでに至らなかつたのは、私の計算不足の所為……その罪滅ぼしとして、せめて、明日必ず、私があのだけ物に始末を付けましょう」

そう言い、私は深く頭を下げた。

「罪滅ぼしなんて……、でも、あんたらが仲間になってくれるなら、こんなに頼もしいことはない。分かった。よろしく頼むぜ、brother!」

「ええ……私達にお任せ下さい。次は必ず捕らえて見せましょう」
私はその化け物と戦う決心を固めた。

後編に続く

第二十五話前編：昌明、妖に遭うの事（砂塵舞う港町）（後書き）

瀬奈「な、何故……美空殿！」

間一髪で美空の翼の斬撃を躲した瀬奈。彼女の前の床は鋭い切れ込みが入っており、その威力の凄まじさを物語っている。

美空「こうするしか我らの財政を救う方法が無いんですよ……貴女の体を売る以外の方法は……」

今の彼女はデスウィング形態。通称、黒美空の状態なのである。

瀬奈「や、やめろ……死ねない……私はまだ死ねないんだ！」

黒美空「そんなのは私達だって同じです。今のままでは私達全員、飢え死にですよ？戦死ならともかく、飢え死になんて……笑われ者じゃないですか、私達」

淡々と語る黒美空。

瀬奈「美空殿、やめて下さい！みなでもう一度考えましょう！」

黒美空「考えて考えて考え抜いて、その結果がこれです。貴女はただ私に苦しめというのですか？」

瀬奈「それでも……私は死ねない。私は海竜王！人の上に立つ者。

たとえ、美空殿の為であろうと海竜王の誇りに賭けて、やすやすとこの命、捨てはしない！」

黒美空「愚かな……、普段ならまだしも、デスウィングとなった私を倒せるとでも……？」

瀬奈「私は海風瀬奈、海竜王、海風瀬奈だ！美空殿の過ち……我が炎で矯正する！」

黒美空「ククク……貴様が何を思い、そして、消えていこうと、そんな事、実に些細……海風瀬奈、我らの人柱となれた事を誇りに思いながら、煉獄の炎にその身を焼かれるが良い！」

翼を広げ、炎を纏う黒美空。本編でも見せた事の無い本気である。

「美空殿……！私は死ぬ訳には行かない。覚悟しろ！」

「死ねえ！海風瀬奈！」

「りゅうのいかり!!」

「ブレイブバード!!」

両者の技が激突する。

M F小劇場、次が本当に最終回。

次話投稿は五月九日だじえ!

第二十五話後編：昌明、知を以って敵を討つの事（昌明の畏）（前書き）

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

ホームページをリニューアルし、小説案内ページから直接行けるようになりました。これを読んでも方の中には私のホームページの存在を知らない人も多いのではないのでしょうか。是非行ってみてください。コンテンツは少ないですけどね。

そして、三週間も遅れてすいません。

言い訳する気はありませんが、ホームページのリニューアルに時間がかかってしまったり、試験だったり、ちょっとスランプ気味だったりしてなかなか落ち着いて小説を書けない時期が続いたので今日まで更新できませんでした。次回からは多分、週一pを再開出来ると思いますので、期待しないで楽しみにして下さい。

第二十五話後編：昌明、知を以って敵を討つの事（昌明の饑）

あの戦いの後、私達は周辺警備をマチス殿に任せ、眠りにつきま
した。

先日現れたあの魔物、あれはつい最近……サントアンヌ大会が
終わった日から出始めたとの事です。

そして、毎晩、町を襲いにやって来て、日が昇る時になると去っ
ていく……。昔話の妖怪そのものですね。

まあ、そんな事はどうでもいいのですが、夜にしか襲いに来ない
というのは聞き逃せませんね。何故、そうなのでしょう？あれには
太陽の下での襲撃に際して何か致命的な損害を被る要素があるとい
てもいいのでしょうか？

いや、今は答えが出そうにない物事をうじうじと考えるより、行
動する方を優先しなければなりませんね。

「軍師殿、準備が出来ましたよ」

「分かりました。では参りましょうか」

私達は11番道路に向かう。いや、正確にはそこクチバの境界
線ですね。

マチス殿はそこに陣を張り、休まずに警備をされていました。

「マチス殿、昨晩から不眠不休の警備、御苦労様です」

「おお、来てくれたか。いやー、寝ずに警備なんて懐かしいなあ。
軍人時代を思い出さずせ」

マチス殿はかつて、とある外国の軍人をしていらしたとのこと。
おそらく、軍略に関しては事欠いていないでしょう。

「マチス殿、迷惑でなければ頼みたい事が御座居ます」

「What? 何だ？ま、俺に出来る事なら何でも言ってくれよ」

「左様でございますか、ならば……瀬奈殿、こちらへ」

瀬奈殿が前に出る。そして、彼女はその頼みを私が言おうとする
のを遮って自分から言い出した。

「マチス殿！私に……軍略という物を御指南下され！」

これにはマチス殿も多少驚かれたみたいでサングラスの上からでも目を見開いているのが手にとるように分かりました。

「な、なんで俺？Champには俺よりも優秀な軍略家がいるだろ？」

マチス殿は私を見て言った。

「違いますね。確かに、知識という意味では私は貴方より勝っているだろうという自負はあります。しかし、戦略・軍略は知識があれば良いという物ではありません」

生兵法は大怪我の基という諺が示す通り、戦いを以って、経験として積み重ねられた軍略と机の上で兵法書を丸暗記しただけの軍略……どちらが優れているかなど比べるまでもありません。

「私の軍略など、所詮は机上の空論。そんな物を教えるより、貴方の経験に基づいた確かな軍略を御教授頂いた方が余程、為になります。私からもお願い申し上げます」

「お願い致します！」

「……分かった。いいぜ、俺ので良いなら、いくらでも教えてやるよ」

「ありがとうございます……！」

良かった、マチス殿は軍略の教授を快諾してくれましたね。これで私も、また一つ肩の荷が下りました。

殿に頼まれていた事、その中に、瀬奈殿に軍略を教える事も含まれていました。

瀬奈殿には他人をよく引き付けるカリスマ性があります。それは一軍の将に相応しい才覚であり、そんな才を持つ彼女に軍略の類を習わし、それを習得させる事は後々、必ず役立つと殿は考えられたようです。

瀬奈殿自身も軍略に対して興味と才能があつたようで、この前、私が教えた時は、私が一を言えば彼女は十を知るといった感じで、ほとんど知識を吸収していつてくれました。

そうしていく内に、私は私の持っている軍略に甚だ疑問を抱くようになったのです。何度でも言いますが、私の軍略は紙に書かれている事を丸暗記した物に過ぎません。

軍略は実戦を経て、数え切れない程の成功、失敗を繰り返して初めて大成するもの。なのに、戦いを一度しか経験した事がない私が軍略を語るなど、我ながら片腹痛い。

しかし、その点、マチス殿は違います。彼は数多くの修羅場を潜ってきた猛者。様々な成功、失敗、時には命を落としかけた事もあるかもしれませんが。

とは言え、経験者でもその経験を教える事は出来ても、それ自体を会得させる事は出来ません。しかし、彼の経験が瀬奈殿の軍略習得の為になるなら、それはとても良いことです。

それに、物事を学びたいと思っている人の為に、それが学べる環境を整えるのは知識人として当然の行いです。

「では、私は他にやる事がありますので退出させて頂きます。では、マチス殿。瀬奈殿をよろしく頼みます」

そう言い、私は陣を後にしました。

さて……、瀬奈殿がマチス殿の講釈を聞いている間に、私達は私達でやるべき事をやりましょう。

「龍宗殿、これより行動を開始します。よろしいですか？」

「おう！」

「では、こちらへ……おっと、その荷物を持って来て下さいね」

私は龍宗殿の後ろにある大きな革袋を指差して言った。

「このことか？うおっ！お、重……！」

「丁重に扱って下さいね。大事な物ですから」

「わかってるさ」

そして、私達はマチス殿が張った陣の外。11番道路側の出口か

らさらに遠い道路のほぼ入口まで来た。

「ありがとうございました。ここまでで充分です」

「よっし、じゃ、ここに置いとくぜ」

革袋を置く龍宗殿。

「では、早速、作業に取り掛かるとしましょう。」

私はその革袋から物を取り出し、地面に埋め込んだ。

「昌明、何やってんだ？」

「次の襲撃に備え、罾を張っているのです。奴が夜にしか行動しないのは分かっています。ですから、日が高い内に奴が通るこの場所に多数の罾を張り、戦う前に出来る限り消耗させます。その上で、私達が協力して戦えば、あれの正体を今回こそ捕らえることが出来るでしょう」

私はそこら中にこの前有効だった火罾を張る。

「敵は砂……ここは水辺……この地形効果を活かさぬ手はありませんね……」

「おい、おい、……だめだこりゃ」

熟考を始めた私に辟易する龍宗殿。

「やれやれ、しかたねえな。……ん？」

そしてその時、龍宗殿の服を引っ張る者が居た。

「あ！お前は昨日の……」

「龍宗さん！おはようございます！」

それはこの前、彼にサインを初めてねだった少年だった。

「おう！今日も元気そうだな」

「うん！……ねえ、龍宗さん、ここで何してるの？」

「何してるのって言われてもなあ、軍師様の護衛かな」

「ぐんしさま？ごえい？」

「ま、ようするに、エライ人を守ってるんだよ」

「うわあ、すごい！ん？でも、エライ人って……あつ、あの頭良さそつなお兄ちゃんだね」

少年は私を指差して言った。

「そうそう。すげえだる俺？」

「うん！すごいよ！」

「うんうん、坊主は素直でよろしい。お前の爪のあかを光就にせんじて飲ませたいくらいだよ」

「それって、ほめられてるのかなあ？うん、きっとほめられてるんだよね。龍宗さんは単純だからね！」

いきなり放たれた毒舌に、龍宗殿はうろたえる。

「た、単純って……、ぼ、坊主、あまりそんなこと言わない方がいいぞ……」

「？」

きつと、彼にとっては単純とは褒め言葉と認識しているのでしよう。少年は無邪気に首を傾げた。

「あーそついやお前、どうやってここに来たんだ。いや、そんな事より、ここは危険なんだ。早く自分の家に帰んな」

「えーっ！」

「えーっ！じゃねえよ。ここは昨日化け物が出たんだ。夜にしか出てこないって話だが、油断できねえんだ。ほら、帰れ」

「うう……」

涙目でウルウルと懇願の眼差しを龍宗殿に向ける少年。

「そ、そんな目したってだめだ！俺が送ってやるからさ、な、帰ろうぜ？」

「エライ人を守ってるんじゃないの？」

少年は手厳しい事を言った。

「い、いや、だけどさ。お前を放っておけないだろ？」

「ボクのことには気にしないで！龍宗さんは龍宗さんの仕事をしてれば良いよ！あぶなくなったら逃げるからさ」

少年は小さな胸を叩いて言った。

「いやいやいやいや、そうじゃなくてだな」

「別に良いじゃないですか」

私はそう言った。

「な、何言っただんだ！」

「大丈夫ですよ。彼の身に危険が及ぶような状況に陥ったら、貴方が彼を守ってあげれば良いではないですか。私、腕力はありませんが、貴方が思っているよりは強いですよ」

「……………」

龍宗殿は押し黙った。

「彼は貴方と遊びたいのですよ。さすがに夜までここに置いておく訳にはいきませんが、日が出てる内はここに居させてあげても良いんじゃないでしょうか」

「……………わかったよ。しかたねえな、いさせてやるか」

「ふふふ……………良かったですね。暇潰しの相手が出て来て」

「な、何言っただやがる！べ、別にずーっと座つてると体がむずがゆくなる訳じゃねえから！」

なるほど……………、龍宗殿は体を動かしていなければ落ち着かない……………と。

「龍宗さん、ボクは帰らないよ」

「もういい。しかたねえなあ。わかったよ。まだここにいてもいい。

だが、日が暮れたら家に帰れよ」

「うん！」

「おう！よし、坊主！いや……………なあ、お前、名前なんて言うんだ？」

「ん？ボクの名前？ボクはねえ、忠実たださねって名前だよ」

忠実……………なるほど、あの少年は忠実という名前なのですか……………む？何か昔、聞いたことあるような……………まあ、ただのデジャブでしょう。今はそんな事を気にしている暇はありません。

「忠実か……………良い名前だな。よし、忠実！暇潰しにでも遊んでやる。おっと、俺の仕事なんて気にしないでいいぞ。あいつも結構強いからさ」

「そっか……………、じゃあ、いつしよに鬼ごっこやろう！さいしよはボクが鬼ね」

「おっしや！負けねえぞ」

日も沈みかけ、空が赤くなり出しました。

「ぜえ……ぜえ……」

「はあ……はあ……あー、楽しかった！ほんと忙しいのに、遊んでくれてありがとつ、龍宗さん！」

息を切らしながら、龍宗殿にお礼を言う少年……忠実。

「お、おう！楽しんでくれて何よりだ」

「じゃあ、そろそろボクは帰らないと……」

「ああ、そうだな。送ってやろうか？」

「いや、だいじょうぶ。一人で帰れるよ。じゃあね、龍宗さん！」

彼は手を振り、何度もこちらを振り返りながら陣に向かって走って行った。町に戻る為です。

「おう、じゃあな！……あー、疲れた！」

龍宗殿は忠実を見送ると、そのまま倒れ込んだ。

「ふふふ……龍宗殿、子供相手に随分とお疲れ気味の御様子で」

「からかうなよ昌明。子供って言うけどよ、あいつ、すげえすばしっこいんだよ。ありゃ、大きくなれば、いい戦士になるな」

「そうですね。とは言え、殿が求められているのは即戦力。そして、戦いに身を置くという業を背負うのに、彼はあまりにも小さすぎます。仲間には出来ませんよ」

それに私は戦いによって、あの無垢な少年の可能性を奪わせたくはありません。

「そういう意味で言ったわけじゃねえんだ。ただ……」

「ただ？」

「悲しいよな。そういう才能を持つてる奴が現れるのは世界がそれを必要としているからだ。俺もお前も瀬奈も師匠も光就も、みんな必要とされたからこの世界に生まれてきた。戦うためにさ。……俺たちだって戦い続けていれば死ぬことだってあるかもしれない。たくさんさんの死を見つめる事だって……。でも、それは自分で望んだことだ。戦士になると決めた時から覚悟していたことだ。でもよ、そ

れでも、自分より年下の奴が死んでいくのは耐えられねえよ。だから、忠実には出来れば戦う事のない一生を送ってほしい。でも、あいつのその戦才がそれを邪魔するだろう。それが悲しいんだよ」

「……同感です」

私はそれしか言えなかった。彼の目には見えない涙を見てしまい、耳には聞こえない歎きを聞いてしまったから。

「軍師殿、龍、そろそろ日が沈む。陣に戻りましょう」

瀬奈殿が陣外れのこの場所まで来ました。

「ええ、ここでやるべき事は全て済ませました。戻るとしましょう」
私が今、張り得る畏は全て張りました。これ以上襲撃を受ける確率が最も高いこの場所に留まっている利点はありませんまい。

「ところで……マチス殿の講釈から、何か学べましたか？」

「まあまあですな。なに、一日で習得できる物でもない。気楽に取り組む事にします」

瀬奈殿はそう言った。

「そうですか。分かりました」

やはり、軍略は一回の講釈程度で身につく物ではありませんか。しかし、今はじっくり勉強している時間がありません。……私達だけではもはや、やれる事に限界があるのかもしれないね。

白刃隊……殿がタマムシを目指す理由が、少し見えてきました。

「お二方……早々にこの戦いを終わらせましょう。殿が帰参なされた時には、全てを終え、旅立てる状態にしておくのです！」

「了解！」

こんな所で立ち止まっているわけではありません。

完全に日が沈み、空は夜の闇に支配されました。……今日も来るでしょうね。

「マチス殿、罨が発動した音を聞いたら、すぐに向かつて下さい。今度のは以前の急ごしらえの火罨とは訳が違います。きっと、彼の魔物の化けの皮を剥がせる事でしょう」

「おう、分かった」

「私達はこの陣に残り、万が一に備えています。吉報をお待ちしておりますよ」

「な！俺たちは戦えないのかよ！」

「まあまあ、拠点守備も大事な仕事ですよ」

「むむむ……」

「それに……こちらの方がおそらく、大変だと思えますから」

「？どういう意味だ？」

と、まあこんな感じで作戦会議も終え、後は敵が現れるのを待つだけ……と構えていた次の瞬間。

炎が煌めき、爆発音が陣内に響いた。

「Yes！来やがった！今度こそ、俺達のパワーで奴を痺れさせてやるぜ！」

マチス殿は嬉々として、11番道路に向かった。

「御武運を……」

さて……、

「お二方、準備はよろしいですね」

準備とはもちろん、戦闘の準備の事です。

「ええ！」「おう！」

「それでは……3……」

緊張で手が震えているのを感じます。さっき、あれ程自信満々に必勝を謳っていた癖に……情けないものですね。

「2……」

周りにはあつちで戦いが起きているにも係わらず、静寂に包まれていました。

「1……」

大気にも私達の緊張が伝わっているのか、震えている……いや、

違います。大気が震えているのはそんな理由ではありません。

(0……)

「りゆうのいかり!!」「テレポート!」

大量のワープアウト音と爆発音が近くから聞こえ、そして、急激に遠くなっていた。

(アンチテレポートバリアは!?)

私達のような超能力を扱う者にとって致命的な存在の障壁。それはあの陣に……しっかり張られていました。

私達がテレポートした先は、陣の背後にある高台。

……計算通りでした。敵が夜の闇に紛れてこの陣に奇襲を仕掛けて来る事は。だから、それを逆手に取って、こちらの策とさせて頂きました。龍宗殿が忠実と遊んでいる間、私は陣内に密かに火罨を仕掛け、それに伴って、バリアが張られるようにその発生装置を改造しました。敵がエスパーなら良し。エスパーでなくても舞い上がる炎は十分に脅威。

そして、高台からの逆落として敵を強襲し、殲滅する。これぞ、空城の計ならぬ空陣の計です。

「策は成りました。お二方、追撃に移って下さい」

「よっしゃあ! 暴れるぜ!」

「はっ! 海竜王の力、しかと見届けられよ!」

龍宗殿、瀬奈殿は高台を駆け降り、燃え上がる陣へ突撃しました。

「な、何だ!? 敵の火計か!」

「くっ、仕方がない、もう一回、テレポートして出直すぞ!」

「ま、待て! この陣……アンチテレポートバリアが張られている!」

「ば、馬鹿な……さっきは何事も無くワープアウト出来たのに……」

(ふふふ……混乱しているようですね。しかし、真の恐怖はここからですよ)

私は銅鑼を取り出し、無い腕力を奮い起こして思い切り鳴らしました。

「ジャーン! ジャーン! ジャーン!」

「な、何だこの音は!?!」

「て、敵襲だ!」

ここに来て、龍宗殿と瀬奈殿が名乗りを上げます。

「そこをどきやがれ! 龍宗様のお通りだ!」

「私は海風瀬奈……海竜王、海風瀬奈だ!」

坂を駆け降りた勢いそのまま柵に体当たり。それを壊すが、その勢いは衰える事無く、敵の集団に突っ込む。

「ドラゴンクロー!」

「アクアテール!」

その勢いに乗った、それぞれの最強の物理技は大量の敵を一気に吹っ飛ばしました。

「昌明だ! 昌明の罨だ!」

敵は混乱の坩堝るごぼと化しました。

「に、逃げる! バリアの外に出ればテレポルトが使える!」

そして、三方に敗走を始めました。一方は海へ、もう一方はクチバ方面へ、もう一方は11番道路方面へ。……逃がしてしまった罨を張った意味がありません。何としても生け捕りにしなければ。

「お二方、敵が敗走を始めました。一人として逃がさないで下さい。瀬奈殿は海に逃げようとする敵を、龍宗殿は11番道路方面に逃げようとする敵をそれぞれ追撃して下さい」

私はテレパシーでそう伝えた。二人はすぐに理解し、追撃に移りました。さて、私はクチバ方面へ逃げる敵を討ちましようか。

「テレポルト!」

この高台はアンチテレポルトバリアの範囲外。よって、私はテレポルトを使えます。

そして、私は陣のクチバ方面の出口へ移動した。そこでは、今まさに敵が陣の外に出ようとしていた。

「逃がしませんよ。サイケこうせん!」

それに念力の光線を照射する。これには幻惑効果があり、まともには食らえば精神は錯乱状態に陥り、脳はまともな判断が出来なくな

ります。

「さあ、仕上げと参りましょう」

鉄扇を取り出し、それに念力を込める。私達フーディン族は物に念力を込める事によって、技の威力を倍増させることが出来ます。多くの場合、それはスプーンという事になります。しかし、私は鉄扇を使います。なぜなら、スプーンでは不可能な念力の扱い方が出来るからです。

「五分割サイケこうせん！」

光線が五つに別れて打たれる。威力も五つに別れることになりませんが、今回のような敵を幻惑させる事だけが目的の場合は頗る有効です。

「貴方に逃げ場はありません。醜態を晒したくなければ、大人しく縛に就くことをお勧め致します」

「……こちらも精鋭のエスパー萌えもんだ。一合も剣戟を交えずに降伏などできるか！所詮、相手は一人。皆、これは勝てる戦いだ！」
「甘いですね。貴方はもう袋の鼠。如何に足掻こうと私達から逃げおおせる事さえ叶いません。それなのに貴方が私達に勝てるはずがありません。十分割サイケこうせん！」

光線を十本放つ。

「ひかりのかべ！」

しかし、特殊技を防ぐ壁を張られてしまい通用しません。

「サイケこうせん！」

今度は一本に集束して放つ。それはひかりのかべを破壊しました。
「かなしばり！十分割サイケこうせん！」

そのまま壁を張られないように敵を封じ、サイケこうせんを当てる。

「隙あり！サイコキネシス！」

しかし、次のサイケこうせんを放つ為の念力を溜めている隙を突かれてしまう。

「ひかりのかべ！」

念力を溜めるのを中止し、壁を張る。

「今だ！バリアの外へ！」

「させません、サイケこうせん！」

「一斉にサイコキネシスを放て！壁を打ち破る！」

「新たな壁を作っておきましょう。ひかりのかべ！」

消耗戦に陥ってしまふ。そうになると、不利なのは当然こちら。

「むむむ……」

私は確実に疲弊していました。

「サイコキネシス！」

「ひかりのかべ！……っ！出ない……！？」

ひかりのかべ一つを出すことさえ敵わない程に。

絶体絶命の危機に陥った私。しかしその時、迫り来るサイコキネシスは突如爆発した。

「御無事ですか、軍師殿！」

絶体絶命の危機に陥った私を救ったのは、瀬奈殿でした。

「おお、九死に一生を得ましたよ。救援、感謝致します」

そして、次に……、

「おらおらおらあ！」

龍宗殿が次々と敵を吹き飛ばし、気絶させながらこちらに向かって来た。

「くっ、なんて強さ……こいつらの方が余程化け物だ！」

「へっ、化け物つかいにそう言ってもらえて、光荣だぜ！」

「では、浅井光就が擁する化け物の力の片鱗を見せてやるうじやないか。龍！りゅうのいかりの準備だ！」

「おう、あれだな！」

「行くぞ！私たちの怒り、思い知れ！」

「「Wりゅうのいかり！！」」

龍宗殿と瀬奈殿が放った紺色の炎がぶつかり、大爆発を起こした。その爆発は残っていた敵を残らず巻き込み、倒した。

「お見事でございます。ははは、やはり慣れない事はするものでは

ありませんね。後もう少しお二方の御到着が遅れていたら、やられてましたよ」

必要性を感じて自分で戦ってみました。やはり、武力を振るうのは苦手です。

「さて……、お二方、まだもう一仕事があります」

「おう！」

二人は言わずとも分かっているようです。

「では、マチス殿の下へ参りましょう。テレポート！」

私達はテレポートしました。私でもテレポート一回分の力くらいはすぐに捻出出来ます。

「……着きました」

ここは11番道路。そこでマチス殿達は例の魔物相手に奮戦しており、押し切っていました。

「かなり押していますね。よし、今ならば九分九厘成功するはず。お二方、今こそ、彼の魔物の化けの皮を剥く好機です！」

了解！と二人はすぐさま、魔物いる方向に転進した。

「まずは私だな。たつまき！」

そして、瀬奈殿が最初に魔物の側面を突いて、たつまきを繰り出す。魔物の砂で出来た体が崩されていく。

「龍、この竜巻に乗れ！上からの攻撃は任せたぞ！」

「おう！任せとけ！」

次に、龍宗殿が竜巻を使って上空へ飛び上がった。

「更に激しく巻き上がれ、竜巻よ！」

「俺達も負けてられねえ！一斉放電だ！」

「イエッサー！」

竜巻と地上からの放電が次々と砂を削っていく。その内に、砂の中からそれ以外の何かが見えたのを龍宗殿は見過ごしませんでした。「あれがこの化け物の正体か！よっしゃあ！俺様の正義の爪、その身に刻みやがれ！ドラゴンクロー……！」

それに目掛けて攻撃を繰り出す。

「このまま地上に引きずり出してやるぜ！」
そして、それを掴んだまま、急降下する。

(今度は邪魔させません……発動しなさい)

辺り一帯にアンチテレポルトバリアが展開される。これで遠くからの念力干渉は不可能です。

「おおおおおおらあああつー！」

龍宗殿は砂の魔物から引きずり出したそれを思い切り地面に叩き付けた。それには砂に覆われた硬い殻があったが、この高低差と龍宗殿の怪力の前に脆くも崩れ去った。

「お見事、よくやってくれました」

私は思わず、彼を称賛した。

「へっ、どうって事もねえさ。さてさて、あの魔物の正体はどんな奴なのかな……！？こ、こいつは……！」

遂に頭わになった、クチバを騒がした魔物の正体。それを見た龍宗殿は驚愕の態を隠しきれなかった。

「何をそんなに驚かれて……！なるほど……これには驚かれても無理はありますまい」

その魔物の正体を、私達は知っている。いや、私に限っては昔から知っていた。……やっと思い出しました。

「忠興殿……貴方はもうこの世の人ではないのですね……」

その魔物の正体は北条忠実。私の歳離れた親友、北条忠興の末息子、北条忠実だった。

第二十六話に続く

第二十五話後編：昌明、知を以って敵を討つの事（昌明の畏）（後書き）

「美空殿……！私は死ぬ訳には行かない。覚悟しろ！」

「死ねえ！海風瀬奈！」

「りゅうのいかり！！」

「ブレイブバード！！」

両者の技が激突する。だが、黒美空は普通の美空を遥かに凌駕する力の持ち主。勝敗は初めから決まっていた。

「くっ……くっ……！！」

しかし、それでも、瀬奈は最後まで踏ん張っていた。

「目障りな……ブレイブバード全開！」

「な、なんて力だ……！！」

瀬奈が黒美空の圧倒的な力を抑えられなくなるのも時間の問題だった。しかし、黒美空がブレイブバードに全力で使う事によって、彼女にある弊害が生じた。

「っ！？な、何故、ブレイブバードの勢いが落ちている！？ま、まさか……！！」

「今だ！喰らえ、りゅうのいかり！」

黒美空の攻撃が途端に衰えたのを見て、瀬奈は一気に勝負に出た。残っている体力全てをりゅうのいかりに注ぎ込み、放つ。

「お、おのれええええっ！！」

黒美空は炎に飲み込まれ、大爆発を喰らった。彼女の身体が地面に叩き付けられる。

「み、美空殿……！！」

瀬奈には起き上がる体力が無い。だが、地面を這い、倒れている仲間の下に行く。

「美空殿！しっかりして下さい！美空殿！」

「う……うん……」

呼び掛けられ、目を開く。彼女の瞳には光が宿っている普通ので

すっぴんぐの美空さんである。

「せ、瀬奈さん……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……！」

意識を取り戻した美空さんは今度は狂ったように謝罪の言葉を繰り返した。

「美空殿が謝る必要なんてありません！ど、どうしてこんな事に……」

瀬奈は困惑する。何が、美空さんをあそこまで残忍にしたのか？という疑問が、まるで霧のように深く彼女の思考を覆う。

そして、ふと、思い付いてしまう。

「美空殿……申し訳ございませんでした」

瀬奈はそれだけを言うつと自分の首に剣をあてがった。

「私の体、如何様にもお使い下さいませ」

「……えっ？はっ！せ、瀬奈さんダメ……！」

そして、その剣を思いつ切り引いた。死ぬと思った。だが……、

「……ん？」
何かがおかしい。さっきまで必死の形相で瀬奈を止めようとした美空さんは何かを堪えるように顔を引きつらせている。

「せ、瀬奈さん……け、剣をよく見てみて下さいです……ふふっ」「ん？」

瀬奈は持っている剣を見た。それはよく見ると銀色に塗ってあるだけのプラスチック製の剣だった。こんなのだんなに頑張ったって斬れる訳が無い。

「こ、これはどういう事ですか、美空殿？」

「ふっ……ふふふふ、あはははははっ！」

突然笑い出した美空さん。瀬奈は状況を把握できない。

「あはははは、ごめんなさい瀬奈さん。ドッキリ大成功なのですっドッキリ大成功と書かれた看板を掲げ、笑いながら言った。

「は？ド、ドッキリ……とは？どこら辺までが？」

「どこら辺も何も全部ですよ。この小劇場の最初から最後まで全部

嘘です」

「で、では、あのデスウィングも芝居！？そうだ、書かれていないが、あの大勢のファンクラブ会員は！？」

「全部嘘ですっ」

「……うにゃあああああああ！！」

瀬奈はその時のライブの事を思い出した。ファンの為だからと思っ
てやっていた、慣れないアイドル活動は全て虚しい事だと分かつ
た今、それは単に恥ずかしいだけの思い出となってしまった。

「うわあああああああ！！何が超時空ツンデレラだ！何がセナッ
だ！うわあああああああ！痛い痛い痛い痛い痛い！！」

瀬奈は余りの恥ずかしさに、それから五日間布団に包まりながら
羞恥心と戦う事になったそうなの……。

後書き小劇場第一弾集結。

第二弾はやるかさえ未定です。

次話投稿は六月六日という事で……。

第二十六話：新たな戦いへ……（満を持しての登場ですよ）（前書き）

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

今話からあらずじに似た物を付けてみるんだじえ！

カントー西方面に遠征した光就の留守を任された軍師、昌明。

彼は砂塵の魔物を捕らえる必勝の策を講じた。だが、その策は必ずしも魔物だけに向けられたものでは無かった。

昌明らはそれらの策を以つて陣を急襲した敵を破り、魔物の正体を暴く事に成功した。

だが、その正体に一同は驚きを禁じ得なかった。

港町を騒がせた魔物の正体。それは龍宗達を慕って懐いていた少年。北条忠実だった。

第二十六話：新たな戦いへ……（満を持しての登場ですよ）

「奴にやられた傷を癒す為にこの町に来た。寂れた田舎町だけど、静かに休むには最適の場所。そう思っていたのだが、それは大きな勘違いだった。」

「我々はロケット団。シオンのトレーナー、萌えもん達よ。武器を捨て、降伏するならよし、あくまで戦うと言うのなら、我々の全戦力を以って殲滅する」

ロケット団がこの町を襲撃して来たのだ。むろん、萌えもんタワーや魂の家といった萌えもんの供養施設であり、人と萌えもんの共生の象徴である偉大な建築物を抱くこのシオンが降伏の道など歩むはずがなく、義勇兵を募り、戦った。

しかし、多勢に無勢、ロケット団の圧倒的物量作戦の前に義勇軍は戦いを重ねる毎に刻々と憂うべき状況になってきた。

そして、今日もロケット団は攻めてきた。義勇軍は何か持ちこたえたが、もう兵達は疲れ果てて、満足に戦えない状態になってしまった。

「次の襲撃で間違いなくこの町は落ちる」

そう判断した私は夜闇に紛れて、シオンを去る事にした。丁度、傷も完治したし、これ以上ここに留まる利点は無い。

私は荷物をまとめ、12番道路の栈橋を歩き出した。

「お待ち下さい！」

その時、突然、栈橋の向こうから私を呼び止める声が発せられた。しかし、私はそれを無視して歩く。戦いに巻き込まれるなどごめんだ。

「貴女は相当な手練と見ました。どうか、我ら義勇軍に力を貸して下さいませんか！」

「……………」

私は沈黙を守った。

「お願いします！話だけでもお聞き願えないでしょうか？」

「……………」

「……………」

諦めたのか、私を引き止める声は消えた。と、思ったら、突然目の前に土下座している一人の鳥萌えもん……オンドリルが現れた。

ツインテールの茶髪とあどけなさの残る顔立ちの少女。しかし、彼女が着ているのはオシャレな洋服ではなく、その容姿には全く似つかわしくない、無骨な鎧だった。

「お願いします……私達は負ける訳には行かないのです……」
彼女は私に泣き付いて言った。

「……残念だけど、私にはやらなければならぬ事があるのよ。こんな所で捨てる命を、私は持ち合わせていない。諦めることね」
「……そうですか」

私が声を出して断ると意外にもあっさりと彼女は折れた。

「すいませんでした。お引き止めさせて頂いて……でも、もう良いのです。私達の命運は尽きました。しかし、己の信念は貫くつもりです」

「信念を貫くって、何をやる気よ……？」

私は彼女の悲哀に満ちながらも、どこか達観したかのような瞳を見つめて言った。

「敵に突撃し、一人でも多くの敵を道連れにして、一人でも多くの敵に私の信念を見せ付けてやるのです」

臆面も無く、そう言い放った。

「それは死に行く……という事？」

「はい、その通りです」

私は信じられなかった。見た目でしか判断していないから、正確にそうとは言い難いが、自分より年下の娘がその様な事を言うとは。

「貴女……何故、私に声を掛けたの？」

「それは……分かりません。ただ、感じたのです。貴女こそが義勇軍を救ってくれるお方だと」

彼女はそう言った。期待しすぎだと思ったが、おそらく、今の義勇軍は藁にもすがる思いなのだろう。その藁がこの私。……面白くない。面白くないわね。

「貴女、名前は何て言うのかしら？」

「は、はい。私は寺沢麟てらさわりんと申します」

「なるほど。……麟、貴女のような子供が、自分の信念に殉じようなんて十年早い。そんな事、この私、東条院玲奈が許さないのだから私にも真の海竜王を志す者としての誇りがある。どうして、自分より年の若い者が死に急いでいるのを見て、それを放って置けるかしら。いや、放って置けないわ。」

「麟、約束しなさい。二度と命を粗末にしないと。そうすれば、この戦い、私は参加してあげてもよろしくてよ」

「えっ……は、はい！分かりました！約束します。もう二度と命は粗末にしません！」

「素直で結構だわ。じゃあ麟、この荷物を持ちなさい。シオンに戻るわよ」

「はい！」

やれやれ、我ながら随分と小恥ずかしい事を言ったものね。しかし、この麟という娘、なかなか見所あるわ。……彼女を得る為なら多少の面倒くらは引き受けてあげても損は無いかもしれないわね。そして、この寺沢麟という少女は玲奈をよく助け、後に彼女の軍師として八面六臂の活躍をする事になるが、それはまた別の話である。

「何だその言い草は！」

「私は本当の事を言っただけですわ」

玲奈は義勇軍の大将と口論している。ここは義勇軍作戦本部。こ

の場所が出来た時は今の五倍は将が居たが、傷を負って戦闘不能になったり、戦意を失ったり、ロケット団に帰順したりとどんどん減っていき、最終的には、麟や玲奈も含めて三人の将しか集まらなくなつた。

当初、10000人も集まつた義勇兵も今や1000人になつてしまつた。それに対して敵は25000人も兵力を抱え、今にもこちらを飲み込まんばかりの勢いもある。

しかし、玲奈はこれでもまだ勝ち目はあると言つのだ。

「ならば、その根拠を述べてもらおうじゃないか！」

「残念ながら、今は言えませんわ。何処で敵が聞き耳を立てているか分かりませんから」

「またそれか。本当はそんな策なんて思い付いていないんじゃないのか？」

話は平行線を辿つてしまい、解決の糸口が見えない。

そこで麟は玲奈に耳打ちする。

「玲奈様。ここは話してしまつた方が良いのではないのでしょうか。」

このまま争つていても何も始まりませんよ」

「それは一理あるけど、多分、あの様子じゃ話しても信じてくれそうにないわ。私の策は常道を歩くものじゃないから」

そう言い、玲奈は麟の進言をはねつけた。

「麟、お前も何でこんな変な奴を連れて来たんだ。軍略家はお前だけで十分だろ」

「いや、こんな状況普通にやっていては絶対打破出来ません。でも、私は奇策なんて思いつけません」

麟の軍略は良く言えば慎重。悪く言えば地味。勝つべくして勝つ。勝てない戦はするな信条なのだ。

「しかし、この方は違います。既にこの状況を脱し得る奇策を思い付いておいです！」

「ちょ……おま……」

突然理不尽に話を振られた玲奈。こうなつたら話さざるを得ない。

「ほう、じゃあ、聞かせてもらおうじゃないか。その奇策とやらをな」

「くっ、う、恨むわよ〜麟！」

結局、全部話してしまった。

「なるほど……」

「ふん、こうなったら意地でもこちらの言うことを聞いてもらうわ！」

玲奈は杖を構える。だが……、

「いや、素晴らしい！お見それいたしましたよ。確かに、敵はこちらの数十倍。普通にやっても勝てないのに、こちらが思い浮かぶ奇策など、敵陣特攻が関の山。あなたは凄い方だ！」

今までの猜疑心は何処に行ったのか、義勇軍の大將は玲奈に称賛の言葉を浴びせた。

「あ、あらそう……。ま、まあ、当然ね！オーホッホッホッ！」

「……………」

玲奈は高笑いをしたが、麟は押し黙っていた。だが、玲奈につねられ、彼女も愛想笑いをした。

作戦会議が終わり、それぞれの陣へ戻った三人。ここは義勇軍の大將の陣。

「さて、日が昇るまでにこれをあっちに届けなければならん……」

彼は夜も明けようとしているこの時間に何かを届ける為、シオンを出ようとした。

「あら、これはこれは。どちらにお出ですか？」

すかさず、玲奈と麟は彼に近付き、挟み打ちにした。待ちわびていたかのように。

「む、手紙を届けようと思ってな」

「ほう、誰にですか？」

「そんな事まで君達に言わなければならぬのかい？」

「ふふふ、当たり前でしょう。だって……」

玲奈は素早く彼の手から手紙を奪い取り開いた。

「私がさつき話した策が書いてあるんですもの。しっかりと説明させて頂かないと……」

「変だと思っていました。今まで、私達の策が良いように見破られて……それも全て貴方の仕業だったんですね！」

「ち、違う！俺は仲間には知らせようと……」

「仲間って向かいのロケット団の事ですか？そうですか……」

「違う！俺は裏切っただけ……」

「まあ、貴方が裏切り者であろうが無かるうが、私達には関係の無い話ですわ。私が麟に選ばれてしまった以上、もう貴方はこの義勇軍には要らない存在。故に、貴方には消えてもらっわ。ふふふ……それを簡単に正当化出来る理由を作ってくれて感謝するわ」

玲奈は蔑みの目を向け、言った。

「り、麟！貴様……！始めからそのつもりでこいつを連れて来たか！貴様の方こそ裏切り者ではないか！」

「貴方がそんな事を言う資格はありません。それに、私達がやっているのは卑しい裏切りではなく、天意に則った尊い天誅なのです」

麟は穏やかにそう言った後、鋭く目を光らせ、

「もう言い残す事はありませんよね。では、死んでもらいます。つばめがえし……」

その憐れな裏切り者を斬ろうとした。しかし、玲奈がそれを抑えた。

「待ちなさい、麟。正直、この手紙だけじゃ裏切り者と断定する事は難しいわ。私達が勝手に殺してそれに対する同意が得られなければそれまでよ。それよりももっと確実な方法があるわ」

「……なるほど、それは得策です。ふふふ、私とした事が、冷静さを欠いていたようですね」

「よく言っわ。試していたんでしょう？」

「玲奈様のご想像にお任せします。では、早速その通りに致しましょう。ふきとばし……」

麟は向き直り、その裏切り者を谷の向こう側、乃ち、ロケット団の方へ吹き飛ばした。

「奴の持ち物はそのままにしておくべきね。あたかも敵に降伏し、取る物もとりあえずな状態で逐電したかのように見せかけるのよ」

「はい！」

麟は頷いた。そして、自分達の陣に戻る帰り道で突然、彼女は悲嘆に暮れた。

「……しかし、たとえ、どんな理由があろうと、主を裏切ったのは事実です。私は許されざる事をしてしまいました……」

麟はあの裏切り者を排除しない限り、自分達の勝利は無いと確信していたが、それでも本来は義理を重んじる彼女からしてみれば、この行為に及んだ自分はその信念を曲げ、敵に媚びへつらう輩となんら変わらない。

「こんな業の深い罪を犯さなければならなくなったのは、私の不覚。今更、それを悔やんでも罪を重ねるだけ。それなのに……」

必要性は前から感じていた。しかし、その行為の非道さと確実に必要ではない事を理由に今日まで先伸ばしにした結果、自分だけが背負うべきだった、裏切り者の業を玲奈にも背負わせてしまった。と、麟は悔やんでも悔やみきれない思いを胸に抱いていた。

「大丈夫よ。貴女が信念を曲げてでも仕えるに相応しい主に、私になつてあげるわ」

玲奈は麟の肩を抱き寄せて、頭を撫でながら言った。

「ありがとうございます、玲奈様……」

麟は笑って言った。

その時、ちょうど日が昇り、二人を照らした。

「麟、嘆き、悔やんでる時間が惜しくてよ。早速、ロケット団の侵攻を防ぐ作戦を考えなきゃ。敵は今日、絶対総攻撃をかけてくる」

「……はい！」

斯くして、後に、世に衝撃を与え、玲奈がロケット団討伐軍の二大総大将の一人になるきっかけとなった、シオン防衛戦。その火蓋

が今、切って落とされたのだった。

（今回の遠征は何だったのでしょうか。確かに、久し振りに紅羽に会えて嬉しかったですけど、結局、彼女は光就さんの誘いを断った。あたしは人の枠にはまるより気楽に生きる方が良いと言って。……わたしは何で、あっちへ戻ったのか、その理由が全く分からない。光就さんは何故か満足そうだし……）

美空さんは洞窟の中で困惑していた。最近の光就の行動は謎が多いからだ。

おそらく、彼の事だから何か考えがあって行動しているのだろうが、美空さんは自分には何も教えてくれない事に戸惑いを感じていた。

「光就さん……」

「何だ」

「今回の遠征の成果、光就さんは満足していますか？」

「まあ、欲を出し過ぎても足を掬われる。こんな物だ」

「そうですね……」

成果とは光就が美羽から貰ったあの資料の事である。

「あ……」

考え込んでいる内に上へと繋がるはしごに着いた。

「さて、あの三人の方はどうかかな」

光就達はデイグダの穴を抜けた。すると、そこでは昌明が待ち受けていた。

「我らがこの時間に来ることが分かっていたか。流石だな」

「まあ、それもあります。ちょっと色々とありまして、拠点を手バに移しているのです」

昌明はそう語った。

「なるほど。まあ、落ち着ける場所で聞こうではないか。ああ、そ

うだ。お主に頼んだ事は……」

「万事抜かりありません」

「ふっ、流石はハナダの鬼才。私が居ない少しの間に私がやるうとしていたことを、全てやってのけるとは……見事だ」

「勿体無きお言葉と存じます」

光就の労いの言葉に、昌明は感謝し、会釈した。

「さあ、こちらへ……殿の英断を仰ぎたい問題がございます」

昌明は街へと歩き出した。光就達も彼に付いていく。

そして、到着したのは、クチバジム寮の一室。そこには龍宗や瀬奈の他に、光就達が初めて出会う者が居た。

「お主は……何者だ？」

「えへへ、ボクはね、北条忠実って言うんだ。以後よろしく」

「忠実、このお方は私の主です。そのような砕けた態度で接するのは好ましい事とは言えませぬ……」

忠実と名乗る少年と、それを窺^{たしな}める昌明。

「昌明さん、この子は一体……？」

「忠実は美空殿、貴女が言っていた砂塵の魔物の正体であり、私の親友です」

「ええっ！！昌明さんの親友ってこんなシヨタだったんですか！」

美空さんは驚愕の態を見せた。

「まあ、正確にはその親友の息子ですが。色々と事情がありましてね……」

そこで昌明は話を止めると、忠実に話し掛ける。

「忠実、私はちよつとこの人達とお話があります。貴方は外で龍宗殿と瀬奈殿に遊んでもらっていて下さい」

「うん！分かったよ、昌兄！じゃあ、行こうよ！瀬奈姉！龍兄！」

「ああ！」「おう！」

彼らは外に出ていった。

「昌兄？お前達、我らが居ない間、一体何が起きたのだ？」

「それは追って、説明致します。まず、今までの事について語らせ

ていただきました。」

そして、昌明は砂塵の魔物の事を語った。

「なるほどな。では、彼の父親……北条忠興という男は今何処に居るのだ？」

「忠興殿は……この世の人ではありません。言い訳をする気はありませんが、あの頃……二年前は父が亡くなって大変な時でしたから、彼が家族ごと暗殺されていたなど知る由もありませんでした」

「ああ、あの事件か。確か、あの後すぐにロケット団が復活宣言をして、事件の犯人はロケット団である事が確定的になったと言っていたな」

そして、その一ヶ月後にこの残月を母上から授かったのだよな……と回想する光就。

「二年前、そんな事件があったんですか！？わたし知りませんよ……」

「確か、新年早々物騒な話だ……とか言ってた気がするからおそらく、一月くらい……お主がまだジョウトで仙人みたいに浮世から離れていた時だろう」

「話を続けましょう。忠実はそんな中、何とか逃げる事が出来、ほとぼりが冷めるまで潜んでいたそうです。そして、その後、どういう過程を経てそうなったのかは分かりませんが、私達の前に砂塵の魔物として立ちはだかった……という訳です」

「なるほどな……では、次にこの状況の理由を聞こうか」

「はい。そして、私達は彼との戦いに勝利しました。ですが、彼には魔物の時の記憶がありませんでした。何故なら、彼は何者かの手によって、夜になると魔物になるように仕組まれていたのです。それに、私達の陣を奇襲してきた敵はロケット団の手の者。しかも、特殊部隊五幹部の一人、гентウの直参の部隊でした」

「гентウだと？」

光就はニビ地下基地での事を思い出した。

「超黒服の人ですね。あの時はあっさり負けてしまいましたからね」

え。いつか、仕返ししたいと思ってたですう」

「龍宗殿もそうおっしゃってました。しかし、美空殿を破るとは敵は相当な手練ですな」

昌明は二ビの時には居なかったので、гентウの事は知らない。

「さて、忠実にロケット団の影がちらついている以上、彼を一人に出来ません。それに、年端も行かない少年がこんな境遇に置かれてある事が不憫で仕方なかったのです。だから、私達が死んだ忠興達の代わりに彼の家族となつてあげようと思ひまして……殿、どうか忠実を私達の仲間に加える事を許可して下さい。私達はいつまでもここに立ち止まっているわけにはいきません。かと言って彼を捨て置く事は出来ません。これは、死に行く友に何の助けも出来なかった、私のせめてもの罪滅ぼし……どうかお許し下され……！」

昌明は頭を下げた。

「ふん、そんなの頭を下げるまでも無い。許可する。いくら勝手に引き出されたとはいえ、お前達を苦しめた敵だ。きつと心強い臣下となつてくれるだろう」

だが、光就はすんなりと了承する。

「ありがたき幸せに存じます」

「また、賑やかになるですう。善哉善哉なのですう」

美空さんはいつも通りの暢気な表情でそう言った。

「ふっ、これで二年の業を持つ者は六人……後一人……だな」

「ん？光就さん、どうしたんですか？」

「いや、なんでも無い。……昌明、美空、八ナダに戻るぞ。新たな旅に出る為にな」

「御意」

「了解ですう」

光就達にもまた、地に付けた翼を羽ばたかせる時が来たのだ。

……英傑が集まる理由は単純だ。英傑達は人の許されざる業に向かつて集まって来る。

忠実の家族を殺し、彼を恐るべき魔物へと変えたロケット団。死者を弔う町、シオントウンに侵攻し、それを冒涇せんとするロケット団。

カントーを、いや、世界を征服せんと私軍を興し、戦乱を引き起こしたロケット団。

どれも許されざる業である。

だが、ロケット団の首領、サカキはそれを笑いながら見物していた。あたかも、英傑達の集合を望んでいるかのよう。

許されざる業。それはもしかしたら、英傑達の存在、そのものなのかもしれない……。

第二十七話に続く

第二十六話：新たな戦いへ……（満を持しての登場ですよ）（後書き）

玲奈「うん？ここは何処かしら？」

麟「玲奈様、ここは後書きという場所にございます。次話投稿予定日と次回予告を言いさえすれば、後はなんでも言える便利なコーナ―です」

玲奈「あら、そう。確かにそれは便利ね。では……読者の皆様、私の事、覚えてたかしら？確か、十二話振りよね。ふふふ、私はそれから耐えて耐えて耐えてきたわ。そして、ようやく私にも風が吹いてきたわ。麟という可愛いげのある配下も出来た事だし、この小説の主人公はあんな厨二病じゃなくて、清く美しく気高いこの私、東条院玲奈であることを証明する時が来たのね！さあ、心有る者よ、私を崇め……」

麟「喋り過ぎですよ、玲奈様。いくら自由に喋って良いからって、程度と言うものがあると思いますよ」

玲奈「む、むう、わ、分かったよ。じゃあ、次回予告でもしようかしら。これなら良いわよね。……オホン、遂にハナダを旅立った光就一行。そんな彼らを待ち受けるのは巨大な岩山だった……。ふふふ、次話投稿は六月十三日ですよ。ふふふ……」

麟「随分と楽しそうですね、玲奈様。もしかして、もうずっと出れないと思っただけど、出番が来て、その嬉しさを隠しきれないんじゃない……」

玲奈「そ、そんな事ある訳無いじゃない！」

麟「噛んでますよ。玲奈様。ふふっ、かわいいなあ、玲奈様」

玲奈「うう……」

第二十七話：玲奈、専兵で以って敵を圧倒するの事（驚異の水鉄砲三段撃ち）

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

前話までのあらすじ。

ついに、帰還した光就と美空さん。そんな二人を様々な出来事が混乱させる。しかし、北条忠実という新たな仲間の登場に、二人は先ずの安堵を覚えた。

その一方、カントー東端の町、シオンは風雲急を告げていた。

シオンがロケット団の猛攻に晒され、ついに陥落という時、一人の英傑が現れる。かつて、光就と戦い、敗れたが、彼と互角に戦った、激流の海竜王、東条院玲奈である。

玲奈は義勇軍の軍師、オンドリルの麟と共に義勇軍の統率権を奪還し、いよいよ本格的にロケット団と一戦交えようとしていた……。

第二十七話：玲奈、専兵で以つて敵を圧倒するの事（驚異の水鉄砲三段撃ち）

「滞在中、誠にお世話になり申した。されど、その感謝を言葉で以つて伝えること無く、かような拙文のみにて表す非礼、平にご容赦下され。」

しかし、我々にはその非礼を犯してでも、早朝の旅立ちを敢行した理由が御座いました。今、この世は風雲急を告げております。ロケット団が台頭し、その力に屈した者は数知れず。それは貴女方も例外ではありません。最悪の事態というものに常日頃から向かい合つて下され。

その為に、僭越せんえつながら、この光就が愚策を披露致しましょうぞ。ハナダとヤマブキの間に防塁を築いて下され。その理由は、万が一この街が落ちてしまつても、容易に首都のヤマブキまで攻め寄せられぬようにする為に御座います。昨今のロケット団の権勢には憂うべきものがあります。その勢いはまさに破竹の勢い。それは氾濫した河川の如し。あらゆる物を流し、飲み込んでしまうでしょう。しかし、貴女が防塁を作ることによって、それが奴らの勢いを止める堤防となり得ましょうぞ。

全ては貴女の掌の中で御座います。貴女が要らないと思われたら私などの愚策に色目を遣う事無く、棄却して下され。しかし、私は奴らと戦うこと二度。そして、その二つとも決して楽な戦いではありませんでした。……いや、むしろ、我々が一人と欠けずに今まで生きていられた事自体、奇跡……この事実だけは心の隅にお留め下され」

この手紙は光就達がハナダに帰ってきた次の日の早朝に、彼らが借りていた寮の一室にその鍵と共に置かれていた物である。

上記はその内容の一部（他にも光就は沢山の献策をしているが、これ以外は臨戦態勢を整えるとか、ありきたりな物ばかりなので省略した）であるが、如何に光就が慣れない敬語を使いまくって、力

スミ達にロケット団への危機感を持つようと仕向けているかがよく分かる。

更に、これと同じような内容の手紙をマチスにも送っている。さて、この手紙を受け取った二人は何を思ったのだろうか。

結果としては、その二人とも光就の献策に従い、防塁を築き、戦いに備えた。そして、後にヤマブキが落ちた時、その防塁がロケット団の勢いを削ぎ、両都市共、追いつ返す事に成功した。

しかし、二人には、単なる世迷言と見なして無視するという選択肢もあつたはずだ。それなのに何故、わざわざ、光就の指図を受けたのだろうか。

おそらく、この手紙が一ヶ月……いや、一週間前に書かれたものだったなら、歯牙にもかけられなかった事だろう。

私がそうだと確信して言える根拠。それは最近になって物騒な噂が立ったからだ。

シオン、ロケット団の急襲により、陥落の危機。

この報を受けて、街という街がロケット団の脅威をようやく感じ始めた。

シオンは北を岩山に囲まれ、東と南は海に守られている要害の地だった。その西にはヤマブキがあり、よもや落ちる事は無いだろうと思われており、だからこそ、元々、静かな場所だったという事もあり、大規模な供養施設はここに建てられてあるのだ。

しかし、その安全神話は脆くも崩れ去ってしまった。次は自分達の番……誰もがそう思った。

反ロケット団の芽を育て、やがて一つの巨大な軍団にするという、光就の構想。それは彼の想像を遥かに超える速さで実現に向かっていたのだった。

光就達の行軍は神速を窮めた。

近道になり得るであろう道は必ず通る。たとえ、そこがきつい山道であつたとしても、彼らはお構い無しである。それどころか、どんな道であつても、彼らは何も無い平原を走るが如き速さで走っていた。まるで、今まで留まっていた時間を取り戻すかの様に。

しかし、こんな芸当が出来るのは光就達が並外れた運動能力と体力の持ち主だからだ。

ただ、そんな化け物並の体力を持つ光就軍団の中にも平凡な体力の持ち主は居た。竹中昌明だ。

「も、もう駄目です……私はここで脱落させて頂きましょう」

六つの山と七つの谷と五つの川を越えた辺りで昌明は遂に、膝を屈した。よく頑張ったものである。

「昌明よ、もう限界か」

光就は言った。そして、辺りを見渡す。

「ふむ、ここらが潮時か。総員、行軍を停止せよ。間道を通るのはもう良いだろう」

全く疲れていない様子でそう言う光就を見て、美空さんは驚いて息を切らせながらこう言った。

「み、光就さんは疲れてないんですか……？わたしも、実はもう限界です……」

「ウー、疲れたよ！ボク、もう走りたくないよ！」

「……私も正直な所、もう走りたくない。内臓が口から飛び出そうだ……」

「俺はまだまだ行ける……いや、やつぱ無理だぜ……」

皆、口々にそう言う。どうやら、化け物は一人だけだったようだ。「情けない……。まあ、昼も夜も敵に追いかけ回され、まともに寝ることも出来ずに逃げ続けた、あのジャングルを経験した私と比べるのは、少々酷という事が。ククク……」

光就の脳裏に様々な幼少期のトラウマが浮かび上がっては消えていく。

「凄まじい経験ですね……（ジャングル……大きな肉食植物に……」

ブルブル)」

美空さんは恐ろしい想像をし、勝手に震えていた。

「まあ、そんな事はどうでも良い。お主達はそこで休んでおれ。私が辺りを調べてこよう」

光就はそう言い、再び間道を進み出した。

「やれやれ……本来ならば、人間よりも遥かに体力が優れている私達なのに、それがこの様ですからね……。本当に、殿は常識はずれな方ですなあ」

昌明は地べたに座り込んで言った。汚れるとかそんな事を言っていられる余裕は無いという事なのか。

「軍師殿、相当お疲れな様子で。私がおぶりましようか？」

「止めて下さいよ。こんな私でも一応、自尊心という物はあるのですから……まあ、いつ折れるか分かりませんがね」

「こやつめ、ハハハハ！」

瀬奈と昌明と龍宗が互いに言い合う。

「うふふ……皆さん、仲が良いのです。やはり、一緒に行動していたのが効いたみたいですね」

美空さんは笑いながら言った。

（しかし……光就さんはどういう基準で仲間を集めてるんでしょうか？）

美空さんはふと、そんな疑問を持った。確かに、光就の仲間選びのセンスはよく分からない。おそらく、基本は才能がある事が前提なのだろうが、どうもそれだけじゃないようだ。彼女は思っていた。（いくら才能があるからって、こんな子供を仲間にするとは……）

美空さんは忠実を見て、思った。

（でも、確かに、あの時の昌明さんの勢いは、もし、仲間に入れてくれないなら私も貴方の下を去りますっていう感じでしたからねえ。仕方ないと言っては仕方なかったのですが……このようないいけな子供を戦火に巻き込まれる運命に投げ込むのは、抵抗があるです……）

無論、こんな事誰もが思っているだろう。ただ、それでも自分達と一緒に居た方が危なくないと昌明達が判断したのだから、彼が今ここにいるのだろうとは思う。しかし、だからと言ってその違和感をすつと拭える程、美空さんは気持ちの切り替えが得意ではない。

(そういえばあの時、光就さん、なにか言ってたような。二年の業……だっけ？何だろう、二年の業って？)

「美空よ」

「は、はいっ!？」

突然話し掛けられ、びっくりする美空さん。

「また何か考え込んでいたな。ほら、休憩はもう済んだだろう？先を急ぐぞ」

話し掛けたのは光就だった。戻ってきたらしい。

「はい……でも、一人で先行して何を調べていたんですか？」

「ちよつと確認したい事があつたのでな。それを調べてきたのだ。

ふつ、実はな、ここはイワヤマトンネルの脇なのだ。即ち、この適当な石壁を壊せばトンネルに入れるというわけだ」

「何でそんな面倒な事を……このまま間道を進めば良いじゃないですか」

「駄目だ。ここから先は巨大な岩壁があつて、容易に進めぬ。それに、もう間道を通る意味は余り無いからな……」

「意味が無いってどういう意味ですか？」

「何、すぐに分かるさ」

光就はそう言った。

「殿、爆薬のセットが終わりました。いつでも爆発させられますよ」

「おお、もう終わったか。よし、では早速向かうとしよう。美空、早く来い」

「は、はいっ!」

(とりあえず今は、今やるべき事に集中しなければなりません) 美空さんはハナダとシオンを遮る、この険しい岩山を見つめた。

(この先に苦しんでいる人達がいる。それを救う事。今はそれだけ

を考えなければいけないのです。光就さんが何を考えているのかな
どという下らない詮索をしている暇があるなら……）」

美空さんはシオンが今どういう状況なのかを知っている。そして、
それを救いたいと思っているのだ。

では、話をそちらの方に持っていくとしよう……。

「……………」
睨み合い。

「……………」
義勇軍はシオン西側のちょうど山と山の間の小道に陣取った。

「……………」
義勇軍は前回言ったように寡兵である。正直、ここにいる兵が義
勇軍の戦闘要員全員なのだ。

「……………」
玲奈は自分の策をすでにばらしてしまっている。となると、もう
それは使えない。

「……………」
だが、相手は少なくとも無策とは考えていないらしい。なぜなら
怪し過ぎるからだ。義勇軍の残存兵力全てが、ここに集結している
など。

「……………」
あの時、玲奈はまるでたくさん策を温めていたように振る舞って
いたが、実のところ、何も思い付いてはいなかったのだ。しかし、
そんな状況でも虚勢を崩さない。ある意味、これこそが彼女が一番
の才能なのではなからうか。

「……………」
どうしたのよ、早く掛かって来たら？それとも、私達が
怖いのですか？こちらの何十倍も兵力を持ってらっしゃるのに！」
玲奈は敵を挑発した。慥無礼な態度で激情を煽るのは彼女の得

意技だ。

「むむむ……！」

怒りが込み上げてくる敵。

「皆さん！敵を挑発しまくって下さい！遠慮容赦無く、言葉の暴力の限りを尽くすのです！」

「どうしたロケット団！掛かって来いよ！どうせ、俺達の圧勝だろうがな！」

「ロケット団の腰抜け共め！戦わないなら、さっさとママんとこ帰んな！」

「ロケット団よ！早々に降伏し、自分達の愚行を悔い改めよ！さすれば命だけは助けてやるう」

麟の号令と共に、飛び交う罵詈雑言。

「ぐぬぬぬ……許さんぞ、反乱軍め……！者共、奴らを始末するぞ！」

意気込むロケット団。ちなみに、彼らは義勇軍を反乱軍と呼んでいる。まあ、当然の事だが。

「突撃せよ！」

凄まじい勢いで向かってくるロケット団の兵達。陸での乱戦に特化させるため、その多くは格闘と鋼萌えもんで固められている。

「……来たわね」

玲奈は空を見て言った。さっきまでは清々しい青空だったのに、今は黒い雲に覆われている。

「玲奈様……信じてますからね！」

「ええ、この私に任せておきなさい！」

その雲はバケツをひっくり返したような豪雨を降らした。

「ちっ、あまごいか！他の天候技で相殺するんだ！」

「その必要は無くつてよ、ハイドロポンプ！」

すいすいにより行動力が二倍になり、威力も増した玲奈のハイドロポンプである。しかし、今日はそれだけではない。

「水萌えもんの皆さん、みずでっぼう構え！……斉射……！」

後ろからみずでつぼうが一斉に放たれる。むろん、雨の影響を受け、威力が上がっている。敵は水技を軽減出来ないで、玲奈のハイドロポンプもろとも、まともに喰らってしまい、次々と倒れていく。

……義勇軍の乱戦が得意なタイプの萌えもんはそのほとんどがもうすでに戦える状態に無かった。残っているのは海の近くという事によく集まる水萌えもんだけだった。それが幸いした。玲奈はたとえ、敵が二万だろうが、二十万だろうがこの小道を一斉に通れるのは千人程度だと考え、そこで水萌えもんの全兵をこの小道に集結させ、みずでつぼうの斉射をさせようとした。結果は見ての通り、大成功である。

「PPが切れたら後ろに回ってピーピーマックスを飲んでからまた並んで下さい！では、第二列、斉射開始！！」

麟は当然ながらみずでつぼうを撃てない。だが、その代わり、雨でのみずでつぼうの威力を最大限に活かすため、まとまった列を作り、的確に采配を振っている。その様子は長篠合戦の鉄砲三段撃ちに酷似していた。

「くそっ！これでは被害が広がるばかりだ！退け退け！態勢を立て直す！」

ロケット団が撤退を始めた。

「よし、追撃に移るわよ。皆、私に続きなさい！」

玲奈が号令を掛け、敵の集団へ突撃する。すると、他の皆もそれに続く。

「オーホッホッホッ！逃げる敵ほど崩しやすいものは無いわ」

「同感です。つばめがえし！」

玲奈は杖を振り回して敵を薙ぎ払いながら、麟はつばめがえしで敵を一人ずつ切り伏せながら言った。

そして、玲奈は小道を抜けると杖を天に掲げ、両手でそれを抱えた。

「ふふふ、これで終わらせてもらっわ……。激流の宝玉に全ての力

を充填！20%……40%……60%……80%……100%……
！120%！！充填完了！さあ、弱きを虐げる不逞の輩よ。海竜王の力を味わうと良いのだわ！波動ハイドロポンプ！！」

あの光就に最強技を出させた玲奈の最強技である。それは逃げ行くロケット団を全て飲み込んだだけでは飽きたらず、救援の為に陣から出て来た部隊までも飲み込み、陣の一部も破壊した。

「こんなもんで良いでしょう。さあ、引き上げるわよ！」

玲奈達は颯爽と引き上げた。戦闘開始から数日。義勇軍は初めて凱旋したのだった。

だが、玲奈はこの勝利に奢る事無く、次の戦いの準備を始めていた。街の真ん中に簡易的な祭壇を作り、少し本格的なあまごいが出るようにするらしい。

なぜなら、普通のあまごいではどうしても降ってくれる時間が短いからである。今日みたいにもいつも短期で勝負が決まれば良いのだが、次回からは敵も警戒して容易に仕掛けて来なくなるだろう。そうすれば、自動的に戦いは長期にもつれ込む。

あまごいみずでっぼうが主力である、今の義勇軍にとって雨は死活問題である。それをこの祭壇で補おうと言っただ。

ただ、これには一つの問題があった。

雨を降らしている間、術者……玲奈は祭壇から離れられないのだ。彼女が祭壇を離れた瞬間、術が解け、雨は止んでしまう。しかし、玲奈はこの作戦の中心。水萌えもん達のあまごいみずでっぼうを副砲とするなら、玲奈のハイドロポンプは主砲なのだ。決して欠かす事は出来ない。

そこで、玲奈はあまごいを他の萌えもんに伝授する事にした。しかし、当たり前だが、一日で覚えられる訳が無い。

それを受けて、麟は小道の高台に落石の罠を仕掛けた。攻めて来たら、これを落とし、敵を下敷きにするという戦法だ。

さらに、岩が道を占領するので、敵はそれを退かさなければならず、その間は無防備である。そんな敵に、再びみずでっぼうの斉射

を浴びせる。消極的だが、玲奈のあまごい伝授の時間と負傷兵の回復を待つ時間を稼げる、実に見事な策である。

むろん、結果は大成功。敵の攻勢は完全に停滞し、ロケット団は岩を取り除くまで、五日も掛かった。

その間、玲奈はあまごいの伝授に成功し、負傷兵も回復。義勇軍の兵力は5000にまで回復した。しかし、それでもまだ敵の五分の一である。依然として厳しい状況が続いている。

だが、玲奈は前向きだった。少なくとも、自分達の二十五倍の兵には当たらずに済んだ……と。

「さて、迎撃準備は全て整ったわね。さあ、皆一丸となってこの町を守り抜くわよ！」

玲奈は再び、采配を振るい、この日の戦いにも勝利を収めた。しかも、兵は疲れておらず、戦いが終わってもなお、意気揚々である。しかし……、ある一つの致命的な問題が玲奈達に重くのしかかってきた。兵糧である。兵糧庫にあった物は連日の戦いで全て消え失せてしまったのだった。そこで、隣はクチバに兵糧を届けて貰えるよう、頼み込んだ。クチバジムリーダー、マチスは快諾し、早速輸送隊を派遣し、シオンの救援をした。

だがしかし、物事は何もかもうまくいくとは限らないのである。

「棧橋が破壊されたですって!？」

ロケット団はシオンに救援物資が送られぬよう、12番道路の棧橋を破壊し、その近海に大船団を駐留させた。

「玲奈様……このままでは満足に戦えなくなります。敵から奪うかして兵糧を間に合わせなければなりません」

「たとえ敵から兵糧を奪っても、それをどうやって運ぶ?かといって軍艦を私達だけで沈めるのも難しいし、その後で棧橋を直さないといけない。って言うかそれ以前に、むやみに兵力を二分するのは下策中の下策なのだわ……」

玲奈は頭を抱えた。簡単には行かないだろうとは思っていたが、

こんなにも問題が山積みなのか……と。

「だ、大丈夫ですよ玲奈様！兵糧が無くなってるって言っても、まだ一週間分くらいはあります。ほら、大將がそんな顔していたら、兵達も意気が上がりませんよ」

「そうね……。とりあえず、何らかの突破口が見つかるまで、だましだまし戦い続けていくしかないわね」

かくして、この問題は保留となった。しかし、それから逃げる事は出来ない。生き物は飯を食わなければ生きていけないのだから。

第二十八話に続く

第二十七話：玲奈、専兵で以って敵を圧倒するの事（驚異の水鉄砲三段撃ち）

玲奈「ふふふ……水鉄砲三段撃ちがあればロケット団が何人来ようとシオンは無敵よ」

麟「早速、問題が発生している件」

玲奈「うっ……ひょ、兵糧なんて私のせいじゃ無いわよ！」

麟「まあ、確かにそれは一理あります。でも大将になられた以上、これからは何があるかと玲奈様の責任です」

玲奈「むむむ……」

麟「何がむむむですか！唸ってないで兵糧を足らす方法を考えて下さいよ」

玲奈「……ま、二三、策はあるんだけどね。」

麟「お見それいたしました」

玲奈「ふふふ、でしょう？……次話投稿は六月二十七日よ」

麟「守る気が無くとも、日を指定しておく事でやる気を起こさせるのですよ」

第二十八話：忠実、大任を背負うの事（何これ親子？）（前書き）

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

前回までのあらすじ

玲奈の奇策、水鉄砲三段撃ちが功を奏し、義勇軍は大勝した。

この大勝により勢いを得た義勇軍は玲奈と彼女の軍師、麟の下で着々と臨戦態勢を整え、再びロケット団と対抗するのに相応しい戦力を付けたのである。

しかし、そんな義勇軍に兵糧不足という新たな問題が押し迫っていた。

一方その頃、光就は泊めてもらった礼と共に、都市の防衛策をカスミに達しに献策し、自らは忠臣達と旅に出た。その途中、イワヤマトンネル沿いの間道を進むが、間道と仲間の体力の限界を感じ、イワヤマトンネルへの侵入を図ろうとしていた。

第二十八話：忠実、大任を背負うの事（何これ親子？）

「して、その損害は？」

ロケット団シオン侵攻部隊長、ルーンは焦燥にかられながら言った。

「はっ……あの時は五千の兵を率いておりましたから……恥ずかしながらその全てが負傷、あるいは降ったかと。死者が出なかったのは幸いでしたが……」

彼の部下で、先程玲奈の挑発に乗り、無残な敗走を遂げた団員が答える。

「当たり前だ！みずでっぼうなどで死んでは末代までの恥よ」

いくら鉄砲が付いても所詮は水。敵を怪我させることは出来ても、殺す事は出来ない。

「しかし、参った事になった。シオンは攻撃を加えればすぐに落ちると豪語した手前、救援を求める訳にも行くまい。それに、新しく義勇軍の大將となったあの玲奈とか言うキングドラ、なかなかの将だ。あれがいる以上、真正面から戦っても勝てん。策を弄しようにも、義勇軍には、シオンとの小競り合いの際に、何度もこちらに煮え湯を飲ませたあの寺沢麟がおるわ。こちらの策など奴にとっては児戯に等しかろうよ」

ルーンは水を茶碗に注ぎ、飲み干した。

「こうなれば、こちらがすることは一つ。ただ耐えるのみだ」

「耐える……とは？」

部下が質問する。

「シオンには物資が不足している。おまけに要害の地であるが故に容易に物資の輸送を行う事は出来ない。反乱軍が兵糧切れで自滅するのが先か、こちらが全滅するのが先か、根比べだ」

「ふっ……良い心掛けた。だが、戦略としては今一つ足りんな」

突然、声が投げ掛けられた。その主は豪華な装飾の刀を腰に刺し、

身に付けている鎧も陣羽織りも立派で、名のある将である事は一目瞭然であった。

そんな彼は二千余人の兵を引き連れ、このシオン侵攻の戦線にやってくる。

「バ、バレル様！どうして貴方の様なお方が直々にこのような場所に救援にいられたので？ヤマブキ侵攻戦で総大将をなさると聞いていましたが……」

「噂は噂に過ぎん。実際、俺がここにいるという事実から、少なくとも総大将ではないという事は分かるだろう。……ああそうそう、お前の立場を傷付けぬよう、名目上、俺達は私軍だ。だから遠慮する必要はないぞ」

バレルと呼ばれた男はそう答えた。

「はっ！このルーイン、虎に翼が生えた様な心強さを得ました。

……しかし、バレル様でないなら総大将は誰に……」

「それは俺達が決める事ではない。ボスが決める事だ。俺達は俺達の仕事を忠実にこなすのみ……違うか？」

その言葉に落胆や怨嗟の念はなかった。

「いえ、まさしくその通りでございます。差し出がまし事を致しました」

「ふむ、では、話をこの戦いの方に進めようではないか。ルーイン、お前は固く守って敵の息切れを待つという戦法を取るらしいな。……

……確かに、この戦局では防戦を繰り広げるのが一番だろう。だが、ただ守るだけではいずれ崩される。強い戦士は守りながらも攻めの姿勢を持つものだ。そして、相手に隙ができた瞬間、そこを突き、たった一撃で打ち取ってしまうものよ。兵法も同じだ。虚々実々の駆け引きこそ戦の妙と、各々心得よ」

バレルは流暢に言った。

「はっ！……しかし、具体的にどうすれば良いのでしょうか」

「まずは敵の補給路を断つ。そして、イワヤマトンネルを抜け、敵の側面を突く。それに呼応して正面からも戦えば敵を一網打尽に出

来るだろう」

「なるほど……上策ですな。では、早速実行に移しましょう」

ルーインは部下に指示を出そうとした。

「おっと、敵の補給路に関してはもう手を打ってある。そろそろ報告が来るはずだ」

バレルがそう言った矢先、物見がこちらに駆け付けた。

「報告！シオン南の棧橋が我方の海軍の手により破壊された模様！」

「ふふふ……これで敵の補給路は断たれた。後は山登りするだけだな」

「な、なんと……さすがですバレル様！」

ルーインがバレルを褒め称える。

「なに、たった一つの策を成功させただけに過ぎない。……ルーイン、お前は自分の部下をよく従わせている。大人しい鶏の籠の中に別の籠の鶏を入れたら、今までは大人しかったそれも收拾がつけられん程騒ぎ出してしまう。俺の兵はお前の部隊には入れず、そのまゝ俺が率いる奇襲部隊に組み込むのが一番だろう」

「ということは……バレル様が奇襲をなさるのですか？」

「ああ、ここは任せたぞルーイン。一週間持ち堪えてくれ。そうすれば俺達は奴らの側面に回り込み、急襲出来る。その時が来たらお前に狼煙でその事を伝えよう。赤、黄、緑の順番で山から狼煙が拳がったら一気に敵陣に突っ込め！逆に、青の狼煙が拳がったら、それは俺の身に危険が及んだというサインだから、何があるうと撤退しろ！なるべくたくさん仲間を生き残らせるのだ」

ここで、何故バレルは攻撃開始の狼煙は複雑にして、撤退の狼煙を単純な物にしたのだろうか。答えは簡単。もし、自分達が敗れる事になっても敵に偽報をさせない為である。

襲われ、負けそうな時に、何回も狼煙を挙げている暇は無い。だから、撤退のサインは青一つ。逆に、それを挙げる事が出来なくても、敵はどういう順番で狼煙を挙げれば、ルーイン達が打って出て

来るか分からない。そして、奴らがでたらめに狼煙を挙げている間に、彼は異変に気づき、陣払いをするだろう……。バレルはそんな打算の下でこの策を提案したのだった。

「はっ、分かりました。このルーイン、必ずや一週間耐え抜いて見せましょう！」

「ああ、よろしく頼む」

そう言い残し、バレル隊はイワヤマトンネルへ向かった。

「お気をつけて！」

ルーインはその後ろ姿を見、敬礼した。

けたたましい爆音と岩壁が崩壊する音が洞窟内に鳴り響き、辺りは硝煙に包まれた。その中から現れるは、浅井光就率いる若き英傑達。

「ふむ……ここがイワヤマトンネルか」

光就は辺りを見回す。が、周りは闇に包まれており、目からの情報だけでは様子が分からない。

「暗いですね……ここではわたしの目は役に立ちそうにないのです……」

美空さんはそう言った。鳥目は鳥萌えもんの宿命である。

「フラッシュがあれば良いのですが、誰も覚えてそうにありませんし、そんなものを使って歩いていたら、徒に我々の存在を敵に知らせるのみ。美空殿には悪いですが、このまま洞窟を進む事にしまし
よう」

昌明はそう提案した。

「いえ……むしろそっちの方がいいです」

「？何故でしょう？」

「だって……ふふふ」

「……具合が悪いのはむしろ私の方だ。この鳥目を背負わねばなら

ん

光就はそう言った。その言葉通り、よく見ると彼の背中には美空さんが嬉しそうに寄り掛かっていた。

「美空殿！？おのれ主め、妬ましい……妬ましい……！パルパルパルパルパルパルパルパルパルパル」

瀬奈はギリギリと歯軋りしながら、唸っていた。瀬奈の忠誠が100から94に下がりました。

(……こんな事で忠誠値が下がっては先が思いやられますね……まあ、後で美空殿のイラストでも差し上げて機嫌を取りましょう) 昌明はそんな事を考えていた。

「く」

満面の笑みを浮かべ、光就に背負われている美空さん。

「……む？……！」

光就は何かに気づき、姿勢を低くし、

「息を殺せ！」

と仲間にも命令した。彼らは訳が分からぬまま、だが、忠実にその命令に従った。

「龍宗！尻尾の火を消せ！」

「む、無茶言つなよ！……しかたねえ、消えない程度に小さくするか」

龍宗は火を小さくし、何とか隠せるようにした。

「……………」

「……おい、ここか？……何も無いじゃないか」

暗闇の中から声が聞こえる。

「いや、こちら辺で何か凄い音が聞こえた。きっと誰かがひそかにイワヤマトンネルに入ったに違いない」

そして、二筋の光が見えた。懐中電灯を持った何者かがここを調べに来たのだ。

(まずいな……)

光就は焦りを感じた。恐れていた事が起きてしまった。

(やはり、奴らはここに陣を敷いていた。ずっと間道を通るわけにはいかなかったが、見つかってしまつては元も子もない。ロケット団め……)

光就は左腕に念力を溜めた。

「……殿、……殿、聞こえたら返事をして下さい」

その時、光就は自分の頭の中からの声を聞いた。昌明のテレパシ―だ。

「……聞こえている。何だ？」

「殿、短気を起こしてはなりません。こんな所で敵に見つかつてはこれまでの計画は全て台無しです。今、私は緊急回避用のテレポ―ト陣を描いております。しばらくお待ち下さい」

「分かった。ならば、私はこの旨を他の皆に伝える。お主はテレポ―ト陣の完成に集中しろ！」

「御意」

光就は昌明にそう伝え、溜めた念力を吸収し、美空さん達にテレパシ―でこの事を伝えた。

「……………」

「うーむ、居ないじゃないか。空耳だったのでは？」

「『違和感を感じたら調べる』バレル様の言い付けだろう？」

(バレル……?)

光就はこの名前に何かを感じた。

(バレル、一体何者だろうか……? はっ!)

光就は前を見た。彼らの懐中電灯の光はこちらに迫っている。後少しずれば、こちらの存在はその光の下に晒される事になる。

「昌明! まだか？」

「後少しの辛抱です……………」

「居ないなあ……………」

やる気の無さそうな方の男の懐中電灯の光はすぐそこまで迫っていた。

「間に合え……………! ! !」

瀬奈は祈った。しかし、無情にも、光は彼女の鎧の一部を照らし出した。

「ん？」

「……出来ました！レポート！！」

違和感を感じたその男は一気に光就達のいる場所に光を当てた。

「……おや？やっぱり気のせいかな……」

しかし、間一髪でレポートが間に合い、近くの高台に転送された。

「やっぱり居ないじゃないか。もう帰ろう」

「……仕方ないな。だが、一応報告はしておこう」

そして、しばらくして彼らは帰っていった。

「ふう……心臓に悪いぜ……」

「ほっ、見つからなくて良かったです」

「本当に危なかった……軍師殿、ありがとございました」

「いえ……お礼なら殿に言ってお下さい。殿がいち早く敵の存在に気づかなかつたら、間に合っていたかどうか……」

「いや、私は早くは気付けたが、強行突破以外の作戦を思いつけなかった。昌明はそんな私を諫め、かつ、この窮地を救ってくれた。

昌明よ、見事であった」

光就はこの時、始めて軍師を得た利を強く感じた。

「ならば、瀬奈殿の礼は素直に受け取っておきましょう……おや？」

その時、昌明は忠実を見た。彼の様子は少し寂しそうに見えた。

「どうしたのです忠実。そんな顔をして」

「うん……昌兄はすごいな……って思ったんだ。で、ボクも活躍したいって思ったんだけどどうしたら良いのか分からなくて……ボク、本当にここに居ていいのかな？」

忠実はそう言った。

「そんな事、心配する必要はありません。功を焦っては何事も上手くいきませんよ」

昌明は忠実を諭した。

「でも……」

「軍師殿……昌兄の言う通りだ。そんな事を考える必要は無いぞ、忠実。お前は頑張ってるよ。あの進軍スピードで私達に付いて来れたんだからな」

「そうだそうだ。無茶なんかする必要なんかねえ」

瀬奈、龍宗も忠実を諭す。

「そうじゃなくて……」

「……はあ、貴様等は何も分かってないな」

痺れを切らした光就は静かにそう言い、忠実の肩に手を起き、更に言った。

「忠実、お主の初陣だ。さっきの二人をつける。敵の巢を見つけて来るのだ」

忠実は押し黙っていたが、やがて、こくりと頷いた。

「分かった。やってみるよ……との！」

「ちょ……ちょっと待て下され主！いくらなんでも忠実には荷が重すぎます。尾行なら私がやります」

瀬奈が反対する。

「はあ……瀬奈よ。お前は何も分かっていない。忠実はな、証が欲しいのだ。我々の仲間たる証……すなわち、名誉だ。彼は名誉が欲しいのだ」

「そんなこと気にする必要はないのに……」

「お前達はそう思っているけど忠実はそう思っていない。お前達は忠実の事を保護者の目線で見ず、仲間として、一人の萌えもんとして見ていない。何たる倨傲、何たる慢心か！」

光就は怒気を含んで言い放った。

「……その通りでございます。すいません、私は忠実を守る事ばかり考えていて、肝心の彼の気持ちなど考えてもいませんでした。瀬奈殿、ここは忠実の気持ちを尊重しましょう」

昌明は言った。

「……分かった。だが、忠実。決して無理をしてはならない。危な

いと思つたらすぐに逃げるんだぞ」

「うん！」

瀬奈は渋々納得し、忠実に忠告する。忠実はその忠告に素直に頷いた。

「た、忠実、曲がるときはちゃんと右左よく見るんだぞ。危ないからな……」

「うん！」

龍宗も忠実に忠告する。

(そいつは違うだろう……)

と、光就は思ったが、忠実はやはり、素直に頷いた。

「気を付けて……無事に帰ってくる事を願っています」

「うん！ボクは大丈夫だよ」

昌明は変に死亡フラグを立てている。

「話は纏まったようだな……では、行け、忠実！お主の力、我に見せてみよ！」

「りょーかい！」

忠実は走っていった。

「……大丈夫かなあ、忠実君……」

美空さんは不安をあらわにした。

「安心せよ、危なくなったら我々が助ければ良いだけの事だ。行くぞ、美空！」

光就は刀を抜き、言った。

「ふえ？」

美空さんは間の抜けた声を発する。

「鈍い奴だな。忠実の任務、私とお前が陰から手伝うのだ。いくら何でも彼一人に任せられるわけなからう」

「ああ、なるほど……」

美空さんは合点がいったようだ。

「何だそういう事だったのか。主と美空殿が後ろ盾をしてくれるのなら、安心ですな」

瀬奈は胸を撫で下ろして言った。

とは言え、光就はその実、自分達の出番は皆無であると確信していた。なぜなら、光就は忠実の力は萌えもん、サンドとしての力を大きく上回っている……いや、むしろ、その器に入り切れないものであると感じていたからだ。

そして、光就のその確信は実際の現象となつて彼の双眸に飛び込んで来るのだった。

第二十九話に続く

第二十八話：忠実、大任を背負うの事（何これ親子？）（後書き）

光就「浅井光就である。……ここに来るのも久し振りだな」

美空「はい、あの時はわたし達が暴れ回ってたですからねえ」

光就「うむ……あれはいろいろ酷かった」

美空「ですよー」

光就「という訳だ今日は一人で次回予告をやり、大事な所を取られる苦しみを味わうが良い」

美空「え？え、ええっと……次回は忠実君が大活躍するですよ。わたし達も大活躍するです。玲奈さんも大活躍するです」

光就「次話投稿はおそらく、七月十一日だ。遅れる可能性の方が極めて高いがな」

美空「作者も一生懸命期限を守ろうと頑張ってるですから、応援してあげて下さいです……」

光就「二連続期限破りは度し難い。次後れたら、作者は処断だな。アセロラ蕎麦の代わりなどいくらでもおるわ」

美空「ア蕎麦さんは期限守って下さいです……（小声で）死にたくなかったらね、うふふふ……」

第二十九話：麟、盟友と出会うの事（後付け乙）（前書き）

やあ、アセロラだじえ！

前回のあらすじ

大敗を喫したロケット団。しかし、彼らの前に一人の救世主が現れる。その名はバレル。彼は起死回生の策を次々と成功させ、自身も目的達成のため動くのだった。

一方その頃、光就達は窮地に立たされていたが、昌明の機転でなんとか危機を脱する事に成功する。彼が周りから賞賛されている姿を見た忠実も自分も活躍したいと思った。それを感じ取った光就は忠実に敵の尾行を命じた。喜々として応じる忠実。果たして、忠実は任務を無事に遂行出来るのだろうか？

第二十九話：麟、盟友と出会うの事（後付け乙）

更に一週間が経った。

結局、義勇軍の兵糧問題は解決されず、義勇軍はロケット団以外に飢えとも戦わなければならなくなった。

そんな中、ロケット団の動きを探り続けていた玲奈が怪しい動きを捉えた。

「麟！敵の動きに解せぬものがあるわ。一体、何をする気なのかしら……」

「ははは、それはおそらく、私達の虚を突こうとしているのでしよう」

義勇軍の軍師にして、屈指の策謀家、寺沢麟は笑いながらそう言った。

「笑い事じゃなくてよ麟！ただでさえ兵糧が無くてまともに戦えないのに、多方向から攻められたら、勝ち目は無いのだから！」

今、義勇軍は兵士達はむろん、玲奈達も草を食べるなどして細々と食いつないでいた。

「玲奈様、無い兵糧は奪ってくれば良いのです。敵がわざわざ山を越えて兵糧を運びに来てくれたのですから、それを活かさない手はありません」

麟はイワヤマトンネルの奇襲部隊を殲滅して、その兵糧を奪う策を示した。

「む、無理よ！これ以上兵を分けられない。南の海軍に西の陸軍、これらを今の兵力でギリギリ抑えてるんだから、そこで兵を減らしてしまつたら崩されてしまうわ……」

玲奈はあくまで反対し、俯いた。

「確かにこの策、一歩間違えれば全滅の憂き目に遭いかねません。しかし、このままではいずれ兵糧切れで士気が下がった所を突かれて滅びるのみです。逆に、奇襲部隊の殲滅を為せば、兵糧を手

入れられ、兵の離散も防げますし、相手の戦意も崩せます。玲奈様、御決断を！」

「……………」
玲奈は考え込む。そして、すつと顔を上げ、真正面から麟を見つめ、言った。

「確かにこのままでは、いつか自滅するだけ……座して死を待つは私が良しとする所に非ず。ふふつ、麟、貴女の策に一か八か賭けてみようじゃない！」

「心得ました！この寺沢麟、必ずや奇襲を成功させ、兵糧を持って帰って参ります！」

麟は気を引き締めた。

「よし……なら、麟、貴女は兵達の中から強襲の為の精鋭部隊を選んでらっしゃい。私は彼らに食べさせる物を持ってくるわ」

「え？玲奈様、兵糧を隠してたんですか？」

麟が疑いの目で玲奈を見つめた。

「違うわよ。ここ、シオンだからこそ出来る方法よ。ああそう、強襲には五百人集まれば十分よ。てか、それ以上は兵糧を捻出出来ないわ」

「？まあ、分かりました。では、兵を精選して参ります」

「頼むわよ……………」

麟は去っていった。そして、玲奈もまた、何処かへ行ってしまった。

「……………」

そして、辿り着いた所は、シオンの顔、萌えもんタワーである。連日の戦いで、すっかり墓参りしに来る者が居なくなってしまったので、心なしか寂しい雰囲気を感じる。

「私もこんな事はしたくなかったけど……、仕方ないわ。貴方達もこの町を守る為なら、これくらいは許してくれるでしょう？」

玲奈は押してきた輸送車に墓に備えられているお供え物を次々と入れた。

そして、玲奈が萌えもんタワーのお供え物を全て回収し終えた頃には、麟も兵士の精選を終えていた。

「玲奈様、今まで何処に行つてたんですか？ああ、精鋭が五百人集まりました。どうぞ御検分下さい」

さすが、麟がそうと選んだ者達。目の色が違つたと玲奈は感じた。

「うん、良いんじゃないかしら。上出来よ、麟」

「褒めるのはまだ早いですよ。戦いはこれからです」

麟は少し照れながら言った。

「そうね。だけど腹が減つては戦は出来ないわよ。私が食料を持ってきたわ。さあ、食べなさい」

玲奈は輸送車を押し、適当に小分けしたお供え物を差し出した。

「本当に用意したんですね。でも、一体何処から？」

「あそこにいる貴方達の親や戦いたくても戦えない人達から貰つたわ」

玲奈は萌えもんタワーを指差して言った。当然、彼女を非難する声も少なからずあつた。しかし……、

「皆、聞いてくれるかしら……もし、この町がロケット団の手に落ちたらあの塔の墓はどうなる？貴方達の家族の屍が辱められるかもしれない。いや、貴方達の家族だけじゃない。いつも他の町から来ている人達の家族も、この地で眠りについた無縁仏の戦士達も……もちろん、死んだ人達だけじゃないわ。皆、私達が負けたらどうなる？どんな憂き目に遭うか……私は想像したくない。だから、実現もさせたくない。」

いい？このお供え物だった食料には最初は安らかに眠つて下さいという願いが込められていたわ。しかし、連日の戦いですっかり安らかに眠れなくなった彼らは、この町を守る為に戦いたかつた。しかし、自分達は肉体を失い、戦うことが出来ない。だけど、肉体は滅べど魂は不滅。そして今、その魂はこの食料の中にあるわ。貴方達がこれを食べる戦場に行くことで死んで戦えなかつた人達も戦える。この町を守ることが出来るのよ。私はそんな彼らの想いを受け

て、これらを持ってきたわ。

嘘だと思っならそれでも良い。たけど、一つだけ言える事は、私は後でどんなに口汚く罵られようと、万手万策を振るい、私が持てる力全てを以って、義勇軍総大将として貴方達に勝利をもたらす！ただそれだけ」

後に名演説として語り継がれる玲奈の演説だった。五百人の精兵達と麟は聴き入っていた。

「嫌なら、今までなら精鋭部隊の入隊を拒否できるわ。さあ、決断なさい」

むろん、誰も抜けようとした者は居なかった。

「……玲奈様の話を聞いて、誰が精鋭部隊から抜けようなんて思う……？いや、思わない……シオンの為……玲奈様の為……私は死力を尽くす……！みんなもそうだよね……？」

精鋭兵の一人というか、どこかで見たような萌えもんがそう言った。そして、それに呼応し、他の精鋭兵達も次々と同意を表す闘とぎを挙げる。

「先に言われてしまいました……。しかし、この麟も同じ気持ちでございます！」

麟は少し悔しげに言った。もっとも、心の内ではよくぞ言った！と思っっている。なぜなら、麟は玲奈の信奉者だから、そんな彼女が玲奈を褒めちぎっても、誰の同意も得られないからだ。

「さて、では明日思う存分戦えるよう、今日は食べて、寝なさい。明日の貴方達の活躍に全てが懸かっっている。……健闘を祈るわ」

玲奈はそう言い残し、自分の持ち場へと戻っていった。「よし、では、皆さん！食料を配ります。決して多くはありませんが、沢山の人の想いが詰まっった大事な食料です。感謝して食べ、明日の血肉としましょう！」

麟はそう言って輸送車に入っっている食料を配る。それを見た、さつき玲奈に賛同した精鋭兵の少女も手伝う。

「ありがとうございます。あら、あなたはさっきの……お名前は何

「て言っんですか？」

「私は……さかきはらひぢとせ 榊原千歳……ラッタの千歳……」

まあ、無口なラッタと言えば、もうあの人しか居ませんな。そう、この榊原千歳と名乗るラッタは何を隠そう、秀明のラッタである。なんで怪我をしているはずの彼女がこのシオンにいて、義勇軍に入っているのか……というのには理由があるのだが、それはまた別の話である。今話はあくまで麟達、義勇軍と光就達の話しかしない。「なるほど。私は寺沢麟と申します。よろしく願います、千歳さん」

「……（コクリ）」

麟の問い掛けに無言で首を縦に振るラッタこと千歳。

「無口なんですわねえ。まあ、暖かい人だって事は分かりましたから気になりませんけど」

麟は笑顔で言った。

「私も……麟は良い人だと思う……」

千歳もそう言った。無表情だが、その目は少し穏やかだった。どうやらこの二人、同じ茶色だからか、人格的にどこか似ている所があるからなのか、一目で意気投合したようである。

「ふふふつ、光栄ですよ、千歳さん」

「そう……」

千歳はやはり半分閉じたような目をしながらそう言った。

「さて、明日は大戦争ですよ。ちゃんと明日に備えて休んで下さいね」

「分かった……」

麟は立ち去った。そして、その足で玲奈の下に向かった。

「玲奈様……一つ二つ相談したい事があります」

「あら、じゃあ手短かに頼むわ」

「はい。まずは、敵の動きについてです。イワヤマトンネル側からの奇襲は当然ながら他の方面の敵を呼応します。私が奇襲部隊を攻撃する過程でもし、敵が動いてしまった時は、次のように対処して

下さい。

まず、西の陸軍部隊がこちらに攻め掛かってきた時、迎撃して下さい。今度はこの前と違って簡単には退かないでしょうが、あまごい水鉄砲三段撃ちと私が事前に仕掛けた罠があります。勝算は十分です。後、迎撃に成功しても深追いをしてはいけません。

次に南の海軍が上陸して来た時、やはりさつきと同じ様に迎撃して下さい。ただ、こちらの場合は追撃をして下さい。船を破壊するためです。ここから兵糧でも奪えればより良いですね。

両方同時に攻めてきた時は南側を優先して下さい。西側は罠で時間稼ぎ出来ますから。そして、追撃は断念してすぐさま西側に当たり、追い払って下さい。

船が間接攻撃を加えてきたら近づいて火を放って下さい。明日は南西の風が吹きます。よく燃えるでしょう。兵糧の奪取は諦めることになりましたが仕方ないですね」

麟は自分の策を全て吐露した。

「分かったわ。要するに、兵を二分するなという事ね」

「はい。いつもより兵数が減ってしまっており、敵の意気も高くなっていますのでなるべく全員で当たらなければ、撃退できませんから」
「なるほどね……」

玲奈は感心していた。

「あと……もう一つよろしいですか」

麟はそう言うと、いきなり悲しげな顔をした。

「私……玲奈様との約束、破ってしまうかもしれません。……ごめん下さい……！」

麟は涙を流して言った。この作戦は一つ間違うと自分達が全滅してしまう。それは玲奈との命を粗末にしないという約束を破ってしまう事になる……と。

「そんな事を気にしてたの？ふふっ、安心なさい。貴女は比類無き戦略家であると同時に歴戦の強者であると私は信仰しているわ。貴女の向かう所に敵なんて居ないのだから」

「玲奈様……」

「さあ、貴女も休んでなさい。どんな結果であれ、悔いの無い戦いをする為にね」

「……はい！」

麟は退出した。

「……………」

玲奈はその後ろ姿を黙って見つめていた。

(あれだな……)

光就は敵を追い掛けに行った忠実に追い付いた。

「光就さん、どこですかー？」

美空さんが小声で叫びながら、ウロウロしている。

「全く……こつちだ。はあ、私もつい、癖でお前を選んでしまった。やれやれ、本当にお前は暗い所では無能だな」

「うう……ごめんなさいです」

「まあいい、今、良い方法を思い付いたからな。美空、私を抱えて飛ぶのだ。私はお前の目となり、お前は私の翼となる」

「なるほど……了解しました」

美空さんは後ろから光就を抱えて翼を動かし、浮き上がった。

「よし、ではまず、二時の方向に飛んでもらおうか。次からはテレパシーで指示する。頼んだぞ」

「はいっ！」

美空さんは指示通り飛ぶ。

(……さあ、忠実、お前の才覚、見せてもらおうではないか)
光就は高みから忠実の動きを見ていた。

(……その期待にこたえなきやね)
忠実は敵影を追い掛けながら思った。

(んー?)

忠実が前方に気配を感じた。

(ははーん、あれがさっきの人達だね？あははっ、君らがどんなに警戒してたって、ボクを見つけないことなんてできないよ)

忠実は帽子を深くかぶった。そして、岩壁に張り付くように進み出した。彼の服装は岩の色に似た茶色である。だから、この岩山の岩壁にうまくカモフラージュできるのだ。しかも、この懐中電灯を使わなければ、まともに何かを見れない暗さだ。なおさら、忠実は背景に混ざる。

そして、誰にも気付かれる事なく、忠実は敵の陣地にたどり着いた。すると、彼は突然、

「とのー！敵の陣はここだよ！」

と言った。光就達の驚愕は並々ではない。

「我らが後を付けていた事を最初から知ってたのか。忠実よ」

「うん。って言うか、皆がボクの事をあまり信用してないみたいだったから、絶対、誰か見張り役がいるだろうなあ……って思ってただけだよ。まったく、皆、仲間を信用しなくて誰を信用するんだろ？」

忠実がしたり顔で言った。

「ふっ……ふはははははははは！全くもってその通りだ忠実。我々はお前を子供と侮って甘く見ていたようだな。……そうだ。忠実、お前も立派な将、共に武を示し、知略を振るう戦友だ。ならば、遠慮する必要も無い。……敵陣に奇襲を掛ける！」

光就は笑いながら言った。

「えっ？ええっ！？」

美空さんは光就や忠実が何を言っているのか分からない。

「りょーかい！じゃあ、皆を呼ばないとね。確か、こんな感じだったような……よし！との、これに念力を入れて！」

「ふむ、了解した」

光就は忠実の書いたテレポート陣のようなものに念力を加える。

転瞬、昌明達、三人がここに転送された。

「忠実、よくやってくれました。貴方の才は私達の想像以上です」

昌明は満足げに言った。それに対して、他の二人は事態を飲み込んでいるような、いないような微妙な顔をしている。

「これ、なんだお前達は変な顔をして。早く準備せよ。敵陣に奇襲を仕掛けるぞ」

「ちょ……ちょっと待って下さいです！わたし達、全く事態を飲み込めて無いんですけど、一体、どういうことですか？」

「ふっ、簡単な事だ。私と昌明は本気で忠実が失敗するなんて思っ
てなかった。むしろ、ほとんど十割成功するだろうと確信していた。
ただそれだけだ」

「そっちもそうですけど、わたし達が聞きたいのはそっちじゃない
んですけど……」

「分かってる。皆まで言うな。ふっ、なぜ、今、奇襲を敢行するの
か……その理由を聞きたいのだろう？これも答えは簡単。待った所
で我々にメリットは無いからだ」

「敵は精強。こんな部隊がシオンの側面を襲ったら義勇軍は一瞬で
瓦解します。むしろ、彼らも座して死は待たないでしょうから、こ
の部隊を殲滅するために兵を出しているに違いありません。問題は
彼らがどういう状態なのか……ということですよ」

光就の説明に、昌明が具体的な説明を続ける。

「考えられるケースは四つあります。一つは、すでに戦って敗走し
てしまったケース。二つ目は逆にすでに勝ってしまったケース。こ
の二つは今の状況から見ると、ありえませんが。三つ目はまだ、こ
こまでたどり着いていないケース。最後はすでに着いているけど、
機会を伺っているケース。……もう分かりましたね？義勇軍がどう
動くのかは分かりませんが、どちらにせよ、今、暴れ回った方が我
々としても義勇軍としても調子が良いのです。おそらく、敵は義勇
軍に集中しており、こちら側は手薄。ならば、この僅かな手勢でも
充分に応戦できます。そして、我々が暴れている間に、義勇軍が攻

撃を仕掛けてくれます。彼らがやろうとした事を、我々が先にやっ
てしまうのです。これぞ、奇襲返し之计です」

昌明は一通りの説明を終え、一息ついた。

「なるほど……私たちが突破口をこじ開ける訳ですな」

「まあ、そういう事だ。納得頂けたかな？」

「おう！じゃあ、早速、奴らの度肝を抜かせてやろうぜ！」

「よし！では、者共、我に続け！ギガサイコネシス！！」

光就はいつの間にか、サイコネシスを三回溜めており、それを
放った。陣の柵は大破し、それを踏み荒らしながら、光就達は敵陣
に切り込んでいった。

第三十話に続く

第二十九話：麟、盟友と出会うの事（後付け乙）（後書き）

ここは名も無き処刑場。否、名さえ忘れられた処刑場。

その処刑場に二人の男がいた。一人は深淵の闇を思わす黒マントの男、浅井光就。もう一人は彼と同じような服装の男。もっとも光就が黒を基調としているのに対して、その男は薄い赤色を基調とした鎧とマントを身につけており、さらに、刀の代わりにペンを帯刀している。この男こそ作者ことアセロラ蕎麦である。

光就「アセロラ蕎麦。右の者は我々の戦いの記録を探し、^{へんさん}編纂するという大任を負いながら、任務遂行にさしたる致命的な理由が無いにもかかわらず、その怠惰を自制する事なく、自分で指し示したうp期限を三回連続、悉く破った。我々はその怠慢を甚だ悪^{にく}む。よって、これを誅するものである。……という事だ。ア蕎麦、覚悟は出ておろうな！」

ア蕎麦「い、命だけは……命だけはお助け下され！わ、私以外にこのMFを編纂する事は出来ません！いや、させません！」

光就「ほう……ならば、どうしてうp期限を破った？」

ア蕎麦「そ、それは……」

光就「我々の戦いの歴史と、その真実を著す事、この重要性は前に説明したはずだがな」

ア蕎麦「むむむ」

光就「何がむむむだ！さあ、我が問いに答えよ！返答次第では斬って捨てるぞ！」

ア蕎麦「ほ、ホームページの更新を……」

光就「ホームページは所詮サブだろうが！それを作る為に本編（小説）を蔑^{ないがし}ろにするとは何事か！斬れ！斬り捨てよ！」

ア蕎麦「ヤメロー！シニタクナイ！！」

光就「……ということだ。分かったな」

ア蕎麦「ははっ！この私めにそのような任務を仰せ付かせて頂き、このアセロラ蕎麦、感涙の極みでございます！」

光就「うむ、神妙である。では、行け！アセロラ蕎麦（二代目）よ！MF編纂の日々を駆け抜けるのだ！」

ア蕎麦「ははっ！」

どうも、アセロラ蕎麦でございます。

というわけで、新しくこの小説の執筆、編纂を担当する事になったアセロラ蕎麦（二代目）でございます。前の担当者は職務怠慢で斬られたとか……全く、前の担当者は最低の輩ですな！このような素晴らしい任務を放棄して遊びほうけるなど、ぶつぶつ……。まあ、この私が担当となったからにはしっかりやらせて頂きますぞ。

次話投稿は七月二十五日……さあ、私達の執筆はこれからだ！

第三十話：瀬奈、知勇を振るうの事（土への目覚め）（前書き）

どうも、アセロラ蕎麦でございます。
前回のあらすじ

兵糧が尽き、いよいよ苦しくなった義勇軍。そんな折、敵の動きを探り続けていた玲奈は怪しい動きを捉える。麟はそれを敵に策があることの現れと判断し、逆にそれを自分達の策とせんと動いた。その途中、あの秀明のラッタ……榊原千歳と出会い、意気投合する。そして、麟は己の策と感情を全て玲奈に吐露し、イワヤマトンネルへと歩を進めた。

一方その頃、イワヤマトンネル内では忠実が敵陣の搜索を開始していた。難無くそれを見つけることに成功した忠実は、自分を侮つて後を付けていた光就達の存在を暴き、その才覚の片鱗を見せ付けたのだった。

それに応じ、光就はある決断をする。敵陣を強襲するという決断を。

第三十話：瀬奈、知勇を振るうの事（土への目覚め）

イワヤマトンネルに進駐した、麟率いる義勇軍精鋭部隊。だが、その動きは敵陣の目前で止まってしまふ。

「奇襲前の休養地点としてこの陣を立てた？にしては防御が固い……。どうやらこの部隊長はかなり慎重な性格のようですね。むむむ……」

「麟……どうしたの……？」

考え込んでいる麟に千歳が尋ねる。

「千歳さんですか……。やれやれ、私も詰めが甘かった……。奇襲部隊がこんなちゃんとした陣を建てて、進駐してるなんて考えてもいなかった。てつきりあったとしても有り合わせのものだと思ってたのに……。おかげでどうやって攻めるべきか、引いては本当に攻めるべきかを検討しなければなりません」

麟は考え込む。その様子を見て、千歳が何かを言おうとした。

「？何か考えがあるのでですか。ならば、私に話してくださいませんか」

「うん……。麟、私は……。攻めた方がいいと思う……。ここまで来て……。何もせずに帰ったら……。会わせる顔が無いから……」

「なるほど、ですよ。よし、決めました。私達は逃げません。だけど、今は待ちましよう。敵が拠点に居座ってる間は私達に勝ち目はありません。敵が出て来た所を討ちましよう」

麟がそう言った矢先の事だった。

突然、閃光がほとばしり、遠くから爆発音が聞こえた。

「な、何!？」

「心配しないで……。味方だから……」

千歳は少し笑みを浮かべながら言った。

「味方？他の義勇軍かなあ？」

麟は首を傾げる。

「報告!どうやら、先ほどの光はサイコネシスのようです。そし

て、その術者は味方と共に敵陣に侵入しました。しかし、その数、僅かに六人！いかが致しましょう？」

「たとえ少数でも敵陣を乱してくれる事に変わりはない。……出陣です！混乱に乗じて敵陣を落しましょう！」

報告を受けて、今が攻め時と判断した麟は、総攻撃の号令を下した。

「成敗……」

千歳はそれだけを言って、他に先んじて敵陣に飛び込んでいった。

「よし！では、者共、我に続け！ギガサイコネシス！！」

光就はいつの間にか、サイコネシスを三回溜めており、それを放った。陣の柵は大破し、それを踏み荒らしながら、光就達は敵陣に切り込んでいった。

「出来るだけ派手に暴れ回って敵の注意を引き付けて下さい。今回の作戦の主役はあくまでシオン義勇軍……私達は囿に過ぎません」

昌明はテレパシーでそう言った。

「分かってるさ！」

龍宗は元気良く答えた。一番心配だ。

「ようするに、こういうことだろう？ドラゴンクロー！！」

腕を豪快に薙ぎ払い、向かってきた敵をまとめて吹き飛ばす龍宗。

「……まあ、いいでしょう」

昌明はやれやれという表情で言った。

その間にまた敵がやって来る。龍宗はドラゴンクローを構える。

「龍兄だけズルイ！ボクもボクも！」

「おう！忠実、がんばれよ！」

だが、忠実がそう言ったので譲ることにした。

「これでも食らえ！スピードスター！！」

忠実は高速の星型光線を手から放つ。それはただ速いだけではな

く、一瞬だが目眩ましの効果がある。しかし、忠実が次の技に入るのには、その一瞬で充分過ぎた。

「秘技・毒針雨!!」

上に向かつて無数の毒針を投げる忠実。その毒針は上から敵に襲い掛かる。だが、忠実の真の目的はこれではない。

「落ちろ、岩たち!」

忠実が指を鳴らす。すると、天井の岩が次々と落ちて来る。忠実の毒針の毒が岩を溶かし、地盤が崩れたのだ。

その岩はロケット団を下敷きにしてしまった。

「あはははっ!これぞ、天然のいわなだれ!思い知ったか!」

忠実の笑い声が洞窟に木霊する。

「地形を利用し、敵を討つとは、なかなかの策士ですな」

岩の中から声が聞こえたと思つた瞬間、岩が吹っ飛び、中から青い鎧に特徴的な渦巻き模様の男が現れる。

「ほう……あれで気絶しないか。そうか、お主がバレルという男だな」

光就が言う。

「バレル様?拙者ですか?はははは!寝言は寝てから言つて頂きたい。拙者の名はライアス。ニヨロボンのライアス。バレル様の一家臣に過ぎません」

ライアスと名乗つたニヨロボンは豪放に笑いながら言つた。

「家臣だと?ふん、三下に用はない。さつさとバレルを出せ!我らは奴を斬りに来たのだ」

「ほほう……端から拙者の事など眼中に無いようですが、拙者もそれなりに強い方ですぞ……!!」

ライアスは手を何度も前へと突き出す。その動きは、残像で何本も手があるかのように見える程速い。

「食らわれよ!バブルこうせん!!」

そして、その状態からバブルこうせんが放たれる。無数の泡が矢のように飛んで来る。

「どくばり！」

忠実もそれに対抗して、無数の毒針を、今度は前方に発射する。たとえ、どんなに速くても泡は泡。毒針は泡を貫通し、次々と壊していく。そして、そのままの勢いでライアスへ襲い掛かる。

「なかなかやりますな！しかし、拙者にそのような攻撃は効きません！！」

だが、次の瞬間、ライアスは襲い来る毒針を全て気迫で吹き飛ばした。

「はっはっはっ！拙者に飛び道具など通用しませんぞ！」

豪快に笑うライアス。その様子を見て、闘争心が湧き出た者がいた。

「ロケット団に貴様の様な武人が居たとは、望外の喜び。我が名は海風瀬奈！海竜王、海風瀬奈なり！ライアスとやら、いざ、尋常に勝負！」

瀬奈だった。彼女は前に出て、構え、臨戦態勢を整えた。

「武人として、この勝負は断れませんな。いいでしょう、受けて立ちますぞ！」

ライアスも同じく、構える。

「ふっ、そうでなくてはな。さて、主、あなた達は先に行って下され。私も後から追い掛けます」

瀬奈は後ろを振り向き、言った。

「分かった。よろしく頼む！」

光就はライアスの横を駆ける。そして、瀬奈以外の彼の臣下達も後ろ髪を引かれながらも、続く。

「参りましたなあ、抜かされてしまうとは。早く、追い付かなければなりません」

ライアスは頭を掻きながら言った。

「まあ、いいでしょう。容赦はしませんぞ！」

「ふっ、そうでなくては面白くない……行くぞ！」

瀬奈がライアスに向かって走る。

「バブルこうせん！」

それに応じて、ライアスは迎撃のバブルこうせんを放つ。

「忠実は相殺していたが、私にその必要は無い。全てかわす！」

瀬奈はその泡の弾幕を強行突破する。食らったら四倍の電撃を策があつたとはいえ、ためらいも無く突撃した彼女だ。恐れを抱くはずがない。そして、突破に成功する。

「むう、まさか本当に突破されるとは……仕方ありませんな。こちらも覚悟を決めなければ」

「決める必要は無い。すぐに倒してやる！ たつまき！」

瀬奈がライアスを打ち上げる。そして、すぐさま連続攻撃を叩き込み、

「これで終わりだ！ アクアテール！！」

トドメのアクアテールを放つ。ライアスは彼方へと吹き飛ばされた。

「ふっ、他愛もない……」

瀬奈はそう言うと、光就達を追う為にこの場を去ろうとした。しかし……、

「……！ りゅうのいかり！」

その最中、突然泡が飛んで来た。瀬奈は反射的にりゅうのいかりを放ち、全てを相殺することに成功した。

「まさか、まだ立っていられたとは。少し貴様を侮っていたようだな」

「違いますな。もし、貴公がりゅうのいかりをトドメの一撃に選んでいたら、拙者はこうやって立っていられなかったでしょう」

ライアスは瀬奈の連撃を全てまともに受けたのにも係わらず、ケロッとしている。

「ちよすい……敵の水技を無力化し、かつ、自分の体力を回復させる。拙者の特性です。貴公のアクアテールのおかげで、何とか命拾いしましたよ」

ハハハ……と笑いながら言うライアス。

「そうか、そんな特性があるとはな、ふむ、いい勉強になった」
瀬奈はうんうんと頷いて自問自答をしていた。

「だが、そうと分かれば話は早い」

再び、ライアスに近接する瀬奈。

「次にアクアテールを使わなければいいだけだ。たつまき！」

「二度も同じ手は……って、おわっ！」

ライアスはたつまきを相殺しようとしていたが、彼の予想以上に瀬奈の動きが速く、その機を逸してしまい、また宙へ打ち上げられる。

「終わりだ！」

再び、連撃を繰り出す瀬奈。

「りゅうのいかり！」

そして、トドメの一撃を放とうとしたその時だった。

「しろいきり！」

ライアスは目眩ましの霧を出した。瀬奈は後少しの所でライアスを見失ってしまう。

「ふっ、問題無い。またたつまきを使えば良いだけだ。食らえ！」

再びたつまきを発動させる瀬奈。だが、それによって掻き消された霧の中にライアスの姿は無かった。

「なに……どこへ消えた!？」

「やはり、ダメか。拙者の腕では、間接攻撃のみであるような武人を相手取ることではできかねる……こうなれば覚悟を決めるしかありませんまい」

ライアスは瀬奈の後ろの少し遠くに居た。そして、そんな事を言っていた。

「また覚悟か……戦う気が無いなら失せる。貴様は口だけの武人なのか？」

瀬奈はあきれ気味に言った。

「口だけではありませんぞ!……ぐっ、し、しかし……」

ライアスは苦悩していた。

「拙者には……女子を殴ることなどできませぬ！己の主義に反することなど……！」

ライアスは今時……というかいつの時代に生まれても古臭い、珍しいと言われるくらい、潔癖なまでに道徳を重んじる戦士のようだった。

だが、その態度を見た瀬奈は失望と蔑みを孕んだ目でライアスを睨みつけた。

「ふざけるな、何が女子は殴れないだ……！そうか、そうか！だつたら……己の主義に殉じて、何も出来ずに私に殺されてしまえ！」

瀬奈は憤慨し、三度、凄まじい勢いでライアスに接近する。彼はしろいきりを放ったが、瀬奈は二度と同じ手は食わないとばかりに大きく回り込み、ライアスを打ち上げる。

「何が道徳だ、何が己の主義だ、武人にそのような余計な思想は毒以外の何物でも無い！武人は主に何か言われたら、それに従って考える事を付け加えれば良いだけで、それ以外は全て、己の埒外に置き、ただ、己のが武と主に対する忠節のみを考えていれば充分だ！」

瀬奈はこう叫びながら、ライアスに連撃を繰り返す。

「武人に男も女も関係無い。武人はただ武人である……それだけだ。なのに、なぜ貴様はそのような議論をするまでも無い事にこだわるのだ！」

ロケット団の中にも少しは見所のある奴が居るのだな。と、さっきまでは思っていたのだが、期待ハズレも良いところだ。貴様は所詮、自分の主義などという盾を作って、自分の臆病さを隠しているだけだ！そんな貴様が道徳なり騎士道なりを語るうなど、片腹痛いわ！」

瀬奈は思い思いの言葉を連撃と共にぶつけていった。

「……………」

ライアスはただ黙って連撃を食らいながら聞いていた。

「ただ、強き者だけが生き残り、弱き者は屍を晒すだけ。今のような乱世に於いては尚更だ。どうして、下らない思想に振り回されて、

己の生きる道を自ら閉ざそうとするのだ！

戦え！主の為でも、仲間の為でも、自分の為でさえもなく、ただ生きる為に、生きとし生ける者の本能の赴くまま……戦え！」

瀬奈は連撃を止め、りゅうのいかりを発射する体勢を取る。

「……………こころのめ！」

ライアスの目の色が変わった。と、思った瞬間、りゅうのいかりが放たれる。

しかし、それは躲され、ライアスは瀬奈に隣接する。

「……………瀬奈殿！貴公の説教を聞き、拙者、目が覚めた想いにございます。なればこの技、その説教に対する礼として食らって頂く！ばくれつパンチ！」

ライアスは気力を最大限に高めて拳を握り、それを大振りして瀬奈に襲い掛かった。

「何だこの技は。こんなもの、躲すのもたやすい……っ！！なっ……なに……！！」

瀬奈は確かに、拳を躲した。しかし、ライアスは瀬奈がどう動くかを知っていたかのように拳を動かし、ほんの一瞬だが体勢を崩している瀬奈にクリーンヒットさせたのだ。

瀬奈は、かなりのダメージを食らった。しかし、このような切羽詰まった状況下でもなお、彼女は笑いながらこう言った。

「ふっ……………いいパンチ……………だったぞ……………それでこそ……………武人なり……………！！」

「こころのめは相手の動きを見破り、確実にこちらの技を当てる効果がございます。一方、ばくれつパンチは威力は絶大ですが、大振りなため、相手に当てるのが難しい技。これらを組み合わせることによって、最強の技が完成するのです。瀬奈殿、これが私の力ですぞ」

ライアスはそう言うと、再び構える。

「さあ、これで終わらせて頂こう！かわらわり！」

そして、瀬奈に襲い掛かった。

「またこころのめか！？……いや、違うようだ。ならば、躲せる」
瀬奈はライアスの打撃を躲そうとした。だが……、
「はっ……？」

瀬奈の体は瀬奈が動こうとした方向ではなく、明後日の方向に動く。

「混乱か……」

自分の頭の中がグルグルと回り、何が何だか分からなくなっているのを感じる瀬奈。

「仕方がない……りゅうのいかり！」

やけになって、瀬奈は技を放つ。むろん、そんな心と体が一体化していない技が当たるはずもなく、りゅうのいかりは天井に吸い込まれた。

そして、ライアスはその隙を突き、瀬奈に技を決めた。

「ぐうっ……！」

ライアスの掌底を食らい、激痛と共に吹き飛ばされる瀬奈。

「勝負は時の運……今日の所は拙者に分があつたようすな」

ライアスはそう言うと、オボンの実を食べた。彼自身もまた、かなりの傷を負っているのに、このまま追撃してもやられるだけと判断したからだ。それは言い換えれば、彼はもう、この戦いに勝利したという事を確信しているのだ。

「ふざけるな……！私はまだ倒れていない。まだ戦える……！」

「これ以上はやって無駄です。貴公はもうボロボロではないですか」

「私は……また倒れる訳にはいかないんだ！」

瀬奈は再びりゅうのいかりを構える。

「やれやれ……しかたがありませんな。少し、眠らせますか」

ライアスの目の色が変わる。再び、ばくれつパンチを出す気である。

「はあああああっ……！」

瀬奈が裂帛の気合いを込め、後ろで組んだ手を突き出す。ライア

スはその動きを見て、右に飛ぶ。

「む……？」

しかし、りゅうのいかりはライアスがいた場所には来なかった。その紺色の炎は彼の真上を通り過ぎた。

するとその刹那、轟音と共に、巨大な岩がライアス目掛けて落ちてきた。

「な、なんと！？ば、ばくれつパンチ！」

だが、それはこころのめによって脆い場所を狙って突かれたばくれつパンチによって、粉々に砕け散った。

「どうやら、貴公の最後の策も打ち破られたようですね」

ライアスはしたり顔で言った。

「さて、それはどうか？」

「なに……？む、むぐっ！」

耳元で瀬奈の声を聞いたと思ったら、いきなり顔を捕まれたライアス。

「これで終わりだ。10まんボルト……！」

そして、凄まじい電流を浴びせられ、さっき回復した体力もろとも削られ、気絶する。

「ライアス……単純な力比べだったら、どうやら貴様の勝ちらしい。だが、私と貴様には致命的な何かを持っているか持っていないかの違いがあった。その何かとは……兵法だ。確実に勝つ方法を模索するという古人の発想だ」

瀬奈には10まんボルトという水タイプのライアスに対して、ある意味、一撃必殺の威力を持つこの技を使う機会は沢山あった。だが、一度倒れかけてまで、今のこの機会での発動を虎視眈々と狙っていた。それは何故か。

おそらく、瀬奈はライアスの耐久力を恐れたのだろう。本来、彼女の連撃はトドメの技を必要としない。ただそれだけで敵を倒してしまうからだ。しかも、それは並の萌えもんはもちろん、ちゃんと訓練している者でさえあてはまる。だが、アクアテールはそれだけ

では敵を倒すことができない。

ようするに、たとえライアスがアクアテールの威力を吸収しようと、それを凌駕する量のダメージをその前に受けている為、無事でいられるはずがないのだ。しかも彼は三回も食らっている。

それでもなお、ライアスは逆転の一手を打ち、瀬奈を追い詰めた。完全な勝勢だった。だが、彼は予想外の事態に襲われた。死角からの攻撃に気を取られ、死に物狂いになった瀬奈の隣接を許してしまったのだ。彼女は最後の最後まで切り札を残していた。それが10まんボルト。

実の所、瀬奈の目的はライアスを倒すことではなく、時間を稼ぐことだった。だから、長々と説教もしたし、本来なら混乱には馴れ替わって、混乱の症状が発症しないのに発症したふりをするなどして場を作り、彼を戦闘に引き込み、時間を稼ぎまくった。

「ふつ、戦いは勝ち過ぎても負け過ぎてもいけない。勝たず負けずの戦こそが兵法における大勝利だ」

瀬奈はそうつぶやいた。

「主……私は少々、疲れしました。後はお任せしました……」

瀬奈は俯きに倒れた。そして、目を静かに閉じると寝息を立て出した。

第三十一話に続く。

第三十話：瀬奈、知勇を振るうの事（士への目覚め）（後書き）

光就「ちつ、死ななかつたか」

ア蕎麦「！？どういう意味ですかそれは！」

光就「い、いや。なんでもない」

ア蕎麦「はあ……」

光就「てか、お前、その性格で本当に良いのか？やりづらいのではないか？」

ア蕎麦「……本当だじえ。丁寧語は肩がこるじえ！」

光就「やはり、死んでおらぬではないか、初代！」

ア蕎麦「しまった！誘導捜査だったじえ！」

光就「おのれ……しかし、では、私が斬ったのは何だったのか……いや、そんな事はどうでもよい。おい、初代。貴様がたとえ死んでいなかったとしても、社会的には死んだ身。貴様が再び編纂者の座に舞い戻る事は無いぞ」

ア蕎麦「そんなひどい……」

光就「ふん……さあ、衛兵、ア蕎麦（二代目）を呼んでこい。あと、こやつを墓に突っ込んでおけ」

ア蕎麦「ははは……おそらく二代目は呼んでも現れないと思いますぞ」

光就「何だと……まさか、貴様！」

ア蕎麦「い、いやいや、あんなネタ振りされたら応えざるを得なかつたんだじえ！」

ア蕎麦？「念願の編纂者の座を手に入れたぞ！」

ア蕎麦？「……………」。

そうか、どうでもいいね

ニア殺しても奪い取る

譲ってくれ、頼む！」

ア蕎麦？「うわー、何をする貴様ー！」

ア蕎麦「こんなネタ振りをされちゃあ……ねえ」

光就「……念願の社会的な意味で生き返れる世界樹の葉を手に入れ
たぞ！」

ア蕎麦「……………」。

そうか、どうでもいいね

ニア殺してでも奪い取る

譲ってくれ、頼む！

嫌だー！ーっ！ー！」

光就「吹雪！」

＼ピチューンノ

光就「やれやれ、暗愚なコントに二話も後書きを使ってしまった……

……。美空！次回予告を五十語で頼む！」

美空「えーっと……麟さんが本気出します。光就さんも本気出しま
す。以上」

光就「投げやりだなあ」

美空「予告する身にもなって下さいです……五十語じゃ投げやりにも
なるです」

光就「……………」

美空「あつ、そうだ。次話は出来れば八月十五日投稿予定ですけど
……それ以降は少しの間、お休みさせて頂くですよ。ア蕎麦さんも
リアルが忙しくなってきたらしいので。最近の不定期投稿もそれが
原因らしいです」

光就「あやつの場合、それだけが原因ではないがなあ……まあ、と
いう訳だ。読者の方々には迷惑を掛ける。御理解頂ければ幸いだ」
美空「その代わり、来週遅れたら……ウフフフフフ……」

ア蕎麦「ガクガクブルブルガクガクブルブルガクガクブルブル」

第三十一話：千歳、異常に強くなるの事（千歳を無口っ娘にした結果がこれだよ）

やあ、復活のアセロラ蕎麦だじえ！

前回のあらすじ

麟はイワヤマトンネルには侵入したものの、敵の備えが予想以上に万全なのを見て、尻込みするが、千歳の檄により、戦意を取り戻した。

一方その頃、光就達は奇襲に成功し、敵陣への攻撃を開始した矢先、その守将、ライアスに行く手を阻まれてしまう。彼の武勇に感銘を受けた瀬奈は彼に一騎打ちの戦いを挑む。知略と武勇を総動員した激戦の末、瀬奈はライアスを撃破する。時間稼ぎという本来の目的も達成し、瀬奈は戦略的勝利も得た。しかし、彼女は力を使い果たし、戦線からの脱退（居眠り）を余儀なくされたのだった。

第三十一話：千歳、異常に強くなるの事（千歳を無口つ娘にした結果がこれだ）

「成敗……」

千歳はそれだけを言って、他に先んじて敵陣に飛び込んでいった。

「さあ、千歳さんに遅れてはなりません！進軍を開始するのです！」

麟は采配を振るいながら、進む。

「……敵発見、成敗……」

千歳は敵の一団を見つけると、両刀を構え、突撃する。

「一人で来るとは愚かな……行くぞ！」

十人掛かりで迎撃するのはナツシーと呼ばれる萌えもん。

「秘技……蜻蛉返り……！」

千歳は更に走るスピードを高めたと思ったら、彗星のようにナツシーの一団の一人に飛び掛かり、それを斬りつけた。

「なんとこの威力だ……しかし、うかつであったな……」

いつの間にか大きく後ろに下がっていたナツシー達は千歳にたまごをぶつけた。一見、ギャグみたいなシュールな光景だが、それは技だった。しかも、超強力で、鬼畜な技の一つ。

その技の名はたまごばくだん。その威力は極めて高く、その破壊力たるや、それ一つだけで並の建物なら、一瞬で半壊状態にしてしまいうくらいである。

「我々は一人欠けようと、それにうるたえたりせず、ただ己の職務をこなす。目の前で仲間を倒して我々の動揺を狙ったのだから、見当外れだったようだな」

たまごばくだんが爆発する。爆音と硝煙が周囲を包んだその時、ナツシーは爆音以外に仲間達の小さなうめき声を聞き、後、耳元で囁きを聞いた。

「見当外れは……あなた……」

千歳はナツシーの首筋に剣の柄を強く打ち付ける。

「馬鹿な……確かに爆弾は当たったはずなのに……」

ナツシーは倒れた。

「千歳だつて……敗戦から学ぶことも……ある」

千歳は静かにそう言った。

「千歳さん！大丈夫……なようですね。心配させないで下さいよお。すぐ近くで爆発音が聞こえたから何事かと思いましたよ」

麟が駆け付けて来る。むろん、隊列は乱さずにだ。

「ごめん……」

千歳は謝罪の言葉を口にする。その時、麟は気絶したナツシーを見ていた。

「それにしても……十人を一瞬で倒すなんて凄いですね」

「とんぼがえりが相性抜群だったから……」

むろん、それだけではない。彼女が爆風を躲しながら、敵を討てたのは、とんぼがえりの特殊効果のおかげである。

とんぼがえりは通常、攻撃すると、一端、もといた場所に戻る事になる。だが、それは余りにも勢いのある突撃であるからであり、突撃した際の反作用によって戻らざるを得なくなるのである。逆を言えばその反作用による力をコントロール出来れば術者の思う所に跳べる訳だが、そんな事、口で言う程簡単ではない。

故に、それを実現したと言ったら、あの人は驚くだろうな……と千歳は心の中でほくそ笑んだ。

「そうですね……おっと、今は戦闘中でしたね。気を抜いては行けません。さあ、千歳さん、今度は一緒に進軍しましょう」

「うん……」

千歳は静かに頷いた。

「サイコカッター！！」

光就の残月から念力の刃が大量に放たれ、陣内のあらゆる物を破壊していく。

「ふっ、脆い脆い。いくら緊急用の陣とは言えもう少し備えをしておくべきと思うのだがな」

「そうですね、柵もぞんざいな作りでしたし……まあ、奇襲する自分達がまさか、される側に回るなんて思ってもいなかっただんですかね」

「だろうな」

光就と美空さんはそんな事を言い合っていた。向かって来る敵を討ちながらである。

全てうまくいった。敵は奇襲に慌て、四散し、向かって来る敵も、今までの強行進軍による疲れで、満足に戦えない状態である。だが、一人、この戦況に疑問を持った者がいた。軍師、竹中昌明である。

（この戦いもここまで経ったら、そろそろシオン義勇軍が動いても良いはず……なのに、彼らの気配が全く感じられない……何故でしょうか？）

昌明は嫌な予感がした。この余りに出来過ぎた今の戦況が、そして、いつまでもこびりついたように脳裏に残る疑問が、自分達に災いをもたらすのではないかと。

（もし、これが敵の罠だとしたら、今の我々はまな板の上の鯉に過ぎません。……撤退すべきでしょうか）

昌明の頭に様々な考えが錯綜する。

（しかし、まだ様子を見ても良いかもしれません。一応、この旨を殿にお知らせしておきますか）

昌明は思案にけりを付けると、光就にテレパシーを発した。

「殿……」

「……聞こえている。何か起きたか？」

「殿……敵も何らかの策を弄している可能性があります。警戒を決して解かず、しかし、迅速に敵陣を粉碎して下さい」

「ああ……分かった。だが、お主も気を付けよ。もし、敵に策があったとしたら、その標的は我らの中で一番戦闘力の低い者……それ

はむろん、私でなければ、美空でも瀬奈でも龍宗でも忠実でもない」「ははは……耳が痛くなる話ですな……。しかし、ご安心下さい。私は守りには事を欠いていません。自分一人だけの身なら何とか守り切れるでしょう」

「そうか……では、また何かあつたら連絡をよこせ。さらばだ」
テレパシーが切れる。

「……策……」

昌明はふと、何かを思い付いたような感覚に陥った。
(たしか……)

昌明は頭の中の兵法書をめくり出した。

(山岳地帯における奇襲対策……)

かつて、ボロボロになるほど何度も読んだ兵法書。その一字一句の中からこの状況を的確に表すものを探す。

(……擬陣陽動の計……はっ！)

「こ、これです！早く、殿にお伝えねば」

再び、昌明はテレパシーを開始しようとした、その時だった。

「ぐうっ！」

突如、昌明は腰の辺りに衝撃を受け、倒れた。

「当たったか！よし、奴を捕らえろ！」

(ま、まずい……身体が動きません。電気を帯びた飛び道具を食らいましたか……)

だんだんと意識が薄れていくのが分かる。昌明は最後の力を振り絞り、

「ぎじん……よう……どう……！」

光就にこう伝えた。

「昌明！……昌明！」

光就は何度も問い掛けるが、無情にもテレパシーは途切れてしま
う。

「くっ……」

「光就さん……どうしたんですか？」

美空さんは心配そうな顔で光就到に聞く。

「……昌明が敵の手に落ちた……」

「えっ!？」

「それだけではない、我らは今、敵に包囲されている」

光就は下唇を噛みながら言った。

「そ、そんな……シオンの義勇軍が駆け付けて来るんじゃないんですか……?」

「おそらく、今、彼ら（シオン義勇軍）も敵の陣を攻撃しているだろう。だが、実際我らはそれに合流できていない。何故か？それは……」

「敵陣は二つあったのです！一つは私達が攻め良い場所に、もう一つは仲間の攻めやすい場所に！」

麟は魂の底から出すように、叫びに近い声で言った。

「敵は巧妙でした……おそらく、ここ以外のもう一つの陣はあえて雑に作って油断を誘ったんでしょう。そして、この陣ではあたかも焼き討ちにあつたかのように見せ掛け、私達をおびき寄せた！」

「御名答だ、寺沢麟」

麟にパチパチと拍手をした男がいた。山のような体格に、それと同じかそれ以上の大きさを誇る大剣を背中に刺しているこの大男こそ、バレルである。

「何で……あなたみたいなのが……ここに……?」

千歳が両刀を構えながら問い掛ける。

「はっはっはっ、どういう意味だ？」

バレルは豪放に笑いながら言った。

「とぼけないで……その大剣を振るえば、大地をも揺るがし……知を振るえば、三軍が惑い……あなたが戦場に立てば、それだけで敵は敗北を知る……」

「随分と褒め讃えられたものだなあ」

「戦いにおけるありとあらゆる能力に長け、そのどれもが万人を凌駕する破格の才覚と実力の持ち主……戦いの化身と呼ばれたロケット団随一の名将……ロケット団五幹部筆頭……威風の……バレル！」

「はっはっはっ、ばれちゃったか……じゃあ、一気に蹴りをつけてやるっじゃないか、お嬢さん達？」

大剣を抜き払い、バレルは言った。

「はああああっ……！」

そして、氣勢を上げながら、その巨体からは想像が出来ないほどのスピードで千歳に突進して来た。

(なんて勢い……こっちも全力でぶつからないと押し切られる……) 千歳はそう感じ、自分より遙かに力の強い敵に真っ向から突撃した。むろん、まともに当たる気はさらさら無い。

「ほう、向かって来るか……その心意気やよし。こちらも礼を尽くさねばな！」

バレルはそう言うと、大剣を薙ぎ払った。

「秘技・蜻蛉返り……！」

千歳はバレルの斬撃を躲し、その大剣を足掛かりに、もといた場所へと反転する。

「ほう、なかなかどうして結構な手練ではないか。無口な方のお嬢さん」

「光荣……！」

もつとも、あなたの前では十分しゃべりすぎたけど……と思う千歳だった。

「じゃあ、これは躲せるかな？サイコカッター！」

バレルは大剣に念力を通し、振り下ろす。すると、巨大な念力の刃が凄まじい速さで千歳に向かって来る。

「……………」

だが、千歳は慌てなかった。サイコカッターを十分に引き付け、少しだけ横に動く。それだけで躲してしまった。所謂、ちょん避けである。

「やるねえ、でも……」

バレルは指を引いた。すると、さっきまで壁へ直進していたサイコカッターが再び、千歳に向かって突進してきた。

「更に、サイコカッター！」

そして、また大剣を振り下ろし、二つ目のサイコカッターを放つ。

「……ありがとう……」

千歳はそう言うと、再び引き付け、躲そつとした。が、

「……………」

躲さなかった。だが、千年は無事だった。むしろ、躲していたらただじゃすまなかっただろうが、サイコカッターは千歳に当たるか当たらないかの寸前の所で急激に軌道を変え、彼女の斜め右と斜め左を通過した。

「胆力もあるか……見事！」

「千歳を試してる……？バレル……あなたがそんな事してる間に……」

「私はこんな技の準備をしてたんですよ。はかいこうせん……」

「なっ、何！」

麟は全身からオーラを発し、その全てを圧縮し、光線にして放つた。

「しかし、この距離なら避けれる……」

「逃がさない……」

千歳はおいうちを仕掛けた。まさに言葉通りの技だ。

「とんぼがえり……」

そして、千歳は反転する。彼女のその動作が示す事、それは……。

「むっ……」

はかいこうせんがバレルに後少しの距離まで接近している事である。

「ここまで近付かれては避けることは至難の業……仕方あるまい！」

バレルは大剣を構え、防御姿勢を取る。はかいこうせんを真っ向から防ごうというのだ。

「うおおおおおつ!!」

はかいこうせんの凄まじい力の奔流がバレルを襲う。

だが、バレルの気迫は麟のはかいこうせんを徐々に押し出し始めた。

「そんな……」

「はああああああつ!!」

そして、ついにバレルははかいこうせんを打ち消してしまった。

「やれやれ、お嬢さんがこんな危険な技を使っちゃいけないよ」

バレルは首を回し、腕を鳴らしながら言った。

「にしても、厄介なお嬢さん達だ。ここは一気に勝負を付けてしまった方が良さそうだ。よし、行くぞ!」

バレルは大剣を天に掲げた。

「何を……?」

「……!まさか……」

「これで終わりよ!じわれ!!」

そして、その大剣を勢いよく地面に向けて振り下ろす。すると、

まるで水面に張った氷が割れるように地面が割れ出し、そこから巨大な地割れが姿を現した。

「よつと!」

「……!」

麟は飛び上がることによって、なんとか地割れを避けたが、千歳の場合は足場も全て地割れと化してしまい、落ちるしかなかった。

「はっ、千歳さん!」

もう間に合わないと思ったその時……!

「捕まっつてですっ!」

その声を聞き、千歳は懸命に手を伸ばし、彼女の手を掴んだ。

「あなたは……久しぶり……」

千歳を助けたのは、純白のローブと翼に黒の長髪と黄金色の目の少女。神風美空さんである。

「サイコブレード!!」

「むう……！サイコカッターの上位変換技だと……！」
バレルは何とか打ち返す。

「ようやく会えましたな。さあ、父上、私と共にマサラに帰りましよう。拒否権はありませぬ」

漆黑マントの戦士、浅井光就も駆け付けた。

「龍宗は……？」

千歳が問い掛ける。

「奴は、私の仲間の救出に向かわせた。直に来るだろう」

光就は答えた。

「ふふふふ……ははははは……はっはっはっはっはっ！まさか、光就が生きていたとはな。リストを見た時、まさかとは思ったが、それが自分の息子だったとは……俺は嬉しいぞ。美羽は元気か？」

「残念ながら、すこぶる健康でございます。さあ、母上に『かたづけ』られたくなければ、大人しく私と共に帰りましょう」

「それは出来ない相談だ」

「そうですね、仕方ありません。ならば、私が母上に代わり、父上、貴方を『かたづけ』させて頂きましょう！美空、行くぞ！」

「はいです！」

光就は斜面を滑り降り、バレル改め浅井光秀と対峙した。

第三十二話に続く

第三十一話：千歳、異常に強くなるの事（千歳を無口っ娘にした結果がこれだよ）

美空「急展開過ぎてワロタですう」

光就「言うな……」

美空「でも、光就さんのお父さんってあんな人だったんですね。ちよつと意外でした」

光就「どういう意味だ？」

美空「うーんと、もつと光就さんの雰囲気に近い感じの人かなあ、つて勝手に思ってたんですけど、全然違ってたですう」

光就「自分で言うのも何だが、私のような性格で組織の一員として成功すると思うか？」

美空「そんなことな……ですね……」

光就「であるう？」

美空「……」

光就「何を黙っているのだ」

美空「光就さん、ついに開き直りましたね。自分の性格に」

光就「うむ！」

美空「だめだこの光就さん早くなんとかしないとです……」

光就「フフフ……」

美空「さて……、前話の予告通り、しばらくは休刊させて頂きますよ。次話投稿は九月中ですう」

光就「……何か投稿が遅れているような気がするが、何も言わないのだな……まあ、良いか、面倒臭いし」

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

前回のあらすじ

シオン義勇軍は榊原千歳の快進撃によって、勢いづいていた。一方その頃、光就達もまた、凄まじい勢いで猛攻を続けていた。両者ともに圧倒的優勢。しかし、この出来過ぎた状況に違和感を感じた光就の軍師、竹中昌明は敵の計略を看破するが、敵の手に落ちてしまふ。

そして、麟と千歳達も窮地に立たされていた。

彼女達を襲った一人の謎の男。それはロケット団五幹部筆頭、威風のバレル。またの名を浅井光秀。浅井光就の父であった。

麟達は必死に抗うが、ついに、追い詰められてしまふ。しかし、その時、光就と美空さんが混迷の戦場に現れ、彼女達の窮地を救い、バレルに刃を向けた。

光就VSバレル。相容れぬ親子対決の火蓋が今、切って落とされた……。

第三十二話：光就、因縁を晴らさんとするの事（美空さんのマジギレ）

「そうですね。ならば、仕方ありません。私が母上に代わり、父上、貴方を『かたづけ』させて頂きましょう！美空、行くぞ！」

「はいです！」

光就は斜面を滑り降り、バレル改め浅井光秀と対峙した。

「参ったな……、やることも終わった事だし、戦っても意味が無い……仕方あるまい」

「何をぶつぶつ言っているのだ。剣を取られよ！」

考え込むバレルに、痺れを切らした光就是一喝した。

「決めた……。サイコカッター！」

バレルは決断をし、光就到、千歳に放ったそれよりも更に大きなサイコカッターを放った。

「サイコキネシス！」

光就はそれに対し、サイコキネシスでサイコカッターの勢いを殺し、

「はっ！」

刀で切り裂いた。サイコカッターは跡形も無く霧散した。

「なかなかやる。だが、甘い！」

バレルはその隙に光就の後ろを取っていた。

「ちっ、テレポート！」

光就は敵に背を向けてしまっている、この状況を打開すべく、バレルの背後へ瞬間移動する。

「光就さん！危ない！」

「……！？」

「そう簡単に後ろは取らせんぞ。喰らえい！」

だが、光就のワープアウト先にはバレルが大剣を振り上げて待っていた。しかし、光就もとっさに大剣を受け止める。

「むむむ……」

光就は唸った。なぜなら光就の得物は長刀。対して、バレルの得物は太刀。鏝せり合いでは、まず勝てない。

かと言って、今この状況から抜け出すのは至難の業。万事休すであつた。

「援護……」

だが次の瞬間、千歳がとんぼがえりを放った。バレルが千歳に気を取られた一瞬の隙を突き、光就は鏝せり合いから抜け出す。

「助かった。礼を言う、ラッタ！」

「千歳でいい……マスターが名前では呼ばないのに……他のマスターが千歳を名前で呼ぶのも変な話……だけど」

千歳は自虐的に……いや、本当はそうじゃないのかもしれないが、とにかく表情は変えずにそんな事を言い、彼女は両刀を構える。

「あやつは萌えもんを名前で呼ぶのは好まぬからな。それに……奴にとってはその決断さえ思い切つたものだったのだ……」

「どういう意味……?」

「いつまで喋っているつもりだ? こないならこちらから行くぞ、じわれ!」

痺れを切らしたバレルが再び、その太刀を地面に叩き付ける。地響きと共に、奈落への門が開かれる。

「千歳!」 「……了解!」

光就と千歳はほぼ同時に右と左それぞれ別方向に跳び、地割れを避ける。

「サイコカッター!」

そして、間髪入れず、光就はサイコカッターを、今度は時間差で複数放つ。

「むっ……」

バレルは次々と放たれるサイコカッターを捌く。彼にとっては最も簡単な事だが、むろん攻撃はそれだけでは済まない。

「すてみタックル……!」

逆側に跳んだ千歳が凄まじい勢いでバレルに接近し、張り付いた。

「ぬう……!!」

流石のバレルも片方の腕だけで、すてみタツクル中の千歳を押し戻す事は不可能で、じりじり押されていく。

「サイコカッター、全開!」

しかも、もう一方の光就もサイコカッターの弾数を更に増やし、バレルの動きを制限する。

「今だ、美空!」

「何っ!?!」

「はいですっ! ブレイブバード!!」

そして、二人に注意を向けすぎて、バレルの死角になっていた美空さんが、ブレイブバードを放つ。二人の攻撃を防ぐのにいっぱいいっぱいだったバレルに、それを回避する術は無く、猛禽の形の闘気を纏った美空さんもろとも向こうの岩壁に突っ込んだ。そして、美空さんはクルクルと空中バク転しながら戻ってきた。

「あいててて……ちよつと今回は反動がきついですが……でも、ということはかなりのダメージを与えられたはずですよ!」

美空さんは痛みながらもそう言っただ。

ブレイブバードは闘気を溜める時間によっても威力が変わる。ただし、威力の高さはその反動の大きさにも比例する。それは威力を高めた分、自分の負担も大きくなる事を示しているが、彼女に迷いは無かった。

だが、そのようなとてつもない攻撃を受けたにも関わらず、

「ふふふ……今の攻撃は効いたなあ……」

バレルは平然とした顔で大剣の柄に手を置きながら、屹立していた。

「そ、そんな……」

美空さんにとって、これはショックだった。今のブレイブバードは自分の全力だったからだ。

「にしても、さっきのはかいこうせんといい、こつも物騒な技ばかりを使いおつて! やはり、貴様等を野放しにする訳にはいかん。こ

の地で屍を晒してもらおうぞ！」

バレルはそう言うと、再び、大剣を振り上げた。

「またじわれか！総員、退避せよ！」

「否！じわれなどではない！」

バレルは大剣を地面に突き刺した。そして、それをそのまま横に払う。地面に大きな裂け目が出来た。

「一体、何を……？」

光就が訝しんでいると、バレルは大剣を地面から引き抜くと、作った裂け目に手を掛けた。すると、地面が揺れ動き、直径数メートルの岩が引っこ抜かれた。

「なっ……！」

「……………！」

「えっ！？」

「驚くのは、まだ早い！」

バレルはその引っこ抜いた岩を天高く放り投げ、自身も高く跳躍し、大剣を構える。

「サイコブレード！！！」

光就のそれと同じ様に、バレルの大剣が紫色に光る。

「哀れな反乱軍共よ、俺の剣の錆になれる事を誇りに思いながら死にいくが良い！」

バレルはサイコブレードで放り投げられた岩を何度も何度も切り裂いた。岩は凄まじい衝撃を喰らい、崩壊を始める。

「奥義・ロックシャワー！！！」

頃合いと見たバレルはそう言うと、幾度となく斬られていてもなお、その形を保ったままである岩にサイコブレードを思い切り叩き付けた。遂に、岩は完全な崩壊を起こし、その砕かれた無数の欠片は隕石の如く、天から光就達を襲う。

「くっ、まずい！サイコブレード！」

光就もサイコブレードを発動させる。

「散れ！サイコカッター！」

そして、そのまま無数のサイコカッターを放つ。それらは次々と降り注ぐ岩を破壊していくが、岩の絶対数がそもそも違いすぎる。サイコカッターは焼け石に水だった。

「くっ、駄目か……だが」

光就はサイコブレードを回し、盾の様にする。

「たとえ、相殺出来なくとも、全ての岩が私に来る訳では無い。これでなんとか防ぎ切れるだろう」

「ふん、お前は良いかもしれないが、彼女達はどうかかな？」

「何っ！」

光就は千歳と美空さんを見た。美空さんはただ呆然としており、千歳は両刀を構え、精一杯の防御を行おうとしている。

「くっ……!!」

あの時、退避していなければ、二人に襲い掛かる岩も防げたかもしれないが、こうバラバラではもう助ける術はない。

千歳には有効な防御技がもしかしたらあるかもしれないが、美空さんにはそんな技など無い。しかし、彼女を助けに動けば、自分の防御が疎かおろそかになる。結局、光就は防御を続けるしかなかった。

「死に絶えよ！」

光就達に岩の雨が降り注ぐ。

「むっ……!!」

光就は一つ目の岩を弾く。一つ目にも関わらず、凄まじい衝撃が全身に走った。

そして、二つ目、三つ目と、光就の体の半分ぐらいの大きさの岩が容赦無く襲い掛かる。その度その度に耐え難い衝撃が走る。

「うおおおおおおっ!!」

しかし、光就は決して、サイコブレードの回転を自ら止める事はしなかった。それは理性や意識をも超越した生きる為の本能がさせたものだった。

何回、岩を弾いただろうか。やがて、衝撃が全く来なくなる。光就はむろん、サイコブレードの回転は止めず、様子を見た。どうや

ら、敵の技は収まったようだ。

「……………」

光就は回転を止めた。しかし、サイコブレードは発動させたままにしておく。そして、そこで始めて、彼はこの惨状を目の当たりにするのだった。

「な、なんだこれは……………！」

自分が立っている少しの部分以外は皆、岩とその破片に覆い尽くされていた。

「美空……………千歳……………」

自分でさえ、防ぐのがやっとだったあの技を防御技も無く、まともに喰らってしまった彼女達はおそらく……………光就はそう思った。

「ほう、生きていたか。感心感心」

バレルが道の岩を避けながら、言った。

「父上……………いや、バレル！貴様だけは……………貴様だけは許さんぞ！」

「何をそんなに怒っている……………もしや、あの二人の中に恋人でもいたか？」

「黙れ！」

光就は冷静さを欠いたまま、バレルに突進する。むろん、そんな無茶苦茶な攻撃が通用するはずがなく、躲され、逆に体を捕まれ、思い切りに地面に叩き付けられる。

「げぼつ……………！」

口の中に血の味が広がった。と、思いきや、

「吹っ飛べ！」

物凄い勢いで向こうの岩壁へ投げつけられた。途中何度も、光就の体は地面の岩にぶつかつたが、その勢いが衰えることは無かった。

「ふん……………死んだか」

うめき声も聞こえてこなくなったのを見て、バレルはそう判断し、この場を立ち去ろうとした。

「待て……………！まだ、決着は……………着いていない……………！」

だが、背後から蚊の鳴くような声が聞こえたと思ったら、サイコ

ブレード状態も解けた、光就の残月がバレルの背中を切り裂いた。
「ぐっ！ちよございな！」

バレルは裏拳で光就を吹き飛ばす。もはや、抵抗する力もない光就は岩に激突し、うなだれた人形のようになる。しかし、そうなくてもなお、刀だけはしっかりと握っている。

「体も動けなくなっているくせに、まだ戦意を失っていないか……それでこそ、戦士だ。ふん、戦士は戦士らしく、華々しく散らせてやろうぞ」

バレルは大剣を振り上げ、まさにそれを光就に振り下ろさんとした。その時、岩の陰に隠れていた者がバレルに襲い掛かった。

「なっ、何故、貴様が……！」

「人の力を……舐めないで……！」

千歳だった。千歳もすでにボロボロだが、バレルに渾身のすてみタツクルを喰らわせた。バレルが再び、今度は地面の岩も巻き込んで吹っ飛ばされる。

「光就さん！今すぐ回復します！」

美空さんも駆け付け、光就の治療を開始する。

「（二人とも、生きていたか……良かった……）」

「喋っちゃダメですっ！」

美空さんは涙を流しながら言った。

「（美空、頼みたい事がある……）」

「な、何ですかっ！？何でも言っして下さいっ！」

「（力を貸してくれ……この状況を打破する為に、ある人物を呼ばなければならぬ……しかし、今の私にはテレパシーを送る力も残っていない。だから、お前の力を分けてくれ……）」

「は、はい！わたしの力など、いくらでも分けてあげます！」

美空さんはそう言い、手を差し出す。

「（すまない……）」

光就は美空さんの手を握り、テレパシーを開始する。

すると、その時、岩を吹き飛ばす音がした。バレルが態勢を立て

直したのだ。

「させない……！」

千歳はとんぼがえりをバレルに仕掛ける。彼女にとって、足場の増えた今の状況はとても有利に働いている。

「おのれ、ちょこまかと……食らえい！」

「退避……！」

バレルは千歳を攻撃したが、寸前で、千歳は回避に成功し、光就達の所に着地する。

「おのれ！」

バレルは正面の岩を薙ぎ払い、道を作る。

「次から次へ、実に目障りな奴らだ！ふん、これで三人とも葬ってくれん！真・サイコカッター……！」

バレルは紫の光に包まれた大剣を正眼に構え、薙ぎ払う。すると、前までのサイコカッターとは比べものにならない大きさのそれが、光就達へ向かってきた。

「……おししようさま、このような所で貴女様から賜りましたこの力を使ってしまう事、ご容赦下さい。しかし、わたしにとっては、今この時が一番必要な時なのです！」

美空さんはそんな事を呟きながら、光就達の前に立つ。

「（美空……）」

「……！美空さん……！」

「イモータル・ファイアーウォール……！」

美空さんは炎の壁を張る。その壁はバレルの技を完全に防いでしまった。

「ふん、こんなもの……かわらわり……！」

バレルは急接近し、壁を破る拳を放つ。炎の壁は跡形もなく消え去った……と思いきや、

「何……！」

すぐさま、元通りに復活した。

「張り直したか、無駄な事を……かわらわり……！」

バレルは再び壁を破る。しかし、また復活する。

「時間稼ぎのつもりか？なら、壁ごと潰してやるう。かわらわり！」
今度は、向こう側の美空さんも吹き飛ばす勢いでかわらわりをする。しかし、壁は壊せても、向こう側には行けず、壁も復活してしまっただ。

「ば、馬鹿な……壁が自動で復活すると言っのか……！」

「ファイアーウォール、解除」

美空さんは炎の壁を消した。そして、次の瞬間、

「ゴッドバード……！」

更に強い闘気を纏った美空さんが、バレルに突進する。バレルはあまりのスピードに判断が遅れ、喰らってしまう。が、彼も黙って喰らってはいない。美空さんの翼を掴み、受け止めようとする。

「そう来るのを待ってました」

美空さんはそう言ってニヤリと笑うと、直角に上昇する。

「墜ちろ！」

そして、そのまま空中ターンし、急降下し、バレルを地面に叩き付けた。

「ぬう……やりおるわ」

バレルはうめき声をあげながら、立ち上がる。

「フフフフ……、貴方は私を大変怒らせました。これで済むとは思わないことですね」

対して、美空さんは凄まじい眼光をバレルに向けながら言った。

「早くしなければ……」

イワヤマトンネルの悪路をひた走りに走っている麟。彼女ははかいこうせんを撃った後、密かに戦場から撤退していた。なぜなら、今の自分ではあの戦いには付いていけないと判断したからである。

「千歳さん……弱く臆病な私を許して下さい。今の私には援軍を呼

ぶくらいしか出来ることはありません」

麟にとって、はかいこうせんは最強技だった。それをあやつて糸も簡単に防がれてしまつては、戦意も失せてしまう。

「私は未熟者です……」

麟はすっかり落ち込んでしまった。そこに、

「それは大いに違つていてよ」

「!？」

そんな声が突然響いた。このような独特な口調はもちろん、

「玲奈様！来て下さつたのですね！あつ、し、しかし、玲奈様まで出払つてしまつて、シオンの方は大丈夫なのですか？」

「ええ、大丈夫よ。私の後釜を託せる人がいたから」

玲奈はそう答えると、お返しとばかりに今度は麟に質問する。

「それより、なんで貴女は逃げているのかしら？」

「それは……玲奈様を呼びに来たからです。私は未熟者でした。故に、あの戦いには到底、付いていきません。……ですから、逃げたと言われても、私は何も言えません……」

麟は俯いて言った。

「過ぎた事はどうでもよくてよ。それ以上、くよくよするんじゃないわ！」

それに対し、玲奈はそう言つて励ました。

「貴女は未熟者などではないわ。あいつにはねえ、普通の状態じゃあ、間接攻撃が効かないのよ」

「あいつ……？玲奈様、バレルの事を知っているのですか!？」

麟は大層驚いた様子で、玲奈に問う。

「ひよんな事だね……あいつは間接技を問答無用で掻き消してしまふ。麟、あいつは気迫で貴女の間接技を掻き消したのでしょう？」

玲奈は麟の質問に対しては、いつものように答えず、逆に問い返した。

「はい、その通りです」

麟は素直に、問いに答えた。

「あいつ……ってか、あいつの配下達もそうだけど、まあ、とにかく、あいつらの気迫オーラは間接技による力を細分化して破壊する。単発の間接技なら奴に届くことはまず無いわね」

「そ、そうだったんですか……だから、はかいこうせんが効かなかったんだ……じゃあ、どうすれば当てられるのですか？」

麟は衝撃を受けながらも、その対処法を知る為、玲奈に質問する。
「あいつらに気迫を溜める隙を与えないことね。すなわち、連撃の直後とか、仲間が攻撃してる時とかに出せば、いかにあいつらと言えど、間接技を消す事は出来ないわ」

玲奈は冷静にそう言った。

「なるほど。それさえ分かれば、私も活躍できます！玲奈様、ありがとうございます！」

麟は頭を下げ、感謝する。

「いや、それは良いんだけど……にしても、はかいこうせんかぁ……ん？おおっ、良いこと思い付いたわ」

玲奈はボンと手を叩いた。

「麟！私の策に協力してるかしら？」

「もちろんです！どんな策ですか？」

「それは……」

光就達が激戦を繰り広げている中、義勇軍総大将、東条院玲奈が動く。彼女の胸中の策とは？そして、遂にマジギレした美空さんの力とは……？

第三十三話に続く

美空「読者の皆さん！お久しぶりですっ！」

光就「実に久しぶりなのに、こんなに急展開で申し訳ない」

美空「まあ、前回も急展開でしたからねえ。龍宗さん達はどうしなつたんでしょうね？」

光就「我々の方が一段落したらやるだろう。もっとも、そのまま力ツトつて事にもなりかねんがな」

美空「ええー、あのシーンの龍宗さん、とってもカツコイイですよー、忠実君も大活躍だし、カットなんてして欲しくないですよ」

光就「まあ、お前がそう言うなら、カットなんかさせんよ」

美空「やったー！ですっ」

光就「さて、たまには仕事するか。次回は美空が本気モードで暴れまくる話だ」

美空「そして、玲奈さんの真の実力も明らかになるですよ」

光就「次話投稿は……十月九日だ。まあ、例の如く守られるかは微妙なので、期待しないで待っててくれい」

第三十三話：美空、真の力を発揮するの事（美空さんの方がより末期な厨二病賢

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

前回のあらすじ

光就、美空さん、千歳。三人とも力の限りを振り絞り、バレルを追い詰めていたが、バレルの圧倒的な力の前に、美空さんと千歳がやられてしまったと思い、怒り狂った光就は冷静さを欠いてバレルに突進し、返り討ちされてしまう。

だが、無事だった千歳にすんでのところで助けられ、一命を取り留める。

そして、光就を傷つけられた事により、美空さんの怒りが爆発。戦場はいよいよ、混迷の様相を呈してきた……。

「……………」

龍宗は陣幕の影に隠れながら、辺りを見回していた。

「やつぱり、敵が多すぎる。どうしたもんかねえ……………」

龍宗達は敵に囲まれる前に、なんとか逃げ出し、こうやって敵の様子をうかがっているが、敵は時間が経つ毎に警戒を強めているように見えた。

「龍兄、短気をおこしちゃダメだよ。今はひたすら様子を見るんだ。いつか、敵の守りが手薄になる。その時がボク達の動く時さ」

「ああ、わかってる」

忠実が龍宗に忠告したが、今の彼にそれは必要なさそうだった。

「ふーん、ボク、てつきり龍兄の事、すぐ頭に血が上りやすい方だと勝手に思ってたけど、全くの見当違いだったね。見直したよ、龍兄！」

「へっ、誉めたって何も出ないぜ」

そんな風に言い合いながら、彼らは見張りを続けていた。

「ん〜？」

忠実は間の抜けた声を出した。そんな彼の視線の先には…………、

「さあ、我々に刃向かう反乱軍の残党を手分けして探すのです！」

派手な格好をした男がいた。おそらく、彼もバレルの部下なのだろう。

男は数十人の団員達に指示を出した。団員達はそれを聞き、散りになって、おそらく、忠実と龍宗を探しに行ったのだろう。

「（ププツ…………おかしな格好…………）」

「（わ、笑つちやいけねえよ忠実…………ククク…………）」

だが、当の二人は今、その指示を出していた場所の裏側で笑いを堪えるのに必死だった。

「フフフフ……、貴方は私を大変怒らせました。これで済むとは思わないことですね」

対して、美空さんは凄まじい眼光をバレルに向けながら言った。

そして、大きく息を吸い込んだ。

「この地を焦土に化し、光就さんに刃向かう者を灰にしてあげましょう……」

そう言うと、美空さんは地面に大量の炎を吐いた。周りが炎に包まれてゆく。だが、心配は要らない。

「熱くない……」

この炎は化える炎。千歳や光就にとっては癒しの炎である。そう、千歳や光就にとっては。

「面妖な……味方は傷つかない炎だと！」

バレルは炎に囲まれ、まともに身動きが取れない。

「私の炎は正しきを護り、悪しきを討つ……。覚悟することです。貴方に逃げ場など有りはしません」

すると、今度は懐から例の特別製マッチを取り出し、それをナイフを持つように、指の隙間に挟む。

そして、そのマッチに炎をともした。炎はマッチに点火された瞬間、形を変え、刃の様になった。

そして、美空さんはその炎のナイフと共に、翼を広げ、低空飛行でバレルへ突っ込む。

「むっ……」

斬撃はバレルに当たった。だが、美空さんは追撃することなく、低空飛行を続け、バレルの居場所から遠ざかっていく。

「ヒットアンドアウェイ戦法か……小賢しい！」

バレルは五感を研ぎ澄ます。美空さんが次に来る方向を探っているのだ。

「……そこだ！」

美空さんはバレルが身構えている方向から飛び出した。

「喰らえい！」

突撃を敢行する美空さんへ、すれ違いざまに、大剣による重い斬撃を繰り出す。

「やったか!？」

手応えはあった。しかし、遠くから、旋回したような空気を切る音が聞こえた。

「甘かったか……だが、次で仕留める！」

バレルは再び、彼女が来るであろう方向に身構える。しかし……、
「何……!？」

美空さんがバレルに斬りかかったのは、その真逆の方向からだった。バレルの体に激痛が走った。

「ば、馬鹿な……短刀如きの斬撃で何故こんなに痛みが……はっ！」

そう、バレルの背中には光就が死に物狂いで付けた傷があったのだ。美空さんはそこを狙い、炎のナイフの斬撃を繰り出したのだ。

「やはり、弱点はそこ……ですね……！」

美空さんはバレルの様子を見て、それを確信した。

「炎よ、光よ、全て私の力となれ……！」

美空さんの体がまばゆい光と炎に包まれる。そして、更にマツチの炎をドリル状に変形させ、天に掲げた。突進の際、それが前になるように。

「私の炎を、貴方の骸に嫌と言う程刻んであげましょう……ゴッドバード……！」

美空さんが再び、光を纏いながら凄まじいスピードでバレルに突進する。狙いはむろん、彼の真後ろ。

だが、突進する直前、美空さんは翼を手前に引いた。

「……!こつちか!」

すると、バレルは美空さんに背を向けた。そう、彼女は気流を変えることで、わざと音を出していたのだ。本来なら、音も出さずに仕留める事も出来るのに、それをしなかった。なぜなら、そうする

と、敵がどこを向くのが分からなくなるからだ。空気に音を出させていれば、ある程度、相手の向きを操作する事が出来る。だから、一発目は自分のいる方向に空気の音を出したのだ。

お陰で、バレルの強烈な一撃を喰らってしまったが、今、美空さんの周囲は彼女の炎に包まれている。そこに入ってしまったら、即死でない限り……極端に言ってしまうえば、首の皮一枚でも繋がっていれば、すぐに再生できる。

そして、何より……こうやって炎に包まれている事で、その光でゴッドバードの溜めにも、突進にも最後まで気付かれぬ。気づいた時にはもう手遅れ。

「燃え尽きよおおおっ！」

美空さんの超高速低空突進から至近距離で逃れる術は無い。

「!?!」

爆発音がそう遠くない場所から聞こえた。

「玲奈様……！」

「麟、どうやら勝負の決着が付いたようね」

玲奈と麟はその音が聞こえた場所に向かって駆ける。

「……………?」

美空さんは今の状況が理解出来なかった。まっすぐバレルに向かっていったのに、なぜか自分は今その真上にいるのだ。

「貴方……また奇怪な技を使ったのですね」

「いや、それは違うぞ美空」

炎の奥から声が聞こえる。その声の主は……、

「光就さん！良かった……！」

「やれやれ、また死に損なつたみたいだ。まあ、感謝しよう」

美空さんが化える炎をばら撒いたお陰で、光就も傷を癒すことが出来たのだ。

「さて……、美空よ、お主には悪いことをしたな。ゴッドバードの軌道は私を変えた」

光就は左手を上げて言った。

「な、何ですか……、やっぱり、ロケット団とは言え、父親が目の前で瀕死にさせられるのを放っておけなかつたんですか……？」

「そんな訳なからう……父上、もう仕掛けても無駄ですよ」

光就は鋭い眼光をバレルに向けた。

「やれやれ、なかなかうまくいかないもんだ……ストーンエッジ！バレルは大剣を地面に突き刺した。すると、彼の後ろの地面が隆起し、空を貫いた。もし、光就が美空さんの軌道を変えてなかつたら……いかに素晴らしい再生能力がある彼女でも二度と立ち上がる事は叶わなかつただろう。

「……！み、光就さんはこれを最初から見抜いていたんですか……す、すごいですっ！」

美空さんは感嘆した。

「スピードも、パワーも、生命力も兼ね備えているこの少女をこれでなんとか葬れると思つたが、そう易々とやらせてはくれんか……だが、ならば尚更、ここで葬らねばいずれ、貴様らはロケット団に死をもたらず病となる！ロケット団五幹部筆頭、威風のバレル……相打ちになつてでも、貴様らを……討つ！」

バレルの気が増大する。いよいよ、本気を出したようだ。

「さつきは不覚をとつたが、今度はそう簡単に倒せるとは思わん事だな……」

だが、光就の気もまた、凄まじい程の増大を始める。

すると、今度は高台から尊大な感じの聲が響く。

「ウフフ……楽しそうですね。私達も交せて頂けないかしら？」

東条院玲奈、到来。

第三十四話に続く

第三十三話：美空、真の力を発揮するの事（美空さんの方がより末期な厨二病賢

光就「……………？今日は随分お呼びがかかるのが早いな」

美空「そうですね……………意外とわたしのところで書く事が少なかったらしいんです、それで……………」

光就「やれやれ、お主はいろいろと早いからなあ、もう少し回りくどくためるという事も知った方がいいな。まあ、そうなっていたら、私の立場が無かった訳だが」

美空「ですよねー、でも、前回の話の事で恐縮ですけど、光就さんが私がやられたと早とちりして怒り狂うなんて……………なんかちょっと嬉しいですよ」

光就「喜ばれても困るのだが……………私としては斬ってしまいたい過去なんだが。というか、前話の話題を持って来るとか、どんだけ今回の話題無いんだよ」

美空「んーっと、正直言つて、今回の話の場面、実はあんまり覚えてないんです。すごく怒ってた事は覚えてるんですけどね」

光就「……………（やはり、黒美空は美空本人ではないのかもしれないかな……………」

美空「何黙ってるんですか？」

光就「い、いや、ちょっと考え事をしていただけだ（まあ、美空を怒らせたら怖いという事だけは分かった）」

美空「むうー」

光就「な、何だその顔は、ほら、そろそろ次回予告しないか」

美空「あ、はいっ！次回は……………」

千歳「次回……………玲奈と麟も含めた私たち五人が……………大暴れ……………」

美空「勝手に予告しないで下さいですっ！」

千歳「ごめん……………」

美空「あっ、い、いや、べ、別に良いんですよ、さっさと予告しなかつたわたしが悪い訳ですし、泣かないでー、なでなで……………」

千歳「……………／／／／／／」

美空「（照れてる……………かぁいいよ〜！）なでなでなで……………！」

光就「……………千歳が私より一歳年上だと知ったら、美空はどう驚くだろうか……………」

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！この前は次話投稿予告を忘れてしまつて、すいませんでした。

前回のあらすじ

キレた美空さんは強かった。バレルを炎で囲み、逃げられないようにし、更に、その炎の中に潜んで攻撃するなど、一度は彼を追い詰めたが、バレルは罠を張っていた。それに気付いた光就は美空さんの軌道を修正し、その罠から抜け出させた。

そして、すっかり回復した体を奮い立たせ、まさにバレルと争わんとした時、ついに、義勇軍総大将、東条院玲奈が到着。

終わりの見えないこの戦い、いよいよ、決着の時……！

第三十四話：光就、玲奈、共闘するの事（決着、そして、破壊者の降臨）

「さつきは不覚をとったが、今度はそう簡単に倒せるとは思わない事ですな……」

だが、光就の気もまた、凄まじい程の増大を始める。

「フフフ……楽しそうですね」

すると、今度は高台から尊大な感じの音が響く。

「私達も交せてもらえないかしら？」

東条院玲奈、到来。

「お主は……」

「何も言わないで頂戴。今だけはお互い、こいつを倒す事に専念すべきじゃなくて？」

「……その通りだな」

光就と玲奈はそれだけのやり取りを交わすと、武器を構え、肩を並べた。

「ふん、今更一人増えようが、どうということも無い。また、まとめて始末すれば良いだけ……ロックシャワー！」

バレルはそう言い、大剣を振りかざした。その瞬間、玲奈がそれに指を差した。

「麟！今よ！」

「喰らえっ！はかいこうせん！！」

さつきまで高台に隠れていた麟が、姿を現し、はかいこうせんを撃った。

「またか、進歩の無い連中だ……ハッ！」

バレルは遠距離攻撃を霧散させる気を発した。だが……、

「別に、あなたを狙った訳じゃありません。私が狙ったのは……」

はかいこうせんの軌道はバレルの居る位置よりも少し高めだった。それは振り上げられた大剣を狙って撃ったからだ。

「ま、まずい……！！」

「もう遅い。砕け散ろっ！」

はかいこうせんがバレルの大剣を直撃。大破した。確かに、彼の気迫はレーザーなどの遠距離攻撃を無効化するが、それは所詮、自分の体を守る機構に過ぎず、自分の武器の無事にまで関心が回るようなものではない。

「やった……！」

麟はこの結果を喜んだ。むろん、あれ程の戦士であれば、剣を砕いたからといって、安心は出来ないが、それによる弱体化は免れない。

「むむむ、何と言う奴らよ……やはり、あんななまくらを持って来るんでなかったわ……」

バレルは柄だけになった大剣を投げ捨てた。

「こうなれば、素手で奴らを砕くしかあるまい……」
だが、すぐに拳法の構えをとる。

「光就！」

「分かっている。千歳！」

「……（コクリ）」

「麟、それと貴女も……分かってくれたかしら？」

「はいっ！」

五人はそれぞれに目配せで意志を伝え合つと、それぞれ思い思いの方向に飛び出していった。

「バラバラになったか……」

バレルはどつちから片付けるべきか、考えていた。

「父上、私の相手をしてもらいますぞ」

が、光就がバレルに一気に呵成に斬り込んだ。

「懲りない奴だ……あんなに痛め付けられたのに、もう恐怖を忘れてか？ふん、ならば……」

バレルが足を開き、

「今一度その恐怖を、今度は一生、剣を握れなくなるくらいその身に刻み込んでやろっ」

向かってきた光就にストレートをお見舞いする。

「今の言葉……私がそっくりそのまま貴方に返してあげますよ、父上……サイコキネシス！」

だが、今度の光就は冷静だ。そう簡単には喰らわれない。それどころか、その躲した体勢のまま、至近距離から念力波を放った。

「むっ……！」

バレルは何とか躲す。しかし、

「どう致した？右ががら空きですぞ！」

光就の残月がバレルに牙を向いた。サイコキネシスを躲す為、体勢をまるつきり崩してしまった彼にこれを避ける事は不可能だった。

「ぬっ！この程度……！」

「畳み掛けさせて頂こう。メガサイコキネシス……！」

更に、二発分のサイコキネシスを溜めた念力波を、これも至近距離から放つ。三回溜めたギガより、威力は劣るものの、それでも普通のサイコキネシスを凌駕する威力を持っている。

これにはさすがのバレルもたまらず、吹っ飛ばされる。

「さっきは危うく死にかけたんだ……この程度で終わりと思われては困りますな。サイコブレード！」

だが、光就はその先にレポートし、サイコブレードを発動した。残月が紫色の光を帯びる。

「大人しくやられはせん！」

だが、バレルも体勢を立て直し、光就に向かって走る。

「先程の父上の技、真似させて頂く。真・サイコカッター！」

光就は、より長くなっている刀を青眼に構え、ついさっき喰らいかけた、広範囲に渡る巨大なサイコカッターを放った。

「俺にそんなものは効かん！」

だが、バレルは例の気迫でそのサイコカッターを霧散させた。

（光就の奴は、あいつの気迫がどういふものなのか知らないのかしら……？）

玲奈は、今の光就とバレルの戦いのワンシーンを見て、そんな事

を一瞬思ったが、

(いや、違う。光就は……)

それが誤りである事はすぐに分かった。なぜなら……、

「つじぎり！」

光就はバレルが気迫を放ち、自分への注意が逸れるほんの一瞬……一秒分の百レベルの一瞬を狙って彼の視界から消え、後ろに回り込み、つじぎりを放った。

「……！テレポートでは、ない……！」

「その通り、テレポートは本来、移動用であって戦闘用の技ではない。特に、近距離から近距離へ移動した場合、反動のせいですぐには動けない。むろん、その反動と言つのも微々たるものではありますが、その微々がこの戦いでは命取りになる……」

光就は刀を鞘に納めた。すると、バレルの傷が開き、鮮血がほとばしる。

「テレポートを発動させるには、まず最初に自分の位置と、移動先の位置を線で結ばなければならない。この思考に、二秒もかかってしまう……」

そう言っている光就の背後に、バレルの鉄拳が襲い掛かろうとしていたが、寸前の所で光就はテレポートする。

「このように、緊急回避をしたい場合は効果的なのだが、すぐに攻撃に移りたい時は……」

そして、刀を前に構え、凄まじいスピードでバレルに急接近。だが、バレルも黙ってはいない。向かって来る光就に真空波を放つ。

「自分の足で走った方が、相手の気も逸らせるし、なにより……」
「すぐに攻撃できるのだ。サイコカッター！」

真空波を高くジャンプして躲し、そのまま急降下し、バレルの頭上から念力の刃の弾幕を放つ。

「くっ……」

バレルは被弾場所を離れた。気迫のお陰で、弾幕自体は効かないが、それでも急降下してくる光就の攻撃は防げない。

「喰らえ……！サイコブレード・斬！！」

「うおおおおおっ！！」

重力と遠心力を最大限に生かしたサイコブレードの斬撃がバレルを激しく切り裂き、地面へと叩き付けた。

「……終わりか？」

「いや、まだだ……まだ、半分だ」

だが、バレルはこの大技を受けたにも係わらず、未だその戦意と体力が尽きることは無かった。

（浅井光就め、これ程までの腕前とは……私に見せた能力ちからなど、氷山の一角に過ぎないと言うことなのね……）

玲奈はここまでの戦いを見て、かつて、自分が光就と戦った時も、その実、彼は本当の実力を出していなかった……。ということが分かってしまった。

（やはり、貴方は強いわ、浅井光就……でもね）

玲奈は杖を握り、洞窟の天井へ向けた。

「貴方が力を隠しているように、私にも隠している能力の一つや二つあるのですわ！ハイドロポンプ！」

そして、天井に激しい水流を放つ。天井が崩れ、岩雪崩が起きた。

「始まったか……父上、私は一端、退かせて頂きますぞ。……覚悟なされよ、彼女は自分の敵に対しては、手加減を知りませんからなあ。まあ、私が言えたことではありませんが……」

光就はテレポートを発動し、戦場から姿を消した。それに代わって現れたのは、水色のドレスに自分の身長ほどの杖を携えた少女……東条院玲奈。

彼女は岩雪崩によってすっかり穴の空いてしまった天井に向かって杖をかざし、

「空よ、雨雲を作り出せ。風よ、雨雲を運べ。我が戦場に天の恵み

を与えた給え……降りしきれ、豪雨よ！」

あまごいの呪文を唱えた。すると、その天井に空いた穴から、雨が降り出した。ご存知の通り、玲奈は雨の中では二倍の行動力を発揮できるうえ、ハイドロポンプなどの水技も無限に撃てるという、素晴らしい特殊能力を発動できる。

「なるほど。だが……！」

バレルは、雨が降っている場所から離れた。

「たとえ、洞窟に穴を開けて雨を降らせたとしても、それは所詮は一地点の事……。ならば、そこから離れば、そんな作戦に意味など無い」

バレルはそう言い放った。

「ええ、そうでしょうね」

対して、玲奈は平然とそう答えた。

「確かに、私だけではこの状況をどうすることも出来ない。でもね……」

「玲奈様には、私がついている。玲奈様の死角は私が補えばいい！」
バレルの死角から麟が飛び出し、はかいこうせんの構えを取る。

「またか！ハッ！」

バレルはそれに対し、例の気迫を発した。だが、次の瞬間、

「つばめがえし！」

麟は低空飛行で一気に近付き、素早い打撃を繰り出した。さっきのはかいこうせんの構えはブラフだった。

「くっ……卑怯な……」

「私は構えただけです。構えたからと言って、その技を絶対使うわけじゃない。使うと思ったら使わないし、使わないと思ったら使うものです」

剣を持っている時であれば、隙を見て剣を思い切り振ることで、この状況を打破出来たかもしれない。だが、今は丸腰であるがために、まともな反撃をすることも出来ず、ジリジリと後退させられていく。そして、後退した先にあるのは、玲奈が雨を降らしている地

「……………」
玲奈はハイドロポンプの射撃を止めた。バレルがいた場所は連続でハイドロポンプを当てられたせいで、ポツカリと穴が空いてしまった。

「……………」
押し黙る玲奈。その様子は、あたかも何かを待っているようだった。

「……………インファイト!!」

その時、穴から凄まじい勢いでバレルが飛び出す。光就と玲奈の凄惨な攻撃を二回も受け、それでもなお、バレルは立ち上がり、玲奈へ反撃の一手を打ってきた。だが、それは裏目。

「ハイドロポンプ!」

玲奈に油断は無かった。玲奈はもぐら叩きでもするように、出て来たバレルを撃ち、穴へと押し込んだ。

「時は満ちましたわ……皆さん!」

「了解だ」「はいですっ!」「準備万端……」「さあ、玲奈様、号令を!」

玲奈の呼び掛けに、光就、美空さん、千歳、麟の四人が応じる。

「合体技……発動!!」

「三つの念力を一つにし、幾十の力を解き放たん!ギガサイコキネシス!!」

「破邪の炎よ、あらゆる悪を焼き尽くし、浄化させる煉獄の炎となれ!煉獄火炎!!」

「激流の宝玉に全ての力を充填!20%……40%……60%……80%……100%……!120%!充填完了!さあ、弱きを虐げる不逞の輩よ。海竜王の力を味わうが良い!波動ハイドロポンプ!!」

「……………はかいこうせん!!」

かわいそうなことに（まあ、ある意味では、幸運なことに）、麟だけは前置きを付けられなかったが、四人の、超巨大な念力波と化する炎の火炎放射と強力な激流とオーラの集約光線。これらはバレルを標的に四方向から放たれた。ちょうど、綺麗な十字になるように。だが、バレルは穴の中にいるため、それは当たらない。

「榊原千歳……いざ……参る……！」

すると、次は真ん中の高台で様子を見ていた千歳があるうことが、その中心部へ急降下した。

「秘剣・魔反射鏡剣！」

だが、千歳はそのミラーコート剣でそれらを吸収すると、穴にいるバレルを強襲し、外へと打ち上げる。

それを待っていたかのように、再び、四つの最強技が無防備のバレルに斉射される。

「魔反射鏡……反射……！」

だが、それだけではなく、千歳が先程吸収した四つの最強技……その威力を二倍にし、反射した。

「ぐううううわあああああああつ！！！！！」

左右前後真下からの五方向攻撃に、バレルは抗いようもなく、ただ、悲鳴をあげながら、上へ上へと行くのみだった。

「……バースト……！」

五人が声を揃え、叫ぶと、五つの技が混ざり合い、信じられないほどの大爆発を起こした。

「これが人の力……思い知った……？」

千歳は砂埃を被りながら、穴から抜け出し、もういないバレルに向かってそう言った。

「み、光就さん……！」

「ああ！美空、我々の……勝ちだ！」

「オーホツホツ……、ま、まあ、当然ね……」

「ハアハア……ようやく……！」

皆、死力を出して戦った。故に、疲労困憊である。

「いや……まだ終わりじゃない……」

だが、千歳は察知した。敵の気配を。

「そ、そんな……まだ敵が……！」

「しかも……最悪の敵」

千歳の目線の先にいるのはなんと、先程倒したばかりのバレルだった。

「な、なんでよ……！？ちゃんとヒットしたはずなのに！」

玲奈は絶望を味わう。

「何でかだと？ハツハツハツ、良いだろう教えてやる。お前達が倒したのは……みがわりだ。いや、正確には、お前達と対峙したのも、戦ったのも、倒されたのも、全てみな、俺のみがわりだ」

衝撃的事実である。今まで、光就達が五人がかりで死に物狂いで戦い、ようやく倒したあのバレルはみがわりだったのだ。みがわりはその戦闘能力もそれを生み出す際の体力消費と同じように、本人の四分の一。この最強の五人衆さえ、まとまっても、その二割五分の力しか無いということだ。

「なかなか楽しませてもらった……。だが、お遊びはここまでだ。

お前達五人はもう、まともに動けまい。殺すには絶好の機会よ」

バレルは、さっき投げ捨てた大剣の柄を手に取ると、念力をそれに込めた。すると、柄から紫色の光が伸び、剣のようになった。

「まずは、俺を散々苦しめてくれた、白いお前からだ」

バレルは美空さんに照準を定め、大剣を振り上げた。

「死ねい！」

「ひいつ……！」

美空さんは思わず、目をつぶった。だが、斬撃は来なかった。代わりに来たのは、血しぶき。

「美空には……指一本……触れさせん……！」

残った力を振り絞って、美空さんをかばった光就の血しぶきだった。

「あ……光就さん……？ああ……っ！光就さん！光就さん！……！……！」

美空さんは光就を抱き抱え、。声にならない嗚咽を發した。なぜなら、光就はもう、脈も呼吸もしていなかった。

「か、化える炎よ……彼の者に癒しを与えよ……！」

美空さんは化える炎を光就に当てた。だが、彼の脈も呼吸も元には戻らなかった。

「光就さん……うう……っ！」

だが、美空さんは化える炎を当てつづけている。

「ふん、何を悲しんでいるのやら……どうせ、すぐに一緒の場所に行くことになるんだ。寂しくはなかるう？」

「だまれ……！」

「だが、我が息子ながら、光就も馬鹿な奴だ。自分から死にいくとはな……！」

「だまれだまれだまれだまれ！！光就さんの敵！これでも喰らえ！」

美空さんは渾身の右ストレートをバレルに放った。それはある程度は効いたらしく、顔をのけ反らせたが、すぐに身構え、美空さんを岩壁にたたき付けた。

「最後の最後まで、俺を苦しめる奴だな、貴様は！だが、これで本当に終わりだ。死ねい！」

バレルは大剣を、美空さんに向かって振り下ろそうとしたが、今度は、

「守る……！」

「これ以上の暴挙は、この寺沢麟が許しません！」

「あの娘を助けられなくて、海竜王名乗れるかしら、いえ、名乗れませんわ！美空！貴女を、決して死なせはしませんわ！」

千歳、麟、玲奈の三人がバレルに張り付いて、彼を止めようとしたが、難無く、振りほどかれてしまう。

「おのれ、次から次へと俺の邪魔ばかりしやがって！ふん、だが、次こそが本当に終わりだ。さあ、生き絶えよ！」

もう、だれも美空さんをかばってくれる人はいない。美空さんはバレルの大剣に斬られるはず……だった。

だが、あの一手、光就のあの一手が、美空さんの命を救った。

美空さんに襲い掛かる大剣をギリギリで食い止めたのは、濃いピンのマントに細剣の小柄な女剣士。

「久しぶりね……美空ちゃん」

「その声は……美羽さん！」

容姿だけを見ると、十代の少女にしか見えないその剣士こそが、光就が最初に倒れた時にテレパシーを送った相手……彼の母親にして、最強の戦士、浅井美羽その人だった。

第三十五話に続く

第三十四話：光就、玲奈、共闘するの事（決着、そして、破壊者の降臨）（後書

玲奈「オーホッホッホッ！見た見た？私発案のあの合体技、
F S E

ファイブシューターズエクストラバージョン

の威力を！」

麟「名前長すぎですよ……」

玲奈「そんな細かいことは気にしない気にしない。あいつも倒せたらんだし」

麟「それはみがわりだったうえ、本物にコテンパンにされそうになりましたけどね」

玲奈「それは言わない約束。あいつが異常なのよ」

麟「でも、最後に現れたあの人は何者でしょうか……私と同じくらいか年下に見えましたか、あのバレルの剣を受け止めるなんて……」

美空「彼女は光就さんのお母さんですよ、浅井美羽っていう名前です。多分、人間なはずですよ」

玲奈「あの光就の母君ねえ……で、実力は？」

美空「あらゆるものを『かたづけろ』程度の実力です」

玲奈「は？」

美空「玲奈さん、覚悟するといいです。美羽さんが剣を振ったら、最後。戦場は地獄と化します」

麟「そんなに強いんですか……？」

美空「はい。次話投稿は十一月十四日……今回は忘れませんからね。その日（本当にその日か分からないですけど）貴方は地獄を見る……

……！」

第三十五話：美羽、力を見せ付けんとするの事（後半全く違う話になるが、大

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

前回のあらすじ

光就と玲奈はとりあえず今は、共闘を宣言した。

光就はついに力を発揮し、バレルに大打撃を与え、玲奈も、麟の助けを得て、バレルを追い詰めることに成功する。

そして、極めつけは千歳のミラーコート剣の光線と四人の最強技による合体技である。これによって、バレルは完全に倒れたかのように見えた。

しかし、光就達五人がやつとの思いで倒したバレルはみがりです、本物はその四倍の実力を持っていた。

バレルは散々苦しめられた美空さんを斬ろうとしたが、光就が彼女をかばい、犠牲になる。そして、他の三人も彼女を守ろうとするが、本物のバレルには敵わない。

美空さんにバレルの剣が振り下ろされんとしたその時、一人の剣士がその剣を受け止める。その剣士の名は浅井美羽。光就の母にして、最強の戦士、浅井美羽であった。

「久しぶりね……美空ちゃん」

「その声は……美羽さん！」

容姿だけを見ると、十代の少女にしか見えないその剣士こそが、光就が最初に倒れた時にテレパシーを送った相手……彼の母親にして、最強の戦士、浅井美羽その人だった。

「バレルの斬撃を止めた……？何者ですか！？」

「……………」

麟は彼女の實力に驚き、千歳はただただ黙っていた。まるで全て知っていたかのように。

「い、今のうちですわ……………」

玲奈は倒れている光就到近づく。

「このすごいきすぐすりの借りは、いずれ返して頂きますわよ……メデイカルレイン！」

玲奈は激流の宝玉にすごいきすぐすりを注ぎ込み、杖を掲げる。

すると、そこから小さな雲のようなものが出てきた。

それは光就の真上に来ると、雨を降らした。むろん、ただの雨ではない。さつき玲奈が注いだすごいきすぐすりだ。

普通にきすぐすりを使った場合は、一部分しか治すことが出来ないが、これならば、全体をくまなく治すことが出来る。その分、回復量は下がることにはなるが、今の光就は予断を許さない状態であった為、この処置が一番だった。

「むっ……………」

光就は意識を取り戻す。玲奈の技が功を奏したようだ。

「光就……回復した……………」

千歳は美空さんにそう伝えた。

「光就さん……！よ、良かった……………」

美空さんはホッと一安心した。

それにしても、何故、美空さんの炎の回復技は効かず、玲奈の回復技はちゃんと効いたのだろうか？

おそらく、その理由は両者の精神状態の違いであろうと思う。

美空さんは気が動転してしまい、治さなければ……という気持ちばかりが先行して集中できず、いつものような回復量が得られなかった。出血量の多さも彼女の焦りに拍車をかけたに違いない。

一方、玲奈は冷静に光就の傷を分析し、それに合った回復方法をとった。もちろん、彼女は光就の事など好きでないし、むしろ嫌いな部類だ。あの時の怨みを忘れてはいない。ただ、今のところは、バレルという強大な敵を倒さなければならぬという利害関係が一致したから助けた……それだけのことである。

皮肉な話である。想いの厚い者の回復が通じず、想いの薄い者の回復が通じる。もっとも、物事というものは得てして、そういうものなのかもしれない。

「意識を取り戻したわね……、光就！ここは逃げなさい。あなたはよくやってくれたわ……後は母上に任せなさいっ」

美羽は光就が復活したのを見ると、彼にそう言って、ウィンクした。

「……本当は、ここで、共に肩を並べて、戦うべきなのですが……お言葉に、甘えさせて、頂きましょう……。母上、御武運を、お祈りしております」

光就はとぎれとぎれに言った。

「フツ……わたしを誰だと思ってるのかしら？……美空ちゃん、光就をお願いします」

「は……はいっ！光就さんは、必ずわたしが安全な場所に連れていくですっ！」

美空さんはそう返事をする、光就に肩を回し、戦線を離脱した。玲奈と麟も迷いながらも、その後についていったが、千歳は残った。

「あなたも逃げなさい。ここは危険よ」

「しかし……お一人では……」

千歳は、相変わらざるの無表情だが、その目は明らかに心配の色を呈していた。

「安心なさい、倒すつもりで当たるつもりじゃない。適当に戦いをする気を無くさせるだけよ」

「分かりました……御武運を……『グランドマスター』……」

だが、千歳も美羽に説得され、戦線を離れる。

「フッフッフ……ようやく、ようやく、気がね無く戦えるわね？」

美羽が細剣を引き抜きながら、バレルにそう言った。

「全く……君が来るなんて聞いてないぞ」

バレルも大剣を構え、美羽に言った。

「あら、パーティーにサプライズは不可欠よ？あらゆる物語に、イレギュラーが必要なようにね」

「君の場合は、イレギュラーなんて生易しいなんてものじゃない……
フレイカ破壊者だ」

「言ってくれるわねえ……」

美羽は姿勢を低くして、突進の構えをとる。

「むっ……」

バレルも剣を手前に構える。迎撃の構え。

「……」

「……」

鋭い眼光が交差する。二人とも、相手の隙を窺っているのだ。

「行く……はあああああっ！」

好機と見たのか、痺れを切らしたのか、美羽が地面を蹴り、一気にバレルに近付く。

「ぬん！」

バレルは待つていたとばかりに大剣を大振りする。だが、その大剣は虚しく空を斬る。なぜなら……、

「とおっ！」

美羽はバレルと自分の距離の半分も満たない所で、高く跳び上が

った。

「……！まずい！」

バレルは急いで防御体勢を取る。その体勢が成った直後、バレルを何かが襲った。しかも、その一回だけでは無く、何度も何度も積み掛けるように、何かがバレルに襲い掛かる。

「それっそれっそれっ！」

一方、美羽は空中で、しきりに細剣を振り回している。これがバレルを襲っているものの正体だ。

（美羽の剣筋……相変わらず、一つ一つが重い……！）

以前、美羽がロケット団に襲われた時を覚えているだろうか？彼女はそれらを斬り捨てた後、剣を振った。すると、その遺体は跡形も無く『かたづけ』られた。その『かたづけ』をしたのが、この剣筋の衝撃波だ。

あの時は軽く振っていたが、それでも遺体処理には十分過ぎる威力であった。そんなものを今は本気かどうかは定かではないもの、おそらく、ほとんど本気に近い力で振っていた。しかも、それでありながら剣を振っている動作自体はとても早く、常人が見えうるスピードを遥かに凌いでいた。

「むむむ……」

バレルは防御を解きたくても、この剣筋の弾幕が激し過ぎる為、解くことが叶わない。

「フツ、てやあああっ！」

そうこうしている内に落下中だった美羽の足が、地面に付いた。転瞬、今度は本当にバレルに隣接する。

そして、凄まじい早さで剣を振る。嵐の如く襲い掛かる美羽の細剣。バレルは防戦一方である。

「ちっ……これでも喰らえい！」

だが、バレルも黙ってはいない。大剣の重量を頼りに、力任せに美羽を引き離す。

美羽は空中で一回転しながら、体勢を整え、地上に降り立った瞬間

間、ロケットスタート。隙が出来ているバレルにせいけん突き、ハイキック、一回転斬りつけの三連撃を繰り出した。しかもこの手順を相手に知覚させない程のスピードで。

そう、この戦い方……遠くから弾幕を張って相手の動きを封じながら、次の手で敵を圧倒し、一気に勝負を決める、この戦い方は光就と同じ。むろん、それは光就が教えたのではなく、彼女が彼に教え込んだものではあるが。

「ウフフ……ビックリした？まだまだわたし、現役よ？あの時から衰えてなんかいないわ」

「ハハハッ……衰えるどころか、前よりもパワーアップしてるじゃないか、桁違いに」

バレルは流血箇所を治しながら言った。

「桁違いほどじゃあ、ないわ。貴方の周りが弱すぎるからそんなこと思っちゃうのよ」

美羽は照れたような仕草をしながら言った。だが、次の瞬間、眼光を針のように尖らせ、

「それか、貴方が鈍ったか……のどちらかよ」と言った。

「ハハハッ、やれやれ、そう来たか。……仕方ないね。じゃあ、十数年振りに本気でやり合おうかい？美羽！」

「いいわよ、マイダーリン」

そう言い終わると、その瞬間、鏝せり合いが起こった。両者の凄まじい大きさの気と気がぶつかり合い、力が暴発する。そして、天井が大破し、崩れだした。

「むっ！このままでは……！」

バレルは美羽から離れる。

「美羽、この戦いはしばらくおあずけだ。部下達を助けねばならん！」

と言い、バレルは駆け出した。

「……まあ、しかたないっか。なら、一時間後、部下を助けた後、

今度は周りに気兼ねする事の無い所でやり合おうじゃない」

美羽は腕組みをして言った。

分かった。と言う代わりにバレルは頷いた。

「うん？そういえば、光就の配下もまだこのトンネルにいるのよね……ちょうど暇だし、その器、確かめにいこうかな」

美羽もバレルと同じ方向に走り出した。

所変わって、ここは西のバレル軍即席陣。ちなみに、今まで光就達が戦っていた場所は東である。

「龍兄い、どうしよう？」

「そうだよなあ、ずっと隠れてるわけにはいかないよな」

東側の陣で美空さんがキレていた時、西では未だ、忠実と龍宗の二人は隠れていた。

今の、この二人の状況は割と深刻だった。敵は数十人で自分達を探していて、下手に動くことが出来ない。

また、昌明も捕らえられてしまっている。助けなければならぬが、今はそれどころではない。

ただ、彼らには一つだけ幸運なことがあった。自分達の居場所が当然、安全であるということだ。

なぜ、そんなことが断言できるのかと言うと、ここが敵の中心部だからである。敵もまさか、自分達の本陣に隠れているとは思ってもみなかったのだろう。だから、彼らは本陣を調べなかった。

しかし、だからといってずっと安全な訳ではない。どこかで挽回しなければ、龍宗達の勝利は無いのだ。

「龍兄、ボクに良い考えがあるんだ。耳を貸して！」

「おう、どんなんだ」

忠実は龍宗に耳打ちをする。忠実は窮地の時においての頭の回転が実に早い。そうでなければ生きていけなかったからというのもある

ろつが、それ以前にそういう才能があったのだろつ。それを、彼を取り巻く環境が早めに開花させた……それだけのこと。

「よし、分かった。その通りにするぜ、忠実もがんばれよ！」

「うん！」

二人は別れ、龍宗は前へ回り込む。すなわち、敵中に突っ込む。

「!?くせ者だ！」

「うるせえ！」

「ひいひいっ！」

龍宗が敵中で大暴れする。騒ぎを聞き付け、続々とロケット団達が集まって来る。

「メタルクロー！きりさく！ちっ、忠実、まだか!？」

龍宗は来る敵来る敵を捌き続けながら、忠実の策が成るのを待っていた。

すると突然、砂埃が大量に空気中に舞い上がった。

「目が、目がああああ！」

「やってくれたな忠実！よっし、一気に勝負、つけてやらあ！」

砂埃で視界が悪くなるのは龍宗にとっても同じだが、彼は敵を見るのに、目だけに頼っている訳ではない。

かつての、美空さんとの修業、そして、お月見山での修業、この二つの修業では、目を頼れなかった。後者は単純に暗いから。前者は、余りにも動きが早過ぎて目だけで追っていたら、目が回ってしまっからだ。

故に、彼は目以外でもものを見る能力を身につけた。美空さんとの修業はドラゴンクローを身につけさせる為ではなく、あくまでこの能力を得るための修業だったのだ。

「そこだ！おらあ！」

耳で相手の動きを見定め、

「甘えな、お返しだ！」

敵の攻撃による空気の乱れを肌で感じ、

「そらよっ!！」

勘で敵の少ない道を選んでいく。

「お疲れ様、龍兄」

ようやく、敵中を突破した龍宗を出迎えたのはすなあらしを発動している忠実だった。

「じゃあ、仕上げといこうかな、どくばりましんが〜ん！てやあああああつー！」

忠実はベレー帽やぶかぶかのコートから毒針を無数に出し、砂嵐の中に投げ込む。悲鳴は砂嵐の轟音にほとんど掻き消された。

「止まれ、砂嵐！」

忠実は両手をVの字型に挙げる。すると、いままで猛威を振るっていた砂嵐はすぐさま止んでしまった。その中には、毒にやられて体が麻痺してしまったロケット団員達が倒れていた。

「おおつ、すげえな忠実！」

「えへへ……それほども」

龍宗の賛辞に忠実は照れ笑いする。すると、軽い拍手の音が聞こえた。二人は後ろを振り返る。

「フッフ……いいものを見させていただきましたよ、ニードルボーイ」

それはついさつき、二人を探すよう部下に命令していた男だった。あの派手な服の男だ。とはいえ、服自体は白のスーツと地味なのだが、それに付属する装飾品の数が異常なのである。だから、人はそれを派手と断定する。

「でやがったな……忠実！」

「うん、どくばりショット！」

普段の二倍の早さと勢いで放たれた一本の毒針。だが、その男は、躲すどころか、いとも簡単にそれをキャッチしてしまった。

「ダメだねえ、すぐに暴力を振るうなんて。紳士的に話し合おうじゃないか」

男は毒針を折り、スーツの内ポケットに入れた。

「ポイ捨てしない。これ、紳士の常識」

「おつ、おお……うん、確かにそうだ」

「龍兄、敵のペースに乗せられちゃダメだよ」

忠実が忠告する。

「おつと、危ねえ危ねえ。やい、お前、一体何様だ。……俺様は龍宗、浅井光就の一の配下だ」

先に紹介しておかないと、人に名前を問う時は自分からと言いつうだったからだ。

「フフフ……僕のことを知りたいのかい？いいだろう！僕の名はブランカ。ペルシアンブランカ！我が親愛なる友人バレルの為に、戦場にて美しく戦う愛と美の戦士さ！」

白スーツの、ブランカと名乗ったこの男は、その場でクルクルと回り、ポーズを決めた。

……その名前を聞いた時、忠実がビクツと反応したのを、彼は見逃さなかった。

「さあ、キミ達と！僕との！美しい戦いを始めようじゃない、か！」

「紳士的に話し合うんじゃないのかよ」

「僕はそうしたいんだけどねえ、後ろのボーイはどうしても戦いたいみたいだからねえ」

「なんだと？」

龍宗は振り返った。すると、今までの忠実からは想像出来ない程の恐い表情を浮かべながら、ブランカを睨んでいる忠実が視界に入った。

「ブランカ……そうか、お前が……まずは一人……お父さんと、お母さんと、兄さん、姉さん……皆の仇……！」

忠実は毒針を凄い勢いで投げ付けた。

「無粋な投げ方だなあ。しかし、それでも！僕は美しく避けて見せる！」

だが、ブランカは余裕で躲す。忠実はムキになって更に毒針を投げる。その様子を見て、龍宗は忠実の腕を止める。

「や、やめろってそんな狙いの定まってない毒針が当たるか！お前

らしくないじゃないか、忠実！」

「止めないでよ龍兄っ！あいつは皆を殺した……僕が、僕が仇を取らなきゃいけないんだッ！！」

長めの毒針を手に携え、ブランカに突進する忠実。だが、その攻撃も当たることではなく、ただただ躲かれてしまう。

「クソッ……なんで、なんで当たらないんだよッ！！」

「それはキミが怒りだけで戦っているからさ、自分の美学を追求して戦っていないからさ」

「黙れよッ！！」

忠実は、何度も何度も毒針による刺突を繰り返すが、ブランカにはまるで当たらない。

「キミは少し、頭を冷やすべきだね。シャドークロー！」

ブランカの爪が影に覆われ、鋭くなる。それで、忠実を下から一気に切り裂いた。

「うわああああっ！！」

「忠実！」

忠実は仰向けに倒れた。龍宗はそれを受け止める。

「クッ……まだだ……まだ……！」

忠実はよろよると立ち上がり、再び、ブランカに突進する。

「美しき親子愛であったからこそ、これほどまでに、彼を醜く戦わせてしまうのか……でも、僕は美しい原石であるキミに、これ以上汚れて欲しくない。許してくれ、恨むなら弱い僕を恨んでくれ！」

シャドークローが忠実に再び襲い掛かった。今度は悲鳴もあげられず、ただ吹っ飛ばされた。

「た、忠実！しっかりしろ！」

龍宗が意識の無い忠実を抱き抱える。

「大丈夫、死んではいないよ。シャドークローは肉体を切る技ではなく、精神を切る技だから、外傷はほとんど与えない。一日すれば意識を取り戻すさ」

「そうか……そりゃ良かった……でもよ」

龍宗は忠実を陣柵のところ運んでから、言った。

「お前は、忠実を、俺のかわいい弟をいたぶった……その落し前、付けさせてもらおうじゃねえか!!」

龍宗は怒りを奮わせ、凄まじい眼光をブランカに向けた。

「やれやれ、キミも怒りで我を忘れたのか……いや、違う。キミには怒りの中においてでも、冷静にものを見ることが出来るキミがいるよつだ。なるほど、これは面白い……」

ブランカはシャドークローを発動させたまま、戦闘態勢をとる。

「ならば、キミと！僕との！美しい戦いを始めようじゃないか！ちよつど、同じクロー使いみたいだしね」

「上等だ！俺様の正義の爪で、てめえをこまぎれにしてやらあ！」

第三十六話に続く

第三十五話：美羽、力を見せ付けんとするの事（後半全く違う話になるが、大

忠実「やつとボク達の話に戻ったね！」

龍宗「おう！まあ、少しは出てたけどな」

瀬奈「ようやく出番か、腕が鳴るッ！」

昌明「さて、我が知略、如何様に振るいましょうか……」

龍宗「捕虜は大人しくしとけ！」

忠実「まあまあ、龍兄。四話振りの登場なんだからさ、せめてここだけでは自由にしてあげようよ」

瀬奈「ふふっ、忠実はよく分かっているな。本編では何も出来そうにないからこそ、後書きで出番をくれるべきだ」

昌明「そうですね、私なぞは良いところも見せられないまま、捕まってしまうたからねえ……。せめて、後書きでは自由に喋らせて欲しいですね」

龍宗「へっ！ぜいたくなことばっか、言ってんじゃねえよ」

瀬奈「それに、本当に捕まったのかも分からんしな。もしかしたら、龍の窮地を救えるかもしれんぞ」

龍宗「大きなお世話だ。次は久々のメイン回なんだ。お前たちの力を借りずとも、カツコイイとこ見せてやるぜ！」

忠実「頑張つてね」

龍宗「おう！」

昌明「やれやれ……むっ、そういえば……忠実、貴方は一体いくつ毒針を持っているのですか？あんなに投げてもまだ余りがあるとは……」

忠実「え？それはね……えへっ、ひみつ！」

昌明「そうですね。まあ、素直に教えてくれるとは思ってませんが、計算通りですね」

忠実「ふっん、そうなんだ……」

ベレー帽の中からお菓子を取り出して、三人に手渡す。

忠実「みんな、食べようよ」

昌明「ええ、いただきます（一体あの帽子のどこにそんなスペースが……？）」

瀬奈「また、謎が一つ深まったな……」

龍宗「うめえな、疲れている時はやっぱ、甘いものだな」

忠実「さあて……次回は龍兄がブランカ相手に大暴れ！クロー使い同士の意地と意地がぶつかり合う激戦の果てに、笑う者は誰か？そして、光就一行と反乱軍の運命や如何に……？いよいよ長かった第三章も終盤だよ！」

龍宗「おう！次話投稿は十二月十二日だぜ」

瀬奈「む……うまい。菓子がこんなにうまいとは」

龍宗「瀬奈あ！緊張感なさすぎだろうが！」

瀬奈「どうせ、しばらく出られないんだ。羽根くらい伸ばさせてくれてもいいだろう？」

龍宗「いや、普通に出るから」

瀬奈「えっ？」

龍宗「えっ？」

第三十六話：龍宗、死闘を繰り広げるの事（勇将の飛躍）（前書き）

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

前回のあらすじ

美羽は強かった。本物のバレルにさえ互角以上の戦いをし、彼を本気させる。

しかし、彼らはこのような山の洞窟で戦うにはあまりに強すぎた。洞窟は崩れだし、バレルは部下を助けに行かなければならなくなった。美羽は再戦を約束させ、彼を見送り、自身は光就の配下……龍宗達の器を量る為にバレル軍即席陣（西）に赴いた。

一方、まだ、美空さんがキレていた時、龍宗と忠実が策を以って活路を見出だそうとした。

それ自体は大方成功したが、バレル配下の将、ブランカに見つかってしまふ。

そして、彼の名前を聞いた瞬間、忠実激昂。彼に戦いを挑むも完膚無きまでにやられてしまふ。

龍宗は忠実を倒された怒りからブランカに対峙する。クロー使い同士でありながら、正相反な性格の両者の戦いの行方は……！？

第三十六話：龍宗、死闘を繰り広げるの事（勇将の飛躍）

ブランカはシャドークローを発動させたまま、戦闘態勢をとる。

「ならば、キミと！僕との！美しい戦いを始めようじゃないか！ちようど、同じクロー使いみたいだしね」

「上等だ！俺様の正義の爪で、てめえをこまぎれにしてやらあ！」
両者とも走り寄り、距離を詰める。

「シャドークロー！」「メタルクロー！」

技と技がぶつかり合う。だが、やはり威力はシャドークローの方が上。メタルクローを押し退け、龍宗を切り裂かんとしたが、
「りゅうのいかり！」

すぐに態勢を立て直した龍宗はりゅうのいかりを放つ。ブランカは慌てて避ける。

「スキあり、メタルクロー！」

畳み掛ける様に追撃を行う龍宗。今度は相手は態勢を崩してしまっている。威力が劣っているとは言え、勝負出来るはずだ。そして、メタルクローを長く発動していればしている程……、

「（むっ？威力が上がっている……！？）」

爪は硬くなり、攻撃力は増す。

「（このままでは、いずれ打ち負ける……）ハッ！」

シャドークローを解除し、強引に距離を取る。その所為でメタルクローの一撃が当たったが、ブランカは気に留めず、一気に離れた。
「なかなか、やりますね。……ですが、貴方は私には勝てません！つめとぎ！」

ブランカは近くの岩を引っかいた。すると、彼の爪は鋭利さを増した。

「な、なんだその技は！？」

「最新の流行は常にチェックしておかねばなりません。なぜなら、一つ技が変わったり、一つ技が追加されるだけで戦いは瞬く間に変

貌し、今までの戦略は絵に書いた餅に成り下がります。……貴方はもっと高威力の技をたくさん持つているはずです。なのに、メタルクローなどという低威力の技をしつこく使い続ける。それは何故か？理由はこうでしょう。メタルクローで打ち合っていれば、攻撃力が上がるから。違いますか？」

「ぐっ……！」

龍宗は何も言えなかった。

「確かに、それも良い。戦いながら攻撃力を上げられるというのは、疲れ続ける相手に段々と重い負担を強いるという事。単純な戦略ながら、効果は高い。ですが、それもはや意味がありません。古い戦略は常に新しい戦略に淘汰くたされる運命……覚悟なさい！」

ブランカは一気に距離を詰めた。

「ブレイククロー！」

そして、メタルクローを突破。龍宗を激しく切り裂いた。

「ぐっ……まだまだあ！」

だが、龍宗もこの程度で倒れるような戦士ではない。立ち上がる。「へっ……攻撃力が上がってんのはあんただけじゃねえ。俺だっ得上がっている。威力の高い技なら俺の方が持つてるぜ」

「フフフ……ならばやってごらんなさい」

ブランカは余裕を見せていた。

「いくぜ……！ドラゴンクロー……！」

龍宗の腕が炎に包まれる。

「おらあああつ……！」

そして、それを思い切り振り回す。

「ハッ！」

だが、ブランカは高く跳躍し、それを躲す。

「そらっ！」

すると、今度はそれを追いかけるべく、龍宗は腕を振り上げるが、ブランカは空中で回避した。

「くそっ！」

次は腕を振り下ろす。しかし、一足早く着地したブランカに難無く避けられる。

「なるほど、確かに威力は有りそうです。ですが、当たらなければどうということはありません！」

ブランカは再び距離を詰める。

「威力は低くても、当たり続ける技はそれなりの脅威になります。しかし、威力がいくら高くとも、当てるのが難しい技など、脅威にはなりません。少なくとも私にとっては！」

「ちっ……！」

龍宗は迎撃を試みた。しかし、ドラゴンクローは思い通りに動かなかった。

「『過ぎたるは及ばざるが如し』今の貴方にはこの言葉を送りましょう……。さて、この戦いもそろそろ終わりにしてしましましょう。きりさく……！」

ブランカは爪を交差させ、龍宗を切り裂いた。

「ぐうううううっ……！」

先程のブレイククローに、このきりさくはトドメに成り兼ねない一撃だったが、龍宗はすんで思い止まる。そして、痛みに耐え抜き、悲鳴を上げなかった。

「何たる事。まだ、戦意があるとは……！」

龍宗の双眸はブランカの様子を、一秒たりとも見逃さぬとでも言うように鋭い光を絶えず放っていた。

「たとえどんなに傷つけられても、敵が目の前にいる限り、決して無様な姿を見せない……なるほど、素晴らしい気概です。私は貴方のような戦士と戦えた事を誇りに思いますよ」

ブランカは龍宗を称賛した。

「ですが、どんなに気を強く持っていたとしても、やはり、力では私の方が圧倒的に強い。残念ですが、貴方の命、ここで私が散らせて差し上げましょう！」

ブランカはそう言うと、再びきりさくの構えを取る。

「へっ……」

それに対し、龍宗は少し笑った……と思つたら、腕から小さな火の玉を放った。

「……？」

その火の玉はへっへっとして頼りなく進んでいる上に、弾速も遅い。ブランカは糸も簡単に躲した。そしてついに、火の玉は地面に落ち、消えてしまった。

「もう、こんなものしか出なくなつてしまつたのですかな？」

「へっ……そいつはどうか？」

満身創痍の龍宗は勝利を確信したかの如く笑つていた。

「燃えさかれ……ほのおのうず！」

拳を突き出す。すると、ブランカの足下から大量の炎が吹き出す。それはブランカを閉じ込める様に、渦を形成していた。

「さっきの火の玉はこの為の……」

あの火の玉はほのおのうずの火種だったのである。あの時、ブランカが消していれば、こんな事にはならなかつただろう。

まあ、始めて見る、如何にも怪しげなものを弾き返せという事自体、無理な話だが。道理の分かる人間ならば、こんな弾き返して下さいと言わんばかりのものに触れる事など出来まい。

「あんた言つたよな。たしかに、ドラゴンクローは威力は高いが、当たらなければ大丈夫だつてな。だけど、この状況でもよければか！？」

龍宗は再び、ドラゴンクローを発動し、渦の中のブランカ目掛けて突進する。

「くらいやがれええっ！！」

凄まじい一撃が、ブランカに炸裂した。渦を飛び出し、陣を破壊しながら、向こうの岩に激突した。

「や、やつたか……！？」

砂埃が激しくて、ブランカの姿を見ることは出来ない。だが、あの一撃を食らつたのだ、最低でも虫の息だろう。

「フ……フフフ……、何と言う威力でしょうか。この私がここまでポロポロになるなんて、バレル様と戦った時以来ですなえ」

しかし、ブランカはピンピンしていた。もつとも、そう見えるだけで本当は無事ではないのかもしれない。

「へっ、仕留め損ねたか。なら、もう一回だ。ほのおのうず！」

龍宗はもう一回、火の玉を打ち出した。

「二度も同じ手は食らいません！」

だが、ブランカは火の玉を弾き返した。

すると、ブランカの周りに、さっきと同じ様に炎が巻き上がる。

今度のは地面から吹き出しているものではないという違いはあるが。

「なっ……！？」

「へっ、俺は一言もほのおのうずは地面に落とさなきゃできないなんて言っただけよ。もちろん、落とした方がより強い渦はできるが、絶対に必要って訳じゃねえ」

龍宗の策は見事に成った。ブランカは後悔した。見た目に騙されてしまった……と。確かに、彼の容姿だけを見ただけではこのように頭を働かせて敵を陥れる様な事が出来るとは思えない。

だが、龍宗にとってはそれさえ、彼の策謀（と云うには少しお粗末なものかもしれないが）の一部に過ぎなかったのだ。

龍宗は光就や昌明に口頃から策を用いる事の大切さを説かれていた。彼も馬ではないので、その言葉は心にずっと残っていた。ただ、策を使うのは自分の地力に自信が無いからだ。と云う、変なプライドを持っていた為、今まではそれを実行しなかった。

だが、今は違う。当時は負けても別に良かった。負けたら、次に勝てるように修行し直せばいい。と単純に考えていた。しかし、今は守るべき者がいるのだ。どんな手を使ってでも勝たなければならぬ。そうでなければ守るべき者を……忠実を守るなど出来はしない。

血の繋がりの無ければ、昔からの因縁も何も無い。保護欲を刺激されたから助けた。ただ、それだけの存在なのに、今や忠実は龍宗

の行動動機を中心に位置していた。いや、龍宗だけではあるまい。瀬奈、昌明、この二人も、龍宗が思っていることとほぼ同じ考えを持っているはずだ。

「ドラゴンクローー!!」

龍宗、渾身の一撃。ブランカはさつきよりも凄まじい勢いで、向こうの岩壁に吹っ飛ばされた。

「ハア……ハア……」

さすがに、ドラゴンクローーを続けて三回も使ったので、体が重い。だが、立っていられない訳ではない。体を動かせない訳でもない。今すぐ戦わざるを得ない事態に陥っても、本気では戦えないものの、その五、六割の力でなら十分戦える。

「……へへっ、俺の勝ちだな」

龍宗がそう思った理由はそれだ。おそらく、ブランカはもう立ち上がれない。仮に立ち上がったとしても、もう、戦える状態ではない。完全に戦闘不能。

龍宗はそう見なし、忠実の所に向かおうとした。すると、

「まだ、勝負は……ついておりません……!!」

ブランカが土煙の中から立ち上がった。

「へっ、生きてやがったか。けどよ、もう戦えないだろ？今ならまだ、命は取らねえ。さっさと逃げな」

「フフフ……確かに、今、私にはまともに戦って貴方に勝てる程の体力はありません。……ですが!」

ブランカはきりさくを発動する。

「貴方に、どうしても勝たなければならぬ理由があるように、私にも、どうしても勝たなければならぬ事情があるのですよ!!」

ブランカのきりさくが決まる。だが、龍宗を倒すには至らなかった。

「ドラゴンクローー!!」

周囲が炎に包まれる。岩をも溶けて無くなりそうなほどの高温の炎が氾濫し、戦場を飲み込む。龍宗はドラゴンクローーが実に軽く感

じた。

そして、ブランカにトドメの一撃を叩き込んだ。
勝負あり……である。

「ブランカ……って言ったか？俺はあなたの命を取る気はねえ。お前は忠実の敵らしいからな。俺が勝手に仕留めるわけにはいかねえだろ？」

「フフフ……その決断、いずれ後悔させてあげましょう」

龍宗はその場を立ち去った。忠実のもとに行こうとしたのだ。

「忠実ー！ありゃ、いないな」

しかし、さつき、忠実を運んだ場所に彼はいなかった。

「どこにいつちまったんだ？」

悪い予感がした。龍宗は今度はブランカの下に走った。

「いくら親の敵でも、そんな真似は許さねえぞ、忠実！」

そう、龍宗は、ついさつき、忠実が意識を取り戻し、そのままブランカを討ちにいったと思ったのだ。今、ブランカは満身創痍。いくら実力の差はあろうと、今ならば、忠実でも簡単に倒せる相手だろう。

「ブランカ！」

ようやく辿り着く。ブランカは怪訝な表情を浮かべながら、

「どうしました？やはり、後になってから私を討とうと思いましたが？」

と、言った。

「違うな、その逆だ。あんたを守りにきた」

「フフフ……何の冗談ですか？今のこの場所で、貴方以外に私を討てる者はいますまい」

嘘をつきやがって……と、龍宗は思った。なぜなら、ブランカはまるで、死を恐れていない。いや、それでは少し語弊がある。彼は

死を恐れていないというより、むしろ死を望んでいるのだ。

「とにかく、さっさと逃げな。今のあんたじゃ、あいつでも殺せる」

「……私はまた、罪を重ねながら、生きながらえるのですか……」

ブランカは呟くように、しかし、はつきり龍宗に聞こえるように言った。

「はあ？」

余りにも突拍子も無い言葉に、あきれれる龍宗。

「へっ、甘えてんじゃねえよ。俺はまだ、人をこの手で殺めた事が無いから分かんが、あんた、たくさんの屍を越えてきたんだろう？今さら、何言つてやがる。あんたは、人を殺して自分が生きる道を選んだんだ。だったら、その道を駆け抜けてみるよ。じゃねえと、死んだ奴らに失礼だろうが」

「……………」

ブランカはしばし、沈黙していた。だが、すぐに口を開き、笑い出した。

「フフフフフ…………ツ！自分よりも遥かに年下な者に負け、その上説教までされようとは！やれやれ、どうやら私の爪牙も長年の停滞によって、風化してしまったようです。……龍宗よ。私はいずれ、必ず貴方にリベンジします。その時を、覚悟しておくことですね！」
ブランカは洞窟の闇に消えた。

「へっ…………。さて、忠実はどこにいるんだ？」

忠実は結局、現れなかった。どこに行ってしまったのだろうか？

「ん…………？」

そんなことを考えていたその時、こちらに何かが来る気配を感じた。

「誰だ！」

「私は浅井光就が一の将、海風瀬奈！お前こそ誰だ！死にたくなければ、失せるのだな！」

「せ、瀬奈！？俺だ、龍宗だ！」

「な…………、龍か！」

互いに走り寄る。このセミロングの青髪と端整で凜々しい顔立ち
は確かに、海風瀬奈その人だった。

「……うん、やはり龍だな。いやあ、姿が変わっていたからな。気
付かなかった」

「はあ？姿が変わった？なんだそりゃ。ってか、お前、しばらく見
ない間に縮んでねえか？」

瀬奈の言葉に疑問を抱く。

「ん？私は変わってないぞ。……ああ、そうか。自分で気付いてな
いのか。龍、お前は進化してるんだ」

え？と、龍宗は不意を打たれて何も言えないでいる。

「自分の体を見ってみろ。私にはよく分かんが、リザードンという
種はそんな感じの外見なのだろう」

龍宗は瀬奈に言われた通りに自分の体を見てみた。すると、確か
に、今までの体ではなかった。それに目線も高くなっている。今ま
では、瀬奈から少し見下ろされていたが、今は見下ろす方になっ
ている。

「なるほどな。だから瀬奈が縮んで見えたのか」

「ふっ……これでしょうやく、龍と私は互角かな？久しぶりに組み手
でもやりたいな」

瀬奈は笑いながら、拳法の構えを取っていた。

「おう！あつ、そうだ……瀬奈、忠実を見てないか？」

龍宗は大きく頷いた後、さっきまで抱いていた疑問の答えを瀬奈
に求めた。

「忠実……？私は見てないが。むしろ、私は軍師殿を探しているの
だが、何か知ってるか？」

「昌明か？昌明は捕まっちゃったんだ……まあ、抜目ないあいつの
ことだ。心配ねえだろ」

「ふふふ……その通りです」

「ああ、その通りだな……え？」

瀬奈は驚いて振り返る。すると、緑の文官服に銀縁眼鏡の黒い鉄

扇を携えた男……竹中昌明が涼しい顔をしながら立っていた。

「ぐ、軍師殿！いつの間に!？」

「お二方、お騒がせして申し訳ありません。いや、お二方どころではありませんか。今回は殿も騙しましたからね。ふふふ……」

昌明は笑っていた。

「おいおい、また俺達をだしに使ったのか？まあ、いいか。ところだよ、忠実がどこかに行っちまったんだよ。昌明、見てないか？」

「忠実が？……まあ、さっきまでの話を聞く限りでは、彼がどこかに行ってしまったと断定するのは早合点では無いでしょうか？ちゃんと元いた場所を隈なく調べたのですか？」

「いや、ちよつと見ただけだが」

「なるほど、それではもう一回その場所に行きましょう。もし、私の推測が正しければ、忠実はそこに隠れているでしょう。龍宗殿、その場所はどこの方角ですか？テレポートで移動しますので」

昌明達は忠実の場所にテレポートした。

「忠実……、いるのでしょうか？出て来て下さい」

昌明がそう言うと、忠実は陣の貯蔵庫の裏から、ひょっこり出て来た。そして、とてととと龍宗に走り寄ると、その顔を迫真の表情でまじまじと見た。

「な、何だよ……?」

「……うん！龍兄だ。えへへ、さっきは隠れちゃってゴメン。でも、姿が変わったから分からなかったんだ。でも、こうやって近くから見てみると……やっぱり、カツコイいなあ……」

忠実は目を輝かせながら、龍宗をまじまじと見続けた。

「いいなあ、その翼……龍兄、飛んでみてよ！」

「いや、飛びたいのはやまやまなんだが、飛び方が分からなくなあ……また、師匠から教わらなきゃなあ……ブルブル」

龍宗の脳裏に、あの鬼教官モードの美空さんが思い浮かぶ。

「琴線に触れたようだな……忠実」

「?」

忠実は首を傾げる。

「ふふふ……これで全部ですね」

昌明はというと、貯蔵庫の中を見ながらほくそ笑んでいた。

「どうしたのですか、軍師殿。ロケット団の兵糧を見ながら笑うなど……」

「なに……ちよつとした手土産ですよ。反乱軍へのね」

昌明は兵糧を鉄扇で触れる。すると、兵糧は跡形も無く消え去った。

「あつ……、軍師殿、兵糧はどこに……？」

「このトンネルの出口ですよ。ふふふ、これであちらも私達を拒否しますまい」

昌明は一人笑いながら、天井を見た。

「おや……？」

転瞬、凄まじい光と轟音とともに、天井が崩れだす。

「これはいけませんね……皆さん、私の近くに……脱出します！レポート！」

昌明達は洞窟の出口に瞬間移動した。

「……ふふん、力攻めばかりが能じゃないのね……やるじゃん。

あの昌明って男。さすが、光就が自分から誘っただけの事はあるわね」

美羽は自分の分身が見ていた一部始終を把握し、こんな事を言った。

「反乱軍の泣きどころの兵糧を全部押さえて、自分達の交渉を有利に進める気ね？まったく、若い癖にやり方が外道よねえ！」

美羽は誰かに聞かせているように大きな声で独り言を放っていた。「でもね……そういうの、わたし、嫌いじゃないわ。いや、好きよ。大好きよ！愛してると言っ方がいい！！ふふふ……あんたもいい配下

を持ったじゃない。光就い〜」

闇に向かって言葉を放つ美羽。

「……ねえ、何であなた、今日も本気を出さなかったの？」

「……あれが身代わりとは思ってもみなかったことでした……あの程度の力では私の本気を出してしまうと、恐らく、殺してしまうと感じましたので。父上を生かして連れ帰るとというのが母上からの言いつけでしたからな……」

光就のテレパシーが美羽に伝わる。

「しかし、悔りすぎておりました。やはり、この光就の父です。彼に本気を出されては、私の力も後一步、及びません」

「なるほどね……」

「そして……もう一つ理由があります」

「ほう、それは何？」

美羽は話の続きを催促する。

「彼女の……神風美空の本気の見定めてみたかったですよ」

「ふ〜ん、にしては随分、体を張ったものね……あなた、今どれくらい動けるの？」

「ご安心下さい。多少の相手を一撃で葬るくらいまでなら動けます」
「剣戟で？念力で？どっちかしら」

「……念力ですな」

「まあ、抱えられてたからねえ。あなたなら、もし動けるのであれば自分で歩くものね……はあ……」

美羽はため息を付いた。何に對してだろうか。

「ところで……美空ちゃんの力は測れたかしら？」

美羽は話題を切り替える。

「はっ……。まあ、測れたことは測れたのですが……正直、期待はずでした。あれだけ期待させておいてあの程度とは……」

「ふ〜ん、……本当に、力は全部覚醒していたのかしら？」

「さて……それは本人でなければ分かりません。ですが、おそらくあれが臨界点でしょう。あれ以上の力を発揮する事は出来ずまい。

彼女の体が持ちません」

光就はそう言った。だが、美羽はその発言を否定する。

「ウフフ……光就い、あなたもまだまだ甘いわねえ。……誰がその臨界点を越えないレベルで力が発揮されるなんて断言出来るの？ウフフ……物事にはね、必ずXの数……未知の可能性があるのよ。そして、それは人の想像を超越する値を持っている事が時々ある」

不気味に笑いながら美羽は淡々と語る。光就はまた始まった……と、心の中で辟易しながら聞いていた。

「ウフフ……今回はたまたま、美空ちゃんというXの値が驚くべき物ではなかっただけ。彼女の力はあるものではないわ。」

ウフフ……だったら、何故それを出さないのか……？それはおそらく、あなたの言った通り、彼女本来の力は彼女自身で制御出来ないのよ。だから、向こうの『おししようさま』は彼女の力を封印した……って所かしら……ウフフフフフッ！」

美羽はここまで言い終わると、不気味な笑いを突然止めた。まるで、憑き物が落ちたかのように。

「しかし、あなたも残念だったわね。折角、体を張ったというのに、本気を出して貰えないなんてね。ちゃんと、可愛がつてあげないから土壇場で助けてくれないのよ？」

「……何が言いたいのですか」

「彼女にもつと愛を与えてあげなさい。……それが自分の命を投げ捨てるのに十分な価値を持つくらいにね」

美羽はそう言った。

「……！……そういったことは不得手ですが……善処致します」

光就は美羽の鋭い視線（といってもテレパシーなので、本当はどうか分からないが、雰囲気だけは、まさに、面と向かって話している時のそれだった）を受け、慌てて返答する。

「ウフフ……さて、光就。今この時をもって、あなたの光秀連行の任を解くわ……おっと、勘違いしないでね。別に、あなたの力に失望したわけでも、あなたを任務遂行の責から解放してあげるわけで

もないわ。……あなたの最優先条項を変更する。浅井光就……あなたは今この時から、わたしの次の指示があるまで、配下の育成及び軍事基盤の確立に注力せよ。ゲリラ部隊のようなレジスタンスではなく、真っ向からロケット団と当たっても恥ずかしくない勢力を築き上げなさい。むろん、その目的を果たす為の手段は選ばなくてもいいわよ」

「御意……」

光就の餓狼の如き眼光は遠くの美羽に届けとばかりにギラギラと輝いた。

第三十六話 THE AFTER (前書き)

まさかの連続投稿

鬱展開？いえいえ、暴走です。

第三十六話 THE AFTER

「フン、フフ、フン」

今まで自分の後ろで交わされていた、どす黒い対談など、知る由もない美空さんは、光就を抱えている。これだけの理由ですっかり上機嫌になって鼻歌を歌っている。

「……………」

光就は美空さんを見た。その時、美羽の言葉が脳裏に浮かび、消えた。そして、おもむろに口を開く。

「……………もう下ろせ、美空」

「ふふふ、何言ってるんですか。遠慮しなくて良いんですよ。わたし、光就さんの為になることは何でもするつもりなんですから」

「下ろせ」

「え、でも……………」

「下ろせと言っている！何回言わせれば気が済むのだ！」

「は、はいっ！」

美空さんは慌てて、光就をそろそろと下ろす。

「ふん……………」

「ああ、ごめんなさい！そうですね。自分で歩けるんだっいたらわたしに抱えられてるなんて状態をそのままにしたくないですからね！あ、あははは……………」

光就は美空さんを睨みつけると、それを尻目に前を歩く。美空さんはわたわたと彼についていく。

「……………美空よ、あの体たらくはなんだっただの？」

「へっ？あの体たらくって……………？」

この言葉を聞き、光就は更に不機嫌そうに顔を険しくし、睨みつけ、語勢を強めてまくし立てる。

「バレルと戦っていた時の事だ！それ以外になにがある！」

「あう！ごめんなさい……………」

美空さんはさっきまでの上機嫌から一転、今は叱られている子犬のように頭を抱え、ブルブル震えている。

「美空、お前は結局、何が出来たんだ？」

「え……？」

「バレルをついに捕らえられなかった。千載一遇の機を私は逸したのだ……だが、千歳も、玲奈も、あの麟と呼ばれていた娘も、まあまあよくやってくれた。だが、お前はどうか？ 私が死んだと早とちりして、感情のままに暴れ回り、次に本当に私が生死の境をさまよった時も感情に振り回され、まともな回復すらままならなかった……」

「一体、お前は、私にとって何の役に立つのだ？」

「……………」

「少し前、私は遠くで誰かの気が膨張するのを感じた。余りにも遠すぎて、どれくらい気なのか詳しくは測りきれなかったが、あれはおそらく龍宗の気だ」

「へえ、龍宗さん、また進化したんですか！ えへへ、これはまたお赤飯を炊かなきゃいけないですっ」

美空さんはわざと明るいう口調で、ある意味空気の読めない発言をした。この重苦しい空気を、少しでも和らげようとする彼女なりの努力だった。

「そして、その気を見るに、奴もお前を越えた。瀬奈はすでにお前を越している。昌明は武という意味では敵わないかもしれないが、その知略はお前どころか万人の兵にも勝る。忠実はまだ咲いていない力ではあるが、伸びしろは十分ある。修業の時間さえ取れば良い戦士になる。それに、彼の知略も私や昌明には劣るものの素晴らしいものだし、まだ伸びる。……だが、お前はどうか？」

「うう……………」

「あえて特筆するとしたら、その再生力を挙げられるだろうが、それだけだ。しかも、それを活かして壁役になるにはお前は守りが弱すぎる。よって、お前は能無しだ。その上、修業しても修業しても一向にその力が伸びる気配が無いではないか」

「うう……だ、だったら！修業のやり方を変えます！今のやり方がいけないのかもしれないですっ！」

「なら、一人でやれ。我々を巻き込むでない」

「へ、兵法だつて学びます！光就さんが戦略を立てる時、わたしも協力するですっ！」

「それは昌明がいれば十分事足りる……それに、お前に教えてる暇があつたら忠実に教えてやりたいものだ。それに……」

ここまで光就が言った時、美空さんは彼のマントを掴み、

「お、お願い……です……わたしを見捨てないで……！なんでも……なんでも、しますからっ……！」

目に涙を浮かべながら、上目遣いで、震える声で言った。

「ふん……なんでもするのか……？」

「はいっ！なんでも……します！」

涙を拭い、覚悟を決めた面持ちで言い放つ。

「なら、最終通告だ。心して聴け」

「はい……！」

場が静寂に包まれる。むろん、その沈黙は数秒程度の僅かな時間であつただろうが、美空さんにとってはそれは恐ろしく長い時間に感じた。

そして、光就が口を開く。

「今日から一ヶ月後の同じ日……それまでに私と同等ないし少なくとも……」

そこまで言うと、光就は突然、向こうの岩壁にメガサイコキネシスを撃ち込んだ。岩壁が粉々に、跡形も無く粉碎された。

「こいつを肉体強化も、技も無しで……素の状態で丸腰で弾き返せるくらいには強くなってもらおうか。ちなみに、瀬奈はこいつを受け流せると思う。断言は出来ないが」

むろん、これは嘘。確かに、彼女も強くなったが、おそらく、出来るのは溜めてない、普通のサイコキネシスの受け流しが関の山だろう。

「そして、もう一つ……さつき、お主は兵法も学ぶと言ったな？ふつ、喜ぶが良い。学ばせてやるうではないか。ただし、条件がある。兵法というものはただ学べばいいというものではない。学びに学び、そして、活かさなければならぬ。そこでだ。一ヶ月後、私が兵法をどれだけ学び、どれだけ活かせるかを試す為のテストを与えよう。そうだな……第二級戦略家レベルのテストを出そう。果たして、お主はそこまでたどり着けるかな？」

実は、第二級戦略家というのは普通の才覚で普通に兵法を学んでいる者なら四十代も終わりに差し掛かった時くらいに、ようやく取得できる級なのだ。昌明や光就のような天賦の才を持っていて、小さい頃から戦略家の英才教育を受けている者ですら、十代二十代でこの領域に到達出来る者はほんの一握り。

ちなみに、光就はその格上の準一級戦略家、昌明はその更に格上の第一級戦略家である。この事からも、あの二人がとんでもない連中である事が容易にうかがえよう。

まあ、要するに……たった一ヶ月やそこらでは、たとえ、寝ないで勉強しても到達し得ないレベルであるということだ。ましてや、美空さんは更に既述の通りに光就のメガサイコネシスを素手で打ち返せるほど強くなければならないのだ。

光就のメガサイコネシスはちょうど、玲奈の雨降りハイドロポンプと同じ威力。これが何を意味するかと言うと、かつて、光就が玲奈と戦った時の事を思い出してくれると、説明が付きやすいかもしれない。

あの時、光就が雨が降っている状態で玲奈のハイドロポンプを躲し続けていたのだが、それから抜け出せたのは彼の力によるものではなく、挑発に乗った玲奈が自分から攻撃の手を止めたからである……となると、一つの可能性が出て来る。光就はもしかしたら、自力でのハイドロポンプの弾幕から抜け出せなかったのではないかという可能性である。

もっと簡潔に言えば、光就は自分のメガサイコネシスと同等の

威力を持つ雨降りハイドロポンプを素手で弾き返せなかった可能性があるということである。

もちろん、あの状況ではたとえ、弾き返してもそれによって相手の砲撃が止まる訳ではなく、体力の消費も激しいのであえてやらなかったのかもしれないし、自尊心の高い光就が自分に出来ない事を人に求めることも考えづらい。だからおそらく、これは邪推だ。

とはいえ、光就にとってそのハイドロポンプを弾き返すことが相対リスクであった事は紛れも無い事実である。そして、結局、彼はそれを選ばずに、勝利を収めることが出来た。彼にはいくつもの選択肢があつたのだ。

だが、美空さんにそんなものは存在しない。弾き返さなければいけないのだ。自分より遥かに強いその術者がそうする時でさえ、忌避すべきリスクがあるのに。

「……………」
美空さんはフルフルと震えながら、ずっと押し黙っていた。

「まあ、これくらいか。ふっ、どうした？余りの壁の高さに絶望してるのか？いつもなら満面の笑みで」はいっ！光就さんの為なら、わたし、頑張るですっ！」なんて、聞いているこちらが恥ずかしくなるくらい健気な台詞を吐く癖に……やはり、今回のは無理か？だからといって条件を緩和する事は有り得ないが」

光就はそう言い終わった時、美空さんは、

「いえ、そんなんじゃないです。というより、むしろ……嬉しいんです……………」

と言つて、光就の手を握り、目をキラキラと輝かせ、更に言う。

「あんな酷いことを言つても、まだ、光就さんはわたしの事を見捨ててないんだって、分かったからですっ！

わたしが何処も成長しなくても、どんなに失敗しても、光就さんはわたしの事を最後まで信頼してくれるって分かったからですっ！

だからわたし、決して諦めません。だって、そんな大変な要求をしてくるって事は、わたしがその要求に応えられるって、光就さん

が信じてくれる事ですから！」

そして、満面の笑みを浮かべて、

「はいっ！光就さんの為なら、わたし、頑張るですっ！」

さっき、光就が言っていた通りにそう言った。

「……ふっ、ふはははははっ！よくもまあ、こんな時にまで、そのような強がりと言えるものだ。ある意味、感心する。だが、どんなに強がるうと越えられない壁はあるのだ。」

ふっ……自分で言っておいてなんだが、今ならまだ、拒否できるのだぞ？一度、私が開始を宣言したら、もう元には戻れない。課題を乗り越え、再び、我々と共に戦える権利を勝ち取るか、乗り越えられずに、私に追放されるかのどっちかしかない。

逆に、今、ここで拒否しておけば、追放される事はない。お主は他のメンバーには愛されているからな。私がそんなことを言い出しても、彼らがお主を守ってくれるだろう。さあ、どうする？」

光就はそう言った。彼は美空さんはこの要求を拒否するだろうと思っていた。だから、こんな事を言っただけで彼女を弄んでいるのだ。

「何を言ってるんですか。受けるに決まってるですっ」

「ふっ、そうだろうそうだろう……何？」

光就は信じ難いばかりに、訝しみ、美空さんに聞き直す。

「美空、私の話を聞いていなかったようだな。こんな無茶な要求を受けるだと？馬鹿も休み休み言え！」

「えへへ……光就さん、自分で無茶って言いましたね」

それに対し、美空さんはいたずらっぽく笑って言った。

「ぐっ、おのれ……！お前、最初からこの私の揚げ足を取るつもりでいたな！」

「えへへ、ごめんなさい。でも、これではつきりしました。光就さんは私を追い出したいんですね」

美空さんはそう言った。だが、彼女は全く悲壮の表情を見せないどころか、いよいよ喜色満面となり、幸せを噛み締めていた。

「ああ、わたしは世界一の幸せ者です……。光就さんはそうやって

わたしを軍団から追い出せば、わたしが戦いで死ぬことは無いと考えて、こんな仕打ちをわたしにするんです……。ああ、わたしは悲しい。光就さんにそんな心労を負わせてしまうなんて……」

美空さんは早口でこう言った。その目は一点を見ておらず、他人から見ると、余りのシヨックに頭が残念なことになってしまったのでは、と、疑われ兼ねない様子であるが、彼女は正気である。もっとも、脳の防衛反応という可能性も無きにしてもあらずだが。

「あ、あの……美空さん？」

光就は困惑した。彼女がどう反応するか、色々と予測していたが、それらのどれとも、全く共通項が無い。どう対処したものか……光就は悩んだ。

「や、やはり、私が悪かった。あんな要求は取り消そう……」

「何言ってるんですか、わたし、受けますよ。ってか、むしろ、受けさせて下さい！お願いですっ！」

虚ろな目を輝かせ、手を合わせてお願いする美空さん。

「いやいやいやいや、そういう訳には……そ、そうだ。後で条件を緩和したものをやるというのは……」

「イヤですっ！これがやりたいんですっ！！」

やだやだと、駄々っ子の様にバタバタする美空さん。

「わ、分かった……許可しよう」

光就は最初、自分で押し付けたはずの要求を、結局、しぶしぶ了承する形になってしまったのだ。これでは、最初の厳格な拘束力など有って無いようなものだ。

「どうしてこうなった……」

光就はこのやり取りが終わった後、ずっと、そう自問自答してたという……。

第三十六話 THE AFTER (後書き)

玲奈「オーホッホッホッ！浅井光就という者はかくも酷き男なりか。フッフ……美空、いつでも私達の下に来ていいのよ？」

麟「玲奈様！言葉が過ぎますよ！……でもまあ、不謹慎な話ですけど、美空さんみたいな人って、私達がもつとも希求する人材なんですよね。知勇兼備の将ってどうか、何でもそつなくこなせるような人は、どんなに居ても足りません」

玲奈「フッフ、それに何と言ってもかわいいし！」

麟「まあ……そうですね。魅力的な方ではありません」

玲奈「あんなに素直でかわいい娘、あの厨二病にはもつたいたいの。だわ！私の嫁にして差し上げますわ！」

麟「略奪は良くないと思います。それに……それに……（小声で）玲奈様の嫁は私の予定ですよ……」

玲奈「ん〜？フッフ、大丈夫よ。貴女も私の嫁よ。皆を等しく愛するわ。だって、皆、私のハーレムですもの」

麟「なんですかそれ、意味が分かりません……」

玲奈「フッフ、照れ屋なのね、麟ってば」

麟「はあ……」

玲奈「あらあら、テンション低いわねえ、もうちょっと盛り上がったら？」

麟「えっ？そんな急に言われましても……」

玲奈「もう、何でもいいから盛り上がりなさい。話はそれからよ」

麟「な、ならば……わあい！」

玲奈「……」

麟「……あの、もしかして、ダメ……ですか？」

玲奈「……わあい！」

麟「えっ……わ、わあい！」

玲奈「わあい！」

麟「わあい！」

玲奈「わあい！」

麟「わあい！」

美空「わあい！」

千歳「わあい……！」

玲奈「おっ、私のハーレム全員集合ね。あら、別に会いたくないけど、あの厨二……光就はどうしたのかしら？」

美空「光就さんですか？光就さんはあの後、どこかに行ってしまった。何か、話を付けなければならぬとか、どうとか言ってますけど……」

玲奈「あら、そう……（フッフ、鬼の居ぬ間になんとやら……）美空あああっ！」

美空「きゃっ！ど、どうしたんですか！？いきなり、わたしの胸に倒れ込んで……」

玲奈「フッフ、私、急に頭が痛くなったんですの。何か柔らかいものを頭に当てたくて……そしたら、貴女がちょうど良いものをお持ちのようでしたので、仕方なく……」

美空「えっ！？頭痛いんですか！大丈夫ですか！？」

玲奈「だ、大丈夫よ。ずっとこうしていれば治るわ……スリスリ……（フッフ、甘美なり！）」

美空「そうなんですか……？なら、治るまでずっとこうしてても構いませんよ。ちよつと恥ずかしいですけど……」

玲奈「フッフ、すまないわねえ（フッフ、本当に素直でかわいいのかわ……！こういうことにちよつとどころか、かなり疎い所なんかもう、たまりませんわ！）」

麟「玲奈様！これ以上の狼藉は、この寺沢麟が許しません！」

玲奈「ぐふっ！な、何するのよ麟！」

美空「そ、そうですよ！頭痛いって言うてるのに、そんな事するなんて、麟さん酷いですっ！」

麟「美空さん！貴女は騙されているのです。玲奈様はいつも、そう

やって頭痛が酷いと言って、私や他の女の子にこうやってセクハラをするのです！」

美空「えええっ！そ、そんなんですかっ！？玲奈さん！」

玲奈「えっ……、そ、そんなの……」

美空「嘘って言って下さい……わたし、あなたの事、尊敬してるんです……」

玲奈「あっ、う……うう……（そ、そんなキラキラした目で見ないで……う、嘘が付けなくなってしまいましたわ……）」

美空「あっ、分かりました！」

玲奈「えっ？何が？」

美空「あなたも瀬奈さんみたいに変なゾーンに入ると、そんな変態さんになっちゃうですね！玲奈さん、ぬとるとぼを繋げて言って下さい……」

玲奈「えっ？ぬるぽ……で良いのかしら？」

美空「ガッ！」

麟「あっ！な、何してるんですか、美空さん！そんなことしたら、死んでしまいます！」

美空「大丈夫ですよ。ギャグパートで死者なんて出ないのです！」

玲奈「う、うーん……」

麟「れ、玲奈様！大丈夫ですか！？」

玲奈「ええ、大丈夫よ。ありがとう、麟さん（キラキラ）」

麟「えっ！？」

美空「おおっ！きれいな玲奈さんです！」

玲奈「あらあら、美空さん。マントが曲がっていいよ（キラキラ）」

美空「えへへ……」

玲奈「ウフフ……」

麟「うわあああああ！……どうしてこうなったんですか！こんなにきれいな玲奈様なんて玲奈様じゃありません！玲奈様は変態で構いません！汚れ役でも構いません！ですから、いつもの玲奈様に戻って下さい……」

玲奈「……麟……！嬉しいですわああっ！！どんな私になっても、いつもの私が一番だって言ってくれましたね！」

麟「えっ？い、いや、まあ、少しは自重して欲しくはありますけどね」

玲奈「フッフ、それは自重するなという意味ね？」

麟「な、なんでですか!？」

玲奈「オーホッホッホッ！安心なさい、私は、絶対に、ぶれたりはしないッ！」

美空「むむむ……この方法が効かないとは……ん、あれれ？千歳さんが居ないので……」

千歳「はあ……はあ……やっと……離れられた……ここまで離れれば……きっと大丈夫……あれ以上いるのは危険……あの三人のテンションには……ついていけない……」

千歳「それに……千歳がやらなきゃ……誰もやりそうにない……」

千歳「次回……光就の大論戦……相手は秘密……でも皆知ってる人……」

千歳「次話投稿……一月七日……次回こそは……期限を守って欲しいな……」

第三十七話前編：メル、光就に挑むの事（コールドプレイズ）（前書き）

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

前回のあらすじ

龍宗とブランカの戦いは熾烈を極めた。両者とも相譲らず、相手が押してきたら押し返し、不利になったらそれを覆した。そして、この戦いを制したのは無意識の進化を遂げた龍宗だった。

ところが、勝利を収めた後、忠実が行方不明になる。ちょうどその頃、瀬奈も目を覚まして、昌明を探していた。二人が合流すると、それを見計らったように昌明が姿を現す。そして、彼の協力によって忠実を見つけ出し、四人はロケット団の兵糧と共に洞窟を脱出した。

その様子を見ていた美羽は光就とテレパシーを送り合い、今後の戦略を語り合った。しかし、その語らひは決して穏やかな空気で行われていたものではなく、互いが互いの腹の探り合いをするようなものだった……。

第三十七話前編：メル、光就に挑むの事（コールドプレイズ）

「運命からは逃れられない……か」

夜のクチバシテイの棧橋で、体育座りをしながら物思いに耽る少女がいた。

水色のポニーテールに白に近い青色のワンピース。そして、その上にバッグを背負っている少々奇特な格好の少女が。

もつとも、それだけならただの不審人物のだが、彼女の容姿はその烙印を押すのをためらうほど秀麗であった。眦まなじりが釣り上げられた目が、人に近寄り難い印象を与えるものの、その均整の取れた顔は十分に美少女と呼ぶに相応しいものだった。

「運命……ねえ」

彼女はさつきからしきりに独り言と回想を繰り返していた。

「運命なんて……そんなの誰にだって分かりはしない。人は、自分の運命でさえ分らないのに、どうして他人のそれが分かたりするものか。千歳……貴女まで何故あいつに毒されるのよ……？ 私だけなの……私だけなんだよ……あいつの本当の姿を知っているのは……」

「浅井光就の本性……か」

「！？」

少女は驚き飛び上がり、戦闘態勢を取った。

「おおっと、すまないねえ。驚かせる気は無かったんだ。いや、ごめんごめん」

「……勝手に人の思考に入ってきたと思ったら……誰ですか貴方は」少女は訝しげに目の前の男を見た。彼は様々な薬品の瓶を肩に掛け、溢れんばかりに木の実が入った袋を腰に下げていた。

「……セルフ萌えもんセンターですね。回復には困らないでしょうね」

「もちろんさ！僕は回復屋さんだからね」

その男はそう誇らしげに言った。

「回復屋さんね……貴方がいるべきはここじゃないはずです。山を越えた先に自ら命を捨てんとする愚か者たちがいます。こんな所にいるより、よっぽどそちらに行かれた方が喜ばれると思いますけどね」

「君達もそうじゃないのかい？」

少女の言葉に間髪入れず、自称回復屋の男はそう言った。これに対し、少女は明らかに不快の表情を浮かべ、

「あんな輩と一緒にしないで下さい。奴らは大層な理想を掲げてながら、その実、戦いを楽しんでるだけに過ぎない。私は戦いなど望みません。ただ平和であれば良いのです」

と、言った。すると、男はハッハッと笑い、そして、少女に問いかけた。

「ならば、問おう。君の言う平和とは何かな？」

「そんな問い……平和とは、争いの無い世界の事に決まっています」

少女は淀み無く答える。

「ならば、続けて問おう。その世界を作るために君は何をするべきだと思っただい？」

「戦いをやめる事です。戦いは戦いを生み、積み重なる戦いは混沌を生み出し、秩序を破壊し、人の心を荒ませる。そして、荒んだ心は更なる戦いを欲する……戦いの果てにあるもの……それは虐げられた者の涙と虚無のみ」

少女は遠くを見つめるような目で言った。

「なるほど。確かに、間違いでは無い。いや、むしろそれが一番正しいのかもしれない。……ふふっ、なら、君が証明してくれないかい？」

男はそう言った後、後ろに跳び、薬瓶を少女に投げつけた。

「君や君の大事な仲間が刃を向けられた時でも、戦わないでいられる証明をね！」

薬瓶が大爆発を起こす。爆風が海を揺らし、向こう側の栈橋に津

波が襲い掛かった。

「その時は……」

硝煙の中から声が聞こえたと思った次の瞬間、少女は男に向かって右手のひらを向けていた。

「二度と戦おうなんて思えなくすれば良いだけの話です……」

「ハッハッハッ、君に出来るのかい、そんなことが」

男は余裕を見せている。

「出来ますよ、何なら試してみてもいいかがでしょうか？ただし、お代は張りますが。命一つ」

少女はもう片方の手の指を一本立てて言った。

「おや、安いねえ。じゃあ、折角だから試させてもらおうじゃないか」

「その判断、あの世で後悔しても遅いですよ？……みずのはどう！」

少女は右手から衝撃波を放つ。男は吹き飛ばされ、海へと落ちる。

少女も海に入り、それを追い掛ける。

「へえ、来てくれたのかい？なら、感謝しないとね……！」

男は爆薬の瓶を開け、辺りにそれをばら撒いた。

「（愚かな……みずのはどう！）」

しかし、少女は慌てる事無く、再び、衝撃波を放つ。しかも、今度の衝撃波は棧橋で放ったそれよりも威力も範囲もスピードも全てが段違いであった。

衝撃波は爆薬を吹き飛ばし、それを男の元へと送り返した。返された爆薬は大爆発を起こした。

「（とどめ！）」

だが、少女はそれに安心せず、爆発で出来た大量の泡の中に突っ込んだ。そして、男を見つけると、

「（アクアテール！）」

今度は海面へと打ち上げる。男は海中から出ることが出来たが、その瞬間、

「（落ちろ！）」

少女はムーンサルトキックを放ち、再び、男を海に突き落とす。

「（これで終わり……みずのはどうー！）」

少女はその勢いのまま再び、海に飛び込み、男の体に両手をあてがい、直に衝撃波を男へ当てた。

衝撃波は男と共に海の底まで到達し、ついに弾けた。高い水柱が上がり、それが一時的に雨を降らせた。

「ふん……他愛ありませんね」

みずのはどうの反作用で栈橋に着地した少女は勝利を確信し、帰ろうとした。

「本当だなあ」

「!?!」

しかし、彼女の目の前には倒したはずの回復屋の男が居た。

「な、なぜ……あの至近距離でのみずのはどうを水中でまともに喰らって、生きていられるはずが……!」

「たしかに、生身だったらさすがの僕でも危なかったかもしれねえ。でも……」

男は海面を指差した。海面にはピッピ人形がプカプカと浮かんでいた。

「い、いつの間にも!?!」

「僕の常套手段じょうたうしゅんたぎだよ。僕は君達みたいに強くないからね」

少女は考えを巡らした。そして、理解した。

「アクアテール発動後の一瞬の隙を突いて、みがわりを使えるような貴方が言う台詞とは思えませんね」

少女はそう言った。

「ハッハッハッ、強いつて言うのは、それだけの意味じゃないさ」

男は笑いながら言った。そして、今度は顔を険しくさせて、少女に説教するように、こう言った。

「君の力は本物だ。なのに、何故、力を使わない？何故、人の為にその力を使おうとしないんだ？」

……ロケット団は自分達の野望を叶える為だけに、あらゆる場所で、

時には暴れ回り、時には強奪を繰り返すなど、悪行の限りを尽くし、この世の平和を乱し、秩序を壊した。君の理想が平和な世の中であることも、本来ならば、あってはならない事だ」

少女は黙って、話を聞いていた。

「だが、君が平和な世の中を望んでいる以上、その理想から逃げはならない。

確かに、戦いは戦いをいくらでも、無限に生みだす。それは紛れも無い真実。

しかし、だからといって戦いを止めてしまえば、それは君の理想……平和な世の中の到来を否定する事になるのではないかな？」

「……………」

「もう、綺麗事では解決出来ないレベルにまで、世は乱れてしまったのだ。こうなってしまうえば、平和も秩序も砂の城より脆く、儂い、幻想となるのだ。

さあ、こうなってしまった今、君はどうするんだい？

失われた秩序にすがり付き、いつまでも幻想を追い回すかい？

それとも、辛くとも、現実を認め、戦乱の中において、自分の理想を叶える為、今と向かい合うかい？」

男は少女にこの二択を迫った。少女は目をつぶり、少しの間、思考に没頭する。そして、目を開き、男を睨みつけ、

「くだらない……そんな選択肢に意味なんて無い。私は幻想に逃げ込む気も無いし、戦いを肯定する気はもつと無い。

現実と向かい合うなら、戦わなければならぬ？ そんな現実はやがに過ぎません。私は私の現実と向き合い、戦います。人に与えられた現実になど構ってる暇なんて無いんですよ」

こう言い放った。男はそれに対し、しばらく黙った後、手を叩いた。

「御名答！なるほど、君にもまた、戦わない理由があるという事だね」

「褒められても、ちっとも嬉しくないのですが」

少女はジト目で言った。

「ハッハッハッ、そうか！」

男はそれに対し、豪放に笑い飛ばした。

「まあ、でも、戦わなければならぬ時……というのもありますよね。今の私がそういう状況な訳ですが」

少女は一転、悲しそうな顔をした。

「少し、自分の現実というものを見失いかけていましたが、貴方のお陰で、見失わずに済みました。ありがとうございます」

だが、すぐにいつもの表情に戻り、少女は男に笑いかけた。

「お役に立てたようで、光荣だよ」

男も笑い返した。

「では、私はそろそろ、戻らなければなりません。今までの貴方との一時は、すぐに忘れてしまおうでしょうが、別に構いませんよね？」

「うん、構わないよ」

「良かった。ですが、恩を受けた身です。せめて、名だけはお教えしましょう」

「私の名はメルラン・ブレンフォード。皆からはメルと呼ばれます。決して、カメールのメルではありませんので、勘違いなさいませぬように……」

少女……メルはそう言った後、お辞儀をし、立ち去っていった。

「……………」

メルは回想を終えた。自分がこの戦場に立つきっかけとなった回想を。

結局、彼女は戦う道を選んだ。しかし、ただ戦うのではない。誰も死なない戦い。これを志した。

むろん、これを実現するのはとても大変な事だ。完全は完全ではない。一つでも欠ける完全は完全ではない。たとえ結果的に勝つ

たとしても負け。完全ではないから。

でも、出来る限り被害を最小限に抑える。それが彼女の……メルラン・ブレンフォードの出した答えだった。

「なあ、メルはやっぱすげえよ。今までずいぶん激しい戦いがあったけど、まだ二人ぐらいしか怪我してないんだぜ」

彼女が仕える主君である秀明は彼女をそう褒めた。

「とんでもない……二人も負傷させてしまいました。賞賛には値しません」

メルはそう言った。そこには愛想もなにもなく、周りから見れば可愛げが無いと思われるのだろうが、それは彼女が自分に対し、常に完全を求めているからであり、決して、その賞賛を喜んでいない訳ではない。秀明もそれを分かっているから、あえて何も言わない。「メルう、そんな難しい顔してないで気楽にいこーよ」

「そうだそうだ。完璧なんてありやしない。もっと楽観的になっても構わないと思うんだがなあ」

ユンゲラーとピジョンが言う。

「やれやれ、兵を率いるのは口で言うよりも、遥かに難しい。私もまだまだね」

「そんなことないよお、メルはよくやってるよ？メルが後ろでの確な指示をしてくれるから、ワタシ達は迷わず戦える。もっと自信を持っていいと思うよお、ワタシは」

メルを励ますユンゲラー。その名を片倉麻衣かたくらまいという。

「そうだな。俺達はただ秀明様の戦うのみ！ってね。まあ、メルが麻衣みたいになったらそれも面白そうだけだな」

麻衣に同調し、ピジョンも冗談混じりで励ました。彼は鬼庭景之おにわかげゆきという名前だ。

なお、彼らは一応、秀明に本名を名乗っているものの、秀明は光就のように仲間を本名で呼ぶことを良しとしなかった。

いや、そもそも光就のようなパターンが異常で、普通は萌えもんをその本名で呼ぶなんてことは、まずしない。

というのも、萌えもんのほとんどの『本名』は自分自身で勝手に付けたもので、彼らの真の意味でのアイデンティティーにはなり得ないだからだ。『本名』の姓が、有名な武将の姓と同じな場合が多いのはその為だ。

むろん、それが多いというだけで、昔から名乗られている姓のある本名もある。偶然にも、光就一行は龍宗を除いた全員、その姓は親から受け継いだものである。光就と昌明と忠実に関してはもう確認していることだろう。(ただし、それが本当に先祖代々に渡って名乗られているのかは不明)

だが、普通は本名の代わりにニックネームを付ける。光就はそれをいちいち付けるのが面倒(ただし、龍宗にはその代わりとなる本名が無い……というか、覚えていないので付けざるを得なかった)だったから。しかし、種族名で呼ぶのも手抜き感があるので本名を呼ぶのだ。

ちなみに……これから三年後、本名呼びが流行した。名字が浅井の萌えもんが増殖し、一時騒然となったこともあったが、真似された本人は、これを厳しく取り締まったが為に、この本名呼びと萌えもんの本名というものが後の世まで続く事にはならず、今では完全に廃れた文化になってしまった。

さて……話は飛んだが、こうして話している時に、秀明達のもとに走ってきた者がいた。ギャラドスである。しかし、瀬奈ではない。もし、瀬奈ならその髪はセミロングのはずだが、彼女のはショートだった。その他にも身長など色々違う部分はあるが、如何せん、身につけている外装がほとんど変わらない為、初見は勘違いしてしまうかもしれない。

そんな彼女の名は白石渚しらいしという。

「御三方、何を話していたのですか？」

だが、喋れば瀬奈とは違うことがすぐに分かる。

「おおつ、なぎささ、良かったねえ、もうすぐ来るよ、キミの憧れの人がね」

「えっ！？そ、それはまさか、せ、瀬奈様のことですかっ！」
くわっ、と麻衣に迫る渚。

「うん、その通り。もちろん、メルが嫌いな光就もいるよ」
「そんなこといちいち報告しなくていいよ。ああ、頭が痛い。また、あれと顔を合わせなきゃならないなんて……」

メルは片手で頭を抱え、首を横に振った。

「まあまあ、メルは深く考え過ぎなんだよ。光就も気難しいだけで、根は良い奴なんだから」

「はあ……マスターが深く考えない分、私が考えてるんですから、考え過ぎに見えるのでしょう。自覚があるんだったら、少しは手伝って下さい」

「何言ってるんだよ。お前、初めて仲間になった時、私が貴方の頭脳になります。貴方は何も心配せず、ただ頂点への道を突き進んで下さいって言ったじゃねえか」

「いくらなんでも、限度つてもものがありますよ。私だって何人も居るわけじゃない。考えられる事も無限ではないのです」

「じゃあ、俺にどうしろってんだよ」

「そうですね……せめて、朝昼夜の献立くらいは考えて欲しいですね」

「おっしや！分かったぜ！」

「……というのは嘘で、私に対するご褒美の事を考えて欲しいですね」

「ほう……何だかんだ言っても、お主も好きよのお……」

「……というのも冗談で、皆のおやつの配分を考えて欲しいですね」
「メルは全没収、麻衣には二倍、景之にはかわいそうだから半分やつて、渚にはいつも通り……よし、増えた」

「やったー！二倍だー！」

「……というのもフェイントだったり」

「なんでー！がっかり……」

「はあ……やっぱ良いです。何も考えてくれなくて」

「ま、そうなるよな」

相変わらずのやり取りをした後、メルは更に深いため息をつき、
「まあ、適当に何とかしますよ。私達が一方的に不利になる状況になんかせません」

メルは斜に構えた態度であつたが、その目は正面を見据えていた。
「おう、よろしく頼むぜ。俺には頭の働きのじゃ到底、光就には勝てないからな。その代わり、武術なら引けを取らないぜ」

「ふふん、メルだけに重荷は背負わせないよ。この、天下無双！驚天動地の天才美少女！片倉麻衣も手伝うよ〜！」

「メル、自分だけだつて思うなよ。俺達が出来ることならなんだつてやってやる。何てつたつて、仲間の為だからな」

「……？よく分かりませんが、私はメルさんはメルさんらしくやっていけばいいと思いますよ。その為なら、私も協力は惜しみません」

秀明、麻衣、景之、渚はメルに誓つた。一丸となつて戦う事を。

「フツ……やれやれ、揃いも揃つてお人よしばっか。これだからなあ、光就到まんまと騙されるわけですね」

メルは照れ隠しに毒を吐きながら、笑っていた。

「仕方がありませんね……私が騙されないようにしましょう。おぞましい陰謀から貴方方を守つて見せる！もちろん、千歳も同じ。決して、一人だけ死地に置いて行かない。守つて見せる」

メルは自分に言い聞かせるように宣言した。

（千歳……貴女を、必ず救つてみせる……！！）

光就の手中にいる限り、彼女の身の安全は保証されない。メルは、千歳がそうなる前に帰さなければならぬ。そして、何より、語らわなければならぬ事があつたのだ。

（生きて帰ってきて……そうすれば、私は全ての過ちを謝して、頭を下げましょう。そして、皆で笑い合ひましょう。千歳……）

「……………」
メルは再びの回想を終え、我に返った。そうだ。自分には仲間がいるのだと心強く思い、目の前の浅井光就を見た。

「……………」
「……………」
二人はずつと見つめ合っていた。もつとも、その眼差しの性質は恋人同士が送り合うそれではなく、互いが互いの隙をつかがい、隙あらば自分の利益をまるまる掠め取ってしまうおうと画策している眼差しなのだ。

「このまま睨み合っつていては、埒が明かな……………」
最初に口火を開いたのは光就。

「メルラン・ブレンフォード、お主の策、私に教えよ」

光就は言葉を飾らなかつた。自分の欲求をストレートにぶつけた。……………分かりました。ただし……………条件があります」

意外にも、メルはすんなりと同意を示した。故に、光就は、
(この論戦……………容易ではない……………！)
そう感じた。

「よかるう、何なりと申せ」
一体、どんな無理難題を押し付けてくるのやら……………光就は疑心暗鬼になりながら聞いていた。

「……………私のシユミレーションではこの策を用いた場合、死傷者が出る確率は60%。むろん、この確率は指揮官の能力によって上下します」

メルはここで言葉を切り、一息ついてから、一気にまくし立てた。
「……………私に見せて下さい。光就公がこの60を0に出来る将であるかどうかを……………これが私の条件です」

と。この時、光就には反論するための言葉は山ほどあった。だが、それを使わない。

「……………善処しよう」
当たり前障りの無い言葉を用い、お茶を濁そうとするが、

「なりません。この条件を必ず守ると断言して頂けなければ、私は貴方の命令には従いませんよ」

メルは一喝して、その目論みを跳ね飛ばす。彼女からしてみれば、その山ほどある反論の言葉を吐かせれば、この論戦では自分の事実上勝利だ。

なぜなら、光就の目的は表向きこそ、メルから作戦を聞き出す為にと見えるものの、その裏の目的は言葉巧みにメルを懐柔するためだからだ。

だから、二人きりで話す。光就にとって、自分の配下が下手な事を言つて、それを基点に自分の論を崩されるのを恐れた。

そして、メルもまた、普段こそ秀明に酷い事を言っているが、自分が醜いまでに、本気で言葉のドッジボールをしている様を思い人や仲間に見られたくない……という感情が自分の弁舌を鈍らせるのではないかと考えていた。

だから、互いに不利なく戦える、この密談は成立した。

「……条件を守れなかったらどうする気だ」

「あら、光就公の如きお方がそのような弱気な事をおっしゃられるなんて」

メルはそう言った。こんな所で安易な決定をさせない為だ。

「……ふう、もう疲れました……確かに、貴方の武勇と私の策を合われば、この程度の戦況は簡単に覆せましょう。ですが、私を使わずとも、光就公にはたくさんの方の策謀家がいらっしやいますし、私にこだわる必要など無いでしょう」

疲れたと言つて、論戦を途中で投げ出し、極端な結論を出すのが彼女の常套手段。こうする事で、もう自分には論戦の意欲の無いかのように見せ付け、相手に無茶な要求を吞ませようとするのだ。

「……良からう。お主の条件、誠に断腸の思いにはあれど、吞む。吞むしかあるまい」

光就はむろん、メルの意図を知っている。だが、あえて、その意図に乗つかる。そうでなければ、彼女を屈服させる事など出来ない。

「……良いのですか？今ならまだ、聞かなかつた事にしてあげますよ」

メルはあくまで斜に構えた態度を取り続ける。

「舐めるな。私も、お主とただ単純に二人で話し合いたい訳ではない。私はお主を説得する。我が才を以つて、我が武を以つて、我が知を以つて、お主を納得させ……屈服させる」

光就は鋭い眼光でメルを睨み付けた。

「そうですね……精々頑張つて下さい」

メルは何でもない様子でそう言い放ち、やれやれと言わんばかりに両手を開き、首を横に振った。

「さて……もう一つよろしいですか？」

メルランは一息ついた後、再び口を動かした。光就の弁舌が不調であることに乗じ、今のうちに一気に自分の有利な方に話を進めようと思つたが為だ。

「千歳のことなのですが……彼女を帰らせていただきます。彼女は私達の仲間です。勝手に貴方の部隊に組み込まれては困りますね」

それに対し、光就はふつ、と笑つてこつ言つた。

「千歳は私に従っているのではない。あくまで総大将の命で私の傘下にいるだけだ」

「それは詭弁です。貴方の下に居ることは変わりありません」

メルは即座に反論する。

「それがどうした。まさか、千歳が私の下に居ては都合が悪い事情でもあるのか？」

光就、メルの様子を見、揺さぶりをかけた。

「大有りです。光就公には前科がありますからね」

前科とは知つての通り、例の事件で千歳が負傷した時の事である。……この話題を自分から出したのは彼女のミスだった。この言葉により、今まで守り一辺倒だった光就が、一気に攻勢に転ずる。

「少し良いか？私もその件については、お主と話し合いたいと思つ

ていた。……単刀直入に言わせてもらおう。千歳が重い怪我を負ったというのは嘘だろうか？」

メルに電撃が走る。これは彼女の弱点だった。千歳は当分戦えない状態だと言っておきながら、実際の千歳は怪我人どころか、むしろ、かつてよりパワーアップして、光就達と同じ水準で戦っていた。「……ええ、お察しの通り。あれは嘘です。ただし、方便と受けとって欲しいですね。千歳はどちらかと言うと考えが光就公よりですから。千歳を無謀な戦いへ誘う……なんてそんな気はさすがに無いと思いますが、そのような危険性を孕んでいる貴方方と彼女を切り離す為には、こうせざるを得なかったのです。もう遅いですが、不快に思われたのなら謝りましょう」

メルは頭を下げる。本心から謝ってる訳ではもちろんない。自分の泣き所にあたる部分を自ら晒し、謝罪する事で光就のこれ以上の追撃を阻止する為だ。

「ふん……だが、それは私だけに言う事ではなく、私の配下にも言う事ではないか？」

「そうですね……後で謝っておきます」

「……まあ、罪を認めてくれるのなら、私ももう、この一件について何も言う必要あるまい」

光就はこうは言ったものの、内心、悔しく思っていた。メルがあの時に嘘をついた事を否定すれば、いくらでも攻撃する手段はあったのだ。だが、彼女は真つ先に謝罪する事で、それらを封じ込めた。嘘でないと主張した所で勝ち目は無いと分かっていたからだ。

だから、光就は違う方向から攻める事にした。

「ならば、続けて問う。千歳が怪我人でない事は理解した。では、何故、彼女はお前達の下から離れ、反乱軍の将になっている？おかしいではないか」

またも、メルに電撃が走る。さっきのは、単に一つ的话题を潰せただけで、メルは未だ、苦境に立たされていた。

「よもや……呆れられたのではあるまいな。ふっ、もし、万が一そ

うだとしたら、お主が千歳の事について口を挟む道理は一寸たりとも無いなあ？」

光就は問い掛けるように、メルにそう言った。

「何を言つて……どこをどう解釈すれば、そんな結論に達するのか、私には理解しかねます」

メルは表情を乱さず、言った。

「結論？ふっ、興味をそそられたが故の質問だ。別に、答えてもらわなくても結構。……そうする事でそちらが不利になるならな」

含み笑いを浮かべ、メルの様子を伺う光就。だが、メルは斜に構えた態度を取り続けた。

「やれやれ、この調子じゃ、何か言つとかないとそちらの良いように解釈されてしまいそうです。……千歳はあの後、修業の旅に出たのです。自分の後継に渚を推薦してね」

そうか、あの娘が千歳（護衛役）の代わりか……通りで秀明から離れない訳だ。と、光就は思った。

「ということは……千歳はお主達の支配圏からは脱していたという事だな？」

「はい、一時的に、そういうことになりますね」

メルは否定しなかった。だが、あくまでそれは一時的な事である……すなわち、コンタクトが済んでいる今はもう、その事は関係ないと主張した。

「ですから……光就公が私達に無断で千歳を良いように扱おうと言うなら、私はそれを許すことは出来ません！」

「……………」

そう来るとは考えていなかった……。と、光就は唇を噛んだ。光就はメルの事を昔から知っている。その中の彼女はこんな譲歩などしない。完全な勝ちか、負けか、その二つしか無いと考えているはずだった。

だが、違った。この目の前にいるメルラン・ブレンフォードは自分が今まで感じていたメルとは一味も二味も違うし、何より……気

が違つ。

ようやく分かつた。自分がさつきから感じていた、あの綺麗な青い炎を見ているような感じ。それは彼女から発せられていた気、そのものだった。

「お主は、本当に、あのメルラン・ブレンフォードなのか？」

「どういう意味ですか？」

「お主の気、以前出会った時とはその大きさが比べものにならない。それに……形が違つ。気の大きさに関して言えば、人によれば、数日出会わなかつたら、全く変わってしまう者もいるが、数日の間で形が変わるとするのは聞いた事が無い。一体、お主に何が起こつた？」

光就の質問に、メルはフツと笑い、

「なあに……長い間失つていた自分の現実を、あの日によく取り戻しただけの事……貴方的に言えば、あの頃の私の気は偽りの気。今の気こそが私本来の気つてところですね」

「そうか……」

光就はメルの気を、改めてよく見てみた。冷えた熱さというのを感じる。気の大きさだけは彼から見れば取るに足らない。だが、このような形の気は光就が出会った強者、賢者達の誰も持つていなかった。

「……私は謝らねばならんようだ」

「ん？」

「私はお主をさつきまで、取るに足らぬ者として扱い、誠心を以つて論戦をしていなかった。しかし、それはとんでもない過ちだ。お主も、英雄であった……」

光就の目の色が変わる。メルの実力を認めたのだ。そして、それに勝つ為に、光就は本気を出す。

「メルラン・ブレンフォード。私は千歳を、お主にそのまま帰すことは出来ぬ。我々は彼女を必要としているし、彼女も我々を必要としておる。お主達の知らぬ場所で、彼女もまた、掛け替えの無い

存在であるのだ。それを考えると、私はお主の要求に、すぐさま首を縦に振る訳には参らん」

光就は話題を自ら作り出した。論戦に誠意を見せた証拠である。「でしようね。もはや、あの時のように、彼女と貴方方を無理に引き裂く事は出来ません。……どうでしょう？ 私達が義勇軍に正式入軍する事を交換条件で、千歳を帰してくれませんか？ それなら何の文句も無いはずですよ」

実は、メル達は義勇軍にまだ、正式入隊をしていない。義勇軍の義勇軍という訳だが、そういうのは総大将が直接命令することが出来ない。あくまで部下ではなく、協力者だからだ。

「ふっ……その話、悪くない。……良かろう。この会合が終わった後、総大将に掛け合ってみよう」

光就は好感を示した。というのも、実は、玲奈からメル達を義勇軍に入るよう、説得してくれと日頃から言われていたのだ。これで貸しを作れたな。と思いつながら、光就は心のうちでほくそ笑んだ。

「ならば、同じ反乱軍の将として相談だ。メル、私は千歳を借りる。その代わり、龍宗を貸そう」

今度は配下の交換交渉に入る。まあ、メルにとっては本来は配下ではないのだが、秀明の城代としてこの交渉に関わっているので、配下ということになる。

「不可です。景之なら構いません」

メルは、龍宗と同じタイプの強さを持つ、鬼庭景之を引き合いに出した。しかし、彼の実力は今の龍宗に遠く及ばない。

「それは不平等というものだ。それなら、片倉麻衣か白石渚を付けよ」

だから、それを補完する為、もう一人を請求した。

「分かりました。二人ともお貸ししましょう。しかし、私達は昌明様と忠実をお借りします」

対し、明らかに実力が上の者をさらに同じ頭数を請求するメル。おそらく、その根底にあるのは頭数を減らしたくないという考えだ

ろう。

「ならば、美空も貸そう。その代わりに、千歳を借りる」

「光就公はよほど、千歳が気に入ったみたいですね。美空さんを他方にやってまで、千歳を得ようと思いますか。……どうやら、双方とも、千歳の事は譲れないみたいですね。分かりました。千歳の件は保留にし、改めて考えましょう」

結局、千歳の秀明軍団帰還はメル達の入隊条件にはならなかったが、

景之、麻衣、渚と龍宗、忠実、美空の実力差交換の補完としての付加条件となった。

もっとも、これは単純な交換ではない。互いに自分の仲間を相手が育ててくれるのを期待しているが故の交換であった。

そういう意味では、自分の方が得をしたとメルは思っていたが、それは間違いだった。

知つての通り、美空さんは例の難題を課せられている為、修業しなければいけない。龍宗も、進化したばかりで、飛行訓練を行わないと飛べない。忠実に関しては言うまでもあるまい。

「ふっ……まあ、有意義な時間であった。ありがたい事よ。これからも、よしなをお願いする」

「礼には及びません。これからは仲良く協力し合っていきましょう」
光就とメルは固く握手を交わした。しかし、これは集団の長としての握手であって、個人と個人の握手ではない。これでこの二人の間のわだかまりが消えたとは、思えそうにない。

後編に続く

第三十七話前編：メル、光就に挑むの事（コールドプレイズ）（後書き）

麻衣「やったほー。本名が付いた事で、ワタシ達も後書きデビュー！
やったー！」

景之「やれやれ、仕方ないこととはいえ、他の主のもとに行かなきゃならんとはなあ……」

麻衣「何言ってるんだよ！光就って人が、本当はどういう人かを量れる絶好の機会じゃない。ワタシはむしろ嬉しいよ」

渚「私もうれしいです！だって、だってだって、あの瀬奈様と戦えるんですよ！あの超美人で、超クールで、超強くて、超かわいい、あの海風瀬奈様と一緒に戦えるんですよ！ああ、想像しただけで、もう、天にも昇る心地い……」

景之「ひどいな……」

麻衣「渚らしくて良いね。さあ、今回は早めに予告！次回は私達と光就との修業だあ！」

景之「ああ。でも、やっぱり光就様は気難しいなんてレベルじゃないよな。そんなんで済ませられる主人も何だかんだ言っただけじゃない！」

渚「瀬奈様、カッコイイ！瀬奈様、麗しい！瀬奈様、愛してる！瀬奈様あ〜」

景之「……次話投稿は一月二十二日だ！」

麻衣「まったね〜！」

光就「このコーナーがまともに機能しているのを久々に見た……」

第三十七話中編：光就、才を見定めるの事（どうして、熱血キヤラは空気になっ

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

前回のあらすじ

光就と秀明の軍師の、メルことメルラン・ブレンフォードは密談を以って、二人の意見を交わし合った。そして、光就はその最中、メルが今まで、自分が知っていたメルと、今の彼女自身が明らかに違っているのを感じ取り、彼女を英傑の一人として認めるのだった。そして、この論戦の結果、光就はメルに義勇軍への入軍を認めさせ、更に、交換ということで、美空さん、龍宗、忠実の代わりに、秀明の配下三人が新たに光就軍団に加わる事となった。

「皆、よく来てくれた。改めて自己紹介させてもらおう。私は浅井光就である。いろいろと大変な時に主君が変わり、お主らもなかなか気持ちの整理が付きにくいとは思いますが、我が配下となった以上は極力、私の命に従ってもらおう。各々心得よ」

光就は龍宗達と入れ替わりに入って来た景之達に自己紹介と軽い演説を行う。

それが終わると、次は自分の配下の紹介に入る。

「さて……彼女は海風瀬奈。お主らの指導者兼メツセンサーとなる。私への不平不満は彼女に言うといい」

「初めまして……でもないか。海風瀬奈だ。未熟者ではあるが、君達の訓練を担当させてもらう事と相成った。ま、お互い、気楽にやっつていこうじゃないか」

瀬奈はそう言うと、三人と軽い握手を交わす。

「そして、彼は竹中昌明。私の軍師である。お主達にとっては戦いに於いての直接の指揮官となる。彼の言うことを良く聞くことだ」
「初めまして。竹中昌明と申します。短い付き合いとなりますが、共に殿の為、義勇軍の為に協力しあいながら、戦っていきましよう」

昌明は鉄扇を携えながら、会釈した。

二人の紹介が終わり、次は、景之達の番である。

「さて、次はお主達の事を教えてもらおうか」

光就がそう言った時、率先して自己紹介を名乗り出た者がいた。妙に大きな三角帽子と、黄色を基調とした地味なようで派手な口ブ。実に奇怪な格好である。しかし、彼女の変わり者っぷりはその外装だけではないということは、すぐに明らかになった。

「ハイハイハイハイ！ワタシが最初！ワタシが最初！」

「落ち着け。……名を何と言う？」

「おっ？よくぞ、聞いてくれました！ワタシの名は片倉麻衣！天下
狂乱！明朗快活の天才美少女、片倉麻衣とはワタシの事だー！ツ
！ドーン！」

麻衣の相変わらずのハイテンションは光就の下でも健在のようだ。
「むむむ、なんとまあ、元気な娘よ……お主の特技は何だ？」

光就は唸りながら、だが、予定通りを貫く。

「ん？得意なところ？……へへへん、天才なんだから全部得意に
決まってるじゃん……なぐんて言いたいところだけど、そう簡単
におーるまいていつて訳にはいかないわけだ、現実」

「……………」

「いやん、睨まないで下さいよ、分かりました分かりましたって、
……オホン！ワタシの特技は心を読むことです。相手の考えてる事、
相手の思ってる事が手に取るように分かるんだよ、ワタシは。へ
へっ、なぐに青ざめてんだよっ！別に、ワタシは光就様がワタシの
事を『うるさい奴だな……』なぐんて思っても、気にしてません
から、慣れてますんで」

光就は驚きを隠せなかった。いや、心を読まれた事ではない。そ
れ自体は、昔もされた事があったからだ。問題は、

「お前、よくその歳でその能力を持っていて、平気で居られるな」

この年若き少女がそれを使いこなしてる事だ。かつて、光就が出
会った読心術の使い手は老練ゲントウの戦士であり、また、彼自身の発言か
ら、その領域にまで到達するのが、決して楽ではないという事は想
像に難くない。

「へへへん、まあね」

麻衣は軽く言った。

「なるほどな。天才美少女と自称するのも頷ける」

光就は単純に凄いと思った。読心術自体はテレパシーの応用の為
取得はエスパーであれば誰でも……もちろん光就も昌明も出来る。
だが、取得出来ても、使用の際、大量に人の思念が流れてくる為、
それに精神が耐えられない。しかも、一度取得してしまった場合、

もうそれを自由にオンしたりオフしたりする事は出来ない。

読心術に手を出してしまつたが故に、将来を期待されていた才能のあるエスパーが発狂して、駄目になつてしまつたというケースは多い。だから、多くの場合、読心術は忌避される。当然、光就もその道を通つた。言つてしまえば、逃げた訳だ。

だから、光就は読心術の使い手に関してだけは無差別の敬意を抱いている。自分が逃げた道に立ち向かい、勝利した者として。

「あらららやっだなあ、そんな誉めたつて、なぐんにも出ませんよう？まつたくう、そんな反応初めてですよ」

麻衣は照れながら言つた。まあ、読心術の凄さはエスパーでないと分からないから、評価されないのも仕方ないと言えば、仕方ないのだが。

(このような才人はもつと優遇されるべきだ)

と、光就は思つた。少なくとも、私なら昌明と同等の待遇を約束するとも思つた。

「そんなことあ……もう！光就様は口説き上手ですねえ！そんなに誉められても、ワタシはもうお腹一杯で食べられませんよう」

むろん、光就は声を出していない為、全て、麻衣が彼の心を読んでの発言だつたが、果たして、周りは光就が何を考えたら、彼女の口からそんな発言が出るのかと、やきもきしていた。

「でもですよ、さすがに、これを聞いちゃつたら光就様もワタシに幻滅するかもですよ？ワタシ、攻撃技一切覚えてません！ねんりきも！使えるのは補助のみ！どうだー！このワタシのスペックうー！感動的だろー？」

「ああ、感動的だな。だが無意味だ」

しかし、いくら尊敬する読心術使いとはいえ、攻撃技が無いのはどうしようもない。と、光就は思つた。

「ふむ……分かつた。ならば麻衣、私が稽古を付けてやろう。攻撃技の稽古だ。お主ほどの才を持つ者なら、ねんりき程度ならすぐに習得出来るだろ」

「おおっ！光就様が直々に稽古を付けて下さるなんてえ！ワタシ、感激だよお！」

「こちらこそ、お主のような才人とともに修業出来る事、光栄に思う」

光就と麻衣は固い握手を交わした。どうやら、一見正反対の性格でも、お互い通じ合うものがあつたようだ。

「さてさて、お次は……景之い！君に決めたーッ！」

そして、その後、麻衣はクルクルと回転しながら景之をビシッと指差して指名した。

「お、俺かよ！え、えーっと……鬼庭景之って言います、特技は高速飛行ですかね……」

景之は突然の指名に冷や汗を流しながら、だが、しっかりと受け答える。

「高速飛行だと？どれくらい出る？」

光就は麻衣から景之に査定の目を切り替えた。

「は？何がですか」

「スピードだ。時速何キロ出る？」

「はっ……えー、たしか、三百キロくらいならば……」

「そのスピードは一瞬で出せるのか？」

「いや、無理ですな。少し勢いを付けてからではないと……」

ここまで言ったところで、光就はふっ、と笑い、

「話にならんな、遅すぎる。そんなのでよく、高速飛行が得手だなどどぬかせるものだな」

と、景之を攻撃する。

「な、何ですと！お言葉ですが、貴方よりは速いと思いますよ！」

光就の暴言に、さすがの景之も怒りを露わにする。

「私より速いだと？ふっ……」

光就が目を閉じた……、と思つた次の瞬間、

「寝言は寝てから言え、鬼庭景之よ……」

光就の抑揚の無い声が後ろから聞こえた。

「なっ……！？なんて速さだ！」

景之は驚きの声を上げる。

「この程度のスピードも見切れぬくらいでは、たかが知れておるわ。自信を持つ事と奢り高ぶる事は違うぞ」

「うっ……」

景之は何も言えない。自分の予想以上に、この光就という男は優秀な戦士である。そう強く実感したのだ。

「他に得手は？」

光就は更に問う。

「他に？えー……特にありません」

「特に無いだと？……はあ、分かった。お主は何か他に得意になれるものを探してこい。話はそれからだ」

光就はため息をつきながらそう言った。

「ふむ、そうだな……槍なんてどうだ？うむ、そうだ。そうしよう！景之、お主は槍の修業をして来るが良い！」

そして、光就は勝手に景之にそう命じる。これに対し、景之も反論する。

「ちよ、ま、待って下され！いきなりそんなことを言われましても……それに誰が俺に槍を教えてくれるのです？」

もっともな質問だった。そう、槍なんて今までの誰もが使っていない。誰が教えられるというのだろうか。

「ふっ、安心せよ。私はその為に、最高の教官を呼んでるのでな……出て来て下され！」

「ふふふ、今回の弟子はどれくらいで音を上げるのかしら？」

光就の呼び掛けに応じたのは、浅井美羽であった。光就の母親にして、至高の戦士。しかし、彼女の得手は細剣であったはず。槍を教える事など出来るのだろうか？

「母上、申し訳ございません。またしても面倒をお掛けすることになりまして……この光就の不肖、お許し下され！」

「何言つてんのよ、どうせついでなんだから、何人いようと構いはしないわ。それに……彼、なかなかいい男じゃない。ふふふ、いい男なら何人来たって足りないわよ……」

美羽は妖しく笑いながら言った。

「あ、あの……失礼な事を言いますが、美羽様って、槍なんて使えるんですかい？ 剣士ですよ、美羽様」

景之は光就に対してより、さらに丁寧な言葉で、美羽に質問した。「当たり前じゃない！ 弓でも戟でも鉄砲でも、もちろん槍も、わたしは武器という武器全て得意よ。まあ、槍に関しちゃ、上の槍よりも、下の槍の扱いの方が得意んだけどねえ。へっへっへっ」

ヘラヘラと笑いながら、中途半端に握った手を上下させる美羽。これはひどい。

「はははははっ！ 母上、さすがですな。重い空気を一瞬で吹き飛ばす、鮮やかな下ネタ！ この光就、感服致しましたぞ！」

「（ここは殿や大殿に合わせておくべきですね……）ふふふ、この場面でそのネタを振るうとは、予想だにしませんでした。さすが、大殿。私達凡人には到底及ばぬ領域です」

「……………（呆れ果てて言葉も出ない）」

「下の槍いゝ、下の槍いゝ、楽しいねえ、これ」

「なっ！ なんと破廉恥な……／＼／」

け、けしからん！ けしからんぞ！」

「この程度の下ネタで顔真つ赤な瀬奈様かわいい！ この白石渚、萌え死に致しましたああああ！」

本当に褒めているのは光就ばかりで、昌明はそれに合わせただけ。景之は余りの寒さに動けず、麻衣はそのフレーズを気に入ったみたいで、それを口にしながら、美羽の真似をして、手を上下させる。瀬奈は顔を真つ赤にしてけしからんけしからんと連呼する。そして、渚はそんな瀬奈を見て悶える始末。ある意味、各人の性格をよく表した場面と言えるだろう。

「まあ、とにかく、景之……だっけ？ とりあえず、こいつの面倒は

わたしが見るわ。光就、あんたも自分のすべき事をしっかりやりなさい」

「はっ……この光就、死力を尽くして取り掛かる所存」

光就は膝を屈して言った。

「そう。では、失礼するわ。景之君……いらっしやい」

美羽は光就に別れを告げると、景之を色っぽく誘う。

「は、はい……」

景之はドキドキしながら美羽の所に行く。彼女も容姿だけは随一の美しさなので、よく彼女を知らない人にとっては、とても愛らしく思えるのだ。もつとも、光就をして、一度、一週間くらい共に過ごすの良い。千年……いや、万年の恋も冷めるぞ。と、言わしめるあたり、美羽の旦那様はやはり、光秀一人なのだろう。

「じゃあねえ、光就い」

「さらばです。また会いましょう、母上」

美羽が子供のように手を振っているのを、光就は頭を下げて見送る。……こういふ彼女の仕草も男を騙している要因の一つだ。

「そして……景之よ、生きて再び会える事を祈っておるぞ」

光就は小声でそう言った。

「さて、最後は……お主だな。名を何と云う？」

光就は最後に残った渚を呼ぶ。

「は、はい……わ、私は、し、白石渚と、申します……」

渚は少し……いや、かなり緊張している。

「もう少し、楽にするが良い。……特技は何だ？」

「はい……特技は対集団格闘です」

渚は緊張しながらも、自分の得手をアピールする。

「対集団格闘……？それだけではよく分かん。もう少し、具体的に教えてみよ」

「えーっと……具体的には、あばれる、ですね。敵に突撃し、敵の布陣を切り裂き、連携を断つ事が出来ます」

「ほう……で、実践で用いた事は？」

「……ありません」

「何だと？した事もない事を、出来るかのように吹聴するでない！」
光就は声を上げた。こういう事に関しては光就は特に厳しい。まあ、彼にして見れば、推測でものを言われてはかなわないのだ。

「ふん……まあ、それは後でシュミレーションを行えばはつきりする事だ。本当に出来るのか出来ないのかは。……他に得意なものは？」

「はい……後は一応、暗器の扱いにも自信があります。短戟などの小さい刃物が得意ですね」

「なるほどな……暗器なら、ここでも出来るな。よし、私の小柄を貸そう。腕前、披露してみよ」

「はい……！」

光就はマントから一本の小柄（長さ五センチ程度の小さな刀）を出し、渚に手渡す。そして、どこからかリングを取り出すと、おもむろに頭に乗せた。

「さあ、このリングをそれで射ぬけ。お主の腕が本物ならば、訳あるまい」

と、光就が言うと、瀬奈が慌てて彼を止めようとする。

「ちよ……お待ち下され、主！危のう御座います！」

「何を言っているか。こうでもしなければ、相手の本当の腕が分からんではないか。外したら怪我をさせる、この緊張感を乗り越えられぬ者なら、必要無い」

「いやいやいや、そういうことを言っているのではなく、もし、万が一、主に当たってしまったら、一大事ではありませんか！

今の主は、主一人だけの体ではありません！義勇軍一万二千人分の命を預かっている体なのです！ですから、軽々しく体を張るような真似はお控え下さい！」

瀬奈は必死で光就を諫める。

「ふん……なら、お前が私の代わりに的になるか？」

「もちろんですとも！主にやらせるくらいならば、私がやりまじょう！」

瀬奈はそう言うと、光就の頭からリンゴを奪い取り、自分の頭に乗せ、

「渚、私的だ。遠慮無く撃つてくるがいい」

と、渚に言った。だが、渚はというと、

「そ、そんな……瀬奈様を的になんて出来ません！」

涙を浮かべて、瀬奈を引き止めようとするが、

「馬鹿者！何を戸惑っている！？……私はお前の投擲とつてきの腕を昔から知っている。だから、こうやって身を捧げられるのだ。渚、私はお前を信じている。お前も私を信じてくれ！」

瀬奈はそう言って譲らなかつた。

「瀬奈様……！うううう……っ」

この言葉に、渚は感動を覚え、涙を流した。

「……分かりました、瀬奈様！この白石渚、瀬奈様の信頼に必ずや、応えて見せます！」

そして、渚は小柄を手に、狙いを定める。

「……………」

静まり返る周囲。だが、次の瞬間、

「……シュツ！」

渚が小柄を投げた。それは彼女の狙い通りに真つすぐ飛び、瀬奈の頭のリンゴの中央を射ぬいた。

「見事！お主の腕は本物のようだ」

「フツ……別段驚く事でもない。最初から分かりきっていた事だ。なあ、渚」

褒め讃える光就に、少し照れ隠し気味に、必然と言いながらも渚の腕を褒める瀬奈。

「いえ……私の腕などたいしたことはありません。全ては瀬奈様の励ましのお陰です！瀬奈様ああ……！愛してます……！」

「こ、こら！抱き着くんじやない！あ、主い、助けて下され……」

「愛の力だな。微笑ましい事よ」

光就は腕を組み、頷きながら、そう言った。

「渚あ……よかったね、憧れの瀬奈様にあんなことを言われて。あれつてもう、告白ですよねえ、光就様」

麻衣がくすくすと笑いながら光就に言った。

「そうだな。ふっ……フラグ建築士は美空だけと思っていたが、やはり、瀬奈の方が、本人のスペックも高いし、フラグも立ちやすいのだな」

それに対し、光就はこれまたふっ、と笑いながら麻衣の言葉を肯定した。

「今日はめでたい事続きですね。お二方、結婚はいつされるのですかな?」

昌明も笑いながら、瀬奈をからかった。

「ぐ、軍師殿!そ、それに皆も!さつきから何を言っておられるのですか!そもそも、女同士で結婚など出来る訳が……!」

「何を言っているのですか瀬奈様。愛があれば何でも出来ますよ。」

瀬奈様の元気な赤ちゃん、私が産みます!」

渚が目を爛々《らんらん》と輝かし、瀬奈を見つめる。

「はあ!?何でそんな所に飛ぶんだ!ん?待てよ、ということとは……」

「ふ、ふぎけるな!私は一生涯貞操を守ると、月に誓っているんだ……」

!お前の為に汚されてたまるか!」

「汚されるって……瀬奈よ、お前も酷い事を言うなあ」

「そうだそうだ!高飛車なヒロインは凌辱エンドなんだぞ!渚、やつちやえ!やつちやえ!」

光就と麻衣が言う。

「いえ……麻衣様、お気持ちは大変ありがたいのですが、私はそんな結末を迎えたくなんかありません。瀬奈様の堅い堅い殻を少しずつ少しずつ取り除き、愛を育み、そして、二人の同意の上で結ばれたい。と、私は思っています。それなのに凌辱なんて……でも、くやしい……ッ!でも感じちゃうな瀬奈様も捨て難い……!」

渚は妄想をたくましくし、やがて、自分から悶えだした。

「（これ以上は私が居ても無駄だろう。私も忙しいし、後は二人に丸投げしよう）昌明、行くぞ。やらなければならぬことが山積みだ」

「（ふふふ、混乱を煽るだけ煽り、そして被害を受ける前に立ち去る……。何と鮮やか。さすが殿です）はい、かしこまりました」

「二人をいじるのも飽きました。他に面白いの、見つけにいこうと」

光就と昌明はそそくさとその場を立ち去り、麻衣もどこかへ消え、瀬奈は取り残されてしまった。

「あつ！主め……。被害を受ける前に逃げましたな……。！お待ち下され！」

瀬奈が急いで彼らの後を追いかけてようとした時、

「どこに行かれるんですか、瀬奈様！私達の愛は、まだ育まれ切っていませんよ！」

渚は瀬奈を押さえ付け、放すまいとする。

「放せええええっ！渚あああつ！！」

、瀬奈が渚を振りほどき、疾走した。しかし、

「あーん、待つて下さい！瀬奈様あああ」

渚もこんな事で諦める玉ではない。渚は瀬奈を全速力で追いかける。

そして、この時から瀬奈は渚から付きまとわれる事となった。瀬奈、受難の歴史の始まりである。

景之「ふう……疲れた。なんて凄い連中ばかりが集まってるんだ。

俺にはとても着いていけない」

龍宗「お疲れさん。その様子じゃあ、光就や昌明に、散々掻き回されたようだなあ。全く、あのお方たちは遠慮つてのを知らねえんだから困んな」

景之「あなたは確か、龍宗殿……でしたね。いやあ、毎日あのメンツと顔を合わせてなければならぬなんて、気が重いですよ。龍宗殿はよく平気でいられますな」

龍宗「へっ、龍宗、でいいぜ。まあ、あいつらの奇行は深く考えないのが一番だぜ。たとえ、意味があつたとしても、俺にはその意味を理解できる程の知力はねえや」

景之「そうですか……龍宗、俺は他の軍に行つても空気なのかね」

龍宗「へっ、何言つてんだ。あいつらのキャラが濃すぎるだけなんだよ。それに、空気がなきゃ、人は生きられないぜ？あんな力オスな軍団に俺達みたいになまともなのが居ることで、初めて、あの軍団が成り立ってる……最近はその思うようになったんだ」

景之「空気が無ければ、人は生きられない……そうですな。ありがとう、龍宗！おかげで生きる希望を取り戻せたぞ！」

龍宗「そうか、それは良かった」

景之「俺たちは空気かもしれない。いや、空気だ。でも、確かにその軍団に必要な、かけがえの無い一員なんだ！」

龍宗「そうだ！その通りだ。景之！」

景之「ああ、龍宗！」

龍宗「なあ、景之、俺たち、」

景之「似たもん同士かもな！」

「ハハハハハハッ！」

龍宗「じゃあ、まともな二人で次回予告やるか！」

景之「おう！次回は光就様と昌明殿が玲奈様と麟を相手に論戦を繰り広げるぞ！」

龍宗「次話投稿は二月十四日！期待しないで待っててくれよ！」

第三十七話後編：昌明、弁舌を振るうの事（合従連衡の論戦）（前書き）

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

前回のあらすじ

麻衣、景之、渚は光就にその才覚と能力を見せつけた。その結果は三者三様であった。

麻衣は、その才能と特技を見初められ、光就の直接の指導下に入る事になった。

景之は、まだ目覚めぬ、新たな才を覚醒させる為、美羽の指導の下で修業する事となった。

渚は、その並外れた能力と特技と瀬奈に対する愛を認められ、瀬奈の指導下に入る事に（なし崩し的に）なった。

そして、この時から渚のストーキングによる瀬奈の受難の歴史が始まったのである。

第三十七話後編：昌明、弁舌を振るうの事（合従連衡の論戦）

「どうということ？」

義勇軍総大将、東条院玲奈はそう疑問を呈した。

「その言葉通りでありますよ。玲奈様。我らも貴女方の義勇軍の一員になりたいという、殿の仰せです」

昌明ははつきりとよく通る声で言った。嘘偽りの欠片も見えない声である。

「……光就様と玲奈様の複雑な事情は私も知っています。そして、光就様がどういうお方かも……それらを知っているからこそ、私は光就様が本当にそのような事をおっしゃったのか、疑問を抱かざるを得ないですよ。昌明殿」

麟はそう言った。今、この部屋には玲奈と昌明と麟がいる。そう、この場に光就は居ないのだ。

「ですから……本当は言っていない事を言ったかのように装い、義勇軍に入り込まんとする可能性も無きにしもあらず……でしょう？」

「あれの性格上、人の下に甘んじる事……特に、自分より格下の存在であると思ひ込んでる人に、頭を下げてまで臣下にしてくれと乞う事なんて到底出来ない。でも、義勇軍に入ることによって発生する利益これを捨てる事も出来ない。」

と、なると。彼は考えなければならなかった。自分の頭を下げずに義勇軍に入る方法を。そして、彼が導き出した答えが貴方よ」

玲奈はビシッと昌明を指差した。

「貴方に頭を下げさせ、自分達の義勇軍参加を認めさせる。そうすれば、自分は頭を下げなくて済むからねえ。あーあ、かわいそうに、貴方はまんまと利用されたのよ。彼のつまらないプライドの為に」

玲奈は憐憫の眼差しを昌明に向けた。すると、昌明は鉄扇を開いて口を隠し、軽く笑った。

「ふっふっふっ、プライドなんて、総じてつまらないものですよ。」

少なくとも、私のような文官にとっては……ね」

昌明は扇を閉じる。そして、その扇で玲奈と麟を指し、言った。「貴女方は勘違いしていらっしやいます……私達は別に、金品の為に義勇軍に入りたいと申している訳ではありません。あくまで正義の為に。天下万民を救わんとする義兵の一人になりたい……その一心のみで浅井光就及び我ら臣下一同、義勇軍の末席に座したいと望み奉るのみに御座います」

昌明は静かに、しかし、内なる熱さを秘めたような声で語った。

「何を言い出すかと思つたら……昌明！なら、給金も食料も無しで良いのね!？」

「もちろん。覚悟の上です」

玲奈の脅迫を躲す昌明。金なんてそもそも要らないし、食料に関しては、あの運んで来た山のような兵糧を少しばかり懐に入れてしまえばいい。それに……本来、脅すのはそっちじゃない。こつちだと昌明は思っていた。義勇軍の兵糧よりも、自分達の持っている兵糧の方が遥かに多いことは、明らかである。

昌明はあの時、全ての兵糧を手に入れた訳ではなかった。全ての兵糧を取ってしまったら、自分達に疑いの目がいつてしまうからだ。

だから、昌明は兵糧を手に入れた時、義勇軍が期待していた数の、気持ち四割くらいを残した。そして、義勇軍がそれを回収する。しかし、それは多くない。自分達が期待していた数の四割だからだ。

義勇軍は焦っている。焦る者には隙ができる。その隙を突けば、強固なものも一瞬で崩れる。昌明は虎視眈々と狙っていた。彼らの隙を。そして、待っていた。もう一人の仲間を。戦友を。

「遅ればせながら……浅井光就、ただいま参上つかまつ仕つた」

突然、戸が開き、その中から光就が現れた。……メンツは揃つた。「ふん、浅井光就。遅かつたわね。遅刻なんて義士のやることかしらね?」

「遅れてしまったのは、皆に稽古をつけていたから。決して、私的

な理由で遅れた訳ではあり申さん」

光就もまた、玲奈の追及を躲す。やはり、光就と昌明の二人が相手では、さすがの玲奈も論舌では齒が立たない。

「まあ、過ぎた事を言っただけでも仕方ありません。ちょうどいい時に来ました。この寺沢麟、光就様に聞きたき儀がございます」

麟はそう言いながら、玲奈に口を閉ざすよう、合図した。これ以上何か言わずと、そこを付け込まれる。と、麟は軍略家の本能で察知した。

「光就様、貴方が義勇軍の一員になりたいと懇願なさったのは事実なのですか？私、光就様とは短い付き合いではありますが、光就様の如き人がそう簡単に頭を下げて臣下の位に甘んじるとは想像し兼ねます」

麟は言葉を飾らず、純粋な疑問のみを言った。

「ふむ……麟よ。私は別に、そこまで誇り高いわけではない。少なくとも、瀬奈よりはな。随分と誤解されているようだ」

光就はそう言った。麟の発言の根拠を真つ向から否定する言葉だった。

「分かりました。では、質問を変えましょう。光就様は何が目的なのですか？何故義勇軍に入りたいとお思いになられたのですか？」

麟はうるたえず、次の質問に入る。この切り替えの早さは彼女の知力の高さの表れである。

「己の野心を剥き出しにして、弱者をいたぶり、秩序を乱す度し難きロケット団を滅ぼす……この目的の為だ」

光就もすぐさま、そう答える。

「そうですか……」

麟はそう言うと、ここで一息つき、そして、次の様に言い放った。「ならば、この寺沢麟、光就様を義勇軍に入れるわけには参りません！」

麟は語気を荒げ、きっぱりと確かな拒絶を以ってそう言った。光就の言い分を否定したのだ。

「……何故だ？私は何かおかしな事でも言ったか？」

光就は心の奥底でため息をついた。自分の戦いを否定されるのは慣れているが、今、ロケット団と戦っている者に自分の戦いを否定されるとは……と。

「おかしな事を言ったかですって？貴方は自分で何を言っているのか分かっていいるのですか！？」

「当然だ。世迷言など言わん」

「ですから、貴方のその言葉こそ世迷言だと言っているのです！ロケット団を滅ぼす……？正気の沙汰とは思えません！」

麟は少し興奮気味に言った。

「ククク……正気の沙汰ではない……か」

光就は笑いながら言った。

さて、ここで光就と麟の認識の違いというのを確認していきたく、まず、二人の違いは考え方にある。

光就の考え方というのは、威力主義。強大な威力で圧倒し、敵に圧力を加え、状況を有利に進めんとする考え方。

これは積極的な考えで、とにかく、先手先手を打ち、相手を後手に回す。敵の動きを制限するのだ。

しかし、これには重大な問題がある。それは、圧力を保つ為の戦いをしなければならぬことだ。もちろん、負けては圧力も何もあつたものではないから、勝たなければならぬ。あちこちで増え続ける戦いに、全て勝利し続けなければならぬのだ。しかし、全ての戦いに勝つなど、古の、どの軍略家にも不可能だった。戦は予想外の事が起きるものなのだから。

だが、光就は知ってか知らずか（もつとも、光就ほどの軍略家があるそんな道理を知らないはずがないのだが）それを押し通そうとする。それは、自分の才に自信を持っているからだ。自分の才に向かつて平然と倒れられるくらい信頼を置いている。傲慢故に、己の才を信じられる。己の才を信じるが故に、恐れが無い。恐れが無い故に、

負けを考えていない。負けを考えていない故に、諦めを知らない。ある意味では、ロケット団と正面から向かい合うには一番最適な態度であろう。

それに対し、麟の考え方とは慎重に慎重を重ねる徹底した敗北主義である。

敗北主義とは、常に自分が負ける事を想定して物事に当たる考え。負けを考えない光就とは対照的だ。

これの長所。それは、たとえ負けたとしても、すぐに立て直しが利くこと。普通、敗北を味わった時、その勢力の気運というものは崩れ去る。それを繰り返して、ついに気運を失った勢力は実に脆く、すぐさま蹂躪されるのだ。

だが、そもそも負けを想定していた場合はその限りではない。想定範囲内に押し止められ、勢力の気運は少しは失われど、全て失われる事は無い。そうやって粘り続けて相手の自壊を待つのだ。

しかし、この考えの問題点というのは、大局を見れない事だ。なぜなら、今、この状況を維持する事に手一杯なのだから、無駄な事……自分が想像し得ない事に時間を割く余裕などない。

この問題は既に露見している。思い出して欲しい。麟は西側の陸路には多数の罫を仕掛けたりして、過剰なまでの防衛ラインを築いていたのに、一方の南側の海路は難無く敵に占領されてしまった。あの時の麟は敵が海路を使って来るとは想像していなかった……いや、出来なかった。陸路を封鎖する事で手一杯だった麟には、海路の事など目の端にも入らなかったのだろう。

これがメルをして詰めが甘いですなと言わしめた由縁である。そして、二つ目の違いとして、最終目標がある。

光就の目標というのは知ってる通り、光秀（バレル）の奪還。そして、究極的にはロケット団を滅ぼす事。少なくとも、光就はこうしなければ、父を取り戻す事は出来ないと考えている。

一方、麟の目標はというと、光就の目標とは全く違う、もっと小さな目標。シオンの安泰。これのみだ。

安泰とは戦が無い事。ロケット団を滅ぼす為、各地で兵を挙げんとしている光就とは到底、相容れないのである。

更に、三つ目の違いとして、二人のロケット団の認識がある。

光就はロケット団は決して勝てない相手ではないと見ている。

「確かに、強大ではある。強大ではあるが、その分、敵も多い。そして、その強大さが敵の団結を促すのだ。あのコイキングでさえ、束になればカイリユウを倒すことも出来る。なのに、どうして人と萌えもんが束になってロケット団を倒せないなんて事があるのか。いや、ない」

と、光就は日頃から異口同音に言っている。最後まで抵抗するという覚悟である。

それに対し、麟は、

「この戦いが終わったら、今回の事を謝し、ロケット団と結びましょう。天下の趨勢は既に決し、これ以上の抵抗は良民を苦しめるのみ。勝利したのなら、いくらか好条件での同盟が成るかもしれません」

と、玲奈に語ったことがある。

しかし、これはあくまで玲奈に語る事の出来る範囲である。麟は確かにそうも思っているが、それ以上に、

（確かに、この時は勝っている……しかし、いつまでも勝ち続けることなど不可能に近い。奴らが撤退したとしても、その後、再び軍備を整えて、今度は更なる大軍で来る。そうなったら完全に詰み。そうなる前に、話をつけ、玲奈様やシオンのみんなの安全を確保しなければならぬ。

そして、首尾よくロケット団と義勇軍との同盟が成ったならば、私の目標であるシオンの安泰は果たされる）

と、思っている。玲奈にこれを言えないのは、気位の高い彼女に、ロケット団には勝てないでしょうとも言うようなこの発言すれば、玲奈は意地でも麟の進言を容れないだろう。軍師たる者、考えた事を何でもかんでも自分の主に言うのは褒められた事ではないのだ。

「ククク……正気の沙汰ではない……か」

光就は笑いながら言った。そして、ため息をつき、次のように言い放った。

「ならば、問う。お主にとっての正気の方法とは……何だ」

「いいでしょう。お答え致します。私にとっての正気の方法……それは、ロケット団の天下を認め、それと結ぶ事。それに他なりません」

麟はさらりと言った。

「ロケット団と結ぶ？……ふふふつ、ふふふふふ、ふはははははははははっ！ははははははははははははっ！！」

それに対し、光就は突然、狂ったように笑い出し、

「小娘が……！私は、貴様の方がよほど、正気とは思えんな！」

机を叩き、目を見開き、麟を凄まじい眼光で睨みつけた。

「そうですか。どうやら私たち、あまり気が合いそうにありませんね」

麟はそれに怯まず、平然と言い返した。

（この娘、ただ者ではありませんね。殿に直面して、彼に臆していません。私は見ました。玲奈様がさっきの殿を見て、一瞬、戦おのいたのを。実に素晴らしい胆力を持ち合わせている……厄介ですね。それに加え、殿は最近あまり調子がよろしくありません……このままではいかに殿といえど、追い詰められてしまいかもしれません……）

昌明は密かにそう思った。そして……、

「殿、お手を煩わすまでもありません。ここは私にお任せを……」

と、光就が何か言おうとしたのを遮り、昌明がテレパシーでそう言う。

「……分かった。昌明よ、後は任せる。必ずや、勝利せよ」

光就もテレパシーでそう返す。

「麟殿、殿は連日の戦いと激務で疲れております。これ以上、無用の論戦を続けると言うのであれば、この竹中昌明がお相手致しますし

よう」

昌明は光就と席を交換し、麟と向き合う。

「昌明殿、貴方ほどの知者ならば、私が何を思ってこう申しているのか、お分かり頂いてますね？」

麟は光就から昌明に論舌の矛先を移し、こう言った。

「もちろん……ですが、仮に同盟を結べたとして、それで本当にシオンは永遠に安泰と言えるでしょうか？いや、言えますまい」

昌明は早速、麟に反論をぶつける。麟はそれに対し、

「そうでしょうね。同盟というものは所詮、消費物……戦略的価値が薄くなれば、容赦無く破棄されるものです」

と、昌明の主張を認める発言をするが、

「しかし、それは乱世においての話。ロケット団が全ての抵抗者共レジスタンスを駆逐した後はもう乱世ではありません。だから、この同盟が破られる事も無い。違いますか？」

あくまで自分の主張を押し通そうとする。むろん、こんな道理は通らない。おそらく、一旦は同盟を結べたとしても、最後はそれを切られて滅びるだけ。ならば、今。まだ反抗勢力が活発に動いているこの時に、彼らと連合してロケット団と戦わずにいつ戦うというのか。と、光就も昌明も考えていた。というより、大局観を持つ軍略家なら誰でも、これが当然。他に何の策があるというのか。と、鼻で笑うだろう。

だが、とにかくシオンを戦火から遠ざけたい。と、盲目的に望んでいる麟は、その大局観を失っている。目の前の事にしか頭に無い。だから、こんな愚策を押し通そうとする。

「全然違いますよ。誰がロケット団は貴方を裏切らないと保証してくれるのですか。もちろん、絶対裏切るという保証ありませんが、果たして、連中は自分達に反抗し得る力を持つシオン義勇軍をいつまでも放っておくでしょうか？」

貴方は布団に入った時、その寝室に蚊がいると気づいても、もう寝るからといってそれを放置したまま寝ようとするのですか？それ

と同じですよ」

昌明は静かに、よく澄み渡る声で言った。

「何がそれと同じですよ……ですか！貴方は一見、もっともらしい例を挙げてこちらを煙に巻こうとしているみたいですが、それは全くの見当違いですよ。」

貴方は蚊が話し合いに応じてくれるとも思っているのですか？
彼らは言葉も通じなければ、引き下がってもくれない。だから、こちらも厳しい対応を取らざるをえない。でも、私達とロケット団は違う。話し合いが出来るし、お互い譲歩し合う事も出来ます。そして、そんな友好関係を築いた者同士が争う必要なんてありませんか？
いいえ、ありません！」

だが、麟は一步も引かず、言い返す。とんでもない詭弁だが、昌明の論を完全に否定した。

「（さすが詭策士……詭弁も御手の物って訳ですか。仕方がありません。ここは現実的な問題から攻めましょう……）麟殿、貴方は本気でロケット団と友好的になれると思っっているのですか？」

「ふっ……ええ。本気でそう思っています。私達の力なら、ロケット団の反乱鎮圧のパートナーに十分成り得ます」

麟は誇らしげにそう言った。果たして、その私達というのに、光就達が入っているのかいないのかはまだはつきりとは分からないが（もっとも、光就達がシオン義勇軍に入ることを否定している以上入っていない可能性の方が遥かに高いのだが）、昌明が言いたいのはそういう事ではない。

「違いますよ。私が言っているのは勢力として友好的になれるかではなく、義勇軍に属している者達の全員が全員、ロケット団と友好的になれるのか？ということを知っているのですよ。麟殿」

「なっ……！」

麟の顔色が一瞬、変わった。昌明はそれを見逃さず、ここが勝負どころと、一気にまくし立てる。

「義勇軍の兵の中には、家族をロケット団に殺され、その恨みを晴

らすべく、義勇軍に入っている者も少なくないのではありませんか？また、そうでなくとも、今まで敵と思つて戦つてきた連中がいきなり味方になつても気持ちの切り替えは難しいでしょう」

「うっ……うっうっ……！」

「更に……この戦いも多数の犠牲を出した末の初勝利となりました。その犠牲の上での勝利を棒に振つて、降伏まがいの同盟を結ぶことに、果たして義勇軍の兵達は納得しましょうか？自分達もやればロケット団を倒せる。と、息巻きたした兵達に矛を収めると言つて、彼らは、はいそうですか。と、大人しく武器を下げられるでしょうか？いや、そんな事はしますまい。」

「それどころか、貴女の言うことを聞かずに勝手にロケット団を襲つたりして、折角、話をつけた同盟も破綻になるかもしれないませんか？」

「ぐっ……ぐうううっ！！」

次々に論を重ねて畳み掛ける昌明に対し、唸るのみで何も言えない麟。勝負あり……である。

「玲奈様。これ以上の論戦は無用と存じます。御決断下さい。我々を義勇軍に入れるのか、入れないのか。ふっ……まあ、この様子を見ればどちらが正しい判断かなど、火を見るより明らかですがな」
光就はうやうやしく、玲奈にそう言った。

「そ、そうね！光就、貴方達は今日から我々、シオン義勇軍の一員よ！ふっふっふっ、この偉大なる東条院玲奈の下僕となれて光栄でしょう？光就」

玲奈は無理に尊大な風を装つて、光就の自尊心を煽ろうとした。

「はっ……身に余る光栄と存じます。この浅井光就、玲奈様の期待に応えるべく、兵馬の労も惜しまぬ所存！」

だが、光就は膝を屈し、完全に忠誠を誓ってしまった。

玲奈が言つていた、自分より格下の存在であると思ひ込んでる人に、頭を下げてまで臣下にしてくれと乞う事なんて到底出来ない。という光就に対する評価は間違つていた事になる。

「っ…………！」

麟は唇を噛み締めた。ロケット団に超危険人物とマークされているような連中を義勇軍に入れてしまつては、自分の描いた協調路線はもはや、絵に描いた餅……完全に死んだ。

（また、戦わなければならぬ……また、誰かが死ななければならぬ……イヤ……そんなのイヤだ……！浅井光就……貴様の所為だ……！何が正義だ！何が仁義だ！そんなよく分からず、見えないものでありながら、守らなければならぬと思いつまさせるものを巧みに利用して……結局、貴方は戦いたただけ……！父親を取り戻し、ロケット団を滅ぼせれば、その後ろにどれだけの死骸が転がることも、そんなことは瑣末……！才と運が無かつただけだ。と、死に行つた者を鼻で笑つのみ……！……許さない……！そのような傲慢……悪逆……不遜は……この寺沢麟が許さない！！）

怒りに振るえ、凄まじい眼光で光就を睨みつける麟を、無言で見つめる昌明。彼は何を考えているのか、その表情からは何も読み取れないが、ただ一つ。感じる事の出来るものがあつた。それは……不安。ただ、それは行く先々で人に怨まれ続ける主君に対しての不安なのか、これからの自分達の先行きの見えない未来に対しての不安なのかは読み取れない。だが、昌明ほどの天才でさえ、未来というものを知ることが出来ない……分かることはそれだけであつた。

つつがなく義勇軍に入ることができ、光就と昌明の足取りは軽かつた……わけではない。

「殿、お伝えしたき事が……」

「……申せ」

昌明は何か言いにくい事を言おうとした。それを察知し、光就も余計な事を言わない。

「……殿、決してこの町で気を抜かないで下さい。あの娘は殿の事を、今回の一件で完全に憎みました。しかも、彼女は本来は比較的大人しい人物だそうで……。そんな人ほど、怒らせては恐いもの。そして、案の定見せた、あの凄まじい負の気迫……。もしかしたら、殿の命を狙うやもしれません。どうかくれぐれも……。くれぐれもお気をつけ下さい」

昌明は懸命に光就にそう伝えた。すると、光就はふっ、と笑いながら、

「当たり前だ。この地は始まりに過ぎない。奴らは我々が英雄として飛翔する為の踏み台に過ぎない。踏み台如きが今まさに飛び立たとする大鵬を討たんとするなど許されん事だ。

それに、私とてあの鼻持ちならぬ凡愚なにわか軍略家の小娘を、許されるなら、今この場で捻り潰したいところだ！だが、まだ我慢だ。どうせ、私と奴はいずれ対立する。その時に遠慮無く、斬り捨てさせてもらう」

と、普段冷静な彼の口から飛び出したとは思えぬ、とんでもないセリフを吐いた。

「……殿、貴方がそこまで人を嫌うとは……」

「ふっ、昌明。私に幻滅したか？残念ながら、私も一応、人間だ。嫌いなものくらいある」

光就は笑いながら言っていたが、目は決して笑っておらず、その声にも、怨嗟の念が込められていた。

「良いか、昌明。私が嫌いなものは三つ。一つ、才も無いくせにやたらと周りに威張り散らす者。二つ、努力もせずに利益だけを追求する者」

「……………」

昌明は黙って光就の話聞いていた。……否、何も言えなかつたのだ。会談中、光就が見せたあの怒り。その凄まじさが今、自分だけに注がれている。もちろん、自分に怒っているわけではない事は明らかなのだが、まるで自分が責められているように錯覚してし

まう。

「そして、三つ……これが私が最も嫌うもの」

光就が指を三本立てる。昌明は固唾を飲んで何を言い出すのかわ見守った。

「それは……私の期待をことごとく裏切る者……あの小娘の事だ！」
「……！ということは、殿は寺沢麟に何か期待していたと……？」

昌明はそう言った。当然、そういうことになる。

「そうだ……！私は奴こそが、私が居なくなった後にシオンを守ってくれる英傑だと信じていた。だが、それは私のとんだ思い違いだった。奴は守ってくれるどころか、この地を滅ぼす害虫だ……！」

光就は体を怒りで震わしながら言った。

「私は昔からのシオン防衛戦の話聞き、愕然としたが、今回の事で確信した。奴は兵法の基本も分かっていない。だから軍略もお粗末なのだ。そして、お粗末な軍略だから、いつも後手に回る。奴が慎重だと言われるのは後手に回っている事を、無理矢理良心的に解釈したからだ。奴は慎重なのではない。ただ戦略眼が鈍いだけ。それ以上でも以下でもない！」

なのに、頭は無駄に良いから適当な計略でその場その場をやり過ぎす才能だけはある。だが、それでは根本的な解決にはならない。しかし、その表面だけを見た者がそれを褒めたたえ、奴をますます付け上がらせる。最低だ。奴はそんな軍略家だ。いや、軍略家と呼ぶのも虫酸が走る！」

光就はここまで言うのと、不意にため息をついた。

「はあ……やれやれ、ようやく気が楽になった。私も意外と短気な人間よな」

光就はそう言った。そこに、さっきまで発せられていた怒気は無かった。

「殿……」

「昌明、すまなかった。驚かせてしまって……私もどうかしておる。慣れぬ事をするからこうなるのだ」

「殿、心中お察し致します。私もそうそう気安く人の臣下になどなりたくない質ですから、殿のお気持ちにはよく分かります」

昌明は茜色の空を見つめながら、言った。

「ふっ、よく分かる……か。そうだ。この浅井光就、人に迎合する為に生まれ来たのではない。ただ我が野望、我が信念の為に生きてきたのだ。その節を折ってまで人の下につきたいとは思わん。」

だが、それによつて発生する莫大な利益を捨てるくらいならば、私はいくらでも頭を下げてやるし、服従もしてやろう。己が自尊心を満たす為に己が身を滅ぼすような事ができる程、私は愚かではない」

光就はそう語った。

「殿……我々が目指すところとは何でしょうか。ここではないのであれば、一体……」

昌明は光就に尋ねた。もともと、彼はその答えを九分九厘知つているのだが、あえて、光就自身に語らせる。出過ぎた事をするのは不信を買うからだ。

「白刃隊……タمامシに勢力を構えている最大の反ロケット団勢力……ここが我々の目指す所だ」

「そこに入る事が、我々の目的ですか？」

「違う。そんな小さな目的ではない」

昌明の言葉を即座に否定する光就。そして、静かに、だが、決して周りに憚らない声で、

「白刃隊に入り、その後、奴らの権威を篡奪し、我らの軍事基盤とするのだ」

と、恐ろしい計画を語った。しかし、昌明は、

(やはり……)

と、心の底で思った。

「な、なんと……なんとという遠大な計！この昌明、感服いたしましたぞ！」

だが、昌明は決してそのようなそぶりを見せず、光就の計画に手

放しで褒めたたえた。

(でも、さすがは殿です。やはり、これくらいは言ってくれなければ、殿らしくありません。そして、そんな無鉄砲な殿だからこそ、私も知謀の振るい甲斐があるというものです)

昌明はそう思った。不利を覆すのが謀士の努めであれば、これほど自分を働かせてくれる者は光就以外には誰も居ないだろう。昌明は改めて光就という自分にとっての最高の主に出会えた事を感謝するのであった。

第三十八話に続く

千歳「……………」

千歳「……………」

千歳「……………」

千歳「……………」

千歳「……………」

千歳「……………」

千歳「……………」

千歳「……………」

千歳「……………ずつと画面を見続けるの疲れた……………」

千歳「今日……………千歳一人だけ……………話すこと無い……………暇」

千歳「……………ここから千歳の自演……………」

千歳「カレーっておいしいよね〜」

千歳「ちとせんはどんなカレーが好きなの？」

千歳「とにかく辛い。悶えるくらい辛くなきゃカレーじゃない！」

千歳「へ、へえ〜、そうなんだ」

千歳「そうそう。ねえ、今度千歳も一緒にどう？」

千歳「え、ええ遠慮しとくよ……………」

千歳「え〜！つままないの〜」

千歳「……………自演って虚しい……………」

千歳「……………」

千歳「……………」

千歳「……………」

千歳「……………ゴロン」

千歳「……………！ゴロン」

千歳「（楽しい……………！）ゴロンゴロン」

千歳「ゴロンゴロンゴロン」

メル「何やってるんですか、千歳」

千歳「あ、メル……話し掛けしないで……今新記録に挑戦中……止まらないで何回転ゴロゴロ出来るか……」

メル「駄目ですよ千歳。新調の服が汚れちゃうじゃないですか。ほら立って。私が払ってあげます」

千歳「うー……」

メル「全く、強くなっても変な一人遊びをする癖は治ってないみたいですね」

千歳「何もやる事が無いから……」

メル「やる事が無いなんてことはありません！やる事が無いなら修業をなさればいいじゃないですか！」

千歳「修業……じゃあメルで修業する……」

メル「な、何をする気ですか……？痛いのは嫌ですよ」

千歳「……ゴロゴロゴロゴロ」

メル「ゴロゴロの修業をしろと誰が言いましたか！ああ、そうか！あなたは寝てないんですね！だから、こんな事をする！ってか、もういい加減私の周りをゴロゴロするのやめて下さい！しかし、まるつきりずれないとはある意味すごい技術ですよ！でも、無意味ですよ……」

千歳「メルもやってみれば……？意外と楽しい……」

メル「そ、そうなんですか？し、仕方ありませんね！一回くらいなら……ゴロゴロ……！ゴロゴロ……！」

千歳「楽しい……？」

メル「た、楽しくなんか……ゴロゴロ……！楽しいです……」

千歳「そう……」

千歳「さて、今回は……遂に、シオン防衛戦決着……そして、千歳は高みを目指し……ある人に挑戦する」

千歳「次話投稿は二月二十六日……期待しないで待って……」

メル「ゴロゴロ……！」

千歳「まだやってる……千歳は飽きたからやめる……さようなら……」

メル「じゃあね〜って、放置しないでよ！自分で振ったネタくらい、オチを付けたらどうですか！」

千歳「オチは投げ捨てる物……」

第三十八話：千歳、光就に挑むの事（新チート対旧チートの激戦）（前書き）

やあ、アセロラ蕎麦だじえ！

前回のあらすじ

光就と昌明は玲奈と麟に論戦を挑み、勝利し、無事にシオン義勇軍の仲間入りを果たすことが出来た。

しかし、麟の考えている事は光就達とは到底、相容れぬもので、彼らが義勇軍に入った事で、彼女の策は完全に死んでしまった。

麟は悔しがり、そして、要らぬ戦いを招く光就を憎みだしてしまった。

昌明は暗雲が立ち込み始めた、この戦いの行方に、ただただ不安を抱くしかなかった。

その後、自分達の陣に帰ろうとした昌明は光就の麟に対する落胆と憤激の念を、そして、光就の遠大な計画と野望を知るのであった。

第三十八話：千歳、光就に挑むの事（新チート対旧チートの激戦）

結果として、今回の戦いはロケット団の完全なる敗北によってその幕を下ろした。

その敗北により、ロケット団は兵糧攻めという、最も安全な選択肢を潰されたばかりか、有能な将が負傷し、兵も失った。

更には、彼らが思い描いた最悪のシナリオである、反乱軍と浅井光就及びその配下の合流が成ってしまった。むろん、玲奈が果たして光就を受け入れるのかというのはまだ分からない事だが、光就と玲奈の複雑な事情を知らないロケット団から見ると、この二勢力の協調はもはや確定的で、今、彼らは、もともと攻めあぐねていたシオンがいよいよ、難攻不落の要塞に見えてしまった。

と、なると。ロケット団は本当にシオンを攻撃し続けるべきなのか、それとも、この戦線を放棄するべきなのか、という議論が上下問わず交わされるようになる。

「これ以上被害を増やすわけにはいかん！三十六計逃げるに如かずだ！」

「何を言う！我々は一つの戦いに負けたただけだ！兵力もまだ、我が軍の方が圧倒的。勝機は十分過ぎるほどある！」

「兵がいくら居たって、攻める方法が無いではないか！陸路を進めば水鉄砲の連射、海路を進めば水雷と駆逐船の餌食、空路を進めばその全員が迎撃隊の捕虜になるわ！」

「黙れ！一つの道に兵を集中させれば、突破出来る！今までは兵を分散させていたから、各個撃破されていたのだ。連中に、一万の部隊を壊滅させる力など無い！」

「そりゃあ、この前までの反乱軍ならそうかもしれませんが、今の反乱軍には浅井光就が居ますからねえ。そう簡単に物量作戦が成功するとは思えませんね」

「おのれ……！何なのださっきから、光就光就と！あの小僧が何だ

と言つのだ！我々にたつた二回、しかも偶然、勝利したようなものではないか！なのに、何故貴様らはとりつかれた様に光就如きを恐れるのだ！それこそ、奴の思う壺ではないか！」

「光就を甘く見てはならない。確かに、彼の勝利自体は偶然の一致なのかもしれない。だが、彼にはこう……何と言つのだらうか、運命を引き寄せるとも言うような、強い力を感じる。あれは到底、我々のものさしで測れるような人物ではない」

「何だそれは？憶測だけで物事を申すな！」

「憶測だけでもものをおっしゃっているのは貴方の方ではないのですか？」

「何だと！？」

ついに、会議は馬嘖雜言が飛び交つてしまった。

「……………」

バレルは腕を組みながら静かに聞いていたが、この状況に埒を開けるべく、

「静まれい！喧嘩なら外でやれ！」

机を叩き、皆を黙らせた。

「ふむ……確かに、もう我々には攻め手が無い。そう、今の我々は穂の折れた槍に同じ。ただの棒でしかない」

バレルはそう言った。まさしく、その通りである。さつき出ていた一点突破作戦も、実は意味が無い。何故なら、そもそもシオンに至る陸路の入口が一つなのだから、常に一点集中状態なのである。なのに、突破出来ないのだから、兵をそれ以上集中しても無駄である。

「だが……負けたままでは帰れん。せめて、一人でも多く敵を討つてから敗走しようぞ！俺に考えがある。協力してくれ」

「ハッ！」

バレルは撤退を決意した。しかし、その前に、義勇軍に手傷を負わせなければならなかった。それは義勇軍の追撃を恐れたからであると同時に、やはり、組織の一員であるが故の面子である。

「……来ました！敵の水軍が総攻撃を仕掛けてきました！」
麟は見張り台から声を張り上げて言った。

「やっぱり、敵も相当慌てているようね。フッフ……瀬奈、倒してきてくれないかしら？」

玲奈は棧橋に立って、敵の様子を見ていた。そして、薄ら笑いを浮かべながら、瀬奈に攻撃を命じた。

「誰が貴様の命令など……！」

「瀬奈殿、私情を挟まれることのないようにと、殿に何度も言われていたはずでは……？」

玲奈に反発する瀬奈と、それを諫める昌明。

「ちっ……そんな事……重々承知しております！」

瀬奈は舌打ちをし、仕方なく海に飛び込んだ。

「フッ……さあ、他の者達も瀬奈に続きなさい。船の底を狙うのよ！」

「ははっ！」

玲奈の号令のもと、他の水萌えもん達も続々と飛び込む。

（私の鬱積されし怒り……せめて、ここで晴らさせてもらうっ！りゅうのいかり！）

瀬奈は凄まじい速さで敵の船底にたどり着くと、りゅうのいかりを放った。敵船は転覆し、沈没した。

（なんとこの強さ……我々も続くぞ！）

瀬奈の武勇が他の義勇軍の兵達を勇気付けた。

「ふふふ、まんまと誘い込まれましたね。さあ、矢を射かけよ！」
そして、一方の戦線では、メルが敵の主力である大型船を多数の小型船で包囲し、無力化していた。

「まずい！助けなければ！」

の火計と、瀬奈達の活躍により、海面に浮かぶ残骸と化していた。

「ふん……全ては彼の思った通りって訳ですか……つまりませんね」
メルはそう言うと、引き揚げの号令を出した。どうせ、もう片付いているだろう。と、彼女は思った。

（この音……どうやら始まったようだな）

一方、ここはシオンの西門前。今、ちょうど南の海で戦闘が始まった所である。

（私は考えた。奴らはもう、逃げるであろう。と。しかし、私はこ
うも考えた。逃げるにしても、最後に勝ってから逃げようとするだ
ろう。と）

光就は脇の草むらに隠れながら、そう思考していた。

（あの海からの攻撃は陽動だ。ここにいた水萌えもんをあちらにお
びき寄せる為のな。ならば……本命はこっち）

果たせるかな、光就の思惑通りだった。向こうからたくさん軍
靴の音が聞こえる。

（ふん……来るが良い。死地へ……）

敵から見れば、今、ここは誰も居ない状態。門は閉じられている
が、こじ開けられる規模のものだ。

「せーのっ！」

ロケット団の兵達が門をこじ開けたその時、

「ジャン！ジャン！」

銅鑼がけたたましく鳴り響き、それとともに様々な方向から光就
の指揮する兵達がロケット団に激しく襲い掛かった。

「つばめがえし！」

「いやなおと！パワートリックウ！」

「あばれる！てやあああああつー！」

景之、麻衣、渚がそれぞれの得意技で敵を蹴散らしていく。

「景之、もう少し右側を攻めよ、麻衣、もっと強くだ。味方に聞か
れても構わん。どちらにせよあいこだ。渚、突出しすぎだ。少しず

つ後退しろ」

光就は次々と指示を出す。すると、その脇に、ロケット団の兵が剣を振り上げ、襲い掛かった。

「ふん……」

光就が残月の柄に手をかけた瞬間、音も無く、彼は倒れ、血を流し、果てた。光就は居合の使い手でもある。

「敵がなだれ込んでおるな……何をしている！」

光就が兵達を叱咤する。

「そ、それが敵が多過ぎて抑え切れないのであります……」

一人の兵士がそう答えた。

「情けない……ふん、仕方あるまい。この浅井光就が戦いというのを教えてやる。我に続けい！」

光就は残月を引き抜き、敵に向かって勇猛果敢に切り込んだ。

「み、み、光就だ！浅井光就が来たぞーっ！！」

「逃げる！みんな逃げるんだ！」

もはや、光就はロケット団の間では呂布みたいな扱いになっており、出会った瞬間、大抵の人は逃げ出す。だが、

「ふふふ、浅井光就！ここであつたが百年目、貴様の首を取り、幹部に昇進してくれる！」

百人に一人くらいの割合で自分の腕前に自信を持つ者が挑んでくることがある。

「ほう……その勇気だけは買ってやろう。だが……」

光就は一瞬でその挑戦者の懐に飛び込み、

「隙が……多すぎる！」

斬り捨てた。

「つまらん……もっと手応えのある奴はおらんのか？」

「ここにいるぞ！」

光就の頭上から突如、バブルこうせんが放たれる。

「サイコカッター！」

だが、残月より放たれた無数の念力の刃がそれを破壊する。

「久方振り……でもないな、ライアス。瀬奈と戦って怪我をしたのではなかったのか？」

光就は突然襲ってきた者の正体をライアスと見抜き、言った。

「ハハハハッ、敵の心配より、自分の心配をなされよ！こころのめ！」

それに対し、ライアスは答えず、光就到に狙いを定める。ばくれつパンチを繰り出す気だ。

「行きますぞ……ばくれつパンチ！！」

ライアスの渾身の拳が光就到に襲い掛かった……が、

「ふん、その程度……か」

光就到は難無くそれを受け止めた。

「な、なんですと……！拙者の全力の拳が……」

「ふつ、今、私は少々機嫌が悪くてな。普段なら空気を読んで喰らってやった所だが……残念だったな、瀬奈には通用しても、私には通用せんよ。……さあ、もういいだろう？死に失せる！」

光就到はライアスを蹴り飛ばし、逆袈裟に斬った。

そして、辺りを見渡す。敵は一カ所に押し込まれていた。

「もう、この辺で良からう。総員退け！次の一撃で敵を悉く粉砕する！」

光就到は左手にサイコネシスを溜めた。既に二回溜めてある。

「ふん、わざわざ死に来てくれて感謝する。安心せよ、貴様らの骸は我ら義勇軍が責任を持って、萌えもんタワーに埋葬してやる。

だから、大人しく消えるが良い。ギガサイコネシス！」

巨大な念力波の光線が、一カ所に追い込まれていたロケット団を全て飲み込み、吹き飛ばした。

「ただし……骸が残っていたらの話だな」

まさに外道である。

「ふん、これでここも片付いた……さつさと退くぞ。門は固く閉じておけ、コロッター一匹入れるでないぞ！」

光就到は撤退命令を出し、シオンの町、義勇軍本陣に向かった。そ

ここでは、ちょうどメルと敵船団全滅の報に歓喜していた最中であつたが、この大勝の報告はそれに拍車をかけたのだつた。

「全ては貴方の計算の内……ですか？」

「さて、どうかな？」

「そうですね……まあ、答えてくれるなんて思つてませんけどね」
光就とメルはそんな戦勝ムードの中、また、腹の探り合いをして
いた。

「まあ、今回は貴方の言い分に一理ありましたね。ですから、私も大して反論もしなかつた。ですが、今度からは一筋縄ではいきませんよ。このメルラン・ブレンフォード。大切な友人を……貴方の無謀の道連れにはさせません」

「ふっ……お主がいくら抗おうとも、運命を変える事はまかりならぬ。千歳も渚も麻衣も景之も、私の配下達も、そして、私もお主も、皆戦いに身を置き、そして、死ぬべき時と場所で死ぬ。その宿命を誰が変えられようか、誰が抗えようか、誰が……救えるというのだ？」

「抗うは私。変えるのも、救うのも、全て私。自分の上にいる者に流されるのは、マスターでたくさん。運命などという幻想はごみ箱行き。人の一生はそんな言葉で表せるほど軽いものではありません。枝葉のように分かれ、様々に分岐する。貴方の語る運命という幻想は所詮はその末端に過ぎない。人の未来を……可能性を……馬鹿にしてもらつては困りますね」

メルはそう言い残し、去つていった。光就はそれを黙つて見ていた。

「おおおおお！！俺達の勝利だあああああ！！」

「オーホッホッホッホッ、全てはみんなのお陰よ。さあさあ、飲んで、食べて、踊つて！勝利の美酒に酔いしれなさい！」

義勇軍は正々堂々の戦いで初めてロケット団に勝ち、そして、更に兵糧を得た事から、その喜びのあまり宴を開いた。もつとも、義勇軍が得た兵糧というのはロケット団が残っていたものではなく、義勇軍入軍が成立し、これ以上交渉カードとして持つておくのは危険と判断された、昌明が横取りした兵糧である。だが、それを知らない義勇軍は素直にこの勝利を喜んでいた。

そんな中、本来なら宴の中心で持ち上げられるほどの活躍（敵陸兵部隊を全滅させる）をした光就は人気の無い高台に向かっていた。その高台を宴のどんちゃん騒ぎが遠く聞こえるくらいまで歩くと、ある一人の小柄な少女が屹立しているのを見ることが出来た。茶色のショートヘアと、琥珀色こはくの瞳。そして、彼女の小柄な身体では、地面に付いてしまいそうなほど長い、焦げ茶色に裏地が白のマント、前と後ろに白虎の意匠が施された軽装鎧を身につけていたその少女は光就が来た事に気付き、振り返る。あどけなく、一見するとその体格も相まって子供っぽく見られる顔である。更に、その瞳は半分をまぶたに閉ざされており、眠たそうにしているようなほんわかかな印象を与えるが、眼光は鋭く、その眼光のみが、彼女が子供ではないという事を悟らせる。

「千歳、こんなところに私を呼び出して、一体何の用だ」

「光就……来てくれて……ありがとう……」

ここはシオンの高台。夏とはいえ、夜の潮風は冷たく、障害物の無いこの場所ではそれが直に向かって来る為、少し肌寒い。

光就は自分達の陣に戻った後、千歳に、高台に来て……。と、書かれた手紙を受け取り、その指示通りにこの地にやって来たのだ。

「千歳、ここでは我々の声や音が聞こえてしまうかもしれん。もう少し、奥へ行つてはどうか」

「そう……」

千歳は相変わらず、眠たそうな半目をしながら、光就の提案に一言だけ答えると、奥へ進んでいった。提案を受け入れたようだ。

「分かっているんだ……千歳がなんで光就をここに呼んだのか……」

「ふっ……予想はついているが、お主の口から聞いた方がよさそう
だ」

千歳が足を止める。それに従って光就も足を止める。そして、沈
黙。

固まってしまったかのように動かない二人。しかし、千歳がつい
に、永遠に続くとも思われたこの静寂を破った。

「お願い光就……！千歳と……」

千歳はそう言いながら、光就に向き直り、

「戦つて……！」

双刀を抜き払い、戦闘態勢を取った。

「残念だが、そういつた事ならパスだ。私とて、いつでも元気で戦
えるわけではないし、それにお主と戦う事で、私が利益を得るわけ
でもない。よって、私がお主と戦う理由は無い。ふん、私を誘うな
ら、今度は何かしらの代価を持つてくるが良い」

だが、光就はそれをきっぱりと断り、立ち去ろうとした。

「あるよ……代価」

「何？」

それを引き止めるべく、千歳はそう言った。それに応じ、光就は
足を止める。

「千歳だよ……私自身……」

千歳は自分の体をちょんちょんと指差して言った。

「……残念ながら、私は美空との貞操を破る気は無いのでな。断ら
せてもらおう」

それに、私は胸が大きい方が好きなのだ。と、光就は言いかけた
が、そんな事を口にして、もし、彼女がその事を気にしていたら、
目の敵にされてしまうかもしれんと思ったので、その言葉を直前で
呑んだのだった。

「そういう意味じゃない……もし、光就が千歳に勝てたら……千歳
は光就に絶対不屈の忠誠を誓う……！あくまで秘密裏に……だけど」
だが、千歳にそんな気持ちは毛頭なかったらしい。彼女の言った

千歳が代価というのは、光就との勝負に敗れた場合、自分は光就に忠誠を誓う……つまり、配下になると言ったのだ。

「秘密裏に……とはどういう事だ」

光就は千歳に問った。本心では跳んで喜びたいくらいだろうに、そういつた本心をひた隠しにして何でもない風を装ったり、舞い上がった心中でも細かい所を見逃さない、聞き逃さないのが彼の優れた点の一つだ。

「千歳はマスターの……というか、メルのやり方が気に入らない……。でも、マスターやメルやその仲間達の事は人としては好き……喧嘩別れなんかしたくない……だから……秘密裏に……」

千歳はメルの日和見主義的な考えを嫌っていた。彼女自身、未来は自分で切り開くものだという考えを持っていて、そして、自分には未来を切り開く力があるという自負もある。

そして、以前から快快わっわっとして楽しめぬ千歳をついに、修業の旅に出させたきっかけが、あのメルの嘘。光就達と自分を無理矢理引き裂く為だけについた真っ赤な嘘。これが千歳の小さな怒りに火を付けた。

（メルのお節介焼き……千歳は昔からメルのそういう所が……キライ……）

たとえどんなものであれ、嘘というものを許せず、また、光就を密かに尊敬していた千歳にとって、メルのその過剰とも言えるアンチ光就行動は到底耐え切れるものではなかった。更に、小さい頃からの付き合いである千歳には、メルがそのような薄汚れていくのを見続ける事が、とても辛かったのだろう。

「ふん、それはそっちの都合ではないか。だが、確かにメルなんかは、お主が私の軍団に入るなんて言い出したら、個人同士はおるか、秀明達全員と絶交……なんて事を言いかねないな。仕方あるまい、良いだろう。それに、私としてはむしろ、そっちの方がありがたい。私などはそうでなくとも目の敵にされているというに、そんな状況になったら、不倶戴天ふくたいてんの敵とみなされ、毒を盛られるわ」

光就がそう言うと、

「メルはそんな事しない……！光就……その言葉……撤回して……！」

千歳は無表情でそう言った。その言葉にはわずかに、だが、ハッキリと怒気が入っていた。

「なんだ、お主ら仲が悪かったわけではないのか。……つまらんな」

「そんなことはどうでもいい……！撤回する……？撤回しない……？どっち……！」

千歳は鋭い眼光を光就に向ける。彼女が手に持っている双刀も、その怒りを象徴するように直立していた。

「分かった。お主がメルをどれくらい大事に思っているかを……撤回しよう。くだらない事を言つてすまなかつた」

「分かれば……それでいい……」

千歳はいきり立てた双刀を元に戻す。もつとも、抜いたままなのだが。

「ふむ……まあ、話は分かった。ならば、わざわざ戦う必要も無いのではないか？お主は私への主従の形を持っているではないか。それとも、あれか？自分より強い奴でなければ従えないとかか？」

まあ、そうなると秀明は絶対千歳の主にはなれないな。あれは典型的な人間だからな。私みたいな一応人間ではない。と、光就は思ったが、これを口にしては、また千歳を怒らせるかもしれないので心に留めておくだけにした。

「違う……別に千歳は千歳のマスターに何も求めている……ただ楽しければいいの……千歳が光就と戦いたいのほただ単純に……」

千歳は再び、双刀を構え、戦闘態勢を取った。

「光就が強いから……！千歳はあの時から強くなった……あの時の事を、千歳は遠い昔のように思い出す……そう、千歳はもうあの時のようなただの盾ではない……今の千歳は剣……貴方を切り裂く鋭利なる双刃……！」

「そうか。震えて縮こまっておれば、傷つかずに済んだのになあ！」

「それも覚悟の上……守るだけでは結局何も守れない……傷つく覚悟が無いから……。もちろん、それを知ってなお、守る道に入る人もいる……。それが本当の守護者……。でも、千歳はそれが嫌だった……。千歳の腕が泣いてしまうから……。もつともつと高みを目指したいと泣くから……。だから千歳は剣になった……。いつ果てるとも知れない修羅の道に足を踏み入れた……」

千歳は独り言のように、だが、はっきりと光就にそう語った。

「そこまで考えているか。ふっ、ならば……」

光就はようやく刀の柄に手をかけた。

「この浅井光就。勝負を断る道理無し！」

ここまで言い終わった後、光就は一瞬で千歳の正面に立ち、抜刀しながら斬った。しかし、千歳もわざわざ自分から光就に挑むだけであった。

「むむ……っ！」

双刀で光就の神速の居合を受け止めた。

「ふっ、さすがに騙し討ちは通用せんか」

「光就らしくない……。もつと本気で戦って……。そう、殺すくらいの勢いで……。千歳も……。光就を殺す気で戦う……。！」

千歳の小柄な身体からは想像も出来ないほどの凄まじい斥力がかかり、光就は刀もろとも後ろに弾かれる。

「むっ………!!」

「次は千歳の番……。暗剣・陰翳潜伏剣……。！」
シャドーダイブ

双刀で刺突するように構え、光就に突進してくる。

「ふっ、甘い！」

光就は難無くこれを弾き、千歳を吹き飛ばす。

「これで終わりだ。サイコキネシス……。な、何！」

しかし、吹き飛ばしたと思った千歳の姿はどこにもなかった。

「どこに消えた……。？」

辺りを見回すが、千歳らしき姿を見つけることは出来なかった。

「……。？」

光就は訝しんだ。すると、突然、殺気が舞い降りてきた。

「！ちいつ……！」

光就は首を守る。辛うじて首が飛ぶような事態は防げた。

「騙し討ちの仕返し……これでおあいこ……」

「ふっ、味な真似をしてくれる！」

千歳と光就は睨み合い、互いの様子を伺っている。

「サイコカッター！」

しばらく経った後、光就がサイコカッターを放つ。無数の念力の刃が千歳を襲う。

「こんな程度の弾幕……恐れるに足らず……榊原千歳、参る……！」

だが、千歳はサイコカッターの弾幕を突破した。しかも、そのどの一つにも当たることなく。

「な、何だと！」

「覚悟……！」

千歳の流れるような双刀の斬撃が光就を襲う。それを光就は躲していくが、かなり際どい。いつまでも躲し続ける事は出来そうになかった。

「ちっ……！」

光就はレポートした。だが、千歳は、

「そこ……！」

光就のワープアウト先が分かっているかのように、光就の出現位置に突進した。

「なっ……！」

これには光就も驚かざるを得ない。絶対に安全だと過信していたこの戦法を破られてしまったからだ。

「さようなら……！」

千歳は双刀を振り払った。その凄まじい斬撃に、光就は遠くへ吹き飛ばされる。が、やはり、この程度で終わる彼でもない。すぐに立ち直り、千歳にサイコカッターを放つ。今度のは弾幕ではない、威力集中型の一つのサイコカッターである。

「こんなもの……」

千歳はいとも簡単に躲した。

「……！光就……消えた……？」

だが、その次の瞬間、千歳の視界から光就の姿が消えた。

「上……？」

自分がそうであつたように、光就も分身を使つて相手を翻弄し、本体は上空にいるものだと思つていたが、違つた。

「メガサイコキネシス！」

光就は千歳の後ろにいた。そして、二つ溜めたサイコキネシスを放つ。

「むっ……」

千歳は双刀を合わせ、防御体勢を取り、メガサイコキネシスを受け止めんとした。

「ふっ、千歳よ。わざわざ私の技に飛び込んだ勇氣は認めるが、いくらなんでも無茶だ。これは私の配下の誰もが出来ないのだ。それを……」

「えいつ……！」

だが、千歳はメガサイコキネシスを弾いた。それどころか、
「なら、千歳はとりあえず光就の配下よりは強いという事になる……」

……だけど、これは序の口……千歳の力はこんなものじゃない……！
弾かれたメガサイコキネシスに回り込み、更に弾いて光就の下に跳ね返す。

「なっ……！おのれ！」

光就は左腕に念力を溜め、それで跳ね返されたメガサイコキネシスに向かう。

「サイコドレイン！」

向かつて来るメガサイコキネシスに手をつ突つ込む。すると、光就の左腕はメガサイコキネシスの念力を吸収し、濃い紫色に発光した。念力が三つ溜まった合図である。

「ふっ……千歳、認めてやる。お主には私の配下も、秀明の配下も、

夜は長い。二人の闘争はまだ終わらない。いや、始まってさえいない。二人とも本気を出していないのだから。

第三十九話に続く

第三十八話：千歳、光就に挑むの事（新チート対旧チートの激戦）（後書き）

麻衣「千歳め、ワタシ達に内緒で光就様と熱い熱い触れ合いをするとは……抜け目ないねえ」

瀬奈「そ、そんな、誤解を与える言い方をするな！もっと、他に言い方があるだろう！」

渚「こんな程度で顔を赤くしてる瀬奈様かわいい！瀬奈様ペロペロ！」

瀬奈「や、やめんかああああ！！」

麻衣「おお、激しい愛情表現だあ！……にしても、千歳ってあんなに強かったっけ？光就とどっこいどっこいになるような力を持つてるなんて……そんな風には見えなかつたけどなあ。それとも、どこか特別な場所……精神と時の部屋みたいな、現実の時間よりも早く時が流れる場所で修業したとか？……なわけないか。まっ、とりあえずは面白そうだし、どっちもがんばれ」

瀬奈「あの千歳という者、主とほぼ互角の力とは……興味深い。いずれ、胸を借りてもらいたいものだ」

渚「瀬奈様！私の胸ならいつでもお貸ししますよ！揉むなり摘むなり御自由に！」

瀬奈「はあ……もうツッコミ疲れた……」

麻衣「仲の良い二人だなあ！ワタシもこんな感じの相方欲しいなあ！なんて、ちよっと二人の関係をうらやましげに見つめるこの片倉麻衣が次回予告しちゃうぜ」

麻衣「次回は当然、光就様と千歳のバトルうらやまかたつてない、激しい戦いが予想されるよあ」

瀬奈「次話投稿は三月十二日だ。期待しないで待っていてくれ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0202h/>

萌えもんファンタジー

2011年2月26日03時11分発行